公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（43）

東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT間）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

荒園遺跡2

（第2・3地点）

（曽於郡大崎町）

2022年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（43）

荒園遺跡2

二〇二二年三月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

鹿児島県

荒園遺跡遠景

縄文時代早期出土土器

序　　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT間）の建設に伴って，平成23年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが確認調査を実施，平成25・26年度及び30年度にかけて公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施し，平成28･30年度及び令和元･2・3年度に整理作業と報告書作成を行った曽於郡大崎町持留に所在する荒園遺跡第2・3地点の発掘調査の記録です。

なかでも，縄文時代早期の多量に出土した苦浜式土器や安山岩の剥片を中心とした素材剥片の集積遺構は，当時の人々の生活を解明する手掛かりとなるものと期待されています。

本報告書が県民の皆様や研究者をはじめとした多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財保護の一助となれば幸いです。

最後になりますが，発掘調査から報告書刊行まで御協力をいただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，地元の教育委員会等の関係機関並びに発掘調査や報告書刊行において御指導をいただきました方々に対しまして厚くお礼申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 セ ン タ ー
センター長　　中村　和美

報 告 書 抄 録

ふりがな	あらぞのいせき2
書名	荒園遺跡2（第2・3地点）
副書名	東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第43集
編著者名	宮田靖弘・宮﨑大和・鶴田静彦・堂込秀人・木場浅葱
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号　TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576
発行年月	西暦2022年3月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
荒園遺跡（あらぞのいせき）	鹿児島県（かごしまけん） 曽於郡（そおぐん） 大崎町（おおさきちょう） 仮宿（かりじゅく）	46468	468-95	31° 26′ 37″	130° 59′ 27″	確認調査 2011.7.01～2011.09.28 本調査 ①2013.6.03～2014.01.30 ②2014.5.12～2015.01.28 ③2018.5.07～2018.08.31	①8,955 ②12,580 ③3,785	東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）建設に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒園遺跡（あらぞのいせき）	散布地	旧石器時代	ブロック　2か所	細石刃・細石刃核	
		縄文時代早期	集石遺構　37基 磨石集積遺構　3基 素材剥片集積遺構　2基 土器集中か所　1か所 土坑　1基 ブロック　3か所	前平式土器・石坂式土器・下剥峯式土器・桑ノ丸式土器・押型文土器・手向山式土器・平栫式土器・塞ノ神式土器・苦浜式土器・轟A式土器・耳栓・石鏃・石匙・磨石・敲石・石核・フレーク・チップ	
		縄文時代前～晩期	なし	轟B式土器・入佐式土器・石鏃・石斧・礫器・磨石	
		弥生時代	竪穴建物跡　5軒 土坑　1基	山ノ口式土器・磨製石鏃・砥石	
		古墳時代	竪穴建物跡　4軒	古式土師器・砥石・軽石製品	
		古代以前	堀跡　1条	なし	
		中近世	掘立柱建物跡　3棟 溝状遺構　6条 土坑　18基	土師器・東播系須恵器・陶器・青磁・華南三彩	

遺跡の概要

本遺跡は旧石器時代から中近世までの複合遺跡で，各時代の貴重な遺構や遺物が確認され，当時の生業を考える上で貴重な資料となる。

特に，縄文時代早期では，調理施設と考えられる40基（内3基は報告済み）の集石遺構や食材加工のための石匙や狩猟具の石鏃が多数見つかった。土器では塞ノ神式土器と苦浜式土器の出土が多く，バリエーションも豊かである。また，弥生時代では，竪穴建物跡が5軒発見され，中期後半の山ノ口式土器の出土が多い。古墳時代では，外来土器を模倣したと考えられる甕形土器などが出土した。さらに，古代以前では，紫コラ（開聞岳起源：AD.874年）が堆積した片薬研堀が検出した。古代以前の片薬研堀としては県内で類例がなく，重要な発見となった。

遺跡位置図（1:50,000）

例　　言

1　本書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）建設に伴う荒園遺跡の第２・３地点の発掘調査報告書である。

2　荒園遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町仮宿に所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下，「埋文調査センター」という。）へ調査委託し，埋文調査センターが実施した。

4　発掘調査は，平成 25・26 年度及び平成 30 年度に埋文調査センターが実施した。

5　整理・報告書作成は，平成 28・30 年度及び令和元・２・３年度に埋文調査センターが実施した。

6　掲載遺物番号は通し番号であり，本文・挿図・表及び図版の遺物番号は一致する。

7　掲載遺構番号は遺構の種類ごとに番号を付し，本文・挿図・表及び図版の番号は一致する。

8　遺物注記等で用いた遺跡記号は，「ＡＺ」である。

9　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

10　本書で使用した方位は，全て磁北である。

11　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。また，空中撮影は，有限会社スカイサーベイ九州に委託した。

12　本書に係る遺構図・遺物出土状況及びトレースは鶴田靜彦・堂込秀人・宮田靖弘・宮﨑大和・木場浅葱が整理作業員の協力を得て作成した。

13　本書に係る出土遺物の実測・トレースは，鶴田靜彦・堂込秀人・宮田靖弘・宮﨑大和・木場浅葱が整理作業員の協力を得て行った。また，遺物実測の一部を株式会社島田組，（有）ジパング・サーベイ，九州文化財研究所に委託し，鶴田・堂込・宮田・宮﨑・木場が監修した。

14　出土遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，「県立埋文センター」という。）写場にて，埋文調査センターの福永修一・西園勝彦・宮﨑大和が行った。

15　自然科学分析は，放射性炭素年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

16　本書の編集は鶴田・堂込・宮田・宮﨑・木場が担当し，執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章　　宮田
第Ⅱ章　　堂込・宮田・木場
第Ⅲ章　　宮田・木場
第Ⅳ章
　第１節　鶴田・堂込
　第２節　鶴田・堂込・宮田・木場
　第３節　鶴田・堂込
　第４節　宮田・宮﨑
　第５節　宮﨑・宮田
　第６節　宮﨑・宮田
　第７節　宮﨑・宮田
　第８節　宮﨑・宮田
第Ⅴ章
　第１節　宮田
　第２節　パリノ・サーヴェイ株式会社
　第３節　パリノ・サーヴェイ株式会社
　第４節　パリノ・サーヴェイ株式会社
第Ⅵ章
　第１節　堂込・宮田
　第２節　堂込・宮田
　第３節　堂込・宮田
　第４節　宮田・宮﨑
　第５節　宮﨑・宮田
　第６節　宮﨑・宮田
　第７節　宮﨑・宮田

17　本書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は県立埋文センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

凡　　例

1　本報告書掲載の遺構配置図・遺物出土状況図は１グリッド（１マス）が 10 ｍ四方であり，各図に縮尺提示してある。

2　遺構

（1）遺構図の縮尺は，土坑・集石・埋設土器などを１/20 を基本としたが，大型の遺構についてはこの限りではない。

（2）遺構図の断面については，平面図と同縮尺とした。

（3）遺構番号については，各遺構ごとに通し番号とした。

3　石器の石材については，第Ⅲ章第２節にその分類を記した。なお，石材分類及び産地比定は肉眼観察をもとに行った。

4　掲載遺物の縮尺は，土器が１/ ３，石器は石鏃など小型のものを１/ １，石斧など中型のものを１/ ２，礫石器など大型のものを１/ ３，１/ ４を基本としたが，詳細は各図に提示してある。

本文目次

巻頭図版
序文
報告書抄録
荒園遺跡位置図
例言・凡例
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯……1
　第２節　事前調査……2
　　１　分布調査……2
　　２　確認調査……2
　第３節　本調査……2
　　１　調査体制……2
　　２　調査の経過……3
　第４節　整理・報告書作成……4
　　１　整理・報告書作成体制……5
　　２　整理・報告書作成作業の内容……6
　　３　整理・報告書作成作業の経過……6
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……8
　第１節　地理的環境……8
　第２節　歴史的環境……8
　第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡……15
第Ⅲ章　調査の方法と成果……20
　第１節　調査の方法……20
　　１　発掘調査の方法……20
　　２　遺構の認定と検出方法……20
　　３　整理・報告書作成作業の方法及び内容……21
　第２節　出土遺物の分類……21
　第３節　層序……27
第Ⅳ章　発掘調査の成果……37
　第１節　旧石器時代の調査……37
　　１　調査の概要……37
　　２　遺物（石器）……37
　第２節　縄文時代早期の調査……41
　　１　調査の概要……41
　　２　遺構……41
　　３　遺物（土器）……89
　　４　遺物（石器）……172
　第３節　縄文時代前期～晩期の調査……214
　　１　調査の概要……214
　　２　遺物（土器）……214
　　３　遺物（石器）……215
　第４節　弥生時代の調査……217
　　１　調査の概要……217
　　２　遺構……217
　　３　遺物（土器）……229
　　４　遺物（石器）……240
　第５節　古墳時代の調査……242
　　１　調査の概要……242
　　２　遺構……242
　第６節　古代以前の調査……251
　　１　調査の概要……251
　　２　遺構……251
　第７節　中近世の調査……255
　　１　調査の概要……255
　　２　遺構……255
　　３　遺物……267
　第８節　その他……269
　　１　調査の概要……269
　　２　遺構……269
第Ⅴ章　自然科学分析……273
　第１節　自然科学分析の概要……273
　第２節　放射性炭素年代測定（平成30年度）……273
　第３節　放射性炭素年代測定（令和元年度）……275
　第４節　放射性炭素年代測定（令和２年度）……278
第Ⅵ章　総括……283
　第１節　旧石器時代……283
　第２節　縄文時代早期……283
　第３節　縄文時代前期～晩期……288
　第４節　弥生時代……289
　第５節　古墳時代……289
　第６節　古代以前……292
　第７節　中近世……292

写真図版……293

挿図目次

第１図　周辺遺跡位置図……12
第２図　東九州自動車道関連遺跡位置図……19
第３図　縄文早期　土器分類図（１）……22
第４図　縄文早期　土器分類図（２）……23
第５図　縄文早期　土器分類図（３）……24
第６図　縄文早期　土器分類図（４）……25
第７図　年度別調査範囲図及び周辺地形グリッド配置図……28
第８図　土層断面図１……29
第９図　土層断面図２……30
第10図　土層断面図３……31
第11図　土層断面図４……32
第12図　土層断面図５……33
第13図　土層断面図６……34
第14図　土層断面図７……35

第15図　土層断面図８……36
第16図　旧石器時代　出土遺物……38
第17図　旧石器時代　調査範囲……39
第18図　旧石器時代　遺物出土状況図……40
第19図　縄文時代早期　遺構配置図（全体）……42
第20図　縄文時代早期　遺構配置図（１）……43
第21図　縄文時代早期　遺構配置図（２）……44
第22図　縄文時代早期　遺構配置図（３）……45
第23図　集石４号・５号・６号・７号……46
第24図　集石８号……47
第25図　集石９号……48
第26図　集石10号及び出土遺物……49
第27図　集石11号・12号・13号・14号……50
第28図　集石15号及び出土遺物，集石16号……51
第29図　集石17号・18号……52
第30図　集石19号・20号……53
第31図　集石21号・22号・23号……54
第32図　集石24号・25号及び出土遺物……55
第33図　集石26号……56
第34図　集石27号・28号・29号……57
第35図　集石30号・31号・32号　……58
第36図　集石33号及び出土遺物，集石34号・35号……59
第37図　集石36号・37号・38号……60
第38図　集石39号及び出土遺物，集石40号……61
第39図　縄文時代早期　剥片・磨石集積遺構配置図……64
第40図　剥片集積１号　出土状況及び遺物……65
第41図　剥片集積２号　出土状況及び遺物……65
第42図　磨石集積１号　出土状況及び遺物……66
第43図　磨石集積２号　出土状況及び遺物……66
第44図　磨石集積３号　出土状況及び遺物……67
第45図　土坑１号・土器集中か所　遺構配置図……68
第46図　土坑１号及び出土遺物……69
第47図　土器集中か所　出土状況図……70
第48図　土器集中か所　出土遺物（１）……71
第49図　土器集中か所　出土遺物（２）……72
第50図　チップ集中か所……73
第51図　ブロック１　石器……73
第52図　ブロック２　石器……75
第53図　ブロック３　石器……76
第54図　縄文時代早期　土器出土状況図 全体 ……78
第55図　縄文時代早期　土器出土状況図 Ⅰ～Ⅲ類 ……79
第56図　縄文時代早期　土器出土状況図 Ⅳ～Ⅴ類 ……80
第57図　縄文時代早期　土器出土状況図 Ⅵ～Ⅶ類 ……81
第58図　縄文時代早期　土器出土状況図 Ⅷ類 ……82
第59図　縄文時代早期　土器出土状況図 Ⅸ類 ……83
第60図　縄文時代早期　土器出土状況図 Ⅹ類 ……84
第61図　縄文時代早期　土器出土状況図 ⅩorⅪ類 ……85
第62図　縄文時代早期　土器出土状況図 Ⅺ類 ……86
第63図　縄文時代早期　土器出土状況図 Ⅻ類 ……87
第64図　縄文時代早期　土器出土状況図 Ⅻ類・土製品 88
第65図　第Ⅰ類土器（１）……91
第66図　第Ⅰ類土器（２）……92
第67図　第Ⅱ類土器 ……93
第68図　第Ⅲ類土器 ……93
第69図　第Ⅳ・Ⅴ類土器 ……94
第70図　第Ⅵ・Ⅶ類土器 ……95
第71図　第Ⅷ類土器（１） ……96
第72図　第Ⅷ類土器（２） ……97
第73図　第Ⅷ類土器（３） ……98
第74図　第Ⅷ類土器（４） ……99
第75図　第Ⅸ類土器（１） …… 100
第76図　第Ⅸ類土器（２） …… 101
第77図　第Ⅸ類土器（３） …… 102
第78図　第Ⅸ類土器（４） …… 103
第79図　第Ⅸ類土器（５） …… 104
第80図　第Ⅸ類土器（６） …… 105
第81図　第Ⅸ類土器（７） …… 109
第82図　第Ⅸ類土器（８） …… 110
第83図　第Ⅸ類土器（９） …… 111
第84図　第Ⅸ類土器（10） …… 112
第85図　第Ⅸ類土器（11） …… 113
第86図　第Ⅸ類土器（12） …… 114
第87図　第Ⅸ類土器（13） …… 115
第88図　第Ⅸ類土器（14） …… 116
第89図　第Ⅸ類土器（15） …… 117
第90図　第Ⅸ類土器（16） …… 118
第91図　第Ⅹ類土器（１） …… 119
第92図　第Ⅹ類土器（２） …… 120
第93図　第Ⅹ類土器（３） …… 121
第94図　第Ⅹ類土器（４） …… 122
第95図　第Ⅹ類土器（５） …… 123
第96図　第Ⅹ類土器（６） …… 124
第97図　第Ⅹ類土器（７） …… 125
第98図　第Ⅹ類土器（８） …… 126
第99図　第Ⅹ類土器（９） …… 127
第100図　第Ⅹ類土器（10） …… 128
第101図　第Ⅹ類土器（11） …… 129
第102図　第Ⅹ類土器（12） …… 130
第103図　第Ⅹ類土器（13） …… 131
第104図　第Ⅹ類土器（14） …… 132
第105図　第Ⅹ類土器（15） …… 133
第106図　第Ⅹ類土器（16） …… 134
第107図　第Ⅹ類土器（17） …… 135
第108図　第Ⅹ類土器（18） …… 136
第109図　第Ⅹ類土器（19） …… 137
第110図　第Ⅺ類土器（１） …… 141
第111図　第Ⅺ類土器（２） …… 142
第112図　第Ⅺ類土器（３） …… 143
第113図　第Ⅺ類土器（４） …… 144
第114図　第Ⅺ類土器（５） …… 145
第115図　第Ⅺ類土器（６） …… 146
第116図　第Ⅺ類土器（７） …… 147
第117図　第Ⅺ類土器（８） …… 148
第118図　第Ⅺ類土器（９） …… 149

第119図　第Ⅺ類土器（10）　…… 150
第120図　第Ⅺ類土器（11）　…… 151
第121図　第Ⅺ類土器（12）　…… 152
第122図　第Ⅺ類土器（13）　…… 153
第123図　第Ⅺ類土器（14）　…… 154
第124図　第Ⅺ類土器（15）　…… 155
第125図　第Ⅺ類土器（16）　…… 156
第126図　第Ⅺ類土器（17）　…… 157
第127図　第Ⅺ類土器（18）　…… 158
第128図　第Ⅺ類土器（19）　…… 159
第129図　第Ⅺ類土器（20）　…… 160
第130図　第Ⅻ類土器（１）　…… 161
第131図　第Ⅻ類土器（２）　…… 162
第132図　第ⅩⅢ類土器（１）　…… 163
第133図　第ⅩⅢ類土器（２）　…… 164
第134図　土製品 …… 165
第135図　縄文時代早期　石器出土状況図（１）　‥ 173
第136図　縄文時代早期　石器出土状況図（２）　‥ 174
第137図　縄文時代早期　石器出土状況図（３）　‥ 175
第138図　石鏃Ⅰ類 …… 176
第139図　石鏃Ⅱ類（１）　…… 177
第140図　石鏃Ⅱ類（２）・Ⅲ類（１）　…… 178
第141図　石鏃Ⅲ類（２）・Ⅳ類（１）　…… 179
第142図　石鏃Ⅳ類（２）　…… 180
第143図　石鏃Ⅳ類（３）　…… 181
第144図　石鏃Ⅴ類 …… 182
第145図　石鏃Ⅵ類 …… 183
第146図　石鏃Ⅶ類 …… 184
第147図　大型鏃（１）　…… 185
第148図　大型鏃（２）　…… 186
第149図　石鏃欠損品 …… 187
第150図　石鏃未製品（１）　…… 188
第151図　石鏃未製品（２）　…… 189
第152図　磨製石鏃, 異形石器, 尖頭器 …… 190
第153図　石匙, スクレイパー（１）…… 191
第154図　石匙, スクレイパー（２）…… 192
第155図　石匙, スクレイパー（３）・抉入石器 …… 193
第156図　彫器, 石錐…… 194
第157図　楔形石器 …… 195
第158図　二次加工剥片 …… 196
第159図　使用痕剥片（２）, 石核（１）…… 197
第160図　石核（２）　…… 198
第161図　石核（３）　…… 199
第162図　石核（４）　…… 200
第163図　石斧・礫器（１）　…… 201
第164図　石斧・礫器（２）　…… 202
第165図　磨・敲石（１）　…… 208
第166図　磨・敲石（２）　…… 209
第167図　磨・敲石（３）　…… 210
第168図　磨・敲石（４）　…… 211
第169図　棒状敲石・砥石 …… 212
第170図　石皿 …… 213
第171図　縄文時代前期～晩期　土器 …… 214
第172図　縄文時代前期～晩期　石器（１）　…… 215
第173図　縄文時代前期～晩期　石器（２）　…… 215
第174図　弥生時代　遺構配置図 …… 217
第175図　弥生時代　遺物出土状況図 …… 218
第176図　竪穴建物跡３号･４号　出土状況　…… 219
第177図　竪穴建物跡３号　出土遺物 …… 220
第178図　竪穴建物跡４号　出土遺物（１）　…… 221
第179図　竪穴建物跡４号　出土遺物（２）　…… 222
第180図　竪穴建物跡５号　出土状況 …… 223
第181図　竪穴建物跡５号　出土遺物 …… 224
第182図　竪穴建物跡６号　出土状況 …… 225
第183図　竪穴建物跡６号　堀り方 …… 226
第184図　竪穴建物跡６号　出土遺物（１）　…… 227
第185図　竪穴建物跡６号　出土遺物（２）　…… 228
第186図　竪穴建物跡７号　出土状況 …… 229
第187図　竪穴建物跡７号　堀り方 …… 230
第188図　竪穴建物跡７号　出土遺物（１）　…… 231
第189図　竪穴建物跡７号　出土遺物（２）　…… 232
第190図　竪穴建物跡７号　出土遺物（３）　…… 233
第191図　竪穴建物跡７号　出土遺物（４）　…… 234
第192図　弥生時代　土坑２号 …… 234
第193図　弥生時代　包含層出土土器（１）　…… 235
第194図　弥生時代　包含層出土土器（２）　…… 236
第195図　弥生時代　包含層出土土器（３）　…… 237
第196図　弥生時代　包含層出土土器（４）　…… 238
第197図　弥生時代　包含層出土土器（５）　…… 239
第198図　弥生時代　包含層出土石器（１）　…… 240
第199図　弥生時代　包含層出土石器（２）　…… 241
第200図　古墳時代　遺構配置図 …… 242
第201図　竪穴建物跡８号　出土状況 …… 243
第202図　竪穴建物跡８号　出土遺物（１）　…… 244
第203図　竪穴建物跡８号　出土遺物（２）　…… 245
第204図　竪穴建物跡９号　出土状況 …… 246
第205図　竪穴建物跡９号　出土遺物 …… 247
第206図　竪穴建物跡10号　出土状況 …… 248
第207図　竪穴建物跡10号　出土遺物 …… 249
第208図　竪穴建物跡11号　出土状況及び出土遺物　250
第209図　古代以前　遺構配置図 …… 251
第210図　堀跡１号　平面・断面図及び硬化面 …… 252
第211図　堀跡１号　南壁土層・北壁土層 …… 253
第212図　堀跡１号　ピット平面・断面図 …… 254
第213図　中近世　遺構配置図（１）　…… 256
第214図　中近世　遺構配置図（２）　…… 257
第215図　中近世　土坑（１）　…… 258
第216図　中近世　土坑（２）　…… 259
第217図　中近世　掘立柱建物跡　遺構配置図 …… 260
第218図　掘立柱建物跡１号 …… 260
第219図　掘立柱建物跡２号・３号 …… 261
第220図　中近世　溝状遺構・硬化面
　　遺構配置図（１）　…… 262

第221図　中近世　溝状遺構・硬化面
遺構配置図（２）　…… 263
第222図　中近世　溝状遺構　断面　…… 264
第223図　中近世　硬化面　断面　…… 265
第224図　中近世　円形状硬化面１・２　平面・断面図 266
第225図　中近世　出土遺物　…… 268
第226図　時期不明　土坑配置図　…… 269
第227図　時期不明　土坑21号～23号　…… 269
第228図　暦年較正結果（１）　…… 274
第229図　暦年較正結果（２）　…… 276
第230図　暦年較正結果（３）　…… 280
第231図　測定結果と食材の比較　…… 281
第232図　炭化材（令和元年度）　…… 282
第233図　塞ノ神Ｂｄ式土器から轟Ａ式土器までの
型式変化（１）　…… 286
第234図　塞ノ神Ｂｄ式土器から轟Ａ式土器までの
型式変化（２）　…… 287
第235図　古墳時代竪穴建物跡と古代以前堀跡
遺構配置図　…… 290
第236図　古墳時代竪穴建物跡内　出土遺物図　…… 291

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表……13
第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡……15
第３表　縄文時代早期石器石材分類表……26
第４表　Ⅵ層出土石器組成表……26
第５表　Ⅶ層出土石器組成表……26
第６表　荒園遺跡第２・３地点基本土層……27
第７表　旧石器時代石器観察表……40
第８表　集石観察表……63
第９表　チップ集中か所石材一覧……76
第10表　縄文時代早期遺構内出土土器観察表……77
第11表　縄文時代早期遺構内出土石器観察表……77
第12表　縄文時代早期土器観察表　第Ⅰ～Ⅶ類　…… 166
第13表　縄文時代早期土器観察表　第Ⅷ～Ⅻ類（１）　167
第14表　縄文時代早期土器観察表　第Ⅷ～Ⅻ類（２）　168
第15表　縄文時代早期土器観察表　第Ⅷ～Ⅻ類（３）　169
第16表　縄文時代早期土器観察表　第Ⅷ～Ⅻ類（４）　170
第17表　縄文時代早期土器観察表　第Ⅷ～Ⅻ類（５）　171
第18表　縄文時代早期土製品観察表……　171
第19表　縄文時代早期石器観察表（１）……　203
第20表　縄文時代早期石器観察表（２）……　204
第21表　縄文時代早期石器観察表（３）……　205
第22表　縄文時代早期石器観察表（４）……　206
第23表　縄文時代早期石器観察表（５）……　207
第24表　縄文時代早期磨敲石・石皿等観察表……　212
第25表　縄文時代前期～晩期土器観察表……　216
第26表　縄文時代前期～晩期石器観察表……　216
第27表　弥生時代以降土器観察表（１）……　270
第28表　弥生時代以降土器観察表（２）……　271
第29表　弥生時代土製品観察表……　272
第30表　弥生時代以降石器観察表……　272
第31表　中近世遺物観察表……　272
第32表　試料一覧（１）……　273
第33表　放射性炭素年代測定結果（１）……　273
第34表　試料一覧（２）……　275
第35表　放射性炭素年代測定結果（２）……　275
第36表　安定同位体分析結果（１）……　277
第37表　試料一覧（３）……　278
第38表　放射性炭素年代測定結果（３）……　279
第39表　安定同位体分析結果（２）……　280
第40表　荒園遺跡出土の土器分類と出土点数……　283

図版目次

巻頭カラー１　遺跡遠景
巻頭カラー２　縄文時代早期出土土器
図版１　荒園遺跡第２地点（平成26度）
図版２　荒園遺跡第３地点（平成30度）
図版３　土層断面・発掘風景
図版４　旧石器時代（土層・トレンチ・出土状況）
図版５　集石４号～11号
図版６　集石12号～19号
図版７　集石20号～25号
図版８　集石26号～31号
図版９　集石32号～39号
図版10　磨石集積１号～３号，剥片集積１号・２号，土坑１号
図版11　土坑１号，土器集中か所
図版12　縄文時代早期　遺物出土状況
図版13　竪穴建物跡３号・４号・５号等
図版14　竪穴建物跡６号・７号
図版15　土坑２号，竪穴建物跡８号・９号
図版16　竪穴建物跡10号・11号，堀跡１号
図版17　堀跡１号
図版18　堀跡１号，掘立柱建物跡１号・２号
図版19　掘立柱建物跡１号～３号，溝状遺構１号・２号・４号
図版20　溝状遺構４号・５号
図版21　溝状遺構６号，土坑13号～22号
図版22　第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類土器
図版23　第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類土器
図版24　第Ⅷ類土器
図版25　第Ⅸ類土器（１）
図版26　第Ⅸ類土器（２）
図版27　第Ⅸ類土器（３）
図版28　第Ⅸ類土器（４）
図版29　第Ⅸ類土器（５）
図版30　第Ｘ類土器（１）
図版31　第Ｘ類土器（２）
図版32　第Ｘ類土器（３）
図版33　第Ｘ類土器（４）
図版34　第Ⅺ類土器（１），Ⅻ類土器
図版35　第Ⅺ類土器（２）
図版36　第Ⅺ類土器（３）
図版37　第Ⅺ類土器（４）
図版38　第Ⅺ類土器（５）
図版39　第Ⅺ類土器（６）
図版40　第Ⅺ類土器（７）
図版41　第Ⅻ類土器
図版42　第Ⅰ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅺ・Ⅻ類土器　裏面
図版43　土製品（耳栓）　表・裏面
図版44　土製品（耳栓・円盤状・把手）
図版45　剥片ブロック
図版46　剥片集積・磨石集積
図版47　旧石器・縄文時代早期　石鏃（１）
図版48　縄文時代早期　石鏃（２）
図版49　剥片石器
図版50　石匙
図版51　石核類
図版52　石斧類
図版53　磨敲石・石皿
図版54　縄文時代前期　石器
図版55　竪穴建物跡３号・４号内出土遺物
図版56　竪穴建物跡５号・６号内出土遺物
図版57　竪穴建物跡７号内出土遺物
図版58　弥生時代　包含層出土遺物
図版59　竪穴建物跡８号・９号内出土遺物
図版60　竪穴建物跡10号・11号内出土遺物
中世・近世　出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会（以下,「県教委」という。）は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，志布志ＩＣ～末吉財部ＩＣ区間の事業の実施に先立って,事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下,「文化財課」という。）に照会した。

この照会に伴い文化財課は，平成 11 年１月に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間を，平成 12 年２月には志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50 か所の遺跡（調査対象表面積 854,100 ㎡）が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，文化財課，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下,「県立埋文センター」という。）の４者で協議を重ね対応を検討してきた。その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。

このような社会情勢の変化に伴い，遺跡の綿密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査，試掘調査，確認調査が実施されることとなった。

そこで，県教委は，平成 13 年１月 29 日から２月６日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡，加治木堀遺跡，石縊遺跡，十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに，平成 13 年７月 10 日から７月 26 日に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間の工事計画図をもとに，33 の遺跡について詳細分布調査と，平成 13 年９月 17 日から 10 月 26 日，平成 13 年 12 月３日から 12 月 25 日の２期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて，既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施されることとなり，関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を対象に平成 13 年 10 月１日から平成 14 年３月 22 日にかけて確認調査を実施した。

平成 14 年４月及び平成 15 年 11 月に志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡について再度分布調査を実施した結果，遺跡の調査範囲が 678,700 ㎡となった。

その後，日本道路公団民営化（現在の「西日本高速道路株式会社」）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成 15 年 11 月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年 12 月に大隅ＩＣ（平成 21 年４月 28 日,「曽於弥五郎ＩＣ」へ名称変更）から末吉財部ＩＣ間の発掘調査協定書締結，平成 16 年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施工に伴う確認書が締結された。工事は，日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に委託することとなり，これまでの確認書，協定書はそのまま継続するということになった。ただし，日本道路公団からの委託は，曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

その後，平成 23 年度から試掘・確認調査は文化庁の国庫補助事業を導入し，県内遺跡事前調査事業として県教委が実施することとなった。県内遺跡事前調査事業として，東九州自動車建設に係る確認調査を平成 23 年度は荒園遺跡のほかに２遺跡，平成 24 年度は町田堀遺跡のほかに２遺跡，平成 25 年度は小牧遺跡のほかに２遺跡が確認された。

荒園遺跡については，確認調査で縄文時代，弥生時代，古墳時代の遺物包含層が確認された。平成 24 年度は，南側谷部（工事用道路部分）の 960 ㎡について調査を実施した。調査の結果，古墳時代の竪穴建物跡２軒と縄文時代早期の集石遺構などが発見された。また，鬼界カルデラの爆発に伴うと思われる液状化現象（噴砂）も確認された。

平成 24 年度に国土交通省は，平成 25 年度から東九州自動車道（鹿屋串良ＪＣＴ～志布志ＩＣ間）の建設工事をさらに推進する意向を示し，発掘調査期間の短縮を要請してきた。

このような状況に対応するため，県は関係機関で協議を重ね，発掘調査を円滑かつ効率的に実施できる財団の設置を決定した。これを受けて，平成 25 年４月，公益財団法人鹿児島県文化振興財団に埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）を設置し，国関係の事業に関する業務を県文化振興財団へ委託し，県立埋文センターから業務を引き継ぎ実施することとなった。

平成 25 年度は，遺跡の東側を中心に 8,955 ㎡の調査を実施した。その結果，縄文時代早期の遺物と集石遺構，弥生時代中期の竪穴建物跡などが発見された。

平成 26 年度は，遺跡の西側の台地の上部から縁辺部にかけての 12,580 ㎡の調査を実施した。その結果，縄文時代早期の遺物と集石遺構，弥生時代中期・古墳時代の竪穴建物跡,時期不確定の片薬研堀跡などが発見された。

平成 30 年度は，平成 26 年度の調査範囲の南側で，谷を囲むように伸びた尾根と台地の縁辺部にかけて延べ

3,785 ㎡の調査を実施した。年度当初の調査対象面積は3,900 ㎡であったが，崖際の工事掘削が行われない範囲の取り扱いについての国土交通省との協議の結果，調査対象面積から当該部分を除外し3785 ㎡に変更した。その結果，縄文時代早期の遺物と集石遺構，平成26年度に検出した片薬研堀の延長部分などが発見された。

調査経過は，以下のとおりである。

1　発掘調査
(1) 分布調査：平成13年7月
(2) 確認調査
平成23年7月1日～平成23年9月28日
(3) 本調査
第1回　平成24年5月7日～平成24年9月26日
第2回　平成25年6月3日～平成26年1月30日
第3回　平成26年5月12日～平成27年1月28日
第4回　平成30年5月7日～平成30年8月31日
2　整理・報告書作成作業
(1) 整理作業
第1回　平成28年4月12日～平成29年2月17日
第2回　平成30年9月2日～平成31年2月22日
(2) 整理・報告書作成
平成31年4月12日～令和2年2月25日
令和2年4月14日～令和3年2月22日
令和3年4月13日～令和4年2月22日
なお，各調査の調査体制等詳細については次節以降で報告する。

第2節　事前調査

1　分布調査

荒園遺跡の分布調査は，県教委が日本道路公団（現在の西日本高速道路株式会社）から東九州自動車道志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡について依頼を受け，平成14年4月に実施した。

2　確認調査

荒園遺跡の確認調査は，永吉天神段遺跡と同時に，平成23年7月1日から9月28日まで実施した。遺跡の内容を確認することを目的に，８ｍ×４ｍのトレンチを９か所設定し，Ⅳ層（シラス）上面まで掘り下げを行った。

しかしながら，Ⅲ層（薩摩火山灰）より下位の旧石器時代相当層については，上層の包含層が厚く十分な調査面積を確保することができなかったため，本調査にて範囲を確定させることとなった。

調査体制（確認調査：平成23年度）
事業主体　　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　寺田　仁志
調査企画　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長　田中　明成
〃　次長兼南の縄文調査室長　井ノ上秀文
〃　調査第一課長　堂込　秀人
〃　調査第一課第二調査係長　大久保浩二
調査担当　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　馬籠　亮道

調査の経過（日誌抄より）
平成23年7月
荒園遺跡の調査開始。調査施設設営及び環境整備。トレンチ（以下，Ｔ）を設定・掘削。２Ｔ：弥生時代土器片（山ノ口式）・縄文時代早期土器片（塞ノ神Ｂ式）・熱破砕礫出土。３Ｔ：縄文時代早期土器片（塞ノ神Ｂ式）・熱破砕礫出土。４Ｔ：弥生～古墳時代土器片（山ノ口式・成川式・土師器）・熱破砕礫出土。
平成23年8月
トレンチ調査。遺物取上げ。６Ｔ：縄文時代早期土器片（平栫式・塞ノ神Ａ・Ｂ式）・剥片・熱破砕礫出土。
平成23年9月
トレンチ調査。遺物取上げ。埋め戻し。２Ｔ：石器（磨石）出土。４Ｔ：縄文時代早期土器片（塞ノ神式）・熱破砕礫出土。６Ｔ:縄文時代早期土器片（平栫式･塞ノ神Ａ･Ｂ式）・剥片・熱破砕礫出土。文化庁林文化財調査官来跡（14日）。

第3節　本調査

確認調査の結果を踏まえ，本調査を計４回実施した。平成24年度は県立埋文センターが本調査を実施し，平成25年度からは埋文調査センターが，県から受託して発掘調査を進めることとなった。

第１回は平成24年５月７日～平成24年９月26日，第２回は平成25年６月３日～平成26年１月30日，第３回は平成26年５月12日～平成27年１月28日，第４回は平成30年５月７日～平成30年８月31日である。

なお，調査の都合上，平成24年度の発掘調査区を第１地点，平成25･26年度の発掘調査区を第２地点，平成30年度の発掘調査区を第３地点と呼ぶこととする。調査体制については，以下のとおりである。

1　調査体制

（1）平成24年度（第1地点）

事業主体　　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　寺田　仁志

調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〃　次長兼総務課長　新小田　穣
〃　次長兼南の縄文調査室長　井ノ上秀文
〃　調査第二課長　冨田　逸郎
〃　調査第二課第一係長　八木澤一郎
調査担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〃　文化財主事　中村　耕治
〃　文化財調査員　宮城　幸也
調査指導　鹿児島大学法文学部教授　森脇　広
鹿児島大学埋蔵文化材調査センター准教授
中村　直子

（２）平成 25 年度（第２地点）

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　(公財)鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　冨田　逸郎
調査企画　〃　総務課長　山方　直幸
〃　調査課長　鶴田　靜彦
〃　調査第一係長　八木澤一郎
調査担当　〃　文化財専門員　黒川　忠広
事務担当　〃　主査　岡村　信吾
調査の委託　新和技術コンサルタント株式会社
体制　新和技術コンサルタント株式会社
主任技術者　西迫　良明
主任調査支援員　鎌田　浩平
調査支援員　賦句　博隆
調査支援員　上川路直光

（３）平成 26 年度（第２地点）

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　(公財)鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　堂込　秀人
調査企画　〃　総務課長兼係長　山方　直幸
〃　調査課長　八木澤一郎
〃　調査第一係長　中村　和美
調査担当　〃　統括調査員　井手上誉弘
〃　副統括調査員　中村　耕治
事務担当　〃　主査　岡村　信吾
調査の委託　新和技術コンサルタント株式会社
体制　新和技術コンサルタント株式会社
主任技術者　中村　卓也
主任調査支援員　鎌田　浩平
調査支援員　賦句　博隆
調査支援員　松本　益幸
調査支援員　上川路直光
調査支援員　柳田　泰
調査支援員　新納　弘恵

（４）平成 30 年度（第３地点）

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
センター長　前迫　亮一
調査企画　〃　総務課長兼係長　中村伸一郎
〃　調査課長　中原　一成
調査担当　〃　文化財専門員　吉岡　康弘
〃　文化財専門員　辻　明啓
〃　文化財調査員　木場　浅葱
事務担当　〃　事業推進員　川崎　麻衣

２　調査の経過

第１地点の調査は，平成 24 年度に実施した。また，第２地点の調査は，平成 25，26 年度に実施した。さらに，第３地点の調査は，平成 30 年度に実施した。

（１）平成 24 年度（第１地点）

平成 24 年度の調査範囲は，台地の西側にある谷頭部分にあたり標高 40 ｍである。全調査過程については，『(公財) 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (12) 荒園遺跡１第１地点』に記載してある。

（２）平成 25 年度（第２地点）

平成 25 年度の調査範囲は，県道大崎輝北線に隣接する台地上部から縁辺部にかけてであり，標高は約 48 ｍである。調査は，重機による表土除去を行った後，人力による掘り下げを実施した。出土した遺物はトータルステーションで実測後，取り上げを行い，遺構は検出の都度写真撮影，掘り下げ，実測を行った。生活面の把握及び地形測量は，Ⅱ層の調査ではⅢ層上面で行い，Ⅵ層の調査では，Ⅶ層上面で行った。しかし，調査の過程で，Ⅴ層直下で集石遺構が検出されたため，急遽Ⅵ層上面の地形測量を部分的に追加して実施した。調査を進める中で，遺構・遺物が全体的に希薄であったため，予定調査期間内で行える調査延べ面積を 6,900 ㎡から 8,955 ㎡へと変更を行った。

６月　Ｅ～Ｇ―21 ～ 23 区　表土剥ぎ～Ⅱ層掘り下げ遺構検出・調査，遺物取り上げ。Ⅰ～Ｋ―21 ～ 23 区盛土除去。

７月　Ｅ～Ｇ―21 ～ 23 区　Ⅱ層掘り下げ　遺構検出・

調査，遺物取り上げ　Ⅲ層上面地形図作成。Ⅳ・Ⅴ層機械堀削。Ⅰ～K―21～23区Ⅱ層掘り下げ　遺物取り上げ。J・K―18～20区表土剥ぎ　Ⅱ層掘り下げ。

８月　Ｅ～Ｇ―21～23区　Ⅵ層掘り下げ　Ⅶ～Ⅸ層先行トレンチ調査。Ｈ～Ｋ―21～23区Ⅱ層掘り下げ遺物取り上げ　遺構検出・調査。Ｊ・Ｋ―18～20区Ⅱ層掘り下げ　遺物取り上げ　遺構検出・調査。

９月　Ｅ～Ｈ―21～23区　Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ　Ⅷ層上面コンタ図作成，調査終了。Ⅰ～Ｋ―21～23区Ⅱ層掘り下げ　Ⅲ層上面コンタ図作成　遺物取り上げ　遺構検出・調査。Ⅴ層重機堀削　Ⅵ層掘り下げ。Ｈ～Ｋ―18～20区　表土はぎ　Ⅱ層掘り下げ　遺物取り上げ　遺構検出・調査。

10月　Ⅰ～Ｋ―21～23区　Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ(終了)Ｅ―18～20区　Ⅱ層掘り下げ　遺物取り上げ　遺構検出・調査。Ｈ～Ｋ―18～20区Ⅱ層掘り下げ　遺物取り上げ　遺構検出・調査。Ｈ・Ⅰ―18～20区　Ⅲ層上面地形測量　Ⅴ層機械堀削　Ⅵ層上面地形測量　Ⅵ層掘り下げ。中間検査(16日)

11月　Ｄ―21―22区　Ⅱ～Ⅷ層掘り下げ　遺物取り上げ　遺構検出・調査。Ｄ～Ｇ―17～20区Ⅱ層掘り下げ　遺物取り上げ　遺構検出・調査。Ｈ～Ｋ―18～20区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ　遺物取り上げ　遺構検出・調査。試掘確認調査(文化財課・県埋セ)13日。空撮22日。

12月　Ｄ～Ｇ―17～20区Ⅱ～Ⅵ層掘り下げ　遺物取り上げ遺構検出・調査，地形測量。Ｊ・Ｋ―18区　Ⅱ～Ⅵ層掘り下げ　遺物取り上げ　遺構検出・調査　地形測量。６・７号竪穴建物跡埋土・床面金属探査実施。

１月　Ｄ～Ｇ―17区，Ｄ～Ｌ―18～23区調査終了。Ｄ―17～20区Ⅱ～Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ　遺物取り上げ遺構検出・調査　地形測量　調査終了。６・７号竪穴建物跡埋土フローテーション実施。発掘作業終了(28日)

(３)平成26年度(第２地点)

４月　重機による表土掘削　環境整備　機材搬入。

５月　Ｈ～Ｋ―12～17区　Ⅱ層掘り下げ　土坑４号検出　実測写真撮影　３号竪穴建物跡検出。

６月　Ｈ～Ｋ―12～17区　Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ　４号建物跡検出・掘り下げ 実測　写真撮影　集石８号検出。

７月　Ｈ～Ｋ―12～16　Ⅶ層掘り下げ　Ｈ～Ｋ－12～15区遺物取り上げ　Ｊ・Ｋ―13～15区　Ⅱ層掘り下げ　硬化面１・２検出　ウォーターフローテーションＪ・Ｋ－13区及びＨ～Ｋ―16区　４号竪穴建物跡埋土サンプル　コンタ図作成　Ｈ・Ⅰ―15区　Ⅶ層掘り下げ　溝状遺構１・２号検出　実測　写真撮影。

８月　集石９号実測　Ｅ～Ｇ―13～16区　Ⅵ層掘り下げ　集石10号実測　Ｇ―14～16区　Ⅶ層掘り下げ集石11号　集積１号，　Ｆ―15区　旧石器時代先行トレンチ掘り下げ　武岡台高校　成尾英仁氏来跡。

９月　集石13・14号実測　Ｃ～Ｅ－４～６区　Ⅱ層掘り下げ　Ｃ・Ｄ－７・８区境ベルト東壁写真撮影　８～11号　竪穴建物跡検出，掘り下げ実測

10月　Ｃ～Ｆ－８区　Ⅱ層掘り下げ，遺物取り上げ溝状遺構２号掘り下げ　Ｃ・Ｄ－４～６区，Ｃ～Ｇ－10～13区　Ⅲ層上面地形測量　中間検査　空中写真撮影堀跡１号掘り下げ　竪穴建物跡11号・８号完掘　集石15･16号実測　竪穴建物跡９号内埋土フローテーション。

11月　竪穴建物跡８号･10号･11号　埋土フローテーション　Ｄ・Ｅ―11･12区境　ベルト北壁土層断面実測Ｅ－12区　先行トレンチ掘り下げ　Ｊ・Ｋ－13・14区Ⅵ･Ⅶ層掘り下げ　集石18･19･21～24号実測　Ｅ・Ｆ－６・７区　Ⅷ層上面地形測量

12月　Ｌ－13～16区　Ⅲ層上面地形測量　集石25～27号実測　Ｄ～Ｆ－９～11区　Ⅲ層掘り下げ　Ｄ・Ｅ－９・10区　境ベルト北壁土層断面実測，溝状遺構３号完掘　Ｅ・Ｆ－９～11区　Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ

１月　Ｋ・Ｌ－14区　旧石器時代先行トレンチ掘り下げ　Ｅ・Ｆ－８，　Ｆ－10・11区　遺物取り上げ　Ｄ－12～16区表土掘削　溝状遺構３号完掘　集石28号･29号　土坑23号　Ｃ・Ｄ－10～12区　Ⅲ層上面コンタ図作成　Ｃ･Ｄ－10～16区　Ⅷ層上面コンタ図作成。

(４)平成30年度(第３地点)

５月　事務所設置　機材搬入。重機による表土剥ぎ終了。尾根調査区西側尾根部分トレンチ設置　掘り下げ。

６月　Ⅰ～Ｌ－13～16区道路下掘り下げ開始。Ⅰ～Ｌ－13～16区遺物取り上げ　磨石集積３号検出　Ⅰ～Ｋ－６～８区(尾根部分)Ⅱ層掘り下げ一部開始。

７月　Ⅰ～Ｋ－13～15区　Ⅵ～Ⅶ層掘り下げ。集石36,31号検出。Ⅰ～Ｋ－13～15区　縄文時代早期調査終了。集石２号検出。Ｇ－10区　堀跡１号検出。集石32･33実測　集石34･35検出。

８月　Ⅰ～Ｋ－６～８区　重機による表土剥ぎ　集石34号実測　堀跡１号検出　掘り下げ断面実測　写真撮影　Ⅰ～Ｋ－６～８区　Ⅵ層掘り下げＧ・Ｈ－７・８区Ⅵ層掘り下げ　遺物取り上げ　集石37～46号検出　実測　Ⅰ～Ｋ－６～８区　コンタ図作成。

９月　Ｇ―８区　土器集中実測　周辺環境整備　　弓削監督官，今村係長，前迫センター長，森脇広氏来跡。埋め戻し。

第４節　整理・報告書作成

整理・報告書作成業務は，平成28･30年度及び令和元・２・３年度に実施した。なお平成24年度に実施した内容については，平成28年度

『(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(12)荒園遺跡１第１地点』にて報告。

調査体制の詳細については以下のとおりである。

1　整理・報告書作成体制

（1）平成 28 年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
　センター長　堂込　秀人
調査企画　〃　総務課長兼係長　有村　貢
　〃　調査課長　八木澤一郎
　〃　調査第一係長　中村　和美
調査担当　〃　文化財専門員　井手上誉弘
事務担当　〃　主査　荒瀬　勝己
遺物指導　鹿児島国際大学教授　大西　智和
整理の委託
委託先　国際文化財株式会社
　主任調査支援員　川田　秀治
　調査支援員　武田　芳雅
　調査支援員　四家　礼乃
委託期間　平成28年４月12日～平成29年３月10日
委託内容　報告書作成作業支援業務　１式
　整理作業支援業務　１式
　印刷製本業務　１式
検　査　中間検査　平成28年10月20日
　完成検査　平成29年３月
報告書作成指導委員会
　平成28年11月25日（金）
報告書作成検討委員会
　平成28年11月28日（月）

（2）平成 30 年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
　センター長　前迫　亮一
調査企画　〃　総務課長兼係長　中村伸一郎
　〃　調査課長　中原　一成
調査担当　〃　調査第一係長　今村　敏照
　〃　文化財専門員　吉岡　康弘
　〃　文化財専門員　辻　明啓
　〃　文化財調査員　木場　浅葱
事務担当　〃　事業推進員　川崎　麻衣

（3）令和元年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
　センター長　中原　一成
調査企画　〃　総務課長兼係長　中島　治
　〃　調査課長　寺原　徹
調査担当　〃　調査第一係長　福永　修一
　〃　文化財専門員　鶴田　靜彦
　〃　文化財専門員　宮田　靖弘
　〃　文化財調査員　木場　浅葱
事務担当　〃　事業推進員　塩屋奈緒美

（4）令和２年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
　センター長　中原　一成
調査企画　〃　総務課長兼係長　中島　治
　〃　調査課長　寺原　徹
調査担当　〃　調査第一係長　福永　修一
　〃　文化財専門員　宮田　靖弘
　〃　文化財専門員　堂込　秀人
事務担当　〃　事業推進員　川崎　麻衣

（5）令和３年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
　センター長　中村　和美
調査企画　〃　総務課長兼係長　中島　治
　〃　調査課長　福永　修一
調査担当　〃　調査第一係長　永濵　功治
　〃　文化財専門員　宮田　靖弘
　〃　文化財専門員　宮﨑　大和
事務担当　〃　事業推進員　市成　英加

報告書作成指導委員会
６月２日，８月６日，10 月５日，11 月４日
　調査課長ほか６名
報告書作成検討委員会
６月 10 日，８月 11 日，10 月 13 日，11 月９日
　センター長ほか５名

２　整理・報告書作成作業の内容

（１）整理作業

①　遺構

実測図と図面台帳との照合，遺構別に実測図の仕分け，注記の確認，トレース

②　遺物

ア　台帳・実測図

遺物台帳，遺構実測図の確認

イ　土器

分類，接合，実測土器の選別

ウ　石器

石器と一般礫の仕分け，分類，実測石器の選別

（２）報告書作成作業

①　遺構配置図の作成，レイアウト，原稿執筆

②　土器の分類，実測，拓本，トレース，レイアウト，観察表の作成，遺物分布図の作成，原稿執筆

③　石器の実測及び実測委託，トレース，レイアウト，観察表の作成，遺物分布図の作成，原稿執筆

３　整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

（１）平成 28 年度

５月　遺物接合・注記（古墳時代）。グリッド等のデータ確認・編集。調査区全体図の作成。報告書書式作成。

６月　遺物接合・注記（古墳時代・縄文時代早期）。遺物実測・復元（古墳時代）。調査区全体図の作成。報告書書式作成。

７月　遺物接合・実測（古墳時代・縄文時代早期）。調査区全体図の作成。個別遺構図の編集。遺物デジタルトレース（古墳時代）。遺物拓本（古墳時代･縄文時代早期）。竪穴住居跡埋土フローテーション。原稿執筆。

８月　遺物復元・実測（古墳時代・縄文時代早期）。調査区全体図の作成・編集。遺物デジタルトレース（古墳時代・縄文時代早期）。原稿執筆。レイアウト（画像処理・編集）。平成 25・26 年度調査分遺物注記。

９月　レイアウト（画像処理・編集）。原稿執筆。遺物写真撮影。遺物実測平成 25・26 年度調査分遺物注記・接合。

10 月　レイアウト（画像処理・編集）。原稿執筆。遺物写真撮影。遺物実測平成 25・26 年度調査分遺物注記・接合。

11 月　レイアウト（画像処理･編集）。原稿執筆。校正。遺物実測。平成 25･26 年度調査分遺物接合・復元・実測。

12 月　原稿執筆。校正。原稿入稿。遺物収納。平成 25･26 年度調査分遺物接合・復元・実測。

１月　原稿校正。遺物分類・接合・復元。遺物収納。

２月　遺物分類・接合・復元。報告書の印刷・製本・検本・納品。遺物運搬・収納。

（２）平成 30 年度

９月　遺物整理。

10 月　遺物整理。遺物洗い。土器下ニス塗り。

11 月　遺物整理。土器下ニス塗り。土器注記。遺物台帳確認。

12 月　遺物整理。土器注記。土器上ニス塗り。土器接合。

１月　遺物整理。土器接合。

２月　遺物整理。土器接合。石材分類。

（３）令和元年度

４月　遺物分類・接合・復元・実測・拓本。

５月　遺物分類・注記・接合・復元・実測・拓本。石器実測委託。

６月　遺物分類・接合・復元・実測・拓本。遺構トレース。石器実測委託校正。土器観察表作成。

７月　遺物分類･実測･拓本･トレース。遺構トレース。石器実測委託校正。土器科学分析委託。土器観察表作成。

８月　遺物実測・拓本・トレース。石器実測委託。土器観察表作成。原稿執筆。

９月　遺物実測・拓本・トレース。石器実測委託校正。石器観察表作成。原稿執筆。

10 月　遺物実測･拓本･トレース。石器実測委託校正。石器観察表作成。原稿執筆。

11 月　遺物実測・拓本・トレース。石器観察表作成。遺構レイアウト。原稿執筆。

12 月　遺物実測・拓本・トレース。石器観察表作成。遺構レイアウト。原稿執筆。

１月　遺物実測・トレース・拓本貼り・レイアウト。石器観察表作成。原稿執筆。

２月　遺物実測・拓本・拓本貼り・レイアウト。石器観察表作成。遺物収納。遺物指導。原稿執筆。

（４）令和２年度

４月　石器実測委託。遺物実測・拓本・トレース・拓本貼り。復元。原稿執筆。

５月　遺物実測・拓本・トレース・拓本貼り・レイアウト・復元。土器観察表作成。原稿執筆。

６月　遺物実測・拓本・トレース・拓本貼り・復元。土器観察表作成。原稿執筆。

７月　遺物実測・復元。土器観察表作成。遺物台帳整理。原稿執筆。

８月　遺物実測・拓本・トレース・復元・色塗り。土器観察表作成。遺物台帳整理。原稿執筆。

９月　遺物実測・拓本・復元・色塗り。写真撮影準備。土器観察表作成。遺物台帳整理。原稿執筆。

10 月　色塗り。写真撮影（土器破片）。土器観察表作成。土器トレース。遺物台帳整理。原稿執筆。

11 月　色塗り。土器観察表作成。遺物整理。遺物台帳

整理。観察表整理。石器実測。原稿執筆。

12月　遺物整理。土器観察表整理。石器観察表整理。遺物台帳整理。土器レイアウト。原稿執筆。

１月　遺物整理。土器観察表整理。石器観察表整理。遺物台帳整理。石器レイアウト。土器トレース。拓本。原稿執筆。

２月　遺物整理。土器観察表整理。遺物台帳整理。土器トレース。遺物収納。原稿執筆。

（５）令和３年度

４月　石器実測・トレース。写真撮影準備。復元・色塗り。石器トレース線号統一。遺構配置図作成。

５月　遺物写真撮影準備。復元・色塗り。石器トレース線号統一。遺構配置図作成。

６月　遺物写真撮影準備・撮影。遺物データ整理。遺構レイアウト。遺物レイアウト。

７月　遺物データ整理。遺構レイアウト。遺物レイアウト。遺物観察表作成。遺物出土分布図作成。原稿執筆。

８月　遺構レイアウト。遺物レイアウト。遺構写真レイアウト。遺物観察表作成。遺物出土分布図作成。原稿執筆。

９月　遺構・遺物レイアウト。遺構・遺物写真レイアウト。遺物観察表作成。原稿執筆。

10月　遺物データ整理。遺物観察表修正。遺物出土分布図修正。原稿執筆・編集。

11月　遺物データ整理。原稿執筆・編集。目次の確認。印刷・製本入札。

12月　校正。遺物・図面等の整理。遺物データ整理。

１月　校正。遺物・図面等の整理。遺物データ整理。

２月　校正。収納作業。

３月　納品。収納作業。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

鹿児島県曽於郡大崎町は，鹿児島県の東南部，大隅半島の東部に位置する。東は志布志市，南は肝属郡東串良町，西は鹿屋市，北は曽於市と接し，南東は志布志湾に面している。

大隅半島は，南北方向に走る山地，その間の丘陵，台地及び低地などの低地帯から構成され，地質は大部分がシラス，ボラなどの火山灰土壌となっている。

東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に張出した形で北から南へと延びる鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119 m）である。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈山地へと連なっている。高隈山地は，北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600ｍ級の山々と，南部の大箆柄岳（1,236.8ｍ）を主峰に横岳・御岳など1,000 m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地は，ともに九州山地の延長上にあり，その間は丘陵や台地及び低地帯となっている。これらの山間地を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布する典型的なシラス地形となっている。この火砕流は，鹿児島湾口にある阿多カルデラの火砕流や，湾奥にある姶良カルデラの入戸火砕流で，これらの火砕流をはじめとする火山性噴出物の堆積がベースとなっている。噴出物は，堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開析されるが，丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず，広大な台地となっている。

一方，低地は高隈山地や鰐塚山地などを水源とする大小の河川が走り，志布志湾，鹿児島湾などに注いでいる。これらの河川は，上・中流域で狭い谷底平野を形成し，また，幾段かの河岸段丘も認められる。海岸線には砂丘の形成されるところもあり，特に東側の志布志湾岸では幅広い。

大崎町の地形は，北部に菱田川とその上流にあたる大鳥川，東部を田原川，中央部を持留川が南流し，志布志湾に注いでいる。大崎町の地勢は概ね２つに分けられ，北端部は大鳥川を中心として河川が溶結凝灰岩を切り開き，起伏の激しい渓谷を構成している。中部から南部地帯は北西から東南の海岸線に向かって，緩やかに傾斜している起伏の少ないなだらかな地帯であり，場所によっては志布志湾まで見通せる。

これらの河川によって台地は区切られ，西部から永吉台地，仮宿台地，飯隈（中沖）台地に分けられる。永吉台地の西側を串良川，永吉台地と仮宿台地の間を持留川，飯隈台地の東側を菱田川が流れている。台地の大部分は，約29,000年前の姶良カルデラ起源のシラスの上に形成された「クロボク」と呼ばれる黒色土壌が広がっている。

大崎町には，菱田川河口から南西に弧状を描いて，東串良町に至るまで約７㎞の海岸線があり，志布志市から東串良町まで約16㎞にわたって続く幅１～1.5㎞の砂丘海岸のほぼ中央部にあたる。この砂丘上に立地する弥生時代などの遺跡では，数ｍに及ぶ砂層に覆われていた事例もある。

荒園遺跡は，持留側左岸に隣接する仮宿台地の南側縁辺部標高約50 mに位置し，志布志湾から直線距離で約６㎞ある。調査前は宅地あるいは畑地であった。持留側の流域沿いには，下堀遺跡や永吉天神段遺跡・麦田下遺跡・高久田Ａ遺跡などがある。

第２節　歴史的環境

大崎町では，主に田原川，持留川，菱田川，大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布がみられる。本遺跡の周辺は，これまで本格的な発掘調査がなされていなかったため詳細は不明であったが，近年大隅中央広域農道や東九州自動車道建設などに伴う発掘調査によって，次第にその歴史的様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

大崎町野方の永吉天神段遺跡でナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器製作跡及び石器類が，二子塚Ａ遺跡で剥片が発見されている。荒園遺跡と持留川を挟んだ位置にある永吉天神段遺跡では，角錐状石器やナイフ形石器などナイフ形石器文化期の遺物や製作跡が発見されている。荒園遺跡では，細石器文化期の石器類が発見されている。

縄文時代

早期では，永吉天神段遺跡で竪穴建物跡・集石・連穴土坑・落とし穴等が検出され，前平式・石坂式・桑ノ丸式・塞ノ神式・苦浜式土器，石鏃・打製石斧が出土している。二子塚Ａ遺跡では集石が検出され，吉田式・石坂式・塞ノ神式土器，石鏃・石匙などが出土している。金丸城跡では石坂式土器・石鏃・凹石などが，下堀遺跡では集石13基や土坑と，前平式・石坂式・桑ノ丸式・平栫式・塞ノ神式土器，石鏃・石錐等が発見されている。平良上Ｃ遺跡では，竪穴建物跡・集石・連穴土坑と，石坂式・下剥峯式土器が，荒園遺跡では，集石や土坑と，前平式・石坂式・桑ノ丸式・平栫式・塞ノ神式土器，石鏃・石匙，耳栓などが発見されている。益畑遺跡では，前平式土器の時期の竪穴建物跡２軒，連穴土坑16基，集石85基，

土坑 160 基などが検出された。他に前平式・吉田式・石坂式・下剥峯式・辻タイプ・桑ノ丸式・塞ノ神式などの土器や，石鏃・石皿・磨石・敲石・石斧・ハンマーなどの石器が出土した。串良川の右岸に位置する町田堀遺跡では，集石遺構が多く検出され，中原式土器や下剥峯式土器などが出土した。

中期では，立山Ｂ遺跡で阿高式土器が出土している。細山田段遺跡では前期末から中期前半の土坑が 170 基以上検出され，在地の深浦式土器とともに東海系土器，近畿地方の大歳山式土器，瀬戸内～北部九州系の鷹島式・船元式とみられる土器が出土しており，広域な交流がうかがわれる。石鏃・石匙など石器の出土数も多く，抉状耳飾りも出土している。長田遺跡では，中期後半の竪穴建物跡４軒，掘立柱建物跡１棟，土坑を伴う掘立柱建物跡１棟，貯蔵穴などが検出されている。

後期では，細山田段遺跡で丸尾式・辛川式・西平式・中岳Ⅱ式土器，磨石・石皿などが出土している。下堀遺跡では指宿式・擬似磨消縄文系土器が，大崎細山田段遺跡では，土坑や丸尾式・北久根山式・西平式・御領式土器が出土している。町田堀遺跡では竪穴建物跡や埋設土器が発見され，建物跡から中岳Ⅱ式土器が出土している。また，ヒスイ製の垂飾・小玉が出土し，ヒスイの分析結果から，新潟県糸魚川で産出されるものであることが判明しており，北陸地方とも結び付きがあったと考えられる。

晩期では，永吉天神段遺跡で，竪穴建物跡・土坑群とともに，入佐式・黒川式土器，石鏃・打製石斧・磨製石斧・石鏃・砥石が出土している。立山Ｂ遺跡と大崎細山田段遺跡で，黒川式土器が出土している。細山田段遺跡では入佐式・黒川式土器が出土している。永吉天神段遺跡第１地点では突帯文土器を伴う竪穴建物跡や鉢・壺，打製石斧・石鏃・石匙・石皿などが発見されている。第２地点でも同時期の土器・石器などが多量に出土している。町田堀遺跡では，入佐式・黒川式土器が出土している。

このように，荒園遺跡周辺において遺構や遺物が数多く出土していることから，縄文時代にはシラス台地の縁辺部に幾つかの生活拠点が存在していたと考えられる。

弥生時代

隣接する永吉天神段遺跡では，竪穴建物跡やその周辺から弥生時代前期末から中期初頭，中期前半の甕を中心として壺や蓋が出土している。大隅半島ではまだ出土例が少ない弥生時代前期末から中期初頭，中期前半における高橋式や入来Ⅰ式・入来Ⅱ式などが多い。台地上に立地する他の集落遺跡に比べ規模が大きく存続期間が長いことから，持留川流域による拠点集落と考えられる。

沢目遺跡は，砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡である。平成 11 年に行われた発掘調査で，竪穴建物跡 53 軒・土坑約 20 基・柱穴約 180 基が発見され，入来Ⅰ式・入来Ⅱ式・山ノ口Ⅰ式・山ノ口Ⅱ式・須玖式土器，鉄製品・軽石製加工品が出土している。近くの砂丘では戦前に人骨が発見されており，河口付近の横瀬地区では甕棺の破片も採集されていることから，埋葬遺構があった可能性もある。下堀遺跡では，山ノ口式土器や須玖式土器を伴った直径８ｍの円形大型住居跡２軒・掘立柱建物跡５棟などが発見されている。下堀遺跡と同じ台地にある河岸段丘上の荒園遺跡でも吉ヶ崎式・山ノ口式土器を伴う竪穴建物跡が検出されている。下堀遺跡より一段下がった河岸段丘上にある麦田下遺跡では，西南四国系の土器，瀬戸内系の土器など後期の土器溜まりが出土している。遺跡の北側と東側を串良川が蛇行して流れる町田堀遺跡では，竪穴建物跡と掘立柱建物跡が検出され，竪穴建物跡から中津野式土器が出土している。また，田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地が多く点在している。

このように，瀬戸内の土器が多数もたらされており，瀬戸内の土器製作者も南九州に訪れていた可能性が高い。また，当時この地域には多くの人々が生活し，四国，瀬戸内，北陸地方などとの広範な交流があったことが窺える。 しかし，瀬戸内にみられる南九州の土器は，南九州で見られる瀬戸内系土器と比べ少ないことから，どちらかというと瀬戸内から南九州へと一方向的な傾向が強いと言える。

古墳時代

志布志湾岸沿いには，巨大前方後円墳をはじめ，多くの古墳群があり，畿内との関連をうかがわせる。

周辺から発見された原田古墳群には，直径 40 ｍの円墳が現存する。また，軽石製組合わせ石棺をもつ地下式横穴墓は，玄室が家形をなし，羨道部の取り付けが妻入りである。石棺内には，女性の人骨が残っており，刀子が副葬されていた。

集落遺跡として，原田古墳群と同じ台地の北側には長田遺跡があり，竪穴建物跡３軒が検出されている。二子塚Ａ遺跡では，竪穴建物跡３軒，土坑１基が発見され，４～５世紀代の成川式土器や，宮崎平野の影響を受けたと考えられる土師器が出土している。沢目遺跡では，古墳時代初頭の竪穴建物跡が５軒あり，建物跡内から成川式土器，土師器が意図的に並べられた状態で出土した。遺物には，布留式土器をまねて作られた土師器等が出土している。

下堀遺跡では，竪穴建物跡７軒・溝状遺構が，荒園遺跡では，笹貫式土器を伴う竪穴建物跡が検出され，うち１軒は焼失住居跡である。高久田Ａ遺跡では１軒，永吉天神段遺跡では４軒の竪穴建物跡が見つかっている。小牧遺跡でも花弁状を呈する竪穴建物跡などが発見されている。また，二子塚で採集されたと伝えられている朝鮮半島製の鋳造鉄斧もある。

横瀬古墳は，古墳時代中期（５世紀前半頃）の大型前方後円墳で，東串良町に所在する唐仁大塚古墳に次いで県内第２の規模を誇る。墳長 132 m，前方部幅 72 m，前方部長 68 m，後円部径 64 m，くびれ部幅 48 mあり，そのまわりを幅が 12 ～ 23 m，深さ約 1.5 mの壕が巡っているが，さらに周堤帯を挟んで外側に周濠が巡る二重周濠の可能性も考えられている。周濠跡からは伽耶系陶質土器あるいは大阪府陶邑窯産須恵器や円筒埴輪が出土している。墳丘の高さは，後円部が 10.5 m，前方部が 11.5 mであるが，後円部の頂上部に石室が露呈していることから，本来の後円部は現在より高かったと考えられる。墳丘からは円筒埴輪片，形象埴輪片が採集されている。明治 35 年に盗掘を受け，腐食した直刀や鎧，勾玉類が出土し，石室内は朱塗りであったと伝えられている。

神領古墳群は，前方後円墳４基，円墳９基で構成されている。10 号墳は墳長 54 mの前方後円墳である。主体部は６か所の縄掛突起のある刳抜式舟形石棺を軽石で覆った礫槨で，周辺から管玉・勾玉・鉄剣・短甲の一部，鉄鏃束などが出土している。周溝からは盾持人埴輪や朝顔形埴輪などの埴輪や，愛媛県市場南組窯産などの初期須恵器・土師器高坏・製塩土器などを含む大量の祭祀土器群が出土している。５世紀前半のものである。まわりには４基の地下式横穴墓が発見されている。６号墳（天子ヶ丘古墳）は墳長 43 mの前方後円墳で，後円部に花崗岩質板石を使用した組合せ箱形石棺があった。日光鏡・倣製獣帯鏡各１面が採集され，石棺内から，鉄剣・鉄刀・鏡等の副葬品が出土した。神領古墳群では他に５・６世紀の地下式横穴墓も８基検出されている。１号は，長方形家形の玄室，妻入りの羨道部取り付けで，軽石製箱形石棺内から鉄剣・イモガイ製貝釧・仿製内行花文鏡・骨製簪などの副葬品が出土した。５号からも，イモガイ製貝釧が出土した。６号の玄室内では南側に歯が数本，北側に大腿骨が残存しており，副葬品はなかった。

町内では他に，飯隈台地に飯隈古墳群（円墳９基，地下式横穴墓 21 基）・仮宿台地に田中古墳群（円墳３基）・後迫古墳群・鷲塚地下式横穴墓群・下堀遺跡（地下式横穴墓７基）が知られている。

町田堀遺跡では南九州特有の地下式横穴墓が 88 基検出され，南九州では初めてとなる円形周溝を伴う例も確認されている。

このように，近畿地方の布留式土器をまねた土師器や愛媛県市場南組窯産の大量の祭祀土器群，また，イモガイ製貝釧等が出土していることから，近畿・四国地方だけでなく，南西諸島まで交流が広がっていたと考えられる。

古代

古代の大崎は日向国諸県郡に属し，その南端にあったと考えられるが，具体的な郡境等は不明である。この地域の古代の考古学的様相も明らかになっていない。

天神段遺跡では，掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑・炉跡・土師器・墨書土器・刻書土器・鍛造剥片が確認されている。永吉天神段遺跡の第１地点では６棟の掘立柱建物跡や墨書土器・刻書土器・須恵器・焼塩土器・鉄製刀子・砥石などが発見され，小壺は水滴とも考えられている。これらの点から，水滴や焼塩土器・鉄製品などをもつ特殊な階級である識字層が居住し，交通の要衝地の一つとして存在した可能性が高い。

中世

中世には大崎でも各地で山城が造られ，大崎城跡・胡摩ヶ崎城跡・野卸城跡・竜相城跡・金丸城跡・桧谷城跡・遠見ヶ丘などがある。金丸城跡では，溝状遺構・土坑が検出され，青磁・白磁・青花・東播系こね鉢・瓦質土器・備前焼擂鉢・天目碗など 14 世紀半ばから 15 世紀の遺物が出土している。

天神段遺跡では，多くの掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓が発見され，土坑墓１号からは，同安窯系青磁６点・青磁１点・青白磁１点・銅鏡１点・滑石製石鍋２点・鉄製品・木製品・土師器などの豊富な副葬品が出土している。下堀遺跡では，溝状遺構・畝跡とともに，青磁・青花・中国陶器などが発見されている。荒園遺跡では，掘立柱建物跡や土坑・溝などが発見され，土師器・東播系須恵器などとともに華南三彩も出土している。永吉天神段遺跡でも，湖州六花鏡・白磁碗・羽釜形のミニチュア土器や土師器皿・坏の副葬された土坑墓等が発見され，青磁・白磁・陶器壺などの輸入陶磁器や，東播系捏鉢・常滑焼・備前焼などの国内産陶器，楠葉型瓦器埦，滑石製石鍋，茶臼など多くの遺物が出土している。

以上のことから，当時は広範な交流が行われていたことが窺える。

近世

金丸城跡では，17 世紀前半を主体とする陶磁器が多数出土している。また，多くの柱穴とともに，掘立柱建物跡７棟や水溜土坑（大型６基・小型２基），炉跡 16 基，溝状遺構，墓などが検出されている。炉跡はいずれも意図的に壊され，炉周辺に炉壁を構成していたと思われる軽石や熱変粘土片が集中している場所も確認された。周辺で椀形鉄滓が出土していることから，この炉については鉄生産に関連する可能性が考えられる。肥前染付・瓦器・中国製陶磁器・龍門司窯および苗代川窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄滓など多くの遺物も出土している。

天神段遺跡では，安永ボラ（1779 年）を埋土とする畠畝状遺構や薩摩焼などが発見されている。

細山田段遺跡では近代まで続く溝状遺構や古道が検出されている。永吉天神段遺跡でも薩摩焼や肥前系染付などが出土し，道跡や寛永通宝を副葬した墓坑５基が検出されている。

以上のようなことから，大崎町周辺は，歴史的にも長期間に渡り，交通の要衝地だった可能性が高いと言える。

（参考・引用文献）

大崎町教育委員会2001「立山Ｂ遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

大崎町教育委員会2005「金丸城跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

大崎町教育委員会2005「下堀遺跡・大崎細山田段遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

大崎町教育委員会2006「美堂Ａ遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

大崎町教育委員会2014「麦田下遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2010「加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・椿山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡Ａ地点」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(154)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2012「宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡Ｂ地点・柿木段遺跡２」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(173)

鹿児島県教育委員会　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2015「天神段遺跡１」（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(3)

鹿児島県教育委員会　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2016「永吉天神段遺跡　第1地点」（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(8)

鹿児島県教育委員会　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2016「町田堀遺跡」（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書

鹿児島県教育委員会　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2017「永吉天神段遺跡　第2地点（旧石器・縄文時代編）」（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（13）

鹿児島県教育委員会　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2017「荒園遺跡１」（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(12)

鹿児島県教育委員会　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2018「町田堀遺跡２」（公財）埋蔵文化財調査センター発掘報告書(20)

鹿児島県教育委員会　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2019「永吉天神段遺跡４　第３地点」（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(22)

鹿児島県教育委員会　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2020「宮脇遺跡」（公財）埋蔵文化財調査センター発掘報告書(28)

橋本達也2010「古墳築造南限域の前方後円墳―鹿児島県神領10号墳の発掘調査とその意義」『考古学雑誌』第94巻第３号

平美典2015「志布志湾周辺域における弥生時代集落」『Archaeology from the South Ⅲ　本田道輝先生退職記念論文集』

河野裕次2015「拓かれた海上交流の歴史－弥生時代－」『第30回国民文化祭かごしま2015シンポジウム「横瀬古墳とヤマト王権のつながり～日本列島南端の海上交流の歴史～」関連論集』

川口雅之2017「弥生時代における大隅半島の農耕文化について」『鹿児島考古　第47号』

第1図　周辺遺跡位置図(1:25,000)

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所　在　地	地形	種類	時　代	遺物等	備　考
1	468	116	佐土原	曽於郡大崎町野方佐土原	台地	散布地	縄文，古墳	土器	平成12年：農政分布調査
2	468	115	大久保B	曽於郡大崎町持留大久保	台地	散布地	縄文	土器	平成12年：農政分布調査
3	468	3	大久保A	曽於郡大崎町持留大久保	台地	散布地	縄文(後)	指宿式・市来式土器,打製石斧	
4	468	99	赤野原	曽於郡大崎町持留赤野原	台地	散布地	弥生，古墳	土器	平成11年：農政分布調査
5	468	2	川上神社	曽於郡大崎町持留中持留	扇状地	散布地	縄文(後)	指宿式・市来式土器	
6	468	67	持留牧	曽於郡大崎町持留牧，東尾ノ花	台地	散布地	縄文，古墳	磨製石斧片，成川式土器	平成9年：農政分布調査
7	468	135	西ノ上	曽於郡大崎町永吉西ノ上	台地	散布地	弥生		平成18年7月：NTTドコモ九州の電話基地局建設に伴う分布調査
8	468	100	栫木段	曽於郡大崎町永吉栫木段	台地	散布地	弥生，古墳	土器	平成11年：農政分布調査
9	468	101	永迫	曽於郡大崎町永吉永迫	台地	散布地	縄文，弥生，古墳	土器	平成11年：農政分布調査
10	468	127	高久田B	曽於郡大崎町永吉高久田	沖積地	散布地	弥生(前・末)，古墳	弥生終末～古墳住居跡	平成18年：農政分布調査 平成21年：県営農総事業に伴い発掘調査
11	468	97	坂木原	曽於郡大崎町岡別府坂本原	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年：農政分布調査
12	468	96	五鳴	曽於郡大崎町岡別府五鳴	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年：農政分布調査
13	468	98	早馬	曽於郡大崎町岡別府早馬	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年：農政分布調査
14	468	128	小柳	曽於郡大崎町岡別府小柳	沖積地	散布地	弥生，古墳		平成18年：農政分布調査
15	468	137	麦田下	曽於郡大崎町岡別府麦田下	台地		弥生(後)，古墳，古代	土器溜まり，高付式・西南四国系・瀬戸内系土器，勾玉，砥石，成川式土器，墨書土器	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
16	468	129	宮田	曽於郡大崎町岡別府宮田	沖積地	散布地	弥生，古墳	弥生土器	平成18年：確認調査
17	468	130	高久田A	曽於郡大崎町高久田・尾ノ迫	台地	集落	縄文(晩)，弥生(前～終末)，古墳，古代～近代	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構，入佐式・黒川式・刻目突帯文・山ノ口式・中津野式・東原式土器，磨製石鏃・石錐・ガラス玉・青磁・古銭	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
18	468	102	船迫	曽於郡大崎町永吉船迫	台地	散布地	縄文，弥生，古墳		平成11年：農政分布調査
19	468	103	下原	曽於郡大崎町持留下原	台地	散布地	縄文(後)，弥生，古墳	指宿式土器・市来式土器・弥生土器・土師器・磨製石斧	平成11年：農政分布調査
20	468	134	椎木段	曽於郡大崎町永吉椎木段	台地	散布地	縄文，古墳，中世	成川式土器・磨製石斧	平成18年：分布調査
21	468	104	永吉天神段	曽於郡大崎町永吉天神	河岸段丘・台地	集落 墓域	旧石器，縄文，弥生，古墳，古代，中世，近世	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑墓・集石，ﾅｲﾌ形石器・尖頭器・縄文土器・弥生土器・成川式土器・土師器・銅鏡・古銭	平成24～27年度：発掘調査 平成27年度：第１地点埋文調査センター報告書(8) 平成28年度：第２地点－１埋文調査センター報告書（13） 平成29年度：第２地点－２埋文調査センター報告書（17） 平成30年度：第３地点埋文調査センター報告書（22）
22	468	53	下堀	曽於郡大崎町岡別府下堀	台地	集落 地下式横穴墓	縄文(早・後)，弥生(中)，古墳，古代，中世	集石遺構，大型住居跡，土坑を伴う掘立柱建物跡，地下式横穴墓等，縄文土器・山ノ口式土器・成川式土器	平成13～15年：大隅グリーンロード建設に伴う発掘調査 平成17年度：大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
23	468	90	干浅	曽於郡大崎町井俣浅瀬	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年度：農政分布調査
24	468	30	金丸城跡	曽於郡大崎町井俣小牧・金丸	台地・沖積地	城館跡	縄文(早)，古墳，古代，中世，近世	掘立柱建物跡・土坑・溝，石坂式土器・石鏃・凹石・土師器・須恵器・青磁・白磁・青花・備前焼・砥石・硯・鉄製品等	救仁郷氏築城と言われているが，調査でも不明 平成11・12年：大隅グリーンロード建設に伴う発掘調査 平成17年度：大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
25	468	86	井俣牧	曽於郡大崎町井俣井俣牧	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年：農政分布調査

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所　在　地	地形	種類	時　代	遺物等	備　考
26	468	122	井俣和田	大崎町井俣和田	沖積地	散布地	古墳	成川式土器	平成18年：確認調査
27	468	88	宮脇	大崎町井俣宮脇	台地	散布地	旧石器時代，縄文時代早期	集石，加栗山式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・平栫式・塞ノ神式土器，石核・石鏃・磨石	平成27・28年：発掘調査
28	468	89	堂園堀	大崎町井俣堂園堀	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年：農政分布調査 平成23年：確認調査
29	468	87	坂上	大崎町井俣坂上	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年：農政分布調査
30	468	95	荒園	大崎町仮宿荒園	台地	散布地	旧石器，縄文早期，縄文前期～晩期，弥生，古墳，古代以前，中世以降	竪穴住居跡・溝状遺構，細石刃核・細石刃・集石・前平式・平栫式・塞ノ神式・苦浜式・山ノ口式・東播系須恵器・備前焼	平成24～26年・30年：東九州自動車道建設に伴う発掘調査 平成28年度：第１地点　埋文調査センター報告書（12）
31	468	49	美堂A	曽於郡大崎町仮宿美堂	台地	散布地	古墳，中世，近世	古道・土坑，成川式土器・土師器・青白磁・備前焼・常滑焼	平成14年：県営農免農道整備事業に伴う発掘調査 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）
32	468	50	美堂B	曽於郡大崎町仮宿胡摩	台地	散布地	古墳		平成7年：農政分布調査
33	468	34	大崎城跡	曽於郡大崎町仮宿城内ほか	台地	城館跡	中世(室町)，近世		
34	468	33	胡摩ヶ崎城跡	曽於郡大崎町仮宿古城	台地	城館跡	中世(室町)		楡井氏の城
35	468	51	小園	曽於郡大崎町仮宿小園	沖積地	散布地	古墳		平成14年：確認調査
36	468	29	野卸城跡	曽於郡大崎町永吉前岡・深坂	台地	城館跡	古代，中世		平安時代末築城（1190年） シラス採取で半壊
37	468	106	外園	曽於郡大崎町永吉外園	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年：農政分布調査
38	468	126	牧谷・白山	曽於郡大崎町永吉牧谷・白山	沖積地	散布地	中世	野卸城の堀の可能性有り	平成17年：農政分布調査
39	468	105	大迫	曽於郡大崎町永吉大迫	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年：農政分布調査
40	468	17	高井田	曽於郡大崎町井俣高井田（飛地）	台地	散布地	弥生(中)	土器	平成17年：農政分布調査
41	221	449	五色	志布志市有明町野神字五色，風穴	台地	散布地	古墳		平成10年度：農政分布調査
42	221	450	西ノ堀	志布志市有明町原田字西ノ堀，下五敷	台地	散布地	古墳		平成10年度：農政分布調査
43	221	407	坂ノ上	志布志市有明町原田字坂ノ上，前田，西原	台地	散布地	弥生，古墳		平成11年度：農政分布調査 旧遺跡名：坂ノ下
44	221	352	清水	志布志市有明町原田字清水	台地	散布地	弥生(中)	磨製石斧・打製石斧	昭和58年度：大隅地区埋蔵文化財分布調査　旧遺跡名：平田，原田，元宮の下，永田
45	221	439	東中原	志布志市有明町原田字東中原，大塚，藤原，中須	台地	散布地	古墳		平成10年度：農政分布調査 旧遺跡名：中須
46	221	504	大塚	志布志市有明町原田字大塚，出口，有本，竹塚	台地	散布地	縄文，古墳		平成8・10年度：農政分布調査
47	221	386	原田古墳群	志布志市有明町原田字大塚，竹塚	台地	円墳・地下式横穴墓	古墳	原田古墳（円墳直径40m高さ5.6m石棺露出）大塚A古墳（円墳直径20m高さ4.5m石棺露出長さ1.3m高さ1.2m）大塚B古墳（円墳直径10m高さ1.3m）坂ノ上1･2号古墳（小円墳）・地下式横穴墓（妻入型・軽石石棺・鉇・人骨（成人女性）・刀子）	昭和58年度：大隅地区埋蔵文化財分布調査 旧遺跡名：大塚殿，大塚古墳群，大塚A古墳・大塚B古墳，坂ノ上1号古墳，坂ノ上2号古墳・大塚 平成26年：鹿児島国際大学　発掘調査
48	221	366	長田	志布志市有明町原田長田，牧，春日免	台地	散布地	縄文，弥生(中)，古墳，中世	竪穴住居跡（弥生4・古墳3）・土坑墓（中世）・掘立柱建物跡（弥生3・古墳4・中世4），山ノ口式土器，成川式土器，白磁，竪穴住居跡（弥生・古墳）	平成11年度：発掘調査 平成15年：有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
49	482	9	上市ノ園古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	古墳	古墳群1～5号	

第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

東九州自動車道の志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間には，第２表に示すとおり 26 か所の遺跡が存在する。ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を記載する。詳細については各報告書等を参照していただきたい。

第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	見帰	志布志市 志布志町 志布志 台地上 標高約70m	H28年度 終了 ※H25・30年度に埋文センター調査（隣接地）	H30年度 刊行 Ｒ２年度 隣接地刊行	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃，使用痕剥片，磨石，叩石，台石
					縄文早期	土坑，集石	吉田式，石坂式，押型文，下剥峯式，縄文系土器，石鏃，磨石，叩石，石核
					縄文中期	落とし穴，土坑	石鏃，石皿
					縄文後期	溝状遺構	岩崎上層式，丸尾式，辛川式，納屋向タイプ，西平式，中岳Ⅱ式，石匙，石錐，打製石斧，磨石，敲石，石錘
					弥生	—	突帯文，高付式
					その他の時代	土坑，溝状遺構	薩摩焼，染付
		旧石器時代から近世までの複合遺跡であり，主体となるのは縄文時代後期である。赤色顔料を塗布した台付皿形土器が出土し，溝状遺構から出土した丸尾式土器・西平式土器などの一括資料は後期後半の共伴関係をみるうえで貴重である。					
2	宮ノ上	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
3	安良	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約30m	H28年度 H29年度 終了	H30年度 Ｒ元年度 刊行	縄文早期	集石	前平式，小牧３Ａタイプ，轟Ａ式
					縄文中期	—	大平式，阿高式
					縄文後・晩期	土坑	丸尾式，西平系，組織痕土器，石鏃，スクレイパー，打製石斧，磨石，石錘，丸玉
					弥生中期	土坑	入来Ⅱ式，山ノ口Ⅱ式，磨製石鏃
					古墳時代	地下式横穴墓，溝状遺構	笹貫式，須恵器，鉄鏃，鉄鐸，
					古代～中世	掘立柱建物跡，竪穴建物跡，土坑，溝状遺構，帯状硬化面，礫集積遺構	土師器，須恵器，国産陶器，カムィヤキ，瓦器，輸入陶磁器，滑石製石鍋，鉄関連遺物，銭貨，炭化米塊
					近世	土坑，帯状硬化面	薩摩焼，肥前系陶器，瀬戸系陶器，銭貨，鉄製品
		縄文時代から近世までの複合遺跡であり，中世前半の炭化米塊は県内最古の事例として注目される。					
4	水神松	志布志市 志布志町 安楽 安楽川左岸 標高約３ｍ	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
5	安楽小牧Ｂ	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約50m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 Ｒ元年度 刊行	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃核，細石刃
					縄文草創期	集石	土器片，黒曜石剥片，磨石，敲石，石皿
					縄文早期	集石	加栗山式，札ノ元Ⅶ類，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，平栫式，塞ノ神式，耳栓，石鏃，石匙，石錐，石核，磨製石斧，礫石器，異形石器
					弥生	—	入来Ⅱ式
					古代～近世	溝状遺構，帯状硬化面	土師器，須恵器，青磁，薩摩焼，染付，土製品，鉄製品，寛永通宝
		起伏のある地形に立地し，縄文時代早期を中心に旧石器時代，縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。古墳群として遺跡登録されているが，これまでの調査では痕跡を含め古墳は確認されていない。					
6	次五	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約50m	H26年度 H27年度 終了 ※志布志市教育委員会調査	H29年度 刊行 ※志布志市教育委員会刊行	旧石器	—	畦原型細石刃核，細石刃，剥片
					縄文早期	落とし穴，連穴土坑，土坑，集石，磨石集積，配石遺構，石器製作跡，	岩本式，前平式，志風頭式，東九州系無文土器，加栗山式，小牧３Ａタイプ，吉田式，岩ノ上タイプ，札ノ元Ⅶ類，倉園Ｂ式，石坂式，中原式，下剥峯式，桑ノ丸式，辻タイプ，押型文，手向山式，塞ノ神式，石鏃，スクレイパー，石核，磨製石斧，石錘，磨石・敲石類，石皿，トロトロ石器，異形石器
					縄文前期以降	落とし穴	
		旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は，細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは被熱破砕礫が多量に出土した点である。					
7	大代	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約40m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
8	木森	志布志市 有明町 野井倉 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H30年度 終了	Ｒ３年度 刊行予定	縄文早期	連穴土坑，土坑，集石，土器集中	前平式，加栗山式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，石鏃，石匙，楔形石器，打製・磨製石斧，磨・敲石
					縄文中期	—	春日式，磨製石斧
					古代	—	須恵器
					中世	掘立柱建物跡，ピット列，ピット	土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，常滑，備前，中国陶器
					時期不詳	土坑，不明遺構，溝状遺構	—
		縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の連穴土坑，土坑，集石，中世の掘立柱建物跡等が発見された。遺物は縄文時代早期の土器や石器を中心に，縄文時代中期から中世の遺物が出土している。また，鬼界カルデラ噴火による液状化現象（噴砂跡）が確認されている。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
9	田尾下	志布志市 有明町 野井倉 菱田川右岸 標高約５m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
10	春日堀	志布志市 有明町 蓬原 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H30年度 R元年度 (1)刊行 R２年度 R３年度 (2)刊行予定	縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，集石，土坑，土器集中，炭化物集中，落とし穴	前平式，加栗山式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，塞ノ神式，石鏃，削器，掻器，環状石斧，磨石・敲石類，台石・石皿類，石製品，異形石器
					縄文後期	落とし穴，土坑	丸尾式，石器
					弥生	竪穴建物跡	山ノ口Ⅰ式
					弥生終末期～古墳前期	竪穴建物跡，土坑，遺物集中区	弥生終末期～古墳前期の土器，鉄鏃，敲石，磨敲石，砥石，台石，磨製石剣
					古墳終末期	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，溝跡，遺物溜まり，地下式横穴墓，遺物集中区	笹貫式新段階，甕，須恵器，鉄鏃，青銅製品，敲石，磨敲石，砥石，軽石製品，棒状石器
					古代	掘立柱建物跡，ピット列，焼土跡	土師器，須恵器，軽石製品，土製品
					中世	堀跡，道跡，ピット列，竪穴建物跡，土坑墓	土師器，常滑焼，白磁，青磁
					近世	溝跡，道跡，貝溜まり	
		縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴建物跡，連穴土坑，集石，落とし穴，弥生時代の竪穴建物跡，古墳～飛鳥時代の竪穴建物跡（焼失住居跡含む），掘立柱建物跡，溝状遺構，中世の掘立柱建物跡，堀跡が検出された。遺物は縄文時代早期の土器，石器等をはじめ，弥生時代から中・近世の遺物が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）の痕跡も確認されている。					
11	牧ノ上B	志布志市 有明町 野井倉 台地上 標高約47m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
12	稲荷堀	曽於郡 大崎町 菱田 台地上 標高約50m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
13	平良上C	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H26年度 H27年度 終了	H27年度 H28年度 刊行	縄文早期	竪穴住居跡，竪穴遺構，連穴土坑，土坑，集石，土器集中，チップ集中	岩本式，加栗山式，吉田式，石坂式，中原式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，石鏃，石匙，石錐，削器，掻器，楔形石器，打製・磨製石斧，磨石，敲石，凹石，砥石，石錘，石核，線刻礫
		縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴建物跡，連穴土坑，集石，土坑が検出されている。遺物は，縄文時代早期の土器，石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					
14	宮脇	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	旧石器	礫群	ナイフ形石器，三稜尖頭器，台形石器，細石刃，細石刃核，スクレイパー，掻器，使用痕剥片，磨石，叩石
					縄文早期	集石，土坑	志風頭式，加栗山式，札ノ元Ⅶ類，小牧３Ａタイプ，倉園Ｂ式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，打製石鏃，石匙，石錐，磨製石斧，磨石，叩石，石皿，軽石製品
					中世～近世	井戸状遺構	青磁，薩摩焼，寛永通宝
		旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では，石器製作に関連すると考えられる石核，フレーク，チップ等が出土している。縄文時代早期では，集石，土坑，土器集中，ピットと土器，石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の噴砂跡も確認されている。					
15	堂園堀	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
16	荒園	曽於郡 大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約50m	H24年度 H25年度 H26年度 H30年度 終了 ※H24年度は埋文センター調査	H28年度 (1)刊行 H30年度 R元年度 R２年度 R３年度 (2)刊行予定	旧石器	ブロック	細石刃・細石刃核
					縄文早期	集石遺構，磨石集積遺構，素材剥片集積遺構，土器集中か所，土坑，ブロック	前平式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・平栫式・塞ノ神式・苦浜式・轟Ａ式・耳栓・石鏃・石匙・磨石・敲石・石核・フレーク・チップ
					縄文前期～晩期	—	轟Ｂ式・入佐式・石鏃・石斧・礫器・磨石
					弥生	竪穴建物跡，土坑	山ノ口式・磨製石鏃・砥石
					古墳	竪穴建物跡	古式土師器・砥石・軽石製品
					古代以前	堀跡	—
					中近世	掘立柱建物跡，溝状遺構，土坑	土師器・東播系須恵器・陶器・青磁・華南三彩
		本遺跡は旧石器時代から中近世までの複合遺跡で，各時代の貴重な遺構や遺物が確認され，当時の生業を考える上で貴重な資料となる。 特に，縄文時代早期では，調理施設と考えられる40基（内３基は報告済み）の集石遺構や食材加工のための石匙や狩猟具の石鏃が多数見つかった。土器では塞ノ神式土器と苦浜式土器の出土が多く，バリエーションも豊かである。また，弥生時代では，竪穴建物跡が５軒発見され，中期後半の山ノ口式土器の出土が多い。古墳時代では，外来土器を模倣したと考えられる甕形土器などが出土した。さらに，古代以前では，紫コラ（開聞岳起源：AD.874年）が堆積した片薬研堀が検出した。古代以前としては県内で類例がなく，重要な発見となった。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
17	永吉天神段	曽於郡 大崎町 永吉 台地縁辺及び河岸段丘 標高30～50m	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 終了 ※H24年度は埋文センター調査	H27年度 (1・第1地点)刊行 H28年度 (2・第2地点1)刊行 H29年度 (3・第2地点2)刊行 H30年度 (4・第3地点)刊行 R元年度 (5・第2地点3)刊行	旧石器	礫群，ブロック	尖頭器，ナイフ形石器，台形石器，剥片
					縄文早期	集石，土器埋設遺構	前平式，加栗山式，吉田式，手向山式，下剥峯式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，石鏃，石匙，石斧，磨石，敲石，石皿
					縄文前期	—	曽畑式
					縄文後期	—	岩崎上層式，北久根山式，中岳Ⅱ式
					縄文晩期	竪穴建物跡，落とし穴，土坑	入佐式，黒川式，刻目突帯文，管玉，打製石斧
					弥生	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，円形周溝墓，土坑墓群，土坑	入来式，山ノ口式，黒髪式，鉄鏃，磨製石鏃，管玉
					古墳	竪穴建物跡，土坑	成川式，須恵器
					古代	掘立柱建物跡，土坑	須恵器，土師器
					中世	掘立柱建物跡，土坑墓，地下式坑，火葬土坑，土坑	白磁，青磁，土師器，瓦質土器，東播系須恵器，備前焼，常滑焼，湖州六花鏡，砥石，石塔，古銭
					近世	近世墓	薩摩焼，染付，寛永通宝，石臼
					時期不明	掘立柱建物跡	—
		旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から，国内では最古級となる鉄鏃が出土した。中世では白磁，青磁，瓦質土器，東播系須恵器等が多量に出土した。また，地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。					
18	細山田段	鹿屋市串良町細山田 曽於郡 大崎町 細山田 台地上 標高約95m	H25年度 H26年度 H27年度 終了	H26年度 H28年度 H30年度 R元年度 (1)刊行 R２年度 (2)刊行	縄文早期	集石，埋設土器	吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，中原式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，右京西式，石鏃，石匙，磨･敲石，石核
					縄文前・中期	土坑，土器集中	曽畑式，深浦式，大歳山式，鷹島式，船元式，石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，二次加工剥片，磨石，敲石，石皿，石核，炭化種実
					縄文後期	土坑	辛川式，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，磨･敲石，打製石斧，磨製石斧，石皿
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式
					弥生前期	—	高橋式
					古墳	—	成川式
					時期不明	溝状遺構・古道	—
		縄文時代前期から中期初頭を中心に，縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では170基を超える土坑が検出されたほか，在地系土器の深浦式土器，近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器，瀬戸内地方の船元式土器などが出土し，当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。					
19	小牧	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約60m	H27年度 H28年度 H29年度 終了	H30年度 R元年度 (1)刊行 R２年度 (2)刊行 R３年度 (3)刊行予定 作業中	旧石器	—	槍先形尖頭器，ナイフ形石器，三稜尖頭器，細石刃
					縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，土坑，集石	前平式，吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，石鏃，石匙，石斧，磨敲石，石皿
					縄文前期	—	曽畑式，深浦式，磨石
					縄文後期	竪穴建物跡，石皿立石遺構，伏甕，石斧集積遺構，集石，土坑	阿高式系，岩崎上層式，指宿式，市来式，石鏃，横刃型石器，打製石斧，磨石，石皿，大珠
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生	—	入来式，山ノ口式，高付式，須久式系統，砥石
					古墳	竪穴建物跡，礫集積，土器溜，土坑	東原式，辻堂原式，笹貫式，布留系土器，須恵器，鉄鏃，鉄製品，敲石，勾玉，臼玉，管玉，軽石加工品
					古代	掘立柱建物跡，焼土跡，溝状遺構，土坑	土師器，須恵器，墨書土器，鉄器，土錘，焼塩土器，土製紡錘車
					中世以降	掘立柱建物跡，土坑，石組遺構，溝状遺構，杭列	土師器，東播系須恵器，白磁，青磁，墨書土器，石鍋，合子，鞴羽口，刀子，鉄製紡錘車，焙烙，古銭，薩摩焼
		旧石器時代から近世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落，後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。この他，古墳時代の花弁形住居跡を伴う集落や古代・中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺の遺跡を含めて串良川沿岸における人間活動の変遷を追うことができる遺跡である。					
20	川久保	鹿屋市 串良町 細山田 河岸段丘 標高30～50m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H27年度 H29年度 H30年度 (1・C地点)刊行 R元年度 (2・B・D地点)刊行 R２年度 (3・A地点) (4・A地点)刊行 R３年度 作業中	旧 石 器	礫群	剥片尖頭器，ナイフ形石器，畝原型細石刃核
					縄文早期	竪穴建物跡，集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，加栗山式，吉田式，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，押型文，塞ノ神式，苦浜式，轟Ａ式，石鏃，打製石斧，石皿
					縄文前期	集石	曽畑式，磨製石斧
					縄文後期	—	中岳式
					縄文晩期	集石	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生前期	—	高橋式
					弥生中期	竪穴建物跡	下条式，山ノ口式
					古墳	竪穴建物跡，鍛冶関連建物跡，竪穴遺構，溝状遺構，道跡	成川式，鞴羽口，高坏脚転用鞴羽口，鉄鏃，鉄滓，勾玉，管玉
					古代	掘立柱建物跡	須恵器，土師器
					中世	掘立柱建物跡，溝状遺構，道跡	青磁，白磁，瓦器椀
		旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では，集落を構成する多数の竪穴建物跡や鍛冶関連遺物を伴う遺構が発見されているほか，専用の鞴の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
21	町田堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了	H27年度 (1)刊行 H29年度 (2)刊行	縄文早期	集石	下剥峯式，平栫式
					縄文後期	竪穴建物跡，埋設土器，落とし穴，土坑，石斧集積遺構	中岳Ⅱ式，石刀，石鏃，打製・磨製石斧，ヒスイ製垂飾，小玉，勾玉，管玉
					縄文晩期	—	黒川式，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴建物跡	入佐式，山ノ口式，土製勾玉
					古　墳	竪穴建物跡，地下式横穴墓，円形周溝墓，溝状遺構	成川式，人骨，鉄剣，鉄鏃，刀子，ヤリ鉋，異形石器
					古　代	焼土跡，道跡	土師器，須恵器
		縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が92基発見され，円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性が想定され，高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり，大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか，縄文時代後期の竪穴建物跡から，橿原文を施す完全な石刀が出土している。					
22	牧山	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H28年度 (1)刊行 H30年度 R元年度 (2)刊行 R２年度 R３年度 (3)刊行予定	旧石器	—	剥片
					縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，土坑，集石，石器製作跡	吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，石鏃，石匙，スクレイパー，磨石
					縄文前期	埋設土器（轟式）	轟B式，条痕文
					縄文後期	土坑，落とし穴状遺構，掘立柱建物跡，ピット，埋設土器，石器集中部	市来式，丸尾式，納屋向式，納曽式，西平式，辛川Ⅱ式，太郎迫式，中岳Ⅱ式，打製・磨製石斧，磨敲石，剥片，石核，石皿，石冠
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑	入来式，山ノ口式，打製・磨製石斧，磨製・打製石鏃，磨石，敲石，石皿，青銅鑿
					中・近世	古道跡	青磁，白磁，薩摩焼
		旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に，縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群が環状に発見されており注目される。また，同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が１点出土している。弥生時代中期の青銅製鑿の出土も特筆される。					
23	田原迫ノ上	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 H23年度 H24年度 H25年度 H26年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22～24は埋文センター調査	H26年度 (1)刊行 H27年度 H28年度 (2)刊行 R元年度 R３年度 (3)刊行予定 ※H23～24は埋文センター作業	縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，集石，落とし穴，土坑，石器製作跡	前平式，吉田式，倉園B式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，桑ノ丸式，中原式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，石槍，石鏃，石匙，磨石，敲石，石皿，打製石斧
					縄文後期	落とし穴，礫集積	指宿式，市来式，石鏃，磨石
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴建物跡，大型建物跡，掘立柱建物跡,円形・方形周溝,	山ノ口式・中溝式，擬凹線文系壺，土製勾玉，鉄器，磨製石鏃，石匙，砥石，敲石，台石
					古墳時代以降	溝状遺構，畝状遺構	土師器碗，薩摩焼
		縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では，ベッド状遺構を伴う方形・円形の大型竪穴住居跡，棟持柱をもつ掘立柱建物跡２棟を含む建物跡群，柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており，大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか，縄文時代早期の竪穴住居跡，連穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。					
24	立小野堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 H23年度 H24年度 H26年度 H30年度 終了 ※H22～24は埋文センター調査	H24～27年度 H28年度 (1)刊行 R３年度 (2)刊行予定 ※H24は埋文センター作業	縄文前・中期	—	深浦式
					縄文後期	—	指宿式，市来式，西平式
					弥生中期	—	山ノ口式
					古　墳	地下式横穴墓，土坑墓，溝状遺構	成川式，須恵器，鉄器（刀・剣・槍・鉾・刀子・鏃等），青銅鈴，人骨
					時期不詳	溝状遺構	—
		縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは，古墳時代の地下式横穴墓が約200基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器，青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか，墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ，多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は，南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。					
25	十三塚	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	—	石坂式
					縄文後期	—	凹線文，市来式，
					縄文晩期	—	黒川式，三万田式
					弥生中期	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式，土製勾玉，打製・磨製石鏃，磨石，敲石，砥石，棒状敲具，鉄鏃
					古　墳	—	成川式
					中世～近世	道路状遺構	加治木銭
		弥生時代中期を中心とする遺跡である。花弁形・方形・円形を呈する竪穴建物跡が発見された。出土遺物等から，王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また，集石が竪穴建物跡内から発見されている。７号住居跡の埋土内から，松木薗遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。					
26	石縊	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，石坂式，平栫式，貝殻条痕文土器，打製石鏃，磨石，敲石
					弥生中期	—	山ノ口式，須玖式
		縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石橋式土器１個体と轟A式土器が２個体出土し，両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。					

第 2 図　東九州自動車道関連遺跡位置図

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理作業・報告書作成作業の方法について記す。

１　発掘調査の方法

荒園遺跡第１地点の発掘調査は，平成 23 年度に確認調査，平成 24 年度に本調査を実施した。調査対象表面積は 956 ㎡，対象延面積は 2,360 ㎡である。

本遺跡の調査用区切り（グリッド）は，平成 23 年度の確認調査時において工事用基準杭「ＳＴＡ 106」と「ＳＴＡ 105」の延長線を中心に，10 ｍ間隔で西側から東側に向かって１，２，３・・・，北側から南側に向かってＡ，Ｂ，Ｃ・・・と設定した。

このグリッドを基にして，Ｍ－１区の左下を原点（０，０）縦軸をＸ，横軸をＹとし，遺構・遺物の測量作業を行うこととした。また，トータルステーションで測量作業を行う場合，公共座標に基づき基準点を設定した。

発掘調査は，基本的に重機で表土を除去し，確認調査の結果に基づき遺物包含層は人力で掘り下げた。無遺物層，火山灰の一次堆積層は，一部重機を用い慎重に掘り下げた。遺構は，移植ごて等遺構の検出に適した道具を用い慎重に調査し，実測，写真撮影等を行い，遺物は，出土地点にトータルステーションを使い記録し取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法及び概要（詳細は，第Ⅰ章に掲載）は，以下のとおりである。

平成 23 年度

確認調査は，永吉天神段遺跡と同時に実施し，その結果，荒園遺跡の調査延面積は 29,903 ㎡となった。平成 23 年７月１日から９月 28 日までの約３か月間，調査対象地域にグリッドに沿ってトレンチを９か所設定し，調査区全体の包含層の有無について調査した。

トレンチの形状は８ｍ×４ｍの長方形を基本とし，必要に応じて拡張した。表面を覆う雑草の除去・雑木の伐採を人力で行った後，重機及び人力により徐々に包含層を掘り下げた。遺物・遺構を発見した時，重機による掘り下げを即時中止し，山鍬・鋤簾等の人力掘削で遺構・遺物の検出を行った。検出した遺構については，写真撮影，実測を行った。出土遺物はトータルステーションで記録後，掘り下げを続けた。いくつかのトレンチでは，遺構に影響のない部分は，安全対策を施し下層確認トレンチを設定し，Ⅹ層（シラス）上面まで調査を実施した。Ⅷ層（薩摩火山灰）より下位の旧石器時代相当層については，上層の包含層が厚く十分な調査面積を確保することができず，本調査にて範囲を確定させることとなった。

平成 24 年度

調査期間は平成 24 年５月７日から平成 24 年９月 26 日で，調査延面積は 2,360 ㎡であった。調査は重機で表土を除去し，山鍬・鋤簾等による人力にて堀り下げを行った。また，Ⅲ層上面での地形測量を行った。鬼界カルデラに伴う液状化現象（噴砂）の見られたトレンチでは，土層断面の本調査を行った。遺物包含層が残存している時，小破片はグリッドごとに一括して取り上げ，それ以外の遺物は，必要に応じて写真撮影を実施した後にトータルステーションを用いて取り上げを行った。まとまった遺物及び遺構に関りのある遺物については，縮尺１/５～１/10で実測を行った。

平成 25 年度

調査期間は，平成 25 年６月３日から平成 26 年１月 30 日で，調査対象面積は 8,955 ㎡であった。調査は，遺跡の東側を中心に縄文時代早期から近世の調査を対象として行った。Ⅷ層上面までの調査を終了した後に，トレンチを設定し先行調査を実施したが，旧石器時代の遺構・遺物は確認されず，層位の記録作業を行い，調査を終了した。

平成 26 年度

平成 26 年５月 12 日から平成 27 年１月 28 日まで，調査対象面積は 12,580 ㎡で行った。調査は，遺跡の西側の台地の上部から縁辺部にかけて旧石器時代から近世の調査を対象として行った。

平成 30 年度

平成 30 年５月７日から平成 30 年８月 31 日まで，調査対象面積は 3,785 ㎡で行った。調査は平成 26 年度の調査範囲内の南側で，谷を囲むように伸びた尾根と台地の縁辺部にかけて縄文早期から近世の調査を対象として行った。Ⅷ層上面まで包含層の有無の確認後，埋め戻しや排水対策，安全対策を施し，本遺跡の本調査の全てを終了した。

２　遺構の認定と検出方法

本遺跡で検出された遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

（１）遺構の認定

検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し，調査担当者で検討したうえで遺構の認定を行った。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴建物跡は，埋土や形状，床面の有無，遺物の出土など総合的に判断した。集石遺構については，埋土や形状，床面の有無，遺物の出土など総合的に判断した。集石遺構については，時期を問わず約 10 個以上のものを集石遺構と認定した。時期については検出面，集石遺構内外の出土遺物の種類等で総合的に検討し，判断した。

なお，遺構は検出の写真撮影後掘り下げ実測を行った。遺構に応じて縮尺 10 分の１と，20 分の１の実測を行った。

（２）遺構の検出方法

遺構の検出及び調査に際しては，可能な限り当時の生

活面を把握することを目指したが，判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。

また，畑地や雑木林があった箇所の調査では，撹乱を受けている箇所があり，遺構の検出をはじめとする調査部分の埋土除去等，最善の調査法を調査担当職員で検討し，遺構の推定ラインも含め残存部の記録に努めた。

３　整理・報告書作成作業の方法及び内容

平成25年度及び26年度の発掘調査支援業務において，発掘調査と並行して，第１地点出土遺物の水洗い・注記を行った。注記は，これまでに刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認をとり，遺跡名を表す記号を「ＡＺ」とした。その後に出土区，層，取り上げ番号等が記してある。

平成 28 年度の報告書作成作業支援業務で第１地点は『荒園遺跡１第１地点』として報告書刊行した。

平成 28 年度

平成 28 年度の報告書作成作業支援業務で，平成 25･26 年度発掘調査分遺物の注記，接合，分類，復元，実測を行った。

平成 30 年度

平成 25・26 年度に加えて，平成 30 年度の発掘調査成果品の整理を行った。

遺物の水洗い・注記・接合・分類を行った。水洗作業では，一部はブラシを用い，黒曜石や剥片石器は超音波洗浄機を用いた。分類・接合では遺構内遺物と包含層遺物に分け，土器の胎土や文様等で分類し，グリッドごとに分けて接合を行い，その後エリアを広げて接合した。石器は，剥片石器と礫石器に分けた後，器種及び石材別に分類した。作業の効率化を図るため，石器実測委託先である（有）ジパング・サーベイ，株式会社島田組で石器実測を行った。

令和元年度

平成 30 年度の整理作業を引き継ぎ，発掘調査成果品の整理を行った。

旧石器時代から縄文時代晩期の遺構・遺物の分類・数量把握を行った。また，縄文早期～晩期の遺物及び縄文時代早期の遺構と，旧石器時代の遺物は実測・拓本・トレース・観察表作成やレイアウト・原稿執筆を行った。縄文時代早期の土器は，実測・拓本・トレースを行った。縄文時代早期の石器は，実測・トレース・レイアウト・観察表作成を行った。縄文時代早期の石器の一部は，作業の効率化を図るため，石器実測委託先である（有）ジパング・サーベイで石器実測を行った。

令和２年度

令和元年度の整理作業を引き継ぎ，発掘調査成果品の整理を行った。

縄文時代早期の土器は，前年度までの実施分と併せ，トレース・レイアウト・観察表作成・復元・写真撮影・原稿執筆を行った。縄文時代早期～晩期の石器については，前年度までの実施分と併せ，トレース・レイアウト・観察表作成・原稿執筆を行った。なお，石器の一部については，作業の効率化を図るため，石器実測委託先である（株）九州文化財研究所で石器実測を行った。弥生時代以降の遺物は，実測・拓本・トレースを行った。

令和３年度

報告書刊行に向けて，作業を行った。

弥生時代以降の遺物は，トレース・レイアウト・観察表作成・原稿執筆を行った。また，前年度までの実施分と併せ，遺物は，原稿や観察表，写真図版により特徴を記録した。遺構は，認定・分類したものを実測図や写真等を用いて検出面・埋土の状況等から再度検討しデジタルトレースを行い，調査図面の所見を参考に文章・観察表・図版にまとめて特徴を記録した。

第２節　出土遺物の分類

ここでは，荒園遺跡で出土した主体となる縄文時代早期に比定されるⅥ層・Ⅶ層出土の土器を，遺構内遺物も含めて第Ⅰ類～第Ⅻ類に分類して表記することとした。型式不明の土器，一括遺物はこの分類には含めていない。旧石器時代の遺物は出土数が少なく，一括して掲載した。

なお，石器については本文の中で述べることとする。分類は次のとおりである。

土器の分類

土器の出土量は第Ⅺ類土器が多く，次に第Ｘ類土器，さらに第Ⅸ類，第Ⅷ類土器と続く。第Ⅰ類・第Ⅻ類・第Ⅻ類土器はやや少なく，第Ⅱ・第Ⅲ・第Ⅳ・第Ⅴ・第Ⅵ・第Ⅶ類土器はわずかである。また，土器分類図を次ページに記する。さらに，総括には，既成の土器型式を付記する。代表的な早期の土器型式では，塞ノ神Ｂｃ式土器や吉田式土器が欠落する。

胎土については，ルーペを用いて，それぞれに含まれる鉱物を表した。代表的な鉱物は下記の４種とした。

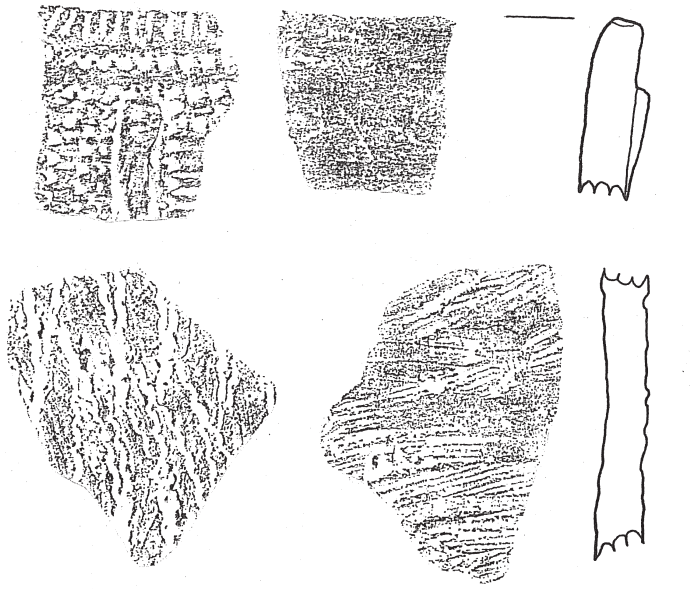
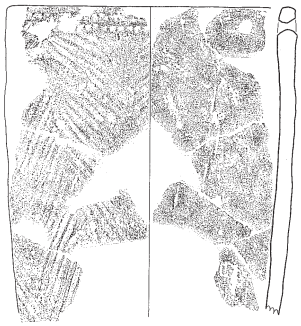
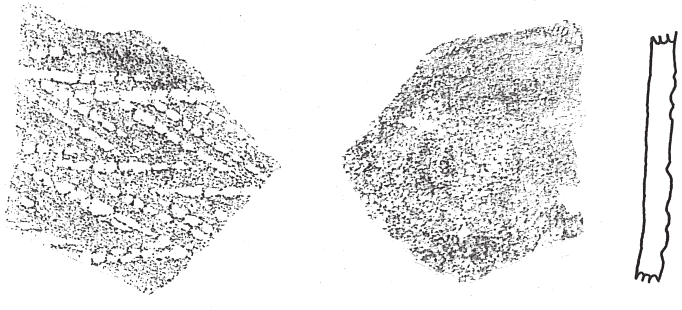
石　英	無色透明でへき開面が見られない。堆積作用により，角が取れ，白濁したコロコロした印象となる。結晶として水晶になると，透明で錐形と柱面が発達し六角形状をなすが，柱面が見られないソロバン玉状のものがある。
長　石	乳白色ないしは白っぽい色調をなし，劈開面が同心円状や葉片状を呈する。
角閃石	茶褐色～黒褐色を呈し，長柱状の結晶をなす。火成岩・変成岩に含まれ，花崗岩に含まれることは少ない。
雲　母	金色～銀色の薄片状で，花崗岩中に含まれる。

この他に茶褐色～黒褐色を呈し，短柱状または粒状の角閃石に似た輝石，泥岩質の礫など沖積作用による円礫類や火山ガラスなどが含まれている。焼成はほとんど良好で，不良のものや注意書きは，土器観察表の備考欄に記入する。

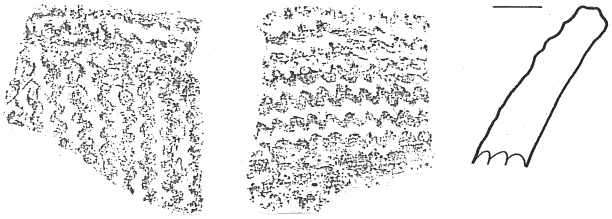
トレースにあたって，刻目，刺突文は見通し線を入れることとし，貝殻円筒文土器の調整と施文が一体化した貝殻条痕文，沈線文等については見通し線を省略した。

ナデ，工具ナデ，ミガキ，ケズリ，カキアゲ，シボリなど土器の調整・製作技術についての名称は固有名詞として，カタカナ書きするものとする。

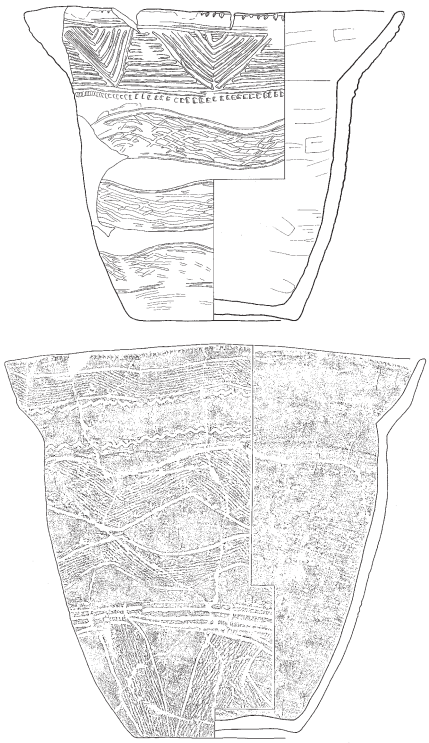
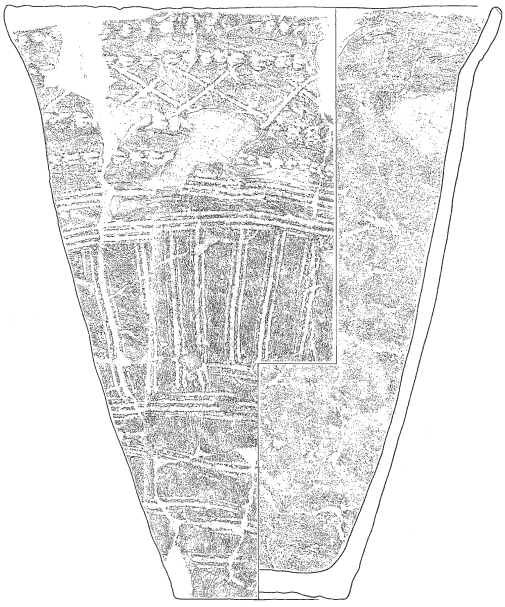
縄文早期土器分類図

第Ⅰ類土器		器形は，円筒形で底部から口縁部へと直線的に立ち上がる。 文様は，口縁部上端から口唇部にかけて貝殻腹縁部による刺突文が，１～２段施される。胴部には，斜位や横位の貝殻条痕が全面に施される。底部は平底である。
第Ⅱ類土器		器形は，底部から口縁部へ直線的に立ち上がるものや口縁部がわずかに外反するものがあり，円筒・角筒・レモン形等がある。 文様は，口縁部には貝殻刺突文を，胴部には貝殻条痕を施した後に刺突を施す。底部は平底で外面にヘラ状工具による縦位の刻目を施すものもある。楔状の貼り付けのあるものもある。
第Ⅲ類土器		器形は，バケツ状を呈し，口縁部が外反するものと直行するものがある。底部は平底である。 文様は，口縁部上面に横位や斜位の貝殻刺突文を施し，胴部全面に貝殻条痕を綾杉状に施す。口縁部には瘤状の突起が付くものもある。
第Ⅳ類土器		器形は，底部から口縁部へ直線的に立ち上がるものや口縁端部がやや内弯するものがある。胴部がやや膨らむものもある。 文様は，器面全体に貝殻腹縁による刺突文を横位や斜位に施す。

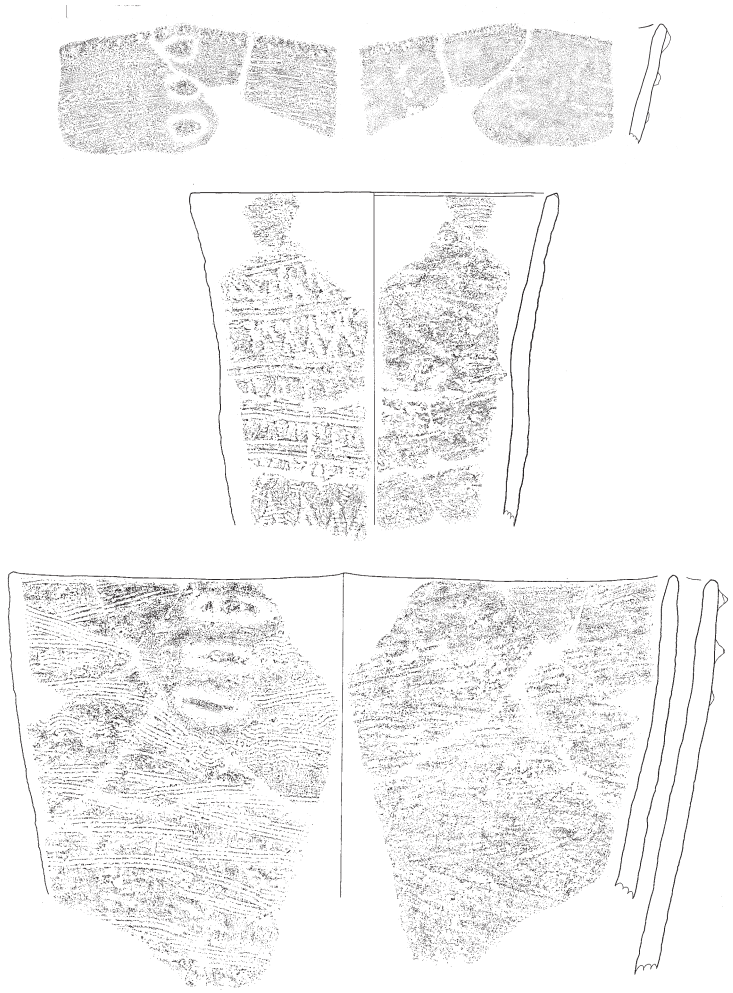
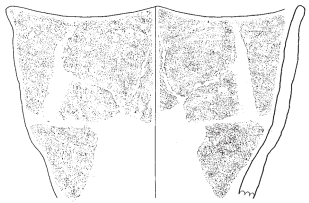
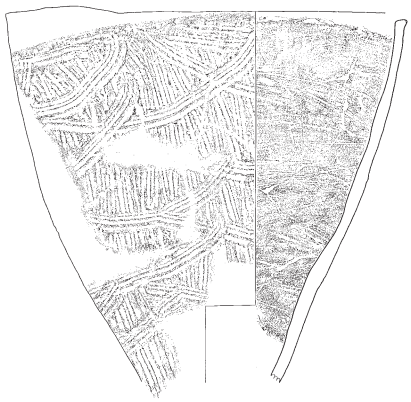
第３図　縄文早期　土器分類図（１）

第Ⅴ類土器		器形は，口縁部が直行ないしやや内弯するもので，口唇部は平坦で内傾する。 文様は，数条の短い貝殻条痕や沈線で，鋸歯状の文様を施すものである。本遺跡では，数点の出土のみである。
第Ⅵ類土器		器形は，口縁部が大きく外反し，胴部が膨らみ底部へ向かってすぼまる。 文様は，原体をほぼ土器全面に回転させて施文するもので，口縁内面にも施文が及ぶものもある。また，山形押型文と楕円押型文があるが，本遺跡では楕円押型文が多い。
第Ⅶ類土器		器形は，口唇部が大きく外反し，胴部で屈曲してすぼまりながら底部へ至るものである。底部は上げ底のものが出土している。 文様は，外面及び口縁部内面に押型文，撚糸文，条痕文等を施す。器壁は薄く，器面調整は丁寧なナデ調整で，胎土には多くの金雲母を含む。
第Ⅷ類土器		器形は，口縁部は外反するが，口縁端部が肥厚するものとしないものがある。小片の出土であり，全体的な器形は定かでない。 文様は，口縁部・頸部・胴部の３帯構成である。沈線文・刺突文・刻目突帯文・縄文・結節縄文等で構成される。妙見・天道ケ尾式土器を含む平栫様式の土器である。

第４図　縄文早期　土器分類図（２）

第Ⅸ類土器	Ⅸ類a Ⅸ類b 	器形は，口縁部がラッパ状に大きく外反し，頸部でくびれ，胴部はやや張り底部へとすぼまる。 文様は，口縁部・胴部の２帯構成である。口縁部から頸部にかけては，沈線や刺突を施す。胴部は網目状撚糸文を縦方向に施し，左右に空白を空けて繰り返している。そして，横方向に３～８本の沈線が入る（Ⅸ類a）。 口縁部がやや内湾気味になり，文様は，沈線の区画内に撚糸文・縄文を施すもの（Ⅸ類ｂ）がある。 Ⅸ類ｂの中には，口縁部の連点文が貝殻腹縁刺突のものもある。内外面の調整は，ほとんどが工具ナデ後ナデ調整である。
第Ⅹ類土器		器形は，口縁部は外反し，頸部でくびれ，胴部はやや張り底部へとすぼまる。 文様は，口縁部・胴部の２帯構成である。口縁部にかけて貝殻連続刺突文や沈線文，胴部は貝殻条痕や条線を施す。内外面の調整は，ほとんどが工具ナデ後ナデ調整である。

第５図　縄文早期　土器分類図（３）

第Ⅺ類土器		器形は，口縁部は外反し，頸部でくびれ，胴部はやや張り底部へとすぼまるものと直口する口縁でバケツ状底部へとすぼまる器形のものがある。 文様は，口縁部から底部まで１帯構成である。貝殻腹縁による条線文を施し，多様性に富んでいる。条線文は波状を呈するものが多いが，直線のものもある。外側の口縁部下に，縦位あるいは横位に短突帯や瘤状突帯を施す。突帯はナデと貼り付けているものがあり，いずれも貝殻による刻目がある。内面の調整は，ナデ及び工具ナデである。 荒園遺跡出土の苦浜式土器は，胎土に砂礫をかなり含むため，剥落が多く見られる。
第Ⅻ類土器		ナデ調整等を行う無文土器である。 器形から塞ノ神式土器か苦浜式土器に含まれるものと考えられる。
第ⅩⅢ類土器		器形は，口縁部が直行し，径の小さな底部へ向けて直線的にすぼまるものである。 文様は，貝殻腹縁による条痕が主で，縦方向の条痕の上に曲線文を描く。内面の調整が条痕によるものもある。

第６図　縄文早期　土器分類図（４）

第３表　早期石器石材分類表

石材	分類	特　　徴
黒曜石	ＯＢⅠ	不純物を多く含み，光を通すものや不純物が均一で，基質は黒色～アメ色を呈するもの。 また，不純物が不均一に入り径0.5～１mm程度の石英質の不純物を含むもの。基質はアメ色を呈するものが多いが，まれにオリーブ灰色～黒色を呈する。三船
	ＯＢⅡ	不純物を少量あるいはほとんど含まず，透明度が高い。アメ色～黒色を呈する。桑ノ木津留
	ＯＢⅢ	不純物をほとんど含まず，良質。青灰色を呈し，透明度は低い。針尾
	ＯＢⅣ	不純物をほとんど含まず，良質。黒色でガラス質の光沢を有する。腰岳
	ＯＢＶ	不純物をほとんど含まず，良質。乳白～灰色を呈し，やや透明感がある。姫島
	ＯＢⅥ	黒色でほとんど光を透過せず，透明感がないもの。わずかに不純物を含む。上牛鼻
	ＯＢⅦ	不純物を含まないかわずかに含むもので基質が黒灰色を呈するもの。ＯＢⅦ－Ａ また，不純物を含まないかわずかに含み，基質が灰色～オリーブ灰色を呈するもの。ＯＢⅦ－Ｂ
安山岩	ＡＮ	黒灰色を主体に色調は様々で，緻密なものや多孔質のものがあり，共通して斑晶が目立つ。
チャート	ＣＨ	黒灰・灰・青灰色。油脂光沢があり，黒色・灰色・白色の筋が入る。
玉髄	ＣＣ	赤褐色あるいは明黄褐色で硬質。節理面に結晶構造が残存するものがあるが，ほとんどが不純物を含まず硬質かつ良質で光沢をもつ。メノウ，鉄石英を含む。また，灰白・乳白色。不純物をほとんど含まず硬質。筋状か斑状に黒～灰色の色調を含むもの。
頁岩	ＳＨ	黒～暗灰色。硬質で緻密なものや，節理が発達するものなど様々である。
ホルンフェルス	ＨＦ	黒灰～青灰色。やや粒子が粗く，節理が発達し層状に剥落するもの。
水晶	ＣＲ	基質が透明もしくは白色で透明感があり，良質なものや，基質が白色でやや粗質なもの。
花崗岩	ＧＲ	石英・カリ長石・雲母・角閃石・輝石などを主成分鉱物として含む。
珪岩		石英質に再結成したチャート。
珪質頁岩		珪質・緻密・堅硬な堆積岩で，しばしば美麗な葉理が発達して縞状の組織を有する。また，泥質岩が珪化作用を受けて生成されたものが多い。
シルト質頁岩		淡黄色～淡灰色を呈し，内部に節理面が見られる。砕屑性堆積岩の一種で，シルトの砕屑粒子を主成分とする。

第４表　Ⅵ層出土石器組成表

器種	ＯＢⅠ	ＯＢⅡ	ＯＢⅢ	ＯＢⅣ	ＯＢＶ	ＯＢⅥ	ＯＢⅦ	ＡＮ	ＣＨ	ＣＣ	ＳＨ	ＨＦ	ＣＲ	ＧＲ	ＳＡ	珪質頁岩	シルト質頁岩
石鏃	12	8	35	6	89	3	1	118	16	13	3	3	2			28	5
磨製石鏃												4					
異形石器								1									1
尖頭器			1			1		1		1		1					
石匙								9				2					
スクレイパー			1		2			11	1		1	2					
抉入石器				1	1			2		1							
彫器		1															
石錐			1		3			3									
楔形石器		1			3		1	19	1		2	1				7	
二次加工剥片		1	2		9			33	2	2	3	2	1			8	
微細痕剥離痕剥片			1		2			6	1			1					
使用痕剥片			2		1			3									
目的剥片未製品																	
石核（コア）	1		2	2	5	1		3		6						6	
残核											1						
磨製石斧											1	6					
打製石斧								9			1	7					
礫器								1									
磨・敲石								14						19	33		
磨石								15						5	15		
敲石															2		
砥石															5		
石皿								1						15	23		
合計	13	11	45	9	115	5	2	249	21	23	12	29	3	39	78	49	6

第５表　Ⅶ層出土石器組成表

器種	ＯＢⅠ	ＯＢⅡ	ＯＢⅢ	ＯＢⅣ	ＯＢＶ	ＯＢⅥ	ＯＢⅦ	ＡＮ	ＣＨ	ＣＣ	ＳＨ	ＨＦ	ＣＲ	ＧＲ	ＳＡ	珪質頁岩	シルト質頁岩
石鏃	1		3	1	7			4	6	34	1					4	
磨製石鏃												1					
異形石器				1													
尖頭器								1									
石匙											1						
スクレイパー								3		3							
抉入石器																	
彫器																	
石錐										2							
楔形石器								1		1						1	
二次加工剥片			1	1	1			2		2							
微細痕剥離痕剥片																	
使用痕剥片								1		1							
目的剥片未製品										1							
石核（コア）								2	1	2						2	
残核																	
磨製石斧																	
打製石斧																	
礫器								2							1		
磨・敲石								2						3	2		
磨石														2			
敲石																	
砥石															1		
石皿								2						2			
合計	1	0	4	3	8	0	0	20	7	46	2	1	0	7	4	7	0

第３節　層序

荒園遺跡は住宅地であったことや,長年の耕作の影響で,一部に削平・盛土・撹乱等の影響が見られた。第２地点は県道大崎輝北線に隣接する台地上部から緑辺部にあたり，第３地点は谷を囲むように伸びた尾根と台地の緑辺部にあたる。表土が厚くⅡ層以下の残存状況は比較的良好でⅡ層は黒色土で１ｍ以上の厚さがあり,色調の違いで６層に細分した。

包含層や遺構・遺物の年代を把握する手掛かりの１つとなる火山灰等の詳細については,次のとおりである。

荒園遺跡の基本層序

Ⅰ　層：表土（造成土及び耕作土）である。しまりがあり硬い。

Ⅱａ層：黒色腐植土で，３㎜～５㎜程度の白石軽石を多く含む。中世の包含層である。

Ⅱｂ層：暗黒褐色土で,微粒の赤褐色の斜長石を含む。中世から弥生時代の包含層である。

Ⅱｃ層：黒茶褐色土で，１㎜以下の黄褐色粒子含む。古墳時代・弥生時代の包含層である。

Ⅱｄ層：黒褐色土で0.５㎜程度の褐色粒子を多く含む。上下層に比べてわずかに明るい。

Ⅱｅ層：黒茶褐色土で，１㎜以下の黄褐色粒子含む。古墳時代から縄文時代晩期の包含層である。

Ⅱｆ層：暗黒褐色土で光沢があり,保湿性に富み,わずかに粘りがある。 縄文時代後期の包含層である。

Ⅲ　層：褐色土で，１㎝～２㎝程度の黄色軽石粒（池田火山灰：約6,300年前の池田カルデラ起源の噴出物）含む。粘りはないが,硬い粒子を多く含み,しまりがある。

Ⅳ　層：淡黄褐色土で,アカホヤ火山灰（約7,300年前の鬼界カルデラ起源の噴出物）の堆積層。

Ⅴ　層：黄橙色火山灰でアカホヤ火山灰（約7,300年前の鬼界カルデラ起源の噴出物）を含む層である。

Ⅵ　層：灰黄色褐色土である。縄文時代早期の包含層。

Ⅶ　層：黒褐色土である。縄文時代早期の包含層。

Ⅷ　層：淡黄褐色火山灰で薩摩火山灰層（Ｐ14：約12,800年前の桜島起源の噴出物）を含む層である。

Ⅸ　層：暗褐色粘質土である。旧石器時代の包含層である。

Ⅹ　層：黒褐色粘質土である

ⅩⅠ　層：黒褐色粘質土で「チョコ層」と言われる層である。

ⅩⅡ　層：黒褐色粘質土である。

ⅩⅢ　層：浅黄橙色土で硬質である。

ⅩⅣ　層：褐色土で硬質である。

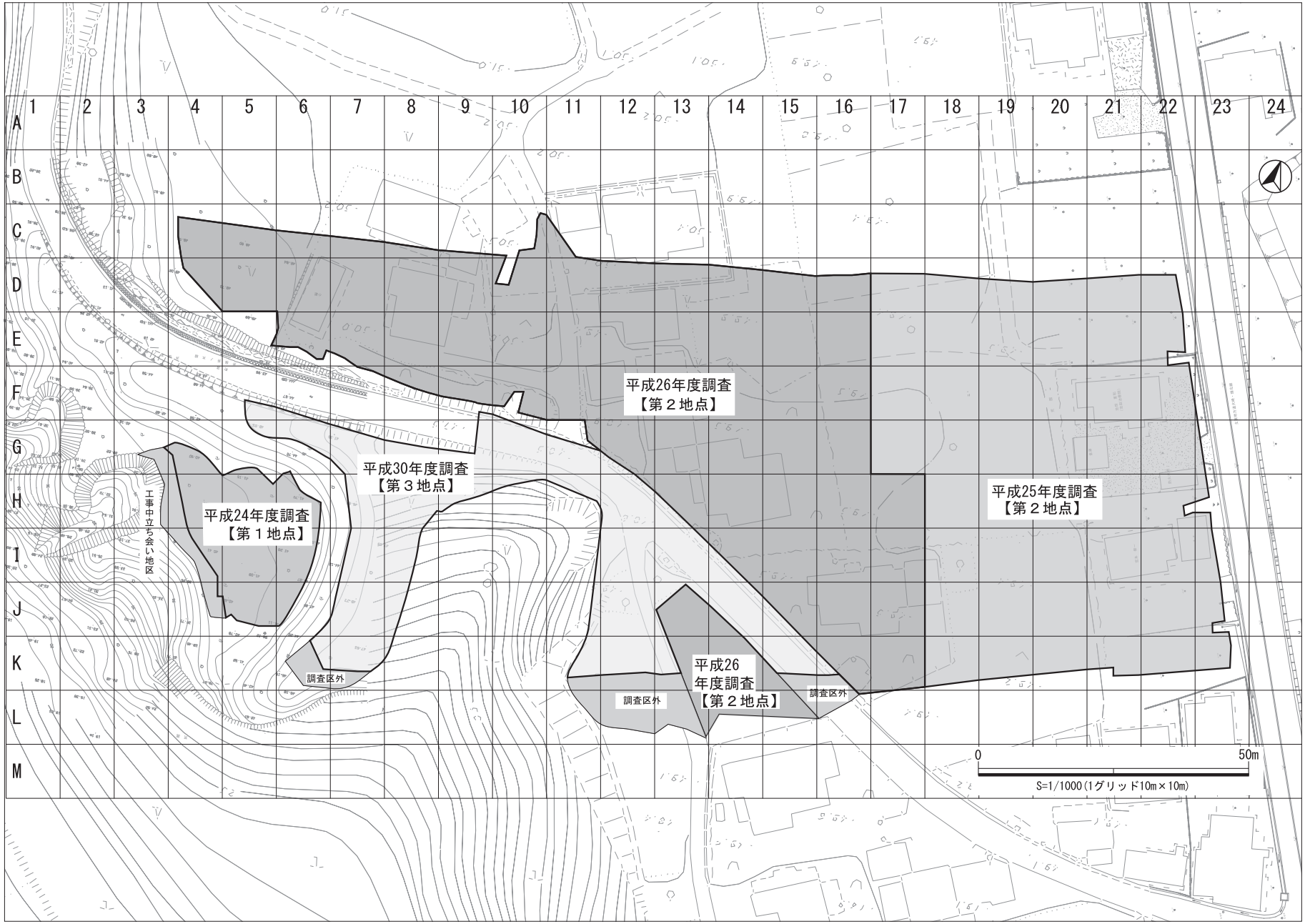
ⅩⅤ　層：淡黄色土で砂礫を含む,二次堆積シラス。ＡＴ（シラス）と呼ばれる約26,000～29,000年前の姶良カルデラ起源の火山灰層。

基本土層,遺物包含層,火山灰層の堆積状況の詳細は下表（第６表）のとおりである

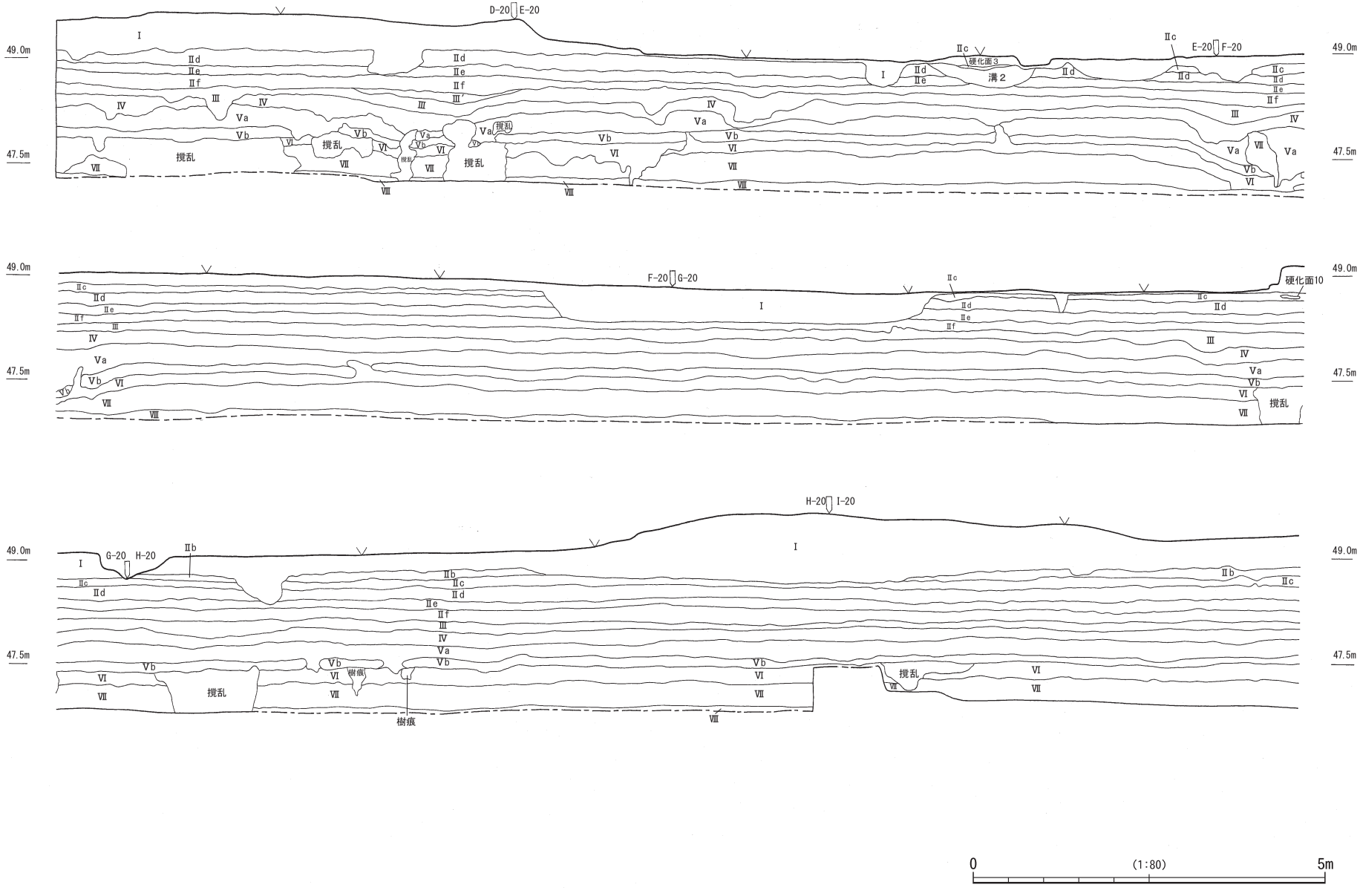
第６表　荒園遺跡第２・３地点　基本土層

Ⅰ　層	灰黒色土（表土）	
Ⅱａ層	黒色土（白石軽石含む）	中世
Ⅱｂ層	暗黒褐色土	弥生～中世
Ⅱｃ層	黒茶褐色土（1㎜以下の黄褐色粒子含む）	弥生～古墳
Ⅱｄ層	黒褐色土（0.5㎜程度の褐色粒子含む）	
Ⅱｅ層	黒茶褐色土（１㎜以下の黄褐色粒子含む）	縄文晩期～古墳
Ⅱｆ層	暗黒褐色土	縄文後期
Ⅲ　層	褐色土（黄色軽石粒：池田降下軽石含む）	
Ⅳ　層	淡黄褐色土（アカホヤ二次堆積）	
Ⅴ　層	黄橙色火山灰（アカホヤ火山灰）	
Ⅵ　層	灰黄褐色土	縄文早期
Ⅶ　層	黒褐色土	縄文早期
Ⅷ　層	淡黄褐色火山灰土（薩摩火山灰層）	
Ⅸ　層	暗褐色粘質土	旧石器
Ⅹ　層	黒褐色粘質土	
ⅩⅠ　層	黒褐色粘質土	
ⅩⅡ　層	黒褐色粘質土	
ⅩⅢ　層	浅黄橙色土,硬質	
ⅩⅣ　層	褐色土,硬質	
ⅩⅤ　層	淡黄色土（二次堆積シラス）	

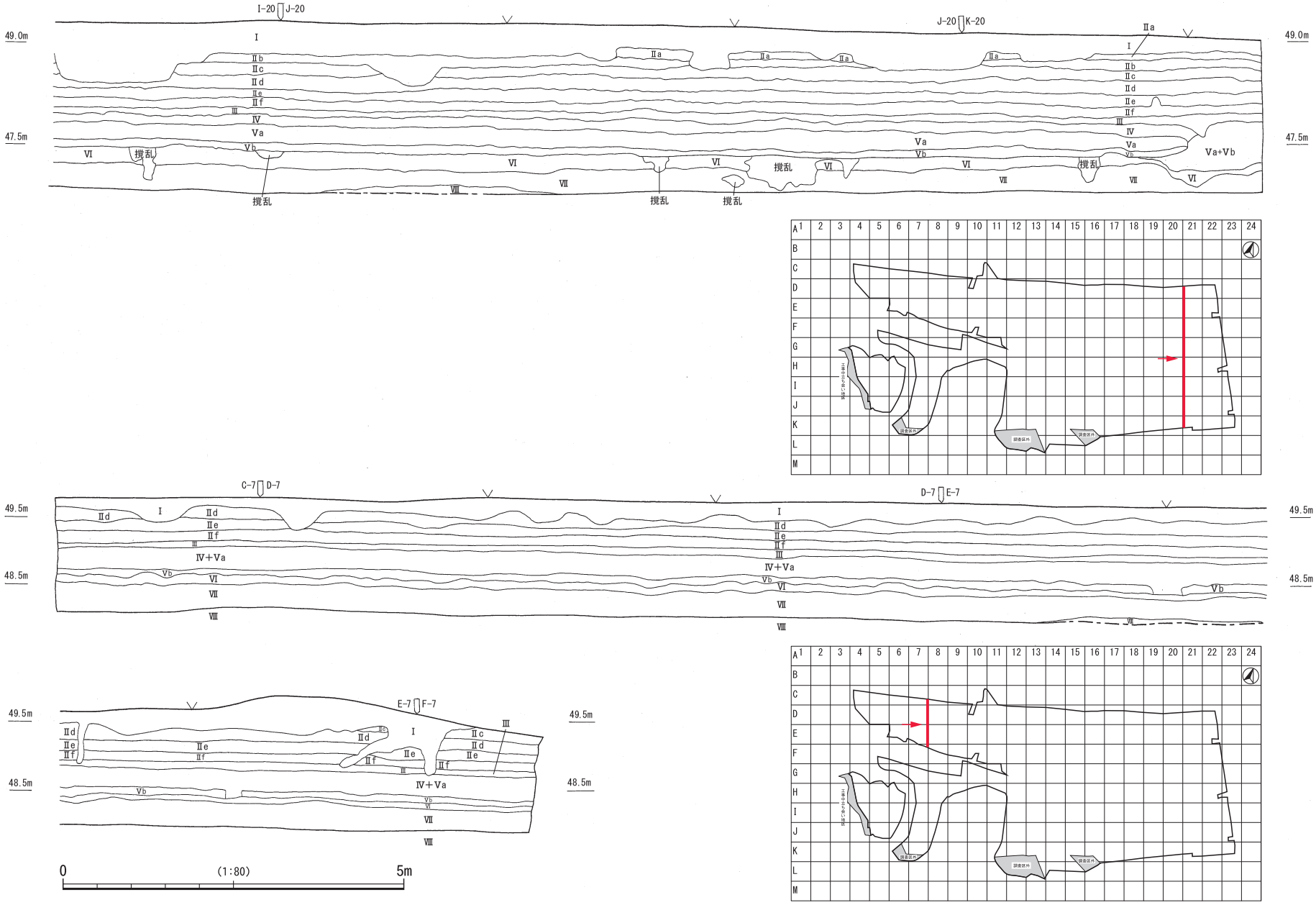
※火山灰の年代については，町田洋　新井房夫著東京大学出版会　2003 『新編火山灰アトラスー日本列島とその周辺ー』(p108～110）から引用した。なお，年代は放射性炭素年代測定法で算出され，暦年較正した年代である。



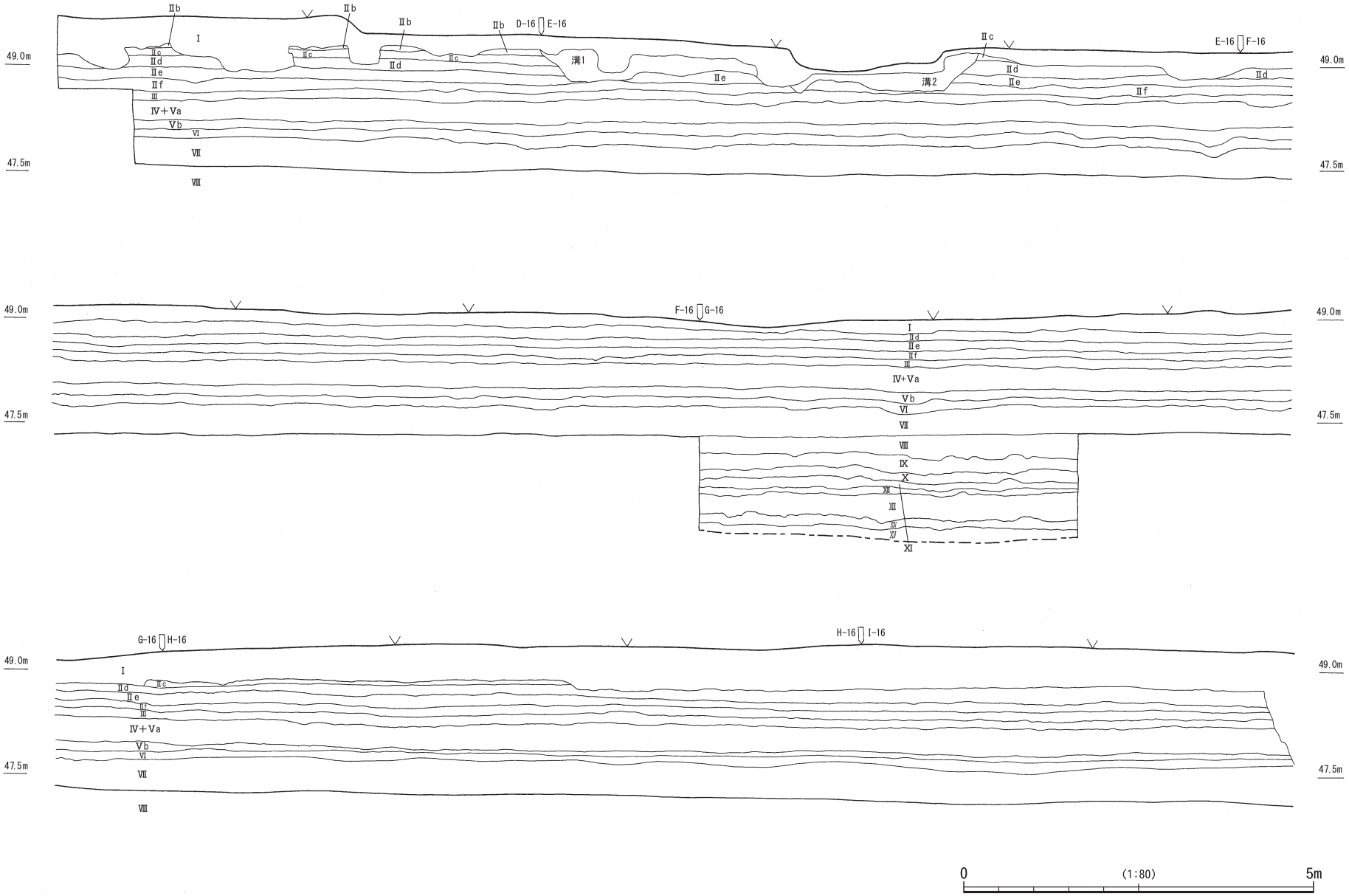
第７図　年度別調査範囲及び周辺地形・グリッド配置図



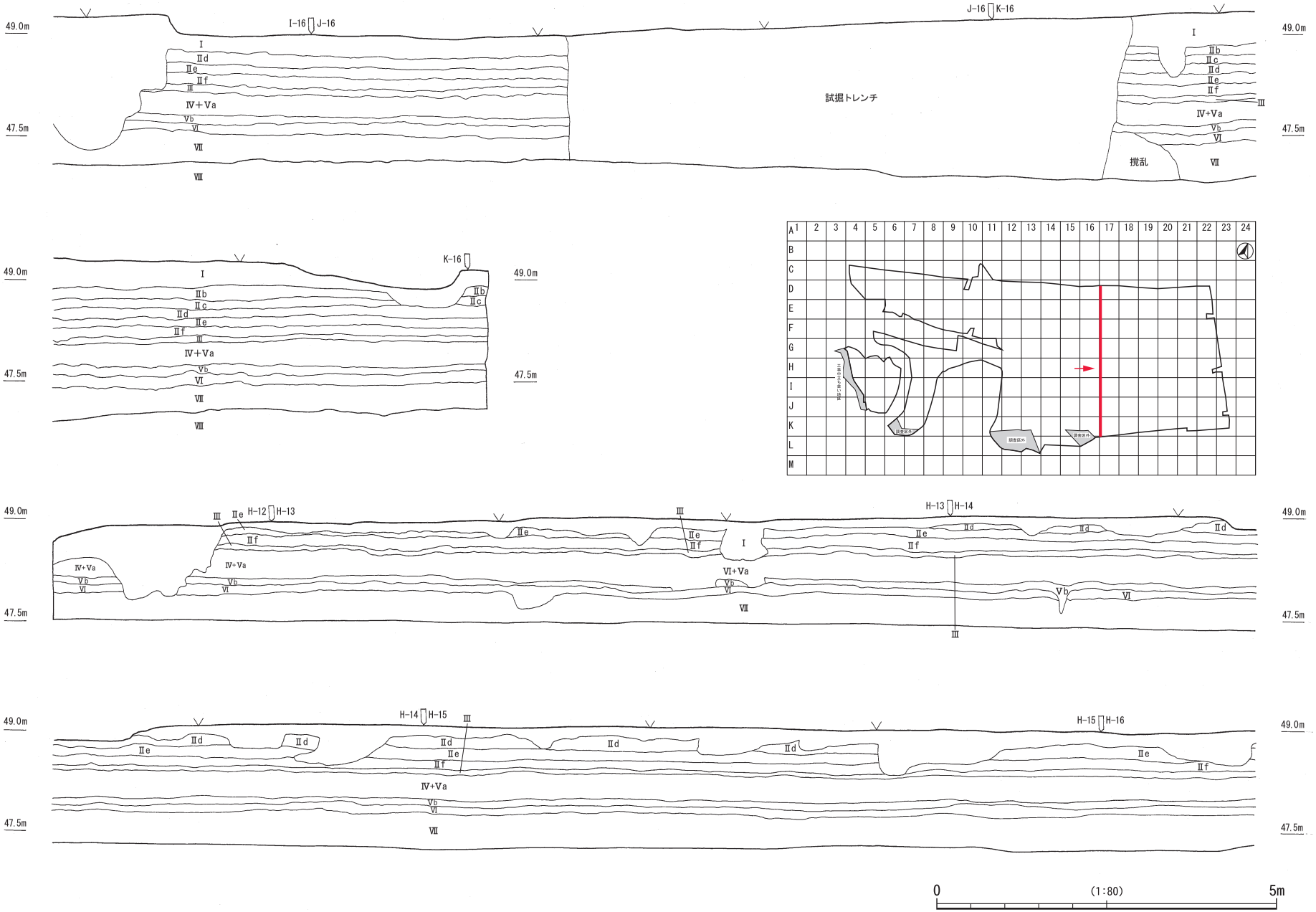
第８図　土層断面図１


I-20
J-20
K-20
49.0m
47.5m
I
IIa
IIb
IIc
IId
IIe
IIf
III
IV
Va
Vb
Va+Vb
VI
VII
VIII
攪乱
C-7
D-7
E-7
F-7
49.5m
48.5m
IV+Va
0
(1:80)
5m

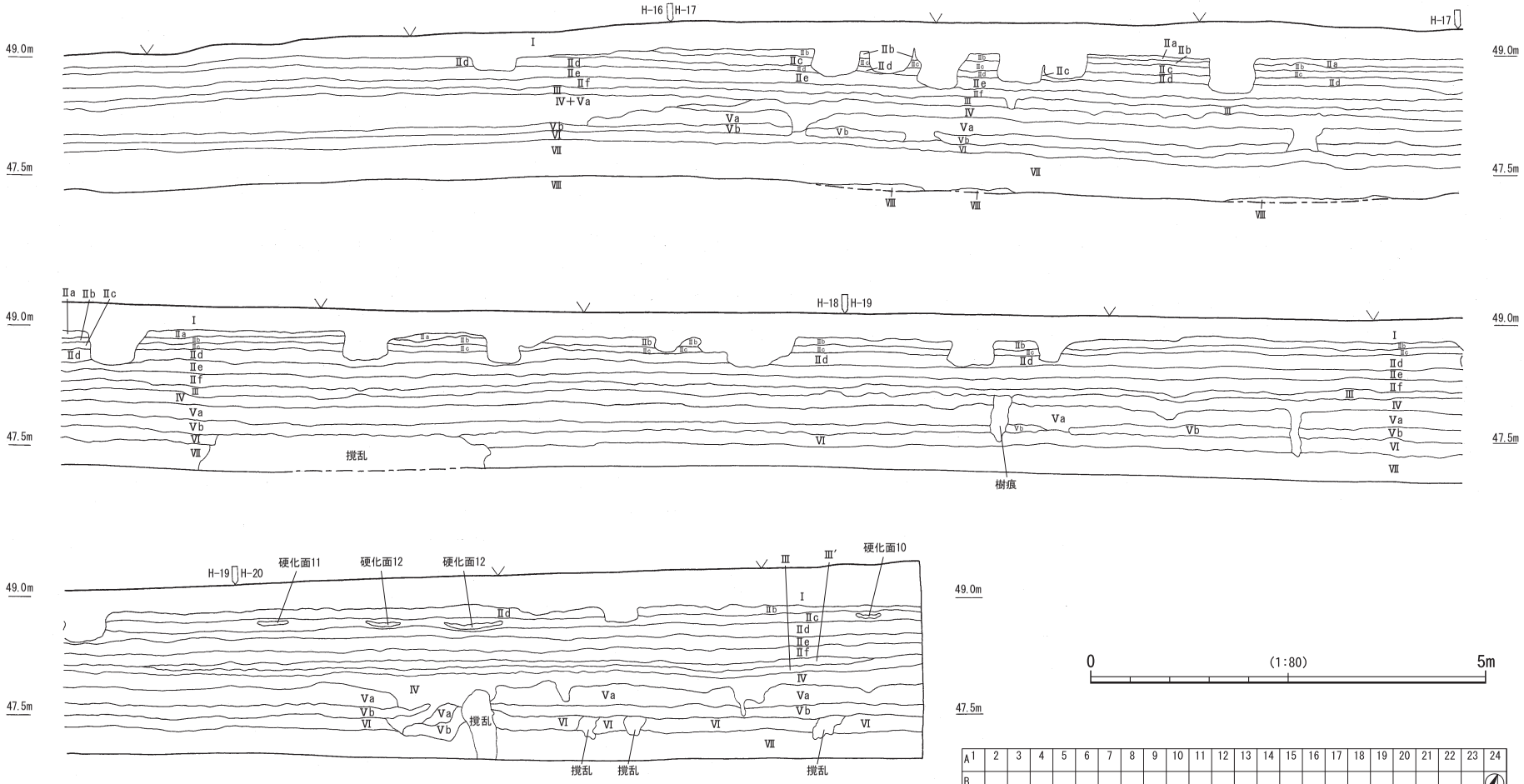
第９図　土層断面図２


49.0m
47.5m
D-16
E-16
F-16
G-16
H-16
I-16
溝1
溝2
I
IIb
IIc
IId
IIe
IIf
III
IV+Va
Vb
VI
VII
VIII
IX
X
XI
XII
XIII
XIV
XV
0
(1:80)
5m

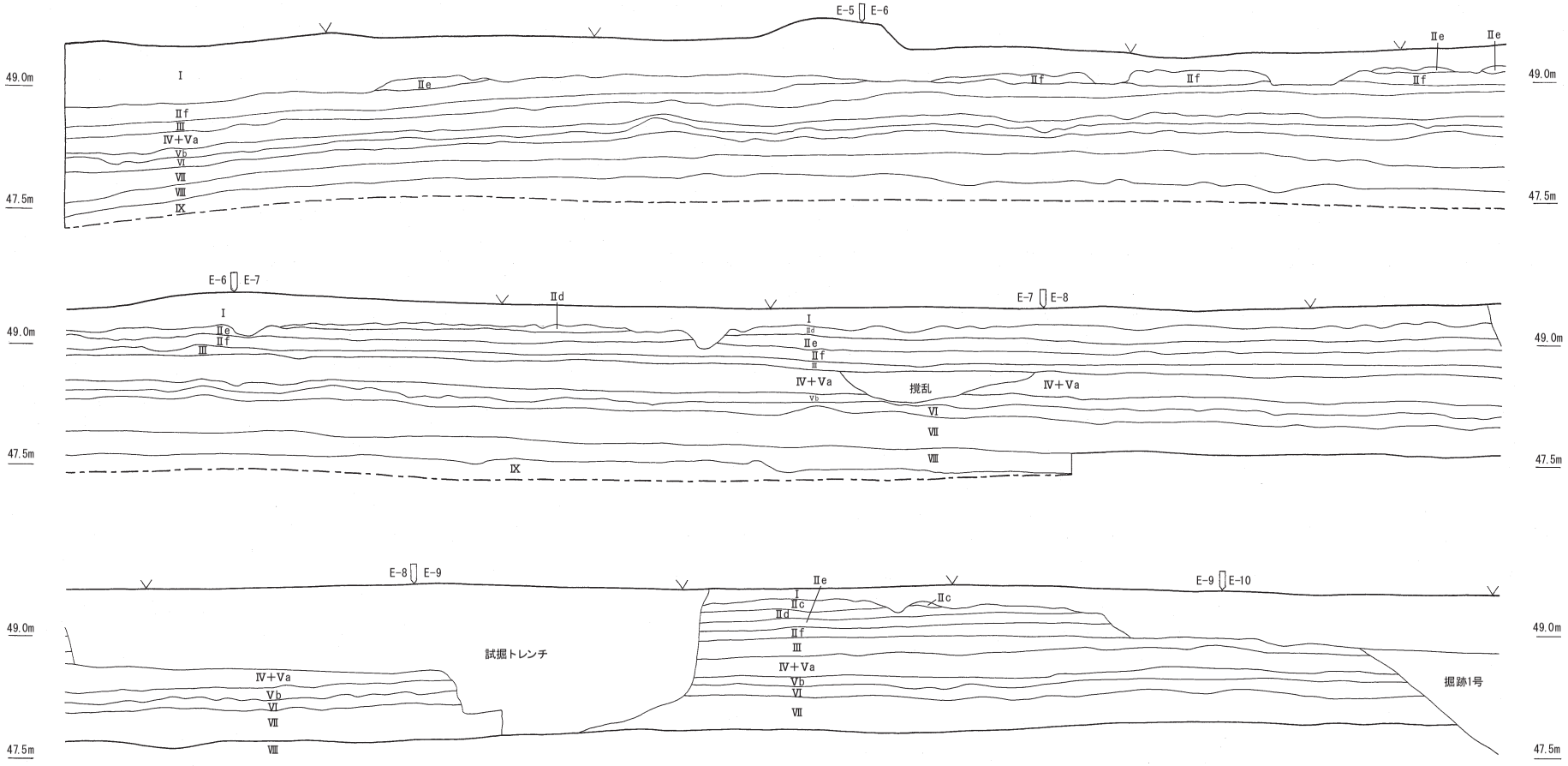
第 10 図　土層断面図３

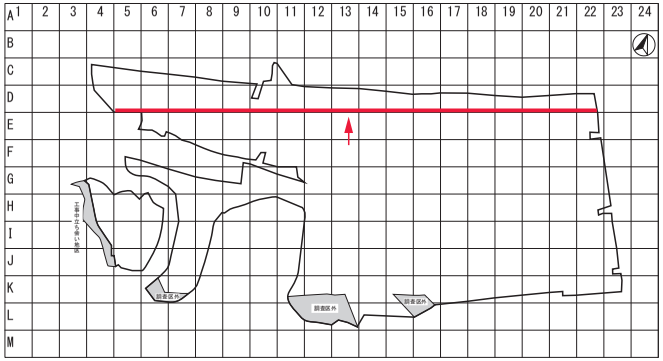

I-16 J-16
J-16 K-16
K-16
H-12 H-13
H-13 H-14
H-14 H-15
H-15 H-16
49.0m
47.5m
試掘トレンチ
撹乱
I
IIb
IIc
IId
IIe
IIf
III
IV+Va
Vb
VI
VII
VIII
A 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24
B C D E F G H I J K L M
0 (1:80) 5m

第 11 図　土層断面図 4



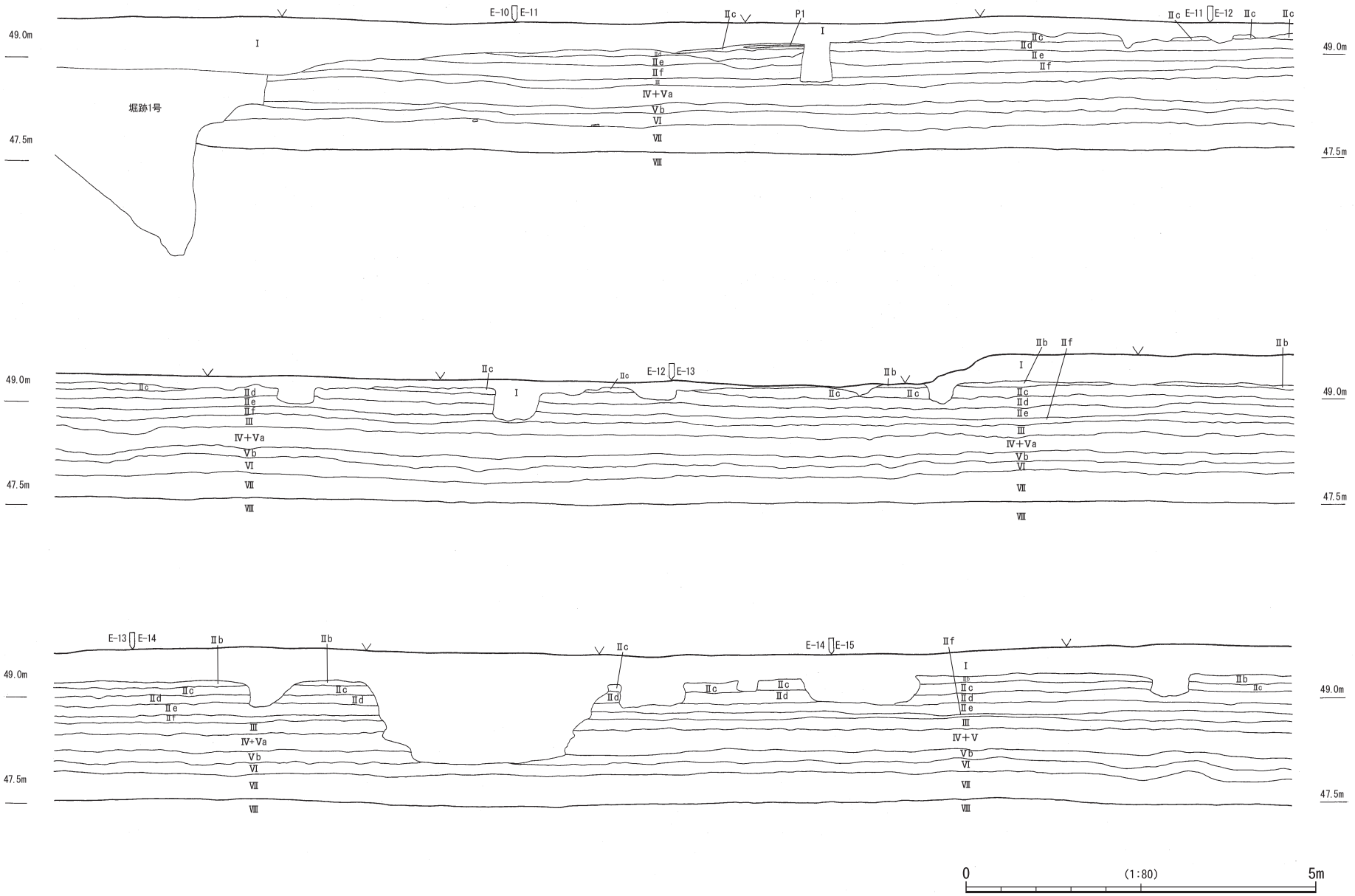
第 12 図　土層断面図５



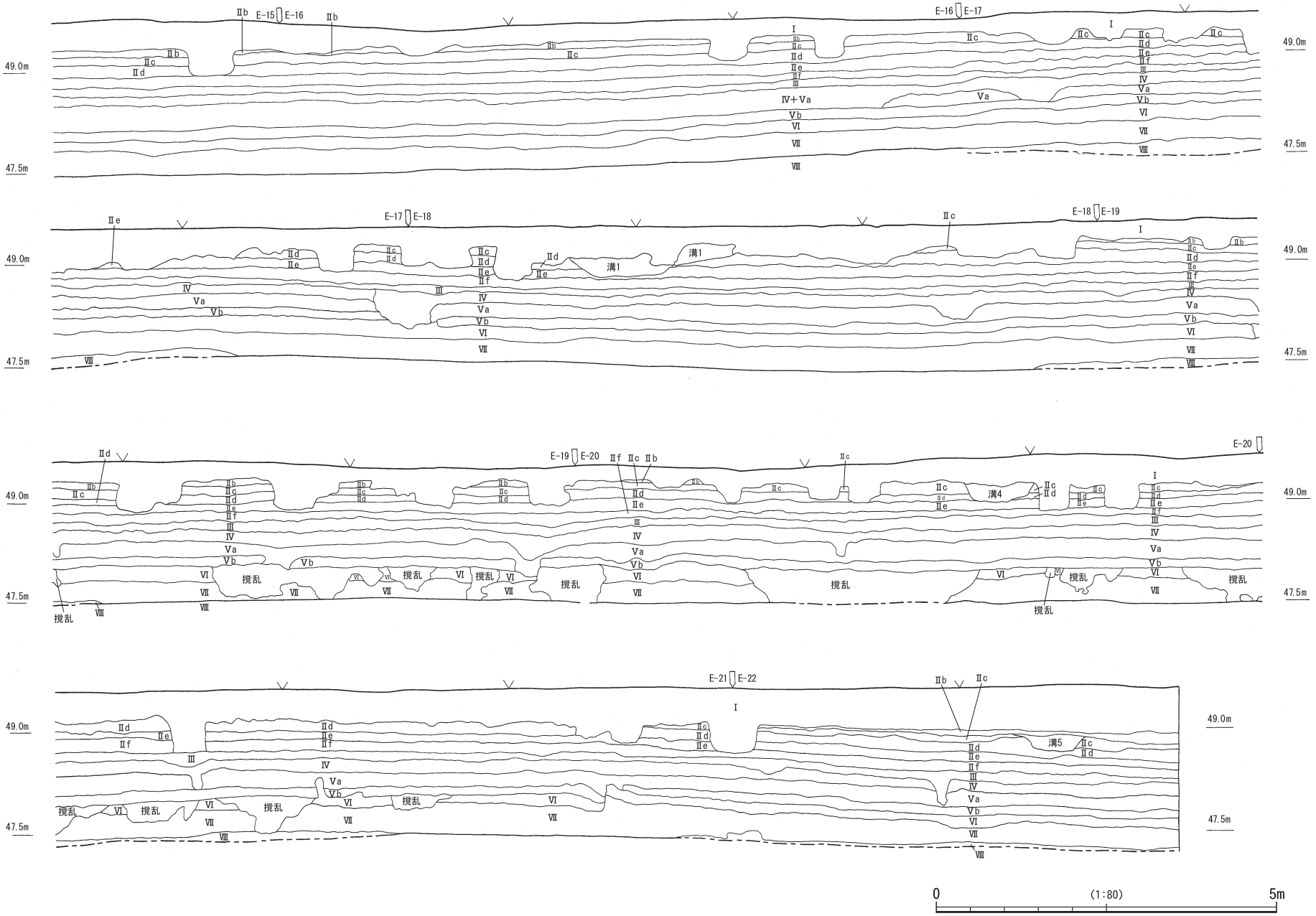


0 (1:80) 5m

第 13 図　土層断面図６


49.0m
47.5m
E-10
E-11
E-12
E-13
E-14
E-15
P1
堀跡1号
I
II b
II c
II d
II e
II f
III
IV+Va
IV+V
Vb
VI
VII
VIII
0
(1:80)
5m

第 14 図　土層断面図 7



第 15 図　土層断面図 8

第Ⅳ章　発掘調査の成果

第１節　旧石器時代の調査

１　調査の概要

荒園遺跡第２・３地点においては，旧石器時代に該当する遺物は確認されていなかったが，縄文時代早期の調査の終了後，調査区内に旧石器時代確認トレンチを10か所設定して確認を行った結果，包含層がＣ・Ｄ－４～７区にかけて存在することが判明した。全面調査においてⅨ層の暗褐粘質土から小型のナイフ形石器，三稜尖頭器の基部及び細石刃核・細石刃や数百点の黒曜石を中心とするチップ類が検出された。また，安山岩等の礫も相当数検出されたが，礫群となるような分布状況は見られなかった。なお，これらの礫については現場で取り上げ後に観察を行ったが，使用の痕跡や被熱の痕はみられなかった。

石器の水平分布をみると，ナイフ形石器と三稜尖頭器は個別に出土しているが，細石器文化期には，ブロックが２つ存在していることがわかる。ブロック１は，Ｃ－４区の西側緩斜面にあり，ブロック２はＣ－５・６区を中心とする。ブロック１は黒曜石Ⅰとした三船産黒曜石と黒曜石Ⅱの桑ノ木津留産の黒曜石と水晶を含むブロックであり，ブロック２は黒曜石Ⅰを中心とするブロックである。両ブロックともに黒曜石Ⅰを多く含むが，石材構成がやや異なり，小集団が同時期に別のブロックを形成したと捉えるより，時期を違えて形成されたと解釈したい。また，黒曜石と水晶の石核は出土せず，ホルンフェルスの石核が出土しているが，この石核から剥出された細石刃・チップが見つからず，これも単独の時期の可能性がある。

このため，この台地の東側の南北の谷を見渡せる場所を，三稜尖頭器と小型ナイフを用いた時期と，細石刃文化期に３回の計５回は利用したものと考えられる。狩猟キャンプ地として位置づけられる。

２　遺物（石器）（第 16 図　1 ～ 22）

遺物は，小型のナイフ形石器１点，三稜尖頭器１点，細石刃核１点と 41 点の細石刃及び約 200 点の剥片・チップ等が検出された。

１は，先端を欠く一側縁加工の頁岩製の小型のナイフ形石器である。縦長剥片をそのまま使用して，基部調整は行われていない。打面・打点を残している。右側縁の角度は大きく，ブランティングした方の側縁が角度は小さく，先端利用の可能性が高い。２は，三船産の黒曜石を石材とした小型の三稜尖頭器の基部である。

３～ 20 は細石刃である。３～６は頭部，７～ 18 が中間部，19，20 が尾部である。

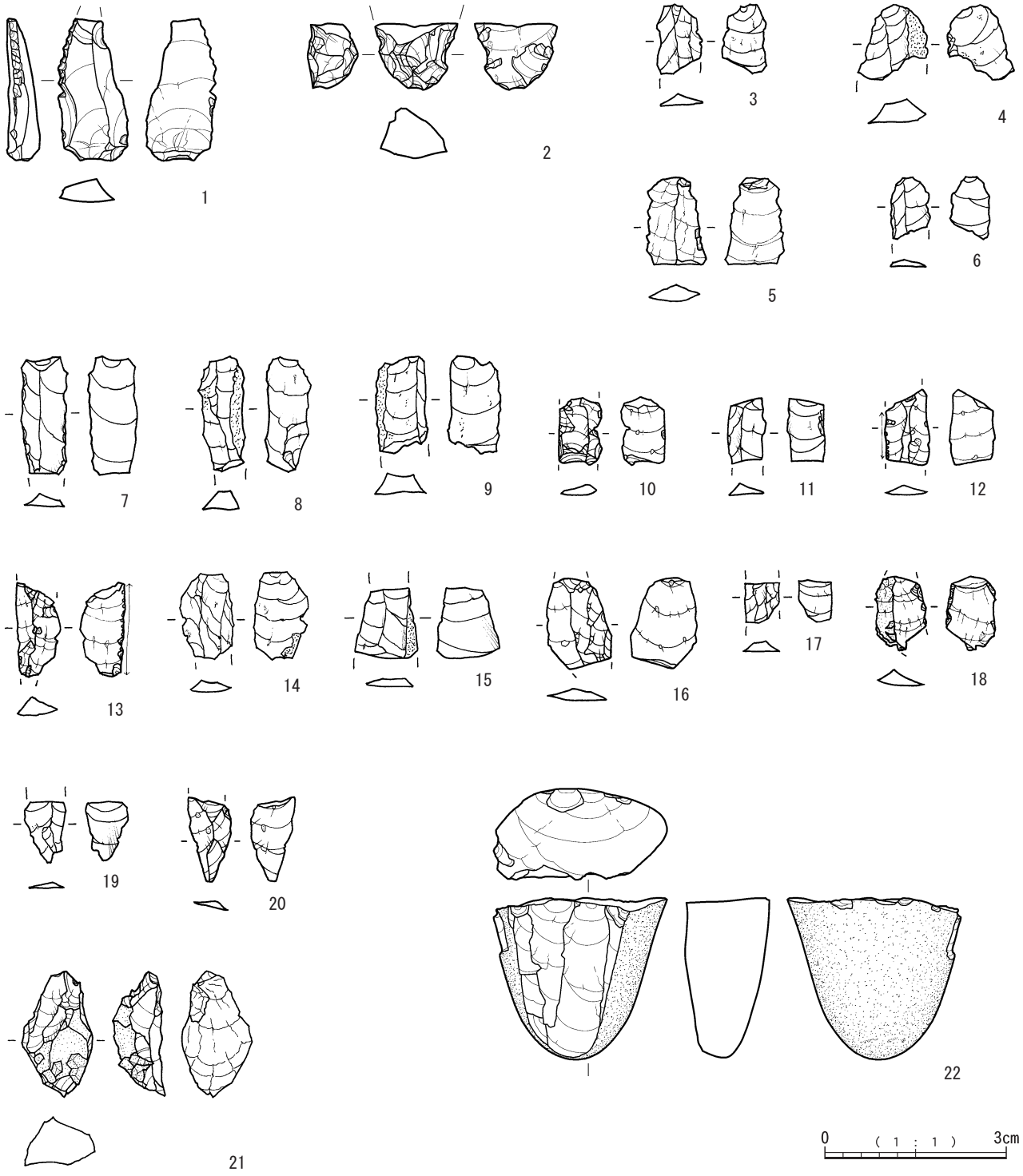
３，４，８，９，14，17，18，20 は三船産の黒曜石を石材とし，５，10，11，12，13，16，19 は桑ノ木津留産の黒曜石を石材とし，６，15，21 は水晶を石材とするものである。7 は珪質頁岩を石材とする。

７は両側縁ともに微細な剥離が見られ，12 は左側縁の短辺に，13 も左側縁だが長辺に微細剥離が見られる。15 は，水晶の貫入部分か礫皮の一部が残る。18 は右側縁に微細剥離が見られる。21 は数回の細石刃の剥出後に大きく剥離されたもので，調整剥片と考えられる。

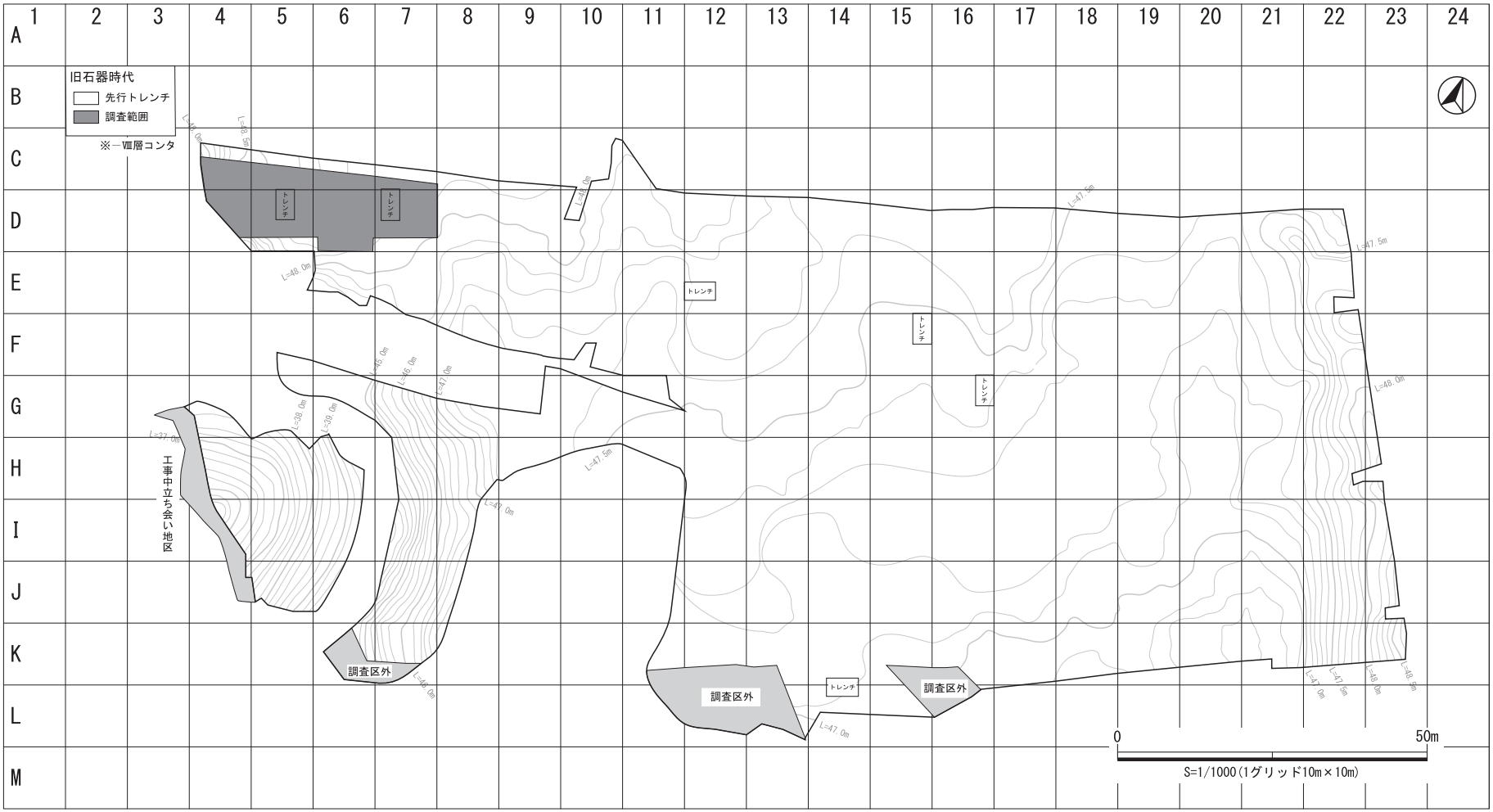
22 は，ホルンフェルスの円礫を素材とする畦原型の細石刃核である。自然礫を分割して打面を作り，打面調整は行わず，細石刃を作出している。観察できるもので６か所の樋状剥離が観察される。右側から，楕円形の長軸方向に剥離しようとしたがステップしたため，曲線の緩い部分に作業面を設定している。

最も多くのフレーク・チップは三船産の黒曜石であり，次いで桑ノ木津流産の黒曜石，水晶であり，腰岳産黒曜石や珪質頁岩の石材は少量ずつである。

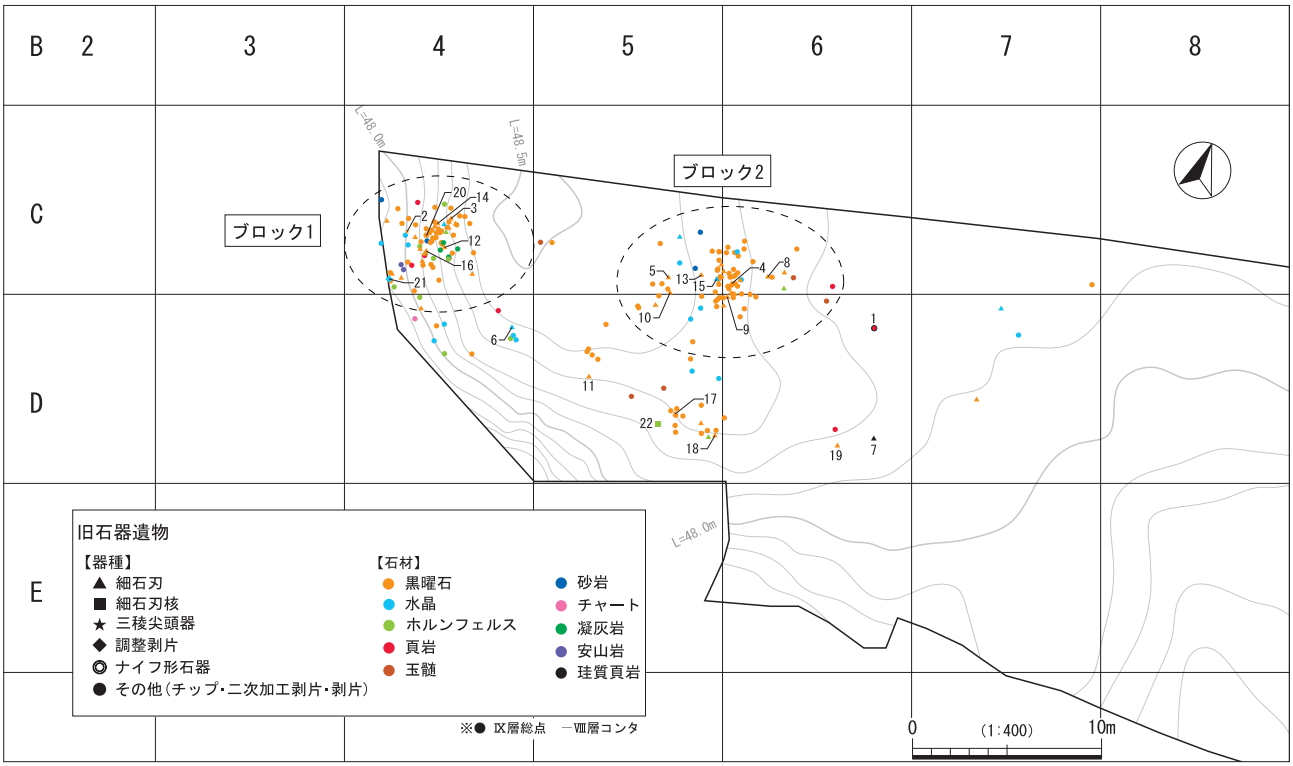
特に 22 の細石核に伴う細石刃やチップはほとんどない。また，図化した以外に，細石刃が 20 点ほどあり，これらのうち折断された頭部と尾部が７割を越え，その他は完形のものの長さや幅が小さいもので，それ以外の中間部を使用したことがうかがわれる。



第 16 図　旧石器時代　出土遺物



第 17 図　旧石器時代　調査範囲



第 18 図　旧石器時代　遺物出土状況図

第７表　旧石器時代石器観察表

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
16	1	ナイフ形石器	頁岩	D-6	Ⅸ	(2.35)	1.15	0.55	1.40	40574	欠損品
	2	三稜尖頭器	黒曜石Ⅰ	C-4	Ⅸ	(1.10)	(1.35)	1.10	1.06	38841	欠損品
	3	細石刃	黒曜石Ⅰ	C-4	Ⅸ	(1.10)	0.75	0.15	0.13	38416	頭部
	4	細石刃	黒曜石Ⅰ	C-6	Ⅸ	(1.15)	1.00	0.35	0.36	40570	頭部
	5	細石刃	黒曜石Ⅱ	C-5	Ⅸ	1.40	1.00	0.30	0.37	39339	頭部
	6	細石刃	水晶	D-4	Ⅸ	(0.95)	0.65	0.10	0.08	39343	頭部
	7	細石刃	珪質頁岩	D-6	Ⅸ	(1.95)	0.75	0.20	0.41	38833	中間部
	8	細石刃	黒曜石Ⅰ	C-6	Ⅸ	(1.85)	0.75	0.30	0.44	39214	中間部
	9	細石刃	黒曜石Ⅰ	D-6	Ⅸ	(1.50)	0.80	0.35	0.44	39224	中間部
	10	細石刃	黒曜石Ⅱ	C-5	Ⅸ	(1.10)	0.70	0.20	0.18	40567	中間部
	11	細石刃	黒曜石Ⅱ	D-5	Ⅸ	(1.05)	0.65	0.20	0.12	40563	中間部
	12	細石刃	黒曜石Ⅱ	C-4	Ⅸ	(1.20)	0.70	0.20	0.13	38851	中間部
	13	細石刃	黒曜石Ⅱ	C-5	Ⅸ	(1.55)	0.75	0.30	0.24	40535	中間部
	14	細石刃	黒曜石Ⅰ	C-4	Ⅸ	(1.40)	0.85	0.20	0.28	38415	中間部
	15	細石刃	水晶	C-5	Ⅸ	(1.15)	0.15	0.15	0.27	40537	中間部
	16	細石刃	黒曜石Ⅱ	C-4	Ⅸ	(1.15)	1.05	0.20	0.28	39669	中間部
	17	細石刃	黒曜石Ⅰ	D-5	Ⅸ	(0.65)	0.55	0.15	0.07	39976	中間部
	18	細石刃	黒曜石Ⅰ	D-5	Ⅸ	(1.20)	0.85	0.25	0.22	39254	中間部
	19	細石刃	黒曜石Ⅱ	D-6	Ⅸ	(1.00)	0.70	0.10	0.06	39981	尾部
	20	細石刃	黒曜石Ⅰ	C-4	Ⅸ	(1.40)	0.70	0.20	0.12	38411	尾部
	21	調整剥片	水晶	C-4	Ⅸ	2.05	1.25	0.80	1.60	39245	
	22	細石刃核	ホルンフェルス	D-5	Ⅸ	2.67	2.86	1.50	12.50	40531	畦原型

第２節　縄文時代早期の調査

１　調査の概要

遺跡の中心部である第２地点は，西端と東端の距離が180ｍで２ｍ程度の比高差であり中央部はほぼ平坦である。それに比して第２地点の南側の道路を隔てた第３地点は西側部分が南北に尾根状の複雑な地形を呈している。

また，第１地点（平成28年度報告）は東側になるほど高くなり，その傾斜は第３地点の尾根部へと続く地形である。第２・３地点の縄文時代早期の該当層は，Ⅴ層のアカホヤ火山灰層下のⅥ層の灰黄褐色及びⅦ層の黒褐色土であり，比較的安定していた。

検出された遺構は，集石遺構40基（集石１号～集石３号は，第１地点より検出されており，平成28年度に報告済），磨石の集積３基，安山岩の素材剥片の集積２基，土坑１基及び土器集中か所１か所，チップ等の集中したブロックが３か所であった。

遺物は，前平式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，桑ノ丸式土器，押型文土器，手向山式土器，平栫式土器，塞ノ神Ａ式土器，塞ノ神Ｂ式土器，苦浜式土器及び轟Ａ式土器等が出土している。

２　遺構

（１）集石遺構

検出された40基の集石の中で３基については，報告済のため，本報告書では集石４号から報告する。

集石遺構の分布は，第２地点の西側（エリア１）及び中央部北側（エリア２），調査区の中央部南側（エリア３）と第３地点西側斜面部分（エリア４）の４か所を中心に分布している。なお，集石の長軸・短軸の長さ，構成礫の質量，石材等のデーターについては，第８表に示す。

集石４号（第23図）

Ｉ－21区，調査区東端の標高約47ｍの地点で検出され，周辺には遺構は無く，遺物や礫の出土量は少ないエリアである。アカホヤ直下のⅥ層上面から検出され，亜円礫と亜角礫を中心としている。30個の石で構成され，安山岩19点，頁岩８点，花崗岩２点，砂岩１点で安山岩が圧倒的に多い。礫は，東西を長軸とする楕円状に分布するが，中央部は少ない。被熱して割れたと思われる磨石片が１点出土した。掘り込みや関連すると思われるその他の遺物は確認されなかった。

集石５号（第23図）

Ｄ－21区，調査区北東端で検出され，南西には集石６号が位置するが，他には遺構等は存在しない。アカホヤ直下のⅥ層上面から検出され，亜角礫を中心とする15個の礫で構成されていた。安山岩13個，頁岩１個，砂岩１個で安山岩が圧倒的に多く，出土状況は散在した状態で，まとまりはない。周辺からは，塞ノ神式土器や前平式土器が出土しており，距離的に近いものは塞ノ神Ａ式土器である。掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

集石６号（第23図）

Ｅ－20区，調査区北東端で検出され，北東10数ｍのところに集石５号が位置するが，他には遺構等は存在しない。Ⅵ層から検出され，亜円礫を中心とする24個の礫で構成されていた。安山岩８個，頁岩２個，砂岩６個，凝灰岩８個で，出土状況は散在した状態でまとまりはない。４号・５号と違い凝灰岩がみられる。周辺からは，塞ノ神Ａ式土器や石鏃が出土している。周辺に炭化物等はみられるが，被熱痕は確認されなかった。掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

集石７号（第23図）

Ｄ－17区，調査区北側中央部よりやや東側で検出され周辺に他の遺構等は存在しない。Ⅵ層から検出され，亜角礫を中心とする28個の礫で構成されていた。安山岩５個，頁岩１個，砂岩５個，凝灰岩15個，花崗岩２個で凝灰岩が圧倒的に多く，出土状況は，円形に分布するが，中央部は少ない。掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

集石８号（第24図）

Ｈ－15区，調査区中央部よりやや南側で検出され，他の遺構等は周辺には存在しない。アカホヤ直下のⅥ層から検出され，亜円礫を中心とする26個の礫で構成されていた。安山岩１個，頁岩10個，砂岩４個，凝灰岩11で凝灰岩の占める割合多い。出土状況は，散在的で東西に長く分布する。掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

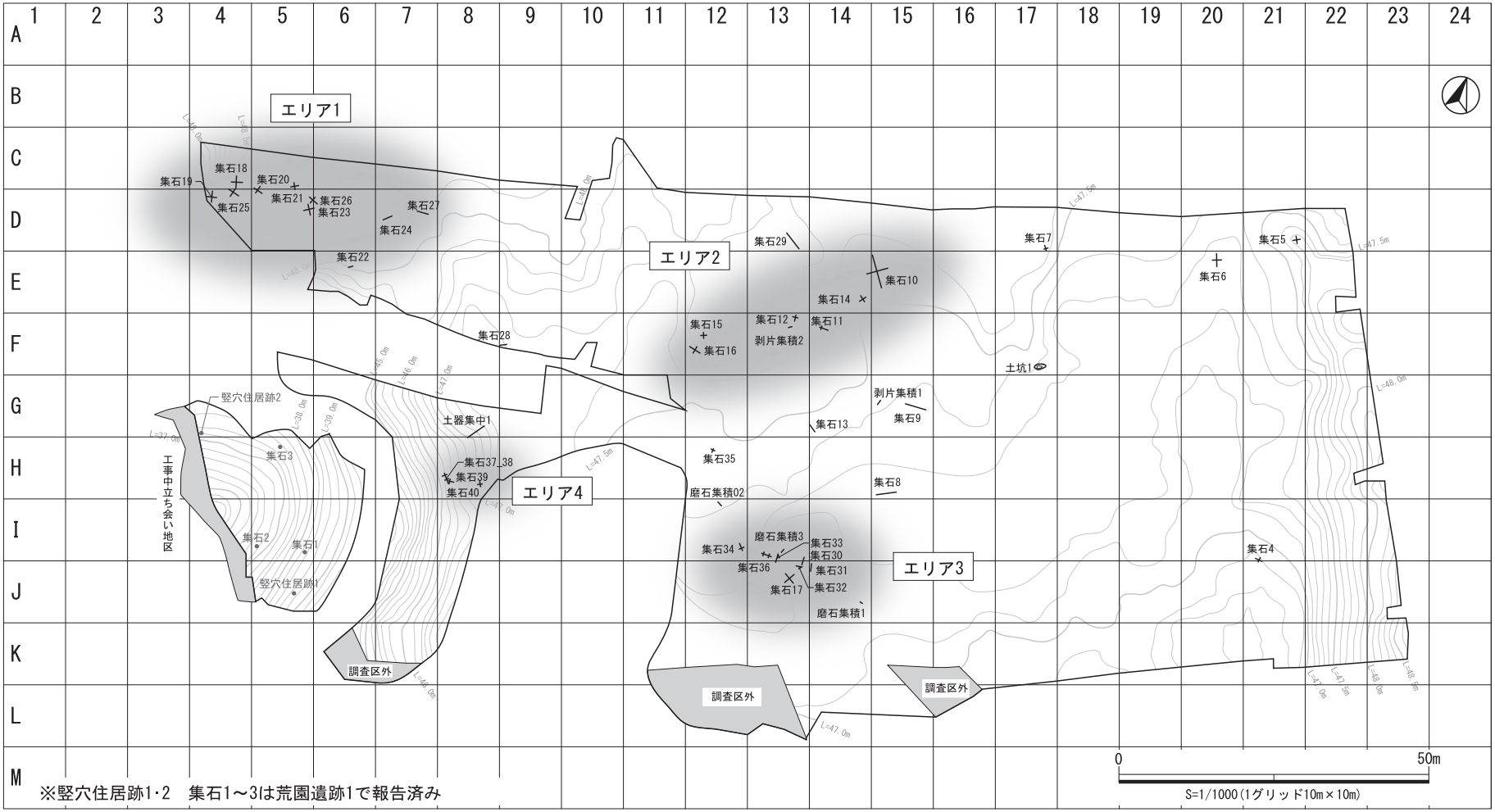
集石９号（第25図）

Ｇ－15区，調査区中央部の集石遺構等が集中するエリア２の南東側で検出された。周辺には集石遺構や剥片集積等が存在する。Ⅶ層から検出され，亜角礫を中心とする15個の礫で構成されていた。安山岩２個，頁岩７個，砂岩１個，凝灰岩４個，軽石１個で構成される。出土状況は，非常に散在的で東西に３ｍ以上の長さで分布する。掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

集石10号（第26図　23）

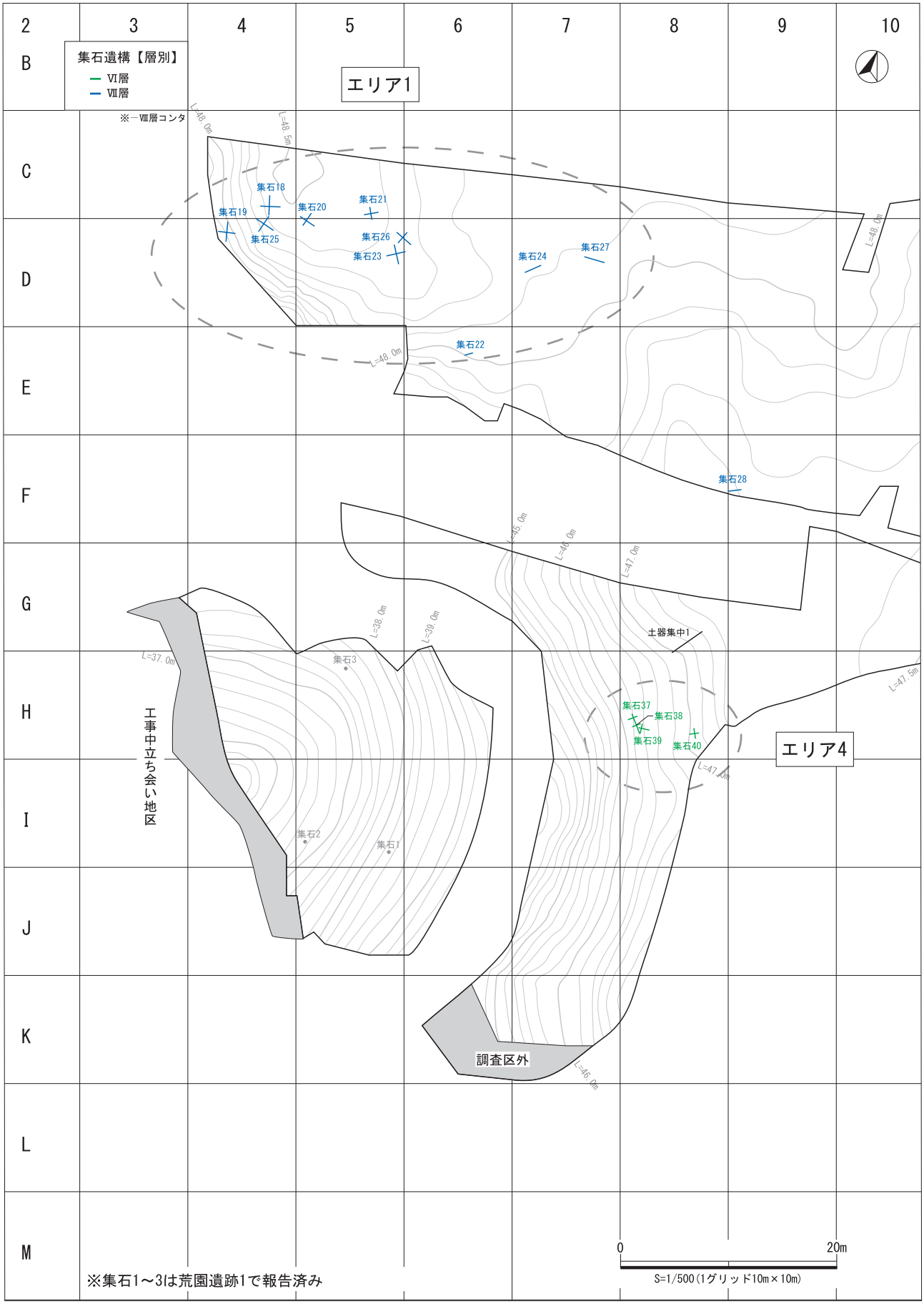
Ｅ－14～15区，調査区中央部の集石遺構等が集中するエリア２の北側部分で検出された。南側には，集石14号遺構や剥片集積等が存在する。Ⅵ層から検出され，亜角礫と亜円礫が混在する149個の礫で構成されていた。安山岩18個，頁岩52個，砂岩23個，凝灰岩56個である。また，これらの礫のほとんどが赤化もしくは脆くなっていることから，被熱したと考えられる。出土状況は，非常に散在的で南北に約4.5ｍ，東西に３ｍ範囲で分布している。集石を使用後，礫を掻き出す等の作業で散在した可能性がある。

また，この集石のエリア２から４点の土器と１点の石鏃が出土している。土器はいずれも小片で図化し得な

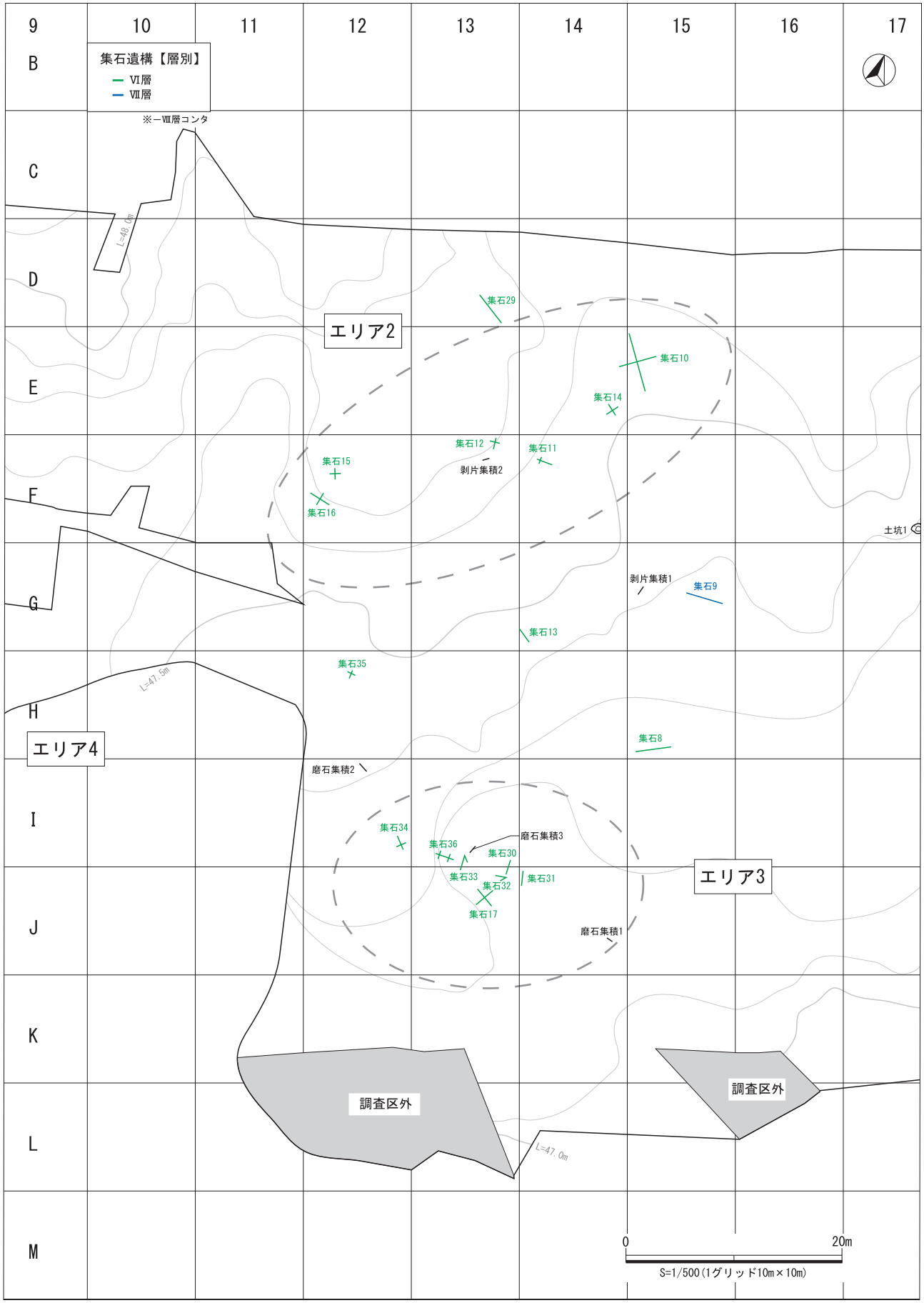


※竪穴住居跡1･2　集石1～3は荒園遺跡1で報告済み

第 19 図　縄文時代早期　遺構配置図(全体)

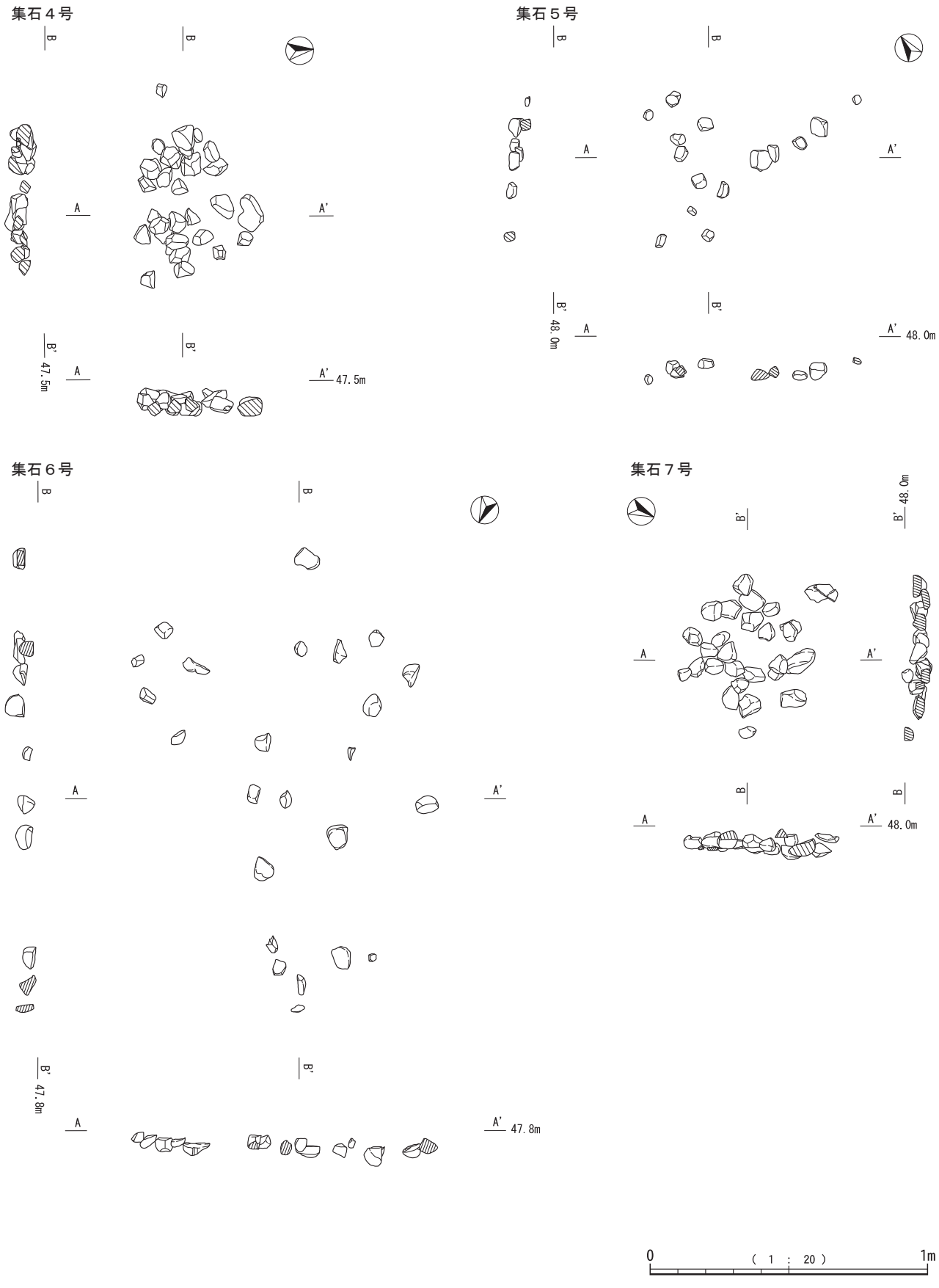


第 20 図　縄文時代早期　遺構配置図（１）

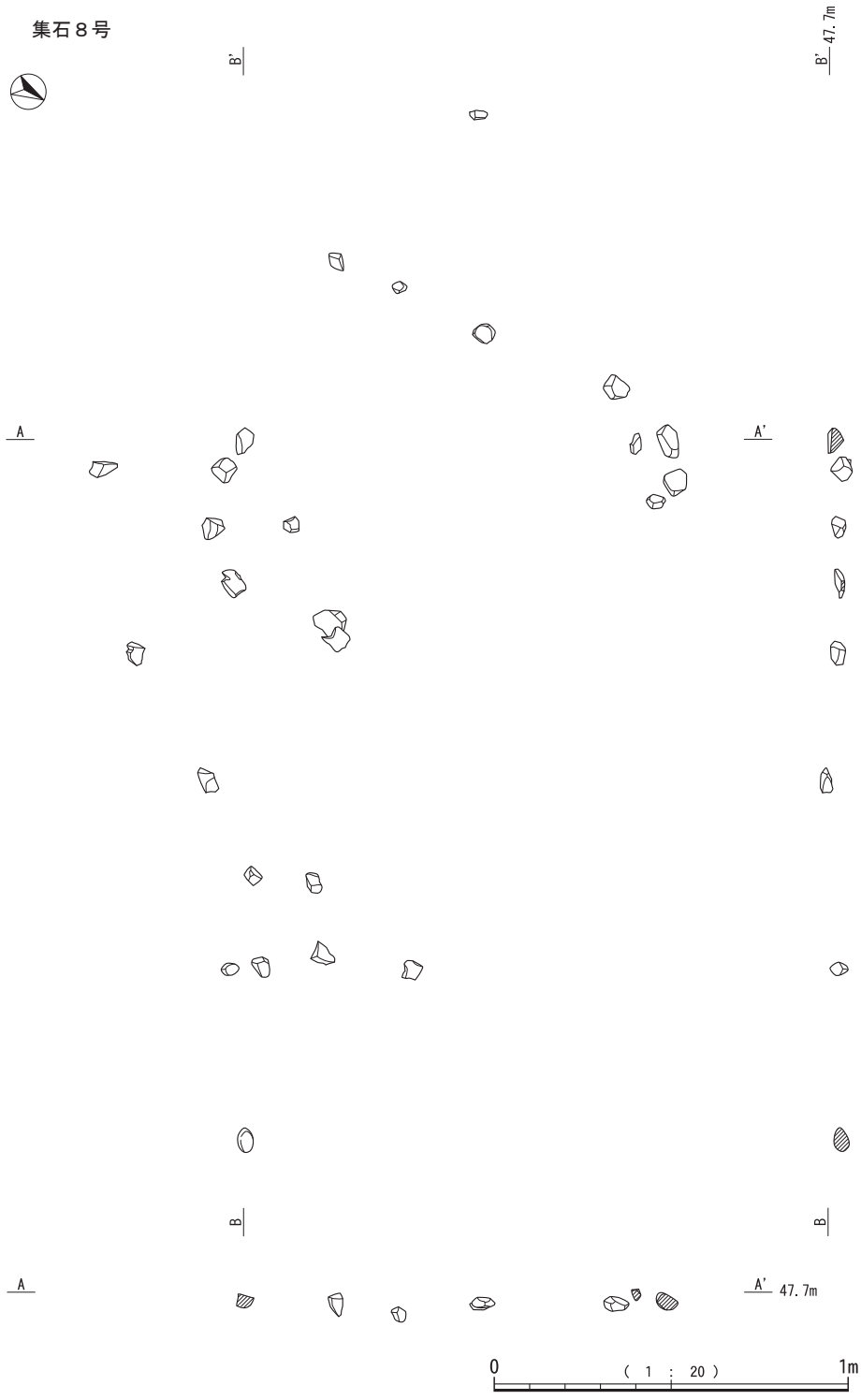


第 21 図　縄文時代早期　遺構配置図（２）

第 22 図　縄文時代早期　遺構配置図（３）



第 23 図　集石４号・５号・６号・７号



第 24 図　集石８号

かったが，Ⅵ類土器と胎土・焼成・色調が酷似している。23 はチャート製の石鏃で二等辺三角形を呈し，基部の抉りを深くすることにより安定した長い脚部を作出している。また，両側縁は微細な剥離で直線的に仕上げられている。ただし，集石 10 号は散在した状態であることから，土器と同様にこの石鏃も包含層からの出土の可能性もある。

集石 11 号（第 27 図）

Ｆ－ 14 区，調査区中央部の集石遺構等が集中するエリア２から検出された。周辺には集石 12 号や剥片集積２号等が存在する。Ⅵ層から検出され，亜角礫と亜円礫６個で構成されていた。砂岩１個，凝灰岩５個である。出土状況は，５個の礫が１か所に近接した状態で検出された。掘り込みや遺構に関連する遺物は確認されなかった。

集石 12 号（第 27 図）

Ｆ－ 13 区，調査区中央部の集石遺構等が集中するエリア２で検出された。周辺には集石 11 号や剥片集積等が存在する。Ⅵ層から検出され，21 個の礫で構成されていたが，そのほとんどが亜円礫であった。安山岩１個，頁岩７個，砂岩７個，凝灰岩５個，花崗岩１個である。出土状況は，中央に 10 個ほどの礫が重なり，それを取り囲むように数個の礫が散在していた。構成礫の中で明らかに被熱により赤化したものが数個観察された。掘り込みや遺構に関連する遺物は確認されなかった。

集石 13 号（第 27 図）

Ｇ－ 14 区，調査区中央部の集石遺構等が集中するエリア２から 10 ｍ程南側で検出された。北東 10 数mのところに集石９号と剥片集積１号が存在する。Ⅵ層から検出され，16 個の礫で構成されていたが，そのほとんどは亜角礫であった。安山岩２個，頁岩１個，花崗岩 13 個と花崗岩の比率が高い。出土状況は，南北に長く散在した状態であった。集石の南東端から土器片が１点出土したが，小片のため図化し得なかった。掘り込みやその他の関連する遺物は確認されなかった。

集石 14 号（第 27 図）

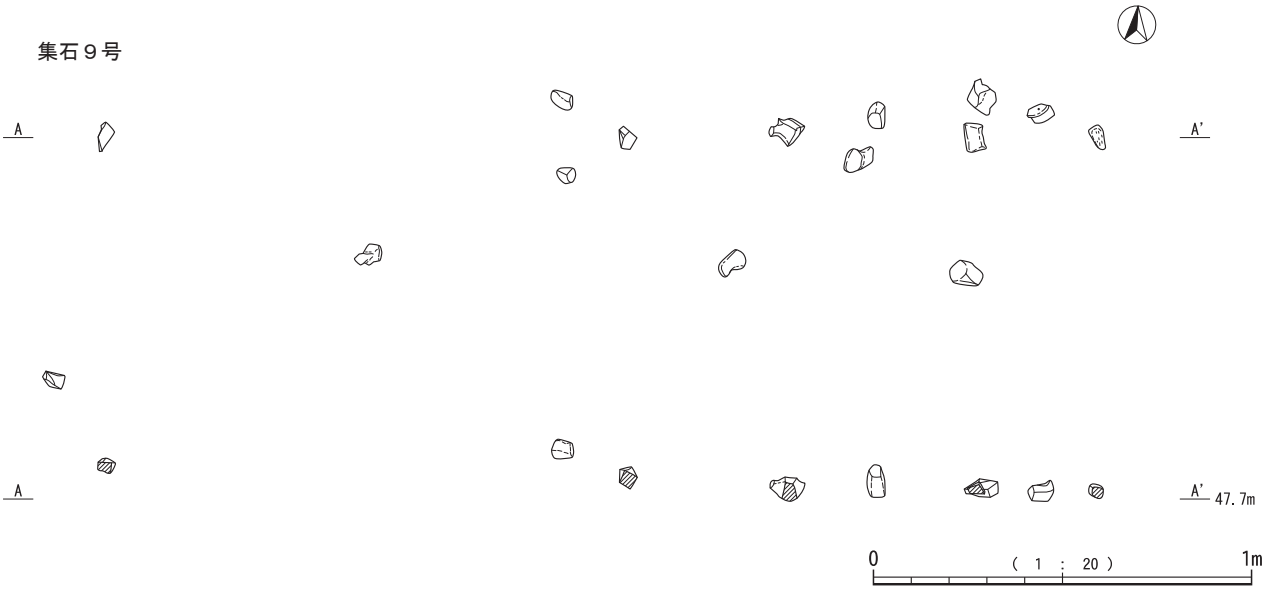
Ｅ－ 14 区，調査区中央部の集石遺構等が集中するエリア２の北側で検出された。南側には集石 11 号・12 号や剥片集積１号・２号が存在する。Ⅵ層から検出され，角礫及び亜角礫 31 個から構成されていた。安山岩１個，頁岩 11 個，砂岩５個，凝灰岩 14 個であった。出土状況は，同心円状に礫が分布し，垂直分布はフラットである。構成礫の中で明らかに被熱により赤化したものは１点のみであった。掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

集石 15 号（第 28 図　24）

Ｆ－ 12 区，調査区中央部の集石遺構等が集中するエリア２の西端で検出された。南側数mのところに集石 16 号が存在する。Ⅵ層から検出され，比較的小さな亜角礫を中心として 26 個から構成されていた。頁岩４個，砂岩２個，凝灰岩 19 個，軽石が１個である。出土状況は，中央部に小さめの礫が分布し，南側に大きめの亜角礫１個が存在する。垂直分布はフラットである。構成礫の中で明らかに被熱した礫が半数ほどである。集石内から２点の土器のうち，１点が図化し得た。24 は胴部の破片で，幅約３㎝の区画の中に撚糸文を施すもの（Ⅸ類）である。掘り込みは確認されなかった。

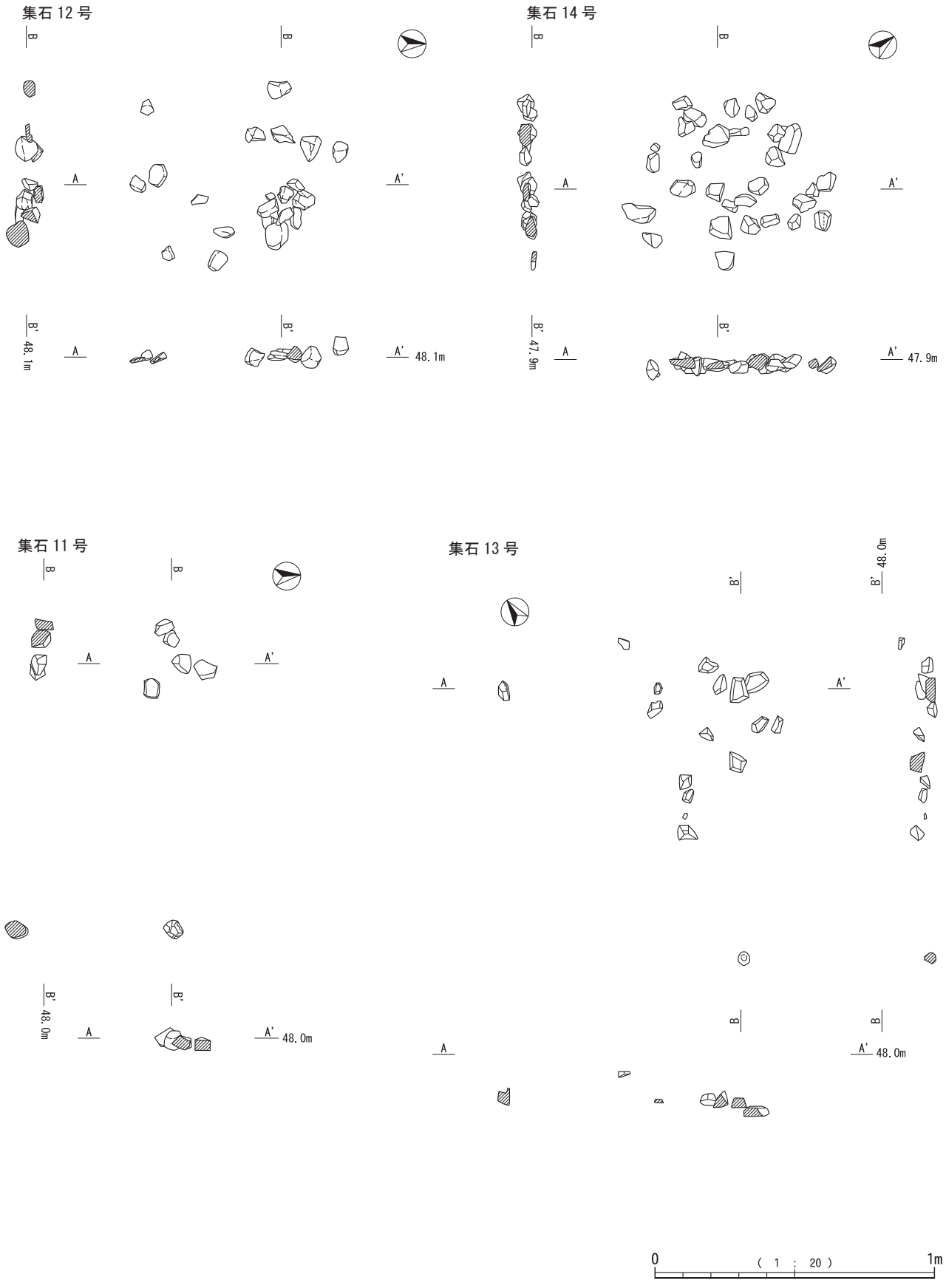
集石 16 号（第 28 図）

Ｆ－ 12 区，調査区中央部の集石遺構等が集中するエリア２の西端で検出された。北側数ｍに集石 15 号が存在する。Ⅵ層から検出され，15 個の礫で構成され，そのほとんどが亜円礫であった。頁岩２個，砂岩１個，凝灰岩 11 個，花崗岩１個である。出土状況は，西側と東側の



第 25 図　集石９号

第 26 図　集石 10 号及び出土遺物



第 27 図　集石 11 号・12 号・13 号・14 号

２か所にやや集中するが，全体的には散在した状況である。構成礫の中で明らかに被熱により赤化したものが数個観察された。掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

集石 17 号（第 29 図）

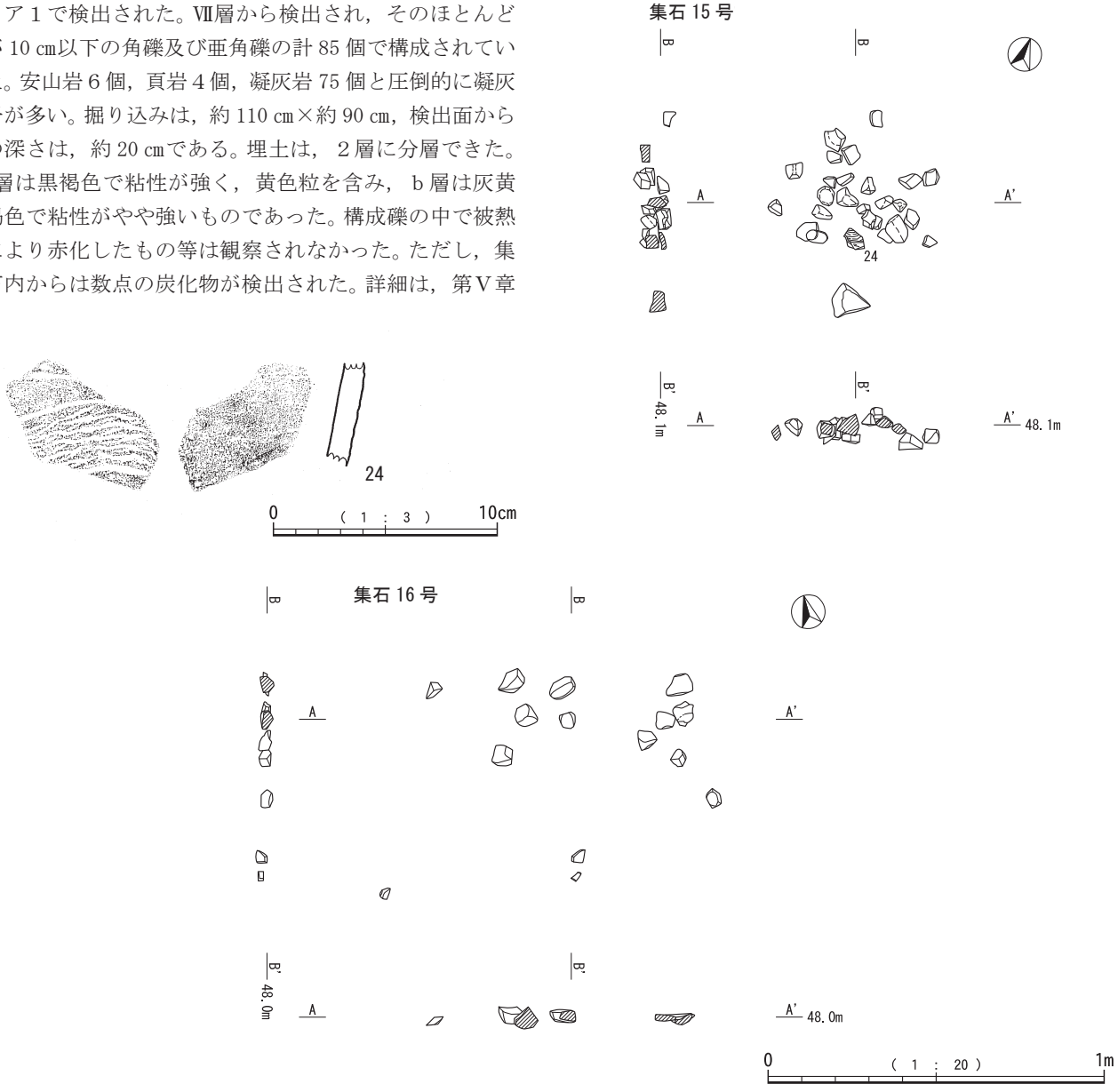
Ｊ－ 13 区，第２地点中央部南側の集石遺構や磨石集積が集中するエリア３の南端で検出された。Ⅵ層から検出され，そのほとんどがやや小さめの角礫及び亜角礫など計 42 個で構成されていた。安山岩 16 個，頁岩７個，砂岩４個，凝灰岩 15 個である。出土状況は，中央部にやや集中するが，全体的に散在し，平坦な状態であった。構成礫の中で被熱したものはみられなかった。掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

集石 18 号（第 29 図）

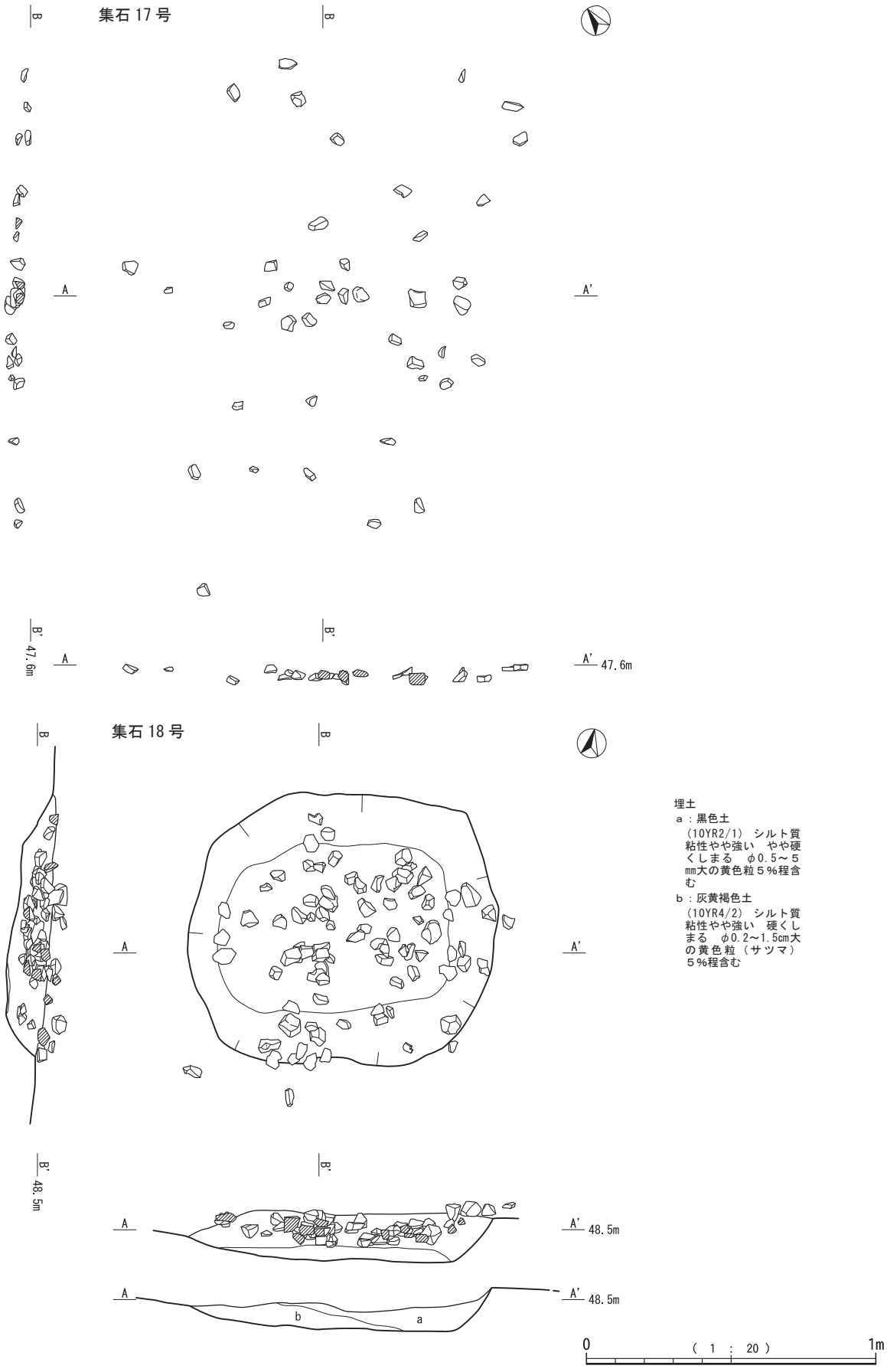
Ｃ－４区，第２地点の西側の集石遺構が集中するエリア１で検出された。Ⅶ層から検出され，そのほとんどが 10 ㎝以下の角礫及び亜角礫の計 85 個で構成されていた。安山岩６個，頁岩４個，凝灰岩 75 個と圧倒的に凝灰岩が多い。掘り込みは，約 110 ㎝×約 90 ㎝，検出面からの深さは，約 20 ㎝である。埋土は，２層に分層できた。a層は黒褐色で粘性が強く，黄色粒を含み，ｂ層は灰黄褐色で粘性がやや強いものであった。構成礫の中で被熱により赤化したもの等は観察されなかった。ただし，集石内からは数点の炭化物が検出された。詳細は，第Ⅴ章自然科学分析の項で述べるが，分析結果はケヤキ・7000 ± 25BPであった。その他には関連する遺物は確認されなかった。

集石 19 号（第 30 図）

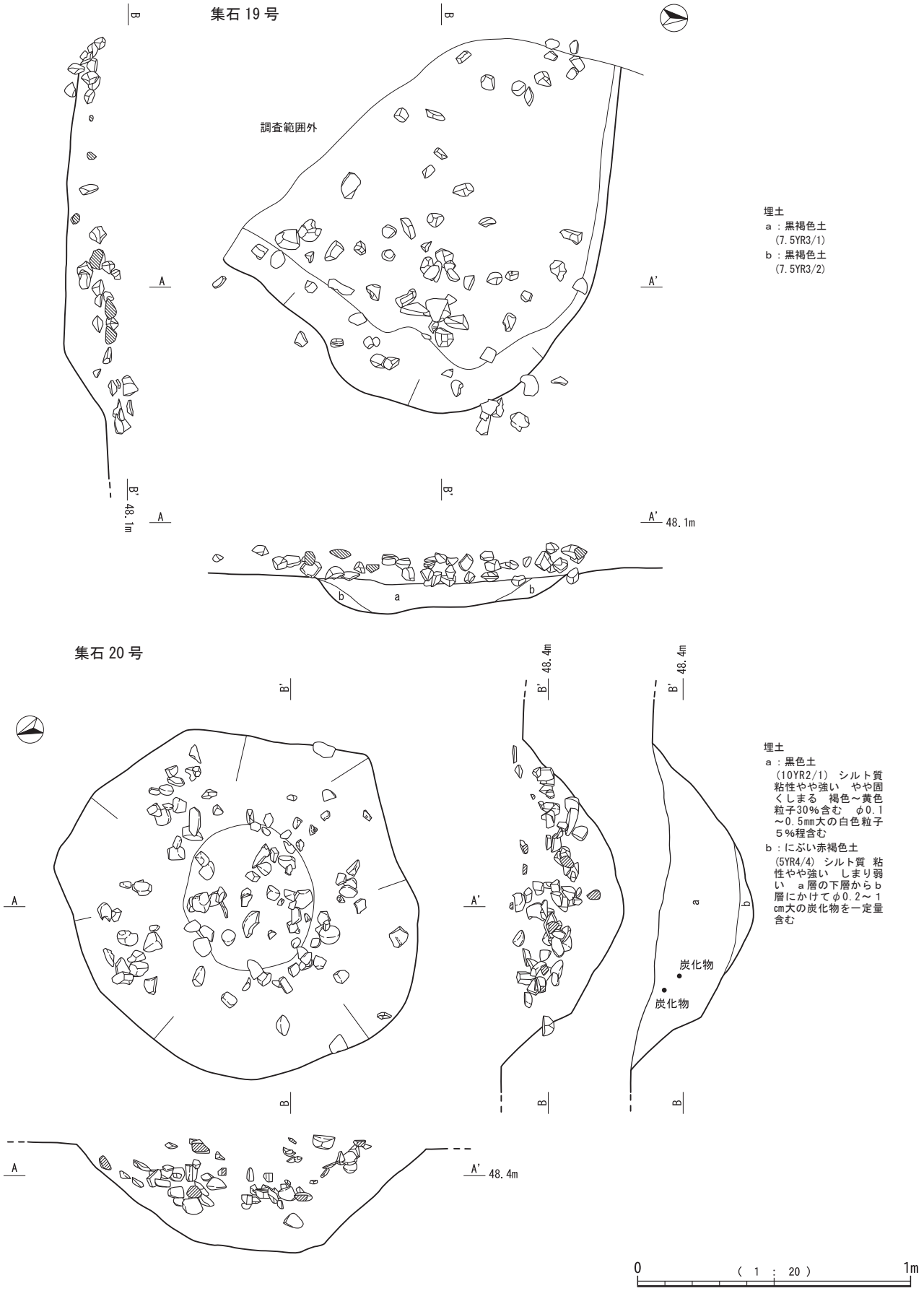
Ｄ－４区，第２地点の西端の集石遺構が集中するエリア１で検出され，遺構の西端は調査区外へと延びる。Ⅶ層から検出され，ほとんどが 10 ㎝以下の角礫及び亜角礫の計 74 個で構成されていた。安山岩２個，頁岩６個，凝灰岩 62 個，砂岩３個，花崗岩１個と圧倒的に凝灰岩が多い。掘り込みは，約 130 ㎝程度の円形または楕円形，検出面からの深さは，約 20 ㎝である。埋土は２層に分層できた。ａ・ｂ層ともに黒褐色であるが，b層がやや明る



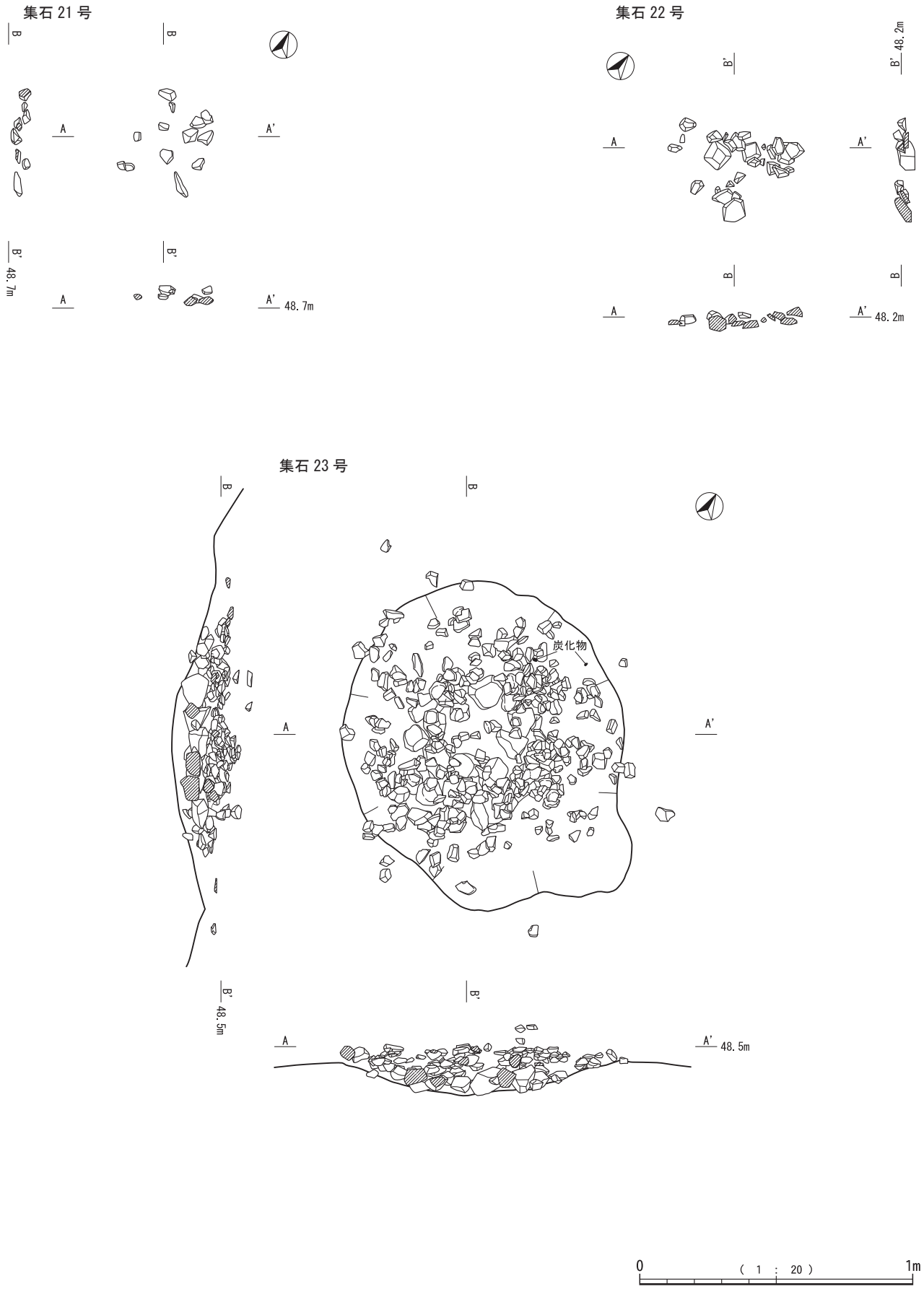
第 28 図　集石 15 号及び出土遺物，集石 16 号



第 29 図　集石 17 号・18 号



第 30 図　集石 19 号・20 号



第 31 図　集石 21 号・22 号・23 号

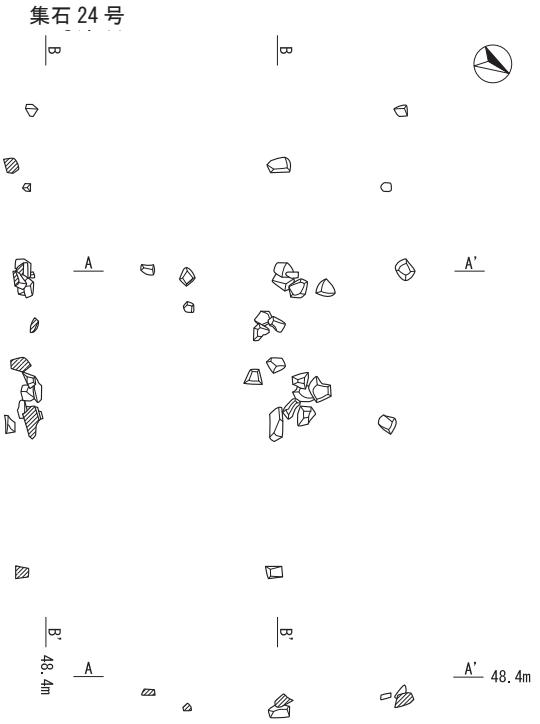
い。中央付近の 16 個の礫に被熱痕が観察された。関連する遺物は確認されなかった。

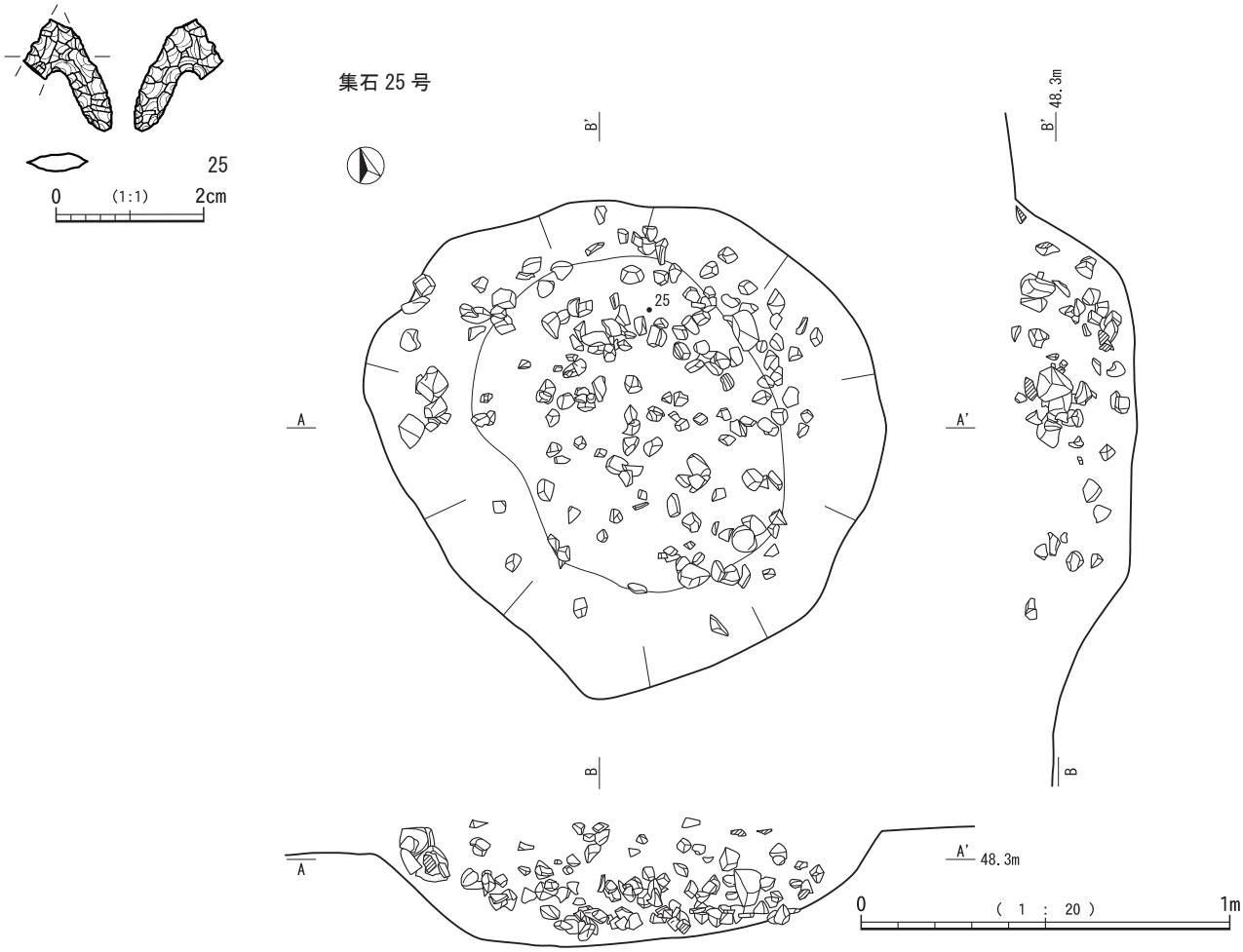
集石 20 号（第 30 図）

C・D－５区，第２地点の西端の集石遺構が集中するエリア１で検出された。Ⅷ層から検出され，最深部はⅨ層にまでその構成礫が残る。そのほとんどが 10 ㎝以下の亜円礫及び亜角礫の計 104 個で構成されていた。安山岩 13 個，頁岩 37 個，凝灰岩 32 個，砂岩 22 個である。掘り込みは，約 130 ㎝程度のすり鉢状を呈し，検出面からの深さは約 50 ㎝である。最深の構成礫は床面より 10 ㎝ほど浮いた状態で検出された。埋土は２層に分層できた。a層は黒色で腐植に富み，粘性がやや強く，やや硬くしまる。b層は，にぶい赤褐色で粘性はあるもののa層よりしまりが弱い。両層ともに微細の炭化物を含む。また，第Ⅴ章自然科学分析の項で述べるが，a 層からは炭化物が出土している。分析結果は炭化材・ツバキ属・8350 ± 30BPであった。その他には，遺構に関連する遺物は確認されなかった。

集石 21 号（第 31 図）

C－５区，第２地点の西端の集石遺構が集中するエリ





第 32 図　集石 24 号・25 号及び出土遺物

ア１で検出された。南側に集石 23 号・26 号が存在する。Ⅶ層から検出されそのほとんどが 10 ㎝以下の亜角礫の計 12 個で構成されていた。安山岩２個，頁岩２個，砂岩１個，凝灰岩７個である。出土状況は，東側に４個ほどの礫が接近し，その周辺に数個の礫が散在していた。構成礫の中で被熱したものは，見られなかった。また，掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

集石 22 号（第 31 図）

Ｅ－６区，第２地点の西端の集石遺構が集中するエリア１の南端で検出された。北側 10 数ｍに集石 23 号，24 号が存在する。Ⅶ層から検出され，亜角礫 27 個で構成されていた。頁岩２個，凝灰岩 25 個である。他の集石に比して使用された石材が頁岩と凝灰岩の２種類と少なく，大半が凝灰岩である。出土状況は，北側部分に東西に 60 ㎝程に集中し，その南側にやや大きめの礫が点在する。構成礫中で被熱したものはみられなかった。また，掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

集石 23 号（第 31 図）

Ｄ－５区，第２地点の西端の集石遺構が集中するエリア１の中央部，Ⅷ層で検出された。最深部はⅨ層上面にまで及ぶ。構成礫は，そのほとんどが 10 ㎝以下の亜円礫及び亜角礫であるが，下部に数個の 10 ㎝以上の亜角礫が検出され，298 個の礫で構成されていた。安山岩 97 個，頁岩 100 個，凝灰岩 89 個，砂岩 11 個，軽石１個である。掘り込みは，直径約 120 ㎝程度の浅いすり鉢状を呈し，検出面からの深さは約 30 ㎝である。最深部の構成礫は床に面している。被熱した礫は 41 個であった。

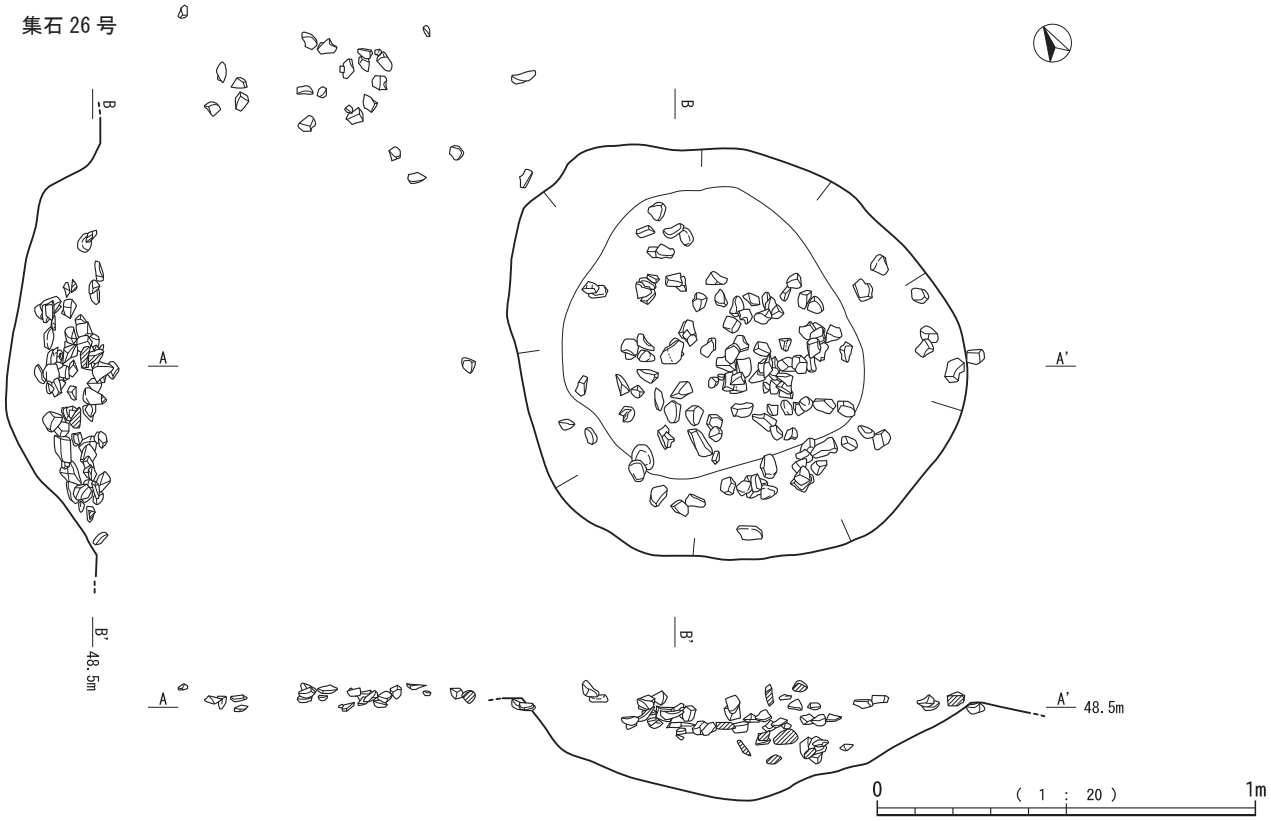
集石内からは，数点の炭化物が検出された。詳細は，第Ⅴ章自然科学分析の項で述べるが，分析結果は炭化材・クヌギ節・9535 ± 30BPであった。その他には，関連する遺物は確認されなかった。

集石 24 号（第 32 図）

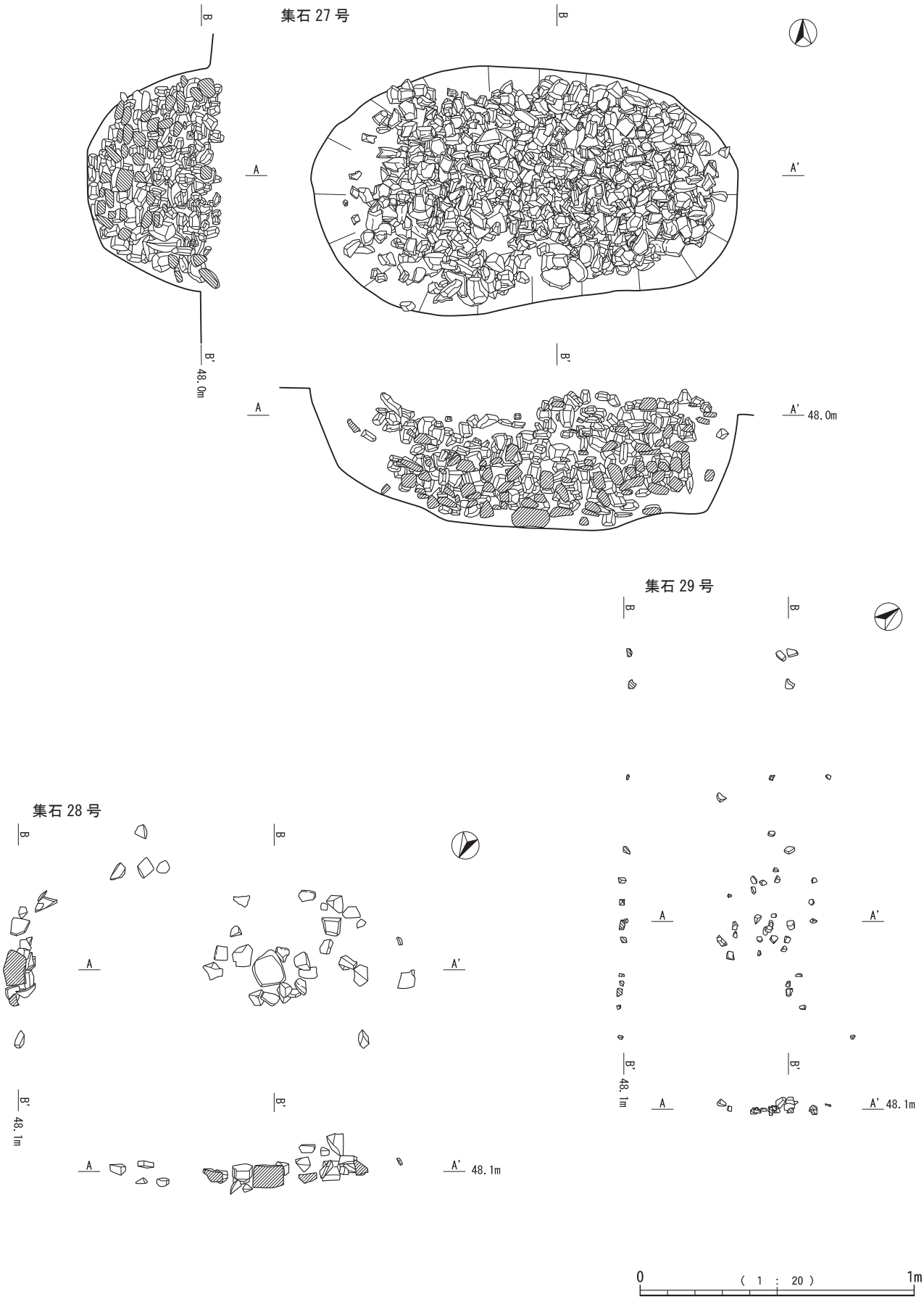
Ｄ－７区，第２地点の西端の集石遺構が集中するエリア１の東側で検出された。東側数ｍに集石 27 号が存在する。Ⅶ層から検出され，亜角礫 25 個で構成されていた。頁岩６個，凝灰岩６個，砂岩１個，安山岩 12 個である。出土状況は，数個の重なりはあるものの，全体的には散在した状態であった。構成礫中で被熱したものは３個であった。掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

集石 25 号（第 32 図　25）

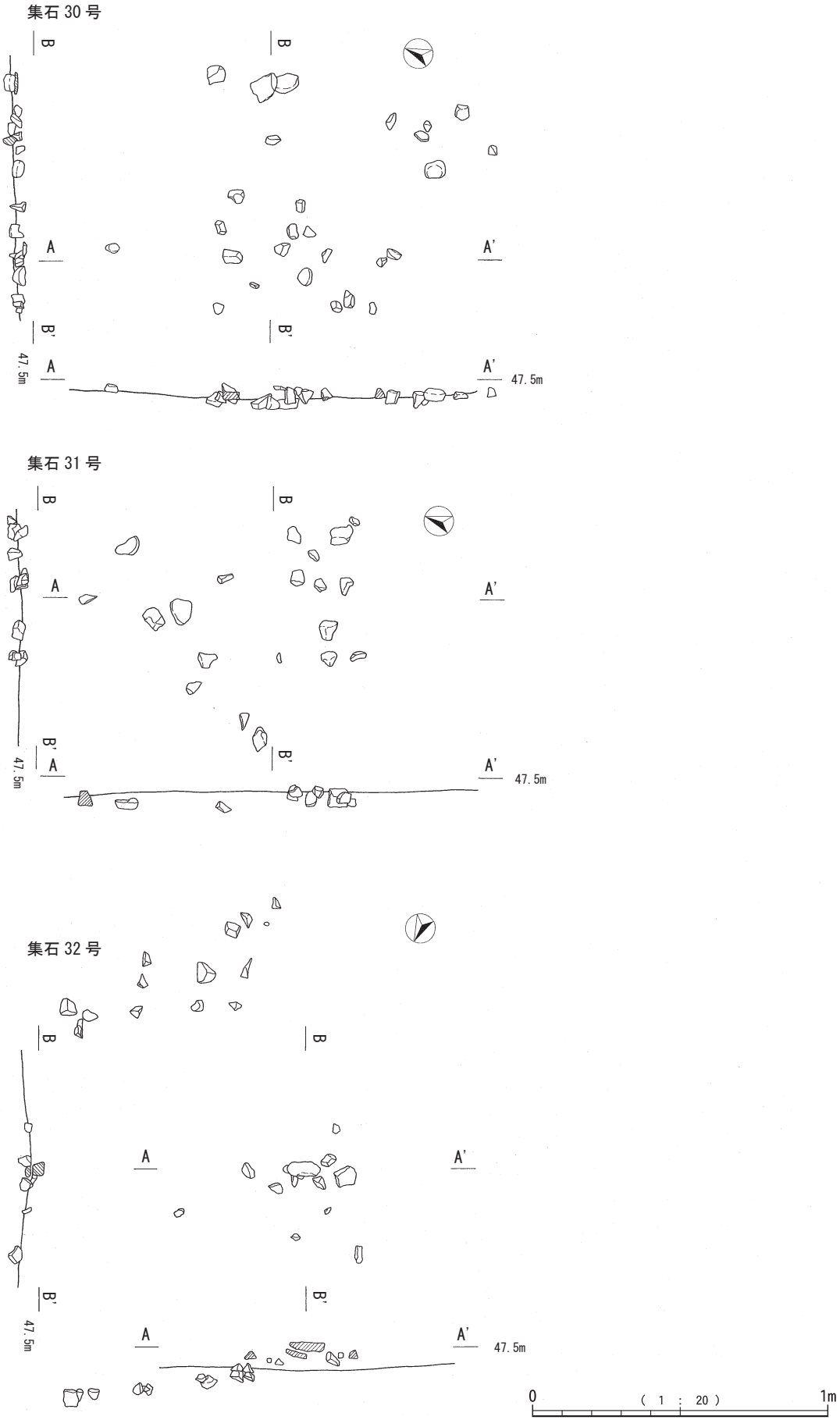
Ｄ－４区，第２地点の西端の集石遺構が集中するエリア１の西端，Ⅶ層で検出された。西側数ｍには集石 19 号が存在する。構成礫は，そのほとんどが 10 ㎝以下の亜角礫の計 173 個で構成されていた。安山岩 76 個，頁岩 28 個，凝灰岩 52 個，砂岩 17 個である。掘り込みは，直径約 140 ㎝程度の円形を呈し，検出面からの深さは約 30 ㎝である。最深部の構成礫は床よりやや浮いた状態であった。25 は集石内から出土した石鏃である。チャート製でやや明るい灰色に黒色の縞状の層が観察される。先端及



第 33 図　集石 26 号

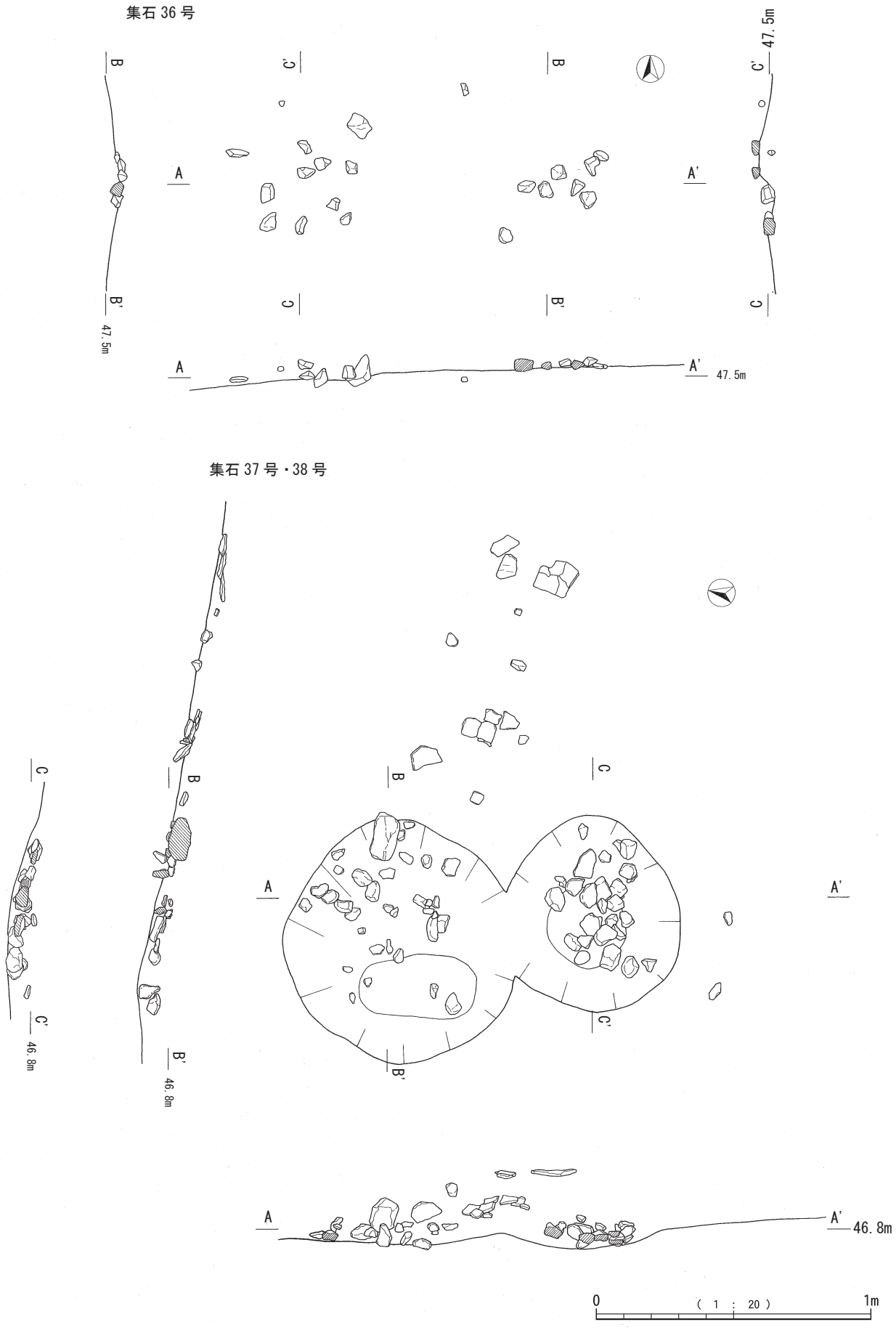


第 34 図　集石 27 号・28 号・29 号

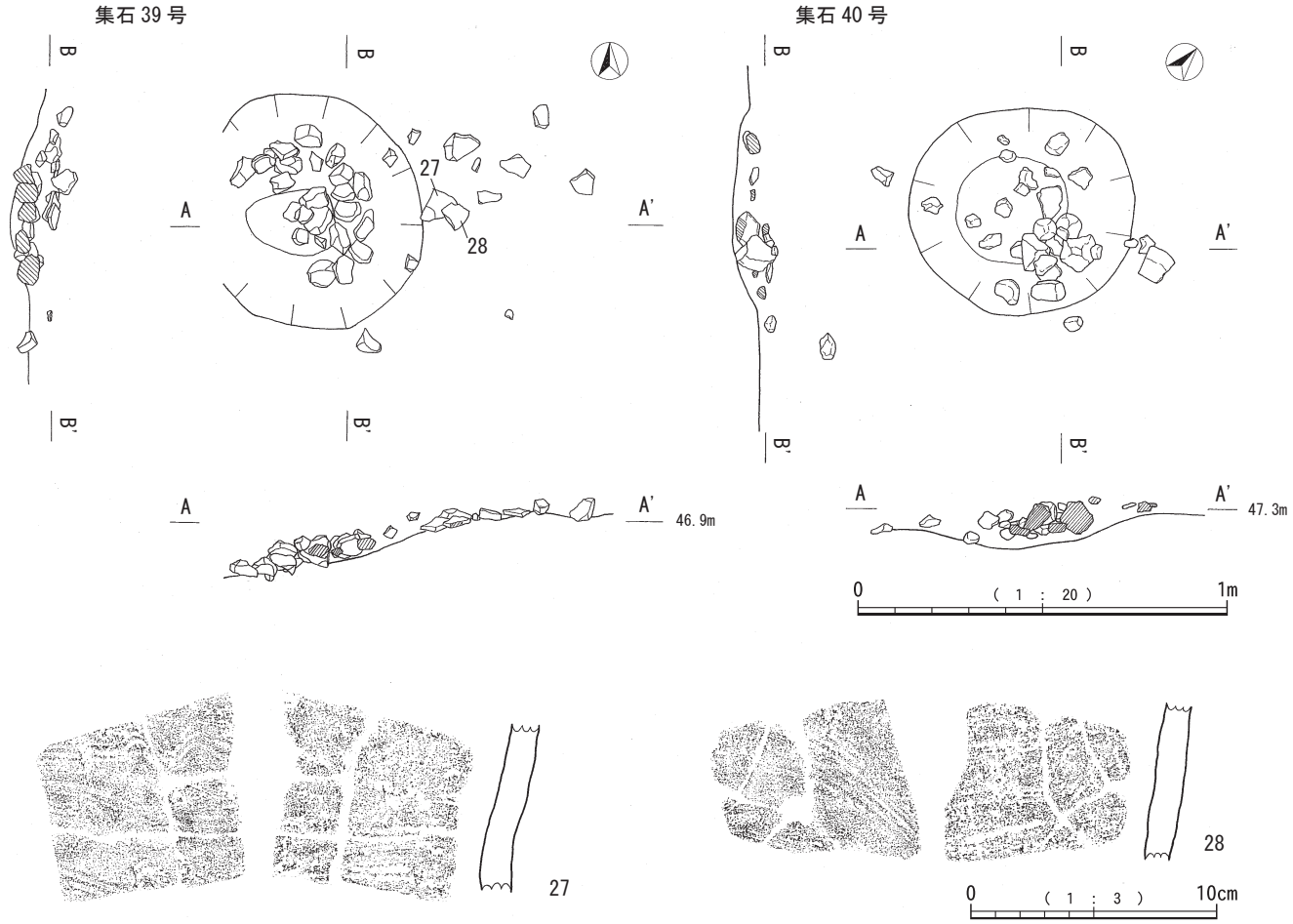


第 35 図　集石 30 号・31 号・32 号

第 36 図　集石 33 号及び出土遺物　集石 34 号・35 号



第 37 図　集石 36 号・37 号・38 号



第 38 図　集石 39 号及び出土遺物　集石 40 号

び片方の脚を欠損している。両面から丁寧な剥離を施し，基部の抉りは深く逆「U」字状に施されている。

集石内からは，３点の炭化物が検出された。詳細は，第Ⅴ章自然科学分析の項で述べるが，分析結果は炭化材・クヌギ節・8340 ± 30BPであった。その他には，関連する遺物は確認されなかった。

集石 26 号（第 33 図）

Ｄ－５・６区，第２地点の西端の集石遺構が集中するエリア１のⅦ層から検出された。構成礫は，そのほとんどが５㎝～ 10 ㎝の亜円礫及び亜角礫の計 151 個であった。安山岩 35 個，頁岩 38 個，凝灰岩 52 個，砂岩 25 個，泥岩１個である。その中で，被熱した礫が 17 個観察された。掘り込みは，約 120 ㎝程度の円形を呈し，検出面からの深さは約 25 ㎝である。最深の構成礫は床面よりやや浮いた状態で検出された。埋土はⅦ層をベースとした単一層で，黄褐色～白色粒及び炭化物を含む。粘性がやや強く，硬くしまる。北西部の掘り込みより外れた礫は，集石を使用後に掻き出しに伴って広がった可能性がある。

遺構に関連する遺物は確認されなかった。

集石 27 号（第 34 図）

Ｄ－７区，第２地点の西端の集石遺構が集中するエリア１のⅦ層から検出された。本遺跡で最大規模の集石である。西側には、集石 24 号が位置する。構成礫は，20 ㎝弱の亜角礫数個以外は 10 ㎝～数㎝の亜角礫や亜円礫で，総数は 969 個で，砂岩 131 個，頁岩 338 個，安山岩 349 個，凝灰岩 146 個，泥岩５個である。また，そのほとんどが被熱して脆い。掘り込みは，156 ㎝× 82 ㎝× 50 ㎝を測る楕円形である。埋土は，黄褐色～白色粒及び炭化物を多く含み粘性がやや強く，硬くしまるもので，炭化物は 20 ㎝大のものも検出された。詳細は第Ⅴ章自然科学分析の項で述べるが，分析結果は炭化材・ツバキ属で 8350 ± 25BPであった。

集石 28 号（第 34 図）

Ｆ－９区のⅦ層より検出された。周辺には集石遺構等は存在しない。構成礫は，15 ㎝程度の亜角礫１個以外は 10 ㎝以下の亜角礫の計 30 個であった。砂岩３個，頁岩３個，花崗岩２個，凝灰岩 11 個，安山岩 11 個である。出土状況は，15 ㎝程度の亜角礫を取り巻くように 10 ㎝以下の角礫が検出された。集石周辺からは，２点の土器と１点の玉髄製の剥片が出土している。これらの遺物は，集石の中心部から離れたところで出土していることから包含層出土と判断し，掲載しなかった。

集石 29 号（第 34 図）

Ｄ－ 13 区，調査区中央部の北側から検出された。中央部の集石遺構が集中するエリア２からはやや離れた位置である。Ⅵ層から検出され，亜円礫の計 38 個で構成され，砂岩２個，頁岩１個，凝灰岩８個，安山岩 27 個である。東側にやや集中するものの全体的には散在した状況である。構成礫中で７個の礫が被熱したと思われる。掘り込みや遺構に関連する遺物は確認されなかった。

集石 30 号（第 35 図）

Ｉ・Ｊ-13 区，調査区の中央部南側のⅥ層から検出された。集石遺構が集中するエリア３である。10 ㎝以下の亜円礫 27 個で構成されていた。礫同士の重なり合いもほとんどない状態で検出された。掘り込みや遺構に関連する遺物は確認されなかった。

集石 31 号（第 35 図）

Ｊ－ 14 区，調査区の中央部南側のエリア３のⅥ層から検出された。10 ㎝以下の亜円礫 20 個で構成される。礫同士の重なり合いもほとんどない状態で検出された。礫はやや南側が多いものの，全体的に散在した状況であった。掘り込みや遺構に関連する遺物は確認されなかった。

集石 32 号（第 35 図）

Ｊ－ 13 区，調査区の中央部南側のエリア３のⅥ層から検出された。構成礫は 15 ㎝ほどの扁平な礫１個と 10 ㎝以下の亜角礫 26 個の計 27 個，凝灰岩 21 個，砂岩３個，軽石２個，泥岩１個である。出土状況は，西側部分に数個の重なり合いがあるものの全体的に散在した状況であった。掘り込みや遺構に関連する遺物は確認されなかった。

集石 33 号（第 36 図　26）

Ｉ・Ｊ－ 13 区，調査区の中央部南側のエリア３のⅥ層から検出された。礫は，そのほとんどが５～ 10 ㎝の亜角礫及び亜円礫の計 25 個の礫で構成されていた。凝灰岩 21 個，砂岩４個である。出土状況は，約 125 ㎝× 87 ㎝の範囲に分布する。中央部分に数個の重なり合いがあるものの全体的に散在した状況であった。26 は集石内から出土した土器の底部である。底径 13.5 ㎝で波状の条痕が外面に施されている。（Ｘ類）　掘り込みは確認されなかった。

集石 34 号（第 36 図）

Ｉ－ 12 区，調査区の中央部南側のエリア３のⅥ層から検出された。礫は，そのほとんどが５㎝程度の亜角礫の計 41 個の礫で構成されていた。凝灰岩 19 個，砂岩８個，その他の礫 14 個である。出土状況は，約 160 ㎝× 105 ㎝の範囲に分布する。中央部分に数個の重なり合いがあるものの全体的に散在した状況であった。掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

集石 35 号（第 36 図）

Ｈ－ 12 区，調査区の中央部のⅥ層から検出された。周辺に遺構等は見られない。礫は，そのほとんどが 10 ㎝程度の亜角礫で 10 個全てが凝灰岩で構成されていた。出土状況は，南側の１個を除き，約 50 ㎝× 40 ㎝の範囲に分布するが重なり合い等は見られない。掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

集石 36 号（第 37 図）

Ｉ－ 13 区，調査区の中央部南側のエリア３のⅥ層最下部から検出された。南東には数基の集石遺構がある。21 個の礫で構成され，10 ㎝程度の亜角礫が多数を占めていた。凝灰岩 17 個，砂岩２個，泥岩２個である。出土状況は，東西２か所に分かれて分布していることから単独の集石遺構が２基の可能性もある。掘り込みや関連する遺物は確認されなかった。

集石 37 号・38 号（第 37 図）

Ｈ－８区，第３地点の西側斜面部分のエリア４のⅥ層から検出された。南には集石遺構 39 号が隣接し，東には集石遺構 40 号が位置する。37 号と 38 号は近接して掘り込みを有することから北側を 37 号，南側を 38 号とした。なお，掘り込み以外から検出された礫はその分布の状況から 37 号に含めた。また，掘り込みは８の字状に連なっている。

37 号は，20 ㎝程度の亜角礫から数㎝程度のものまであわせて 33 個で構成されていた。凝灰岩が 14 個，砂岩９個，軽石２個，頁岩８個である。掘り込みは約 90 ㎝× 90 ㎝で最深部が約 10 ㎝の浅いすり鉢状である。東側の掘り込み以外に 10 個ほどの礫が点在する。

38 号は，10 ㎝程度の亜角礫から数㎝程度のものまであわせて 27 個で構成されていた。凝灰岩が 18 個，砂岩 9 個である。掘り込みは約 70 ㎝× 70 ㎝で最深部約 15 ㎝の浅いすり鉢状である。

38 号の掘り込みが深く，礫も安定していることから，38 号から 37 号へと礫を掻き出した可能性もある。遺構に関連する遺物は確認されなかった。

集石 39 号（第 38 図　27・28）

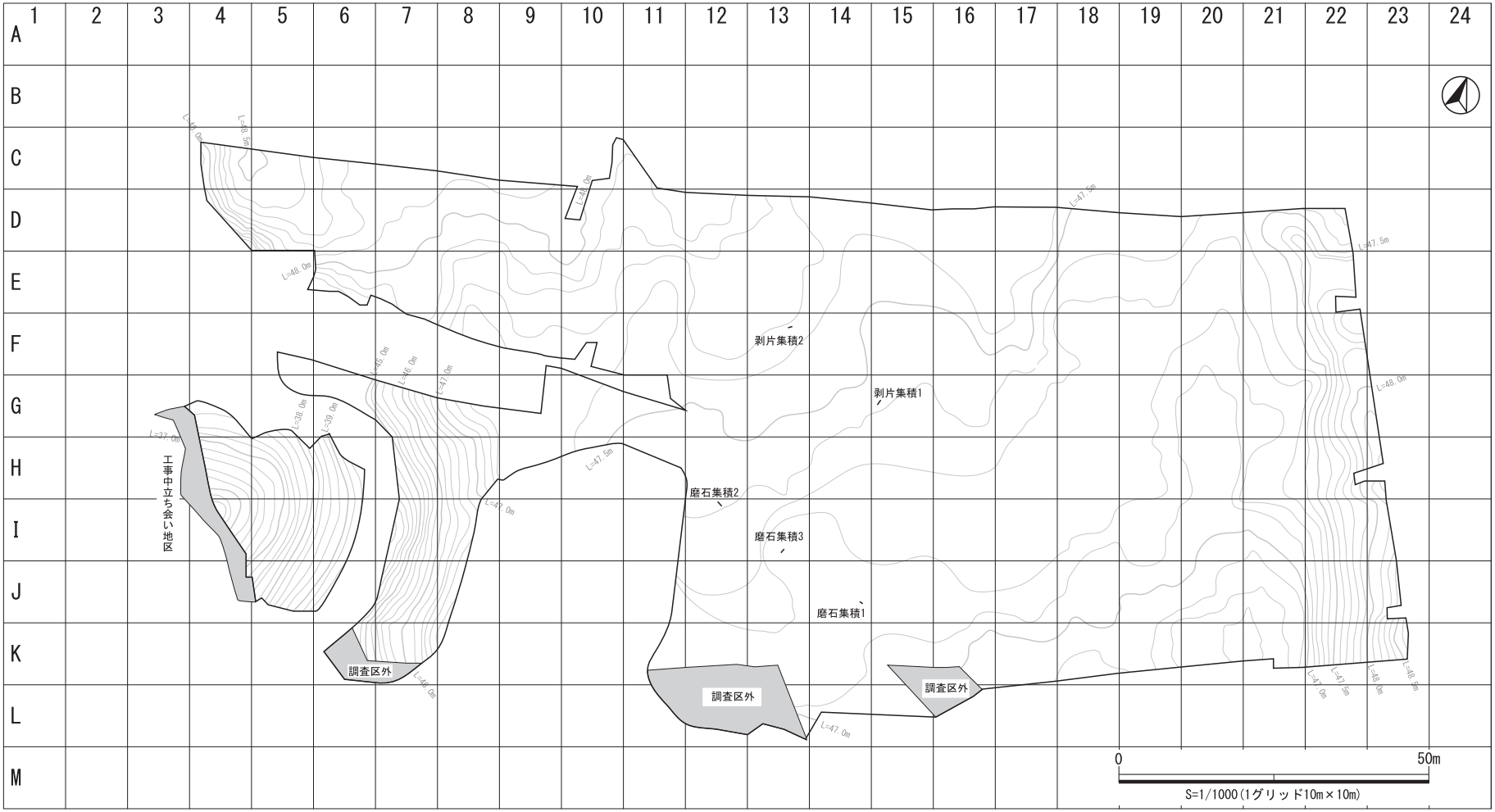
Ｈ－８区，第３地点の西側斜面部分のエリア４のⅥ層から検出された。集石 37 号・38 号とは北側で隣接している。礫は，10 ㎝程度の亜角礫が多数を占める計 33 個の礫で構成されていた。凝灰岩 25 個，砂岩 7 個，泥岩 1 個である。掘り込みは約 70 ㎝× 70 ㎝で西側へなだらかに低くなり 38 号と接する。また，東側に掘り込みの外にやや大き目の角礫が点在している。27，28 はその掘り込み面より出土した土器である。両者とも外面は条痕，内面は条痕後ナデ調整が施されており，色調は外面にぶい黄橙，内面褐灰で同一個体と考えられるものである。ＸⅠ類，苦浜式土器であると考えられる。

集石 40 号（第 38 図）

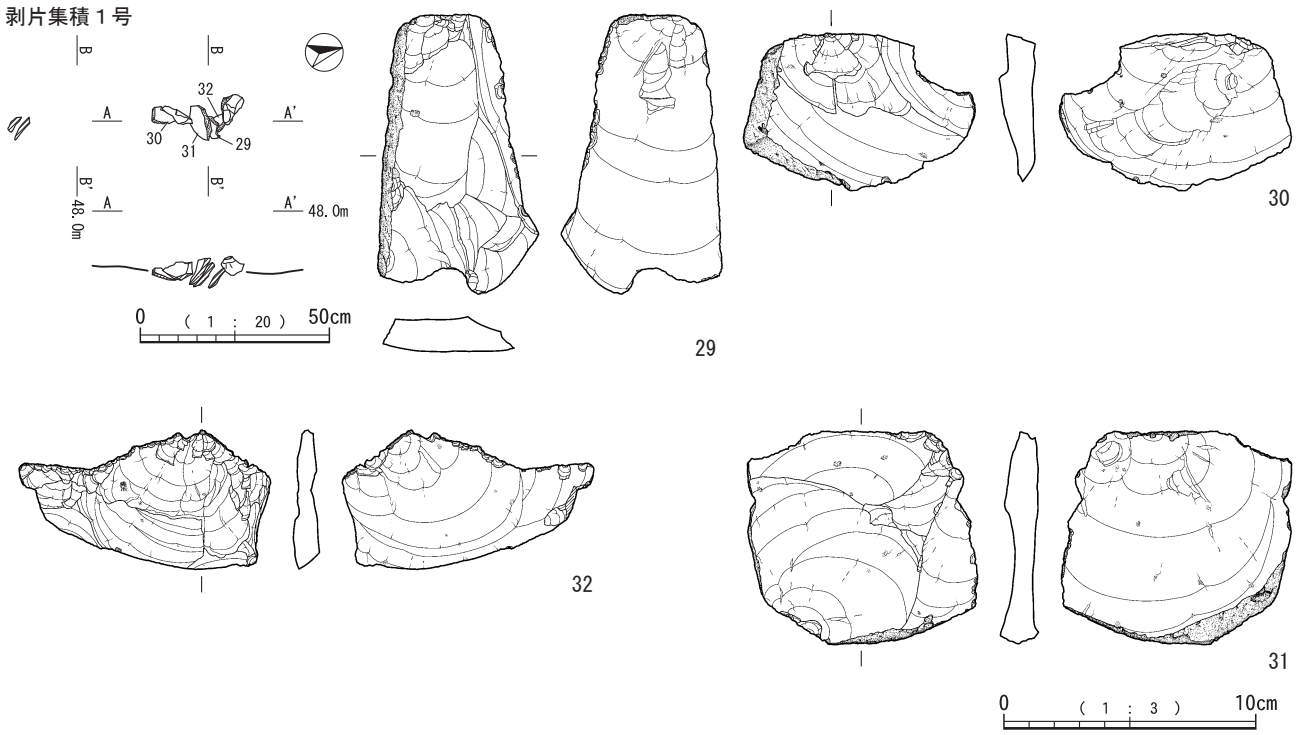
Ｈ－８区，第３地点の西側斜面部分のエリア４のⅥ層から検出された。集石 37 号・38 号・39 号が西側に位置

第８表　集石観察表

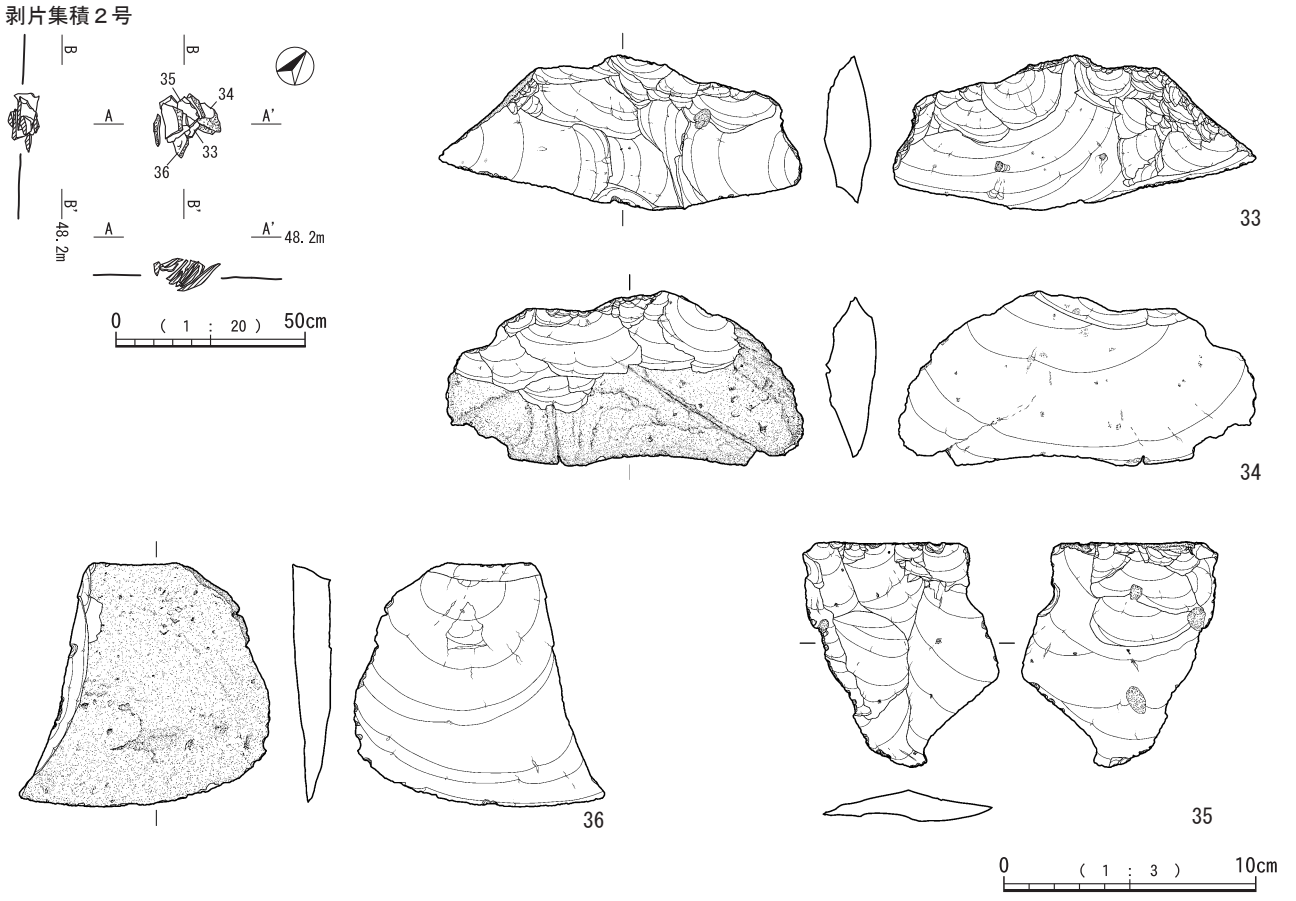
集石	大きさ		掘り込み（推定含む）				総礫数	1～50ｇ	割合	51～100ｇ	割合	101～200ｇ	割合	201～300ｇ	割合	301ｇ～	割合	層	構成礫								備考
	長軸（cm）	短軸（cm）	有無	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）													砂岩	割合	安山岩	割合	凝灰岩	割合	その他	割合	
4	74	48	無	－	－	－	30	－	－	2	7%	10	33%	13	43%	5	17%	Ⅵ上	1	3%	19	63%	－	－	10	34%	頁岩8 ・花崗岩2
5	79	56	無	－	－	－	15	5	33%	－	－	8	53%	1	7%	1	7%	Ⅵ上	1	7%	13	86%	－	－	1	7%	頁岩1
6	168	110	無	－	－	－	24	3	12%	5	21%	10	42%	3	12%	3	12%	Ⅵ	6	25%	8	33%	8	33%	2	9%	頁岩2
7	59	58	無	－	－	－	28	－	－	3	11%	8	29%	9	32%	5	18%	Ⅵ	5	19%	5	19%	15	61%	3	11%	頁岩1 ・花崗岩2
8	296	170	無	－	－	－	26	4	15%	10	38%	8	31%	1	4%	3	12%	Ⅵ	4	15%	1	4%	11	42%	10	39%	頁岩10
9	280	83	無	－	－	－	15	1	7%	2	13%	6	40%	5	33%	1	7%	Ⅶ	1	7%	2	13%	4	27%	8	53%	軽石1 ・頁岩7
10	450	300	無	－	－	－	149	57	38%	40	27%	41	28%	9	6%	2	1%	Ⅵ	23	15%	18	12%	56	38%	52	35%	頁岩52・石鏃
11	115	28	無	－	－	－	6	－	－	－	－	－	－	4	67%	2	33%	Ⅵ	1	17%	－	－	5	83%	－	－	
12	78	68	無	－	－	－	21	2	10%	6	29%	8	38%	2	9%	3	14%	Ⅵ	7	33%	1	5%	5	24%	8	38%	頁岩7 ・花崗岩1
13	117	102	無	－	－	－	16	2	13%	5	31%	8	50%	1	6%	－	－	Ⅵ	－	－	2	13%	－	－	14	87%	頁岩1 ・花崗岩13
14	75	65	無	－	－	－	31	1	3%	4	13%	15	48%	9	29%	2	7%	Ⅵ	5	16%	1	3%	14	45%	11	36%	頁岩11
15	62	51	無	－	－	－	26	1	4%	7	27%	14	54%	3	11%	1	4%	Ⅵ	2	8%	－	－	19	73%	5	19%	頁岩4 ・軽石1・土器
16	102	69	無	－	－	－	15	3	20%	3	20%	6	40%	3	20%	－	－	Ⅵ	1	7%	－	－	11	73%	3	20%	頁岩2 ・花崗岩1
17	185	140	無	－	－	－	42	19	45%	19	45%	3	8%	1	2%	－	－	Ⅵ	4	10%	16	38%	15	36%	7	16%	頁岩7
18	115	102	有	110	90	20	85	25	29%	33	39%	20	24%	7	8%	－	－	Ⅶ	－	－	6	7%	75	88%	4	5%	頁岩4
19	145	138	有	130	120	20	74	6	9%	28	38%	27	36%	9	12%	4	5%	Ⅶ	3	4%	2	3%	62	84%	7	9%	頁岩6・花崗岩1
20	115	115	有	127	120	44	104	50	48%	21	20%	24	23%	8	8%	1	1%	Ⅷ	22	21%	13	13%	32	31%	37	35%	頁岩37
21	40	35	無	－	－	－	12	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅶ	1	8%	2	17%	7	58%	2	17%	頁岩2
22	51	40	無	－	－	－	27	8	30%	13	48%	4	15%	2	7%	－	－	Ⅶ	－	－	－	－	25	93%	2	7%	頁岩2
23	146	120	有	120	103	30	298	135	45%	106	36%	26	9%	8	3%	23	7%	Ⅷ	11	4%	97	33%	89	29%	101	34%	頁岩100 ・軽石1
24	125	74	無	－	－	－	25	11	44%	8	32%	6	24%	－	－	－	－	Ⅶ	1	4%	12	48%	6	24%	6	24%	頁岩6
25	115	105	有	140	135	30	173	71	41%	55	32%	36	21%	5	3%	6	3%	Ⅶ	17	10%	76	44%	52	30%	28	16%	頁岩28・石鏃
26	213	141	有	120	108	25	151	86	57%	58	38%	6	4%	－	－	1	1%	Ⅶ	25	17%	35	23%	52	34%	39	26%	頁岩38 ・泥岩1
27	140	85	有	156	82	50	969	112	12%	152	16%	390	40%	224	23%	91	9%	Ⅶ	131	14%	349	36%	146	15%	343	35%	頁岩338 ・泥岩5
28	110	82	無	－	－	－	30	1	3%	7	23%	14	47%	5	17%	3	10%	Ⅶ	3	10%	11	37%	11	37%	5	16%	頁岩3 ・花崗岩2
29	265	134	無	－	－	－	38	3	8%	16	42%	11	29%	7	18%	1	3%	Ⅵ	2	5%	27	71%	8	21%	1	3%	頁岩1
30	132	85	無	－	－	－	27	12	44%	8	30%	6	22%	1	4%	－	－	Ⅵ	－	－	－	－	－	－	－	－	亜円礫27
31	98	80	無	－	－	－	20	3	15%	8	40%	7	35%	1	5%	1	5%	Ⅵ	－	－	－	－	－	－	－	－	亜円礫20
32	120	100	無	－	－	－	27	10	37%	13	48%	1	4%	3	11%	－	－	Ⅵ	3	11%	－	－	21	78%	3	11%	軽石2 ・泥岩1
33	125	87	無	－	－	－	25	－	－	3	12%	13	52%	7	28%	2	8%	Ⅵ	4	16%	－	－	21	84%	－	－	土器
34	160	105	無	－	－	－	41	11	27%	20	49%	9	22%	1	2%	－	－	Ⅵ	8	20%	－	－	19	46%	14	34%	（変成岩14）
35	50	40	無	－	－	－	10	2	20%	3	30%	5	50%	－	－	－	－	Ⅵ	－	－	－	－	10	100%	－	－	
36	140	50	無	－	－	－	21	2	10%	7	33%	9	43%	2	10%	1	4%	Ⅵ	2	10%	－	－	17	80%	2	10%	泥岩2
37	70	60	有	90	90	10	33	10	30%	10	30%	10	30%	2	6%	1	4%	Ⅵ	9	27%	－	－	14	43%	10	30%	頁岩8 ・軽石2
38	57	40	有	70	70	15	27	5	19%	7	26%	10	36%	5	19%	－	－	Ⅵ	9	33%	－	－	18	67%	－	－	
39	100	67	有	70	70	10	33	3	9%	4	12%	11	34%	12	36%	3	9%	Ⅵ	7	21%	－	－	25	76%	1	3%	泥岩１・土器
40	95	60	有	55	55	10	27	6	22%	7	26%	9	33%	2	8%	3	11%	Ⅵ	－	－	－	－	27	100%	－	－	



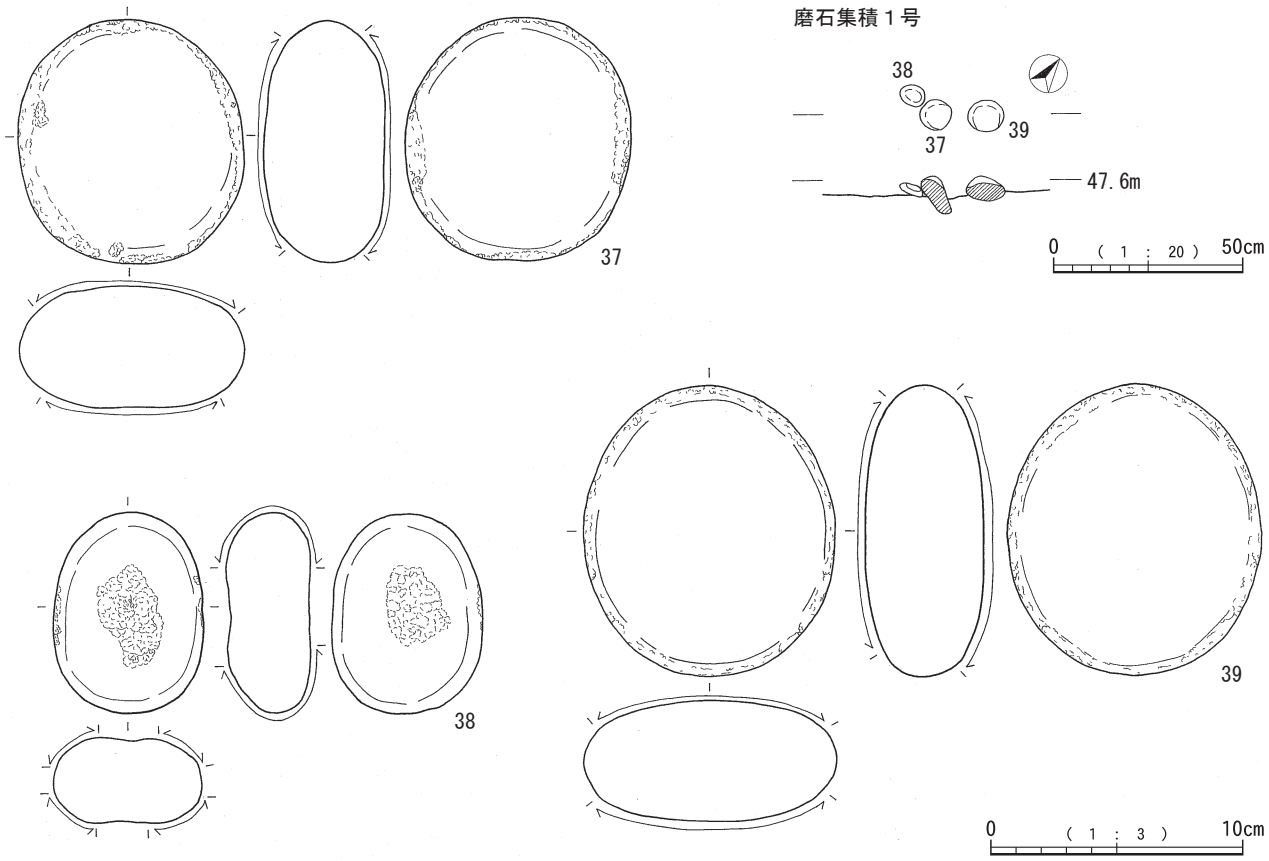
第 39 図　縄文時代早期　剥片･磨石集積遺構配置図



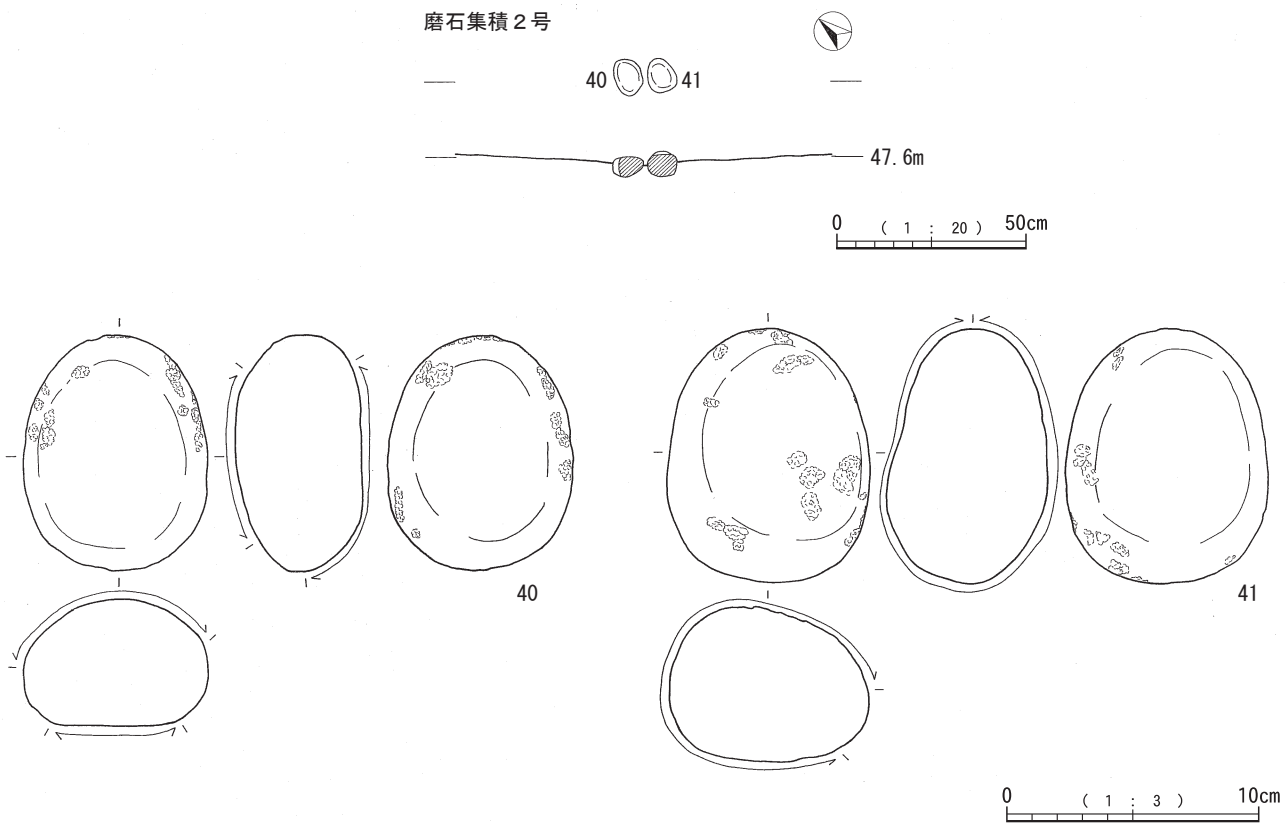
第 40 図　剥片集積１号　出土状況及び遺物



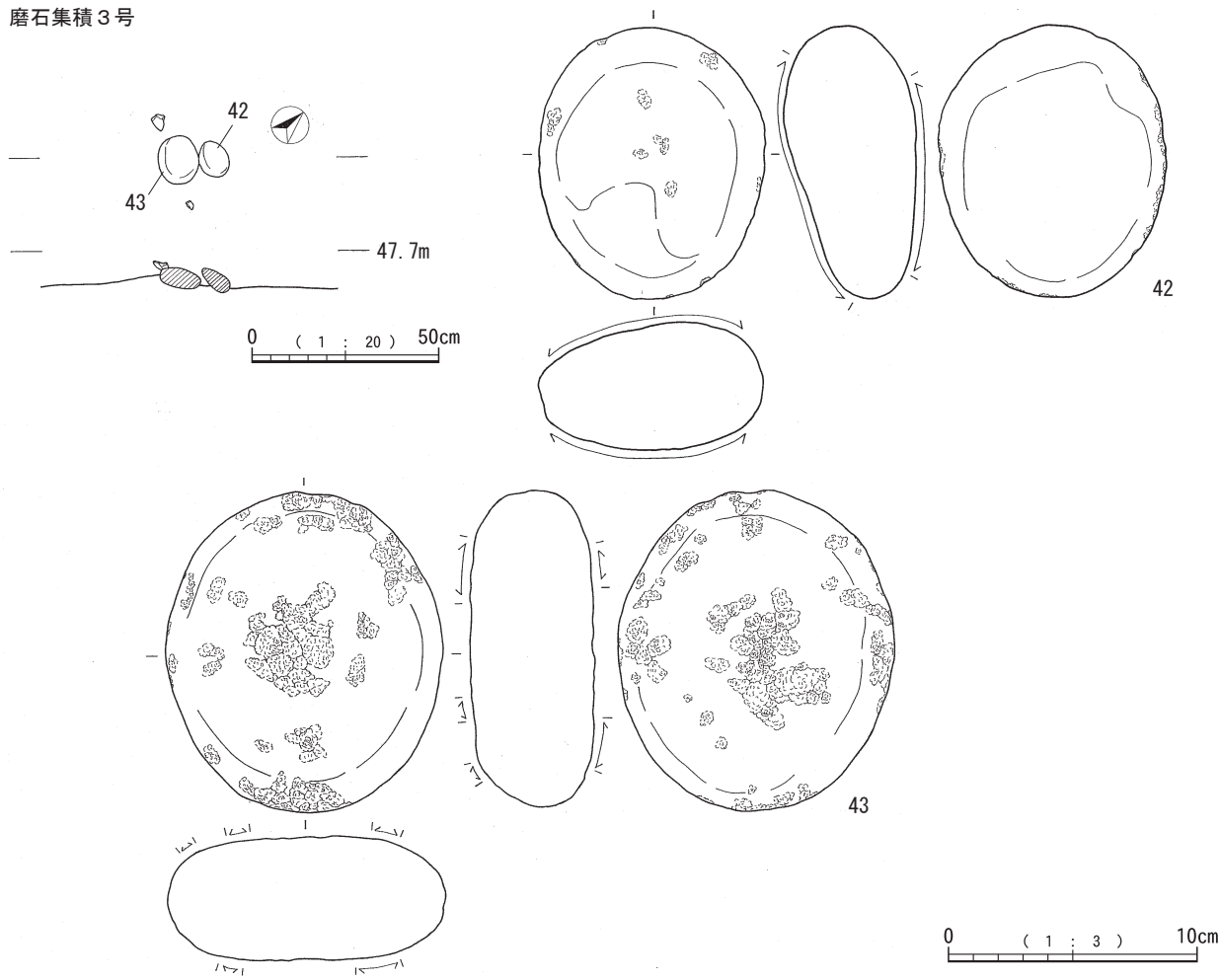
第 41 図　剥片集積２号　出土状況及び遺物



第 42 図　磨石集積１号　出土状況及び遺物



第 43 図　磨石集積２号　出土状況及び遺物



第 44 図　磨石集積３号　出土状況及び遺物

する。礫は，10 ㎝程度の亜角礫数個と５㎝程度の亜角礫あわせて 27 個で構成されていた。石材は，そのほとんどが凝灰岩である。10 ㎝程度の凝灰岩の亜角礫を中央下部に数個配し，その周りに小礫を配している。掘り込みは集石 38 号・39 号と同程度の規模である。集石内からは，数点の炭化物が検出された。詳細は，第Ⅴ章自然科学分析の項で述べるが，分析結果は炭化材・ケヤキ 6470 ± 25BPという結果であった。遺構に関連する遺物は確認されなかった。

（２）剥片集積遺構

Ｇ－ 15 区とＦ－ 13 区から剥片の集積遺構が検出された。良質のハリ質安山岩の素材剥片を数点ずつ集積したもので，石匙の素材となったものと思われる。

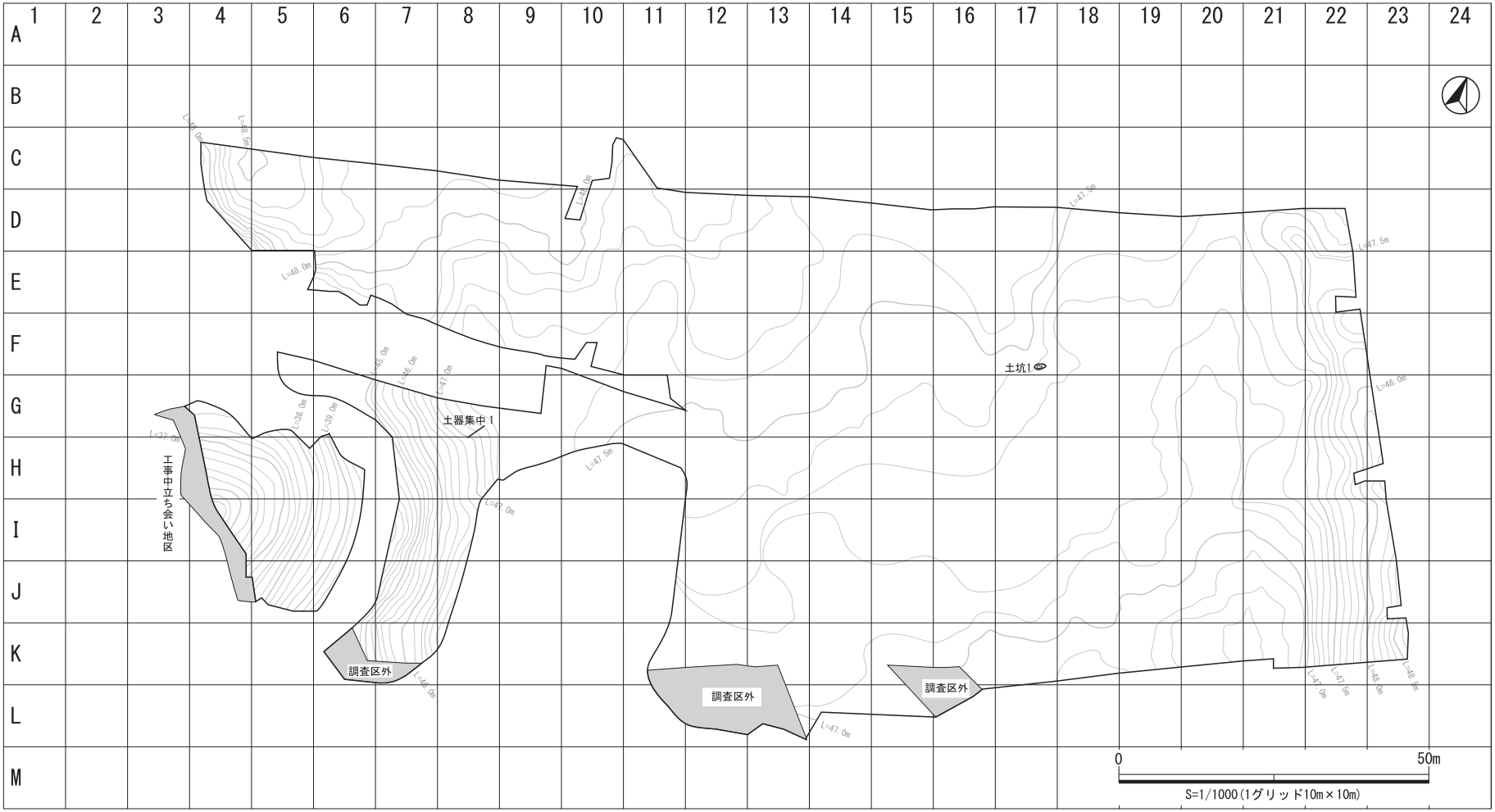
剥片集積１号（第 40 図　29 ～ 32）

第２地点の中央部，Ｇ－ 15 区のⅦ層から検出された南側には集石９号・13 号や北西部の 10 ～ 20 ｍ離れたところからは，多数の集石遺構等が検出されている。

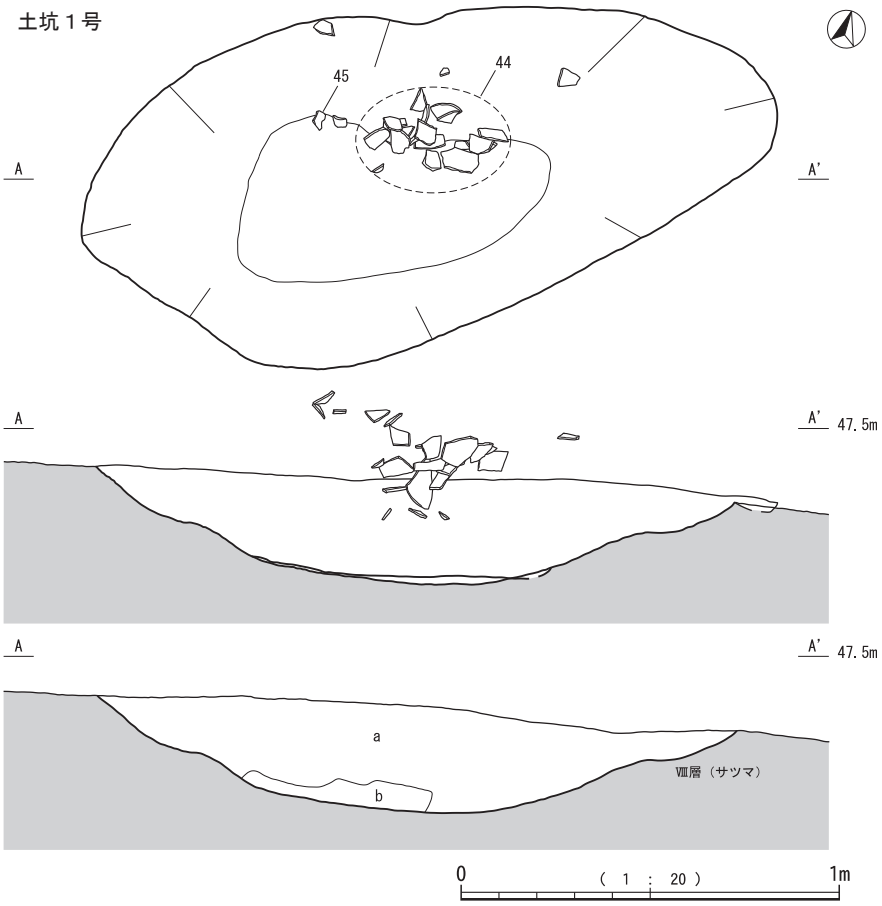
６枚の良質のハリ質安山岩の剥片が斜めに重なるような状況で検出された。29 は縦長の剥片で片面には主要剥離面を残し，一方の側辺と打面には礫皮面を細長く残す。連続して縦長剥片が，剥出されていることがうかがわれる。また，片方の側辺上部には部分的に丁寧な剥離が施されている。30 は横長剥片で，礫皮面を左側縁と下面に残している。図右上側の抉り状の部分には，使用による微細剥離が残され，先端部にも刃部状の微細な剥離がみられる。31 は片面に主要剥離面を残し，一方の面は打面転移により剥片を剥出している。打面と右側縁と下面に礫皮面が残り，素材礫の大きさが想定できる。32 は，横長剥片で打面は礫皮面である。その形状から石匙の目的剥片の可能性がある。左側の上辺に刃部形成が見られるものの，下部は厚みの調整のための平坦剥離や刃部作出のための剥離は行われず，未成品とも捉えられるものである。

剥片集積２号（第 41 図　33 ～ 36）

第２地点の中央部北側，Ｆ－ 13 区のⅥ層から検出された。多数の集石遺構等が検出されているエリアである。10 枚の良質のハリ質安山岩の剥片が斜めに折り重なるような状況で検出された。33，34 は横長剥片を利用し，その形状から石匙の目的剥片の可能性がある。33 は片面に主要剥離面を残すものの，上部は打面・打点を除



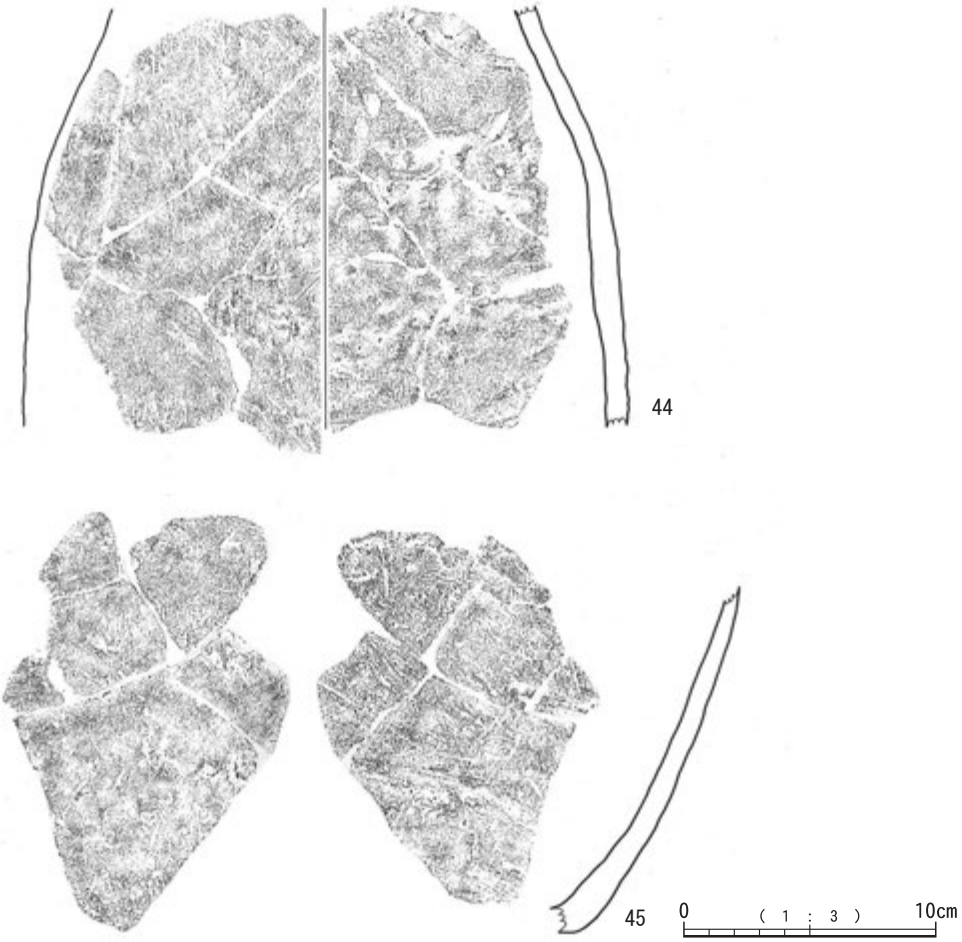
第 45 図　土坑 1 号・土器集中　遺構配置図



埋土

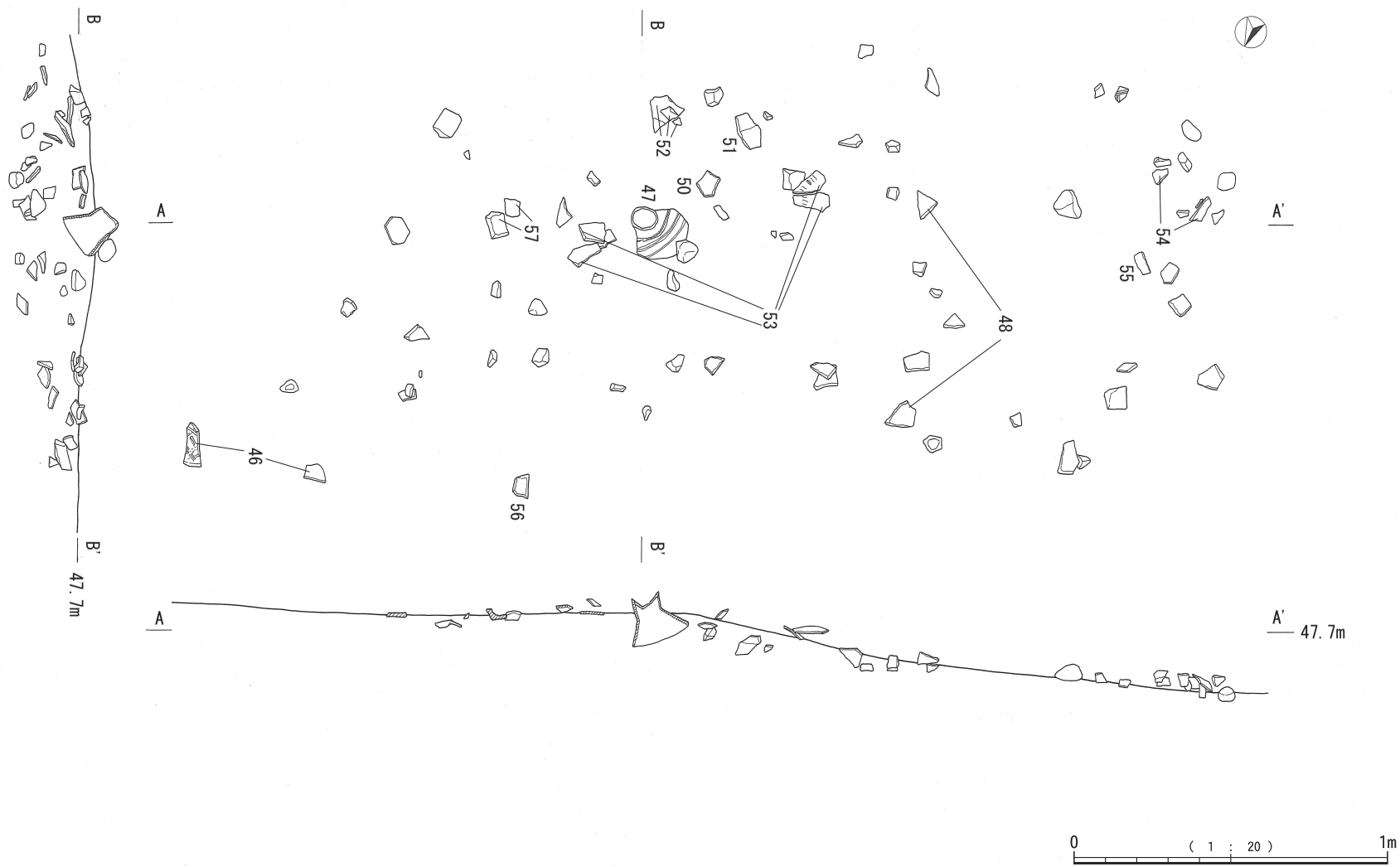
ａ：暗褐色土
（10YR3/3）シルト質 粘性やや有り よくしまる 層中にφ1mm大の白色粒子及び1mm大のサツマ由来のパミスφ0.1～2cm大のサツマブロックを含む Ⅶ層ベース

ｂ：褐色土
（7.5YR4/4） HC （重埴土） 粘性強いややしまる 層中にφ1cm大のサツマブロックを若干含む



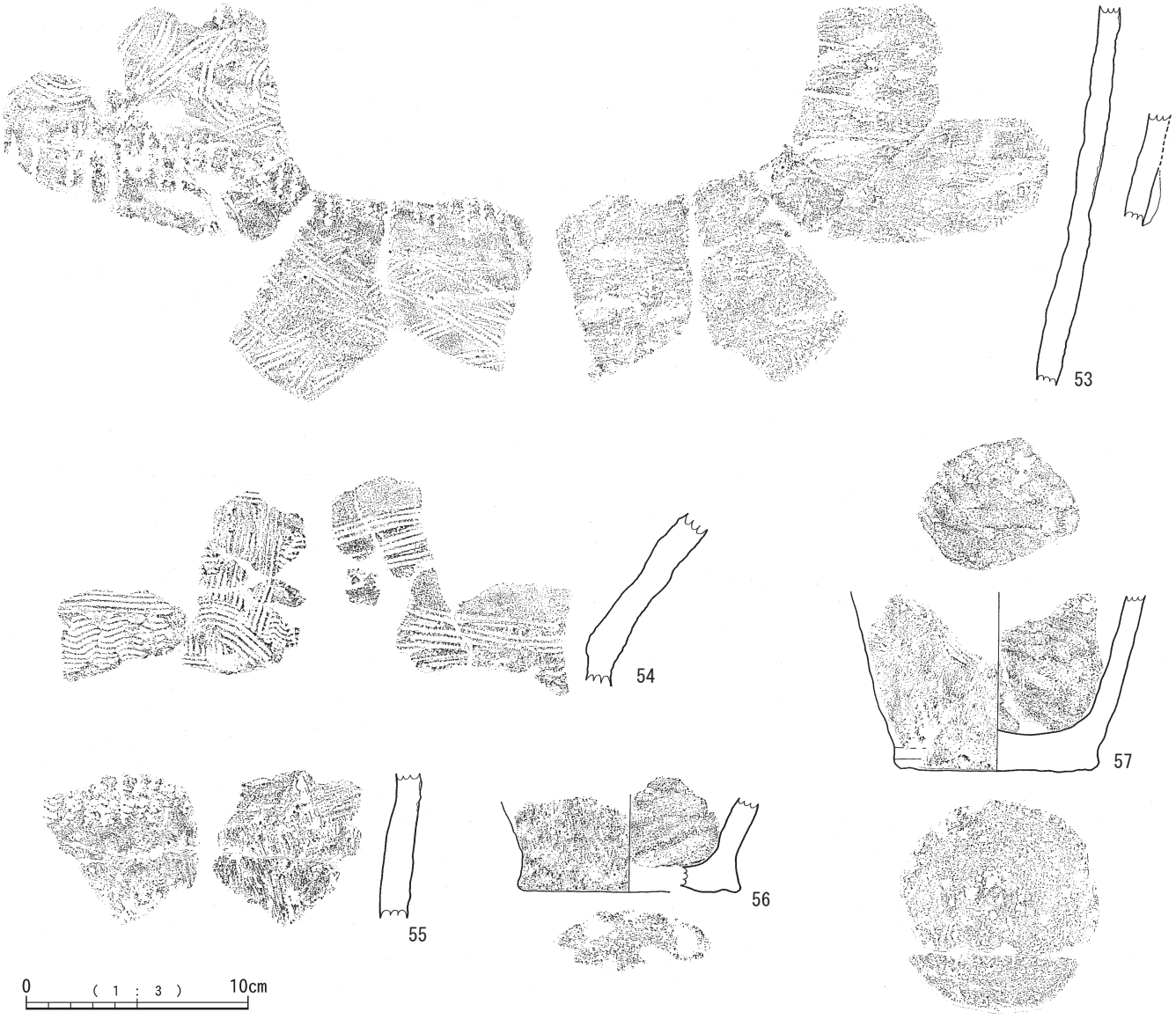
第 46 図　土坑１号及び出土遺物

土器集中か所



第 47 図　土器集中か所　出土状況図

第 48 図　土器集中か所 出土遺物（１）



第 49 図　土器集中か所　出土遺物（２）

去して丁寧な剥離で整形を行っているが，下辺には刃部作出のための剝離等は行われていない。34 は片面に礫皮面を大きく残し，もう一方の面には主要剥離面を残す。打点側は，33 と同様の打面・打点を取り除かれている。35 は，礫皮面を打点として剥出された縦長剥片で，打瘤部を除去している。右辺の一部が背面側からの剥離で抉られており，これも石匙の目的剥片と考えられる。36 は，片面が礫皮面でもう一方の面が主要剥離面であることから，大割りされた剥片の剥離面を打面として，最初の打撃で石核から作出された剥片と思われる。

（３）磨石集積遺構

磨石・敲石・凹石等を数個集積した遺構が第２地点（エリア３）から３基検出された。便宜上，磨石集積と言う呼称で報告する。

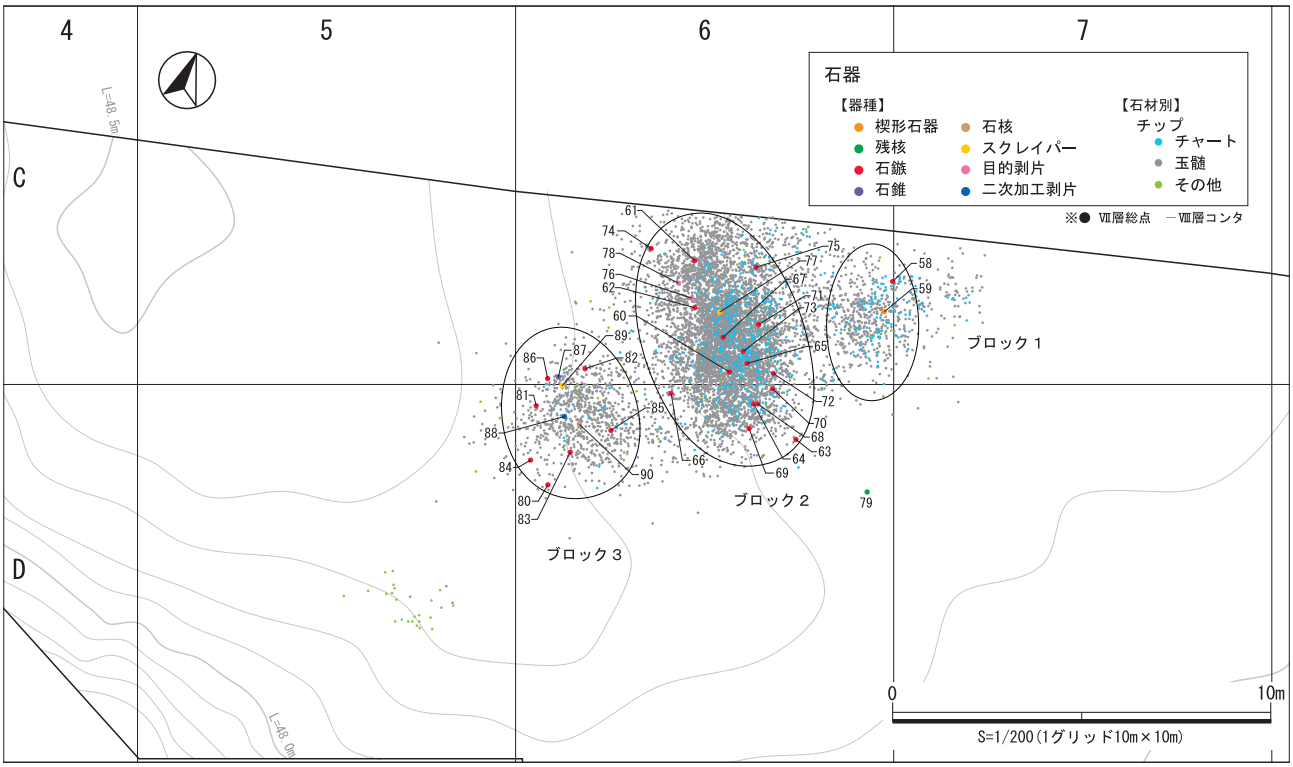
磨石集積１号（第 42 図　37 ～ 39）

Ｊ－ 14 区のⅥ層から検出された。37 が 38 に斜めに重なるような状況で，そしてその数㎝東側で 39 が検出された。37，39 は，磨石及び敲石として使用されたものであり，両面に磨面，側面の全面に敲打痕が残されている。38 は凹石，磨石及び敲石として用いられたものであり，両面に凹み及び磨り面と両側辺に敲打痕が残されている。石材は，37，39 が安山岩，38 が砂岩である。なお，掘り込みや遺構に関係する遺物は検出されなかった。

磨石集積２号（第 43 図　40・41）

Ｉ－ 12 区のⅥ層から検出された。40，41 が並んだ状況で検出された。２点ともほぼ同様の形状を呈し，若干の敲打痕と全面に磨面が遺されている。石材は２点とも花崗岩である。なお，掘り込みや遺構に関係する遺物は検出されなかった。

磨石集積３号（第 44 図　42・43）



第 50 図　チップ集中か所

Ｉ－ 13 区のⅥ層から検出された。42 が 43 に斜めに重なるような状況で，そしてその周辺に２点の土器の小片が検出された。42 は片面に若干の敲打痕と両面に磨り面が残る。43 は中央部を中心に敲打痕が残り，両面に部分的に磨り面が残る。石材は 42 が安山岩，43 が砂岩である。周辺から出土した 2 点の土器は，小片のため図化し得なかったが，その調整や胎土からＸ類，塞ノ神Ｂ式土器かⅪ類，苦浜式土器と思われる。なお，掘り込みは検出されなかった。

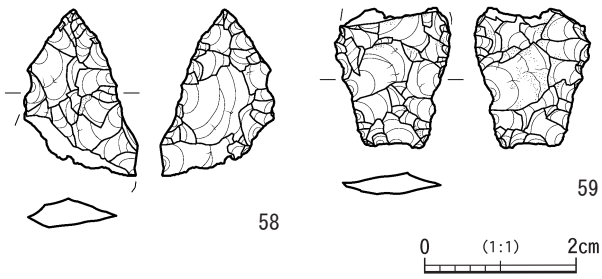
（４）土坑１号（第 46 図　44・45）

Ｆ－ 17 区のⅧ層上面から検出された。その規模は，長軸約 180 ㎝，短軸約 90 ㎝の長楕円形で，検出面からの深さ約 30 ㎝の浅いすり鉢状である。周辺には，その他の遺構等は存在しない。埋土は２層に分けられる。ａ層は１㎜程度の白色粒と薩摩火山灰由来のパミス及び 0.1 ～ 2 ㎝程度の薩摩火山灰のブロックを含み，ｂ層は，粘性が強く１㎝程度の薩摩火山灰のブロックを若干含むものである。検出面の上下数 10 ㎝で遺物が検出された。44 は，Ⅻ類，無文土器の胴部最大径付近から内湾しながら口縁へと至る破片である。推定胴部最大径は約 25 ㎝程度である。器壁は本遺跡のⅥ・Ⅶ層出土の大部分の土器よりもやや薄く色調もにぶい黄橙と明るい。また，調整は内外ともにナデ調整である。内面は粘土の繋ぎ目も明瞭に観察できるほどに粗い。45 は，上記の土器片と同一個体の可能性のある土器の底部から胴部にかけての破片である。

（５）土器集中か所（第 47 ～ 49 図　46 ～ 57）

Ｇ－８区のⅥ層から数個体の土器が集中して出土した。出土状況は，約 3.5 ｍ× 1.5 ｍの範囲で中央にやや大きめの土器が集中し，他は散在した状態であり，掘り込み等は検出されなかった。

46 は復元口縁径 14.0 ㎝，器高約 13.2 ㎝の小型の深鉢形土器である。口縁部に貝殻連続刺突，外面は工具による区切られた格子状の文様が施されている。内外面の調整はナデ調整である。47 は頸部からラッパ状に大きく開く器形で口縁径 16.7 ㎝を測る深鉢形土器である。頸部及び口縁部に貝殻連続刺突が施され，その間は横位の条痕が施されている。48 ～ 50 は口縁部の破片で，48 及び 50 は口縁部に貝殻連続刺突が施され，その下に条痕が施されるものである。49 は口縁先端部で，外面には沈線による平行及び山形の文様が描かれている。口唇部から内面にかけても沈線による山形の文様が施されているが，その沈線は外面よりも太い。また，外面及び口唇部の沈



第 51 図　ブロック１の石器

線内には赤色顔料が塗布されている。内外面の調整はていねいなナデ調整である。

51 ～ 55 は頸部付近から胴部の破片である。51 ～ 53 は貝殻による連続刺突文の間に条痕を施すものである。特に 53 は刺突文の直下には縦の幅 0.4 ㎝，長さ 2 ㎝の垂下する突帯が貼り付けられ，斜めの条痕が施されている。また，刺突文より上の条痕は，曲線状である。調整は外面がナデ調整，内面がケズリによる調整で，胎土は砂粒を含み非常に粗い。

56，57 は接地面付近が外へ張り出す底部である。両者ともその調整は内外面ともにナデ調整であるが，57 の胎土には，多くの白粒や金雲母が観察される。49 を除けば，すべてＸ類に当たり，49 はⅧ類に当たる。49 は周辺の一括遺物に入っており，遺構とは関係の無い可能性が高い。

（６）チップ集中か所

チップ集中か所（第 50 図）

Ｃ・Ｄ－６区のⅦ層からチップ等の集中か所が検出された。石核・石鏃・スクレイパー等が合計で 9380 点出土した。その内訳は表９の通りであるが，そのほとんどの約 8500 点が玉髄で次がチャート約 700 点であった。また，整理作業で分布図を作成し，検討したところ，３つのブロックに細分されることが判明した。

ブロック１（第 51 図　58・59）

ブロック１はＣ－６区の南西側から検出された。玉髄とチャートを中心とし，その他の石材は数点のみであった。58 は玉髄製の石鏃である。中央部の不純物の部分から欠損したもので，調整はやや粗い。59 は玉髄製の楔形石器である。上辺は欠損しているが，使用に伴う折れの可能性がある。58 と同様に調整はやや粗い。石鏃転用品とみられる。

ブロック２（第 52 図　60 ～ 79）

ブロック２はＣ・Ｄ－６区にかけて南北に５ｍ，東西に３ｍの範囲にフレイク・チップが分布する。この集中か所では最大のブロックで 5000 点以上のフレイク･チップと 20 点の石鏃や石鏃の未成品が検出された。そのうち未製品を含めて石鏃 16 点，スクレイパー１点，目的剥片２点，残核１点を図化した。ブロック２もブロック１と同様にそのほとんどが玉髄であるが，チャートのフレイク・チップも数百点は含まれ，チャート製の石鏃も５点検出された。

60，62，66，67，71 はチャート製の石鏃である。64，79 は頁岩で，それ以外は全て白色の玉髄を石材としている。

60 は細かい丁寧な剥離で木葉状の形状を作出している。基部に浅い抉りがある。61 は尖頭部から基部にいたるところが膨らむ形で，基部を欠損する。両面とも丁寧な剥離で仕上げられている。62 は木葉状の形状をなし，基部を欠損している。左右がやや非対称であり，整形段階で欠損したもので未製品と考えられる。63 は大ぶりの剥片を整形剥離し，背面は平坦剥離しているが，腹面は右側に打瘤も残っている。未製品である。

64 は頁岩製の石鏃の欠損品である。腹面側は丁寧に仕上げられているが，背面は，剥片面を大きく残すものである。なお，本ブロックにおける頁岩製の石鏃はこの１点のみであり，頁岩のフレイク・チップは 70 点であった。65 は先端部で，整形段階で欠損したものであろう。二次的な被熱を受けている。66 は先端部が節理で欠損した可能性がある。67 はわずかに中央部が凹む基部の破片で，薄く丁寧に仕上げられている。これも節理で欠損した可能性がある。68 は基部である。胴が張らずに真っ直ぐ立ち上がる形である。69 は尖頭器の破片で，先端と基部を欠く。70，71，72 はいずれも基部である。70 は基部で，かすかに凹み，71 は基部が浅く抉られ脚が三角形状に尖る。72 は基部がわずかだが残るだけだが，浅い抉りが想定できる。73，74 は整形剥離段階の未製品と考えられる。74 は縦長剥片を素材とし，剥片形状をよく残す。75 は先端が欠損している。これも整形剥離の段階に節理で折れたものと考えられ，周縁の整形剥離を行っているが腹面が残っており未製品である。76 は節理でステップしてやや不正形の剥片であるが，これぐらいの目的剥片を剥出しようとしたものと考えられる。77 は剥片の縁辺部に刃部を形成したスクレイパーである。78 は縦長剥片で，目的剥片と考えられる。79 は頁岩の残核の可能性があるものである。

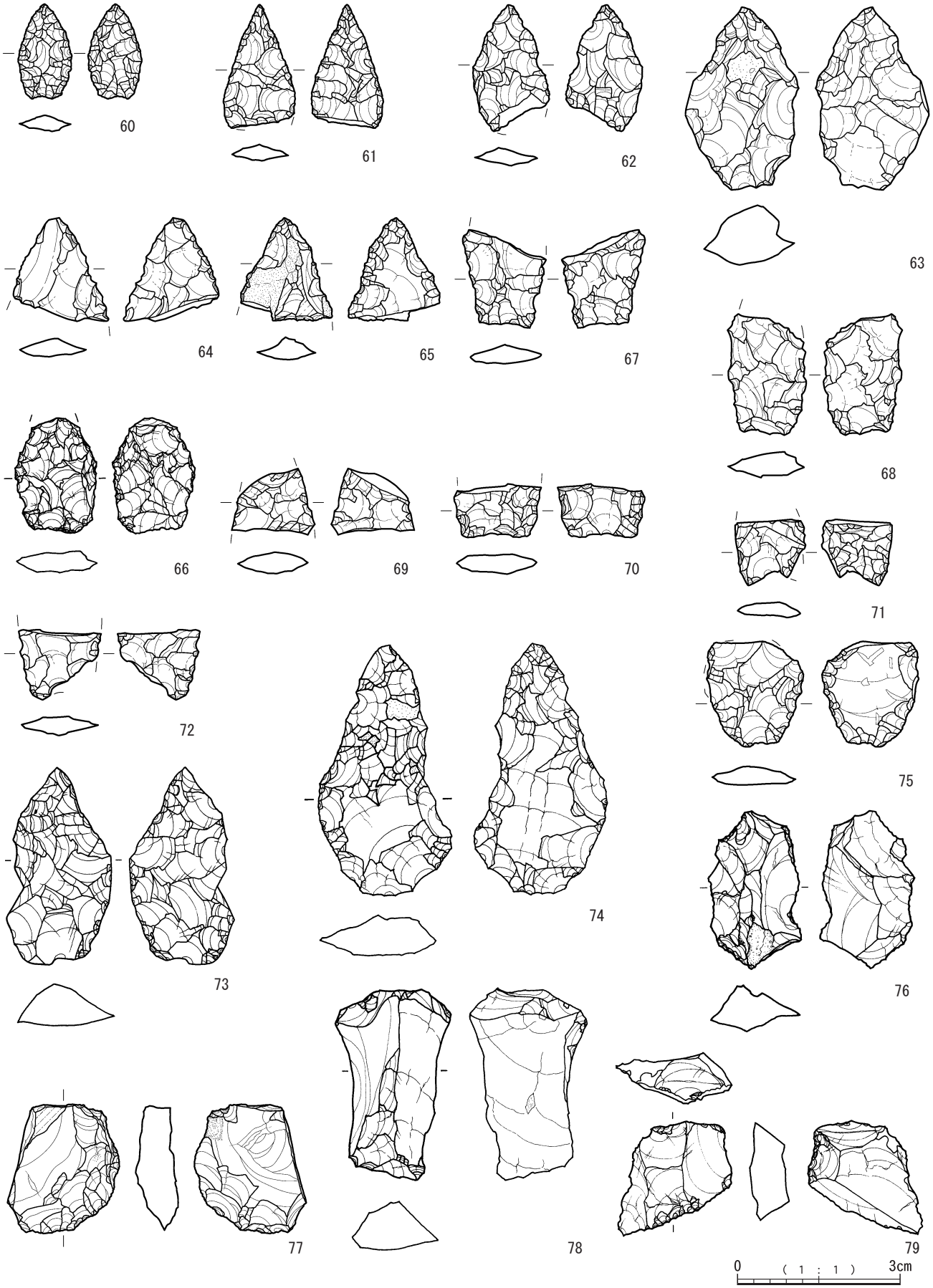
ブロック３（第 53 図　80 ～ 90）

ブロック３はブロック２の南西側のⅦ層から検出された。その規模は，ブロック１よりやや大きく，構成する石材は玉髄が大半を占める。玉髄製の石鏃や石鏃の未製品，多数のフレイク・チップが出土した。その中で未製品を含めて石鏃７点，石錐１点，スクレイパー１点，二次加工剥片１点，石核１点を図化した。

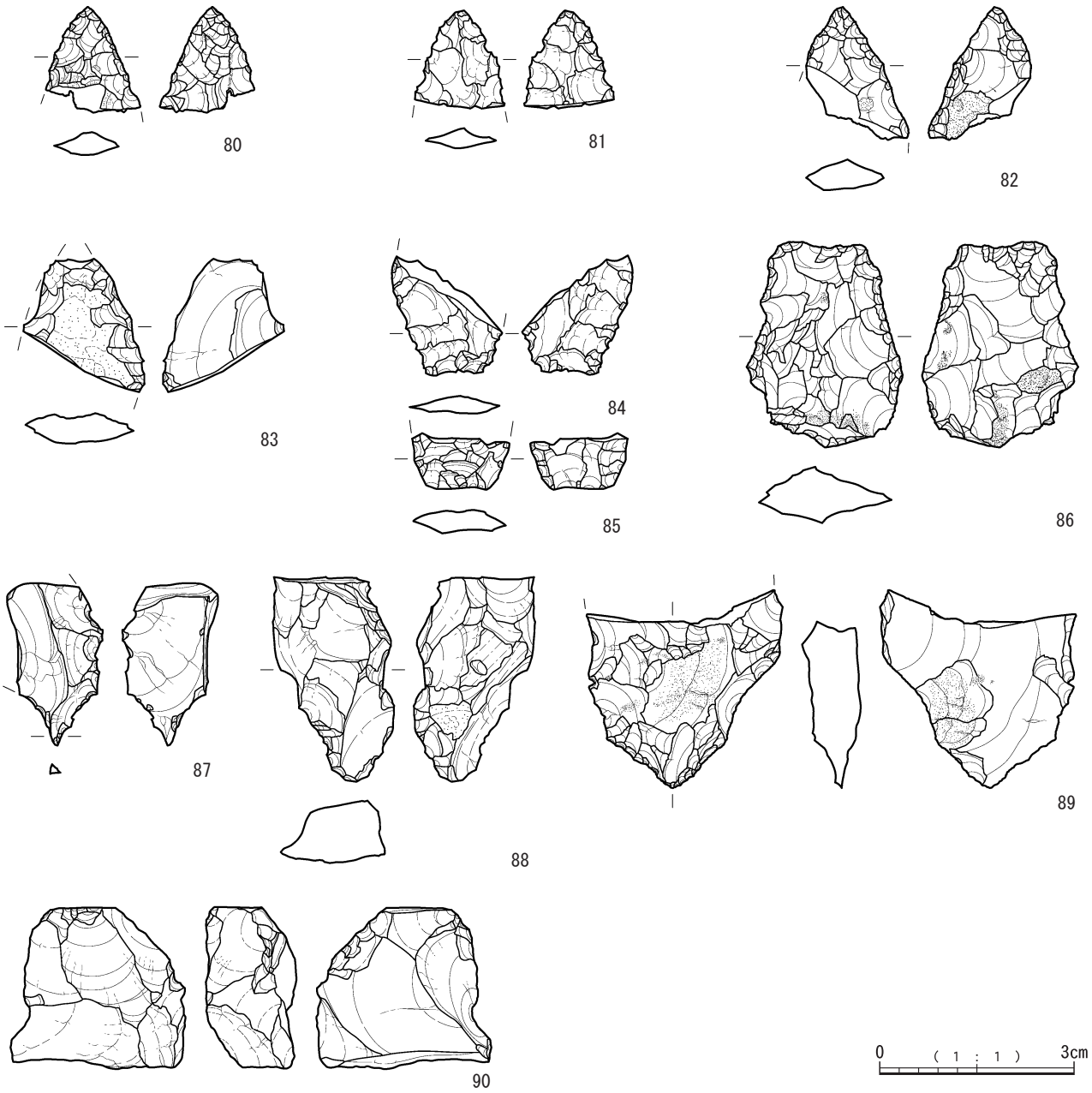
80 ～ 82 は石鏃の先端部に当たり，整形剥離から次の平坦剥離の段階で折れたものと考えられる。80，81 は仕上げ段階で欠損したものである。82 は，整形段階で放棄されたものであろう。

83 も石鏃の未製品の先端部と考えられ，主要剥離面に調整がなされておらず，背面にわずかに整形剥離がみられ，比較的早い段階で折れたものと考えられる。84 は中央がわずかにくぼむ石鏃の基部で，木葉形が想定できる。大久保型石鏃の特徴がよくうかがわれる未製品である。85 は石鏃のほぼ平基の基部である。86 はやや大型の石鏃の先端部を欠損したもので，基部が方形で中心部が少しへこむ，大久保型石鏃の特徴がよくうかがわれる未製品である。

87 は石錐で，剥片形状を生かしながら急角度の剥離を入れて先端部を作り出している。



第 52 図　ブロック２の石器



第 53 図　ブロック３の石器

88 は二次加工剥片で，腹面は節理で主要剥離面が観察できないが，左下部の側縁に二次加工がみられる。89 は逆三角形の形状を呈し，先端部近くの側辺に剥離を施して刃部を作出したスクレイパーである。90 は，石核であるが，やや灰色を呈する玉髄で，剥片の大きさからは大久保型石鏃の素材剥片を剥出した石核とは異なる。数か所の打面の転移が見られる。

大久保型石鏃については，未製品と折断による欠損品が多く，目的剥片もあることから，明らかに製作した場所であったと考えられる。また，石材として白色の玉髄を選択している。

第９表　チップ集中区石材一覧

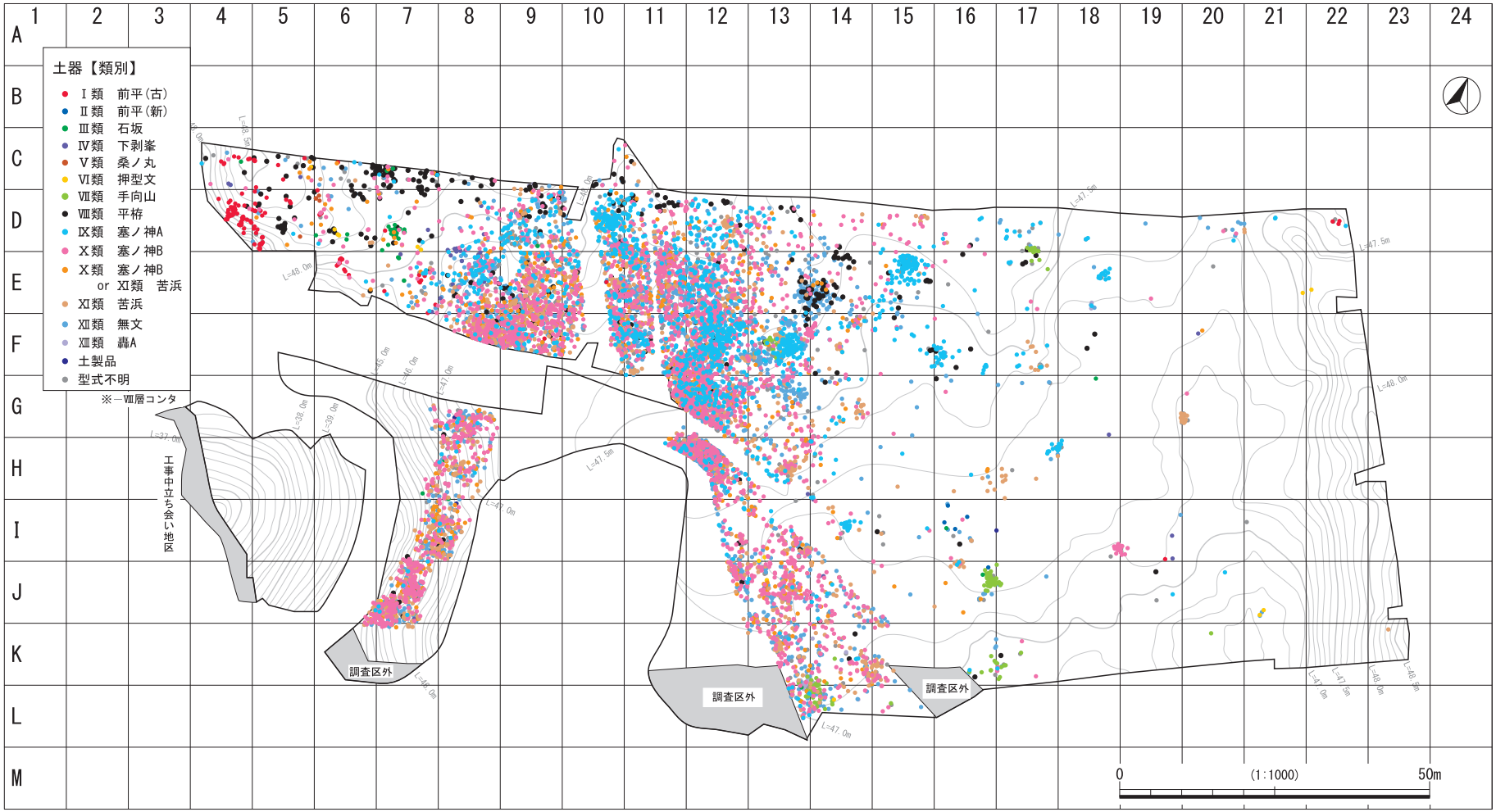
石質	玉髄	チャート	珪質頁岩	頁岩	黒曜石	安山岩	水晶	その他
石核（コア）	2	1						
石鏃	27	4		1				
スクレイパー	3							
フレイク・チップ	8456	709	27	44	28	13	2	54
その他	6		1		1	1		
合計	8494	714	28	45	29	14	2	54

第 10 表　縄文時代早期遺構内出土土器観察表

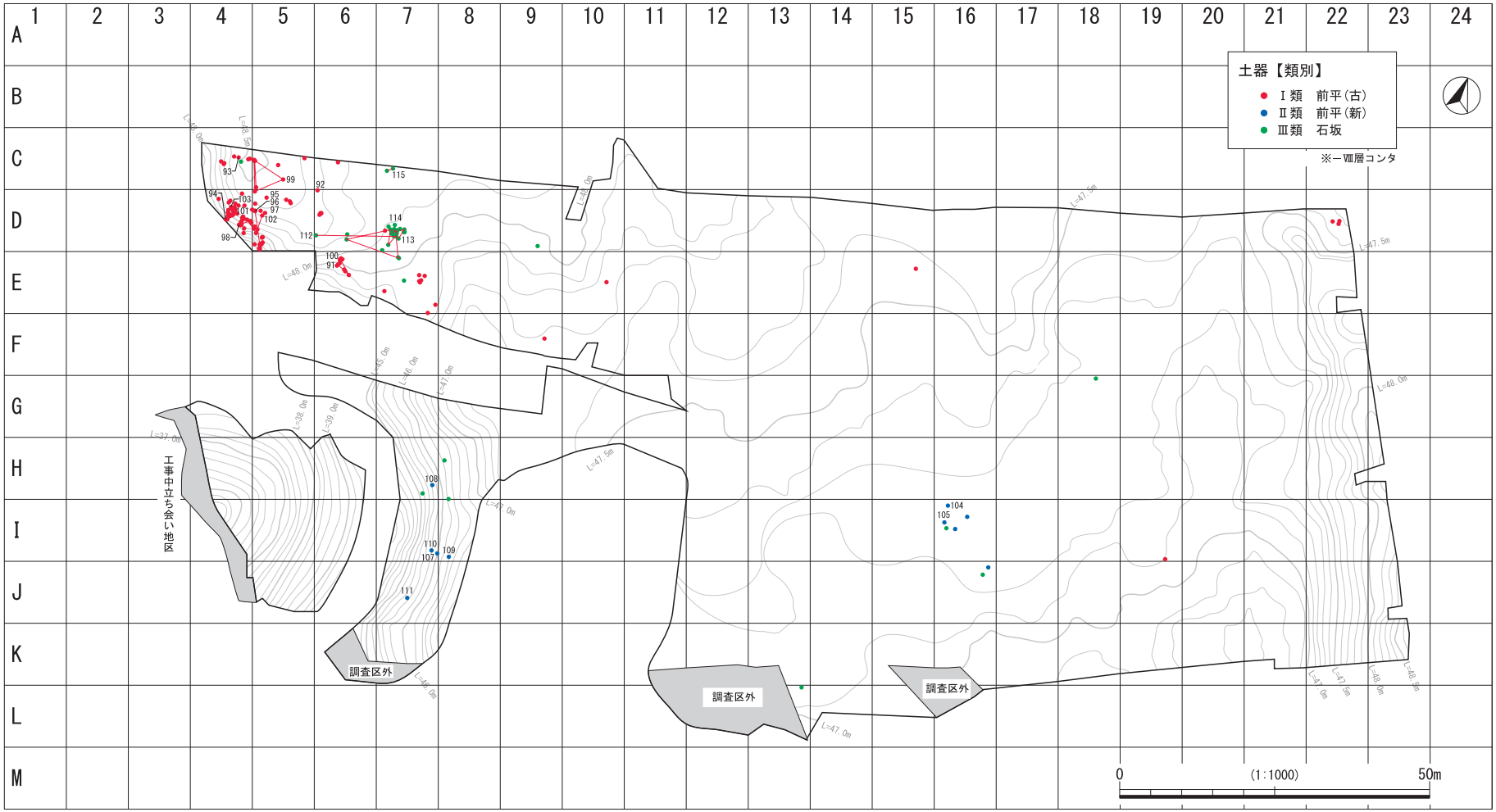
挿図番号	掲載番号	器種	分類	型式	出土区	層位	部位	法量			色調		主文様・調整等		胎土						取上番号	備考
								口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	白粒	黒粒	その他	
28	24	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-12	Ⅵ	胴部				にぶい橙	にぶい橙	撚糸	ナデ	○	○	○					18995	集石15号
36	26	深鉢	X	塞ノ神B	I-13	Ⅵ	底部		13.5		にぶい黄	にぶい黄	条痕	ケズリ・ナデ	○	○		○				SS33-8他	集石33号
38	27	深鉢	Ⅺ	苦浜	H-8	Ⅵ	胴部				にぶい黄橙	褐灰	条痕	条痕後ナデ	○	○			○			SS39-28	集石39号
	28	深鉢	Ⅺ	苦浜	H-8	Ⅵ	胴部				にぶい黄橙	褐灰	条痕	条痕後ナデ	○	○			○			SS39-27	集石39号
46	44	壺	Ⅻ	無文	F-17	Ⅶ	胴部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○	○					10833 (SK22-4) 他	土坑1号
	45	壺	Ⅻ	無文	F-17	Ⅶ	胴部～底部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○	○					10841 (SK22-12)他	土坑1号
48	46	深鉢	X	塞ノ神B	G-8	Ⅵ	口縁～底部	14.0	7.4	13.2	にぶい褐	にぶい褐	貝殻刺突・条痕	ナデ	○	○	○					土集2他	土器集中か所
	47	深鉢	X	塞ノ神B	G-8	Ⅵ	口縁～胴部	16.7			にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突・条痕	ナデ	○	○			○			土集1-44	土器集中か所
	48	深鉢	X	塞ノ神B	G-8	Ⅵ	口縁部				黒褐	にぶい黄橙	貝殻刺突・条痕	ナデ	○	○	○		○			土集35他	土器集中か所
	49	深鉢	Ⅷ	平栫	G-8	Ⅵ	口縁部				にぶい橙	橙	ナデ・沈線	ナデ	○	○	○					土集一括	土器集中 赤色顔料
	50	深鉢	X	塞ノ神B	G-8	Ⅵ	口縁部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突・条痕	ケズリ	○	○	○				砂粒	土集52	土器集中か所
	51	深鉢	X	塞ノ神B	G-8	Ⅵ	頸部				赤褐	赤褐	貝殻刺突・条痕	ナデ	○	○			○			土集56	土器集中か所
	52	深鉢	X	塞ノ神B	G-8	Ⅵ	頸部				赤褐	にぶい赤褐	貝殻刺突・条痕	ナデ	○	○	○		○	○		土集54他	土器集中か所
49	53	深鉢	X	塞ノ神B	G-8	Ⅵ	胴部				にぶい黄橙	灰茶褐色	貝殻刺突・条痕	ケズリ・ナデ	○	○	○		○		砂粒	土集58他	土器集中か所
	54	深鉢	X	塞ノ神B	G-8	Ⅵ	頸部				にぶい橙	にぶい橙	条痕	条痕	○	○			○			土集72他	土器集中か所
	55	深鉢	X	塞ノ神B	G-8	Ⅵ	胴部				にぶい赤褐	褐	貝殻刺突	ケズリ	○	○			○			土集45他	土器集中か所
	56	深鉢	X	塞ノ神B	G-8	Ⅵ	底部		10.0		にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○	○		○			土集7	土器集中か所
	57	深鉢	X	塞ノ神B	G-8	Ⅵ	底部		9.2		橙	赤褐	ナデ	ナデ	○	○		○	○			土集20他	土器集中か所

第 11 表　縄文時代早期遺構出土石器観察表

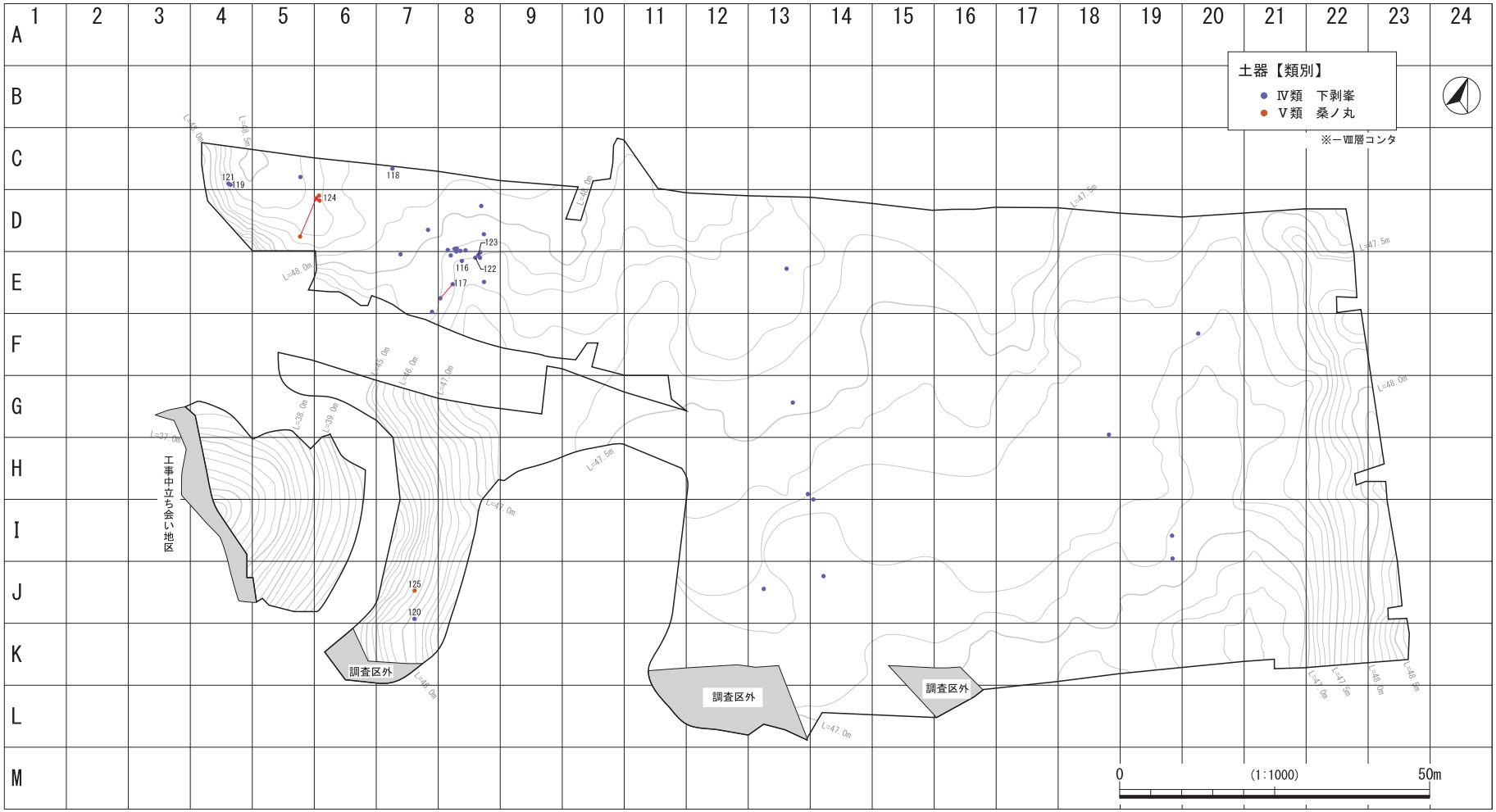
挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
26	23	石鏃	チャート	E-14	Ⅵ	(3.25)	(2.00)	0.35	1.10	14673	集石10号　欠損品
32	25	石鏃	チャート	D-4	Ⅶ	(1.50)	(1.20)	0.26	0.30	28243	集石25号　欠損品
40	29	剥片	安山岩	G-15	Ⅶ	11.05	6.36	1.75	124.10	12946	剥片集積１号
	30	剥片	安山岩	G-15	Ⅶ	6.20	9.25	1.90	81.50	12943	剥片集積１号
	31	剥片	安山岩	G-15	Ⅶ	8.45	9.10	1.60	115.30	12945	剥片集積１号
	32	剥片	安山岩	G-15	Ⅶ	5.50	9.96	1.60	59.00	12948	剥片集積１号
41	33	剥片	安山岩	F-13	Ⅵ	6.10	14.37	2.20	139.40	14010	剥片集積２号
	34	剥片	安山岩	F-13	Ⅵ	6.95	14.15	2.10	161.40	14009	剥片集積２号
	35	剥片	安山岩	F-13	Ⅵ	8.90	7.75	1.30	78.40	14007	剥片集積２号
	36	剥片	安山岩	F-13	Ⅵ	9.65	9.90	1.55	150.70	14005	剥片集積２号
42	37	磨・敲石	安山岩	J-14	Ⅵ	9.60	8.90	4.80	625.00	磨石集積１-１	磨石集積１号
	38	凹石・磨石・敲石	砂岩	J-14	Ⅵ	7.90	6.00	3.40	234.00	磨石集積１-３	磨石集積１号
	39	磨・敲石	安山岩	J-14	Ⅵ	11.40	10.00	4.70	831.00	磨石集積１-２	磨石集積１号
43	40	磨・敲石	花崗岩	I-12	Ⅵ	9.20	7.30	5.00	498.00	磨石集積２-１	磨石集積２号
	41	磨・敲石	花崗岩	I-12	Ⅵ	10.00	8.00	6.30	705.00	磨石集積２-２	磨石集積２号
44	42	磨・敲石	安山岩	I-13	Ⅵ	10.80	9.00	5.20	694.00	磨石集積３-３	磨石集積３号
	43	磨・敲石	砂岩	I-13	Ⅵ	12.70	11.10	5.00	956.00	磨石集積３-２	磨石集積３号
51	58	石鏃	玉髄	C-6	Ⅶ	(2.20)	(1.50)	0.42	1.10	24992	ブロック１　欠損品
	59	石鏃	玉髄	C-6	Ⅶ	(1.85)	(1.50)	0.35	1.00	25887	ブロック１　欠損品
52	60	石鏃	チャート	C-6	Ⅶ	1.73	1.00	0.30	0.50	35511	ブロック２
	61	石鏃	玉髄	C-6	Ⅶ	(2.25)	1.30	0.37	0.90	29577	ブロック２　欠損品
	62	石鏃	チャート	C-6	Ⅶ	(2.32)	(1.41)	0.35	1.10	25537	ブロック２　未製品
	63	石鏃	玉髄	D-6	Ⅶ	3.32	2.10	1.05	5.58	27976	ブロック２　未製品
	64	石鏃	頁岩	D-6	Ⅶ	(1.89)	(1.75)	0.33	1.15	30356	ブロック２　欠損品
	65	石鏃	玉髄	C-6	Ⅶ	(1.90)	(1.70)	0.60	1.30	36363	ブロック２　欠損品
	66	石鏃	チャート	D-6	Ⅵ	(2.15)	1.50	0.45	1.51	20741	ブロック２　欠損品
	67	石鏃	チャート	C-6	Ⅶ	(1.80)	(1.52)	0.35	1.02	36437	ブロック２　欠損品
	68	石鏃	玉髄	D-6	Ⅶ	(2.22)	(1.44)	0.45	1.70	35388	ブロック２　欠損品
	69	石鏃	玉髄	D-6	Ⅶ	(1.23)	(1.52)	0.40	0.76	24826	ブロック２　欠損品
	70	石鏃	玉髄	D-6	Ⅶ	(1.00)	(1.60)	0.40	0.66	31086	ブロック２　欠損品
	71	石鏃	チャート	C-6	Ⅶ	(1.20)	(1.30)	0.28	0.51	30165	ブロック２　欠損品
	72	石鏃	玉髄	C-6	Ⅶ	(1.28)	(1.52)	0.34	0.67	29232	ブロック２　欠損品
	73	石鏃	玉髄	C-6	Ⅶ	3.60	1.90	0.80	4.61	31313	ブロック２　未製品
	74	石鏃	玉髄	C-6	Ⅵ	4.65	2.45	0.75	6.12	21440	ブロック２　未製品
	75	石鏃	玉髄	C-6	Ⅶ	(1.95)	(1.80)	0.38	1.60	33528	ブロック２　未製品
	76	目的剥片	玉髄	C-6	Ⅵ	2.90	1.75	0.85	3.39	21416	ブロック２
	77	スクレイパー	玉髄	C-6	Ⅶ	2.35	2.05	0.80	4.60	30236	ブロック２
	78	目的剥片	玉髄	C-6	Ⅶ	3.55	2.25	0.90	5.89	25194	ブロック２　未製品
	79	残核	頁岩	D-6	Ⅵ	2.10	2.10	0.95	2.89	22084	ブロック２
53	80	石鏃	玉髄	D-6	Ⅶ	(1.60)	(1.45)	0.41	0.70	30874	ブロック３　欠損品
	81	石鏃	玉髄	D-6	Ⅶ	(1.50)	(1.38)	0.29	0.61	27237	ブロック３　欠損品
	82	石鏃	玉髄	C-6	Ⅶ	(2.05)	(1.60)	0.60	1.10	24371	ブロック３　欠損品
	83	石鏃	玉髄	D-6	Ⅶ	(2.30)	(1.58)	0.47	1.84	27178	ブロック３　未製品
	84	石鏃	玉髄	D-6	Ⅶ	(1.80)	(1.70)	0.28	0.82	25116	ブロック３　未製品
	85	石鏃	玉髄	D-6	Ⅶ	(0.84)	(1.50)	0.35	0.50	22502	ブロック３　欠損品
	86	石鏃	玉髄	C-6	Ⅶ	3.15	2.40	1.13	7.00	24789	ブロック３　未製品
	87	石錐	玉髄	C-6	Ⅶ	(2.31)	(1.48)	0.15	2.30	24784	ブロック３　欠損品
	88	二次加工剥片	玉髄	D-6	Ⅶ	3.11	1.88	0.96	4.83	28147	ブロック３
	89	スクレイパー	玉髄	D-6	Ⅶ	3.05	3.00	1.00	8.00	25922	ブロック３　欠損品
	90	石核	玉髄	D-6	Ⅶ	2.50	2.71	0.90	9.37	27231	ブロック３



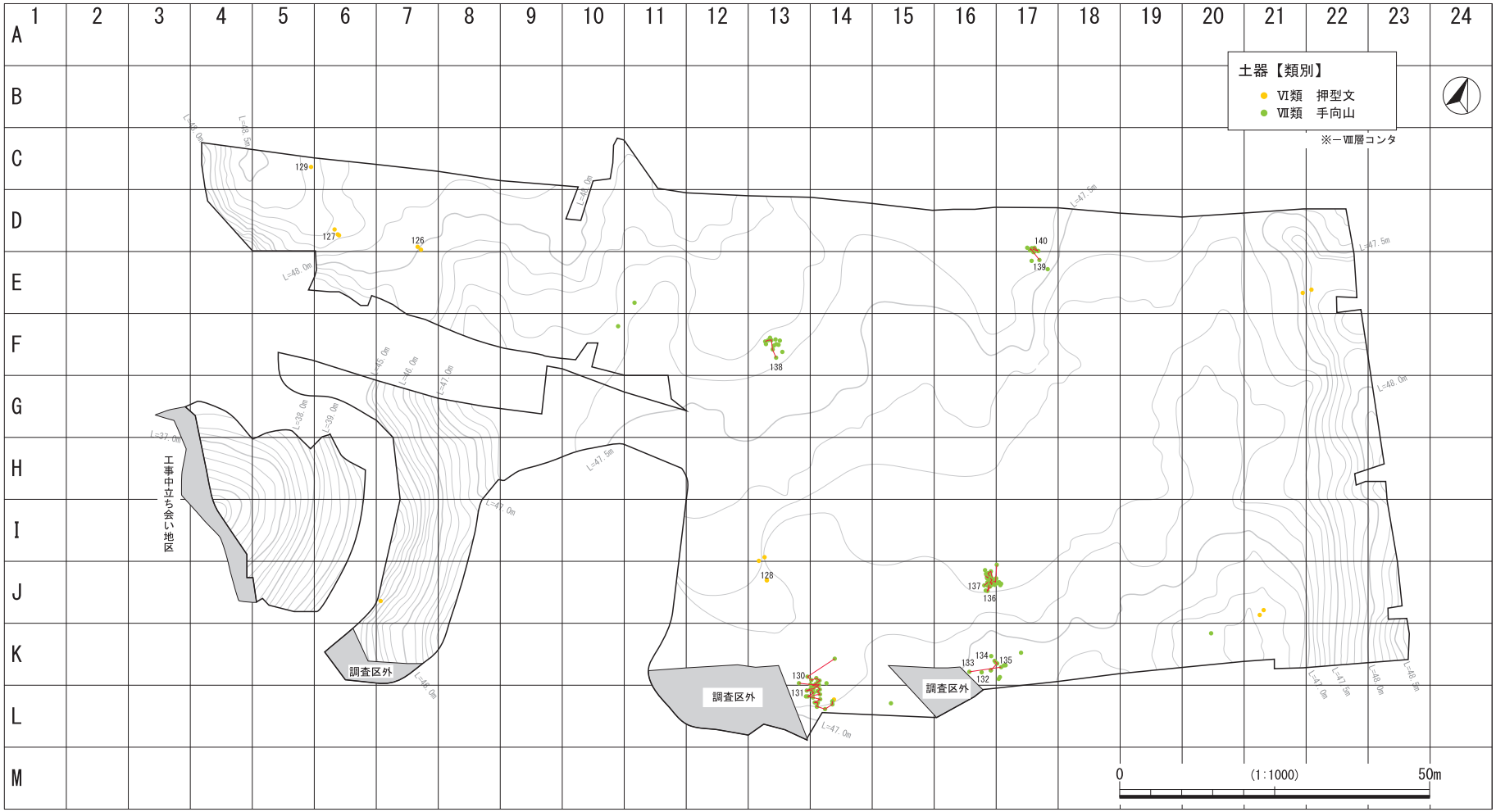
第 54 図　縄文時代早期　土器出土状況図　全体



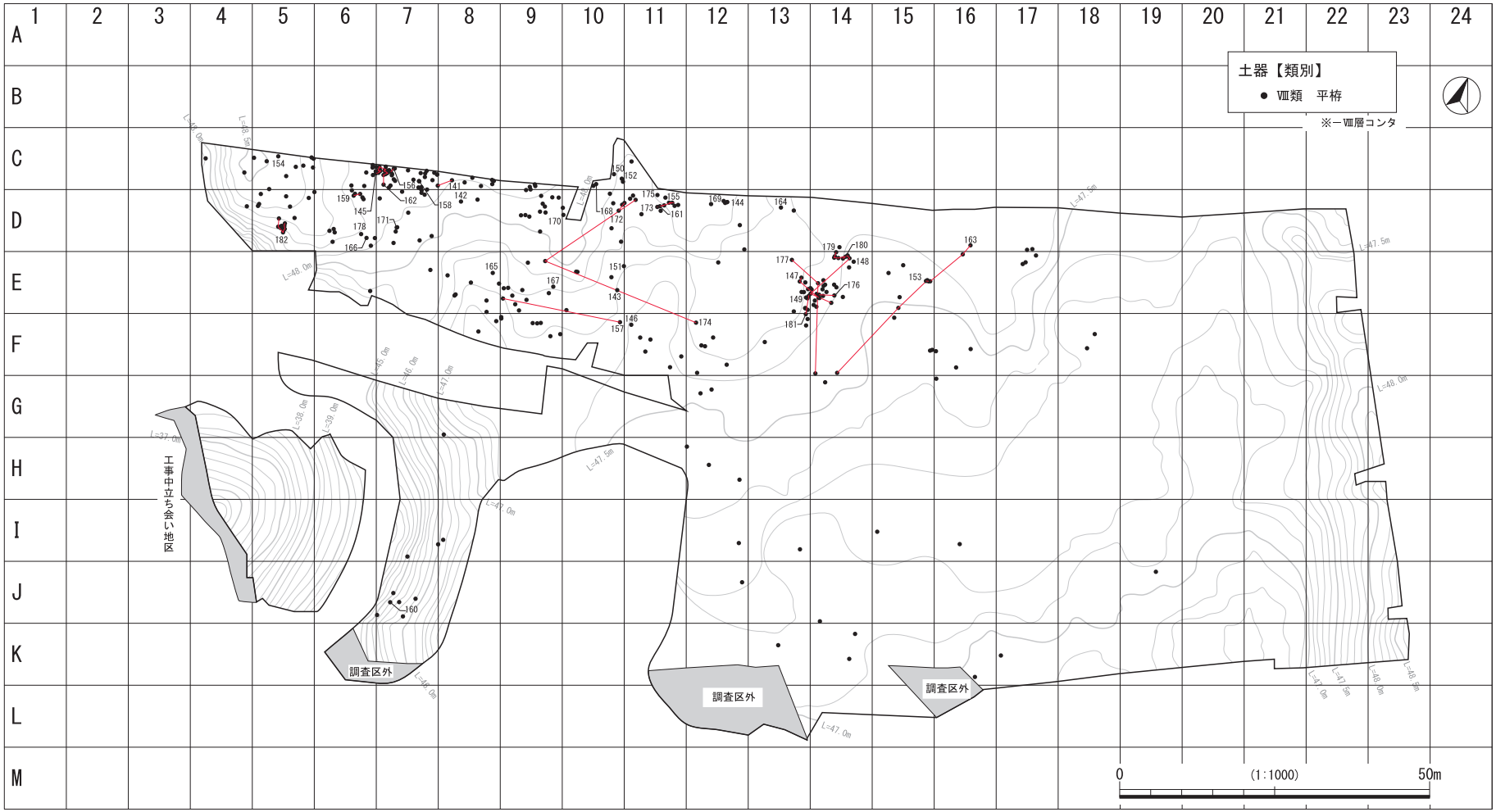
第 55 図　縄文時代早期　土器出土状況図　Ⅰ～Ⅲ類



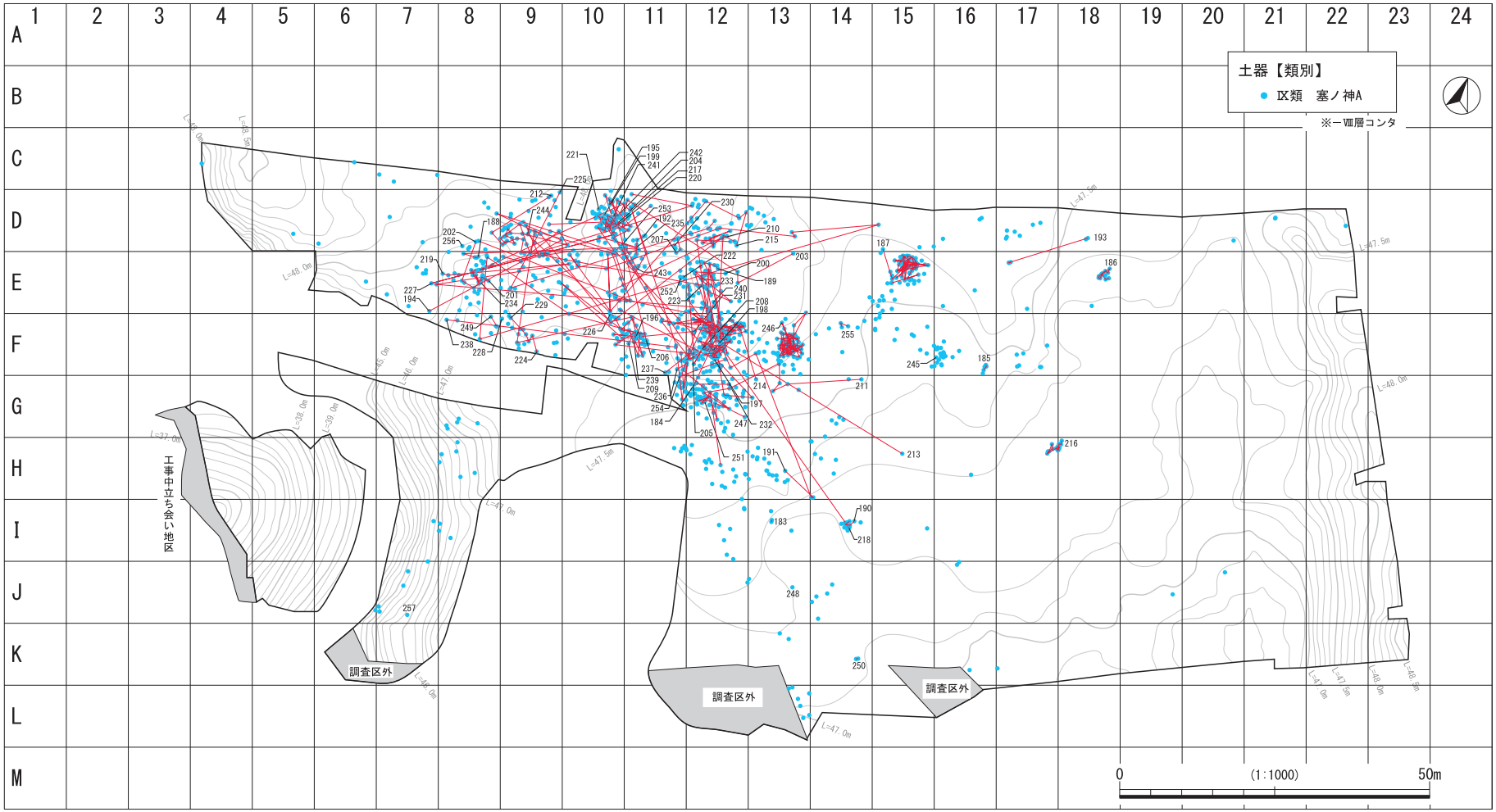
第 56 図　縄文時代早期　土器出土状況図　Ⅳ・Ⅴ類



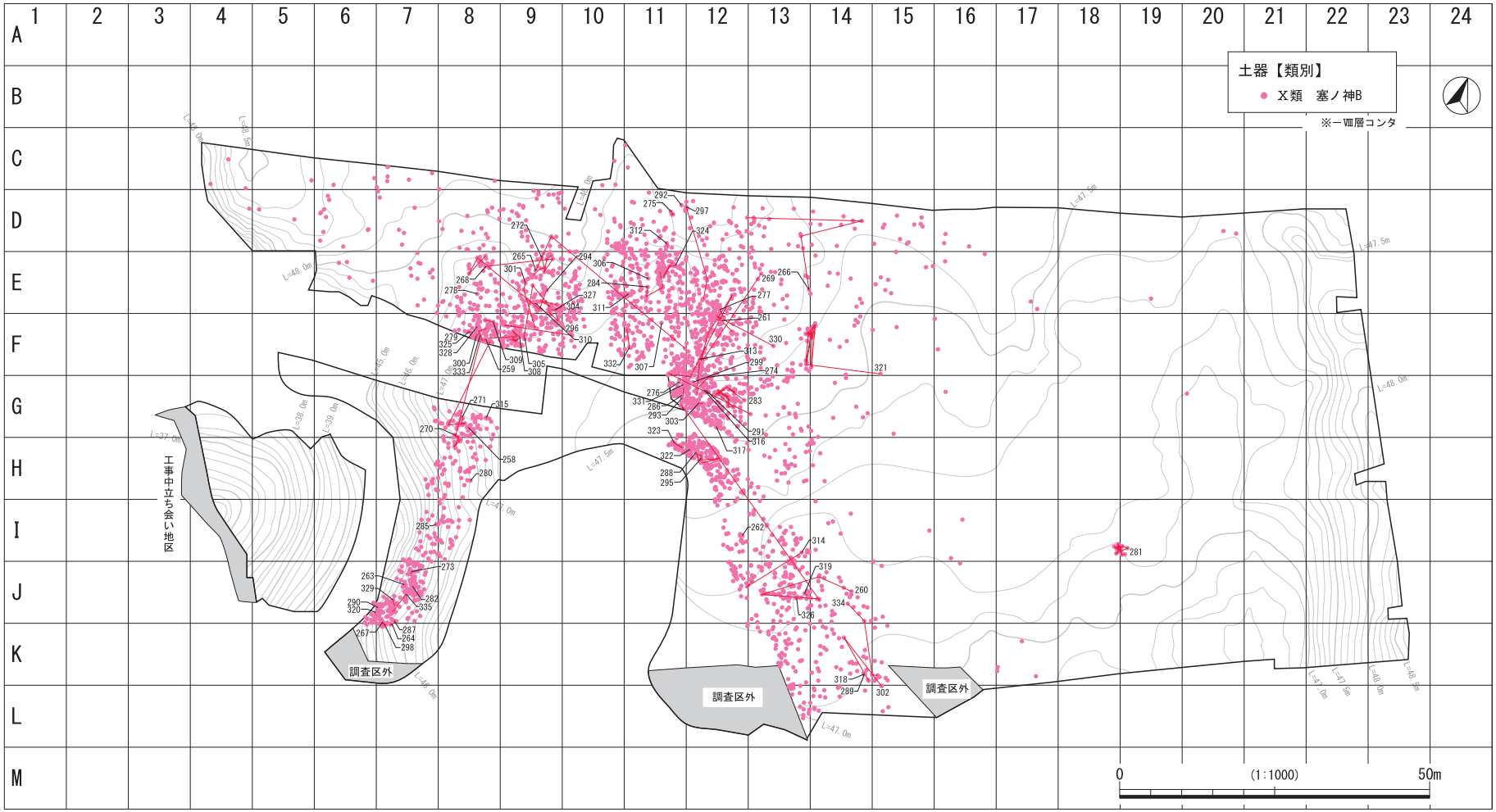
第 57 図　縄文時代早期　土器出土状況図　Ⅵ・Ⅶ類



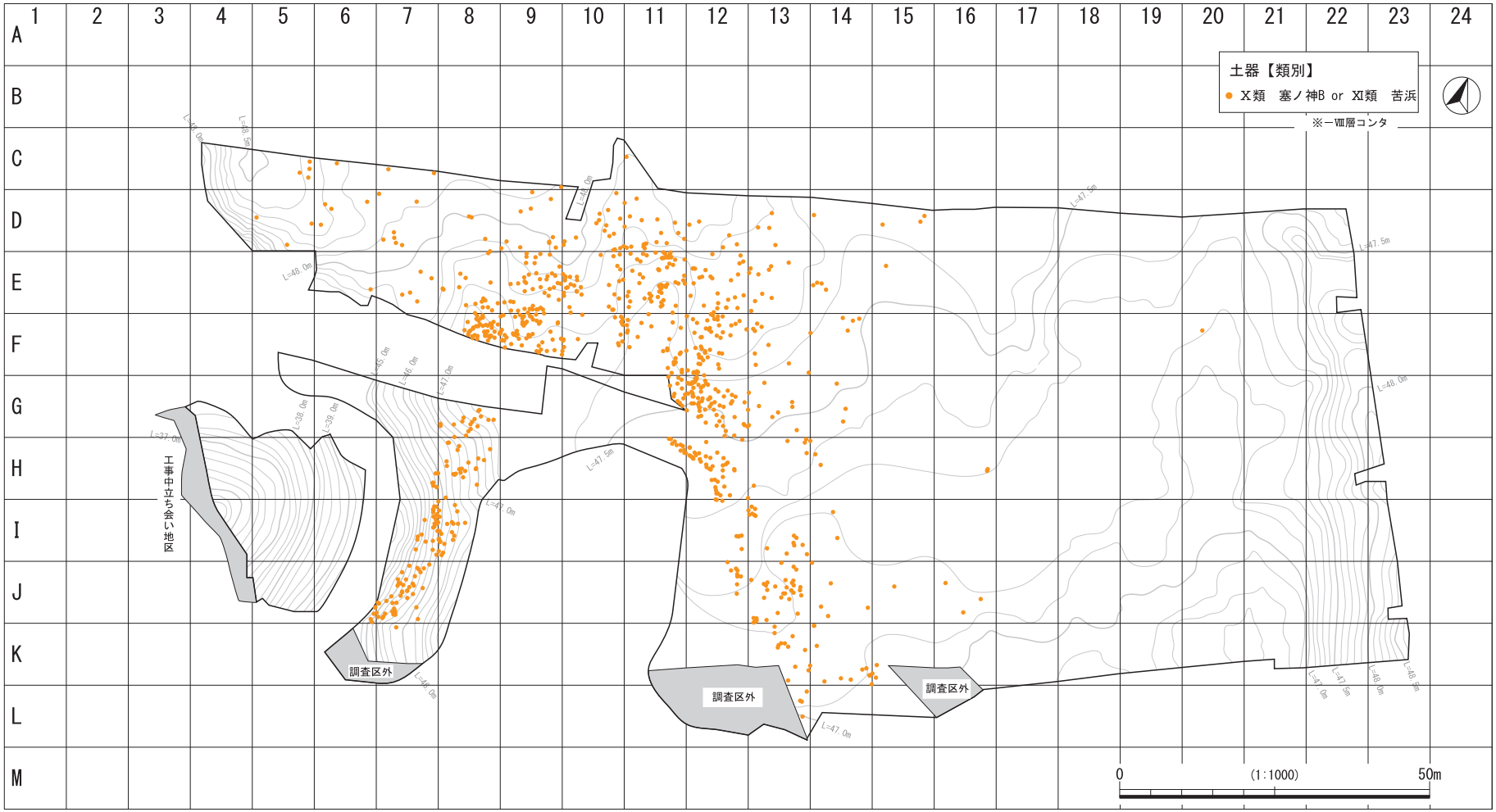
第 58 図　縄文時代早期　土器出土状況図　Ⅷ類



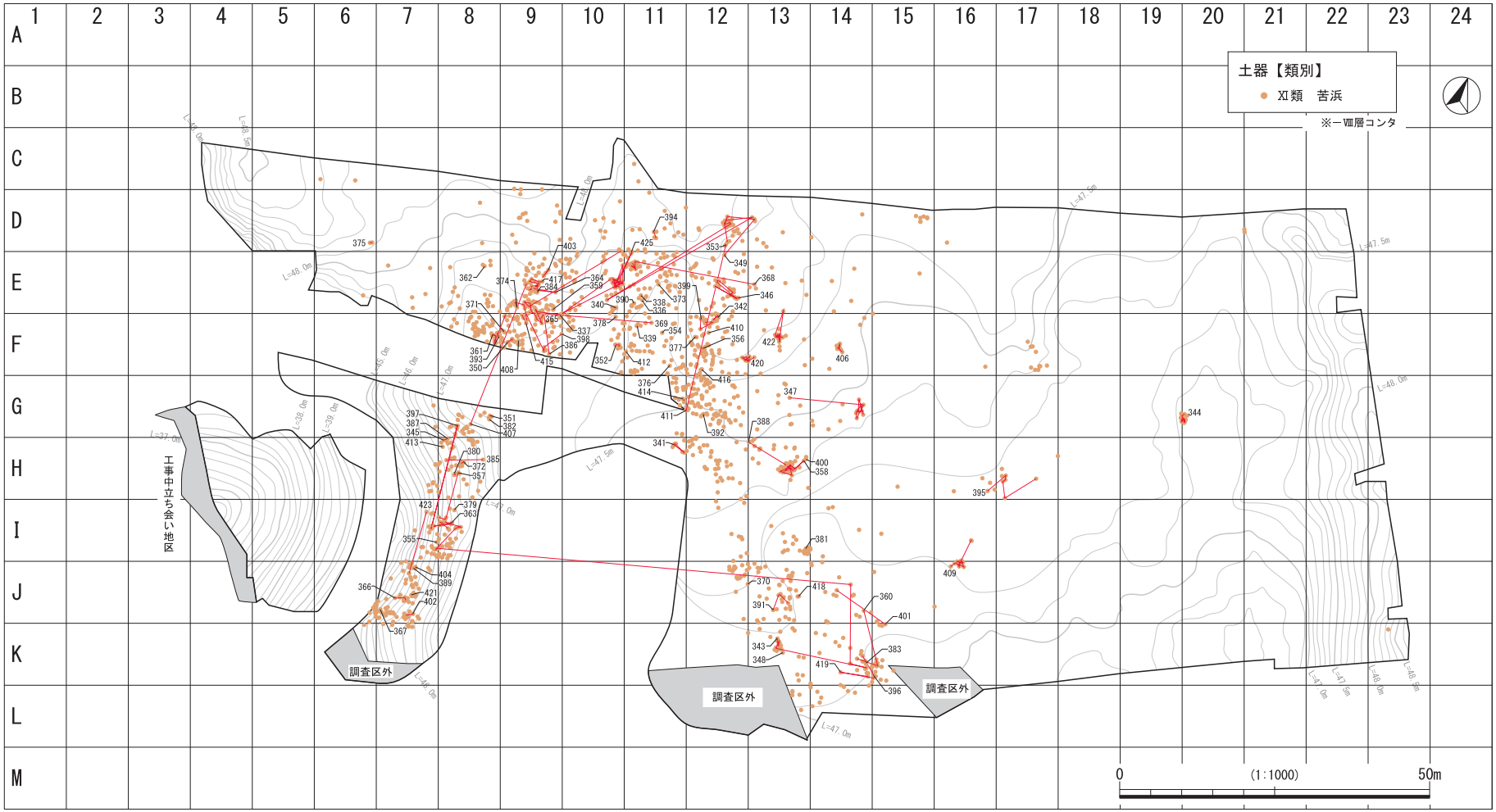
第 59 図　縄文時代早期　土器出土状況図　Ⅸ類



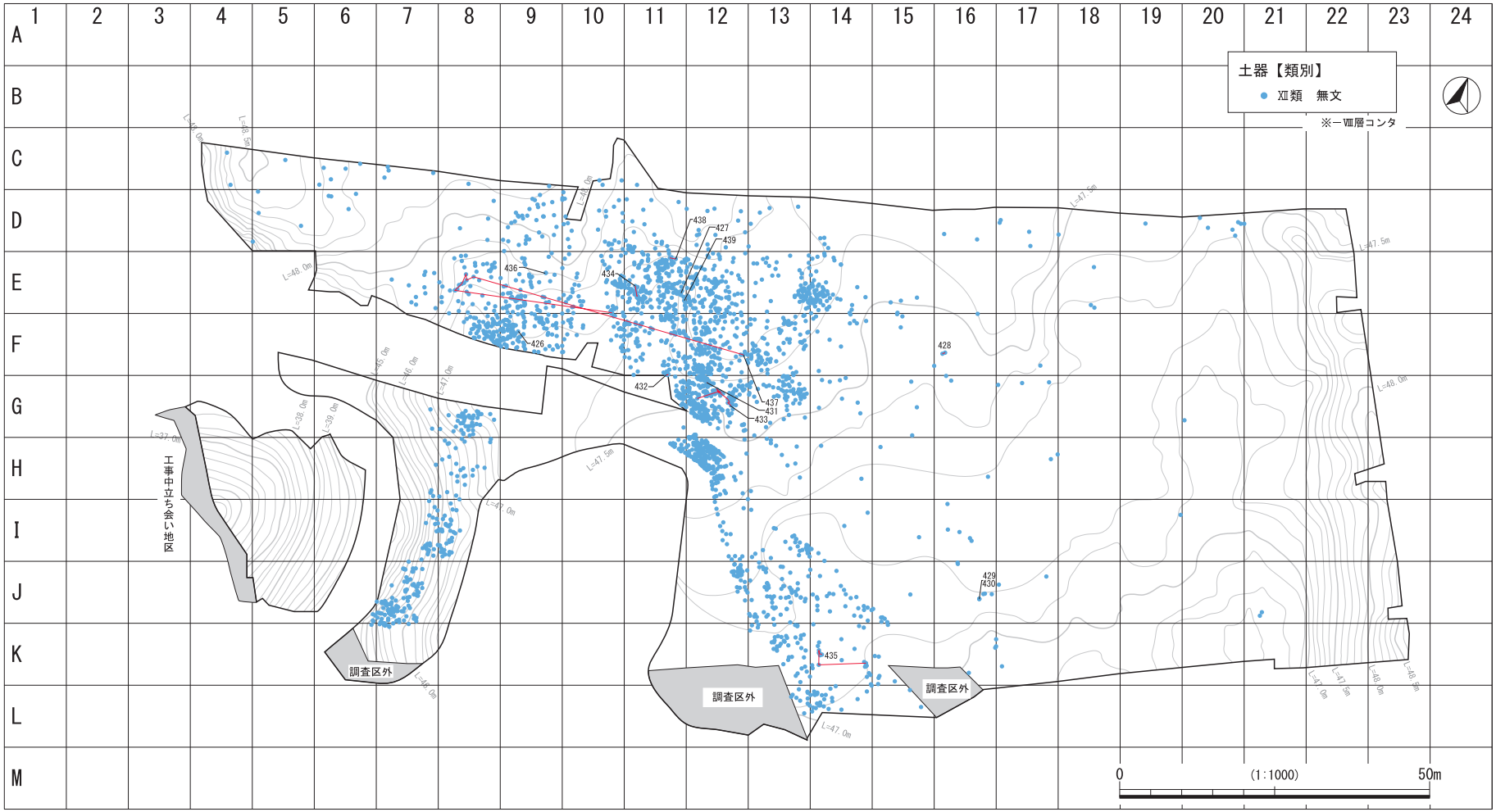
第 60 図　縄文時代早期　土器出土状況図　X類



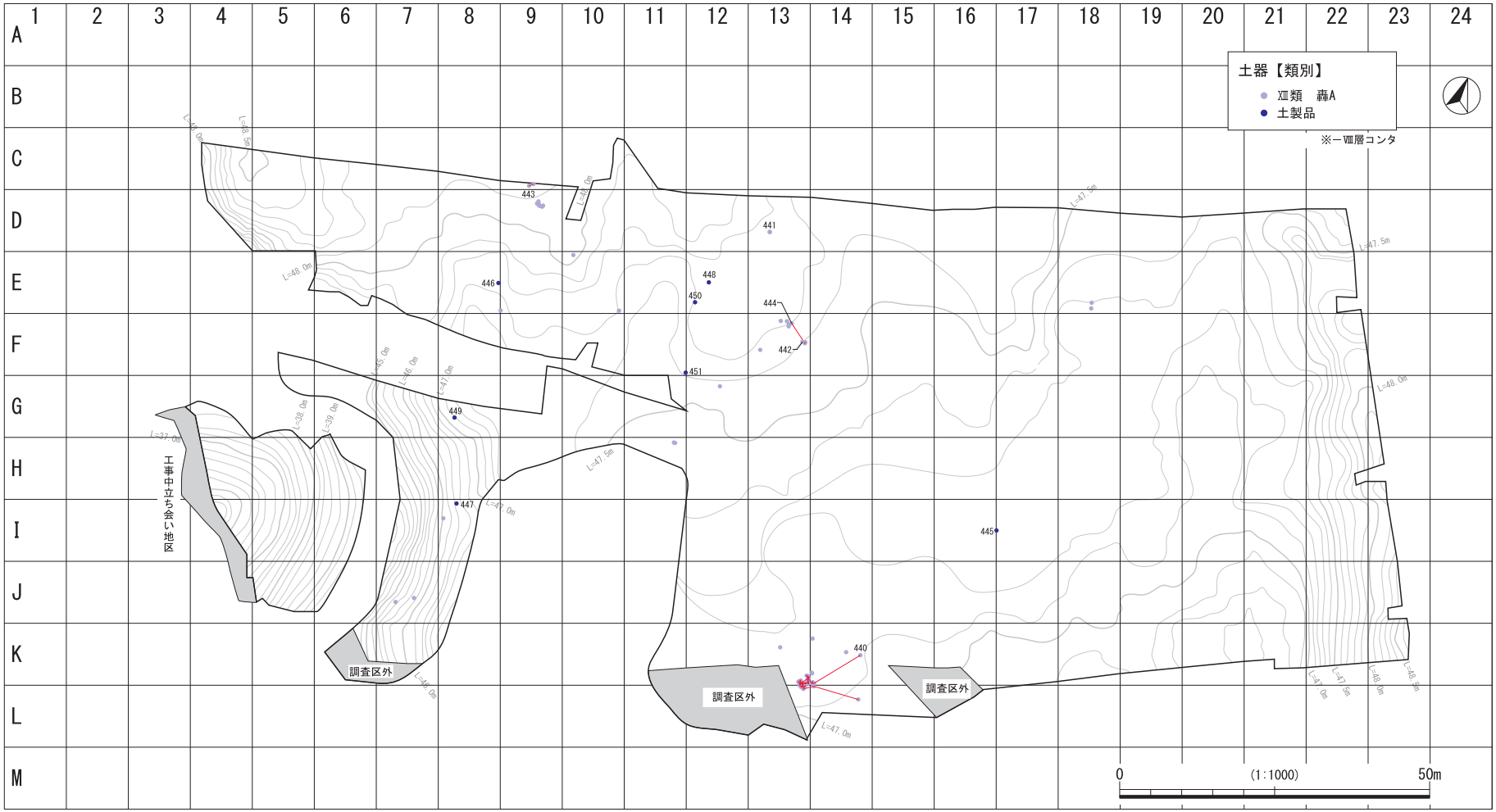
第 61 図　縄文時代早期　土器出土状況図　Ⅹ or Ⅺ類



第 62 図　縄文時代早期　土器出土状況図　XI類



第 63 図　縄文時代早期　土器出土状況図　Ⅻ類



第 64 図　縄文時代早期　土器出土状況図　Ⅻ類・土製品

３　遺物（土器）

概要

縄文時代早期の土器は，Ｖ層のアカホヤ火山灰とⅧ層の薩摩火山灰に挟まれたⅥ・Ⅶ層から出土している。出土状況をみると，Ⅰ類・Ⅲ類は台地の縁辺部のＣ～Ｅ－４～７区を中心にブロックを作り，Ⅳ類はやや内側のＤ・Ｅ－８区を中心に，Ⅶ類はＦ－13，Ｄ・Ｅ－17，Ｊ－16，Ｋ－16・17，Ｋ・Ｌ－13・14にブロックをなしている。Ⅷ類はＣ－６・７区，Ｅ－13・14区にブロックがあり，やや北寄りに分布する。Ⅸ類は台地内側に，Ｄ－11・12区，Ｅ－12区，Ｅ－15区，Ｆ－11～13区にブロックを形成し，Ⅹ類・Ⅺ類・Ⅻ類はほぼ分布を同じくして面的に広がっている。Ⅹ類・Ⅺ類・Ⅻ類は，土器量と関係していることはもちろんであるが，後世の攪乱の影響が考えやすく，土地利用の継続性を顕しているとみることができる。

調査の結果，Ⅵ・Ⅶ層から出土した土器は総数11,566点であった。中でもⅨ類・Ⅹ類・Ⅺ類が圧倒的に多かった。Ⅸ類1,448点，Ⅹ類3,100点，Ⅺ類1,675点，Ⅹ類またはⅪ類909点であった。それぞれの器形や施文の特徴から，以下のⅠ類～Ⅻ類に分類した。

第Ⅰ類土器

器形は，円筒形で底部から口縁部へと直線的に立ち上がるものである。

文様は，口縁部上端から口唇部にかけて貝殻腹縁による刺突文が，１～２段施されるもので，胴部には，斜位や横位の貝殻条痕が全面に施されるものである。底部は平底である。

第Ⅱ類土器

器形は，底部から口縁部へ直線的に立ち上がるものや口縁部がわずかに外反するものがあり，円筒・角筒・レモン形等がある。

文様は，口縁部には貝殻刺突文を，胴部には貝殻条痕を施した後に刺突を施すものである。底部は平底で外面にヘラ状工具による縦位の刻目を施すものもある。本遺跡では小片の出土が多く，その全容は明らかでない。

第Ⅲ類土器

器形は，バケツ状を呈し，口縁部が外反するものと直行するものがある。底部は平底である。

文様は，口縁部上面に横位や斜位の貝殻刺突文を施し，胴部全面に貝殻条痕を綾杉状に施す。口縁部には瘤状の突起が付くものもある。

第Ⅳ類土器

器形は，底部から口縁部へ直線的に立ち上がるものや口縁端部がやや内湾するものがある。胴部がやや膨らむものもある。

文様は，外面全体に貝殻腹縁により横位や斜位に刺突するものである。

第Ⅴ類土器

器形は，口縁部が直行ないしやや内湾するもので，口唇部は平坦で内傾する。

文様は，短い貝殻条痕や沈線で鋸歯状の文様を施すものである。本遺跡では，胴部が数点の出土のみであり，その全容は明らかでない。

第Ⅵ類土器

器形は，口縁部が大きく外反し，胴部が膨らみ底部へ向かってすぼまる。

文様は，原体をほぼ土器全面に回転させて施文するもので，口縁内面にも施文が及ぶものもある。また，その文様は原体によって異なる。本遺跡では，ほとんどが楕円押型文である。

第Ⅶ類土器

器形は，口唇部が大きく外反し，胴部で屈曲してすぼまりながら底部へ至るものである。底部は上げ底のものが出土している。

文様は，外面及び口縁部内面に押型文・撚糸文・条痕文等を施す。器壁は薄く，器面調整は丁寧なナデ調整で胎土には，多くの金雲母を含む。

第Ⅷ類土器

器形は，口縁部が外反するが，口縁端部が肥厚するものとしないものがある。小片の出土であり，全体的な器形は定かでない。

文様は，口縁部・頸部・胴部の３帯構成である。沈線文・刺突文・刻目突帯文・縄文・結節縄文等で構成される。妙見・天道ケ尾式土器を含む平椈様式の土器である。

第Ⅸ類土器

器形は，口縁部がラッパ状に大きく外反し，頸部でくびれ，胴部はやや張り底部へとすぼまる。

文様は，口縁部・胴部の２帯構成である。口縁部から頸部にかけては，沈線や刺突を施す。胴部は網目状撚糸文を施した後に横位沈線で区画するものや網目状撚糸文あるいは撚糸文を施し，沈線で区画するものがある。内外面の調整は，ほとんどが工具ナデ後ナデ調整である。

第Ⅹ類土器

器形は，口縁部は外反し，頸部でくびれ，胴部はやや張り底部へとすぼまる。

文様は，口縁部・胴部の２帯構成である。口縁部にかけて貝殻連続刺突文や沈線文，胴部は貝殻条痕や条線を施し，沈線で区画するものもある。
内外面の調整は，ほとんどが工具ナデ後ナデ調整である。

第Ⅺ類土器

器形は，口縁部は外反し，頸部でくびれ，胴部はやや張り底部へとすぼまるものと直行する口縁でバケツ状底部へとすぼまるものもある。

文様は，口縁部から底部まで１帯構成である。貝殻腹縁による条線文を施し，多様性に富んでいる。条線文は波状を呈するものが多いが，直線のものもある。外側の口縁部下に，縦位あるいは横位に短突帯や瘤状突帯を施す。突帯はナデと貼り付けているものがあり，いずれも貝殻による刻目がある。

第Ⅻ類土器

ナデ調整等を行う無文土器である。

器形から塞ノ神式土器か苦浜式土器に含まれるものと考えられる。

第ⅩⅢ類土器

器形は，口縁部が直行し，径の小さな底部へ向けて直線的にすぼまるものである。

文様は，貝殻腹縁による条痕が主で，縦方向の条痕の上に曲線文を描く。内面の調整が条痕によるものもある。

土製品

耳栓や円盤状土製品，円柱状の土製品，不明土製品等を取り上げた。

以上の分類に従って，抽出した土器について記述する。

第Ⅰ類土器（第 65・66 図　91 ～ 103）

第Ⅰ類土器は外面に斜位や横位の貝殻条痕を施し，口縁部に１～２段の貝殻刺突文を施す一群である。

91，92，93 の口縁部は逆「く」の字状を呈するような貝殻腹縁による斜位の連続刺突文が２段施されている。貝殻を器面に対して寝かせるように斜めに押し当て，施文してある。いずれも口唇部先端を内傾させ，わずかな段を作り出している。外面は横位の浅い貝殻条痕が施され，口縁部から離れるにつれ斜位になる。91，93 の内面の調整はケズリが行われているが，92 の内面は横位の貝殻条痕が施された後，ナデが行われている。

94，95，96 の口縁部も貝殻腹縁による斜位の連続刺突文が２段施されている。上段は斜位である。しかし，下段が縦位である点が 91，92，93 と異なる。外面は口縁部から約５㎝までは横位の浅い貝殻条痕が施され，それより下は貝殻条痕が斜位になってくる。内面は貝殻条痕が施された後，ナデが行われている。

97，98，99 は胴部である。98 の外面は横位の浅い貝殻条痕が施され，97，99 は斜位の貝殻条痕が施されている。内面は貝殻条痕が施された後，ナデが行われている。

100，101，102 は胴部から底部にかけて残存するものである。外面は斜位の浅い貝殻条痕が施される。しかし，100，101 の底面境付近は，横位の貝殻条痕である。内面はケズリが行われている。102 はやや上げ底気味で約 1.5㎝の厚さがある。底部内面には明瞭なケズリが見られる。また，底部と胴部がほぼきれいに分かれる割れ方から，円形の底部パーツの上に胴部パーツを載せる形の接合がされていたと考えられる。

103 は底部である。やや上げ底気味で約２㎝の厚さがある。底部側面には浅い横位の貝殻条痕が施される。底部内面にはナデが行われている。また，内面底部縁辺には貝殻条痕調整が施されており，これは胴部と底部の接合線を消すために行われたと考えられる。

第Ⅱ類土器（第 67 図　104 ～ 111）

第Ⅱ類土器は外面に貝殻条痕を施した後に沈線や刺突を施し，口縁部に貝殻刺突文を施す一群である。円筒形以外にも，角筒形やレモン形の器形も存在する。

108 は口縁部である。曲線を描いていないため，角筒土器であると考えられる。器壁は薄い。口唇部は平坦に整形されキザミが縦方向に施されている。口縁部上位に，縦位の貝殻刺突を１段施した後，上からやや斜位に貝殻刺突文を施してある。内面は，ケズリが行われている。

104，105，106 は胴部である。108 と同様に，曲線を描いておらず，角筒土器であると考えられる。器壁は薄い。外面は，斜位の浅い貝殻条痕が施された後，縦位，または斜位に波状の貝殻刺突が施される。内面は，ケズリが行われている。

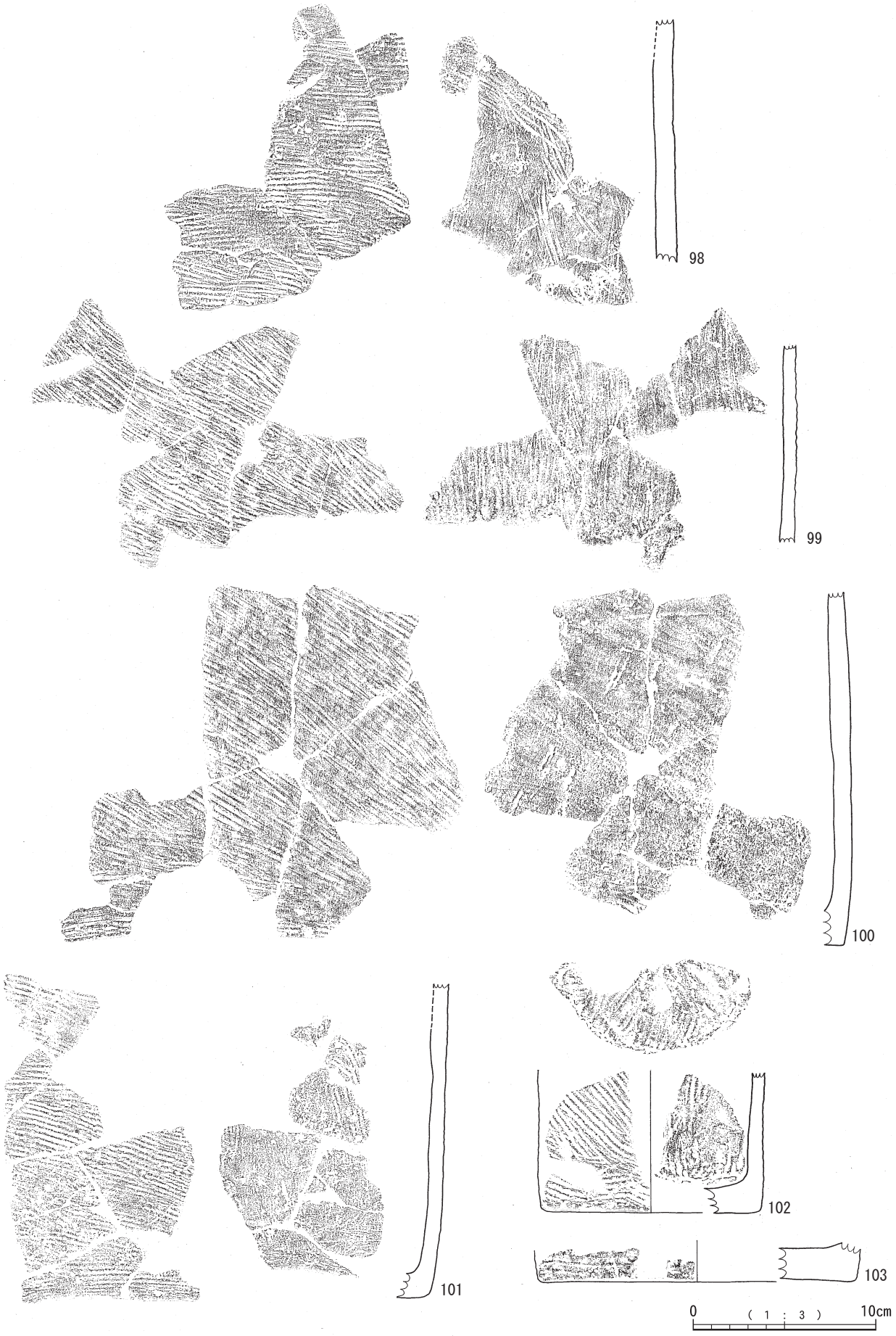
107，109，110 も器壁は薄い。104，105，106 と同様に，外面は斜位の浅い貝殻条痕が施された後，縦位，または斜位に波状の貝殻刺突が施される。しかし，色調がにぶい橙の 104，105，106 に比べやや暗く，また，波状の貝殻刺突が密に施されている点が異なる。さらに，内面に貝殻条痕が施される点も異なっている。

111 は口縁部である。口唇部の平坦面には，細かいキザミを入れてある。外面は，胴部になるに連れ，丁寧な浅い貝殻条痕を施してある。また，口縁部の約１㎝下，網代文様の上に約 2.5㎝の縦位の楔形の突帯を貼り付けてある。

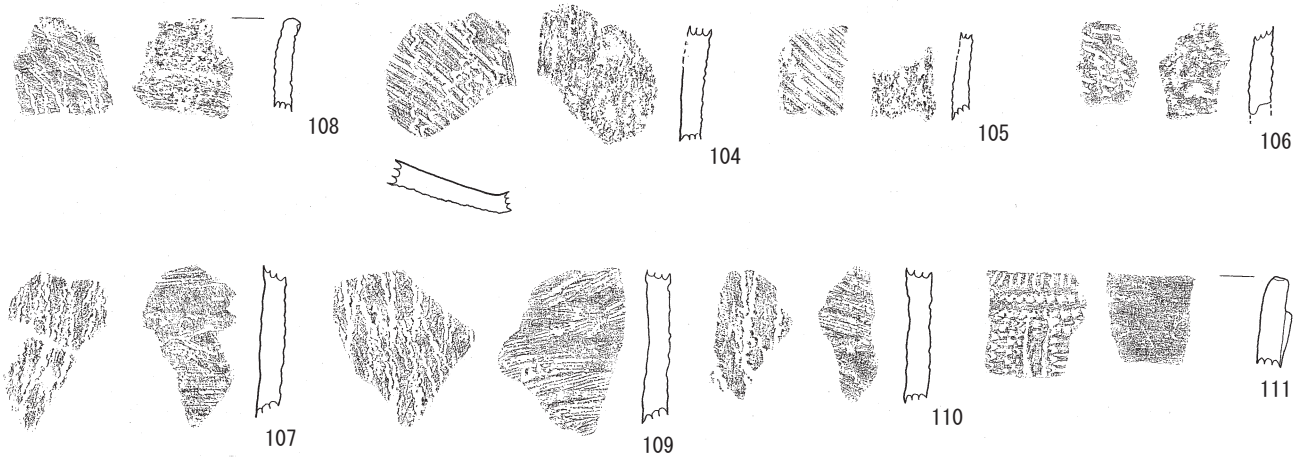
第Ⅲ類土器（第 68 図　112 ～ 115）

第Ⅲ類土器は外面に貝殻条痕を綾杉状に施し，口縁部に横位や斜位の貝殻刺突文を施す一群である。バケツ状

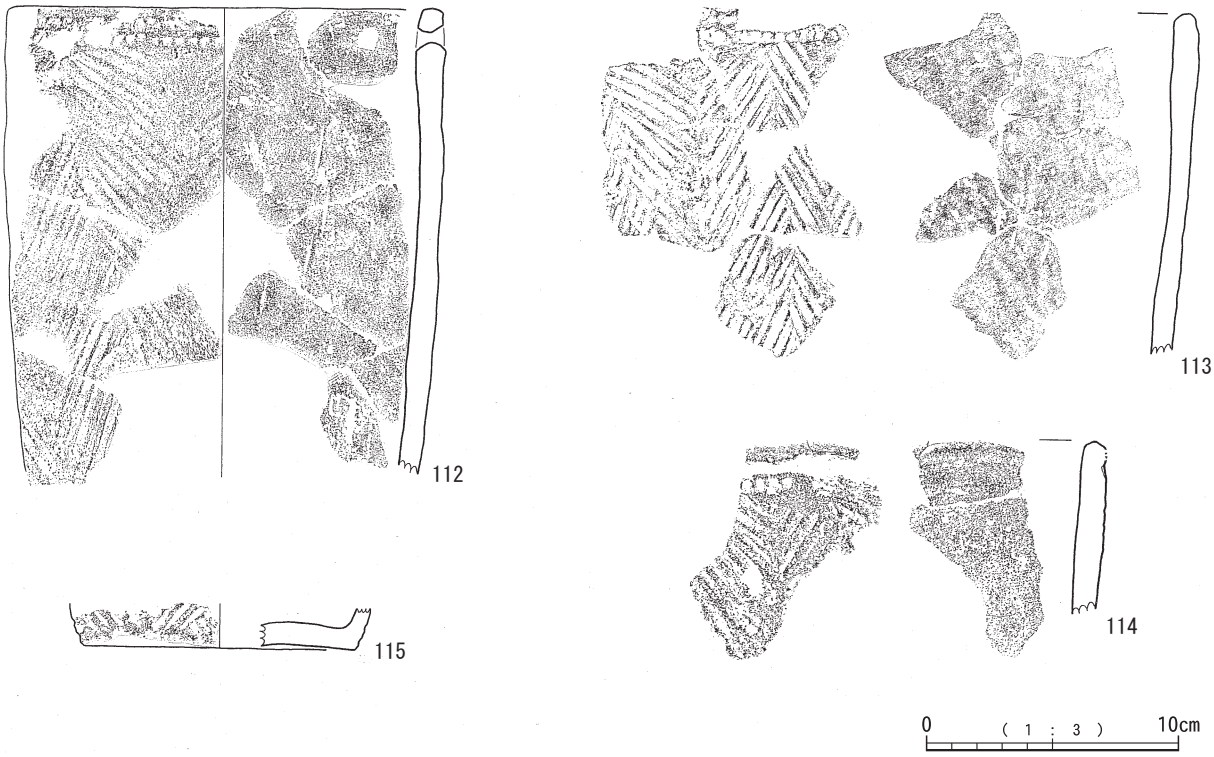
第65図　第Ⅰ類土器（1）



第 66 図　第Ⅰ類土器（２）



第 67 図　第Ⅱ類土器



第 68 図　第Ⅲ類土器

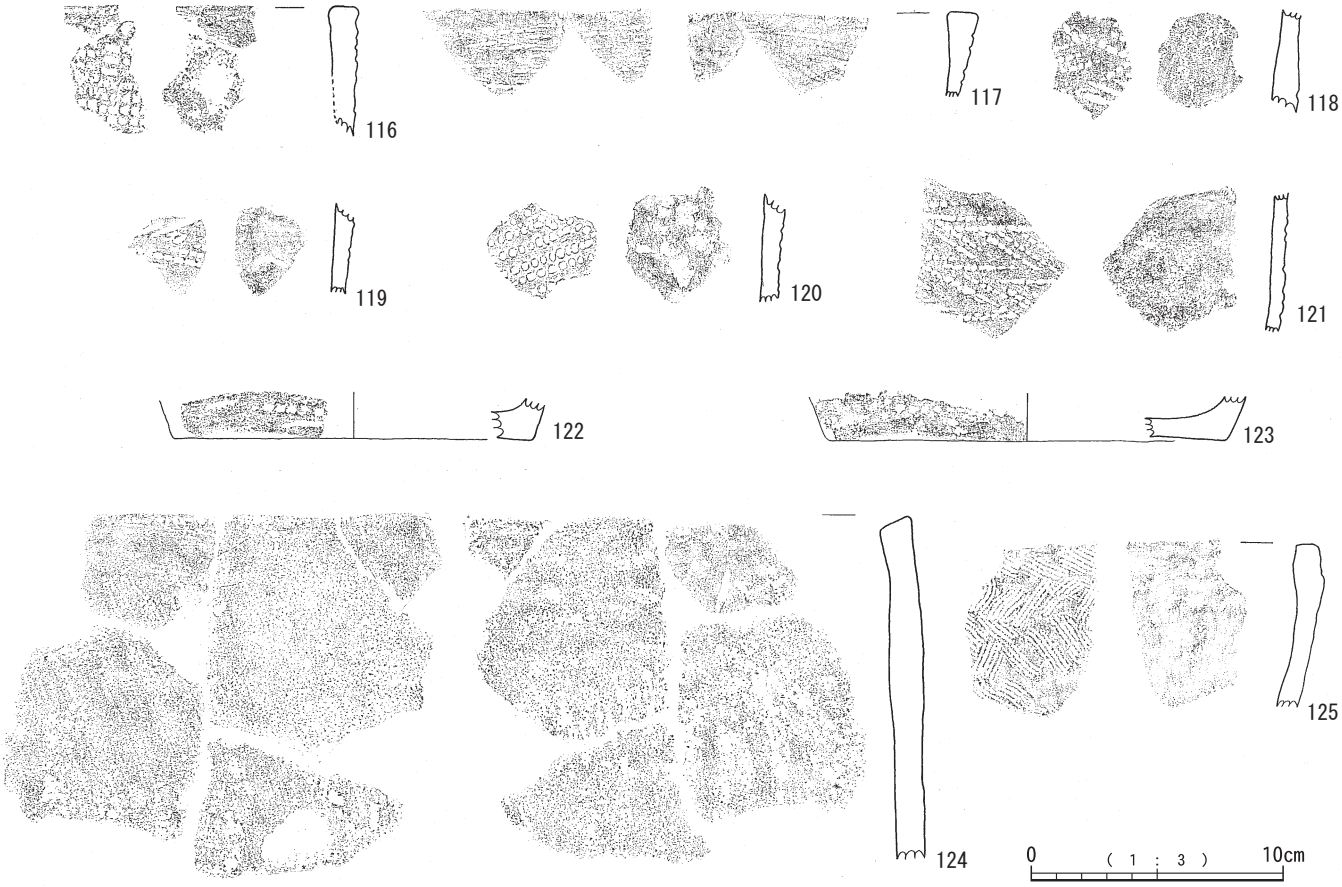
の器形で，口縁部が外反するものと直行するものがある。

112 は口縁部から胴部にかけての部位である。口縁部には，四角の刻目が２段に施されている。外面は，斜位の浅い貝殻条痕が左から右へ施される部分と，右から左へ施される部分があり，綾杉状に施される。内面はケズリが施された後，ナデが行われている。また，口唇部から約１㎝下には直径約５㎜の円形の補修孔の跡が見られ，修理をして大切に使っていたことが窺える。

113 は口縁から胴部である。112 と同様，外面は，斜位の浅い貝殻条痕が左から右へ施される部分と，右から左へ施される部分がある。内面は，ケズリが施された後，ナデが行われている。

114 は口縁部である。口唇部には文様は見られず，丁寧なナデが行われている。口縁部外側に沿って，欠けが見られる。胴部には浅い貝殻条痕が綾杉状に施されている。内面はナデが行われている。

115 は底部である。側面は，112，113 と同様，斜位の浅い貝殻条痕が左から右へ施される部分と，右から左へ施される部分がある。底部内面はナデが行われている。



第 69 図　第Ⅳ・Ⅴ類土器

第Ⅳ類土器（第 69 図　116 ～ 123）

第Ⅳ類土器は，Ｄ・Ｅ－８区を中心に約 35 点が出土している。

116，117 は口縁端部がやや内湾し，口唇部が平坦となるもので，横位の貝殻刺突が施されている。118 ～ 121 は胴部の破片で，小片のため全体的な文様は定かでないが，貝殻刺突による綾杉や鋸歯状の文様が施されるものである。122，123 は底部で，外面に横位の貝殻刺突が施されている。

第Ⅴ類土器（第 69 図　124・125）

第Ⅴ類土器は６点出土し，全て図化した。124，125 ともに胴部から内湾しながら口縁端部へと至るもので，124 は貝殻条痕，125 は綾杉状の貝殻条痕が施されている。

第Ⅵ類土器（第 70 図　126 ～ 129）

第Ⅵ類土器は 16 点出土し，その内の４点を図化した。

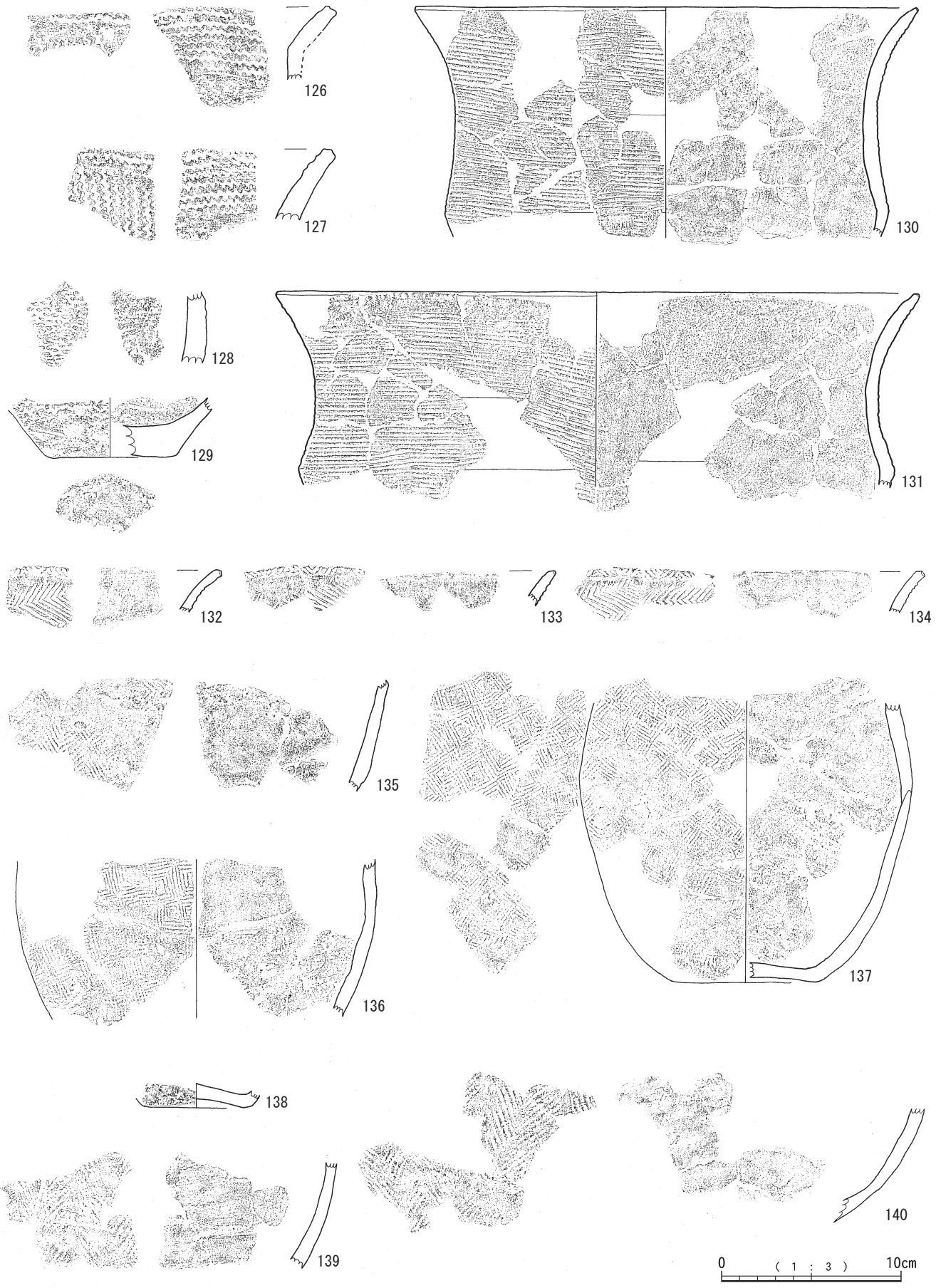
126，127 は外反する口縁部で，内外面に押型文を施す。両者とも外面の口縁端部には，横位の波状押型文を施し，それ以下には縦位の波状押型文を施している。内面については，横位の波状押型文を施している。なお，波状押型文とは山形押型文がやや変形し波状を呈するものを指す。128 は胴部，129 は底部の破片で，両者とも楕円押型文が外面に施されている。

第Ⅶ類土器（第 70 図　130 ～ 140）

第Ⅶ類土器は，調査区の南端のＫ・Ｌ－ 13・14 区とＪ・Ｋ－ 16 区を中心に出土した。そのほとんどの色調がにぶい赤褐色で器壁は薄く，焼成は堅緻で胎土に多くの金雲母を含むものである。

130，131 は口縁最大径からラッパ状に大きく湾曲しながら口縁端へと至る破片である。外面には横位の浅い条痕文を施し，内面は丁寧なナデ調整である。

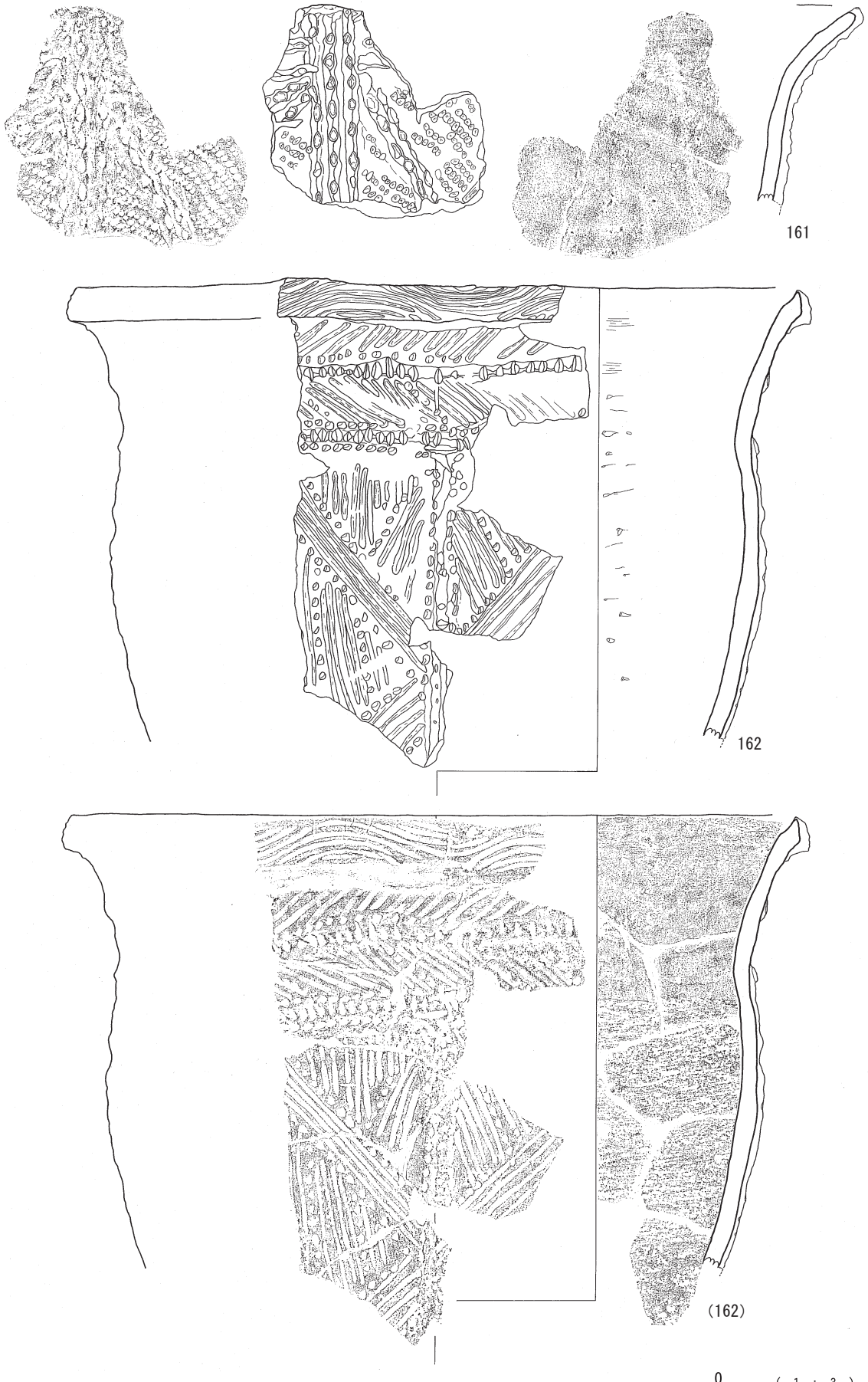
132 ～ 134 は外反する口縁部の破片で，いずれも口唇部と外面に横位の山形押型文が施されている。135 ～ 138 は胴部及び胴部から底部にかけての破片で，外面に菱形押型文を施すものであり，137，138 は上げ底を呈する。136，137 は同一個体の可能性がある。139，140 は，一見すると羽状にみえるが，撚りの原体を交互に回転させて施文するものである。色調・焼成及び金雲母を多量に含む胎土であるという特徴が 130 ～ 138 と同じであることから第Ⅶ類土器とした。


126
127
130
128
129
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
0
(1 : 3)
10cm

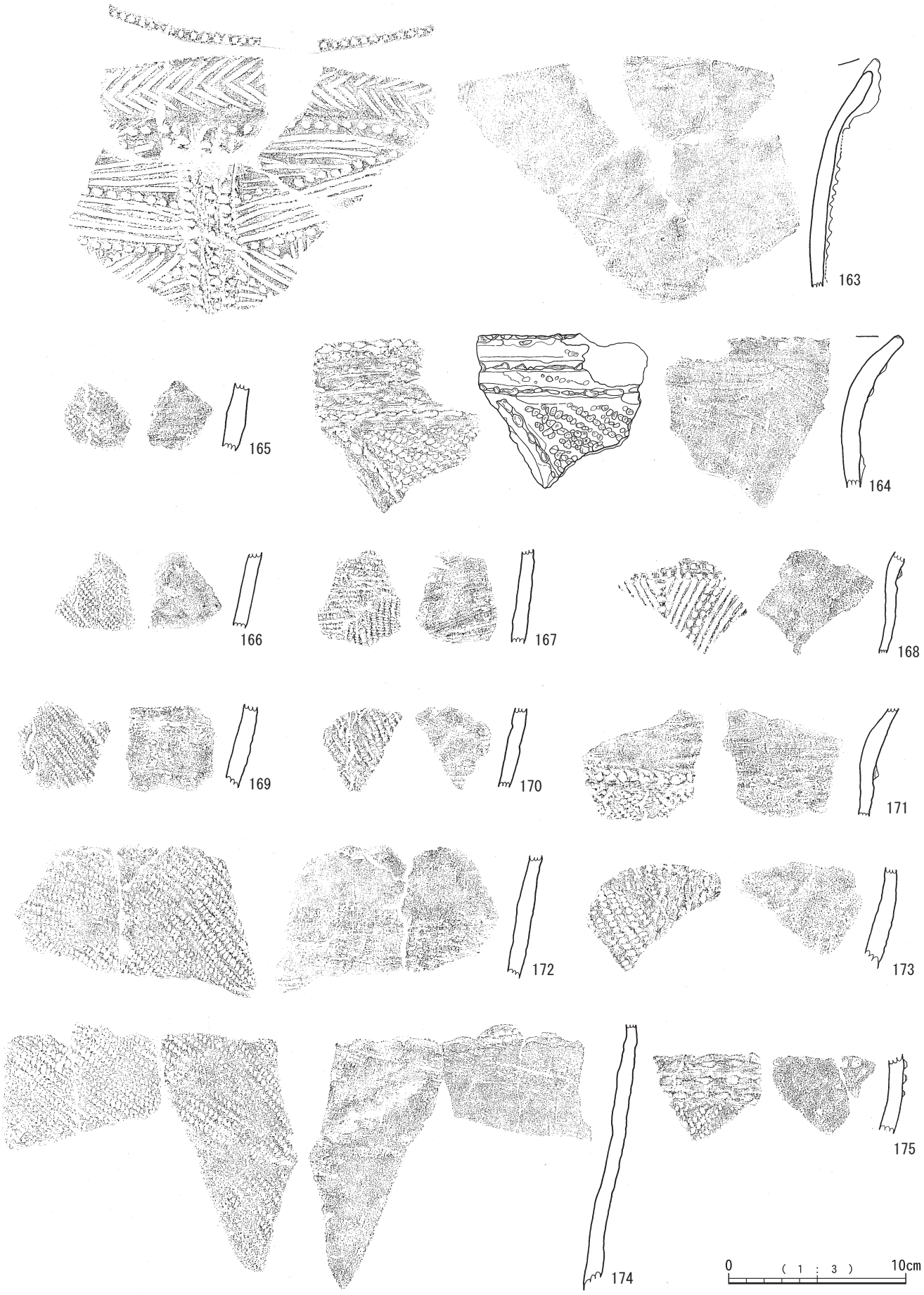
第 70 図　第Ⅵ・Ⅶ類土器

141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
0
(1 : 3)
10cm

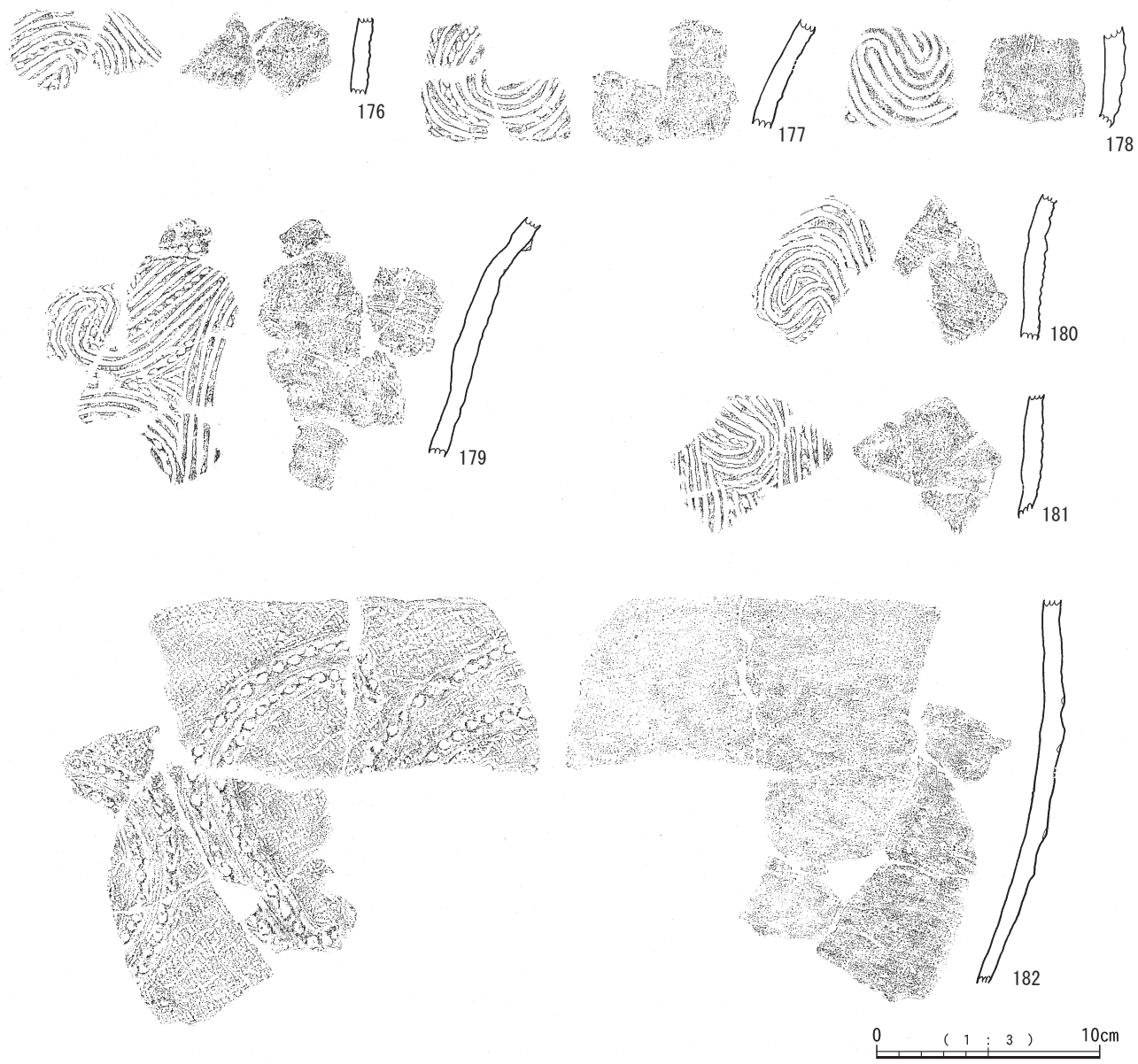
第 71 図　第Ⅷ類土器（１）



第 72 図　第Ⅷ類土器（２）



第 73 図　第Ⅷ類土器（３）



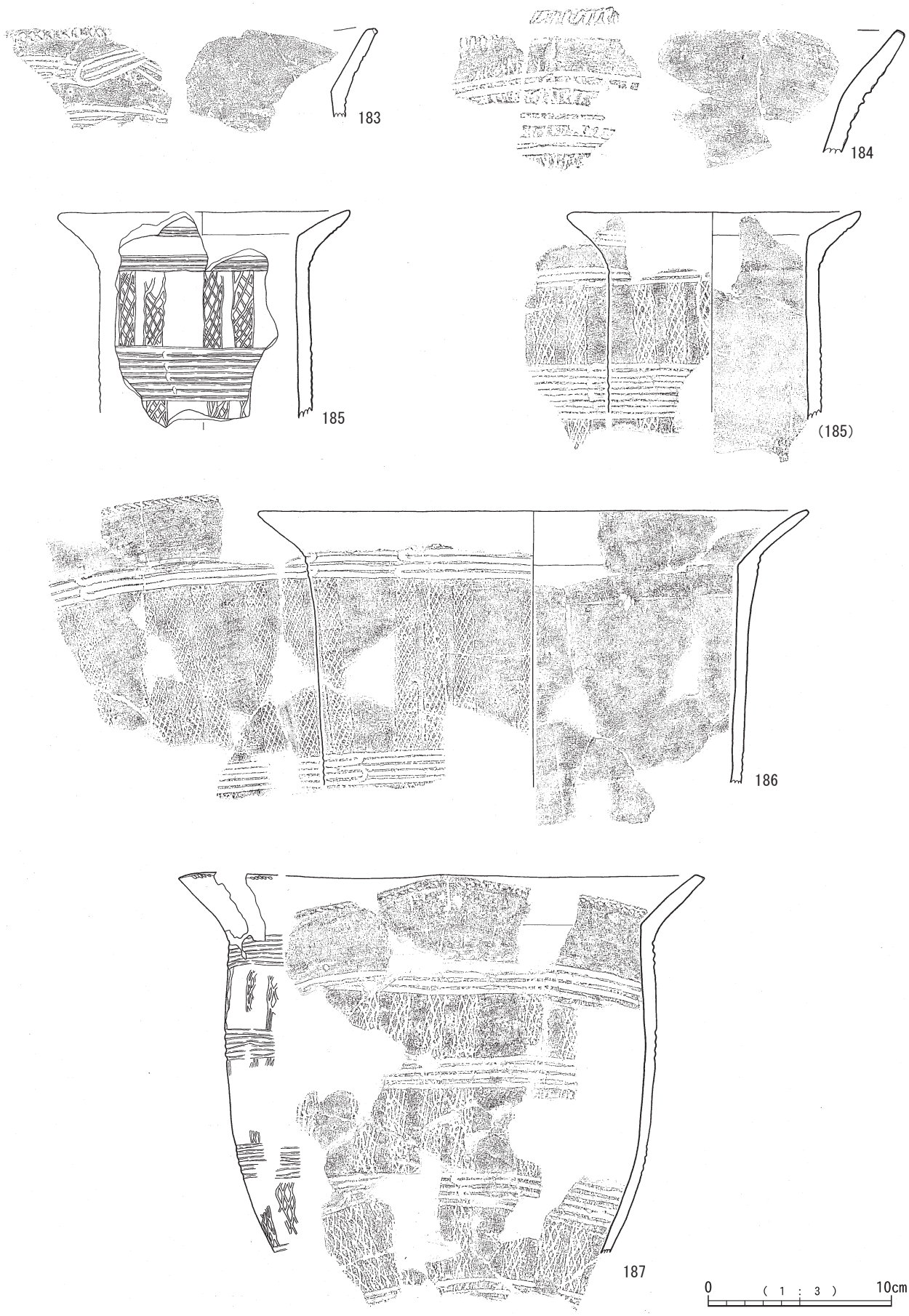
第 74 図　第Ⅷ類土器（４）

第Ⅷ類土器（第 71 ～ 74 図　141 ～ 182）

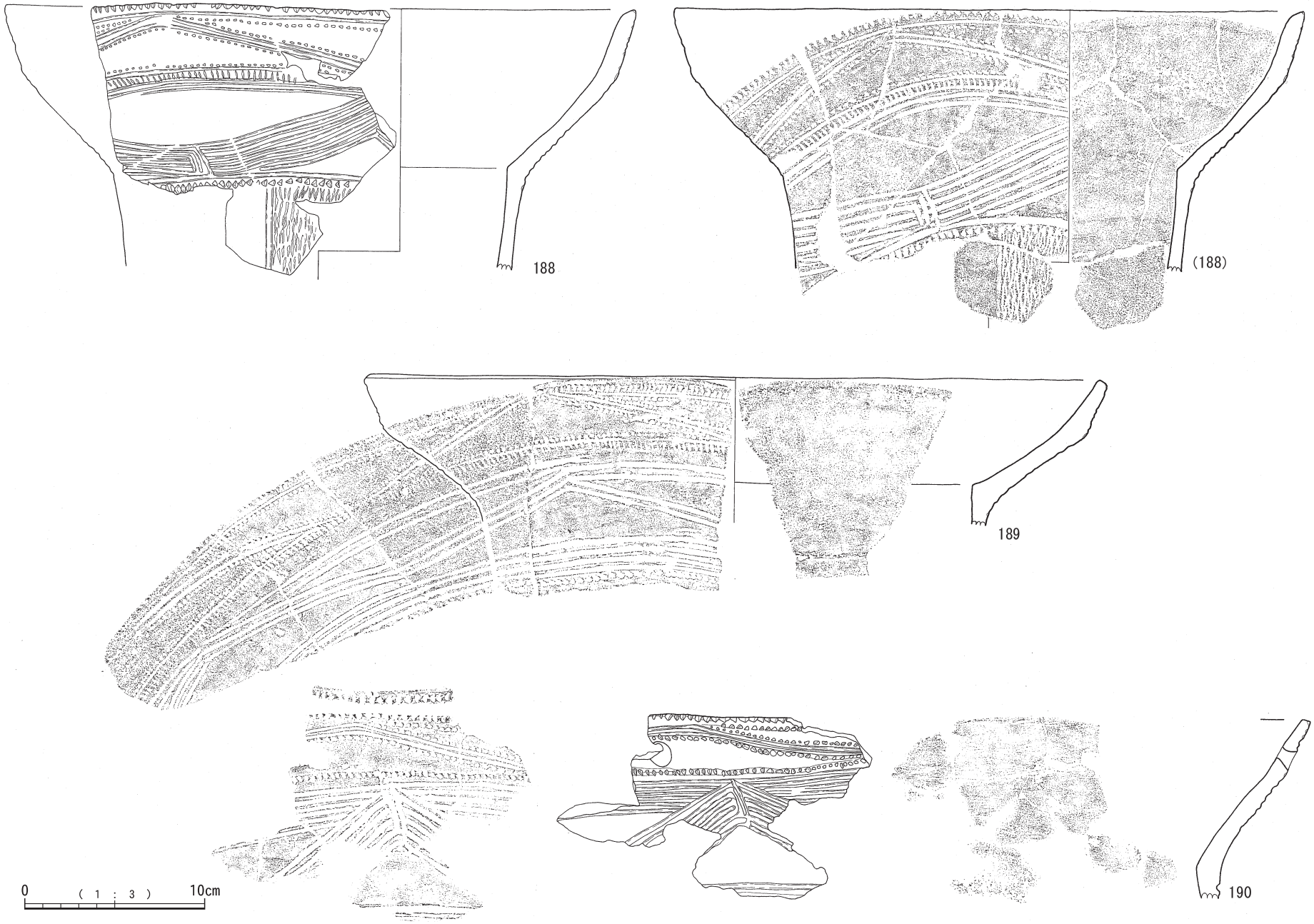
第Ⅷ類土器には，口縁部が肥厚するものとしないものがあり，肥厚するものも形状が異なる。平口縁と波状口縁がある。文様は口縁部・頸部・胴部の３帯構成である。沈線文や刺突連点文，結節縄文等で構成され，曲線や渦巻き状などバリエーションに富む。器面の内面調整は丁寧なナデ調整が基本である。

141 ～ 144 は口縁部が口唇から約 1.5 ㎝まで肥厚し，断面が三角形状の一群である。文様は沈線文で，口縁部上部に刻目が施される。142，143 には肥厚帯頂部に刻目が施される。143，144 には無文帯がある。

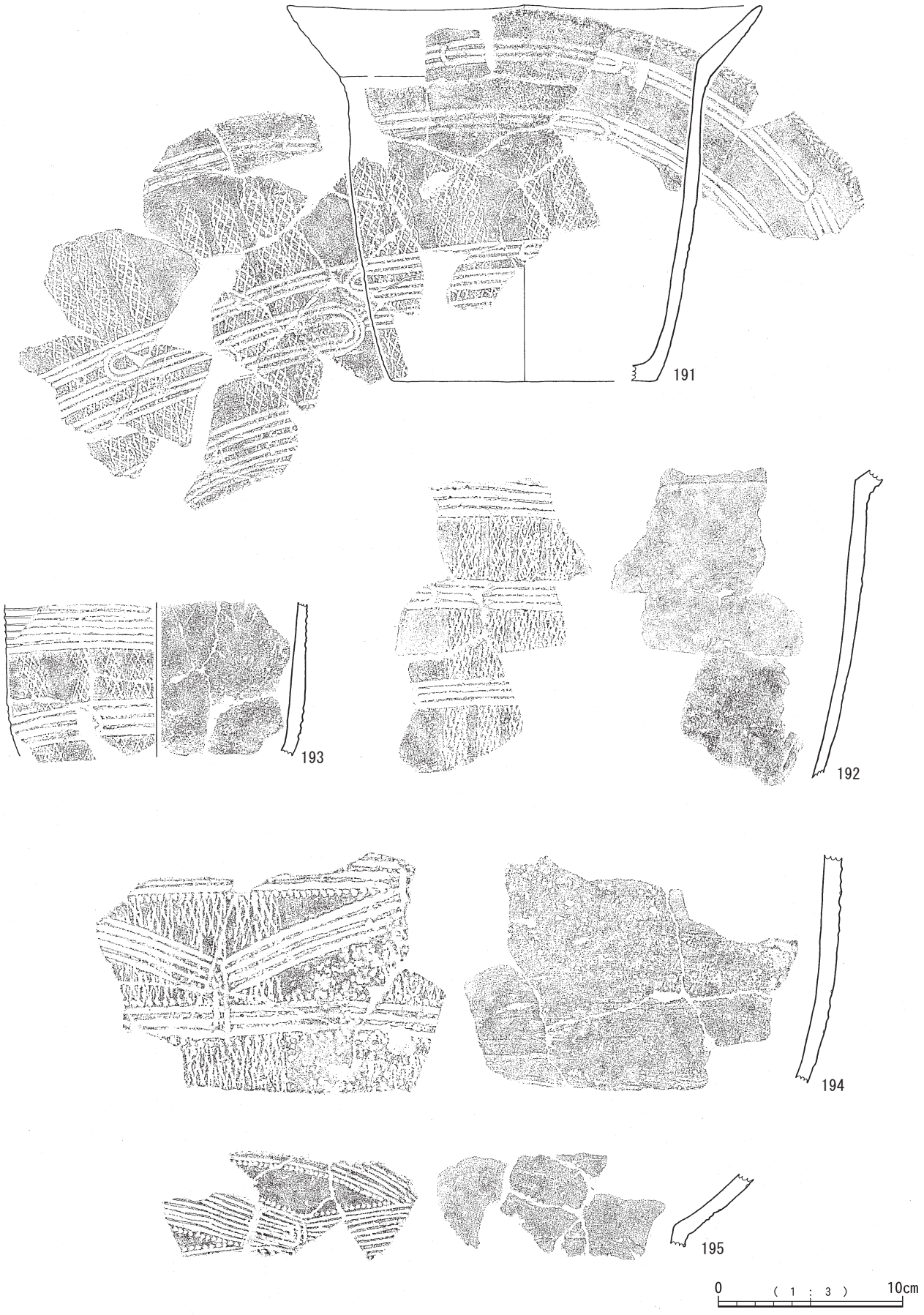
145～154，156～159は口縁の肥厚部が口唇から約2.5㎝まで，やや長くなる一群である。145 は口縁の肥厚部に矢羽根状の沈線を整然と巡らせる。147 ～ 149 は口唇部外端の肥厚部に渦巻き状の沈線を施し，曲線を描く。147 ～ 150，159 の頸部との間には点状の連続刺突が施される。150，159 は口縁部に波状の沈線を中心部に引いて，横位に矢羽根状の沈線を巡らせる。150 は胴部に縦位に１本の刻目突帯を施している。150 ～ 159 は口唇部に刻目が施される。152，158 の頸部は無文帯である。153 の頸部には２列の連続刺突を施してある。157 の口縁部は斜位の沈線が山状・谷状に施され，頸部は斜位の沈線を施す部分と無文帯の部分が見られる。159 は口唇部から縦位に３本１単位の刻目突帯が貼り付けられる。155 は横位に刻目突帯が施される。



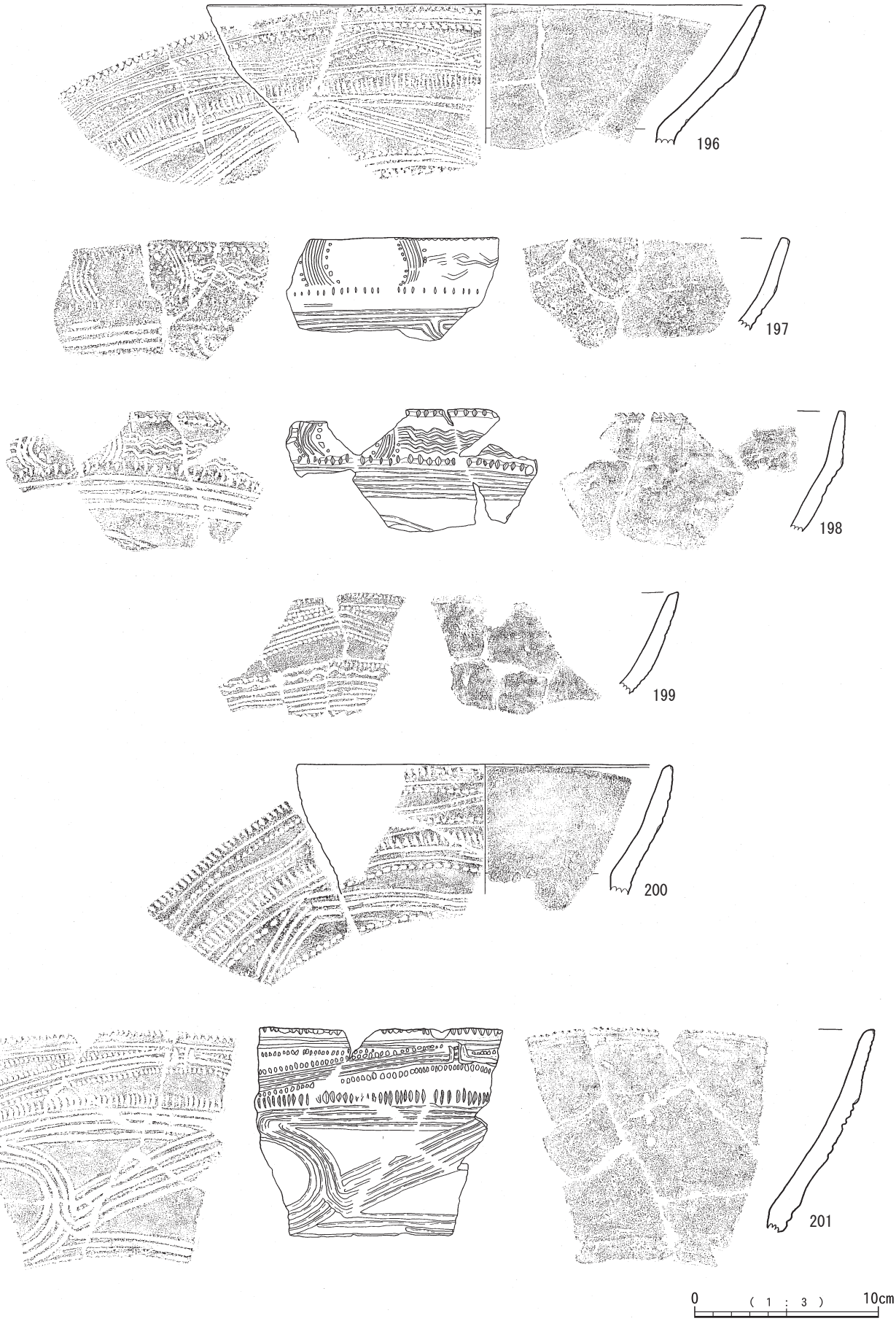
第 75 図　第Ⅸ類土器（１）



第 76 図　第Ⅸ類土器（２）

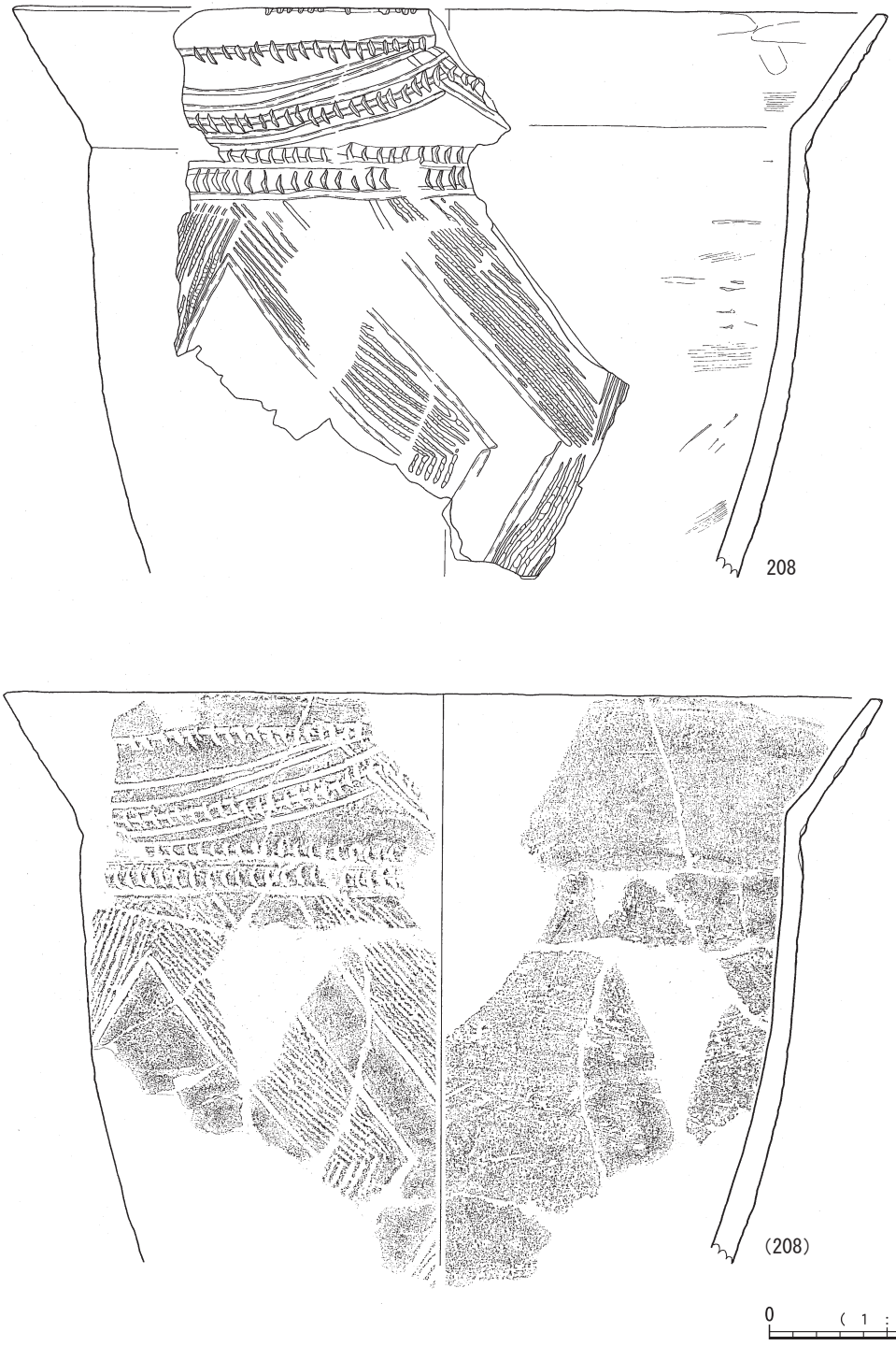


第 77 図　第Ⅸ類土器（３）



第 78 図　第Ⅸ類土器（４）

第 79 図　第Ⅸ類土器（５）



第 80 図　第Ⅸ類土器（６）

160 ～ 164 は縦位または斜位に刻目突帯を施す一群である。160，161 は口縁部と頸部との差がほとんどない。160 は口唇部上部に凹部のある瘤状突起と縦位に刻目突帯が施される。161 は斜縄文が施文され，縦位に３本１単位，斜位に複数の刻目突帯が貼り付けられる。162 は口縁部から胴部下部までである。胴部がやや膨らむ形である。文様は口縁部・頸部・胴部の３帯構成になっていることが分かる。口縁部が口唇から約 1.5 ㎝まで肥厚し，断面が三角形状である。口唇部外側の肥厚部に波状の沈線を横位に施し，重弧文状に描く。頸部に２本の横位の刻目突帯と胴部に縦位の刻目突帯が施される。沈線は斜・縦位に施され，刺突文が加えられる。163 は頸部から胴部に３本１単位の刻目突帯が施される。口縁部には横位に矢羽根状の沈線を巡らせ，頸部との間には円形の連続刺突

を施す。164 は斜縄文が施文され，口縁部に横位に３本の刻目突帯を巡らせ,その下に斜位の刻目突帯を貼り付ける。口縁部と頸部との厚みの差があまりない。

上記の口縁部にはいずれも刻目が施される。その中でも，143，144，152，158 については,頸部の無文帯を確認できる。型式変化は無文帯を持つものから持たないものへとされていることから，これらは古いタイプであると考えられる。

165 ～ 182 は胴部である。165 ～ 167，169 ～ 171 の文様は結節縄文で施される。167 は左右からの結節縄文が施される。171 は頸部に１本の横位の刻目突帯を巡らせる。175 は横位に３本の刻目突帯文が施される。176 ～ 181 は渦巻き状の曲線文が施され，数本おきに円形の連続刺突が施される。179 には刻目突帯がわずかに残る。182 は全面に網目状撚糸文を施した後に，２本１組の刻目突帯を曲線状に施してある。刻目突帯の間にナデが見られるのは，刻目突帯を付けた際の跡で，その結果，撚糸文が消されたと考えられる。

第Ⅸ類土器（第 75 ～ 90　図 183 ～ 257）

第Ⅸ類土器は，器形は口縁部がラッパ状に大きく外反し，頸部でくびれ，胴部はやや張り底部へとすぼまる。文様は口縁部・胴部の２帯構成である。口縁部から頸部にかけては，沈線や刺突を施す。胴部は撚糸文・縄文を縦方向に施し，左右に空白を空けて繰り返している。そして，横方向に３～８本の沈線を巡らせる（Ⅸ類a）。口縁部がやや内湾気味になり，文様は，沈線の区画内に撚糸文･縄文を施すもの（Ⅸ類ｂ）がある。Ⅸ類ｂの中には，口縁部の連点文が貝殻腹縁刺突のものもある。内外面の調整は，ほとんどが工具ナデ後ナデ調整である。

183 ～ 195 はⅨ類aに属する一群である。

183 ～ 187 は口縁部は直線的に外反し，文様は沈線を施すか無文である。口唇部には刻目が入る。183 は頸部がやや外反し，口縁部には４本１単位の沈線を横位に巡らせる。口唇部には刻目が入れられる。184 は口縁部の折れが無く，頸部から外に滑らかに開く。口唇部には大小の刻目が交互に繰り返される。内面は工具ナデ後ナデ，ミガキ調整である。185，186 は胴部が底部から直立して立ち上がり，口縁部がラッパ状に大きく外反する。185 は頸部から強く外反し，口縁部と頸部には横位に３本１単位の沈線を巡らせる。胴部に縦位に約１㎝の幅の網目状撚糸文が左右に空白を空けて施される。186 は頸部から強く外反し，口縁部は上方に折れる。口唇部には矢羽根状に刻目が入れられる。頸部には横方向に４本の沈線が巡り，胴部に縦位に約１㎝の幅の網目状撚糸文が左右に空白を空けて施される。内面は工具ナデ後，丁寧なナデ調整である。187 は胴部が底部からやや湾曲しながら立ち上がり，口縁部がラッパ状に大きく外反する。口唇部には斜位に刻目が入れられる。口縁部外面は無文である。頸部から胴部にかけて，網目状撚糸文を縦位に空白を空けて施し，頸部，胴部上部，下部にやや浅い横位の４本１単位の沈線を巡らせる。

188 ～ 190 は口縁部上部が内側に屈曲しながら外側に開き，二重口縁を呈する。また，口唇部には刻目が入り，Ⅷ類土器の要素を残して，やや波状気味の口縁を呈する一群である。188 は口唇部と屈曲部には横位に貝殻腹縁による縦長の刺突を，頸部にはやや深い縦長の刺突を施す。屈曲部より上部は，口唇部下と屈曲部の沈線に沿って横長の円形の細かい刺突を，その間には同じ形状で山形のモチーフを描く。屈曲部より下の口縁部は，７本１単位の沈線を山形に巡らせる。胴部は網目状撚糸文が縦位に施される。189 は口唇部と屈曲部に，ヘラ状工具を器面に対して縦位に当て横位に浅い縦長の刺突を施文したと考えられる。口縁部上部は，口唇部下の沈線の両側と屈曲部の沈線の上部に横位に細かい刺突を，その間には２本の沈線を挟み同じ形状の刺突で山形のモチーフを描く。屈曲部より下の口縁部は，２～３本１単位の沈線を山形に巡らせる。頸部は横位の４本の沈線の下に，横位に竹管状工具によると考えられる竹管文を施し，逆「Ｃ」字状のやや深い刺突が表れる。190 は口唇部と屈曲部に竹管状工具による刻目が施され，その間には２本の沈線を挟み約２㎜間隔の刺突で山形のモチーフを描く。屈曲部より下の口縁部は，刻目の下に横位の６本の沈線を巡らせた後，斜位の６本の沈線で山形のモチーフを描く。

191 は完形に近い状態に復元することができた。口径 25.6 ㎝，器高 20.3 ㎝である。口縁部がラッパ状に大きく外反し，頸部でくびれ，胴部から底部へとすぼまる。口唇部に刻目を施し，口縁部上部と屈曲部に横位の３本１組の沈線を施文する。その間は無文帯である。胴部は網目状撚糸文が縦位に施された後，胴部の中間部に横位の３本１組の沈線を３列巡らせ，沈線と沈線とを丸くつなぎ終結させている。胴部の底部に接する部分には横位の７本の沈線が施される。

192 ～ 194 は胴部である。192 は網目状撚糸文が縦位に施された後，横位の４本１組の沈線を頸部から約４㎝間隔で巡らせる。193 は胴部に網目状撚糸文が縦位に施された後，上部に横位の６本の沈線を，下部に４本の沈線を巡らせる。194 は約９㎝幅の網目状撚糸文を縦位に施した後，横位の３本１組の沈線を巡らせ，その上下にやや深い点状の連続刺突を施している。３本１組の沈線同士約５㎝の間には斜位の４本と５本の沈線で山形のモチーフを描く。

195 はラッパ状に外反する口縁部であるが，口唇部が欠けている。口唇部付近に横位の５本以上の沈線が確認できる。頸部までの間に浅い斜位の８～９本の沈線で山

形のモチーフを描き，沈線と沈線とを丸くつなぎ終結させている。沈線の上下には１～２㎜間隔で点状の連続刺突を施している。内面の調整は工具ナデ後ナデである。Ⅸ類aに属する一群は網目状撚糸文など丁寧に施文されているが，その中でも 195 は，外面，内面とも丁寧に調整され，また，外面はきめ細やかな文様が特徴である。このように，Ⅸ類aに属する一群は，総じて，内外面とも丁寧に調整され，きめ細やかな施文がされており，時間をかけて丁寧に作製されたのではないかと考えられる。

196 ～ 257 はⅨ類ｂに属する一群である。Ⅸ類aに属する一群と比較すると，調整や施文は似ているが，きめ細やかさがやや欠けてくる。しかし，とても美しい形状の土器であることには違いはない。

196 ～ 204 は 188 ～ 190 と同様に，口縁部上部が内湾しながら外側に開く一群である。口縁部は沈線と刺突で山形のモチーフを描く。188 ～ 190 がⅧ類土器の要素を残しやや波状気味の口縁を呈し，緻密で丁寧な文様を施す一群であるのに対して，196 ～ 204 は口縁部が平坦で形状が似てはいるが，器面調整や施文において粗い印象である。196 は口唇部に刻目が入り，刻目の下に１本の沈線を巡らし，１～２㎜間隔で刺突連点文を施す。その下に３本の沈線と点状の連続刺突で山形のモチーフを描き，２本の沈線を巡らせる。屈曲部には横位にヘラ状工具による縦長の刺突を施す。その下に２本の沈線と頸部の２本の沈線を巡らせ，その間に３本の沈線で山形のモチーフを描く。197，198 は口縁部である。口唇部の刻目の下から屈曲部にかけて縦位の円形と横位の波形の沈線を施している。屈曲部には横位にヘラ状工具による縦長の刺突を施し，その下には横位の４本の沈線を巡らせる。199 は口唇部の細かい刻目の下に１本の沈線を巡らし，１㎜間隔で刺突連点文を施す。その下に４本の沈線と刺突連点文で山形のモチーフを描く。屈曲部には横位に竹管状工具による刺突を施す。その下に横位に波状の１本の沈線と６本の沈線を巡らせる。細かく丁寧に作ろうとした製作者の意図が感じられる。200 は口唇部に刻目が入り，口唇部の刻目の下に１本の沈線を巡らし，１～２㎜間隔で点状の連続刺突を施す。その下に２本の沈線で波状のモチーフを描き，連続刺突を施し，１本の沈線を巡らせる。屈曲部には横位にヘラ状工具による縦長の刺突を施す。その下に横位に２本の沈線と連続刺突を巡らせ，４本の沈線で山形のモチーフを描き，また，刺突連点文を巡らせる。201 は口唇部にヘラ状工具による刻目が入り，刻目の下に２本の沈線を巡らし，１～２㎜間隔で細かく点状の連続刺突を施す。その下に３本の沈線と連続刺突で山形のモチーフを描く。屈曲部には横位にヘラ状工具による縦長の刺突を施す。その下に４本の沈線を巡らせ，頸部の数本の横位の沈線にかけて，４本の沈線での円形や５本の沈線での山形のモチーフを描く。202 は口唇部の刻目と屈曲部に縦長の刺突を横位に施す。その間に浅い２本の沈線で山形のモチーフを描く。沈線の両端には縦位の短い刺突を１段ずつ施す。屈曲部の刻目のすぐ下に３本の横位の沈線を巡らせた後，４～５本の沈線で円形のモチーフを描く。203 は 202 と同様だが，屈曲部のヘラ状工具による刻目の途中に沈線が入る部分が確認できることから，刻目を施した後に沈線を巡らせたことが分かる。204 は 199 と同様，細かく丁寧に製作している。199 と形状はほとんど同じだが，屈曲部の刻目が竹管文になっているところが異なっている。

205 ～ 232 は沈線内に撚糸文，縄文を施す一群である。撚糸文や縄文を施したのち沈線で区画し，枠外の縄文をすり消して内側だけの撚糸文，縄文を残したか，あらかじめ沈線で区画文を描いて撚糸文，縄文を施文したかのいずれかである。本遺跡の第Ⅸ類土器は，沈線の外側に撚糸文を消した跡が多く見られることから，撚糸文・縄文を施したのち沈線で区画していると考えられる。

205，206 は口縁部上部がやや内湾しながら外側に開き，沈線内に縄文を施す。205 の口唇部刻目と屈曲部の横位の縦長の刺突は，同一のヘラ状工具を器面に対して縦位に当て施文したと考えられる。口唇部のヘラ刻目，沈線で区画された網目状撚糸文，ヘラ刻目，連続刺突文，山形のモチーフを描く４本の沈線，連続刺突文と細かく文様を変化させている。206 は口縁部の屈曲部のやや下までであるが，同様の形状を成す。１本の網目状撚糸文を施した後，沈線で区画してある。

207 ～ 211 は口縁部がラッパ状に開き，沈線内に縄文を施す一群である。207 は口唇部に刻目が入り，頸部より上に２本の網目状撚糸文を施し沈線で区画する。頸部に１本の沈線を巡らせた後，胴部にも沈線内に縄文を施す。口縁部の網目状撚糸文を縁取る沈線の外側にも網目状撚糸文が僅かに残っているのが確認できる。このことから，網目状撚糸文を施したのち沈線で区画し，枠外の縄文をすり消して内側だけの縄文を残したと考えられる。208 は胴部がやや外反しながら立ち上がり，口縁部がラッパ状に外反する。口唇部には縦位の刻目が入り，その下約１㎝に沈線を巡らせ，やや深めに竹管状工具による縦長の「Ｃ」の字状の刺突を３～５㎜おきに巡らせる。頸部との間には３本の沈線とやや深めの縦長の「Ｃ」の字状の刺突，１本の沈線で山形状のモチーフを描く。頸部はやや深めの縦長の「Ｃ」の字状の刺突と１本の沈線の組み合わせを２段施す。胴部は幅３～ 3.5 ㎝の撚糸文を施し，菱形のモチーフを描く。209 は口縁部上部の外面のみがやや内湾しながら屈曲する口縁部である。口唇部に刻目が入り，１本の沈線の下に点状の連続刺突を巡らせる。屈曲には縦位の刺突を施し，その間には上に３本の沈線と点状の連続刺突で，下に２本の沈線で山形のモチーフを描く。210 は口唇部に刻目，頸部に３本の

沈線を巡らせ，2.5 ～ 3.5 ㎝幅の網目状撚糸文を施し沈線で区画する。

211，212 は大型の深鉢で，ラッパ状の口縁部は上部の外面のみが僅かに内湾しながら外側に開く。211 は１㎜もない間隔で点状の連続刺突を幾重にも巡らせるなど丁寧に繊細に製作されたことが窺える。口唇部には刻目を施し，１本の沈線を巡らせる。僅かな屈曲部には点状の連続刺突と縦位の細い刻目を施し，５本の沈線を巡らせる。口唇部との間には３本の沈線とそれを両側から挟む点状の細かい連続刺突で山形のモチーフを描く。僅かな屈曲部より下には７本の沈線で山形のモチーフを描く。頸部には１本の沈線とやや斜位に連続刺突を巡らせる。胴部には約 7.5 ㎝幅の沈線で区画された撚糸文を縦位に施す。212 も口径 50 ㎝の大型の深鉢で，口縁部のみであるが半円形に接合できた。口唇部には刻目を施し，１本の沈線と刺突連点文を巡らせる。頸部に２～３㎜間隔で縦位の刺突を巡らせるが，途中からは刺突が施されていない。なんらかの理由があったと考えられる。頸部の上に１本の沈線と刺突連点文を巡らせ，口唇部との間に２本の沈線で山形のモチーフを描く。胴部には８～９㎝幅の網目状撚糸文を沈線内に縦位に施す。

213 ～ 216 は完形に復元できた。213，216 はやや上げ底気味の底部に対して，胴部がやや湾曲しながら立ち上がり，口縁部がラッパ状に大きく外反する。213 は口径 26.8 ㎝，器高 22.2 ㎝である。頂点が下向きの三角形の沈線文を組み合わせた複合鋸歯文が口縁部にあるのが特徴である。口唇部に刻目を施し，頸部の竹管状工具による「C」の字状の連続刺突との間に横位の約 10 本の沈線を施した後，三角形の沈線文を組み合わせた複合鋸歯文を描く。胴部には約３㎝幅の沈線で区画された網目状撚糸文を横位に波状に３段施す。214 は口径 35 ㎝で口縁部から胴部下半である。口唇部に刻目を施し，口縁部は３本の沈線の上下を刺突連点文で挟むように巡らせ，下には縦長の連続刺突を，また，約２㎝幅の沈線で区画された網目状撚糸文を横位に波状に施す。頸部付近には２本の沈線と連点刺突を巡らせる。胴部には約 10 ㎝幅の沈線で区画された網目状撚糸文を縦位に施した後，斜位の２～５本の沈線で幾何学的に施文している。215 は口径 46 ㎝で口縁部から胴部下半の大型深鉢である。胴部が底部からやや開き直線的に立ち上がり，口縁部がラッパ状に大きく外反する。口縁部上部の外面のみがわずかに内湾する。口唇部に刻目を施し，口縁部は沈線と連続刺突を巡らせ，屈曲部に縦長の連続刺突を施す。口唇部との間には４本の沈線とその上下を点状の連続刺突で挟むように巡らせ，山形のモチーフを描く。頸部には１本の沈線と刺突連点文を施す。胴部には５～ 10 ㎝幅の沈線で区画された網目状撚糸文を縦位に施す。216 は口径 36 ㎝，底径 14 ㎝の大型の深鉢である。口縁部上部の外面のみやや逆「く」の字状に屈曲する。口唇部に刻目を施し，口縁部は横位に沈線で区画された撚糸文を施し，屈曲部と頸部に２本１単位の波状の沈線を巡らせる。胴部上部には横位に波状の沈線で区画された撚糸文を２本巡らせ，下部には縦位に撚糸文を施文した後，横位に４本の沈線を巡らせる。口縁部内面には指頭圧痕が確認できる。

217 ～ 226 は胴部である。217 は屈曲部より下の口縁部で，調整や文様の施文がとても丁寧にされている。屈曲部には刺突連点文，１本の沈線，縦位の連続刺突，２本の沈線を巡らせる。頸部の横位の沈線との間に７本の沈線で山形のモチーフを描く。胴部には縦位に沈線で区画された網目状撚糸文を施した後，刺突連点文を巡らせる。218 は口縁部下部から胴部上部にかけてである。口縁部下部の幅約５㎝の無文帯の上下には縦位の連続刺突を巡らせる。胴部には約４～５㎝幅の沈線で区画された撚糸文を波状に施文する。219 は胴部で，幅約４㎝の沈線で区画された撚糸文を波状に施文する。220 は刺突連点文と幾重にもなる沈線と３本の重弧文状の沈線が施される。221 は点状の連続刺突の下に縦位の沈線で区画された網目状撚糸文と，無文帯の中に縦位の波状の沈線を施している。222 は斜位の沈線と横位の波状の沈線を施す。223 は重弧文状の沈線と波状の沈線を施す。224 の上部は横位と波状の沈線を施し，その下に幅２～３㎝の沈線で区画された撚糸文を施文する。225 は縦位の沈線の左側には網目状撚糸文を縦位に広い幅で施し，右側には横位に沈線で区画された網目状撚糸文を斜位に施文する。226 は沈線で区画された網目状撚糸文と波状や弧状の沈線を施す。

227 ～ 232 はやや上げ底気味の底部である。227 は底部から胴部にほぼ直立して立ち上がる。縦位に幅約６㎝の沈線で区画された網目状撚糸文を施した後，５本の沈線で菱形状のモチーフを描く。上部には連続刺突を巡らせる。228，229 は沈線で区画された撚糸文を施す。229 は明瞭な沈線の外側に撚糸文を消した跡が見られることから，撚糸文を施した後，両側を沈線で区画したことが分かる。また，上げ底状の底部を呈し，胴部から底部にかけて直線的にすぼまる。230，232 は沈線で区画された網目状撚糸文が縦位に，231 は沈線で区画された撚糸文が縦位と斜位に施される。

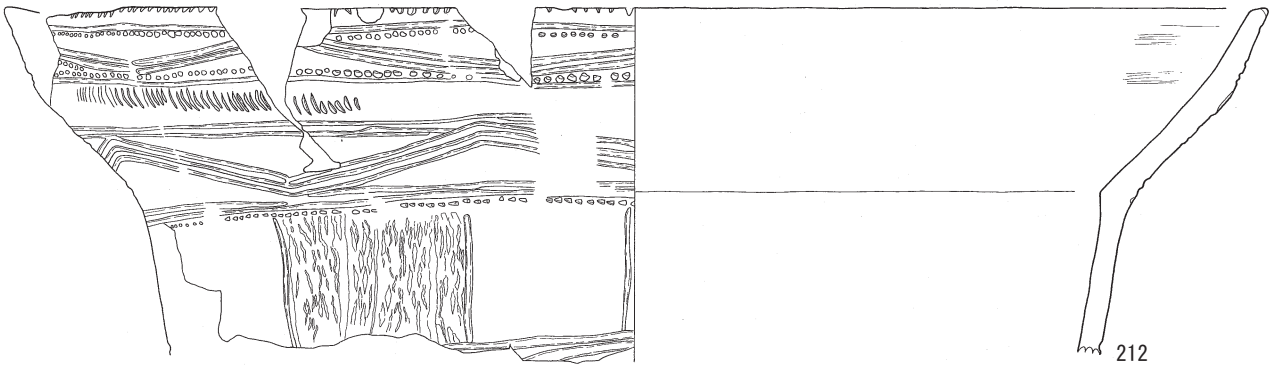
233 ～ 237 は胴部である。233 ～ 235 は数本の沈線で山形や重弧文状のモチーフを描く。236，237 は数本の沈線とその外側の点状の連続刺突で山形や重弧文状のモチーフを描く。

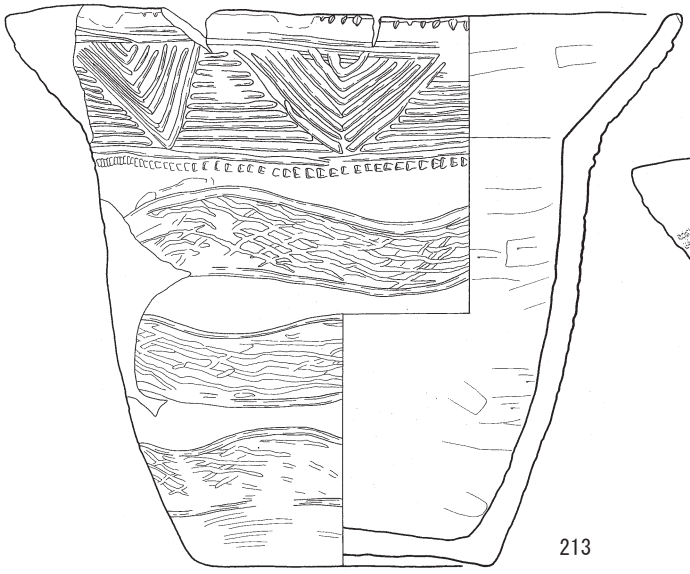
238 ～ 245 は胴部から底部にかけてである。

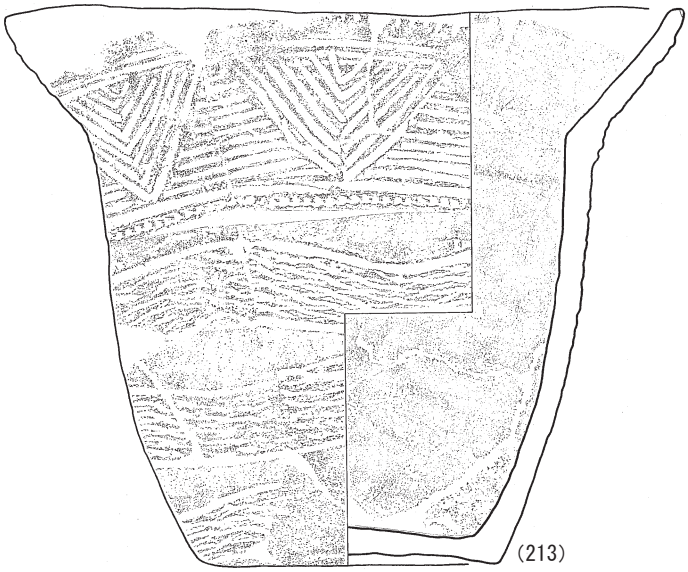
238 ～ 241 は撚糸文，網目状撚糸文は施さない。

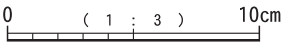
238，239，241 は数本の沈線で山形や重弧文状のモチーフを描く。240 は上げ底状の底部を呈し，数本の沈

第 81 図　第Ⅸ類土器（７）

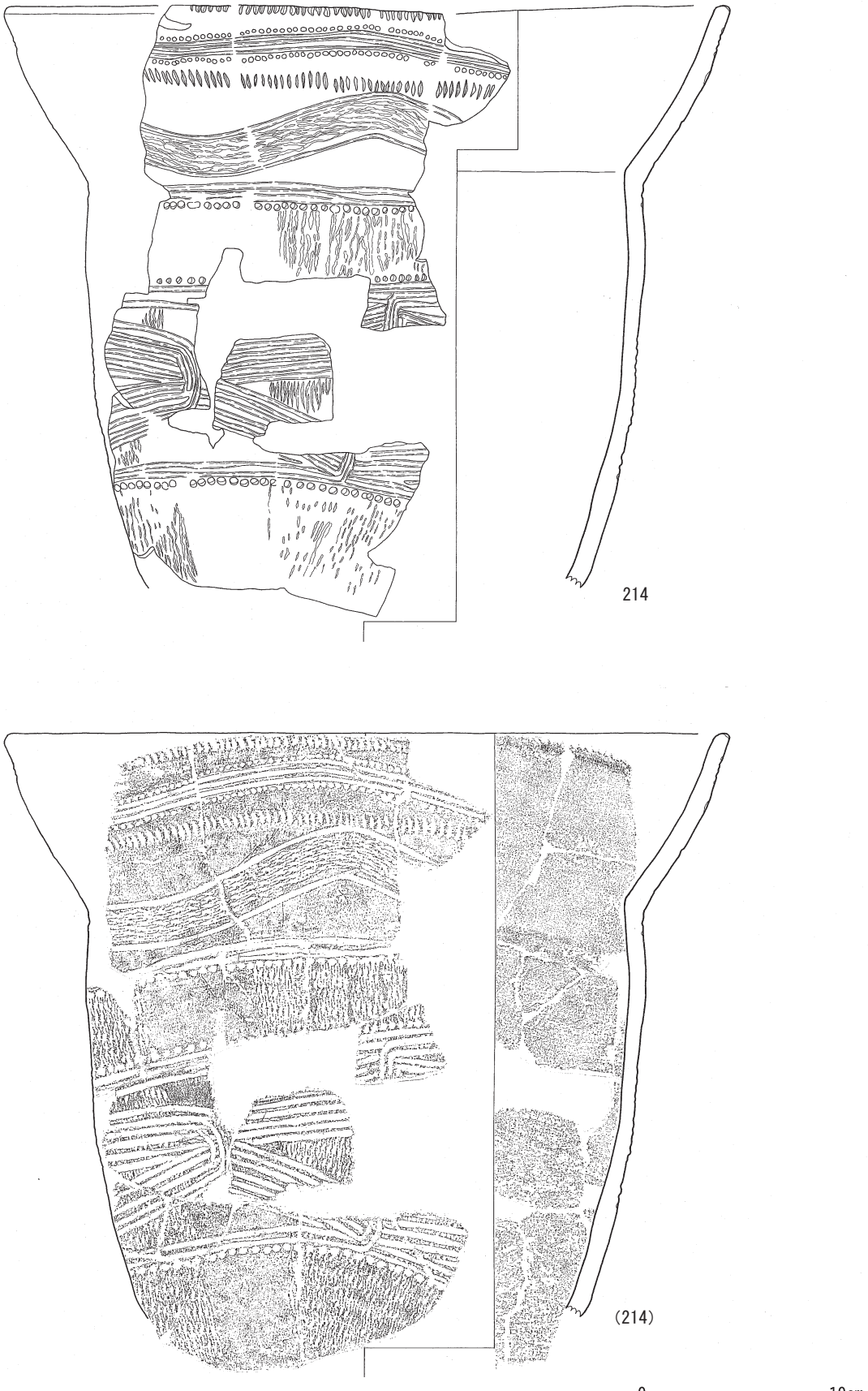




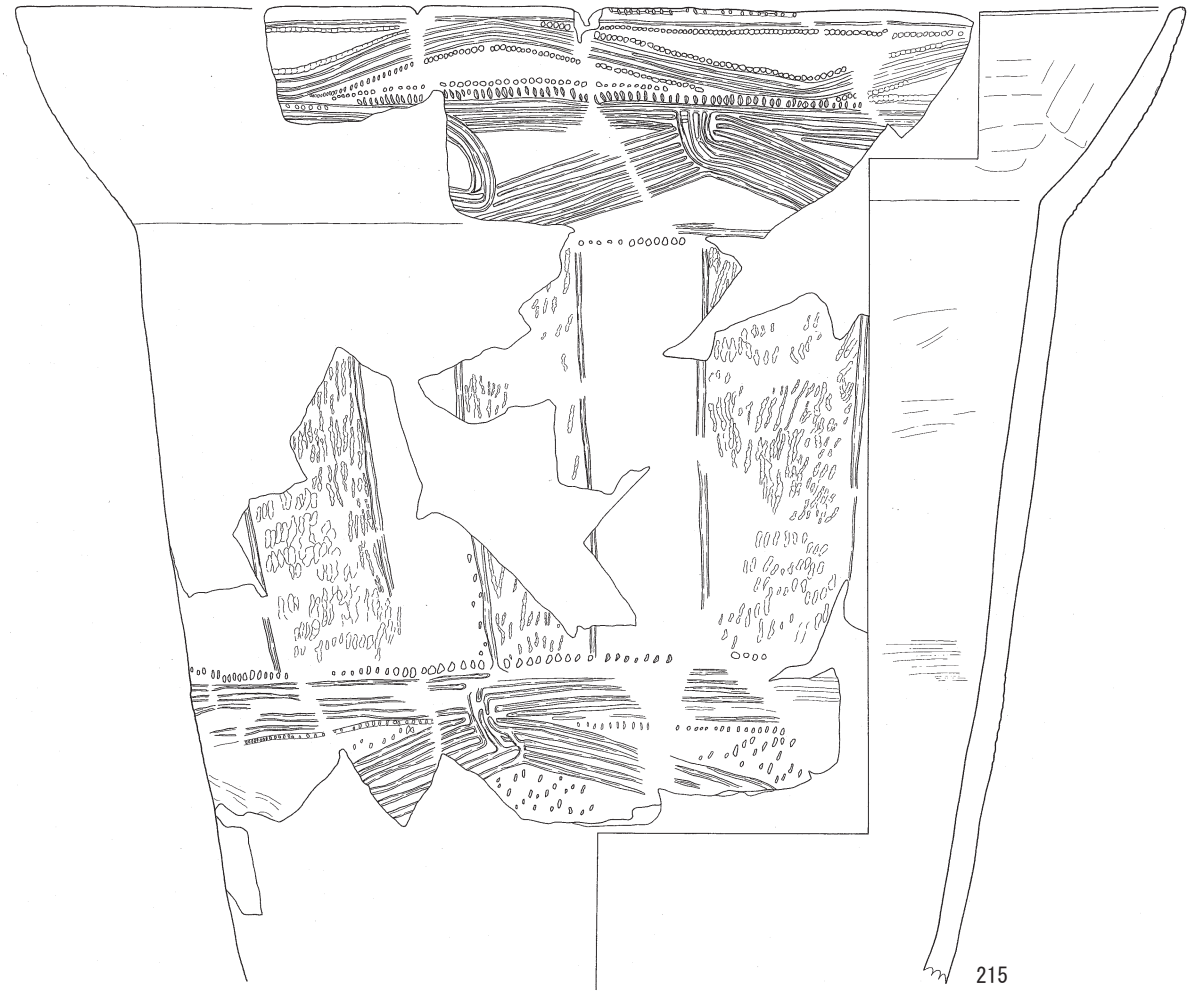




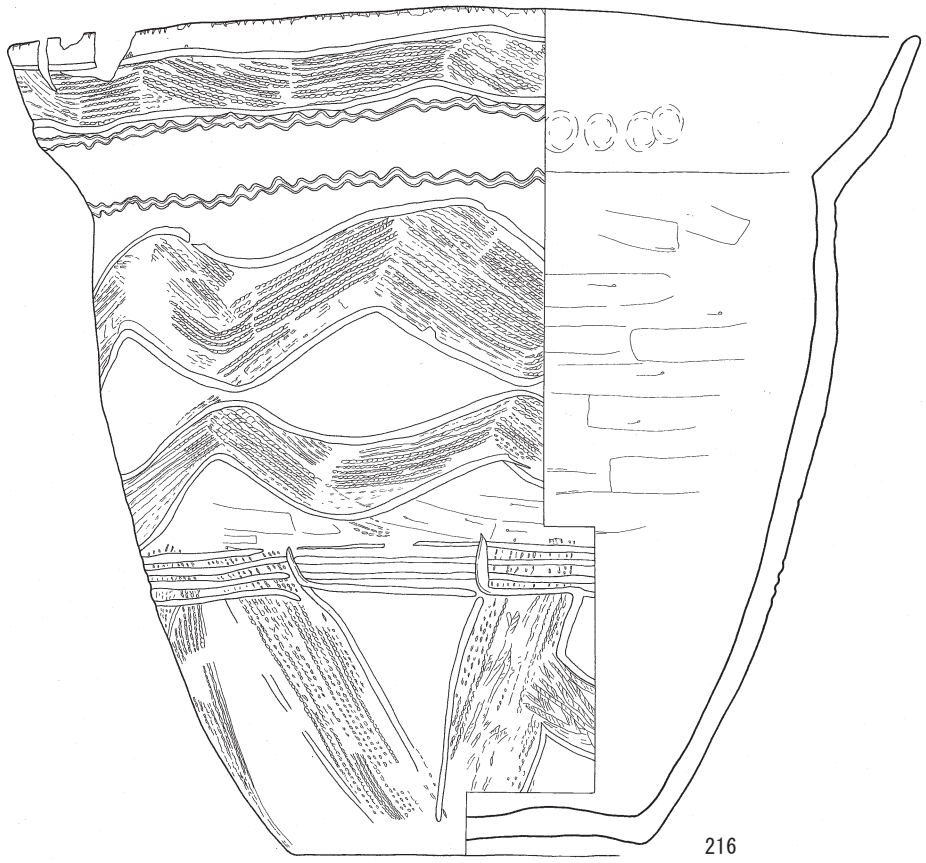
第 82 図　第Ⅸ類土器（８）



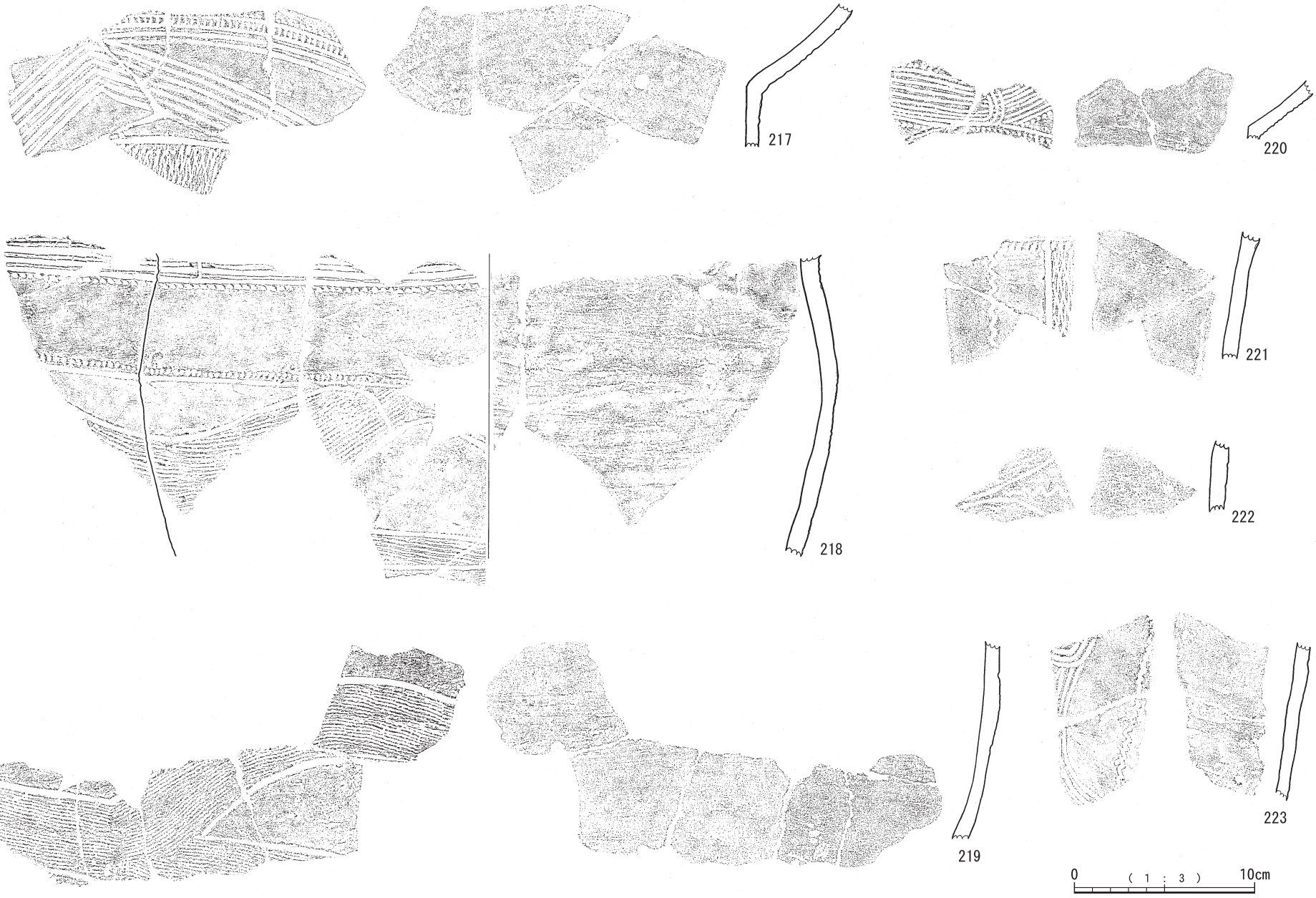
第 83 図　第Ⅸ類土器（９）



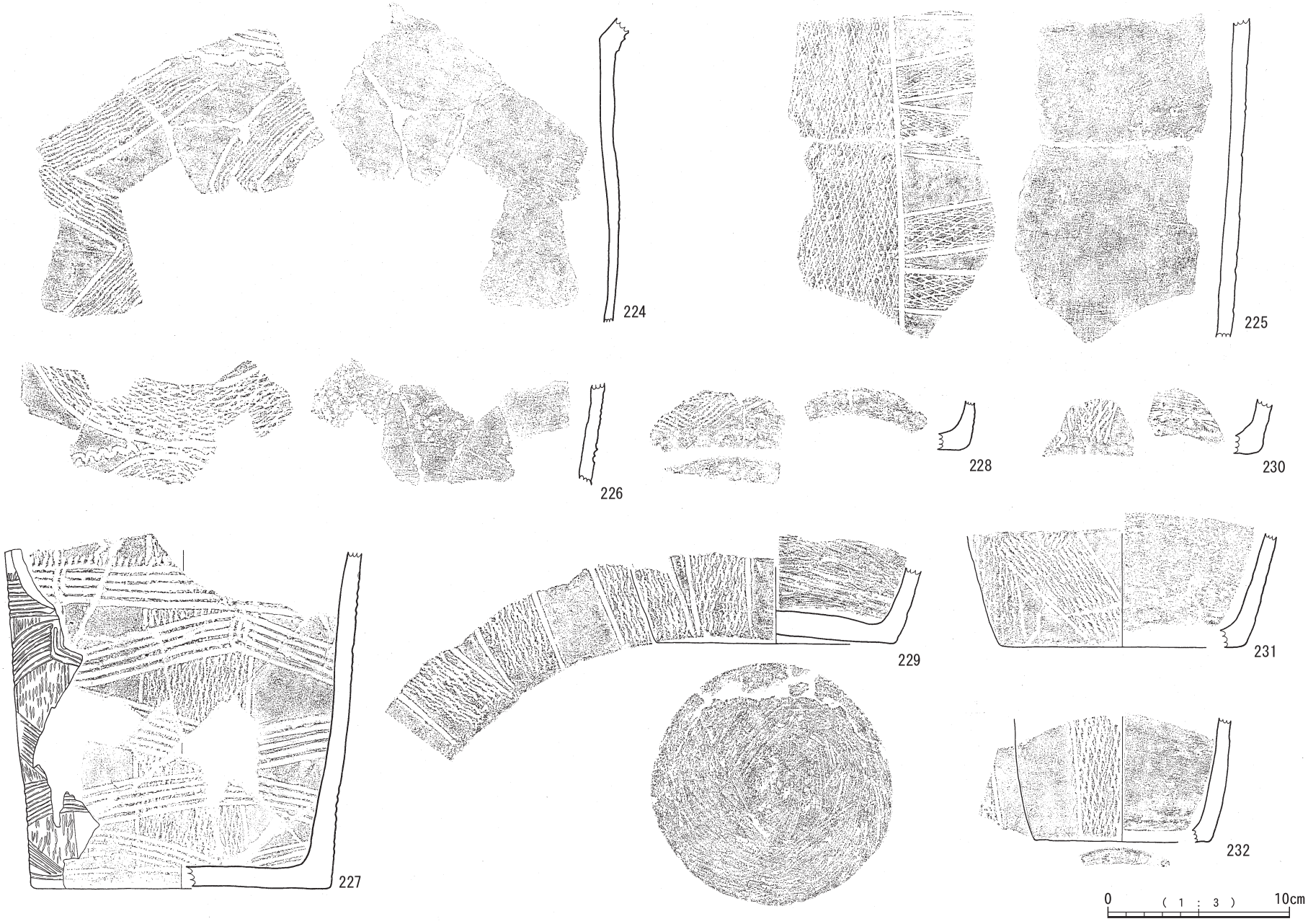
第 84 図　第Ⅸ類土器（10）



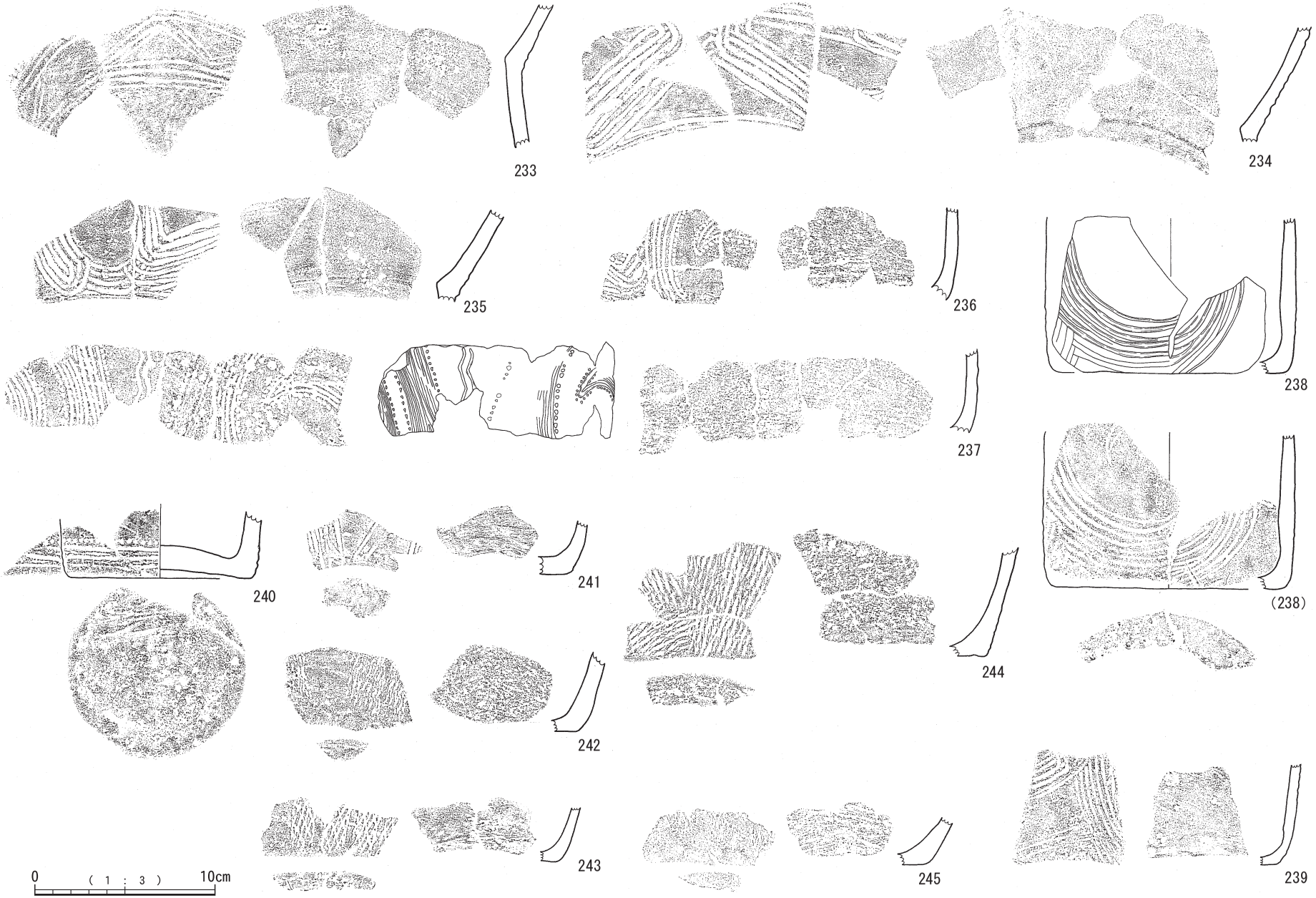
第 85 図　第Ⅸ類土器（11）



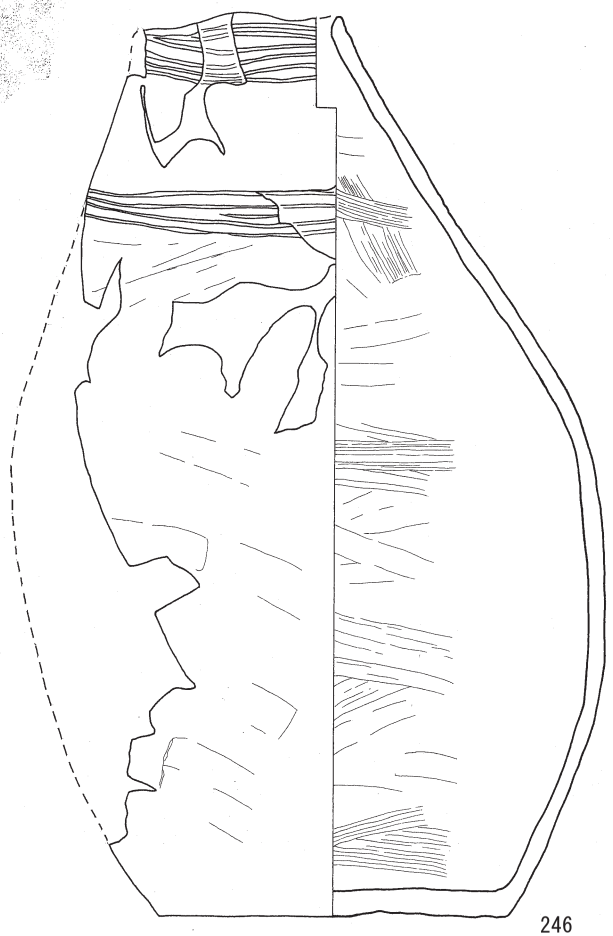
第 86 図　第Ⅸ類土器（12）



第 87 図　第Ⅸ類土器（13）



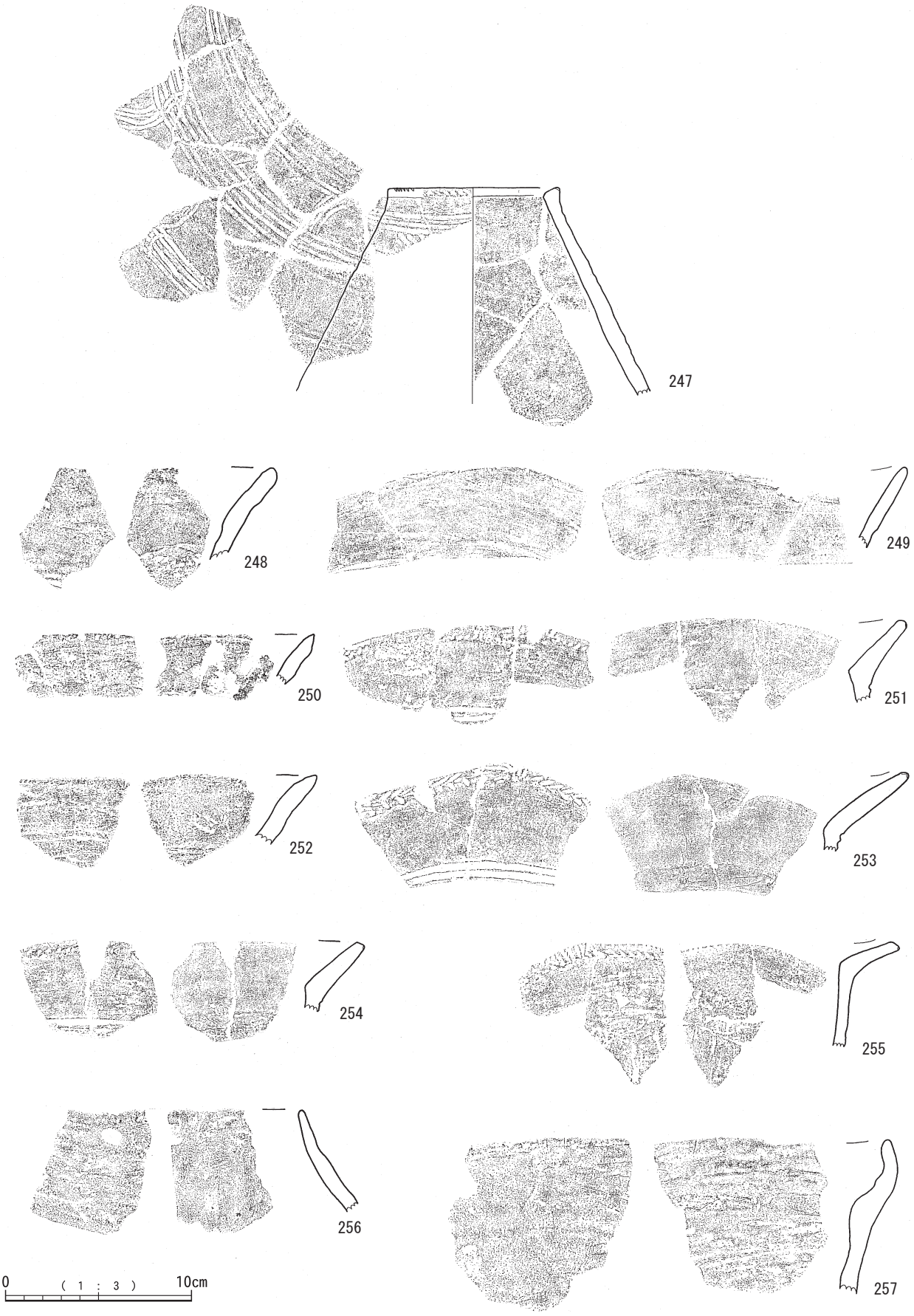
第 88 図　第Ⅸ類土器（14）



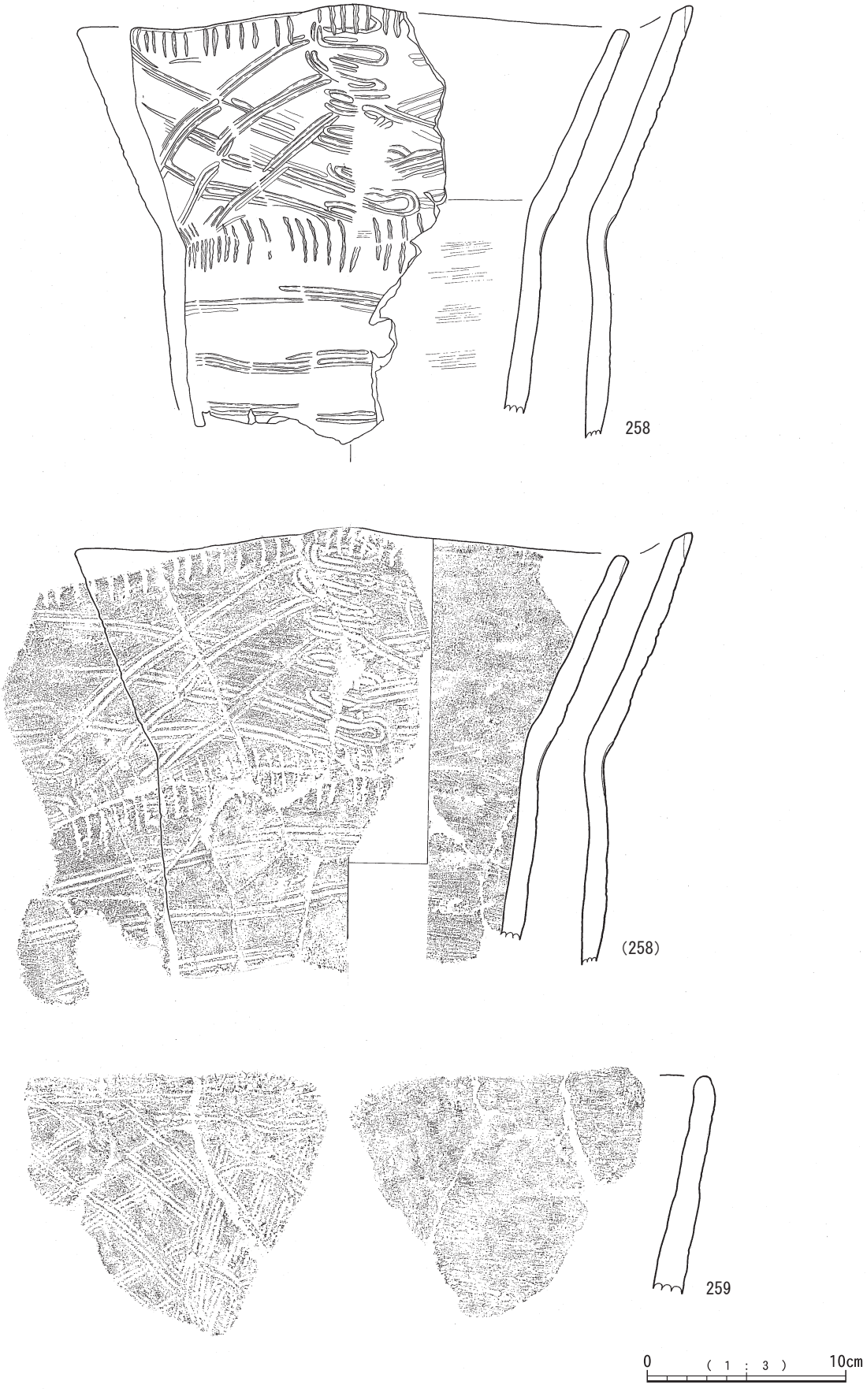
246

0 (1 : 3) 10cm

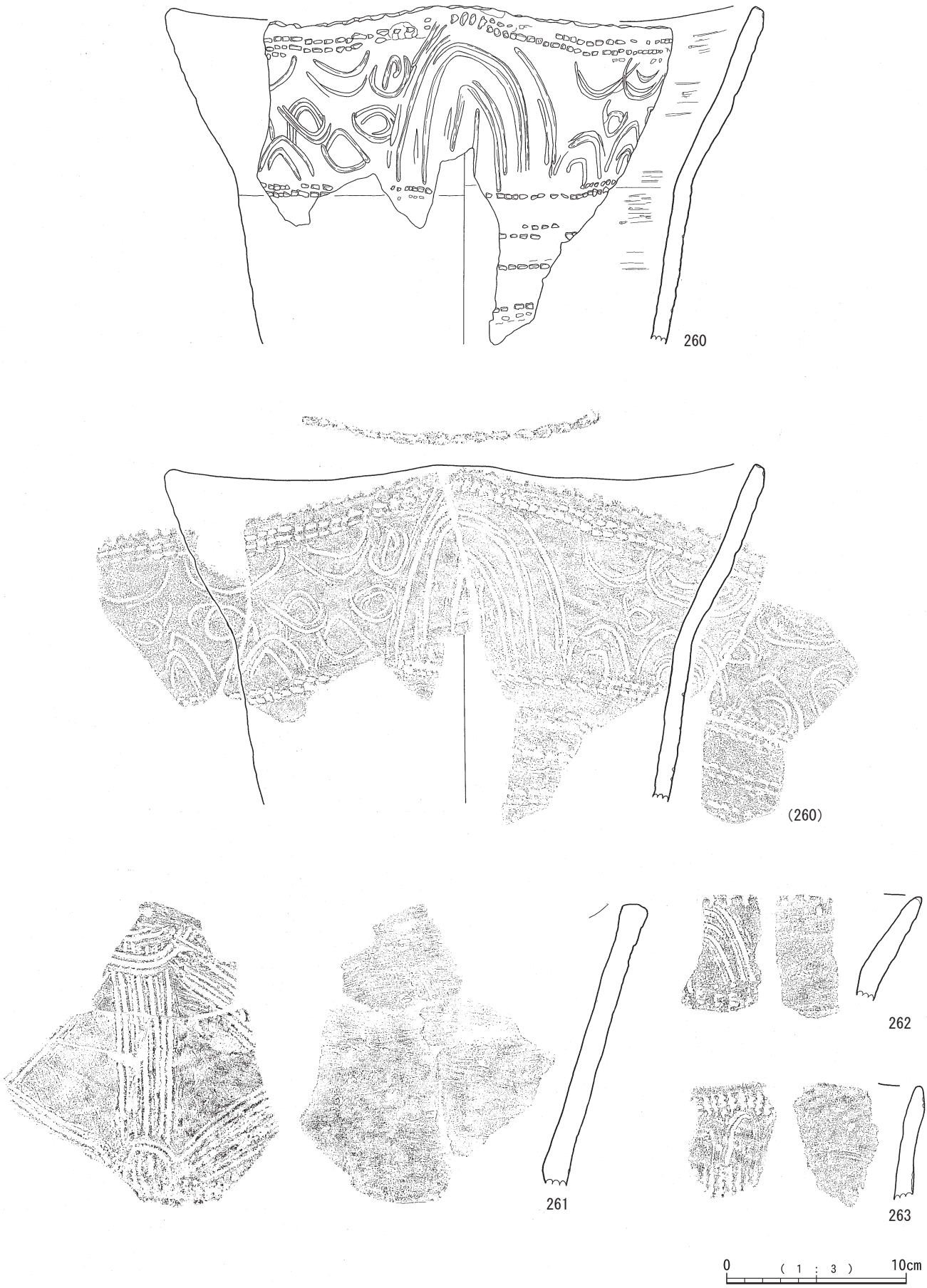
第 89 図　第Ⅸ類土器（15）



第 90 図　第Ⅸ類土器（16）

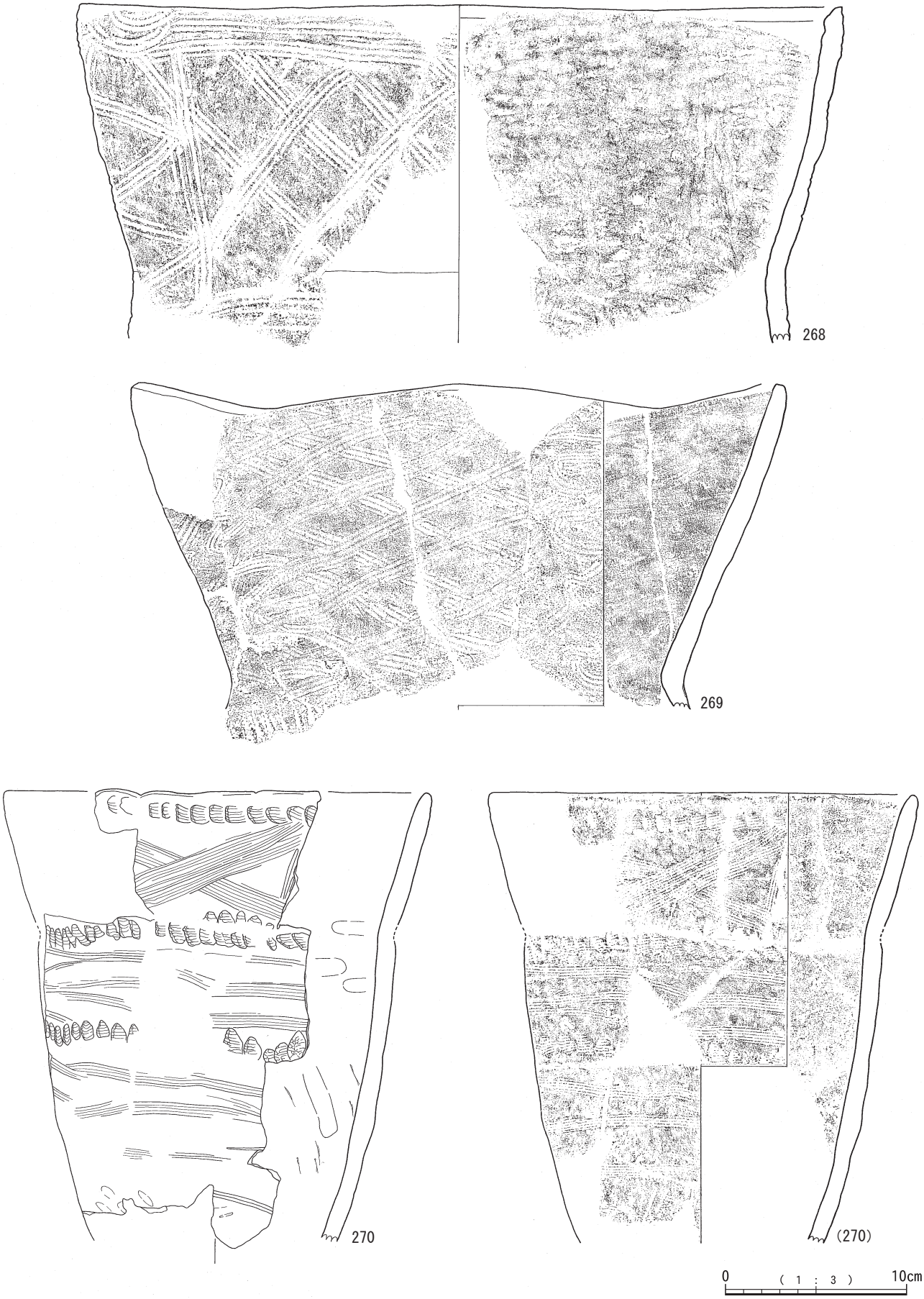


第 91 図　第Ⅹ類土器（１）

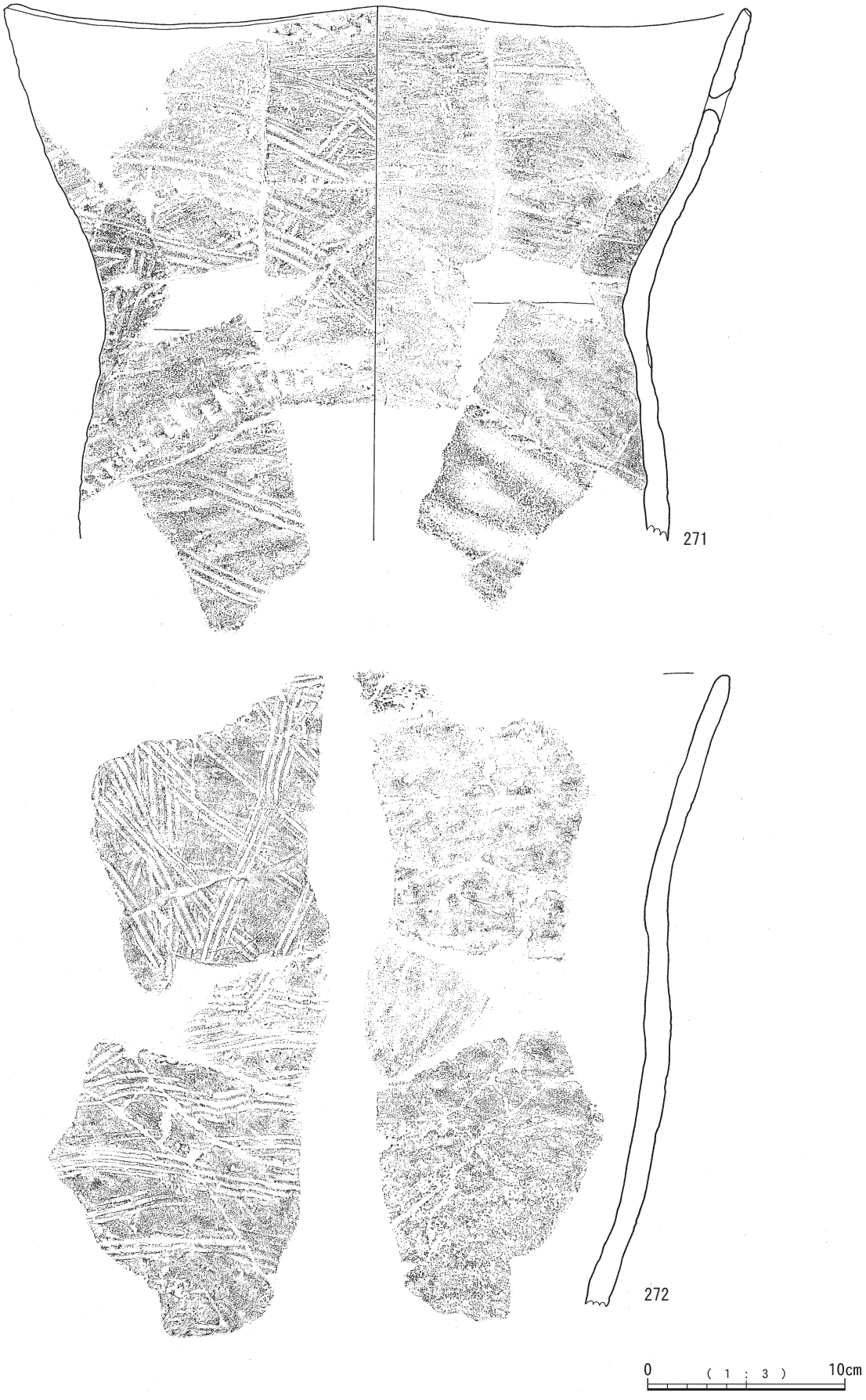


第 92 図　第Ｘ類土器（２）

第 93 図　第Ｘ類土器（３）

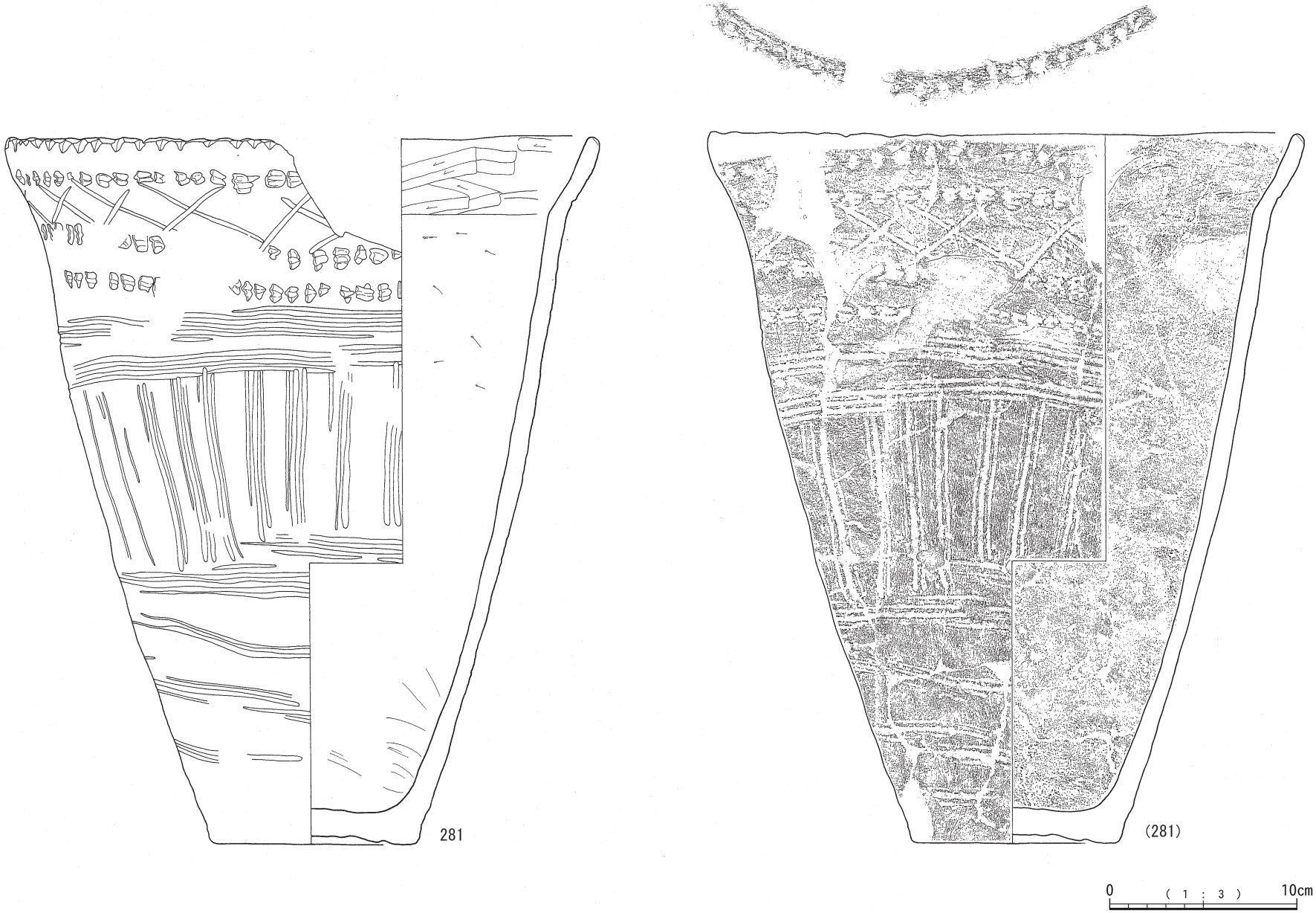


第 94 図　第Ⅹ類土器（４）

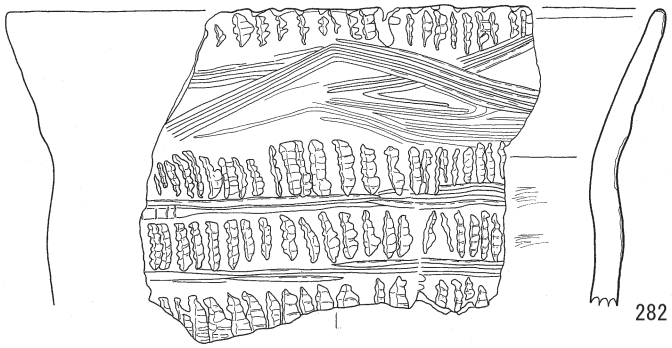


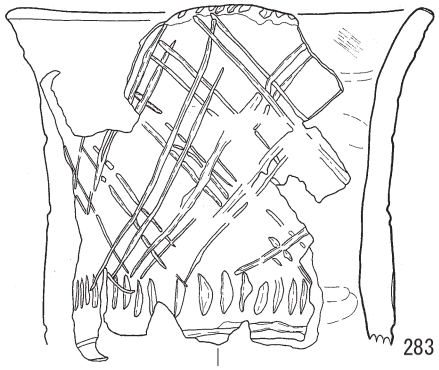
第 95 図　第Ｘ類土器（５）

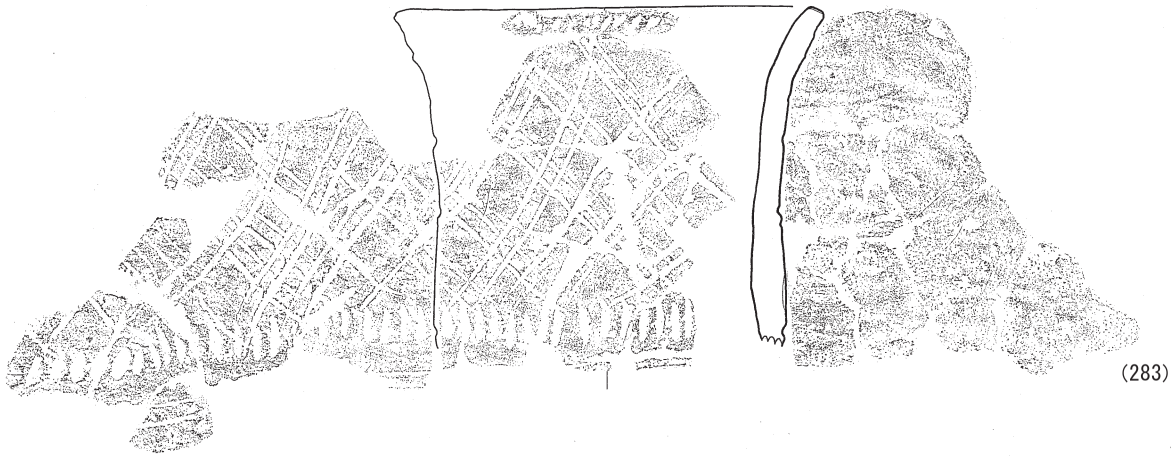
第 96 図　第Ⅹ類土器（６）

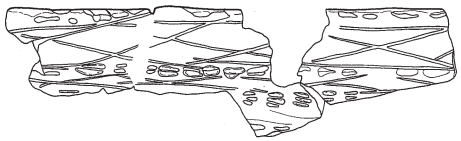


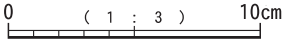
第97図　第X類土器（7）



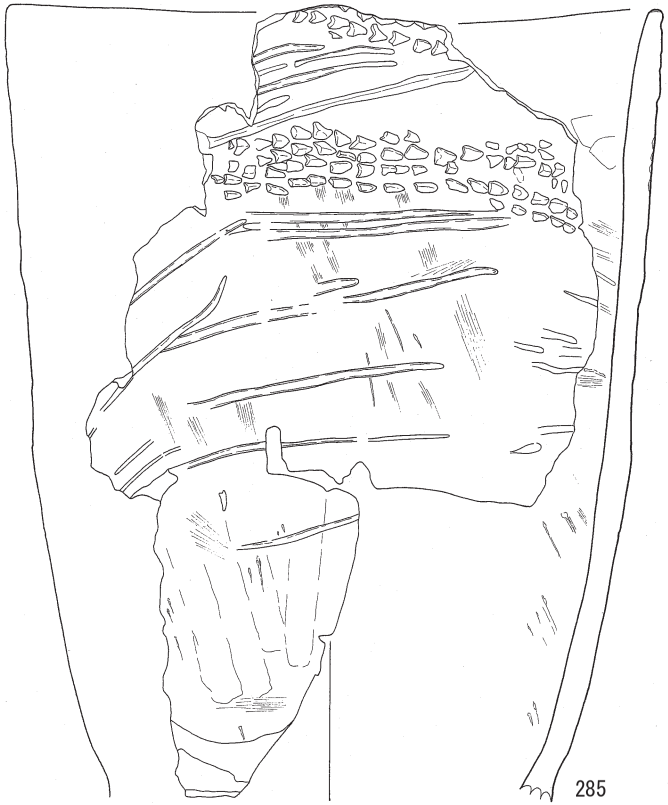






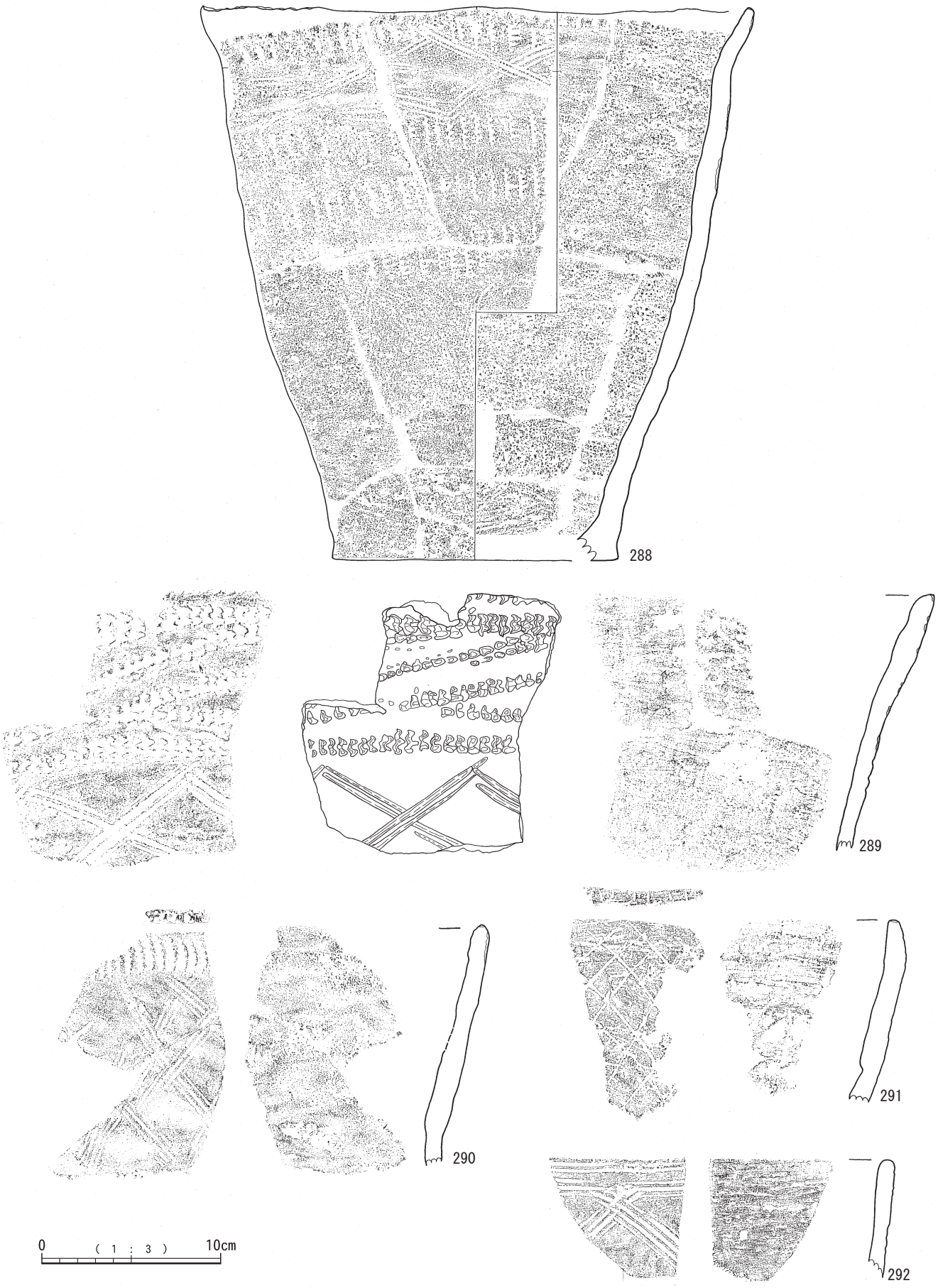


第98図　第X類土器（8）

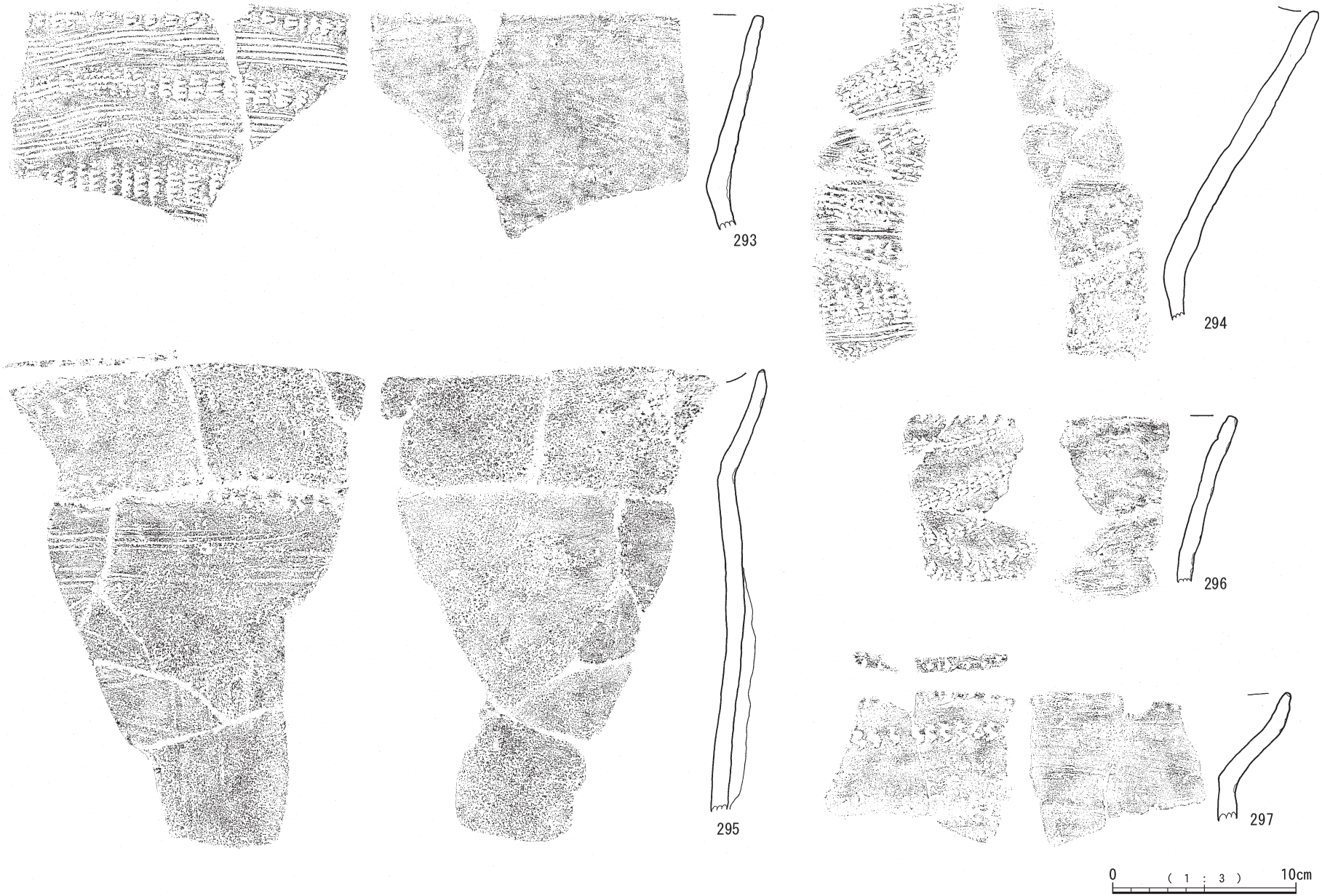


0 (1 : 3) 10cm

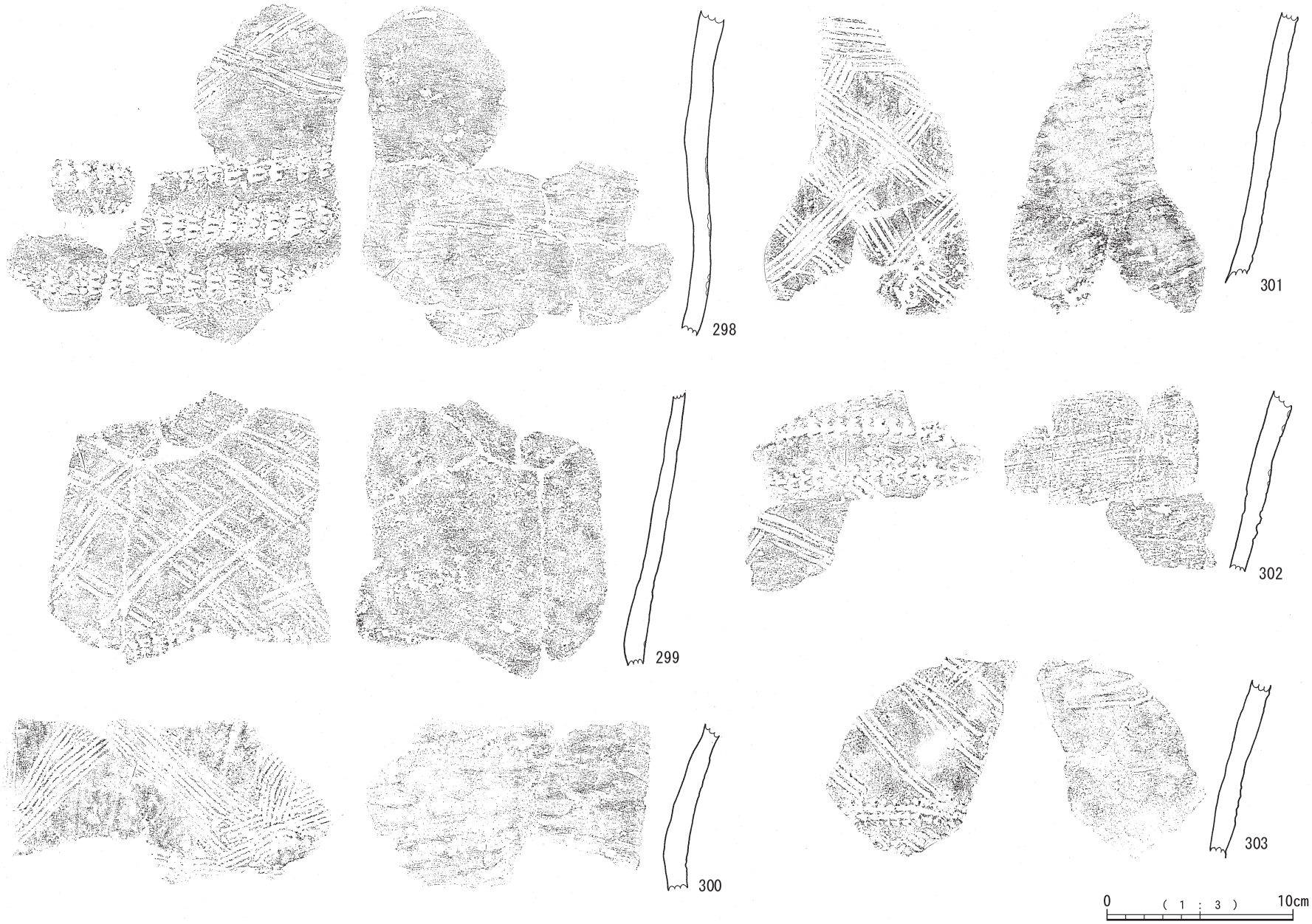
第 99 図　第Ｘ類土器（９）



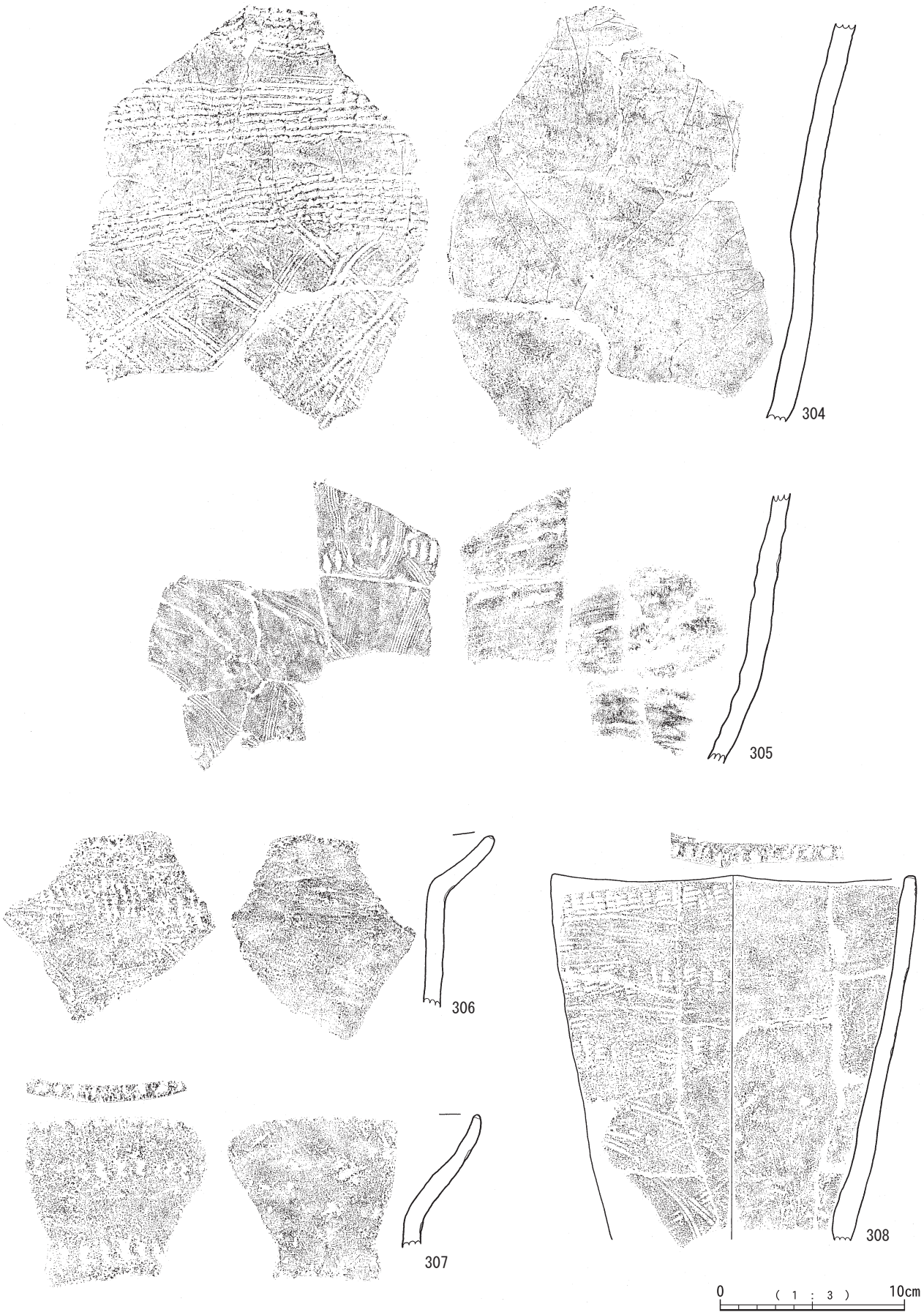
第 100 図　第Ⅹ類土器（10）



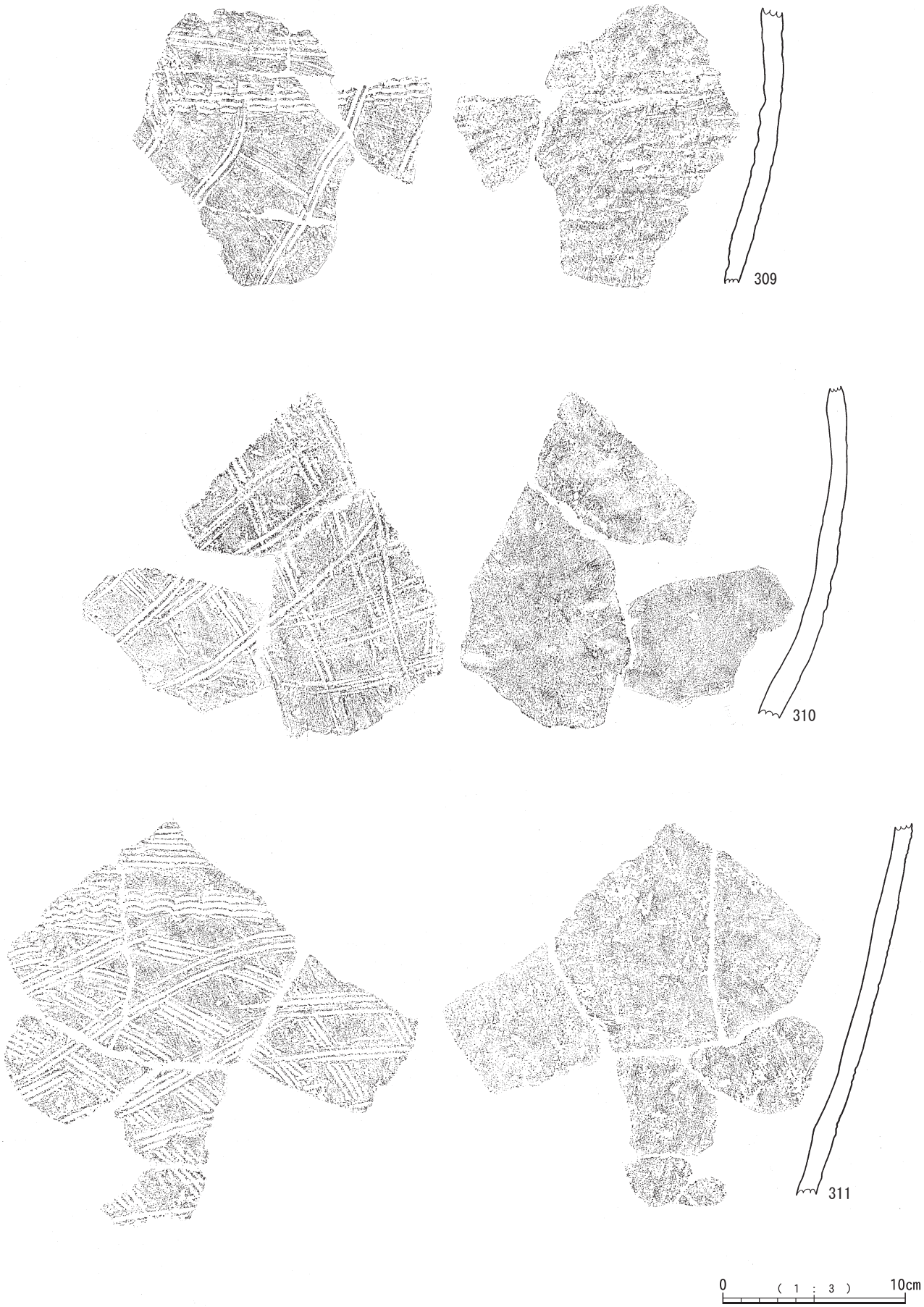
第 101 図　第Ｘ類土器（11）



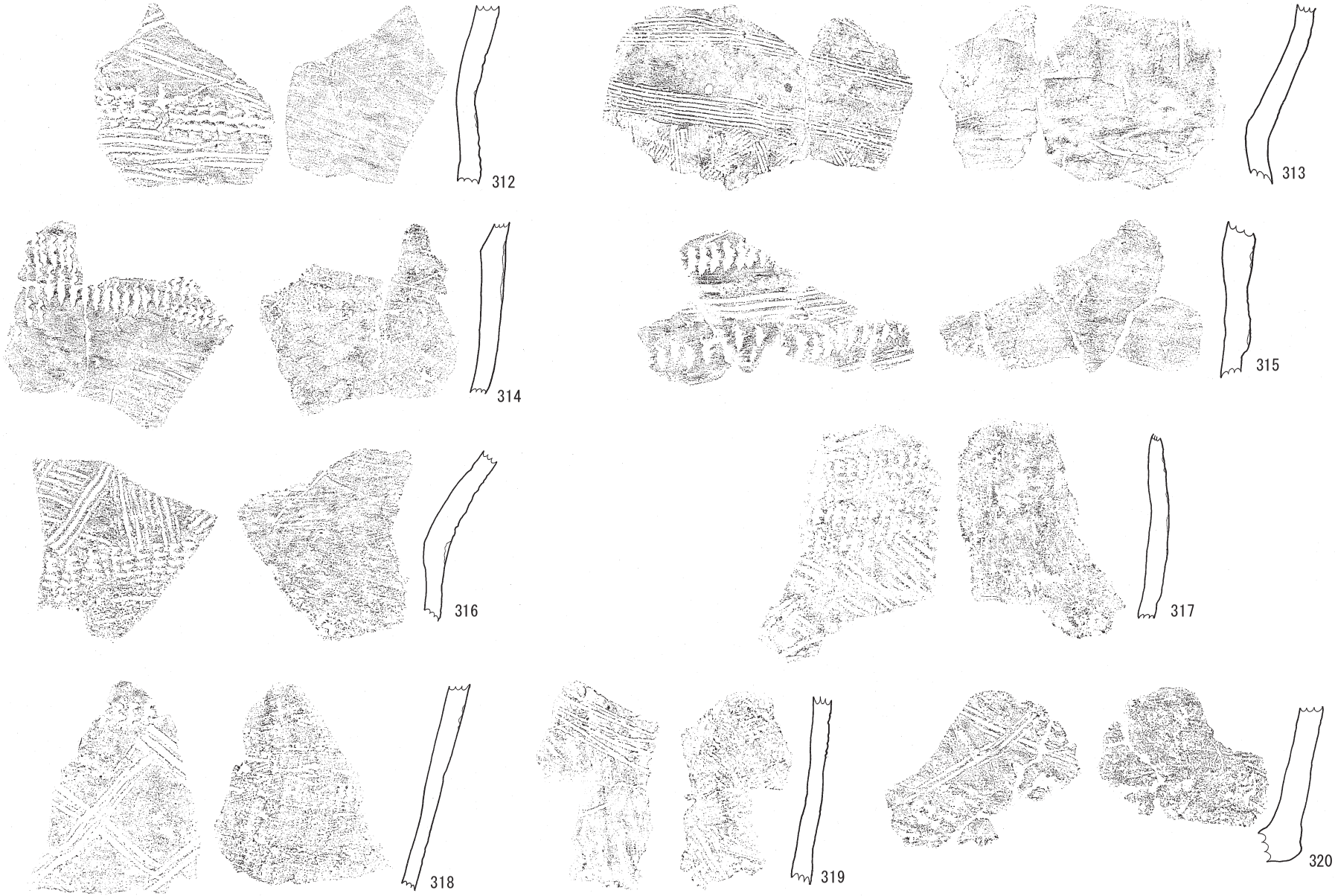
第 102 図　第Ｘ類土器（12）



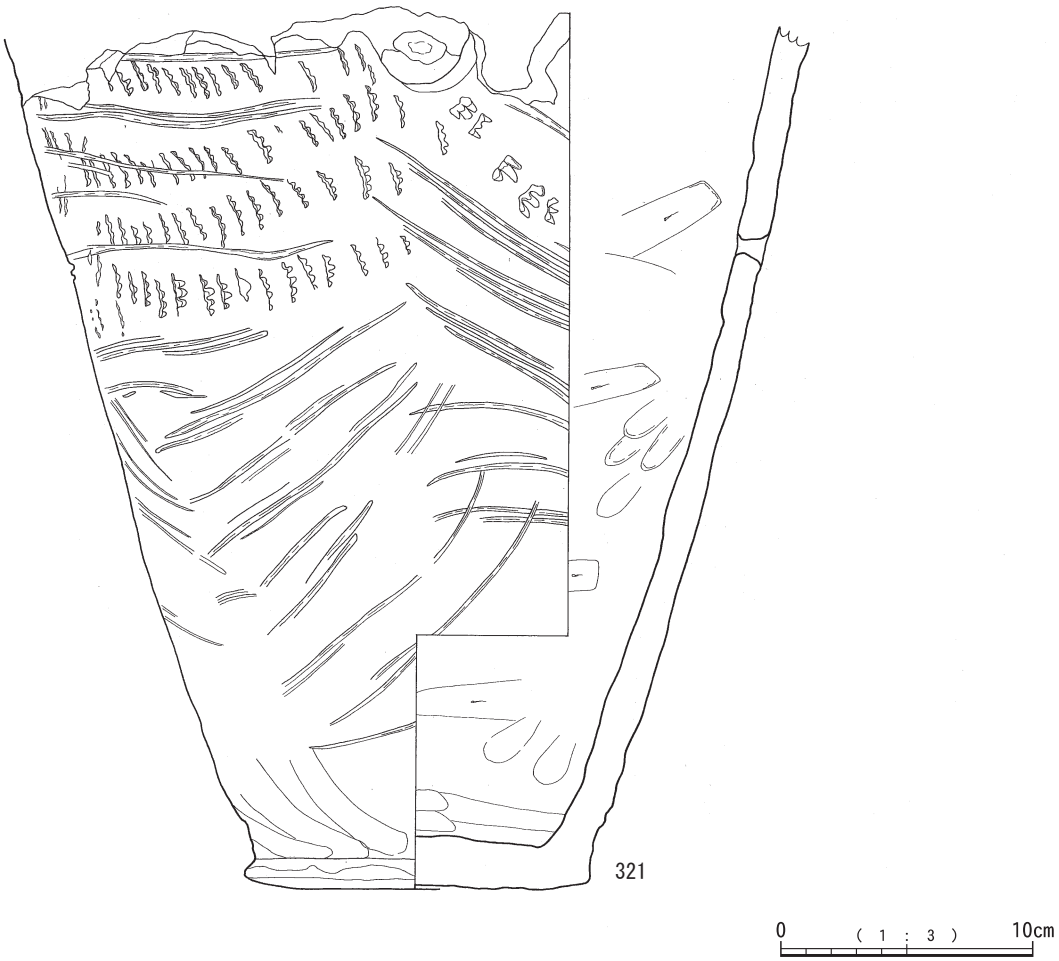
第 103 図　第Ｘ類土器（13）



第 104 図　第Ⅹ類土器（14）



第 105 図　第Ｘ類土器（15）



第 106 図　第Ｘ類土器（16）

線とその外側の点状の連続刺突で山形や重弧文状のモチーフを描く。

242 ～ 245 は撚糸文，網目状撚糸文が縦位と斜位に施される。

246，247 は壺型土器である。246 は完形に復元できた。口径８cm，最長の胴径 24 cm，底径 13.5 cm，器高 35.6 cm の全体的にゆがみがある壺である。口唇部に３本ではあるが斜位の刻目が確認できる。口縁部上部に横位に６本，頸部に４本の沈線を施す。外面の調整は丁寧な工具ナデ後ナデである。247 も壺で，口径 9.5 cmの口縁部から胴部にかけてである。横位に３～５本１単位の沈線を巡らせ，重弧文状の沈線を施す。外面はナデ，内面は丁寧な工具ナデ後ナデ調整である。

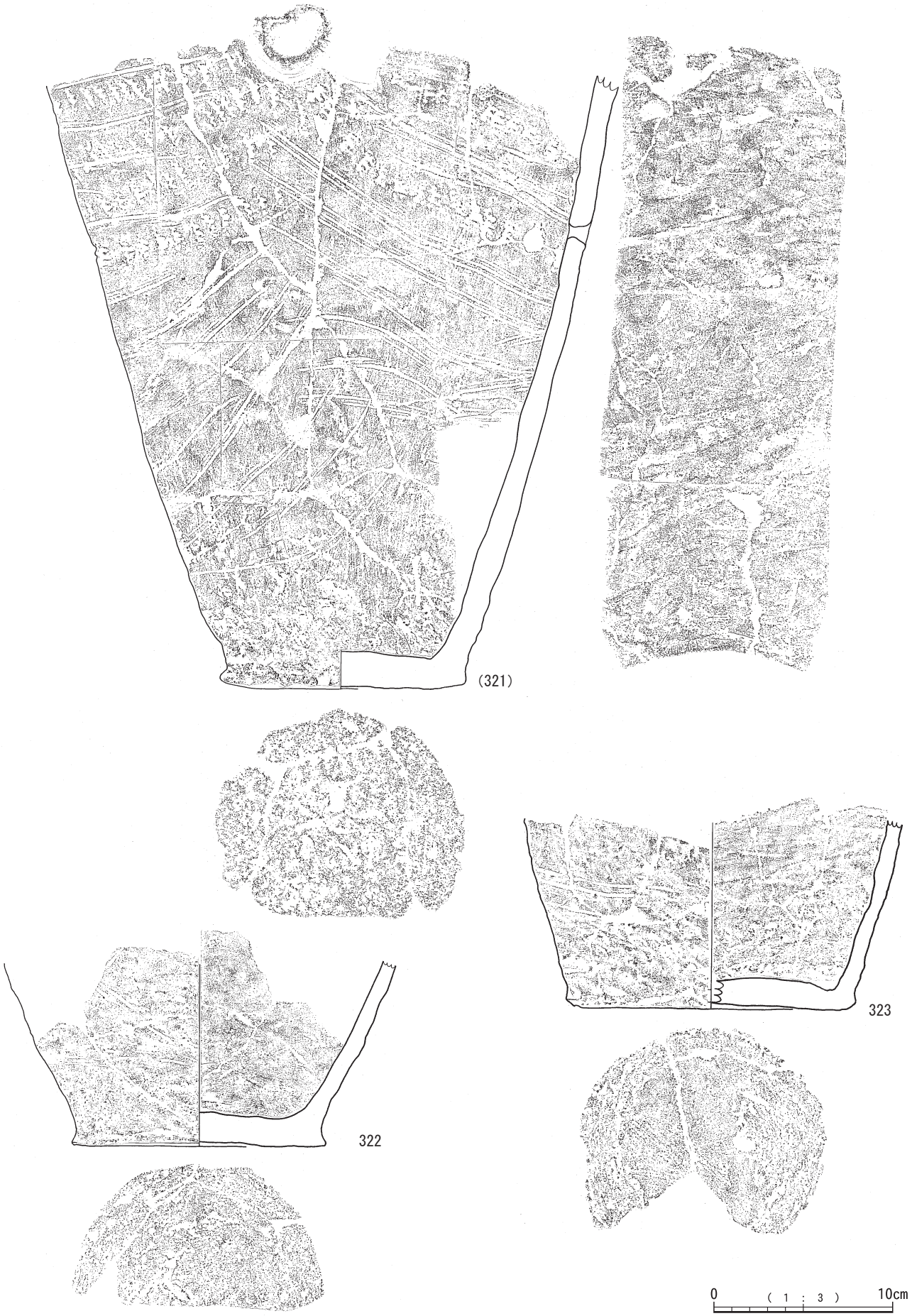
248 ～ 257 は口縁部が無文帯の一群である。248，251，253，254，255 は口唇部に斜位または，縦位の刻目が確認できる。253 は矢羽根状の刻目を施す。251，253，254 は頸部に横位の２本の沈線を巡らせる。

第Ｘ類土器（第 91 ～ 109 図　258 ～ 335）

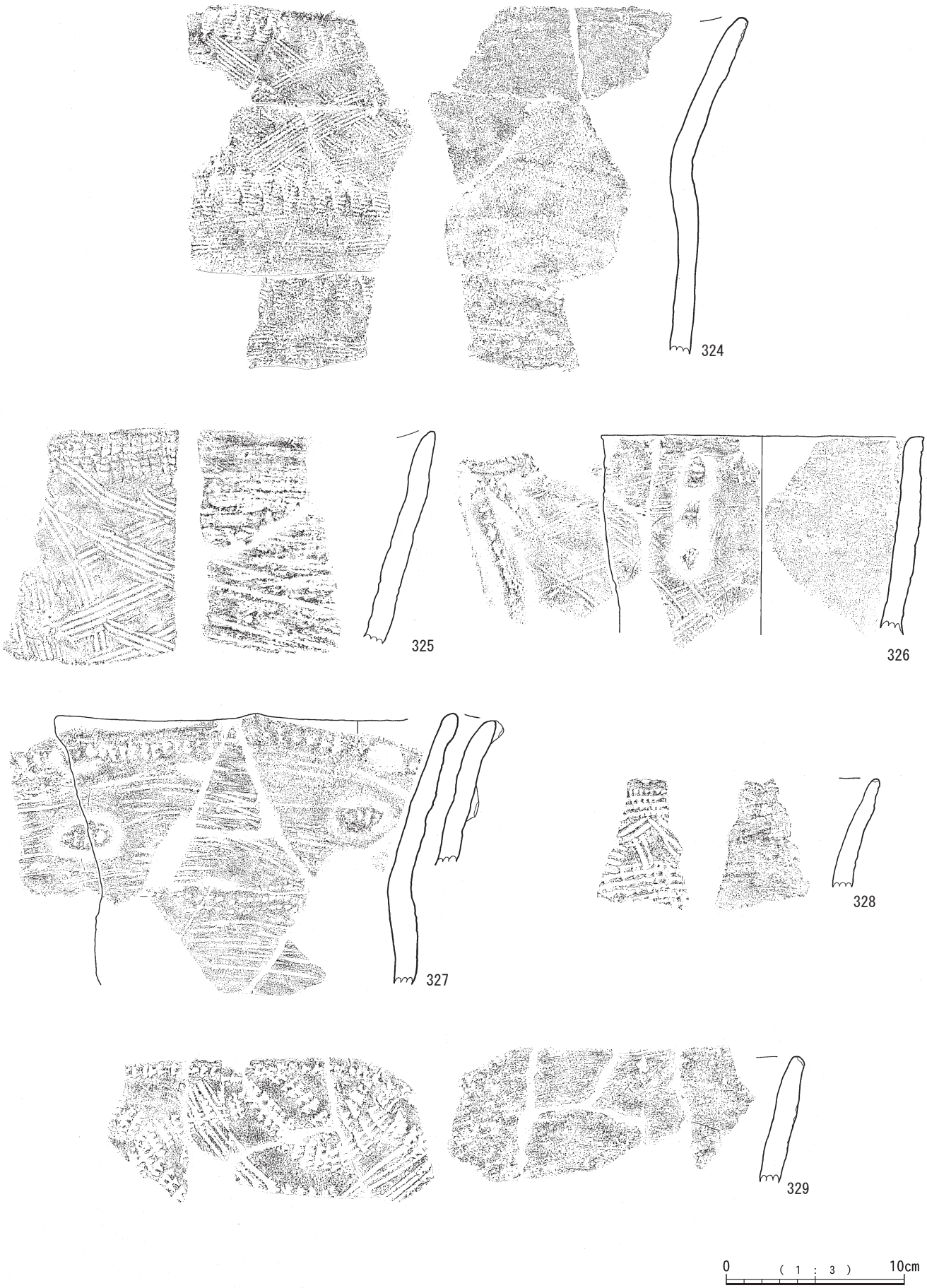
器形は，口縁部はラッパ状に外反し，胴部はやや膨らんで直立し，底部はあげ底気味の平底である。文様は口縁部・胴部の２帯構成である。口縁部にかけて貝殻刺突文や沈線文，胴部は貝殻条痕や条線を施す。内外面の調整は，ほとんどが工具ナデ後ナデ調整である。Ｘ類土器には，条痕や条線を幾何学的に施した後，両端を沈線で区画するものがあるが，本遺跡では見つかっていない。

258 ～ 280 は口縁部が緩やかに大きく外反し，口縁部の上下に施した刺突の間に斜位，曲線状の沈線を施す。頸部付近に貝殻連続刺突文を施し，胴部は条痕や条線を横位や縦位，斜位に施す。

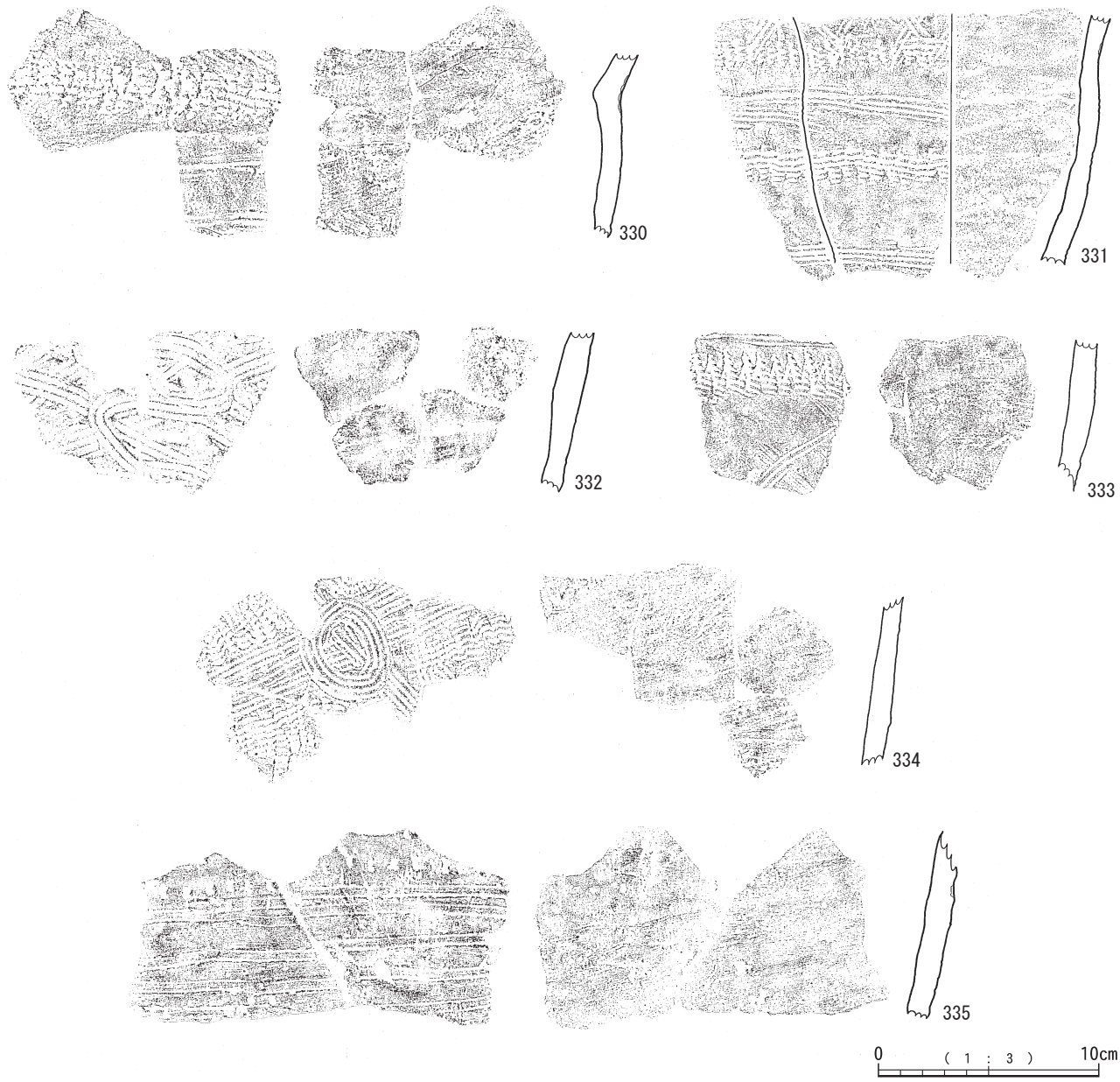
258 ～ 266 は口縁部，または，口縁部から頸部，胴部である。口縁部の上下に施した刺突の間に斜位，曲線状の沈線を施す。258 は口縁部に２本１単位で斜格子状に条線文を施し，口縁部上部と頸部に貝殻連続刺突文を巡らせる。259 は３～５本１単位で斜格子状に条線文を施す。260 は口唇部に貝殻腹縁刻目を施し，口縁部上部に横位に２段の貝殻連続刺突文を施し，口縁部に沈線で幾何学模様のモチーフを描く。頸部と胴部上部には貝殻連続刺突文を施す。261 は口唇部に刻目を施し，条線と弧状の沈線で幾何学模様のモチーフを描く。262 は口唇部に貝



第 107 図　第Ｘ類土器（17）



第 108 図　第Ⅹ類土器（18）



第 109 図　第Ｘ類土器（19）

殻腹縁刻目を施し，弧状の沈線を施し，頸部には貝殻連続刺突文を施す。263 は口縁部上部と頸部に貝殻連続刺突文を施す。264，265 は口唇部に貝殻腹縁刻目を，口縁部上部と頸部に押し引き状の貝殻連続刺突文を施し，口縁部には数本の弧状や直線の条線で幾何学模様のモチーフを描く。266 は波状口縁を呈すると考えられる。口縁部上部に押し引き状の貝殻連続刺突文を１段施した後，弧状の条線で幾何学模様のモチーフを描く。

267 は口縁部下部を含む胴部である。口縁部は斜位の条線や弧状の条線で幾何学模様のモチーフを描く。頸部より下は押し引き状の貝殻連続刺突文を４段施し，その間には横位の２～３本の貝殻条線を巡らせる。

268 ～ 274 は大型の深鉢である。口縁部が外反し，頸部のくびれが確認できる。268 は口径 42.0 ㎝である。口縁部に横位や縦位，斜位，弧状に条線を施す。269 は口径 36.2 ㎝である。波状口縁を呈する。口縁部は斜格子状に条線文を，頸部には縦位に押し引き状の貝殻連続刺突文を施す。270 は口径 23.4 ㎝である。口縁部には「X」字状に，胴部には横位に条線を施した後，口縁部上部と頸部，胴部中央に押し引き状の貝殻連続刺突文を施す。271 は口径 37.0 ㎝，頸部が 27.6 ㎝である。口唇部に貝殻腹縁刻目を施し，口縁部に「X」字状に条線を施す。口縁部上部に浅く短い貝殻刺突を，頸部に押し引き状の貝殻連続刺突文を施す。胴部には斜位の条線を施す。口唇部か

ら約５㎝に補修孔が確認でき，修理をして大切に使っていたことが窺える。272 は口縁部から胴部にかけて 32.5 ㎝の長さである。口縁部に斜格子状に条線を，胴部に横位の条線を施す。273 は口唇部に貝殻腹縁刻目を施す。口縁部に斜格子状に条線を施した後，口縁部上部と頸部に押し引き状の貝殻連続刺突文を巡らせる。274 は口径 25.6 ㎝である。口唇部に貝殻腹縁刻目を施す。口縁部上部に横位に条線を巡らせ，口縁部に斜格子状に条線を施す。頸部に押し引き状の貝殻連続刺突文を巡らせ，胴部は横位の条線を施す。

275 ～ 280 は口縁部である。条線や条痕で斜位や斜格子状のモチーフを描く。275 は口縁部に斜位に条線を施した後，口縁部上部に押し引き状の貝殻連続刺突文を巡らせる。276 は口縁部に縦位や斜位に貝殻条痕文を施し，口縁部上部に貝殻連続刺突文を横位に２段施す。277 は斜位と弧状の条線を施す。278 は口唇部に貝殻腹縁刻目を施し，口縁部上部に押し引き状の貝殻連続刺突文を巡らせる。口縁部には斜位の沈線を巡らせる。279 は口縁部で，斜格子状に条線を施す。280 は口唇部に貝殻腹縁刻目を，口縁部に斜格子状に沈線を施す。頸部に押し引き状の貝殻連続刺突文を施しているが，施されていない部分もある。

281 ～ 335 は口縁部が外反し，貝殻連続刺突文や沈線を施す。胴部には条痕や条線を横位や縦位，斜位，格子目状に施す。

281 は完形に復元できた。口径 31 ㎝，底径 11 ㎝，器高 37.7 ㎝である。口唇部に貝殻腹縁刻目を施す。口縁部には斜格子状に沈線を施す。口縁部上部と頸部，頸部下に１段ずつ押し引き状の貝殻連続刺突文を巡らせ，その下に横位の条線を２段施す。胴部中部には縦位の条線を約 10 ㎝施し，その下に，横位に４段の条線を巡らせる。

282 ～ 297 は口縁部付近である。口唇部に貝殻腹縁刻目を施し，口縁部上部と頸部付近に押し引き状の貝殻連続刺突文を巡らせ，その間に横位や斜格子状に条線や沈線を施す。282 は口唇部に貝殻腹縁刻目を施す。口縁部には斜格子状に条線を施す。頸部から胴部にかけては押し引き状の貝殻連続刺突文と横位の条線を繰り返す。283 は口唇部に貝殻腹縁刻目を施す。口縁部から胴部にかけて斜格子状に沈線を施す。胴部中央部に横位に押し引き状の貝殻連続刺突文を巡らせ，底部付近までは横位に条痕文を施す。284 は口唇部に貝殻腹縁刻目を施す。口縁部に斜格子状に沈線を施し，口縁部でやや逆「く」の字状に屈曲する部分と頸部に押し引き状の貝殻連続刺突文を巡らせる。285 は口径 25.8 ㎝である。口縁部は屈曲せず真っ直ぐに立ち上がる。口唇部と頸部に貝殻腹縁刻目を施す。口縁部から胴部にかけて横位に条痕文を施す。286 は波状口縁を呈すると考えられる。口唇部に貝殻腹縁刻目を施す。口縁部上部に押し引き状の貝殻連続刺突文を巡らせ，その下に横位や斜位に条線を施す。胎土はやや荒い。287 は口縁部に横位に２段押し引き状の貝殻連続刺突文を施し，その下に弧状の条線を施す。288 は口唇部に貝殻腹縁刻目を施す。口縁部上部に押し引き状の貝殻連続刺突文を巡らせ，口縁部に斜格子状に条線を施し，横位に３段押し引き状の貝殻連続刺突文を施す。その下は無文帯である。289 は口唇部に貝殻腹縁刻目を施す。口縁部上部と頸部には押し引き状の貝殻連続刺突文を横位に，その間に斜位に施す。胴部には斜格子状に条線を施す。290 は口唇部に貝殻腹縁刻目を施す。口縁部上部に押し引き状の貝殻連続刺突文を施し，その下に斜格子状に条線を施す。291 は口唇部に貝殻腹縁刻目を施し，口縁部に斜格子状に沈線を施す。292 は口縁上部に横位の条線を巡らせ，斜格子状に条線を施す。293,294 は口縁上部から頸部にかけて押し引き状の貝殻連続刺突文と横位の条線を交互に施す。294 は口縁部がラッパ状に外反している。295 は口縁部から胴部にかけて横位の条線を巡らせ，口縁上部と頸部に押し引き状の貝殻連続刺突文を施す。胴部が長く，縦位に突帯を貼り付ける。296 は口唇部に貝殻腹縁刻目を施し，口縁部には斜位に押し引き状の貝殻連続刺突文を施す。297 は口唇部に貝殻腹縁刻目を施し，口唇部の約２㎝下と頸部に横位に押し引き状の貝殻連続刺突文を施す。

298 ～ 305 は口縁部下部から胴部である。頸部付近に押し引き状の貝殻連続刺突文を巡らせ，胴部に横位や斜格子状に条線を施す。298 は口縁部下部に斜格子状に条線を施し，頸部と胴部に横位の押し引き状の貝殻連続刺突文が３段確認できる。299 は斜格子状に，300 は斜位に条線を施す。300 は幾何学模様のモチーフを描いていると思われる。301 は口縁部下部に横位の条線を，胴部には斜格子状に条線を施す。302 は口縁部下部に押し引き状の貝殻連続刺突文を施し，その下に斜位に条線を施す。303 は口縁部下部に斜位に条線を施し，頸部に押し引き状の貝殻連続刺突文を施す。304 は頸部より上に横位の条線を３段施し，下には斜格子状に条線を施す。305 は全体に弧状や斜位のやや浅めの条線を施し，頸部付近に貝殻連続刺突文を施す。

306 ～ 308 は口縁から胴部である。口縁部上部と頸部付近に押し引き状の貝殻連続刺突文を施し，その間は無文帯である。306 は頸部に，貝殻連続刺突文を施す。胎土は粗い。307 は口唇部に貝殻腹縁刻目を施し，口唇部から約２㎝下と頸部に貝殻連続刺突文を施す。308 は直行する口縁から胴部で，口唇部に貝殻腹縁刻目を施す。口縁部には横位の条線を施し，押し引き状の貝殻連続刺突文を３段巡らせる。胴部には斜位に条線を施す。胎土はやや粗い。

309 ～ 319 は胴部である。309 は頸部付近とその上約３㎝に５本１単位の条線を横位に施し，頸部より下に１

単位２，３本の条線で右上から左下方向にやや弧状に斜位の条線を施す。外面には工具ナデ痕が確認できる。310は全体に斜格子状に条線を施す。311は上部から横位の条線，波状の条線，斜格子状の条線を施す。312は頸部付近に横位の貝殻連続刺突文を施し，頸部より上には斜位の条線を，頸部より下には横位の条線を施す。313は頸部とその上に横位の条線を施し，頸部の下に斜位の条線を施す。314は押し引き状の貝殻連続刺突文を施す。下は無文帯である。315は押し引き状の貝殻連続刺突文の間に横位の条線を施す。幅が約1.0～1.5㎝である。316は口縁部下部に条線を斜位や縦位に，胴部は横位に施し，頸部に押し引き状の貝殻連続刺突文を施文する。317は押し引き状の貝殻連続刺突文を４段施し，その下に左上から右下へ斜位の条線を施す。318は頸部付近に押し引き状の貝殻連続刺突文を施し，胴部は斜位の条線で菱形状のモチーフを描く。319は斜位や縦位に貝殻条痕を施す。

320～323は胴部から底部にかけてである。

320は斜格子状に条線を施す。321は底部から口縁部上部まで復元できた。やや上げ底気味の平底で，底径13.7㎝である。口縁部に補修孔が確認できる。口縁部に押し引き状の貝殻連続刺突文を４段巡らせ，その間や胴部に１本または２本ずつの沈線を横位に施す。内面は工具ナデ後ナデで，指頭圧痕が確認できる。322は底形14.0㎝である。斜位と横位の条線を施す。323は底形16.2㎝である。横位の条線を施す。

324，325は口縁部から胴部である。口縁部上部と頸部付近に押し引き状の貝殻連続刺突文を施し，その間に条線を斜格子状に施文する。324は口縁部に斜格子状の条線を，胴部に横位の条線を施し，口縁部上部と頸部に横位の押し引き状の貝殻連続刺突文を施文する。325は口縁部上部に横位の押し引き状の貝殻連続刺突文を施した後，条線を斜格子状に施文する。

326，327は口縁部で，刻目の入った突帯を施す。326は斜格子状の条線を施した後，口縁部に刻目の入った縦位に長い突帯と斜位にやや短い突帯を貼り付ける。また，刻目の入った瘤状突帯を３つ貼り付ける。327は口縁部が外反し，口縁部上部と頸部に横位の押し引き状の貝殻連続刺突文を施した後，口縁部と胴部に横位の条線を施す。口縁部に刻目の入った瘤状突帯を３つ確認できる。

328，329は口縁部で，押し引き状の貝殻連続刺突文と斜格子状の条線を施す。328は口唇部に貝殻腹縁刻目を施し，口縁部に斜位に条線を施文する。口縁部上部と頸部には横位の押し引き状の貝殻連続刺突文を施す。329は口唇部に貝殻腹縁刻目を施し，口縁部には斜位に条線を施した後，円弧状に押し引き状の貝殻連続刺突文を施す。

330～335は胴部である。押し引き状の貝殻連続刺突や相交弧文状押引を施す。330は頸部に横位の相交弧文状押引を，胴部に横位の条線文を施す。331は頸部に横位の押し引き状の貝殻連続刺突文を，胴部に横位の条線文と押し引き状の貝殻連続刺突文を交互に施す。332は曲線状の条線で幾何学模様のモチーフを描く。333は相交弧文状押引を横位に施す。相交弧文状押引の上は横位の貝殻条痕を，相交弧文状押引の下は斜格子状の条線を施す。334は横位の押し引き状の貝殻連続刺突文の間に横位と斜位の条線文を施し，その内部にも条線で円形のモチーフを描く。335は横位の押し引き状の貝殻連続刺突文を２段施し，その下に横位の貝殻条痕を施文する。

第Ⅺ類土器（第110～129図　336～425）

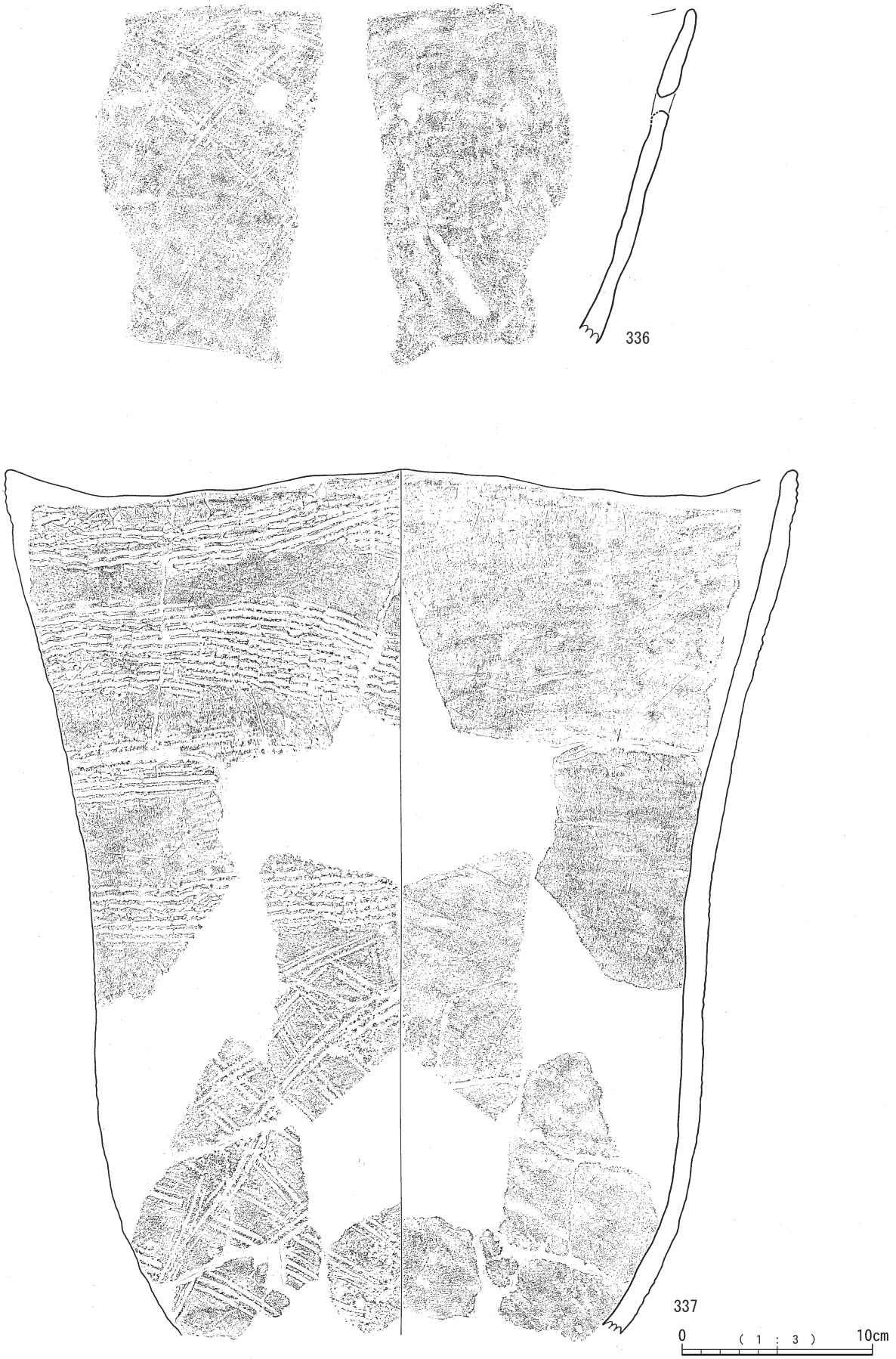
第Ⅹ類との大きな違いは，まずは器形である。第Ⅹ類は口縁部がラッパ状に外反し，胴部はやや膨らんで直立し，底部はあげ底気味の平底である。これに対し，第Ⅺ類は，口縁部が外反し，頸部が緩くしまり，胴部がやや膨らみやや大きな平底の底部に至る器形（348，356，363）と，外開きで頸部で屈曲せず直行形で真っ直ぐに底部に至る器形（336，344，409），口縁部が内湾気味に立ち上がり胴部は湾曲していき小さな底部に至る器形（375，425）である。

外器面は，条線文や連続刺突文の全面施文で，横位や縦位の貼り付けの突帯がなされるものもある。内面調整は，工具ナデを基本とするが，それを口縁部付近はナデにより平滑に仕上げるものが多い。ここでは，外器面の文様を中心として述べ，内面調整については，土器観察表を参考にされたい。胎土は，粗い砂粒を多く含み，焼成は良好であるが，なかには外器面が剥落しているものも見られる。

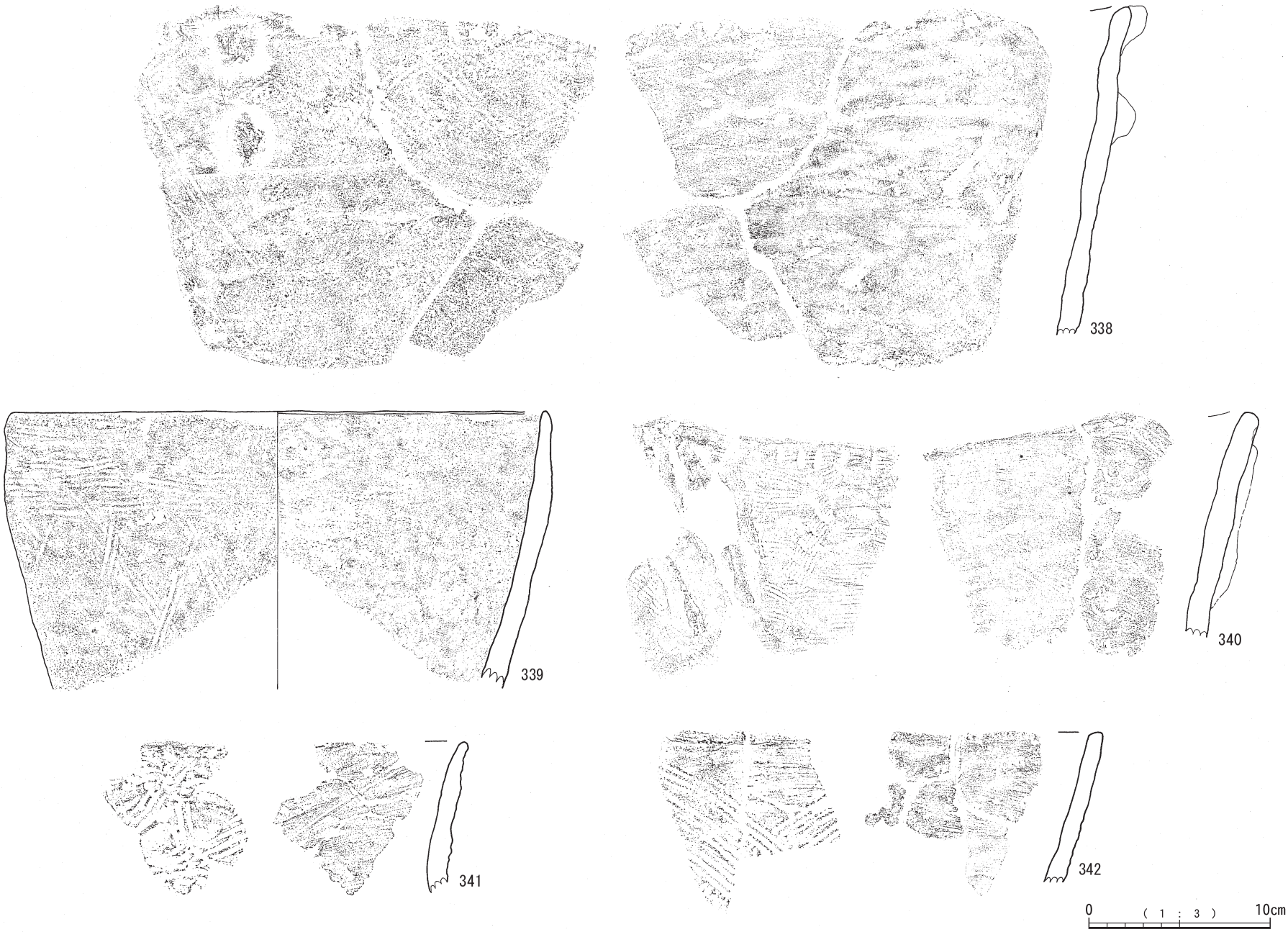
336は，外開きに直行する器形で，格子状に条線が引かれ全面施文が施される。内面は工具ナデである。補修孔がある。337は，口縁部が内湾して立ち上がり，口縁から外器面上半が押し引き状の条線文を施し，下位に格子状に条線が引かれ，内面は丁寧に工具ナデされる。文様帯が胴部の上位と下位で異なるが，器壁は薄手である。338は，波状口縁でやや内湾気味に立ち上がり胴部はやや膨らむと考えられる。口縁端部に刻目があり，外器面の口縁下に瘤状突帯が貼り付けられる。格子状の条線文が見られる。339は小型の深鉢で，口縁部はやや内湾する。格子状に条線が引かれ全面施文される。340は外反する波状口縁で，口縁端部の下の外面に刻み様の刺突を施す。短刻目突帯が口縁から縦方向に垂下する。条線は押し引き様に，縦位突帯の下位に向かって斜位に引く条線と平行条線が施される。341はやや外開きの口縁部で，外面は斜格子状に条線を引く。342は外開きの口縁部で，条線文が斜めに下がっていく。斜格子状になるものと考えられる。343は弱い波状口縁で口縁部が外反し，刻目

突帯が４条口縁部に巡り，その下に，波頂部のところで短突帯が横に７条貼り付けられ，その下に縦方向の条線が引かれる。さらに胴部に横方向の短突帯が４条貼り付けられ，円形の条線文を繋ぐように「X」状の施文がなされる。X類の 261 に文様構成が類似している。同様の土器は天神段遺跡・市ノ原遺跡・平良上C遺跡でも出土している。結果的に縦方向にも文様帯が区分されることとなる。口縁部文様帯を刻目突帯，胴部文様帯では直線の条線文により，波状の条線文を区画することとなる。

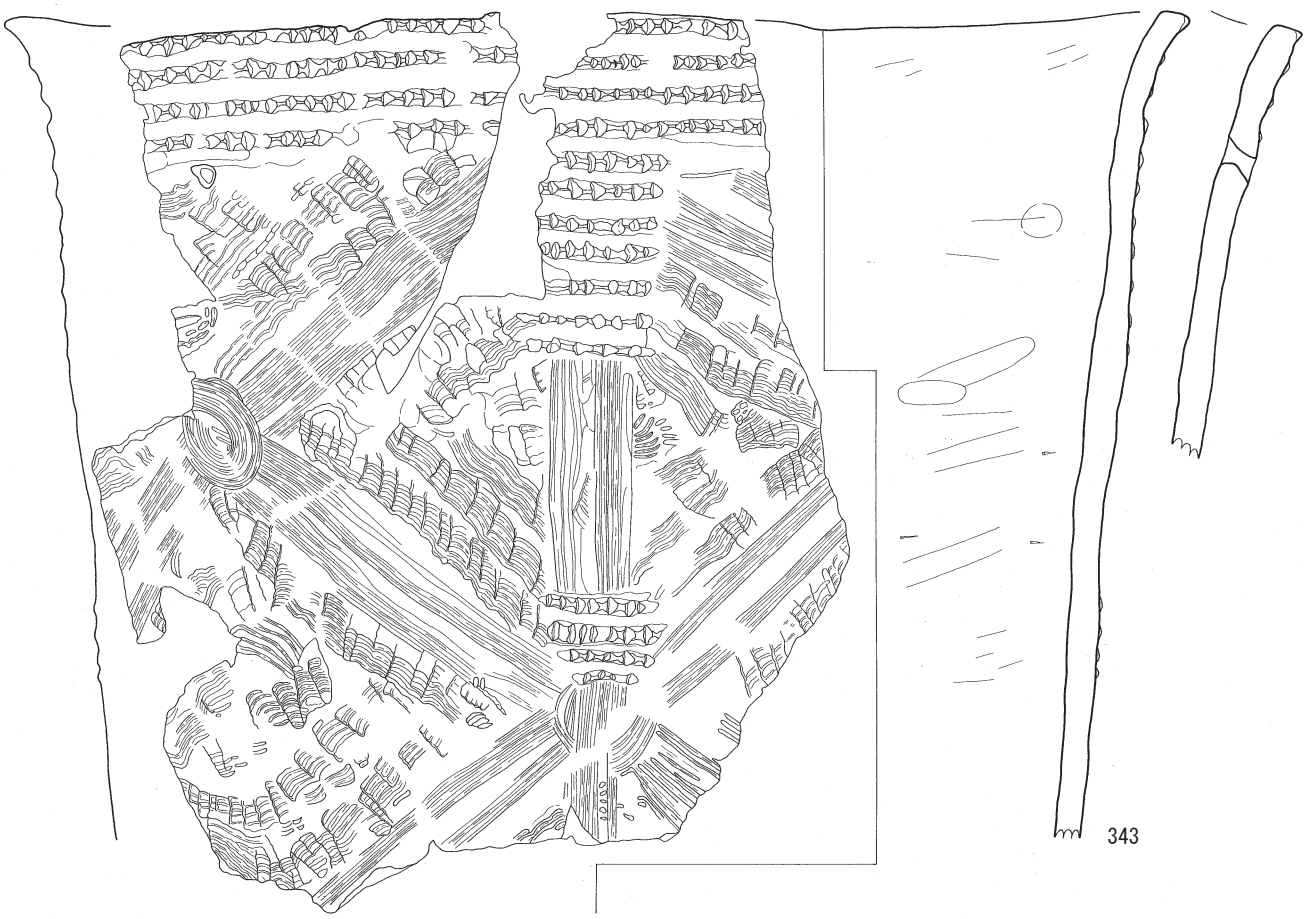
344 は胴部から口縁部にかけて真っ直ぐに外反して開く器形で，口唇部にヘラ刻目を入れ，刻目突帯を１条巡らせ，その下に横位の短刻目突帯を施している。胴部の上位に平行条線文を，下位には格子状条線文を施す。345 は 344 と同様の器形と考えられ，小型深鉢で口唇部に刻目を入れ、その下に１条の刻目突帯を巡らし，下位に平行・波状の条線文を施す。346 は口縁端部にヘラによる刻目を入れ，刻目突帯を３条巡らし，貼り付け前の地紋に波状の条線を施したものである。347 は円筒形の小型深鉢で，刻目突帯を３条巡らした下位に，短刻目突帯を縦方向に１条，直交して２条の短刻目突帯を貼り付ける。下位の条線は格子状・波状に施される。348 は頸部で緩くしまり口縁部が外反する器形で，口縁端部に貝殻腹縁で刻みを入れ，外側は不規則な条線文を施す。349 は口縁部がやや外開きで，ゆるく胴部が膨らむ器形で，横方向の平行な条線文と相交弧文状の押引文を交互に施す。350 は波状口縁で波頂部間に縦方向の短突帯を貼り付ける。横方向に条線が施される。351 は口縁部が弱く外反し，波頂部から短刻目突帯が垂下する。平行条線文を施す。352 は波状口縁で口縁部が外反し，波頂部に楕円形の短突帯が３つ貼り付けられる。器面が粗れているが，平行条線文が施される。353 は波状口縁で，口縁部が緩く外反する。口縁に貝殻腹縁で刻みを入れ，波頂部には短刻目突帯を「人」形に貼り付ける。平行条線文と貝殻刺突文を施す。354 も波状口縁で，353 と同様に短刻目突帯を貼り付ける。同一個体の可能性が強い。355 は弱い波状口縁で，内湾気味に立ち上がる。口縁下に短刻目突帯を３条貼り付ける。平行条線文と波状条線文を施す。356 は波状口縁で，口縁部が外反し胴部が緩く膨らむ。口縁外側の端部に貝殻腹縁の刺突を施し，口縁下から短刻目突帯を垂下させる。外面は横方向の条線文と連続刺突文を組み合わせる。357 はかすかに外反する波状口縁で，短刻目突帯を縦位に並べて垂下させる。波状の条線文を施す。358 は波状口縁で，横位に２条の刻目突帯が巡り，さらに下位に刻目突帯を縦方向に垂下している。波状の条線文を全面施文する。359 は口縁部が外反して，口縁部外側に貝殻腹縁で刻みを入れ，楕円形の短突帯を２つ貼り付ける。平行条線文を施す。360 は外反する口縁部で，口縁端部にヘラによる刻みを入れ，横方向に短刻目突帯を２条貼り付ける。波状の条線文を施す。361 は弱く外反する波状口縁で，口縁部外側に貝殻腹縁で刻みを入れ，波頂部に瘤状の突帯を施す。平行条線文と波状条線文を施す。362 は緩く外反する波状口縁で，１条の短刻目突帯を垂下させる。363 は波状口縁で，器壁が薄く，外器面は貝殻腹縁による相交弧文を施す。内面には条痕が残る。364 は真っ直ぐ外側に直口して開く器形で，口縁端部の内面と外面に貝殻腹縁により刻目を入れ、平行条線文と相交弧文状の押引を交互に行う。365 は口縁部が内湾気味に立ち上がり，口縁端部外側に貝殻腹縁による刻目を入れ，平行と波状の条線文を交互に施す。366 ～ 368 は口縁部が外反する器形のものである。366 は口縁端部が面をなし，外側に貝殻腹縁による刻目，横方向のやや不規則な波状の条線を施す。367 は波状口縁で，口縁の外側端部に貝殻腹縁による刻みを入れ，平行線と押引状の条線文が交互に施される。368 は口縁端部に貝殻腹縁による刻目をいれ，波状条線文を全面施文する。369 は，内湾気味に立ち上がる弱い波状口縁で，外面は押引状の条線文を平行に施す。370 は，口縁部外面端部に貝殻腹縁の刺突で刻みを入れ，外面は押引状の条線文を施す。371 は口縁部外面に貝殻腹縁による刺突で刻みを入れ，波状口縁の波頂部から短刻目突帯を垂下させ，その下には横方向に短刻目突帯を貼り付ける。372 は外反する口縁部の波状口縁で，口縁部に刻目は見られず，外面は押引状の条線文を施す。373 は口縁部がほぼ真っ直ぐ立ち上がる。弱い波状口縁で，口縁の端部は面をなす。口縁部の外側直下に貝殻腹縁による刻目を施し，平行な条線文と波状の条線文を交互に施す。374 も弱い波状口縁で，口縁の端部は面をなす。貝殻腹縁の連続刺突文と平行条線文を交互に施す。375 はやや内湾する口縁部に，緩い波状口縁で，口縁端部にヘラ刻みを入れ，外面に条線文を施し，内面調整が貝殻条痕である。376 は緩い波状口縁で，口縁下に相交弧文，下位に条線文を重ねて施文している。377 は小型鉢形土器で，円筒形をし，器面が荒れて不鮮明であるが，斜格子状の条線が施されている。378 ～ 414 は胴部付近の破片である。378 は微隆な刻目突帯が横方向に施され，相交弧文と平行条線文が施される。379 は短刻目突帯が横方向に４か所貼り付けられ，器面は格子状の条線文が施される。380 は器面が荒れているが，縦方向の刻目突帯と横方向の短刻目突帯が貼り付けられる。相交弧文状の押引と平行条線文がうかがわれる。381 は縦方向と横方向に短刻目突帯が貼り付けられる。貝殻腹縁の連続刺突文と平行条線文を交互に施すものと思われる。382，383 は縦方向の短刻目突帯が貼り付けられ，平行条線文が施される。384 は円形の瘤状の突帯を縦方向に２つ貼り付け，平行条線と相交弧文状の押引を交互に行う。385 は逆「U」字形に刻目突帯を貼り付けている。386 は円形の瘤状の突帯を



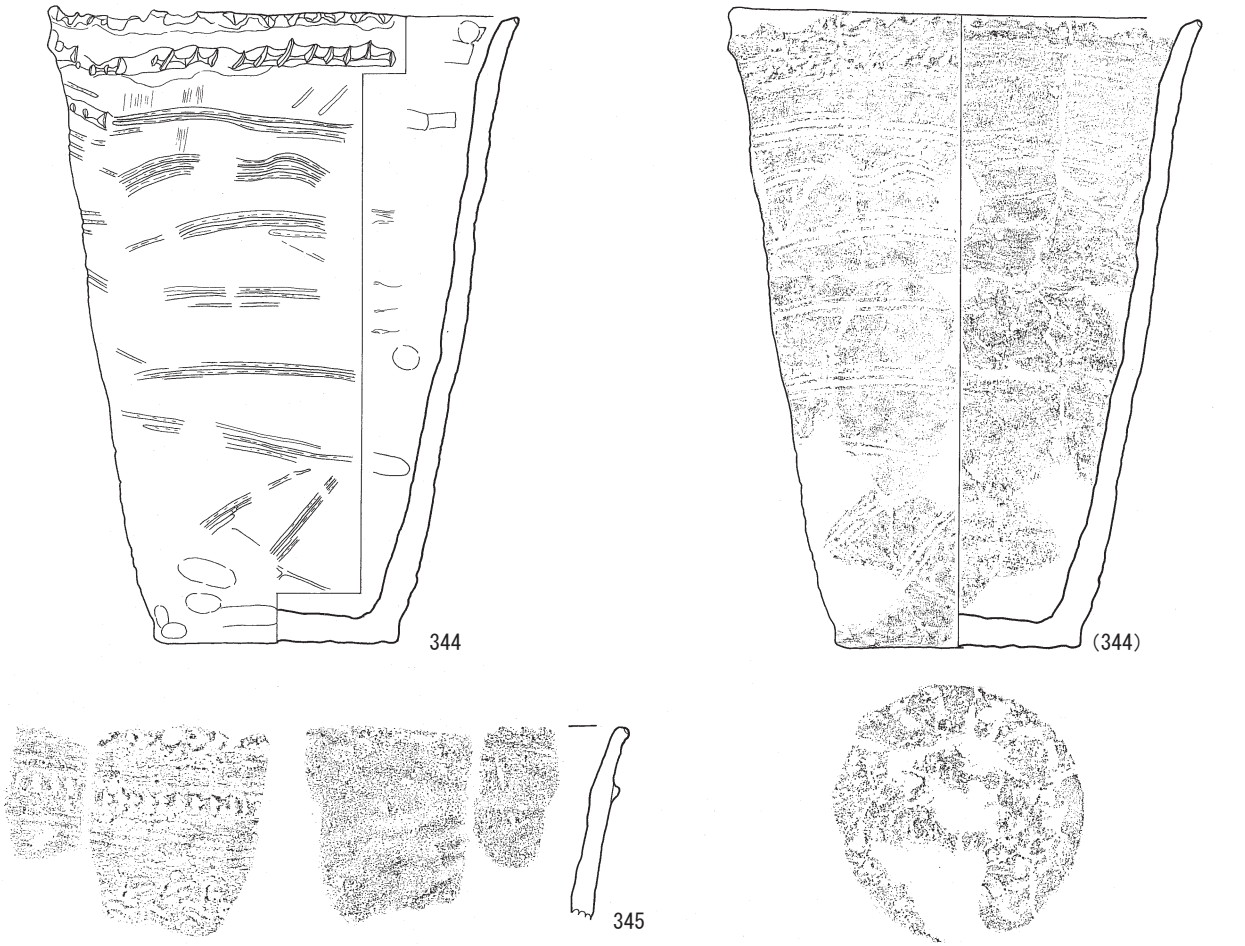
第 110 図　第Ⅺ類土器（１）



第 111 図　第Ⅺ類土器（２）



第 112 図　第Ⅺ類土器（３）

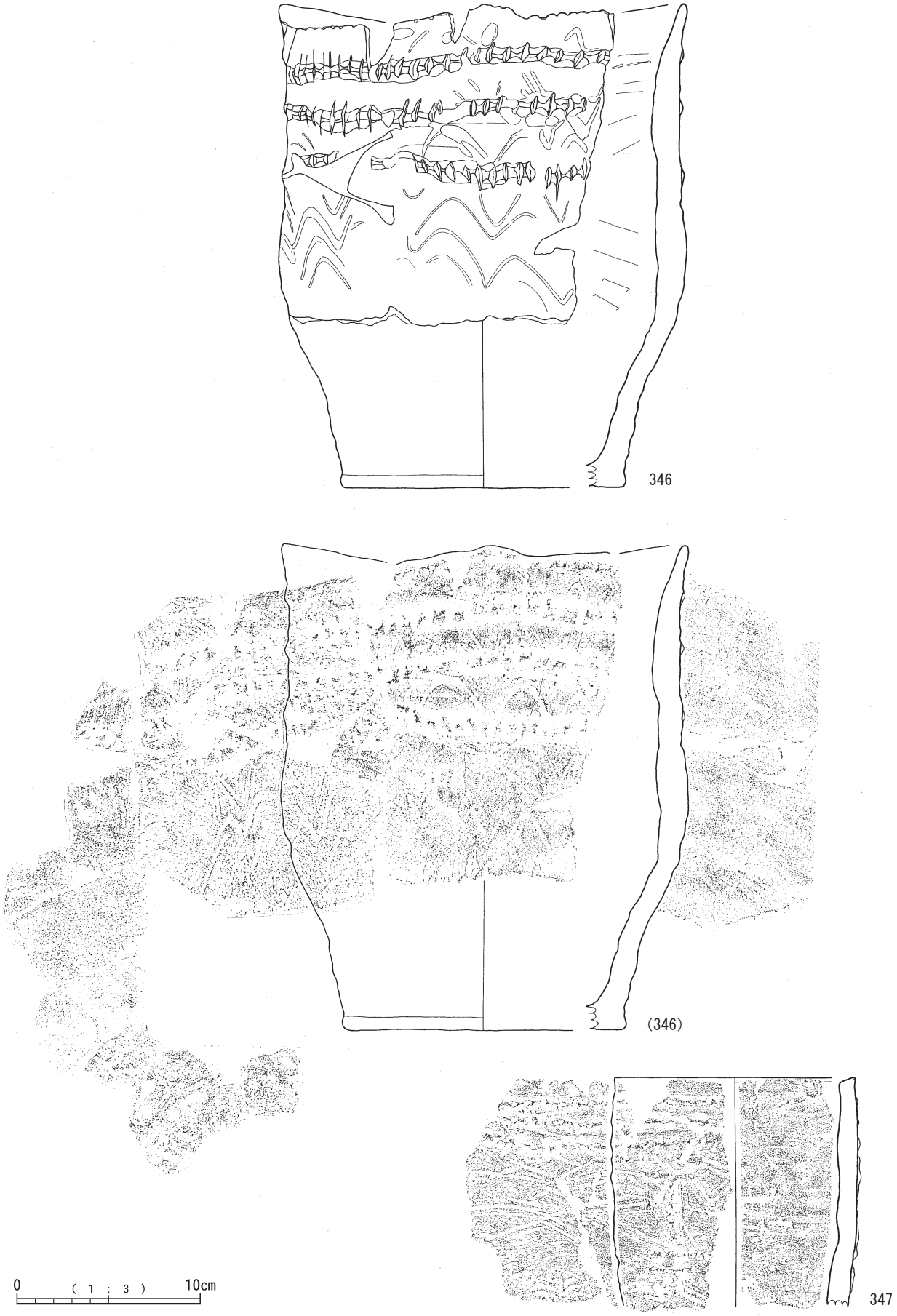


第 113 図　第Ⅺ類土器（４）

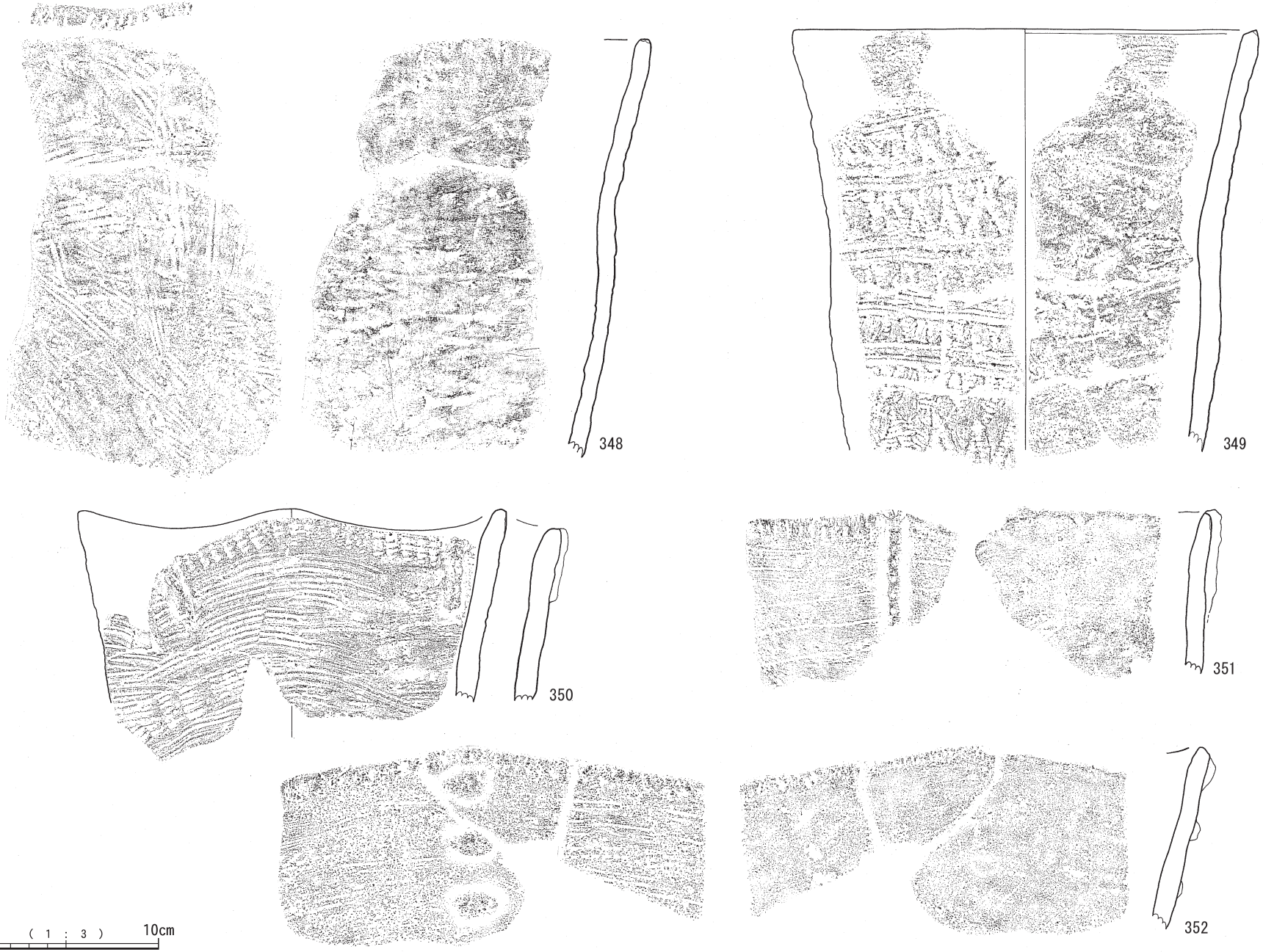
貼り付け，波状の条線文が巡る。387 は器面が荒れているが，刻目突帯を「Y」字状に貼り付け，器面には連続刺突文が施されている。388，389 は円形の瘤状の突帯を貼り付け，平行条線文が施される。390 は短刻目突帯を横方向に貼り付け，平行条線文を施す。391 は垂下する刻目突帯を囲むように同心円状にさらに刻目突帯を貼り付ける。器面は連続刺突文である。392 は口縁部がやや外反する器形に，外器面に格子目状の条線文が施されている。393・394 は平行条線文を施す。395 は相交弧文状の押引と平行条線文を交互に施している。396 はヘラ刻みの微隆突帯を貼り付け，波状条線文を施す。397 は平行条線文と波状条線文が混在して施されている。398 は頚部から胴部の破片であるが，上位に山形の条線文，下位に平行条線文が施され，２文様帯をなす。399 は相交弧文状の押引と平行条線文を交互に施している。400 は相交弧文を施す。401 は波状条線文を施す。402 は相交弧文を施す。403 は，胴部の下部で，破片の上位に貝殻条線がみえる。404 は平行条線文をやや密に施す。内面調整はケズリを縦方向に行っている。405 は相交弧文を施す。406 の条線は不安定であるが平行条線文を施す。407 は相交弧文と平行条線文を交互に施しているものと考えられる。408 は器面が荒れているが，波状の条線文と平行条線文であろう。409 は円筒形・平底の器形で，条線が乱雑に施されている。410，411，412，413，414 はいずれも胴部の破片であり，相交弧文状の押引と平行条線文を交互に施している。

415 ～ 420 は底部である。

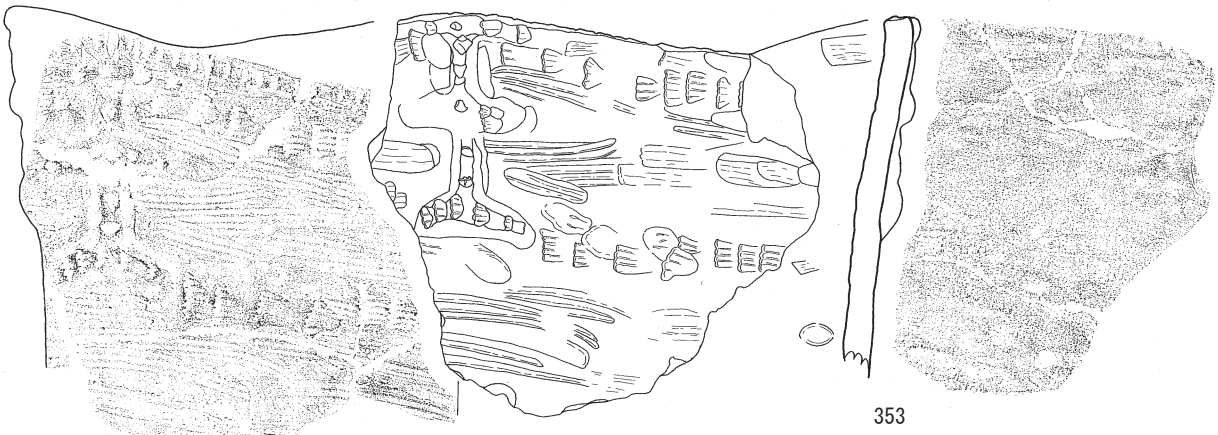
415 は小型深鉢で，上の方に貝殻の押引きが見られ，やや底部の端部が張り出す平底の底部である。416 もやや張り出す平底で，条線文が見られる。417 は張り出しがあまり見られない平底で，胴部は相交弧文状の押引と平行条線文が交互に施している。418 も張り出しが見られない平底で，胴部は波状と平行の条線文が施されている。419 は張り出しがないあげ底の底部である。底部に線描きが見られる。420 はやや張り出しがある平底である。421 は外開きの器形で，口縁に平行に，胴部は斜

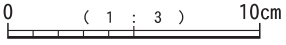


第 114 図　第Ⅺ類土器（５）



第 115 図　第Ⅺ類土器（６）

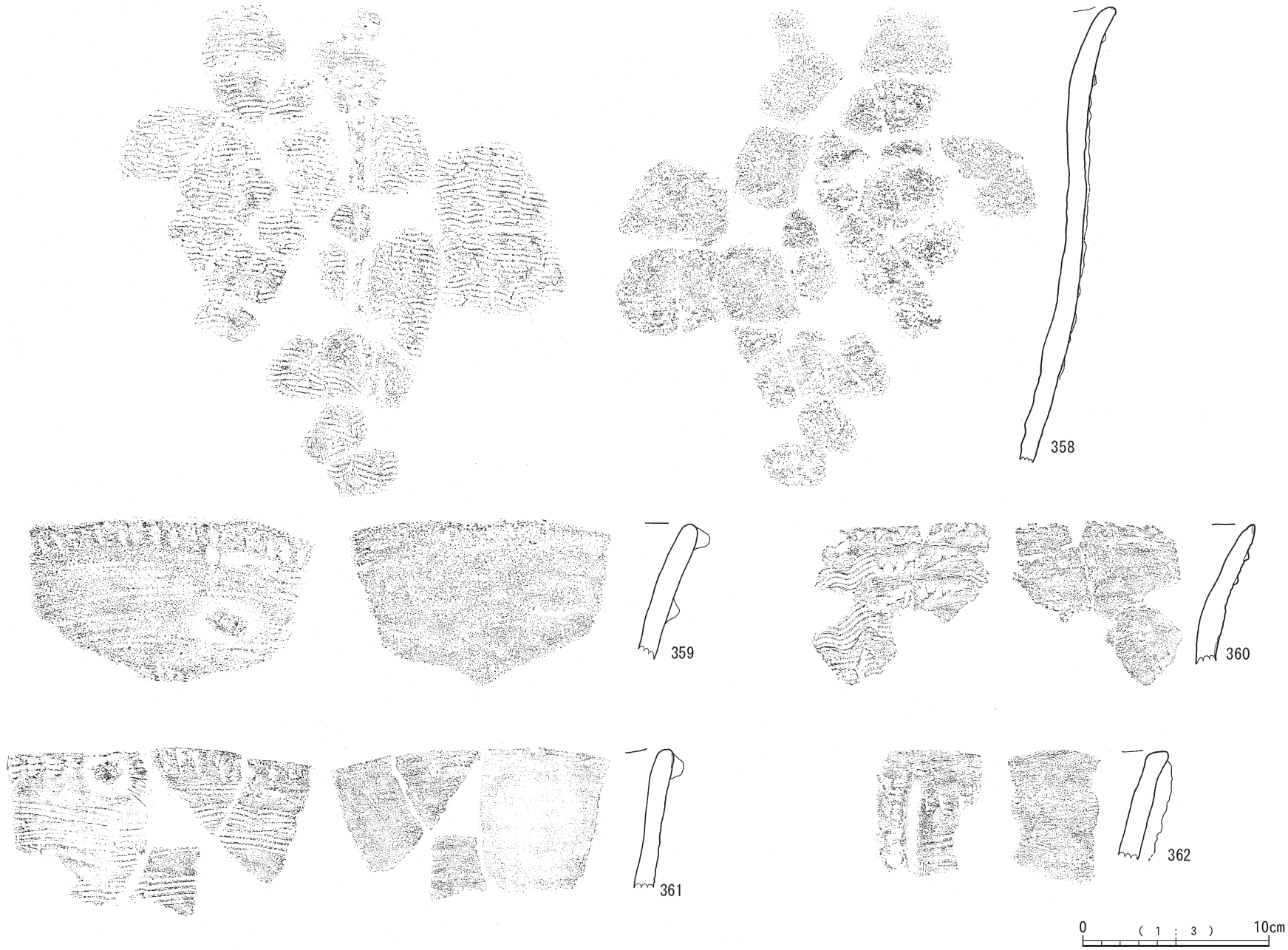




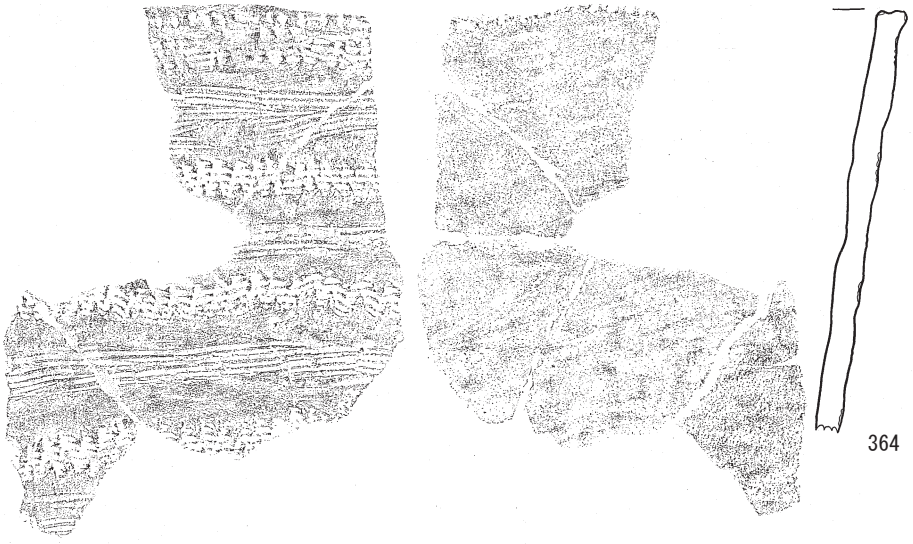
第 116 図　第Ⅺ類土器（７）

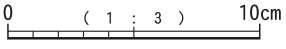
第 117 図　第Ⅺ類土器（８）

め方向に粗く条線が引かれている。422 は円筒形の器形で，横方向の押引の後に，縦方向の条線を上書きしている。内面は貝殻条痕が顕著である。423 は口縁部が外側に大きく開き，貝殻腹縁による連続刺突を口縁外側の端部と条線文帯を挟んで頸部付近に施している。塞ノ神Ｂｄ式土器に近いタイプである。424 は口縁上面に貝殻腹縁の刻目をなし，相交弧文状の押引と平行条線文が施される。425 はやや内湾気味に立ち上がる砲弾型の器形で，小さな平底の底部がつく。口縁端部の外側に雑にヘラ刻みが入れられ，外器面を全体に下から工具ナデするが，斜方向に条痕が残る。内面は横方向に条痕で調整される。補修孔が見られる。

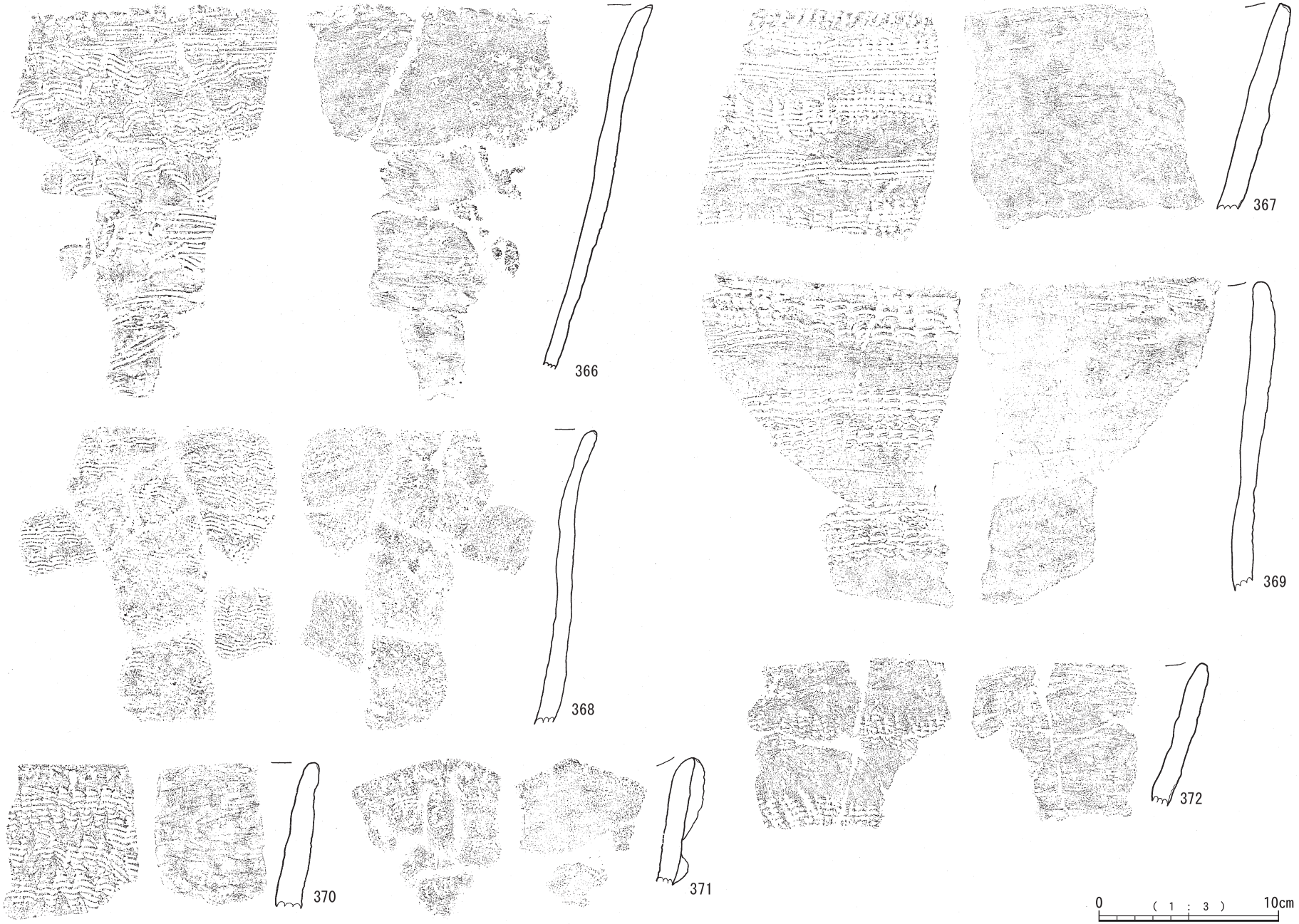


第 118 図　第Ⅺ類土器（９）

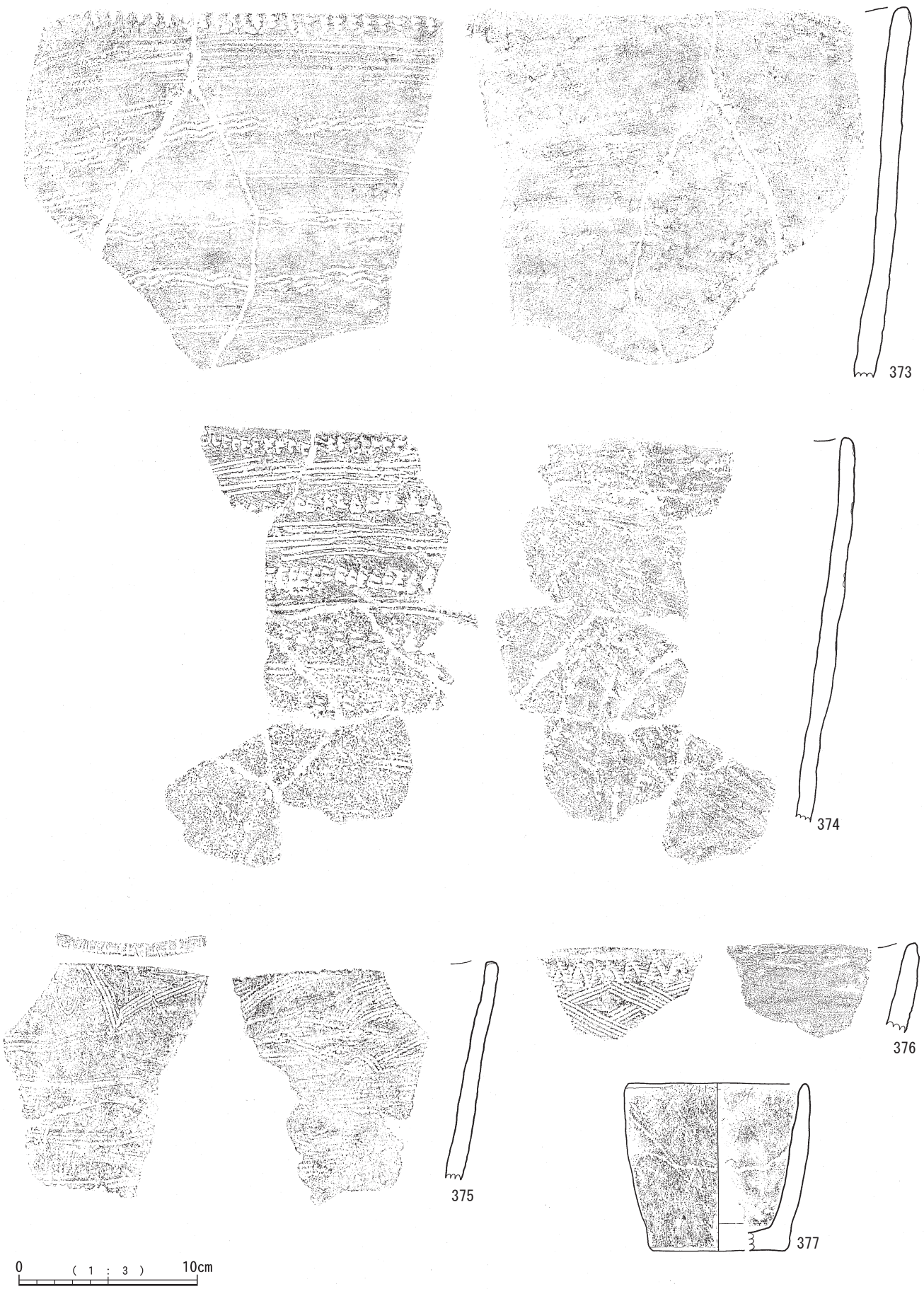




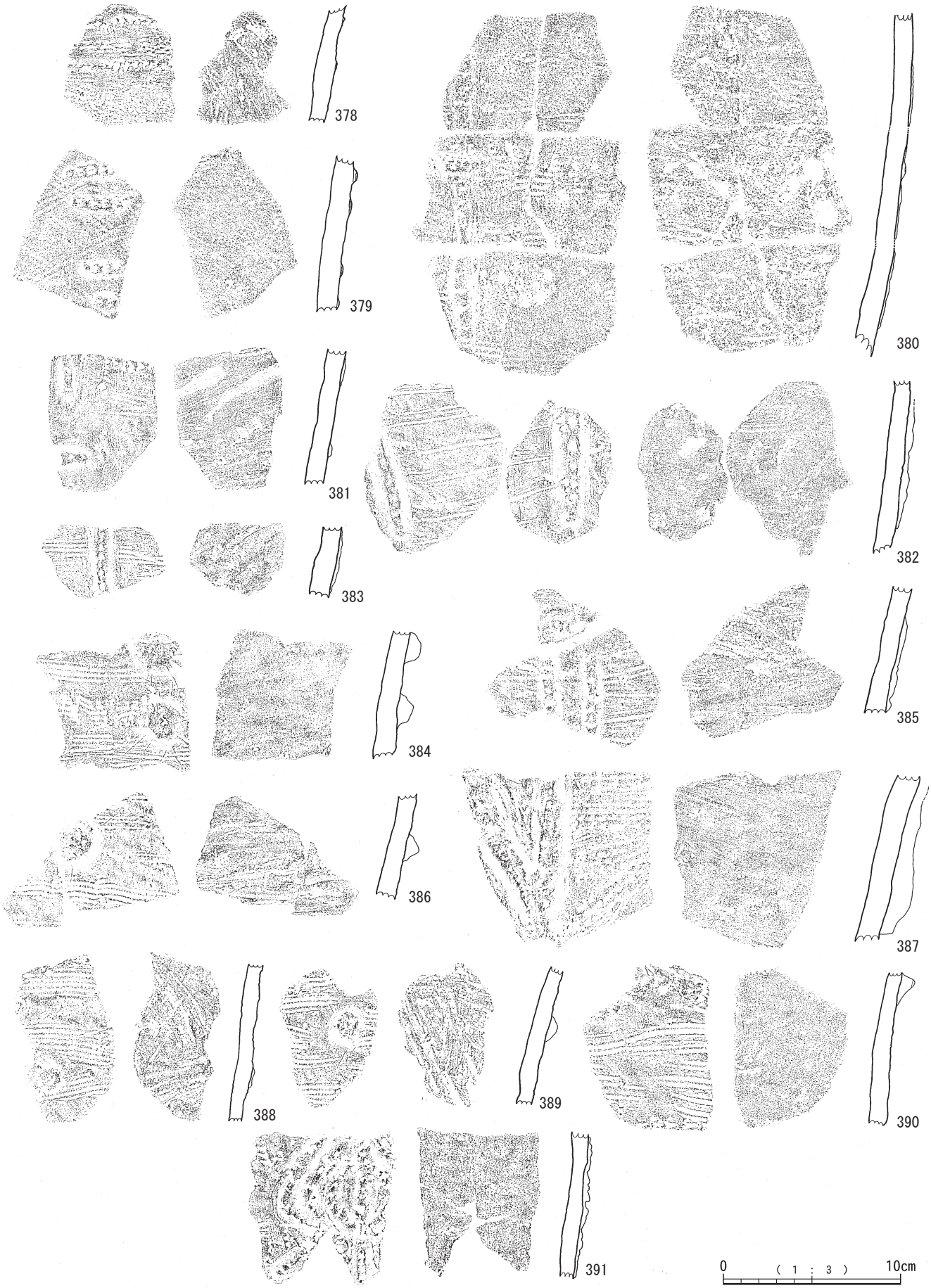
第 119 図　第Ⅺ類土器（10）



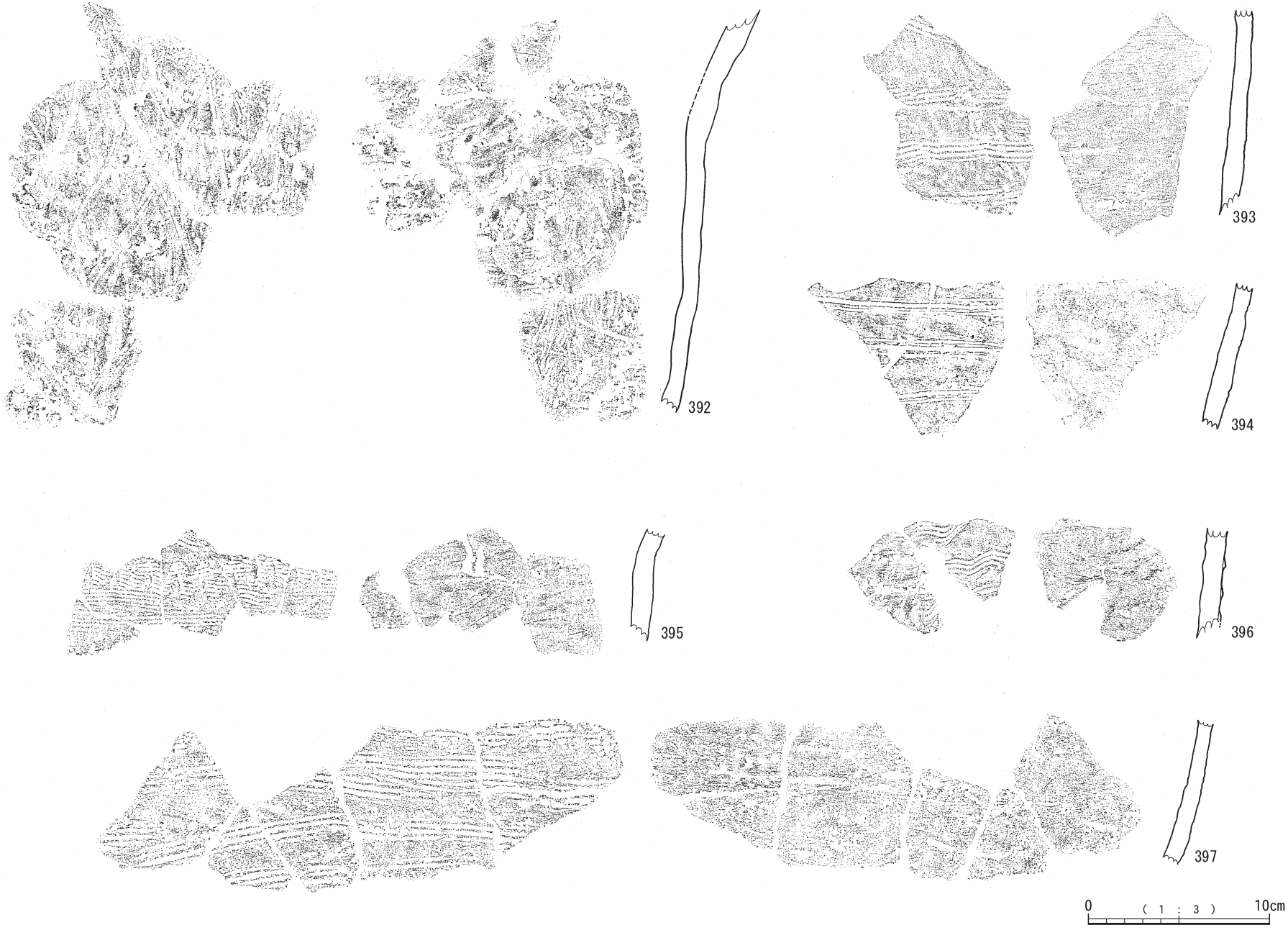
第 120 図　第Ⅺ類土器（11）



第 121 図　第Ⅺ類土器（12）

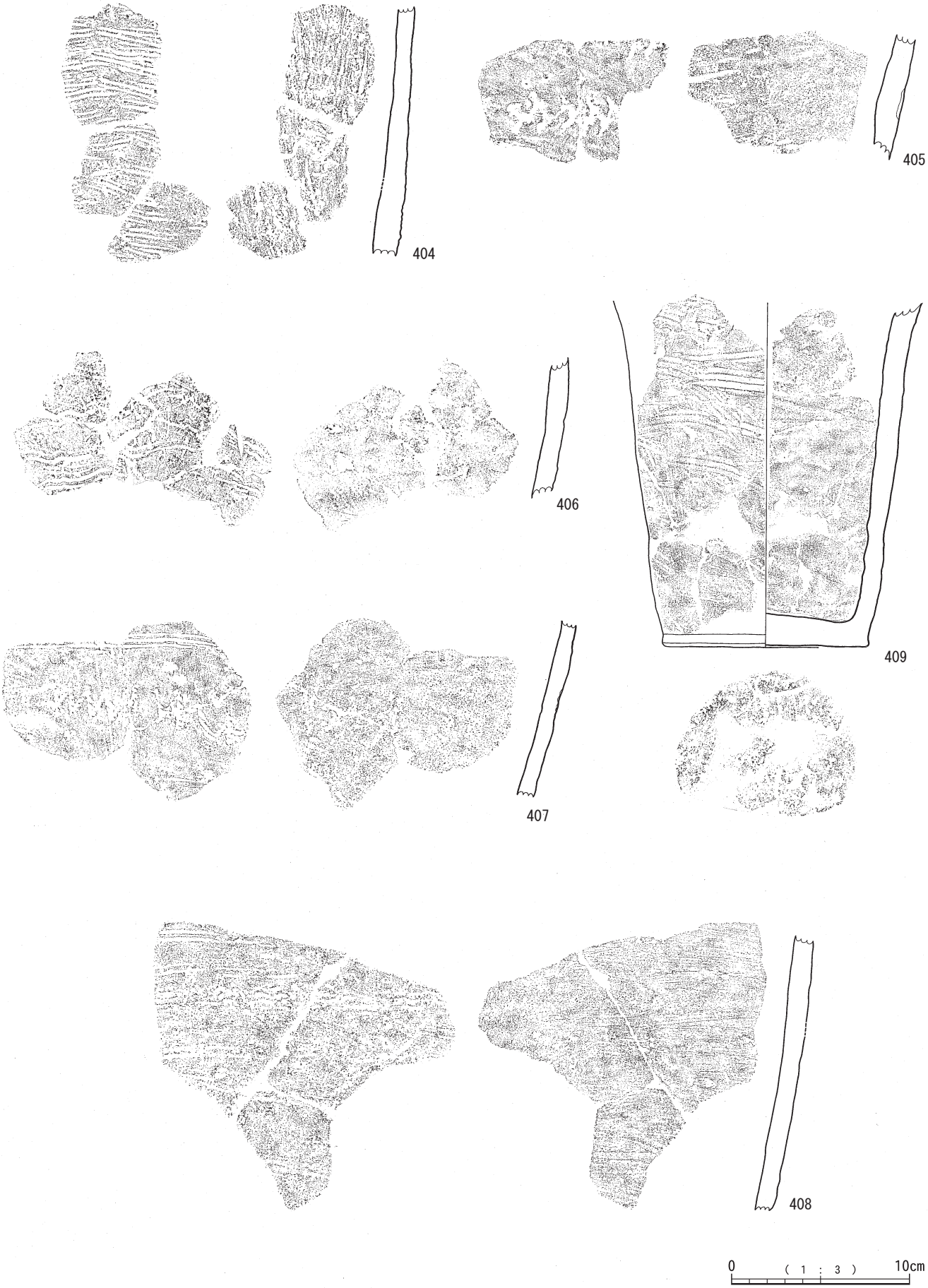


第 122 図　第Ⅺ類土器（13）

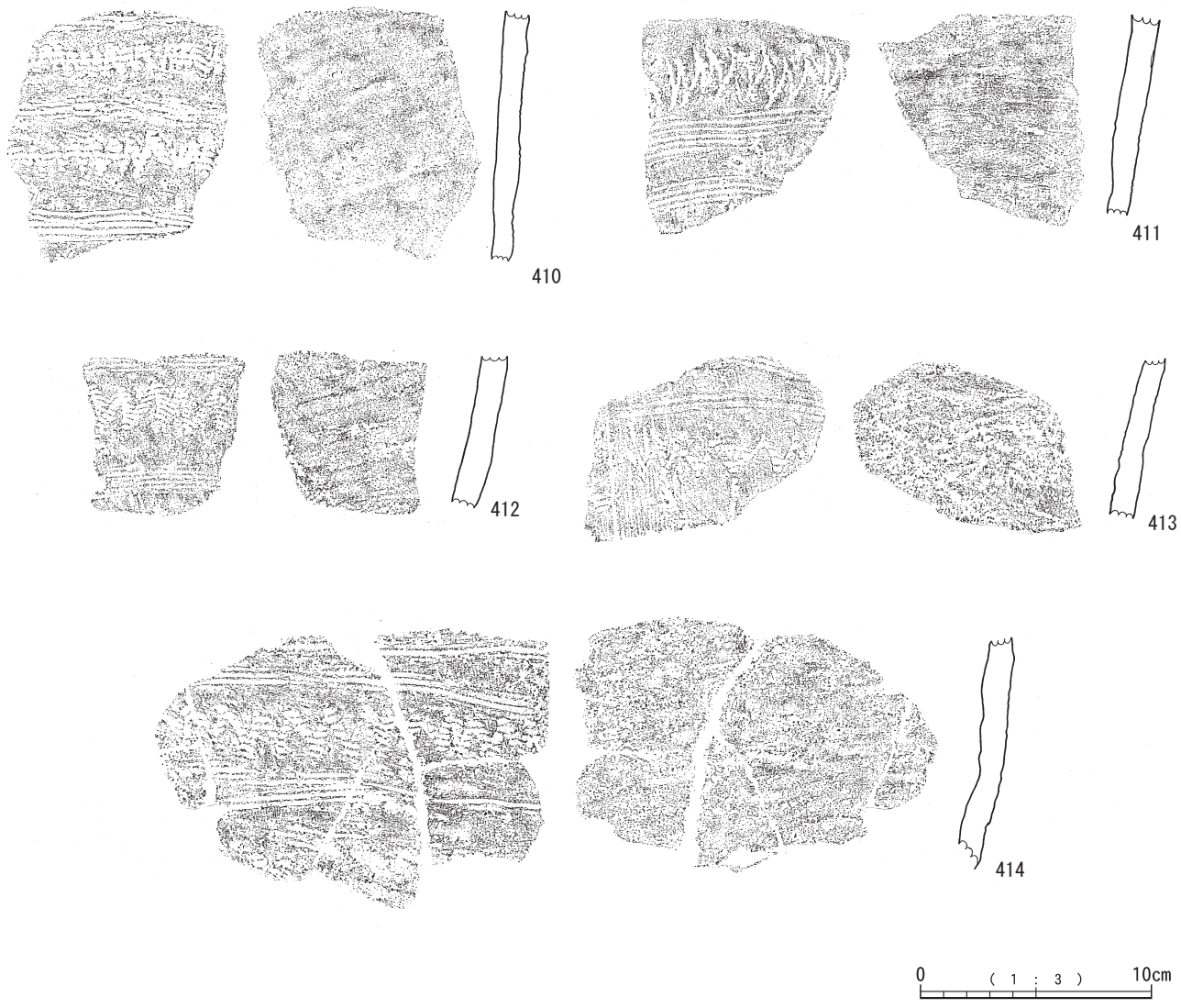


第 123 図　第Ⅺ類土器（14）

第 124 図　第Ⅺ類土器（15）



第 125 図　第Ⅺ類土器（16）



第 126 図　第XI類土器（17）

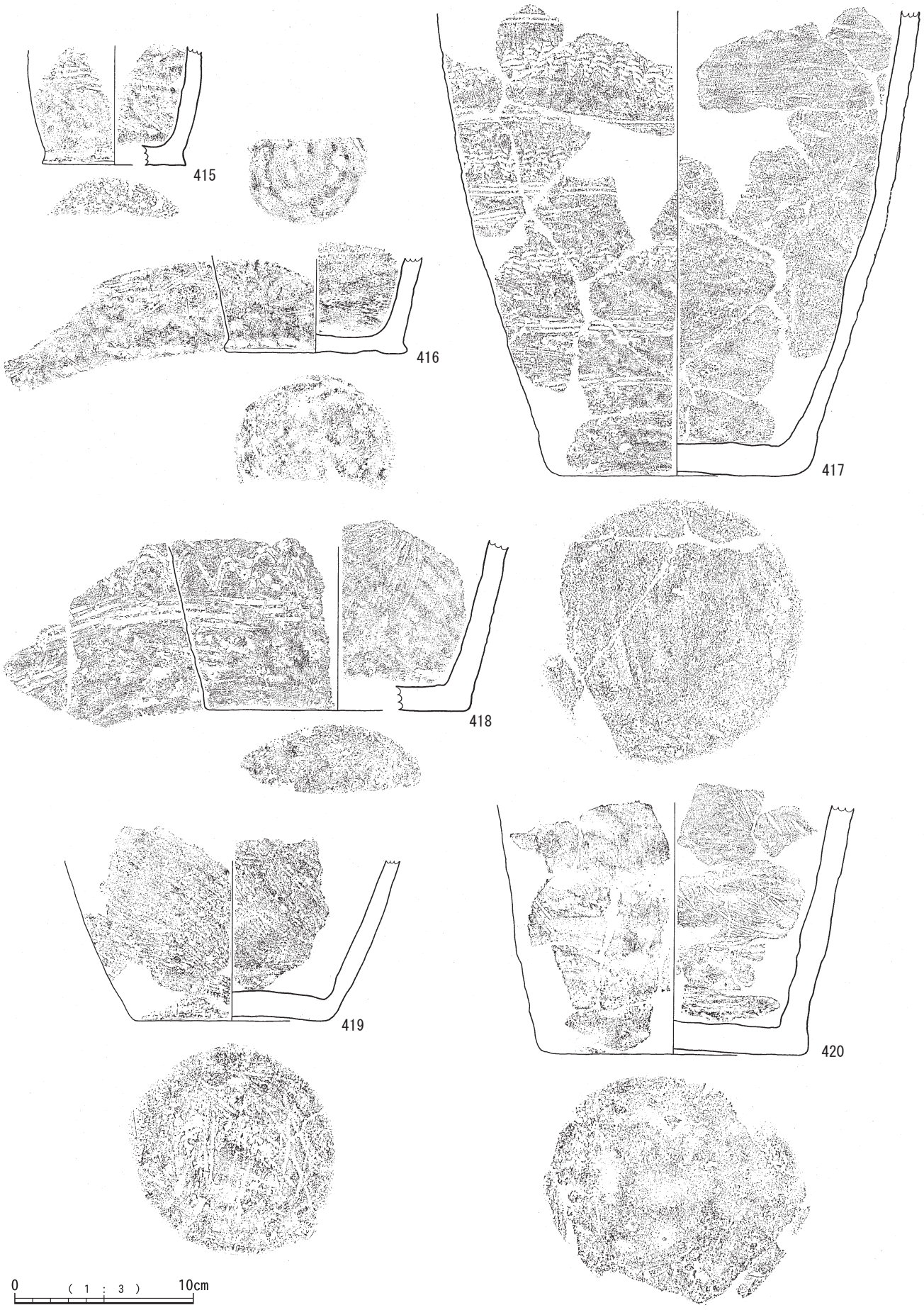
第XII類土器（第 130・131 図　426 ～ 439）

426 ～ 439 は第XII類土器として，無文のものであるが，器形・調整からＸ類とXI類に含まれるものと考えられる。基本的に表裏ともにナデ調整されている。426 は直行の器形で，表裏ともナデられている。427，428 は口縁部が外反し，内面に稜をつくる。429 は波状口縁の直立する口縁で，口縁端部に貝殻腹縁による刻みをいれる。430 は外反気味に立ち上がり波状口縁をなす。口縁端部に貝殻腹縁による刻みを施す。431 は，円筒状に立ち上がる。433 は円筒形の小型鉢形土器で，内面は粗いケズリ様になっている。432，434 は胴部で，435 ～ 439 は底部を含む破片である。いずれも平底で，端部が少し張り出す。

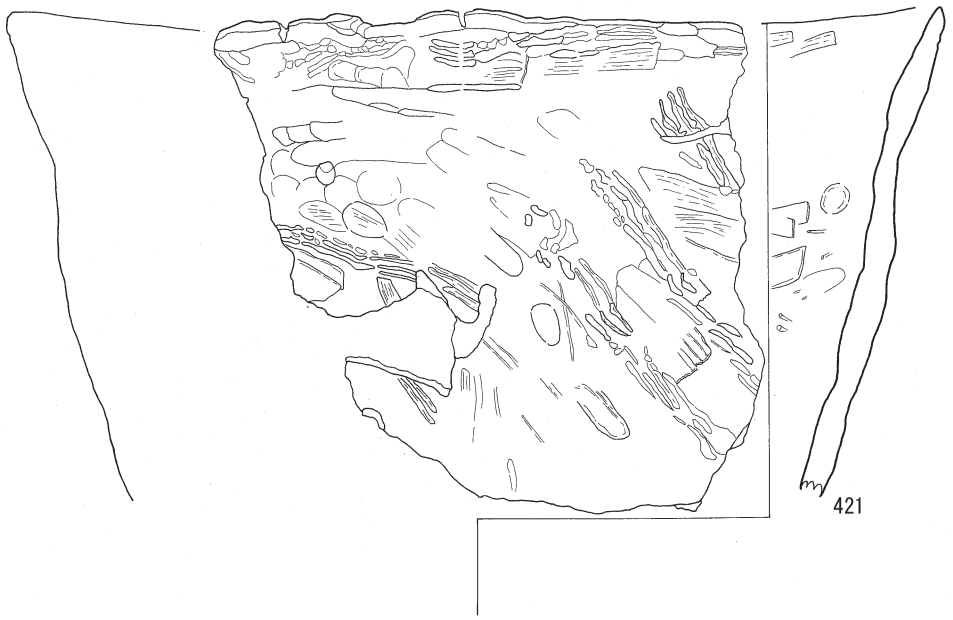
第XIII類土器（第 132・133 図　440 ～ 444）

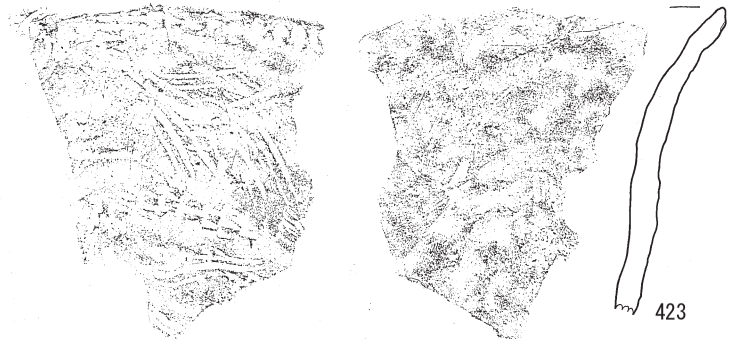
440 ～ 444 は第XIII類の条痕文土器で，鎌石橋式轟Ａ式である。

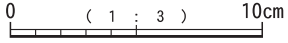
440 は，外開きに内湾気味に立ち上がり小さな底部の付く砲弾形の器形である。口縁端部にはヘラにより刻みが入れられ，外器面は縦方向の貝殻条痕に，弧状の条痕を全面に上書きする。内面は工具ナデされているが条痕を残す。441 は外器面が貝殻条痕、内面が工具ナデ後にナデられている。442 は胴部で，外器面が斜め方向の貝殻条痕で，内器面が横方向の貝殻条痕である。443 は口縁部で，口縁端部にヘラで刻みを入れて，口縁下に平行の貝殻条痕の下に縦方向の貝殻条痕に曲線の貝殻条痕を上書きする。444 は波状口縁の口縁部で，口縁端部にヘ



第 127 図　第Ⅺ類土器（18）

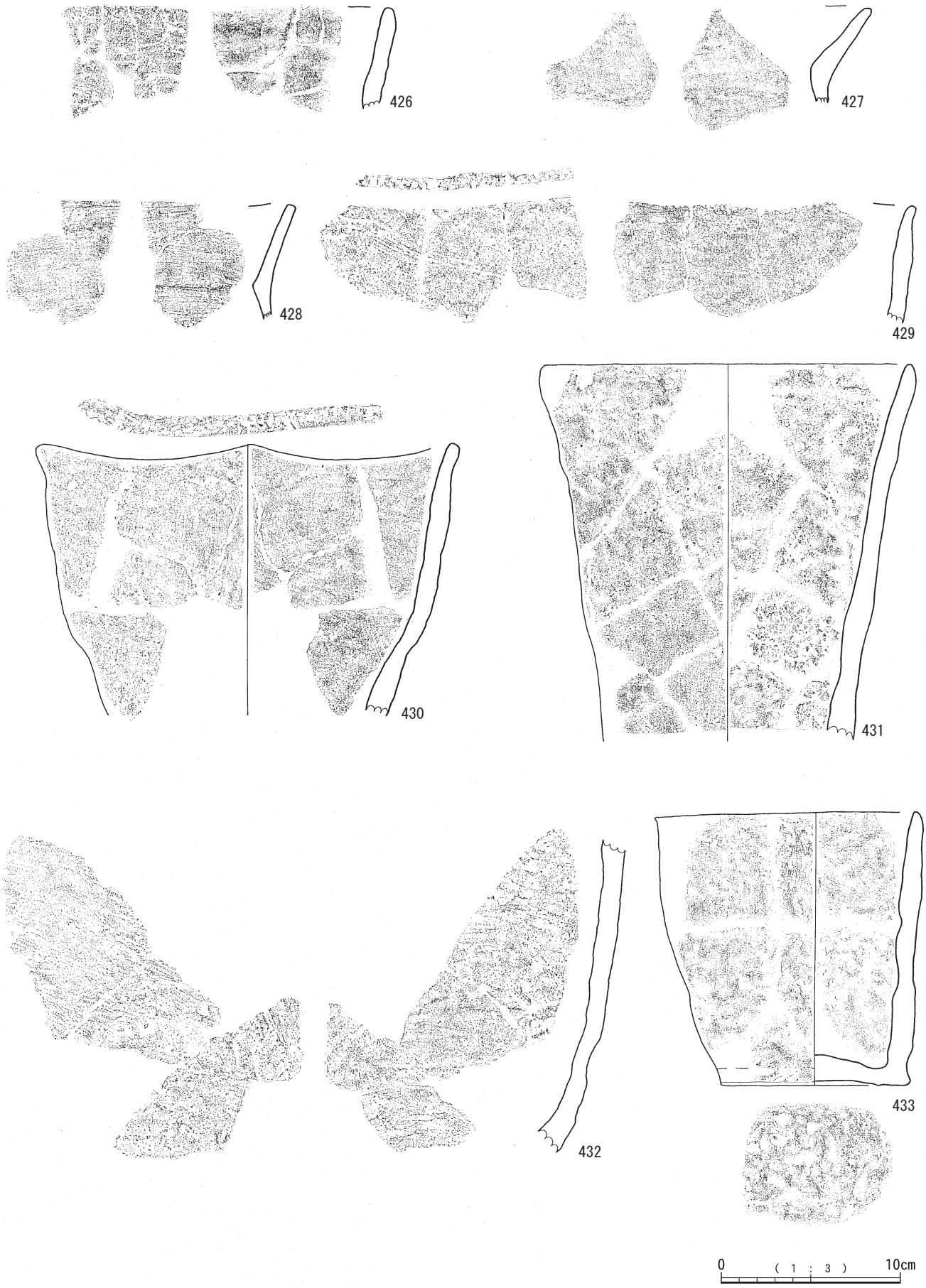




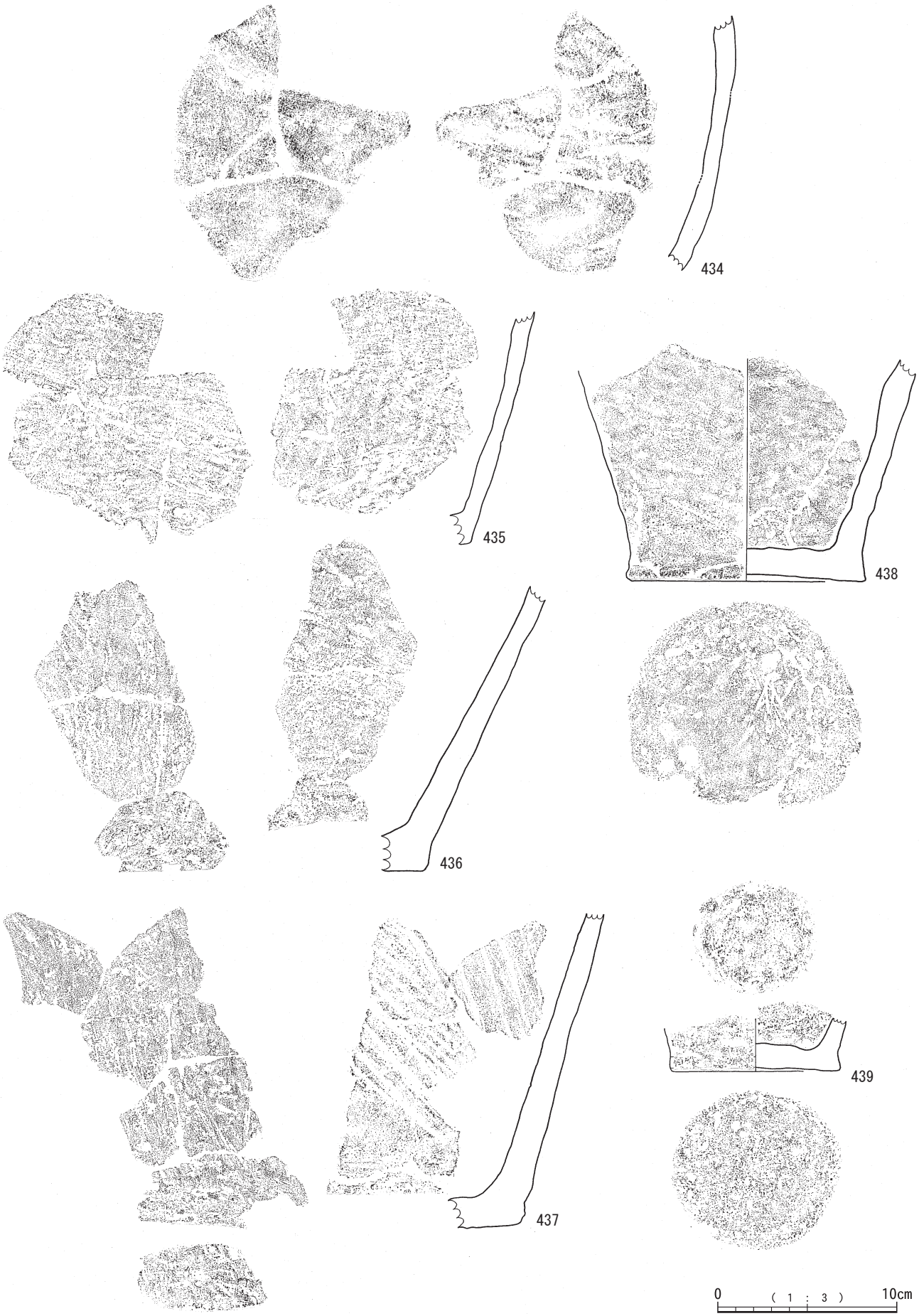


第 128 図　第Ⅺ類土器（19）

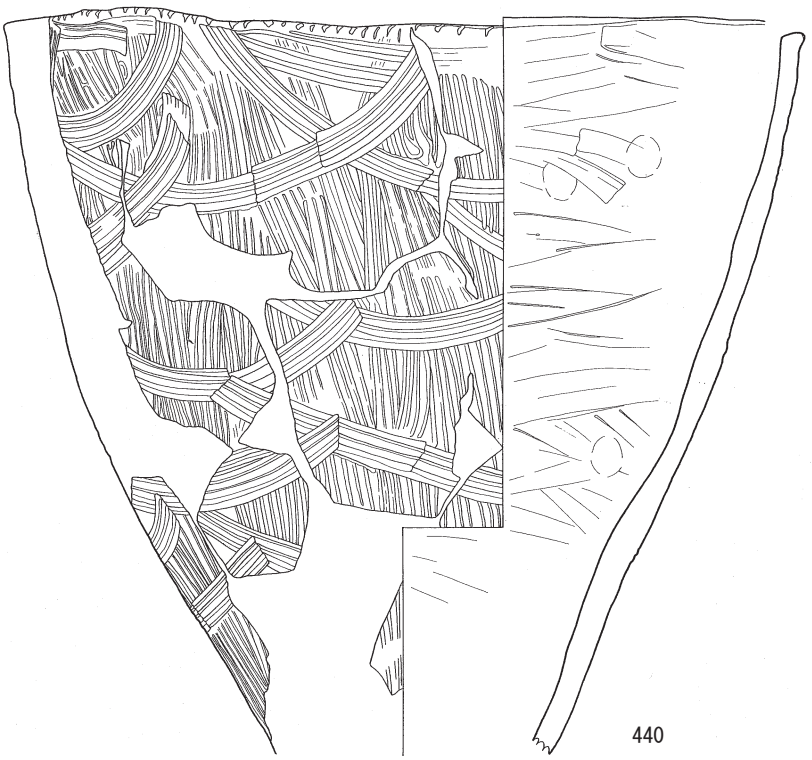
第 129 図　第Ⅺ類土器（20）

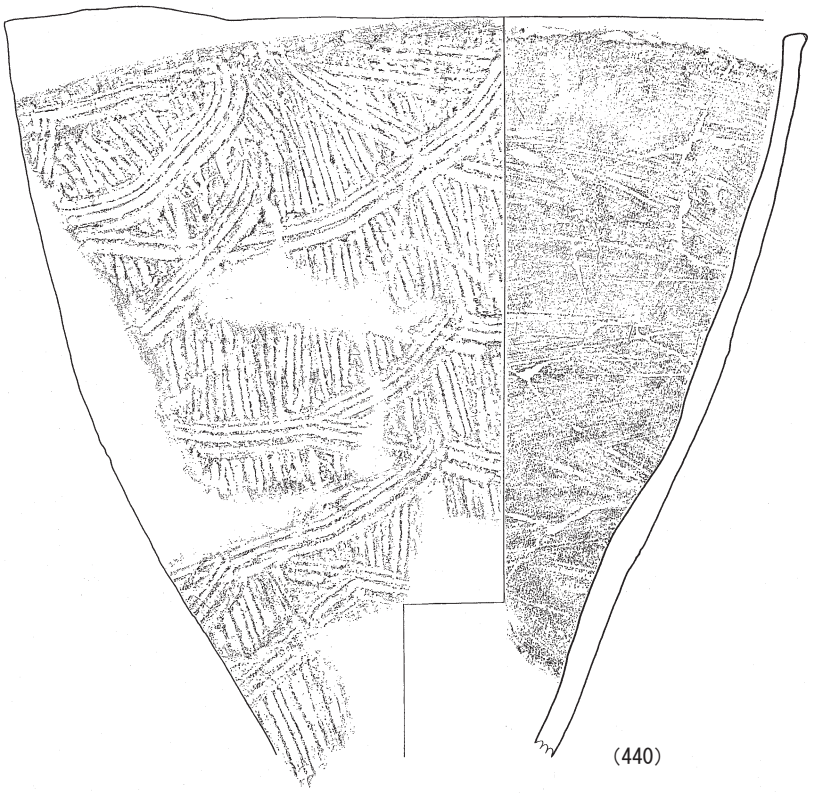


第 130 図　第Ⅻ類土器（１）



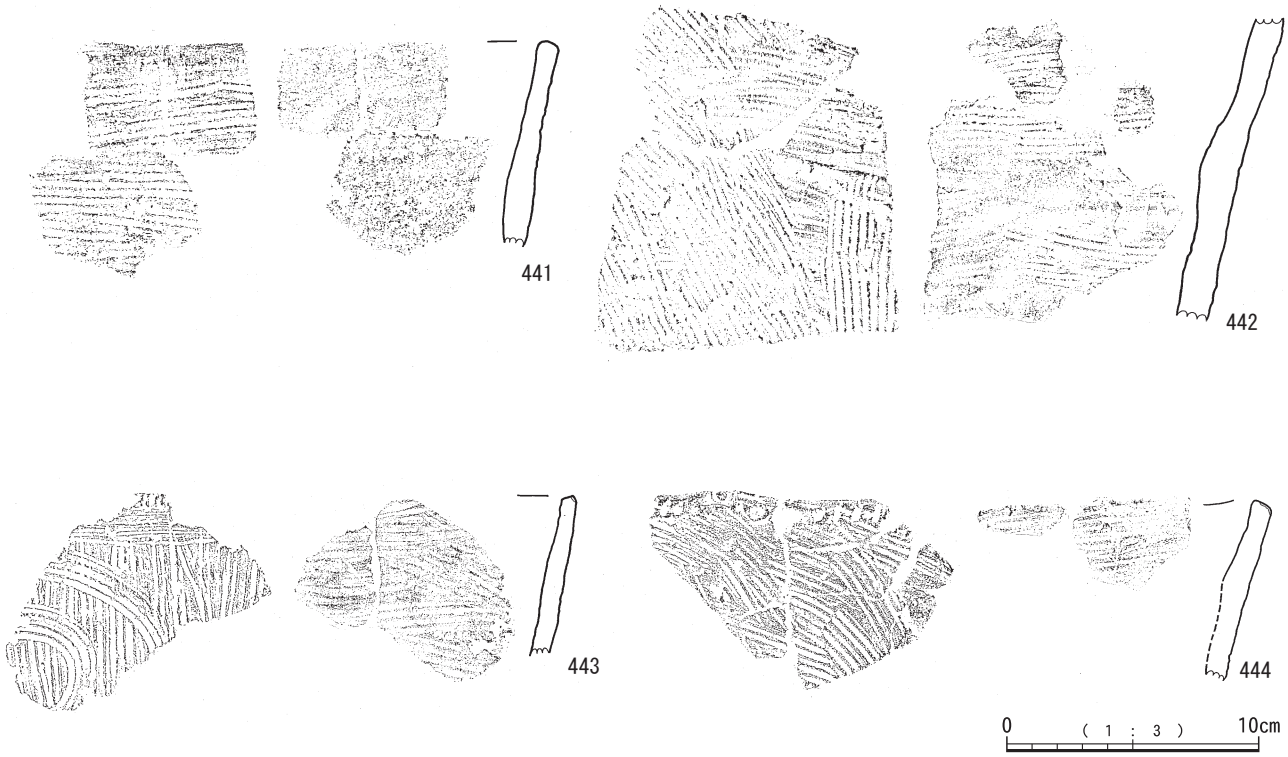
第 131 図　第Ⅻ類土器（２）





0 (1 : 3) 10cm

第 132 図　第Ⅻ類土器（１）

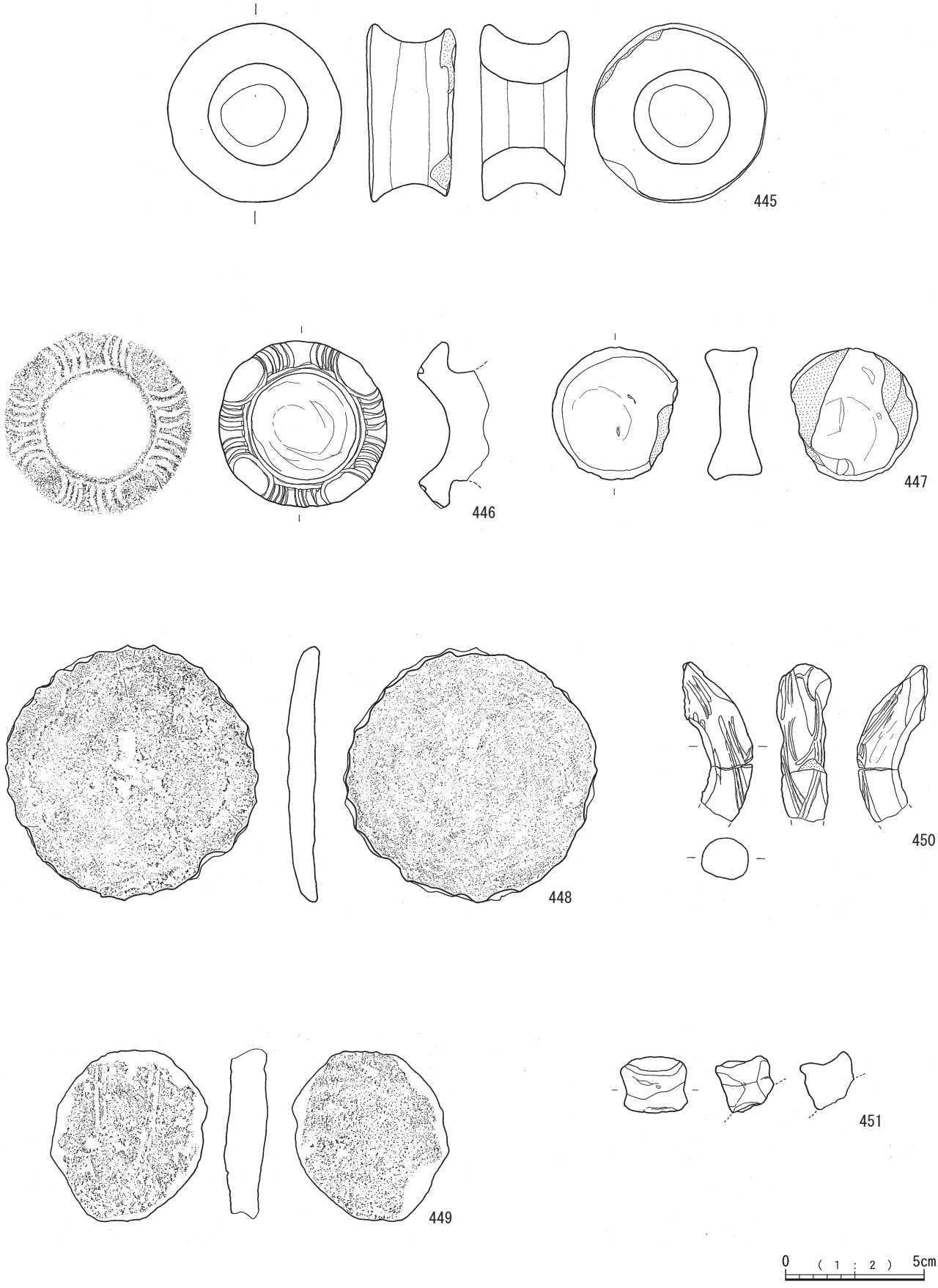


第 133 図　第Ⅻ類土器（２）

ラによる刻みを入れ，内外面ともに貝殻条痕である。

土製品（第 134 図　445 ～ 451）

445，446，447 は土製の耳栓である。445 は滑車型で，中央に円孔があり，ナデで調整している。446 は沈線で文様を施しているが，裏面を欠いている。447 は無文である。448，449 は円盤状土製品で，448 は底部破片，449 は胴部の破片であると考えられる。450 は不明土製品で，上位に接合痕跡があり，湾曲する円柱の外側に条線を施す。451 は円柱状の土製品で，下部に接合痕があり，平栫式土器などにつく口縁部や胴部の突起の可能性がある。



第 134 図　土製品

第 12 表　縄文時代早期土器観察表（第Ⅰ～Ⅶ類）

挿図番号	掲載番号	器種	分類	型式	出土区	層位	部位	色調		主文様・調整等		胎土						取上番号	備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	白粒	黒粒	その他	
65	91	深鉢	Ⅰ	前平	E-6	Ⅶ	口縁部	暗赤褐	にぶい赤褐	連続刺突文・条痕文	ケズリ	○	○	○			○		22961他	
	92	深鉢	Ⅰ	前平	D-6	Ⅶ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	連続刺突文・条痕文	条痕文後ナデ	○	○	○					24219	口縁内部に赤色顔料
	93	深鉢	Ⅰ	前平	C-4	Ⅶ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	連続刺突文・条痕文	ケズリ	○	○					砂粒	20328	
	94	深鉢	Ⅰ	前平	D-4	Ⅶ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	連続刺突文・条痕文	条痕文後ナデ	○	○				○		20654他	
	95	深鉢	Ⅰ	前平	D-5	Ⅶ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	連続刺突文・条痕文	条痕文後ナデ	○	○	○					21259	
	96	深鉢	Ⅰ	前平	D-5	Ⅶ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	連続刺突文・条痕文	条痕文後ナデ	○	○	○					21259	
	97	深鉢	Ⅰ	前平	D-5	Ⅶ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	条痕文	条痕文後ナデ	○	○	○				赤粒	21259他	
66	98	深鉢	Ⅰ	前平	D-4	Ⅶ	胴部	橙	橙	条痕文	条痕文後ナデ	○	○						20631他	
	99	深鉢	Ⅰ	前平	C-4,5 D-5	Ⅶ	胴部	にぶい橙	にぶい褐	条痕文	条痕文後ナデ	○	○	○					20330他	
	100	深鉢	Ⅰ	前平	E-6	Ⅶ	胴～底部	明赤褐	にぶい赤褐	条痕文	ケズリ・ナデ	○	○	○					22461他	
	101	深鉢	Ⅰ	前平	D-4	Ⅶ	胴～底部	橙	橙	条痕文	ケズリ・ナデ	○	○						20645他	
	102	深鉢	Ⅰ	前平	D-4,5	Ⅶ	胴～底部	灰黄褐	にぶい黄褐	条痕文	ケズリ・条痕文・ナデ	○	○						20499他	底部内面に条痕文
	103	深鉢	Ⅰ	前平	D-4	Ⅶ	底部	橙	にぶい橙	条痕文	ナデ	○	○				○		20666他	
67	104	深鉢	Ⅱ	前平	I-16	Ⅵ	胴部	にぶい橙	橙	条痕文・貝殻刺突文	ケズリ	○	○		○	○			12465	角筒
	105	深鉢	Ⅱ	前平	I-16	Ⅵ	胴部	にぶい褐	明赤褐	条痕文・貝殻刺突文	ケズリ	○	○		○	○			12587	角筒
	106	深鉢	Ⅱ	前平	L-13	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	条痕文・貝殻刺突文	ケズリ	○	○		○	○			一括	角筒
	107	深鉢	Ⅱ	前平	I-7	Ⅵ	胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	条痕文・貝殻刺突文	条痕文	○	○			○		赤粒・砂粒	40687	角筒
	108	深鉢	Ⅱ	前平	H-7	Ⅵ	口縁部	灰褐	赤褐	条痕文・貝殻刺突文	ケズリ	○	○			○		赤粒	43582	角筒
	109	深鉢	Ⅱ	前平	I-8	Ⅵ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	条痕文・貝殻刺突文	条痕文	○	○			○		赤粒	40693	
	110	深鉢	Ⅱ	前平	I-7	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	にぶい褐	条痕文・貝殻刺突文	条痕文	○	○			○			43438	
	111	深鉢	Ⅱ	前平	J-7	Ⅵ	口縁部	明赤褐	明赤褐	条痕文・楔形突帯	ナデ	○	○					砂粒	44452	
68	112	深鉢	Ⅲ	石坂	D-6,7　E-7	Ⅵ･Ⅶ	口縁～胴部	明赤褐	にぶい赤褐	条痕文	ケズリ後ナデ	○	○		○	○			23484他	113と同一個体の可能性・補修孔
	113	深鉢	Ⅲ	石坂	D-7	Ⅶ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	条痕文	ケズリ後ナデ	○	○		○				23482他	112と同一個体の可能性
	114	深鉢	Ⅲ	石坂	D-7	Ⅶ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	条痕文	ナデ	○	○	○	○	○			23990他	
	115	深鉢	Ⅲ	石坂	C-7	Ⅵ	底部	にぶい黄橙	にぶい橙	条痕文	ナデ	○	○	○					22764他	
69	116	深鉢	Ⅳ	下剥峯	E-8	Ⅵ	口縁部	褐	暗褐	貝殻刺突文	ナデ	○	○					砂礫	38650	
	117	深鉢	Ⅳ	下剥峯	E-8	Ⅵ･Ⅶ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻刺突文	ナデ	○	○			○			39174他	
	118	深鉢	Ⅳ	下剥峯	C-7	Ⅵ	胴部	灰褐	にぶい赤褐	貝殻刺突文	ナデ	○	○			○			23900	
	119	深鉢	Ⅳ	下剥峯	C-4	Ⅶ	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	貝殻刺突文	ナデ	○	○		○	○			20856	
	120	深鉢	Ⅳ	下剥峯	J-7	Ⅵ	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	貝殻刺突文	ナデ	○	○			○			42972	
	121	深鉢	Ⅳ	下剥峯	C-4	Ⅶ	胴部	暗褐	褐	貝殻刺突文	ナデ	○	○		○	○			20670	
	122	深鉢	Ⅳ	下剥峯	E-8	Ⅵ	底部	明赤褐	褐	貝殻刺突文	ナデ	○	○			○			38647	
	123	深鉢	Ⅳ	下剥峯	E-8	Ⅶ	底部	橙	灰褐	貝殻刺突文	ナデ	○	○			○			39590	
	124	深鉢	Ⅴ	桑ノ丸	D-5,6	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい褐	にぶい褐	条痕文	ケズリ・ナデ	○	○			○			20684他	
	125	深鉢	Ⅴ	桑ノ丸	J-7	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	条痕文	ケズリ・ナデ	○	○						43308	
70	126	深鉢	Ⅵ	押型文	D-7	Ⅶ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	押型文	押型文	○	○		○	○			23493	
	127	深鉢	Ⅵ	押型文	D-6	Ⅶ	口縁部	灰褐	にぶい赤褐	押型文	押型文	○	○		○	○			23986	
	128	深鉢	Ⅵ	押型文	J-13	Ⅵ	胴部	にぶい赤褐	赤褐	押型文	ケズリ・ナデ	○	○		○	○			20437	
	129	深鉢	Ⅵ	押型文	C-5	Ⅶ	底部	にぶい赤褐	灰褐	押型文	ケズリ・ナデ	○	○		○	○			24002	
	130	深鉢	Ⅶ	手向山	K,L-13,14	Ⅵ,Ⅶ	口縁～頸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	条痕文	ナデ	○	○		○	○			31543他	
	131	深鉢	Ⅶ	手向山	K,L-13,14	Ⅱf･Ⅵ･Ⅶ	口縁～頸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	条痕文	ナデ	○	○		○	○			31548他	
	132	深鉢	Ⅶ	手向山	K-16	Ⅵ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	押型文	ナデ	○	○		○	○			12206	
	133	深鉢	Ⅶ	手向山	K-16,17	Ⅵ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	押型文	ナデ	○	○		○	○			12091他	
	134	深鉢	Ⅶ	手向山	K-16	Ⅵ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	押型文	ナデ	○	○		○	○			12207他	
	135	深鉢	Ⅶ	手向山	K-16,17	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	押型文	ナデ	○	○		○	○			12496他	
	136	深鉢	Ⅶ	手向山	J-16	Ⅵ	胴部	にぶい褐	橙	押型文	ケズリ・ナデ	○	○		○	○			12219他	
	137	壺	Ⅶ	手向山	J-16,17	Ⅵ	胴～底部	にぶい褐	にぶい橙	押型文	ケズリ・ナデ	○	○		○	○			11938他	
	138	壺	Ⅶ	手向山	F-13	Ⅵ	底部	にぶい橙	にぶい橙	押型文	ナデ	○	○	○					14594他	
	139	深鉢	Ⅶ	手向山	D,E-17	Ⅵ	胴部	橙	橙	押型文	ナデ	○	○		○	○			10560他	
	140	深鉢	Ⅶ	手向山	D-17	Ⅵ	胴部	にぶい橙	橙	押型文	ナデ	○	○		○	○			10745他	

第 13 表　縄文時代早期土器観察表（第Ⅷ～Ⅻ類）（１）

挿図番号	掲載番号	器種	分類	型式	出土区	層位	部位	色調		主文様・調整等		胎土						取上番号	備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	白粒	黒粒	その他	
71	141	深鉢	Ⅷ	平棺	C-7,8	Ⅵ	口縁部	明赤褐	明赤褐	沈線文	ナデ	○	○		○	○	○		23042他	
	142	深鉢	Ⅷ	平棺	D-8	Ⅵ	口縁部	明赤褐	明赤褐	ヘラ刻目・沈線文	ナデ	○	○	○	○	○			26324	
	143	深鉢	Ⅷ	平棺	E-10	Ⅵ	口縁部	橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文	ナデ	○	○			○			26433	
	144	深鉢	Ⅷ	平棺	D-12	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文・刻目突帯	ナデ	○	○			○			40492	口唇部に赤色顔料
	145	深鉢	Ⅷ	平棺	C-6	Ⅶ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文	ナデ	○	○			○			23441	
	146	深鉢	Ⅷ	平棺	F-11	Ⅵ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ヘラ刻目・沈線文	ナデ	○	○		○	○			36542	
	147	深鉢	Ⅷ	平棺	E-13,14	Ⅵ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	沈線文・連続刺突文	ナデ	○	○		○	○			14358他	
	148	深鉢	Ⅷ	平棺	E-14	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	灰赤	沈線文・連続刺突文	ナデ	○	○	○	○	○			14391	
	149	深鉢	Ⅷ	平棺	E-13	Ⅵ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	ナデ	○	○		○	○			13629	
	150	深鉢	Ⅷ	平棺	C-10	Ⅵ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文・刻目突帯	ナデ	○	○	○					40620	
	151	深鉢	Ⅷ	平棺	E-10	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐	ヘラ刻目・沈線文	ナデ	○	○		○	○			25081	
	152	深鉢	Ⅷ	平棺	C-10	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文	ナデ	○	○		○	○			40577	
	153	深鉢	Ⅷ	平棺	E-15	Ⅵ	口縁部	灰褐	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	ナデ	○	○		○	○			13690他	
	154	深鉢	Ⅷ	平棺	C-5	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文	ナデ	○	○		○	○			20172	
	155	深鉢	Ⅷ	平棺	D-11	Ⅶ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヘラ刻目・刻目突帯	ナデ	○	○		○	○			40664	
	156	深鉢	Ⅷ	平棺	C-7,8	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	黒褐	ヘラ刻目・沈線文	ナデ・ミガキ	○	○			○			22767他	
	157	深鉢	Ⅷ	平棺	E-9 F-10	Ⅵ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ヘラ刻目・沈線文	ナデ	○	○		○	○			34976他	
	158	深鉢	Ⅷ	平棺	C-7,8	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文	ナデ	○	○		○	○			22180	
	159	深鉢	Ⅷ	平棺	D-6	Ⅶ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文・刻目突帯	ナデ	○	○	○					25623他	
	160	深鉢	Ⅷ	平棺	J-7	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文	ナデ	○	○			○			44329	
72	161	深鉢	Ⅷ	平棺	D-11	Ⅵ・Ⅶ	口縁～胴部	灰白	灰白	縄文・刻目突帯	ナデ	○	○						40659他	
	162	深鉢	Ⅷ	平棺	C-6,7	Ⅵ・Ⅶ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	刺突文・沈線文・刻目突帯	ナデ・工具ナデ	○	○		○	○			22163他	
73	163	深鉢	Ⅷ	平棺	D-16 E-15,16 F-14	Ⅵ・Ⅶ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい黄褐	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文・刻目突帯	ナデ	○	○		○	○			13827他	
	164	深鉢	Ⅷ	平棺	D-13	Ⅵ	口縁～頸部	浅黄橙	浅黄橙	ヘラ刻目・縄文・刻目突帯	ナデ	○	○		○				40264	
	165	深鉢	Ⅷ	平棺	E-8	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	結節縄文	ナデ	○	○	○		○			38955	
	166	深鉢	Ⅷ	平棺	D-6	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	結節縄文	ナデ	○	○			○	○		22366	
	167	深鉢	Ⅷ	平棺	E-9 F-10	Ⅶ	胴部	にぶい褐	橙	結節縄文	工具ナデ後ナデ	○	○			○			36052	
	168	深鉢	Ⅷ	平棺	C-10	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	にぶい橙	沈線文・連続刺突文・刻目突帯	ナデ	○	○	○					21619	
	169	深鉢	Ⅷ	平棺	D-12	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	結節縄文	ナデ後工具ナデ	○	○		○				40491	
	170	深鉢	Ⅷ	平棺	D-10	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	結節縄文	ナデ	○	○		○	○			29904	
	171	深鉢	Ⅷ	平棺	D-7	Ⅶ	胴部	にぶい橙	黒褐	結節縄文・刻目突帯	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○				23486	
	172	深鉢	Ⅷ	平棺	D-10,11	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	撚糸文	ナデ	○	○	○		○			22293他	
	173	深鉢	Ⅷ	平棺	D-11	Ⅵ	胴部	にぶい褐	にぶい黄橙	撚糸文・刻目突帯	ナデ	○	○		○	○			40589他	
	174	深鉢	Ⅷ	平棺	D-11 E-9 F-12	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○			○			40637他	
	175	深鉢	Ⅷ	平棺	D-11	Ⅶ	胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	撚糸文・刻目突帯	ナデ	○	○		○	○			40643	
74	176	深鉢	Ⅷ	平棺	E-14	Ⅵ	胴部	にぶい赤褐	にぶい橙	沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			13865他	
	177	深鉢	Ⅷ	平棺	E-13,14 F-14	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい褐	沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			13366他	
	178	深鉢	Ⅷ	平棺	D-6	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	沈線文・連続刺突文	ナデ	○	○	○					21856	
	179	深鉢	Ⅷ	平棺	E-14	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文・連続刺突文・刻目突帯	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			14364他	
	180	深鉢	Ⅷ	平棺	E-14	Ⅵ	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			14579他	
	181	深鉢	Ⅷ	平棺	E,F-13	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			14233他	
	182	深鉢	Ⅷ	平棺	D-5	Ⅵ	胴部	にぶい褐	にぶい黄橙	撚糸文・刻目突帯	ナデ	○	○		○	○			20136他	
75	183	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	I-13	Ⅵ・Ⅶ	口縁～頸部	にぶい黄褐	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文	ナデ一部工具ナデ	○	○	○					40809他	
	184	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F,G-12	Ⅵ	口縁～頸部	灰黄褐	灰黄褐	ヘラ刻目・沈線文・撚糸文	工具ナデ後ナデ・ミガキ	○	○	○	○	○			19229他	
	185	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-16	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	網目状撚糸文・沈線文	工具ナデ	○	○	○		○			12895他	
	186	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-18	Ⅵ・Ⅶ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	ヘラ刻目・網目状撚糸文・沈線文	工具ナデ後ナデ・ミガキ	○	○	○	○	○			10693他	
	187	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D,E-15	Ⅵ・Ⅶ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・網目状撚糸文・沈線文	工具ナデ・ナデ	○	○	○					13467他	
76	188	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10,11 E-8	Ⅵ・Ⅶ	口縁～頸部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文・網目状撚糸文	ナデ	○	○	○					30577他	
	189	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-12	Ⅵ	口縁～頸部	橙	暗赤褐	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ・ミガキ	○	○	○					18077他	
	190	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	I-14	Ⅵ	口縁～頸部	明褐灰	褐灰	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	ナデ	○	○	○		○			11597他	
77	191	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-12,13 H-13,14	Ⅵ	口縁～底部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	ヘラ刻目・沈線文・網目状撚糸文	工具ナデ後ナデ・ミガキ	○	○	○	○	○			18909他	
	192	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D,E-11	Ⅵ・Ⅶ	胴部	灰褐	灰黄褐	沈線文・網目状撚糸文	ナデ・ミガキ	○	○	○	○				24010他	
	193	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-18 E-17	Ⅵ・Ⅶ	胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	沈線文・網目状撚糸文	ナデ後工具ナデ	○	○	○		○			10906他	
	194	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-9,10 E-7,9	Ⅵ・Ⅶ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文・網目状撚糸文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			30557他	
	195	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	橙	沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○			○			21600他	
78	196	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-12 F-10,11,12	Ⅵ	口縁～頸部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ・ミガキ	○	○						37957他	
	197	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-10 F-12	Ⅵ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	ナデ	○	○			○			27639他	
	198	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-12 E-11 F-12	Ⅵ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	ナデ	○	○	○					39864他	
	199	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10	Ⅵ・Ⅶ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○			○			24023他	
	200	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D,E,F-12	Ⅵ	口縁～頸部	にぶい褐	灰黄褐	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	ナデ・工具ナデ・ミガキ	○	○	○					18079他	
	201	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-8	Ⅵ・Ⅶ	口縁～頸部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	ナデ	○	○	○					39584他	
79	202	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D,E-8	Ⅵ	口縁～頸部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			28751他	
	203	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10,11 E-12,13	Ⅵ・Ⅶ	口縁部	にぶい橙	にぶい褐	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	ナデ	○	○	○		○			40633他	
	204	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10,11	Ⅵ・Ⅶ	口縁～頸部	にぶい橙	橙	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ・ミガキ	○	○	○		○			22291他	
	205	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10 F-12	Ⅵ	口縁部	黒褐	暗褐	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文・網目状撚糸文	工具ナデ後ナデ・ミガキ	○	○	○	○				17647他	

第 14 表　縄文時代早期土器観察表（第Ⅷ～Ⅻ類）（２）

挿図番号	掲載番号	器種	分類	型式	出土区	層位	部位	色調		主文様・調整等		胎土							取上番号	備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	白粒	黒粒	その他		
79	206	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10 F-11	Ⅵ･Ⅶ	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文・網目状撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			37983他	
	207	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D,E-11	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文・網目状撚糸文	工具ナデ後ナデ・ミガキ	○	○	○	○	○			19621他	
80	208	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-12	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい褐	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文・撚糸文	工具ナデ・ナデ	○	○	○					18456他	
81	209	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-10,11	Ⅵ	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ・ミガキ	○	○		○	○			35692他	
	210	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-12	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文・網目状撚糸文	工具ナデ後ナデ・ミガキ	○	○	○	○	○			40443他	
	211	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-8,9,12 E-10,12 F-10,11,13 G-12,13,14	Ⅵ･Ⅶ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文・撚糸文	ナデ・ミガキ	○	○		○				27462他	
82	212	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	C-9 D-8,9,10 E-9,10	Ⅵ･Ⅶ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文・網目状撚糸文	ナデ	○	○	○					28771他	
	213	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-11,12 H-15	Ⅵ	口縁～底部	橙	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文・網目状撚糸文	ナデ	○	○						16185他	
83	214	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10 E-12 F-11,12 G-12,13	Ⅵ･Ⅶ	口縁～胴部	にぶい橙	褐灰	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文・網目状撚糸文	ナデ・工具ナデ	○	○			○			13548他	
84	215	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-9,11,12,13,15 E-8,10,11,12 F-8,9,10,11,12 G-11	Ⅵ･Ⅶ	口縁～胴部	橙	橙	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文・網目状撚糸文	ナデ	○	○		○				37977他	
85	216	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	H-17,18	Ⅵ	完形	橙	褐灰	ヘラ刻目・沈線文・連続刺突文・撚糸文	ナデ・指頭圧痕	○	○		○				11625他	
86	217	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10,11,12 E-8	Ⅵ･Ⅶ	胴部	橙	橙	沈線文・連続刺突文・網目状撚糸文	ナデ・工具ナデ	○	○	○					22257他	
	218	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-12 I-14	Ⅵ･Ⅶ	胴部	橙	にぶい褐	沈線文・連続刺突文・撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○			○	○		12347他	
	219	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-7,8,10,12	Ⅵ･Ⅶ	胴部	灰黄褐	褐灰	沈線文・撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			29918他	
	220	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文・連続刺突文	ナデ後工具ナデ・ミガキ	○	○						22247他	
	221	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10	Ⅵ	胴部	橙	橙	沈線文・連続刺突文・網目状撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○	○					25410他	
	222	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-11	Ⅵ	胴部	灰黄褐	灰黄褐	沈線文	ナデ	○	○			○			17361	
	223	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-9,12	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			30558他	
87	224	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-9	Ⅵ･Ⅶ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文・撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○	○			34713他	
	225	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-9,12 E-9 I-8	Ⅵ･Ⅶ	胴部	橙	灰黄褐	沈線文・網目状撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○	○			39868他	
	226	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-8,9 F-10	Ⅵ･Ⅶ	胴部	橙	橙	沈線文・網目状撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○	○					40421他	
	227	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-8,10 E-7,10,11	Ⅵ･Ⅶ	胴～底部	橙	橙	沈線文・網目状撚糸文・連続刺突文	ナデ	○	○	○					22260他	
	228	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-9	Ⅵ	底部	にぶい褐	にぶい褐	撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○	○			34084	
	229	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-9	Ⅶ	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	沈線文・撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			36547	
	230	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-11	Ⅵ	底部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文・網目状撚糸文	条痕文後ナデ	○	○	○	○				21642	
	231	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-9 F-10,11,12	Ⅵ･Ⅶ	胴～底部	橙	橙	沈線文・撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○				34357他	
	232	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	G-12	Ⅵ	胴～底部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文・網目状撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			18807他	
88	233	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E,F-12	Ⅵ	胴部	橙	橙	沈線文	ナデ	○	○	○		○	○		18067他	
	234	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-8	Ⅵ･Ⅶ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○					38753他	
	235	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10,11	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文	工具ナデ後ナデ・ミガキ	○	○						23043他	
	236	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-11,12 G-11	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○			○			15756他	
	237	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-11,12 G-11	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○						19859他	
	238	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-8,11	Ⅵ･Ⅶ	胴～底部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文	ナデ	○	○			○	○		39780他	
	239	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-11	Ⅵ	胴～底部	橙	にぶい黄橙	沈線文	工具ナデ後ナデ	○	○			○	○		34920	
	240	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-10,12 F-12	Ⅵ	底部	橙	橙	沈線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			15892他	
	241	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-9,10	Ⅵ	底部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○					28809他	
	242	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10	Ⅵ	底部	にぶい橙	にぶい黄橙	撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			22261	
	243	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-11 E-11	Ⅵ	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	網目状撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			30423他	
	244	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-9 F-10	Ⅵ･Ⅶ	胴～底部	にぶい褐	にぶい橙	撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○	○			38224他	
	245	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-16	Ⅵ	底部	にぶい橙	にぶい褐	網目状撚糸文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			12901	
89	246	壺	Ⅸ	塞ノ神A	F-13	Ⅵ	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	沈線文	ハケメ・ナデ	○			○				14638他	
90	247	壺	Ⅸ	塞ノ神A	G,H-12	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	沈線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○				19606他	
	248	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	J-13	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・無文	ナデ	○	○		○	○			19714	
	249	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-8,11	Ⅵ･Ⅶ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	無文	ナデ・工具ナデ	○	○	○					39326他	
	250	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	K-14	Ⅵ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	無文	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○	○			22817他	
	251	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	G-12	Ⅵ	口縁～頸部	灰黄褐	灰黄褐	ヘラ刻目・沈線文	ナデ	○	○		○	○			18723他	
	252	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	E-11	Ⅵ	口縁部	暗赤褐	にぶい赤褐	無文	工具ナデ後ナデ	○	○			○	○		16777	
	253	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	D-10	Ⅵ	口縁～頸部	にぶい褐	にぶい橙	ヘラ刻目・沈線文	ナデ	○	○		○	○			30579他	
	254	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-12 G-11	Ⅵ	口縁～頸部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヘラ刻目・沈線文	ナデ・工具ナデ	○	○		○	○			18891他	
	255	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	F-14	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	灰褐	ヘラ刻目・無文	ナデ	○	○		○	○			14217他	
	256	壺	Ⅸ	塞ノ神A	D-8	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	無文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			28749	
	257	深鉢	Ⅸ	塞ノ神A	J-7	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	無文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			44451	
91	258	深鉢	Ⅹ	塞ノ神B	G-8	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	条線文・貝殻連続刺突文	条痕文・ナデ	○	○					砂礫	43860	
	259	深鉢	Ⅹ	塞ノ神B	F-8,11	Ⅵ,Ⅶ	口縁～胴部	灰黄褐	褐灰	格子状条線文	条痕文・ナデ	○	○	○				砂礫	39551他	
92	260	深鉢	Ⅹ	塞ノ神B	G-11 J-13,14	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻腹縁刻目・貝殻連続刺突文・沈線文	ナデ・工具ナデ	○	○	○					19520他	
	261	深鉢	Ⅹ	塞ノ神B	F-12,13	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	条線文・貝殻連続刺突文	工具ケズリ後ナデ	○	○	○		○		砂礫	17308他	
	262	深鉢	Ⅹ	塞ノ神B	I-12	Ⅵ	口縁～頸部	灰褐	灰褐	貝殻腹縁刻目・条線文・貝殻連続刺突文	工具ケズリ後ナデ	○	○		○	○			42898	
	263	深鉢	Ⅹ	塞ノ神B	J-7	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	褐灰	貝殻連続刺突文	工具ケズリ後ナデ	○	○	○		○		砂礫	43376	
93	264	深鉢	Ⅹ	塞ノ神B	K-7	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	貝殻腹縁刻目・貝殻連続刺突文	ナデ・工具ナデ	○	○	○					44391他	
	265	深鉢	Ⅹ	塞ノ神B	D-9 F-11 E-9	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	灰黄褐	貝殻腹縁刻目・貝殻連続刺突文・条線文	ナデ	○	○	○		○			28813他	
	266	深鉢	Ⅹ	塞ノ神B	D-12,13,14 E-13	Ⅵ	口縁部	灰黄褐	にぶい褐	貝殻腹縁刻目・貝殻連続刺突文・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○		39902他	
	267	深鉢	Ⅹ	塞ノ神B	J,K-7	Ⅵ	胴部	褐	にぶい黄橙	条線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			44141他	
94	268	深鉢	Ⅹ	塞ノ神B	E-8 E-9	Ⅵ･Ⅶ	口縁～頸部	にぶい褐	にぶい黄橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○		29725他	
	269	深鉢	Ⅹ	塞ノ神B	G,E-12,13 F-11,12	Ⅵ	口縁～頸部	褐灰	灰黄褐	条線文・条痕文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ・ミガキ	○	○	○		○			19022他	
	270	深鉢	Ⅹ	塞ノ神B	F-8,9 G,H-8	Ⅵ	口縁～底部付近	橙	にぶい黄橙	貝殻連続刺突文・条線文	ナデ	○	○	○				砂礫	43801他	

第 15 表　縄文時代早期土器観察表（第Ⅷ～Ⅻ類）（３）

挿図番号	掲載番号	器種	分類	型式	出土区	層位	部位	色調		主文様・調整等		胎土							取上番号	備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	白粒	黒粒	その他		
95	271	深鉢	X	塞ノ神B	F,G-8	Ⅵ	口縁～胴部	橙	橙	貝殻腹縁刻目・条線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○		44030他	補修孔
	272	深鉢	X	塞ノ神B	E-9	Ⅵ	口縁～胴部	橙	にぶい黄褐	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○		29754他	
96	273	深鉢	X	塞ノ神B	J-7	Ⅵ	口縁～胴部	黄灰	黄灰	貝殻腹縁刻目・条線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			44483他	
	274	深鉢	X	塞ノ神B	G-12	Ⅵ	口縁～胴部	橙	橙	貝殻腹縁刻目・条線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○			○			18349他	
	275	深鉢	X	塞ノ神B	D-11	Ⅵ･Ⅶ	口縁部	褐灰	褐灰	条線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			40655他	
	276	深鉢	X	塞ノ神B	G-11	Ⅵ	口縁部	にぶい赤褐	褐灰	条痕文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			18002	
	277	深鉢	X	塞ノ神B	E,F-12	Ⅵ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			16797他	
	278	深鉢	X	塞ノ神B	E-8	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・沈線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○		39127	
	279	深鉢	X	塞ノ神B	F-8,11	Ⅶ	口縁部	にぶい橙	灰褐	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			39398	
	280	深鉢	X	塞ノ神B	H,I-8	Ⅵ	口縁～頸部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・沈線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○	○			44125他	
97	281	深鉢	X	塞ノ神B	I-18,19	Ⅵ･Ⅶ	完形	にぶい黄褐	灰黄褐	貝殻腹縁刻目・沈線文・条線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○	○			10353他	
98	282	深鉢	X	塞ノ神B	J-7	Ⅵ	口縁～胴部	灰黄褐	灰黄褐	貝殻腹縁刻目・貝殻連続刺突文・条線文	ナデ	○	○			○			44310	
	283	深鉢	X	塞ノ神B	G-12	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・沈線文・貝殻連続刺突文	条痕文・ナデ	○	○		○	○			19060他	
	284	深鉢	X	塞ノ神B	E-11	Ⅵ	口縁～頸部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・沈線文・貝殻連続刺突文	ナデ	○	○		○	○			29823他	
99	285	深鉢	X	塞ノ神B	I-7	Ⅵ	口縁～底部	にぶい橙	灰褐	貝殻腹縁刻目・条痕文・条線文・貝殻連続刺突文	ナデ・工具ナデ	○	○		○	○			44491	
	286	深鉢	X	塞ノ神B	G-11	Ⅵ	口縁部	灰褐	灰褐	貝殻腹縁刻目・条線文・貝殻連続刺突文	ナデ・工具ナデ	○	○	○		○			19156	
	287	深鉢	X	塞ノ神B	J-7	Ⅵ	口縁部	灰褐	灰褐	貝殻腹縁刻目・条線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○					44137	
100	288	深鉢	X	塞ノ神B	H-12	Ⅵ	口縁～底部	橙	灰褐	貝殻腹縁刻目・条線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○		42567他	
	289	深鉢	X	塞ノ神B	K-14	Ⅵ	口縁～胴部	黒褐	灰黄褐	貝殻腹縁刻目・条線文・貝殻連続刺突文	条痕文・ナデ	○	○		○	○			23972他	
	290	深鉢	X	塞ノ神B	J-7	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・条線文・貝殻連続刺突文	ナデ	○	○	○	○	○			43612	
	291	深鉢	X	塞ノ神B	G-12	Ⅵ	口縁～胴部	褐	褐	貝殻腹縁刻目・沈線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			19317	
	292	深鉢	X	塞ノ神B	D-11	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			40630	
101	293	深鉢	X	塞ノ神B	G-11	Ⅵ	口縁～頸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	条線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○		○		16366他	
	294	深鉢	X	塞ノ神B	E-8,9　F-9	Ⅵ･Ⅷ	口縁～頸部	にぶい橙	灰黄褐	条線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○						34314他	
	295	深鉢	X	塞ノ神B	H-12	Ⅵ	口縁～胴部	橙	にぶい橙	条線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			42270他	
	296	深鉢	X	塞ノ神B	F-9,10	Ⅵ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	貝殻腹縁刻目・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			34076他	
	297	深鉢	X	塞ノ神B	D-11　E-12	Ⅵ	口縁～頸部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			18070他	
102	298	深鉢	X	塞ノ神B	K-7	Ⅵ	胴部	にぶい褐	にぶい褐	条線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			44376他	
	299	深鉢	X	塞ノ神B	G-12	Ⅵ	胴部	黒褐	灰黄褐	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○	砂粒	18197	
	300	深鉢	X	塞ノ神B	F-8,11	Ⅶ	胴部	にぶい橙	灰黄褐	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○	○			39545他	
	301	深鉢	X	塞ノ神B	E,F-9	Ⅵ･Ⅶ	胴部	にぶい褐	にぶい橙	条線文	ナデ	○	○	○					36081他	
	302	深鉢	X	塞ノ神B	L-15　K-14	Ⅵ	胴部	褐灰	褐灰	貝殻連続刺突文・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			34942他	
	303	深鉢	X	塞ノ神B	G-12	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻連続刺突文・条線文	工具ナデ・ケズリ	○	○	○		○			18338他	
103	304	深鉢	X	塞ノ神B	E-9	Ⅵ	胴部	にぶい橙	褐灰	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			33337他	
	305	深鉢	X	塞ノ神B	E,F-9	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻連続刺突文・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			33353他	
	306	深鉢	X	塞ノ神B	E-11	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○						25982	
	307	深鉢	X	塞ノ神B	F-11	Ⅵ	口縁部	灰褐	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			19171	
	308	深鉢	X	塞ノ神B	F-9	Ⅵ	口縁～胴部	橙	にぶい黄橙	貝殻腹縁刻目・条線文・貝殻連続刺突文	ナデ	○	○	○		○	○		34363他	
104	309	深鉢	X	塞ノ神B	F-8,11	Ⅶ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○			○			39646他	
	310	深鉢	X	塞ノ神B	E-9	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○		34833他	
	311	深鉢	X	塞ノ神B	E-11	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	ナデ	○	○			○			25350	
105	312	深鉢	X	塞ノ神B	D-11	Ⅵ,Ⅶ	胴部	にぶい橙	灰褐	条線文・貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○		22306他	
	313	深鉢	X	塞ノ神B	F,G-12	Ⅵ	胴部	にぶい橙	褐灰	条線文	ナデ後ヘラケズリ	○	○			○			18200他	
	314	深鉢	X	塞ノ神B	I-13　J-12,13	Ⅵ	胴部	褐灰	褐灰	貝殻連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			40873他	
	315	深鉢	X	塞ノ神B	G-8	Ⅵ	胴部	橙	灰黄褐	貝殻連続刺突文・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			44628他	
	316	深鉢	X	塞ノ神B	G-12	Ⅵ	胴部	にぶい褐	にぶい褐	貝殻連続刺突文・条線文	条痕文後ナデ	○	○			○			18788	
	317	深鉢	X	塞ノ神B	G-12	Ⅵ	胴部	にぶい橙	褐灰	貝殻連続刺突文・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			19413	
	318	深鉢	X	塞ノ神B	K-14	Ⅵ	胴部	褐灰	灰褐	貝殻連続刺突文・条線文	条痕文後ナデ	○	○		○	○			23973	
	319	深鉢	X	塞ノ神B	J-13	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	条痕文	工具ナデ後ナデ	○	○			○		砂粒	19705他	
	320	深鉢	X	塞ノ神B	J-6	Ⅵ	胴～底部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○		43082	
106	321	深鉢	X	塞ノ神B	F-13,14,15　G-13	Ⅵ	胴～底部	橙	にぶい褐	貝殻連続刺突文・沈線文	工具ナデ後ナデ・指頭圧痕	○	○			○			14063他	補修孔
107	322	深鉢	X	塞ノ神B	H-12	Ⅵ	胴～底部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			42324他	
	323	深鉢	X	塞ノ神B	H-11	Ⅵ	胴～底部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			42637他	
108	324	深鉢	X	塞ノ神B	E-11	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻連続刺突文・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			17817他	
	325	深鉢	X	塞ノ神B	F-8,11	Ⅶ	口縁～胴部	灰褐	灰褐	貝殻連続刺突文・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			39547他	
	326	深鉢	X	塞ノ神B	J-13	Ⅵ	口縁～胴部	灰白	灰白	条線文・縦位突帯・瘤状突帯	工具ナデ後ナデ	○	○	○					19710他	
	327	深鉢	X	塞ノ神B	E,F-9	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	貝殻連続刺突文・条線文・瘤状突帯	工具ナデ後ナデ	○	○			○	○		34308他	
	328	深鉢	X	塞ノ神B	F-8,11	Ⅵ	口縁部	灰褐	にぶい褐	貝殻腹縁刻目・貝殻連続刺突文・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○			○		砂粒	38812	
	329	深鉢	X	塞ノ神B	J-7	Ⅵ	口縁部	灰褐	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・貝殻連続刺突文・条線文	ナデ	○	○	○		○			43040他	
109	330	深鉢	X	塞ノ神B	F-12,13	Ⅵ	頸～胴部	にぶい橙	にぶい橙	相交弧文状押引・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○			○			14283他	
	331	深鉢	X	塞ノ神B	G-11	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻連続刺突文・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○		17075	
	332	深鉢	X	塞ノ神B	F-11	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	ナデ	○	○	○		○			31953他	
	333	深鉢	X	塞ノ神B	F-8,11	Ⅵ	胴部	にぶい橙	灰褐	条線文・相交弧文状押引・条痕文	工具ナデ後ナデ	○	○	○					38484	
	334	深鉢	X	塞ノ神B	J-14　K-14,15	Ⅵ	胴部	灰褐	灰褐	貝殻連続刺突文・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○				○		42365他	
	335	深鉢	X	塞ノ神B	J-7	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻連続刺突文・沈線文・条痕文	ナデ	○	○	○					44181他	

第 16 表　縄文時代早期土器観察表（第Ⅷ～Ⅻ類）（４）

挿図番号	掲載番号	器種	分類	型式	出土区	層位	部位	色調		主文様・調整等		胎土							取上番号	備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	白粒	黒粒	その他		
110	336	深鉢	Ⅺ	苫浜	E-11	Ⅵ	口縁～胴部	橙	にぶい褐	条線文	工具ナデ		○					砂礫	26367	補修孔
	337	深鉢	Ⅺ	苫浜	E,F-9 D-10	Ⅵ･Ⅶ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			34844他	
111	338	深鉢	Ⅺ	苫浜	E-11	Ⅵ	口縁～胴部	橙	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・条線文・瘤状突帯	工具ナデ後ナデ	○	○			○			26388	
	339	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-11	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○					砂礫	38537	
	340	深鉢	Ⅺ	苫浜	E-10	Ⅵ	口縁～胴部	褐灰	褐灰	連続刺突文・条線文・垂下突帯	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			25264	
	341	深鉢	Ⅺ	苫浜	H-11	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○					砂礫	42339他	
	342	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-12 H-2	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○					砂礫	15319他	
112	343	深鉢	Ⅺ	苫浜	I-7,8 J-14 K-13,14	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	刻目突帯・短刻目突帯・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○			○			19964他	補修孔
113	344	深鉢	Ⅺ	苫浜	G-19,20	Ⅵ	口縁～底部	灰褐	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○			○		10254他	
	345	深鉢	Ⅺ	苫浜	H-8	Ⅵ	口縁部	灰黄褐	にぶい褐	貝殻腹縁刻目・刻目突帯・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			43790他	
114	346	深鉢	Ⅺ	苫浜	E-12	Ⅵ	口縁～底部	橙	橙	ヘラ刻目・刻目突帯・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○					18106他	
	347	深鉢	Ⅺ	苫浜	G-13,14	Ⅵ･Ⅶ	口縁～胴部	橙	褐灰	貝殻腹縁刻目・刻目突帯・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○			○		砂粒	12824他	
115	348	深鉢	Ⅺ	苫浜	K-13	Ⅵ	口縁～胴部	橙	にぶい赤褐	貝殻腹縁刻目・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○			○		砂粒	22909	
	349	深鉢	Ⅺ	苫浜	D-12,13 E-10,12	Ⅵ･Ⅶ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・条線文・相交弧文	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○	○			40209他	
	350	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-9	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	条線文・垂下突帯	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○	○		33946他	
	351	深鉢	Ⅺ	苫浜	G-8	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ連続刺突文・条線文・垂下突帯	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			44523	
	352	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-10	Ⅵ	口縁部	橙	橙	貝殻腹縁刻目・条線文・瘤状突帯	ナデ	○	○			○			34179他	
116	353	深鉢	Ⅺ	苫浜	D-12 G-11,12	Ⅵ	口縁～胴部	褐灰	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・条線文・連続刺突文・垂下突帯	ナデ	○	○			○	○		18544他	
	354	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-11	Ⅵ	口縁～胴部	灰褐	にぶい褐	貝殻連続刺突文・条線文・垂下突帯	工具ナデ		○					砂礫	19324	
	355	深鉢	Ⅺ	苫浜	I-7	Ⅵ	口縁～胴部	橙	橙	条線文・短突帯（横）	工具ナデ	○	○			○	○	砂粒	42916	
117	356	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-12	Ⅵ	口縁～胴部	橙	橙	貝殻連続刺突文・条線文・垂下突帯	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			17242他	
	357	深鉢	Ⅺ	苫浜	H-7 I-7,8,9	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	条線文・垂下突帯	工具ナデ後ナデ	○	○			○		砂礫	44640他	
118	358	深鉢	Ⅺ	苫浜	H-13	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	条線文・垂下突帯	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○	○	○		12033他	
	359	深鉢	Ⅺ	苫浜	E-9	Ⅵ	口縁部	にぶい褐	橙	貝殻腹縁刻目・条線文・瘤状突帯	-	○	○	○		○	○		34815	
	360	深鉢	Ⅺ	苫浜	K-14,15 J-14	Ⅵ	口縁部	褐灰	褐灰	ヘラ刻目・条線文・短突帯（横）	工具ナデ後ナデ	○	○						21693他	
	361	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-8,9 G,H-8	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・条線文・瘤状突帯	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			39087他	
	362	深鉢	Ⅺ	苫浜	E-8	Ⅶ	口縁部	にぶい橙	灰褐	条線文・連続刺突文・垂下突帯	工具ナデ後ナデ	○	○			○			39446	
119	363	深鉢	Ⅺ	苫浜	I-7,8 J-14 K-13,14	Ⅵ	口縁～胴部	灰黄褐	灰黄褐	相交弧文	条痕文	○	○	○					44265他	
	364	深鉢	Ⅺ	苫浜	E-9,10	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい褐	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・相交弧文・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			34825他	
	365	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-9	Ⅵ	口縁～胴部	灰黄褐	にぶい黄橙	貝殻腹縁刻目・条線文	条痕文	○	○			○			33428他	
120	366	深鉢	Ⅺ	苫浜	J-7	Ⅵ	口縁～胴部	灰黄褐	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			43274他	
	367	深鉢	Ⅺ	苫浜	J-7	Ⅵ	口縁～胴部	灰褐	灰褐	貝殻腹縁刻目・相交弧文状押引・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○	○		43047	
	368	深鉢	Ⅺ	苫浜	E-11,13	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・条線文・波状条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○				砂礫	25091他	
	369	深鉢	Ⅺ	苫浜	E-9 F-11	Ⅵ	口縁～胴部	褐灰	褐灰	波状条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○				砂礫	34908他	
	370	深鉢	Ⅺ	苫浜	J-12	Ⅵ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	貝殻腹縁刻目・相交弧文状押引	工具ナデ後ナデ	○	○		○				42212	
	371	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-9	Ⅵ	口縁部	暗赤褐	暗赤褐	貝殻腹縁刻目・垂下突帯・短突帯（横）	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			34004	
	372	深鉢	Ⅺ	苫浜	H-8	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい褐	相交弧文状押引	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○	○			44651他	
121	373	深鉢	Ⅺ	苫浜	E-11	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○			○			17797	
	374	深鉢	Ⅺ	苫浜	E,F-9	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	灰褐	条線文・連続刺突文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○		34027他	
	375	深鉢	Ⅺ	苫浜	D-6	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	褐灰	ヘラ刻目・条線文	条痕文	○	○		○			砂礫	22369他	
	376	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-11	Ⅵ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	相交弧文・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○			砂礫	15628	
	377	小型鉢	Ⅺ	苫浜	F-12	Ⅵ	口縁～底部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	ナデ	○	○					砂礫・赤粒	17253他	
122	378	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-10	Ⅵ	胴部	にぶい褐	にぶい褐	相交弧文・微隆突帯・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○		○				40033	
	379	深鉢	Ⅺ	苫浜	I-8	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	条線文・短突帯（横）	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			44400	
	380	深鉢	Ⅺ	苫浜	H-8	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	灰黄	条線文・相交弧文状押引・垂下突帯・短突帯（横）	工具ナデ後ナデ	○	○		○			砂礫	43939他	
	381	深鉢	Ⅺ	苫浜	I-13	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい褐	条線文・垂下突帯・短突帯（横）	工具ナデ後ナデ	○	○			○	○		40858	
	382	深鉢	Ⅺ	苫浜	G-8	Ⅵ	胴部	にぶい橙	灰褐	条線文・垂下突帯	工具ナデ後ナデ	○	○	○	○	○			44081他	
	383	深鉢	Ⅺ	苫浜	K-14	Ⅵ	胴部	灰褐	灰褐	条線文・垂下突帯	工具ナデ後ナデ	○	○		○				22813	
	384	深鉢	Ⅺ	苫浜	E-9	Ⅶ	胴部	にぶい橙	橙	条線文・相交弧文状押引・瘤状突帯	ナデ	○	○			○	○		38009	
	385	深鉢	Ⅺ	苫浜	H-8	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	条線文・垂下突帯	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			44615他	
	386	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-9	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	条線文・瘤状突帯	工具ナデ後ナデ	○	○	○					33430他	
	387	深鉢	Ⅺ	苫浜	H-8	Ⅵ	胴部	橙	にぶい橙	連続刺突文・垂下突帯	工具ナデ後ナデ	○	○			○	○		43794	
	388	深鉢	Ⅺ	苫浜	H-13	Ⅵ	胴部	にぶい橙	褐灰	条線文・瘤状突帯	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			11826他	
	389	深鉢	Ⅺ	苫浜	J-7	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	条線文・瘤状突帯	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			43396	
	390	深鉢	Ⅺ	苫浜	E-11	Ⅵ	胴部	にぶい赤褐	橙	条線文・短突帯（横）	ナデ	○	○	○		○			27651	
	391	深鉢	Ⅺ	苫浜	J-13	Ⅵ	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	刻目突帯・連続刺突文	ナデ	○	○	○					12870他	
123	392	深鉢	Ⅺ	苫浜	G-12	Ⅵ	胴部	灰褐	灰褐	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○			○	○		19292	
	393	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-8	Ⅵ･Ⅶ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	工具ナデ	○	○					砂礫	39086他	
	394	深鉢	Ⅺ	苫浜	D-11	Ⅵ	胴部	にぶい橙	褐灰	条線文	工具ナデ	○	○		○	○			21655他	
	395	深鉢	Ⅺ	苫浜	H-16,17	Ⅵ	胴部	にぶい橙	灰黄褐	条線文・相交弧文状押引	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○	○		11622他	
	396	深鉢	Ⅺ	苫浜	K-14,15	Ⅵ	胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	条線文・微隆突帯	ナデ	○	○	○		○			21675他	
	397	深鉢	Ⅺ	苫浜	G-8 I-7	Ⅵ	胴部	灰黄褐	灰黄褐	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			44039他	
124	398	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-9	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○		34256他	
	399	深鉢	Ⅺ	苫浜	F-12	Ⅵ	胴部	橙	褐灰	条線文・相交弧文状押引	ナデ	○	○		○	○			15449他	
	400	深鉢	Ⅺ	苫浜	H-8,13	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	相交弧文	工具ナデ	○	○			○			11780	

第 17 表　縄文時代早期土器観察表（第Ⅷ～Ⅻ類）（５）

挿図番号	掲載番号	器種	分類	型式	出土区	層位	部位	色調		主文様・調整等		胎土							取上番号	備考
								外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	白粒	黒粒	その他		
124	401	深鉢	Ⅺ	苦浜	K-15 J-14	Ⅵ	胴部	灰褐	灰褐	条線文	工具ナデ	○	○			○			40735他	
	402	深鉢	Ⅺ	苦浜	J-7	Ⅵ	胴部	浅黄橙	褐灰	相交弧文	工具ナデ後ナデ	○	○			○			40713他	
	403	深鉢	Ⅺ	苦浜	E-9	Ⅵ	胴部	橙	橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○					29753他	
125	404	深鉢	Ⅺ	苦浜	J-7	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい黄褐	条線文	ケズリ	○	○			○			43392他	
	405	深鉢	Ⅺ	苦浜	H-7,8	Ⅵ	胴部	にぶい橙	浅黄橙	相交弧文	工具ナデ	○	○			○	○		一括	
	406	深鉢	Ⅺ	苦浜	F-14	Ⅵ	胴部	にぶい橙	褐灰	条線文	工具ナデ	○	○			○	○		13761他	
	407	深鉢	Ⅺ	苦浜	E-9 G-8	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	条線文・相交弧文	工具ナデ	○	○			○	○		33905他	
	408	深鉢	Ⅺ	苦浜	F-9	Ⅵ	胴部	にぶい黄橙	にぶい褐	条線文	工具ナデ	○	○	○					33980	
	409	深鉢	Ⅺ	苦浜	I,J-16	Ⅵ	胴～底部	橙	にぶい橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○			○	○		11602他	
126	410	深鉢	Ⅺ	苦浜	F-12	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	条線文・相交弧文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			17266	
	411	深鉢	Ⅺ	苦浜	G-12	Ⅵ	胴部	橙	黒褐	条線文・相交弧文	ナデ	○	○			○			18547	
	412	深鉢	Ⅺ	苦浜	F-11	Ⅵ	胴部	橙	にぶい黄橙	条線文・相交弧文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○	○		35686	
	413	深鉢	Ⅺ	苦浜	H-8	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	条線文・相交弧文	工具ナデ	○	○	○		○			43784	
	414	深鉢	Ⅺ	苦浜	G-11	Ⅵ	胴部	橙	橙	条線文・相交弧文	工具ナデ	○	○	○		○	○		18818他	
127	415	深鉢	Ⅺ	苦浜	F-9	Ⅵ・Ⅶ	胴～底部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻押引	工具ナデ	○	○		○	○			36588他	
	416	深鉢	Ⅺ	苦浜	F-12	Ⅵ	胴～底部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	工具ナデ	○	○			○	○		17179	
	417	深鉢	Ⅺ	苦浜	E-9	Ⅵ	胴～底部	にぶい橙	にぶい橙	条線文・相交弧文状押引	工具ナデ後ナデ	○	○			○	○		33313他	
	418	深鉢	Ⅺ	苦浜	J-13	Ⅵ	胴～底部	橙	橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			19501他	
	419	深鉢	Ⅺ	苦浜	K-14,15	Ⅵ	胴～底部	にぶい橙	にぶい橙	条線文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			23966他	
	420	深鉢	Ⅺ	苦浜	F-12,13	Ⅵ	胴～底部	にぶい橙	褐灰	条線文	工具ナデ	○	○		○	○			16139他	
128	421	深鉢	Ⅺ	苦浜	J-7	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	褐灰	ヘラ刻目・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○	○					43135	
	422	深鉢	Ⅺ	苦浜	E,F-13	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	赤灰	ヘラ刻目・貝殻押引・条線文	条痕文	○	○		○	○	○		13396他	
	423	深鉢	Ⅺ	苦浜	I,J-7	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻腹縁刺突・条線文	工具ナデ後ナデ	○	○		○			砂礫	44484他	
	424	深鉢	Ⅺ	苦浜	I-7	Ⅵ	口縁部	灰褐	灰褐	相交弧文状押引・条線文・貝殻復縁刻目	ナデ	○	○	○		○			一括	
129	425	深鉢	Ⅺ	苦浜	E,F-10	Ⅵ	口縁～底部	明赤褐	褐灰	工具ナデ・条痕文・ヘラ刻目	条痕文	○	○			○			25025他	補修孔
130	426	深鉢	Ⅻ	無文	F-9	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐	無文	ナデ	○	○		○				34014	
	427	深鉢	Ⅻ	無文	E-11	Ⅵ	口縁～頸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	無文	ナデ	○	○	○	○	○	○		18873	
	428	深鉢	Ⅻ	無文	F-16	Ⅶ	口縁～頸部	にぶい橙	にぶい橙	無文	ナデ	○	○		○	○			12985他	
	429	深鉢	Ⅻ	無文	J-16	Ⅵ	口縁部	灰褐	にぶい赤褐	貝殻腹縁刻目・無文	ナデ	○	○		○			砂礫	11786	
	430	深鉢	Ⅻ	無文	J-16	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻腹縁刻目・無文	ナデ	○	○		○	○			11786	
	431	深鉢	Ⅻ	無文	G-12	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	無文・指頭圧痕	ナデ	○	○	○		○			18190他	
	432	深鉢	Ⅻ	無文	F-11	Ⅵ	胴部	橙	にぶい黄橙	無文・工具ナデ	工具ナデ後ナデ	○	○			○		砂粒	19850他	
	433	小型鉢	Ⅻ	無文	G-12	Ⅵ	口縁～底部	にぶい橙	にぶい橙	無文・指頭圧痕	ケズリ・ナデ	○	○	○					19424他	
131	434	深鉢	Ⅻ	無文	E-11	Ⅵ	胴部	橙	橙	無文	ナデ	○	○	○		○			26028他	
	435	深鉢	Ⅻ	無文	K-14	Ⅵ	胴～底部	にぶい橙	灰黄褐	無文	工具ナデ後ナデ	○	○		○	○			22851他	
	436	深鉢	Ⅻ	無文	E-9	Ⅵ	胴～底部	橙	にぶい褐	無文	工具ナデ後ナデ	○	○	○					29753	
	437	深鉢	Ⅻ	無文	E-8,10 F-12	Ⅵ	胴～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	無文	工具ナデ後ナデ	○	○			○			40218他	
	438	深鉢	Ⅻ	無文	E-11	Ⅵ	胴～底部	橙	褐灰	無文	工具ナデ後ナデ	○	○			○	○		19618他	
	439	深鉢	Ⅻ	無文	E-11	Ⅵ	底部	橙	灰褐	無文	工具ナデ後ナデ	○	○	○		○			17783	底部スス付着
132	440	深鉢	Ⅻ	轟A	K,L-13,14	Ⅵ	口縁～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヘラ刻目・条痕文	条痕文・工具ナデ	○	○		○	○			21754他	
133	441	深鉢	Ⅻ	轟A	D-13	Ⅵ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい褐	条痕文	工具ナデ後ナデ	○	○						40271他	
	442	深鉢	Ⅻ	轟A	F-13	Ⅵ	胴部	にぶい橙	にぶい赤褐	条痕文	条痕文	○	○		○	○			14088	
	443	深鉢	Ⅻ	轟A	C-9 D-8,9,10 E-9,10	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	褐灰	ヘラ刻目・条痕文	条痕文	○	○		○	○			26284他	
	444	深鉢	Ⅻ	轟A	F-13	Ⅵ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラ刻目・条痕文	条痕文	○	○						13444他	

第 18 表　縄文時代早期土製品観察表

挿図番号	掲載番号	器種	型式	出土区	層位	法量				主文様・調整等		胎土							色調		取上番号	備考
						表面経(cm)	裏面経(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	白粒	黒粒	その他	外面	内面		
134	445	土製品	耳栓	I-17	Ⅵ	6.4	6.0	3.2	89.0	ナデ	ナデ	○	○	○	○				淡黄	淡黄	12789	
	446	土製品	耳栓	E-8	Ⅶ	5.9	－	(2.1)	53.0	沈線文	－	○	○	○	○				明黄褐	明黄褐	39349	
	447	土製品	耳栓	I-8	Ⅵ	4.7	4.3	1.9	37.0	ナデ	ナデ	○	○		○				にぶい橙	にぶい橙	44404	
	448	土製品	円盤状	E-12	Ⅵ	9.1	－	1.0	89.0	ナデ	ナデ	○	○		○				橙	橙	18506	
	449	土製品	円盤状	G-8	Ⅵ	6.4	－	1.4	56.6	条痕文	ナデ	○	○	○	○	○			にぶい黄橙	灰黄褐	44019	
	450	土製品	不明	E-12	Ⅵ	5.7	－	1.7	18.0	条痕文	ナデ	○	○						にぶい橙	にぶい橙	15505	
	451	土製品	円柱状	F-11	Ⅵ	1.9	－	2.3	8.0	ナデ	ナデ	○	○						橙	橙	17597	

4　遺物（石器）

荒園遺跡から出土した石器は，総点数 19,191 点，実測点数 439 点である。石器については，第Ⅲ章で，器種別・石材別に分類した表がある（第３～５表参照）。Ⅵ層では，石器の石材としては安山岩と姫島産黒曜石が多い。安山岩は西北九州産のものが多く，上牛鼻周辺の安山岩がわずかに見られる。遠方の石材が使われている。地元石材は，頁岩や玉髄や水晶などあるが剥片石器には少ない。礫石器には多く用いられる。これに比べてⅦ層では玉髄が多く，地元の石材構成が高くなっている。

器種としては石鏃が突出して多い。特にⅦ層では５割を越える。植物質食糧の加工具とされる磨石・敲石類などは，石器での比率がⅥ層は 14%，Ⅶ層は８％となる。集石が形成されており加工具や調理具も想定されるが，それぞれの層でそれほど多くなく，集石がⅥ層で多く形成されたことも示唆している。前半期は狩猟キャンプとして使用された遺跡の可能性が高く，後半期には滞留性が高まった。

第 135 ～ 137 図は，Ⅵ層とⅦ層の石器の平面出土状況である。４区～ 11 区は西側の調査区に集中するが，これらが土器のⅠ類土器からⅤ類土器の出土場所と重なる。Ⅵ類土器からは分布が西側に移り，Ⅷ類土器以降の中心は８区～ 14 区となる。Ⅵ層の石器の中心も同様の分布を示している。

石器の石材は，それぞれでブロックを形成している。黒曜石ⅠはＤ－５区，Ｈ－ 14 区，Ｆ・Ｇ－ 15 区にブロックがある。黒曜石Ⅲのブロックは Ｄ－９・10 区，Ｆ－８区，Ｆ－ 11・12 区，Ｌ－ 12 区に見られる。黒曜石Ⅴ類がＤ－５区，Ｅ－６区，Ｅ－８・９区，Ｅ・Ｇ－ 12 区，Ｊ－ 13 区に広範囲に展開する。玉髄はＣ－６区のブロックとして前述した出土状況を示し，極めて限定的である。安山岩は一部黒曜石Ⅴと重なるが，Ｅ－６区，Ｆ－８区，Ｆ－ 10 区，Ｆ・Ｇ－ 12 区にかけてと，Ｆ－ 13 区，Ｆ－ 15 区の南側，Ｉ－ 14 区，Ｊ・Ｋ－ 13 区，Ｌ－ 13・14 区に最も広範囲に展開する。黒曜石Ⅴと比べるとやや南側に寄っている。珪質頁岩のブロックは，Ｄ・Ｆ－９区，Ｅ－ 10・11 区にかけて，Ｇ－ 12 区にある。黒曜石Ⅴ・安山岩・珪質頁岩の石材分布は，土器型式で塞ノ神Ａ式土器から塞ノ神Ｂ式土器・苦浜式土器の分布と重なることから，これらの土器型式の時期を中心に使われたことが判断できる。

石　鏃

石鏃はⅠ～Ⅶ類に分類し，さらに大型鏃と欠損品と未製品で分けている。

石鏃Ⅰ類（第 138 図　452 ～ 477）

平基鏃の一群である。正三角形小型鏃，やや大きい正三角形鏃，二等辺三角形鏃がある。わずかに浅い抉りのものもⅠ類とした。454 ～ 461 などはわずかに抉りが見られる。462 からは二等辺三角形のものである。大型の平基の二等辺三角形鏃は，早期を通じて使われている可能性があり，452，453 の小型のものが古い可能性がある。

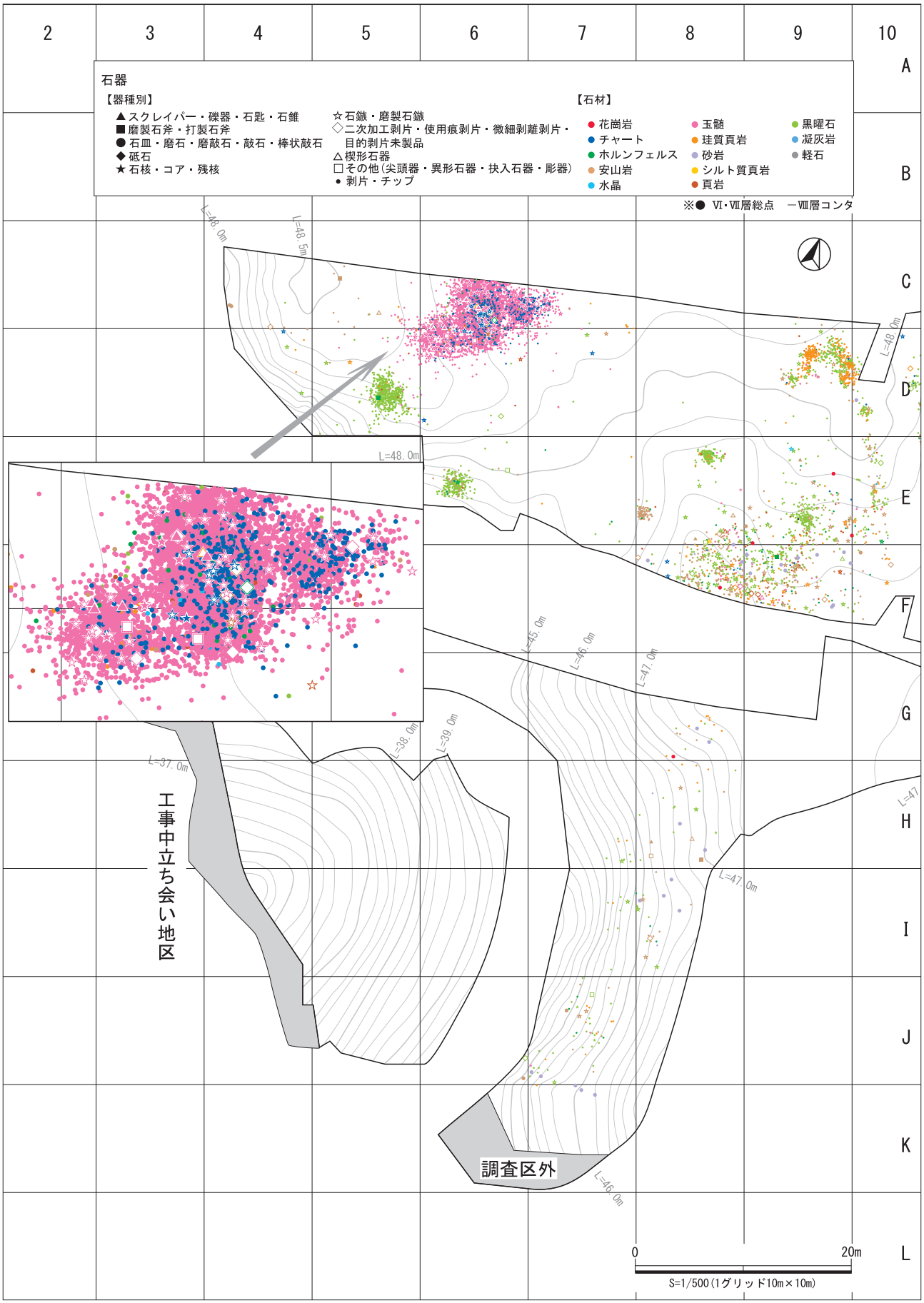
452 は桑ノ木津留産の黒曜石で，小型の正三角形鏃である。453 は安山岩の小型正三角形鏃だが，基部がやや膨らむ。454 は針尾産黒曜石で，剥片形状が残る小型のもので，わずかに抉りが見られる。455 は桑ノ木津留産黒曜石の二等辺三角形平基鏃で，基部の両側の端部を欠く。456 は珪質頁岩の浅い抉りの小型正三角形鏃である。背面に礫皮面が残る。457 は安山岩の小型正三角形鏃で，先端をわずかに欠く。458 は桑ノ木津留産黒曜石の小型正三角形鏃で，脚がわずかに飛び出す形状で，片脚を欠く。459 ～ 461 は姫島産の黒曜石の小型鏃で，459，461 は圭頭部を欠き，460 は圭頭部と片脚を欠く。462 は上牛鼻産黒曜石の小型正三角形鏃で，基部の一端を欠く。463 は姫島産黒曜石の二等辺三角形鏃で，わずかに先端と片脚を欠く。464 は姫島産黒曜石の二等辺三角形鏃で未製品の可能性もある。465 は安山岩の身の長い石鏃で，先端部を欠く。466 は上牛鼻産黒曜石の二等辺三角形鏃で浅い抉りがある。467 は姫島産黒曜石の二等辺三角形鏃である。468 は珪質頁岩の身が長い石鏃で，先端部を欠く。469 は腰岳産黒曜石の石鏃で，先端部と片脚部を欠く。470 は姫島産黒曜石の二等辺三角形鏃で，基部が一度折れた後に再整形したとも考えられる。471 は安山岩の二等辺三角形鏃で，剥片形状を残す薄い石鏃である。472 は安山岩の二等辺三角形鏃で，これも剥片形状を残す。473 は姫島産黒曜石の二等辺三角形鏃である。474 は三船産黒曜石の二等辺三角形鏃で，先端をわずかに欠く。475 ～ 477 は安山岩のやや身が長い二等辺三角形鏃である。475 は，やや黒色が強い安山岩で，上牛鼻産の安山岩の可能性がある。圭頭部で先端への角度が変わる。476 は身が厚く未製品の可能性がある。477 は先端を欠く。

石鏃Ⅱ類（第 139・140 図　478 ～ 504）

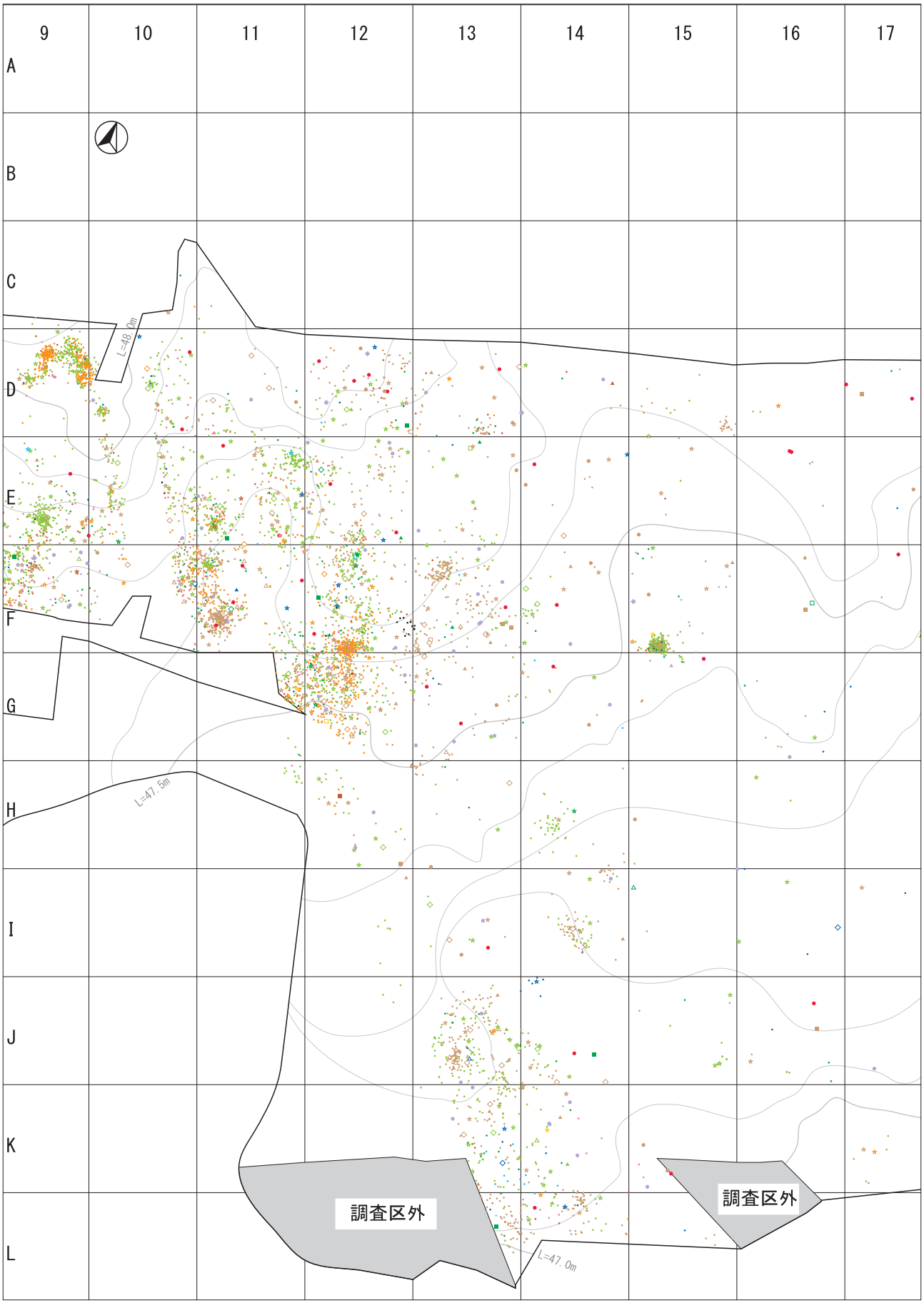
浅い抉り，正三角形鏃と二等辺三角形鏃がある。どちらかの脚が長いなど，左右対称でないのも大きな特徴である。

478 はやや黒色の強い安山岩で，わずかに基部が凹み，右側の脚が長く仕上げられる。479 は姫島産の黒曜石の二等辺三角形鏃で，左脚が長い。

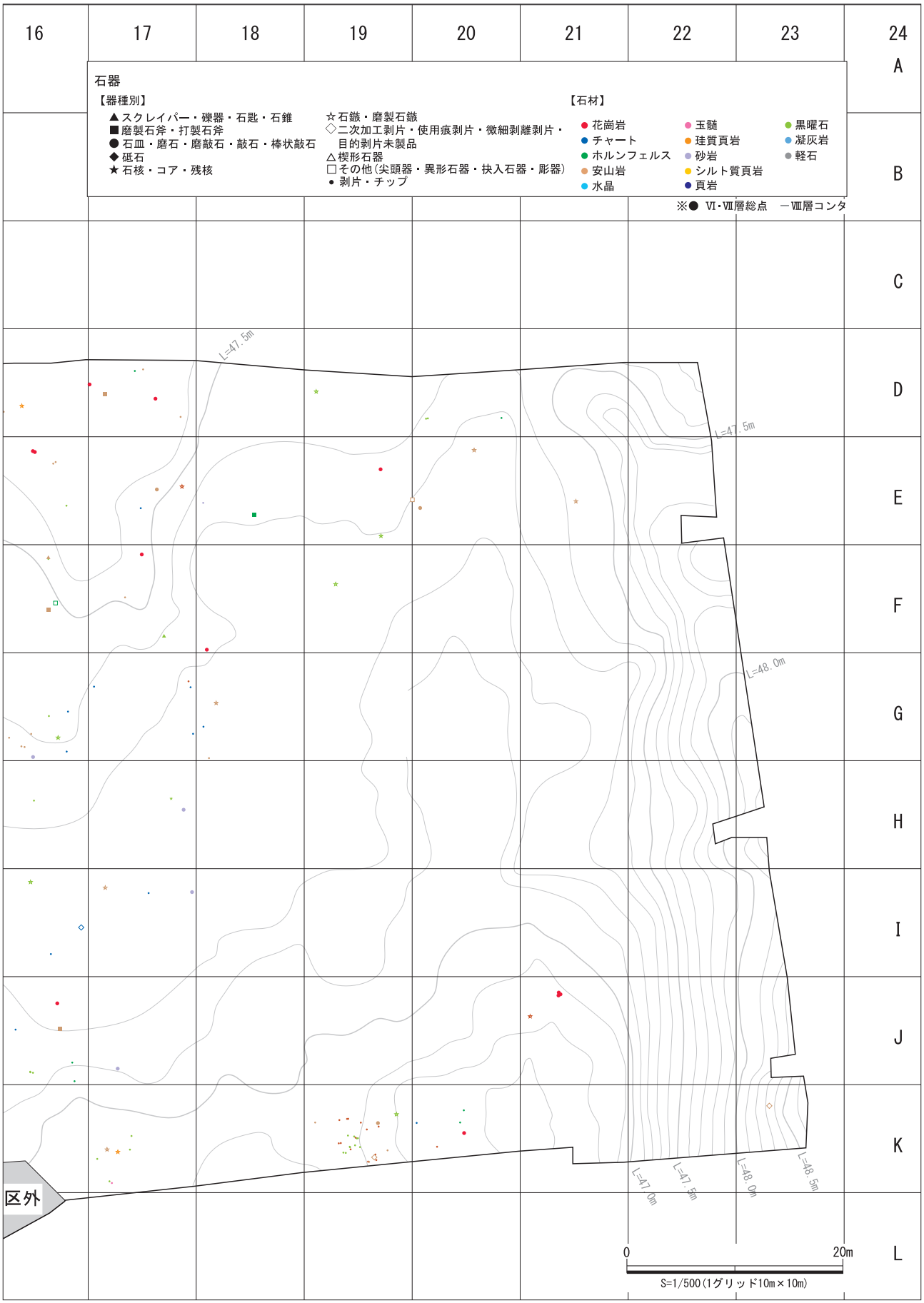
480 は針尾産黒曜石の完形の二等辺三角形鏃で，腹面に主要剥離面が残る。481 は珪質頁岩の二等辺三角形鏃である。482 はやや身の厚い姫島産黒曜石の二等辺三角形鏃で先端を欠く。483 はチャートの完形の二等辺三角形鏃で，腹面に主要剥離面が残る。484 は姫島産黒曜石の完形の二等辺三角形鏃で，先端が細く突出する。485



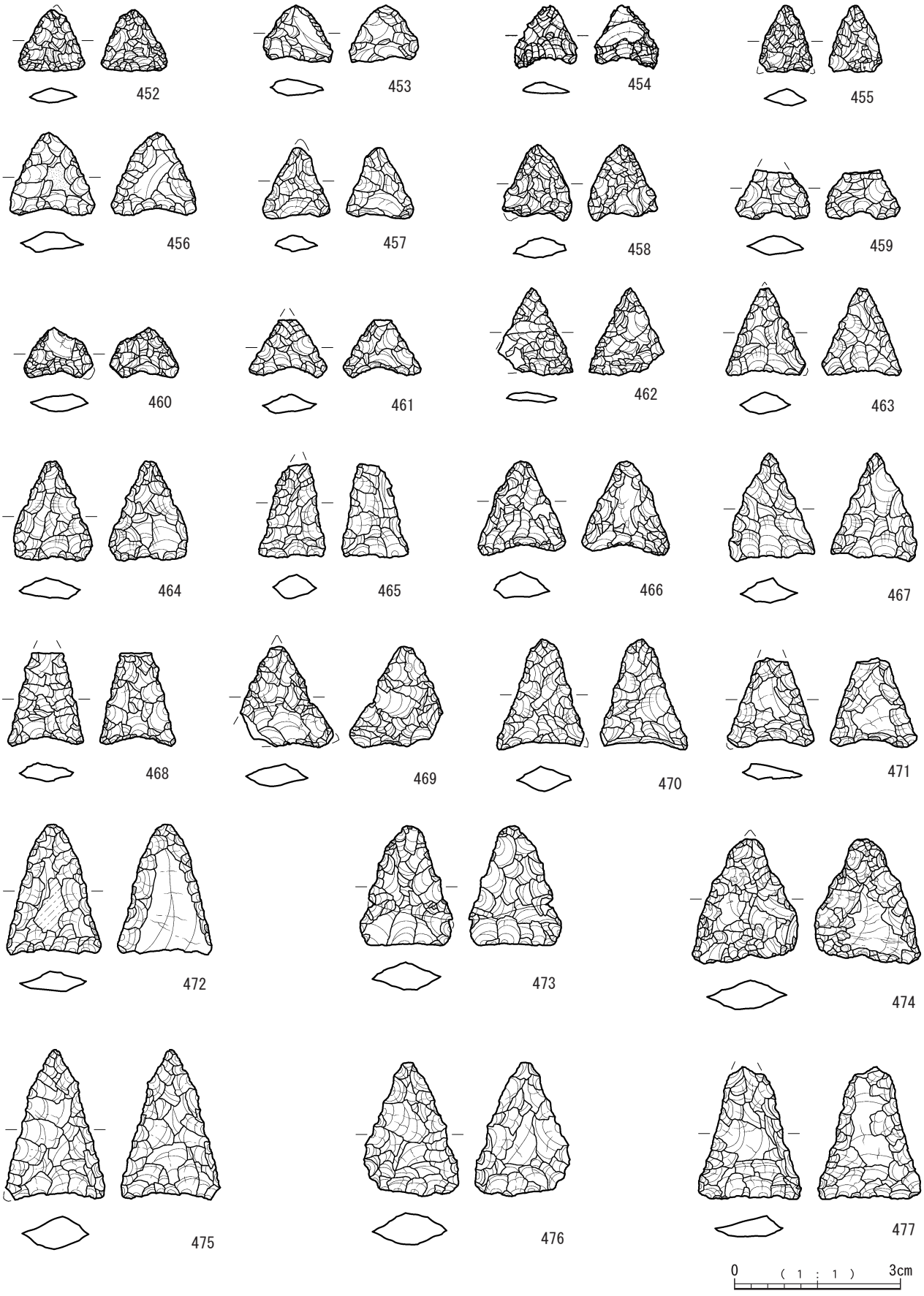
第135図　縄文時代早期　石器出土状況図（１）



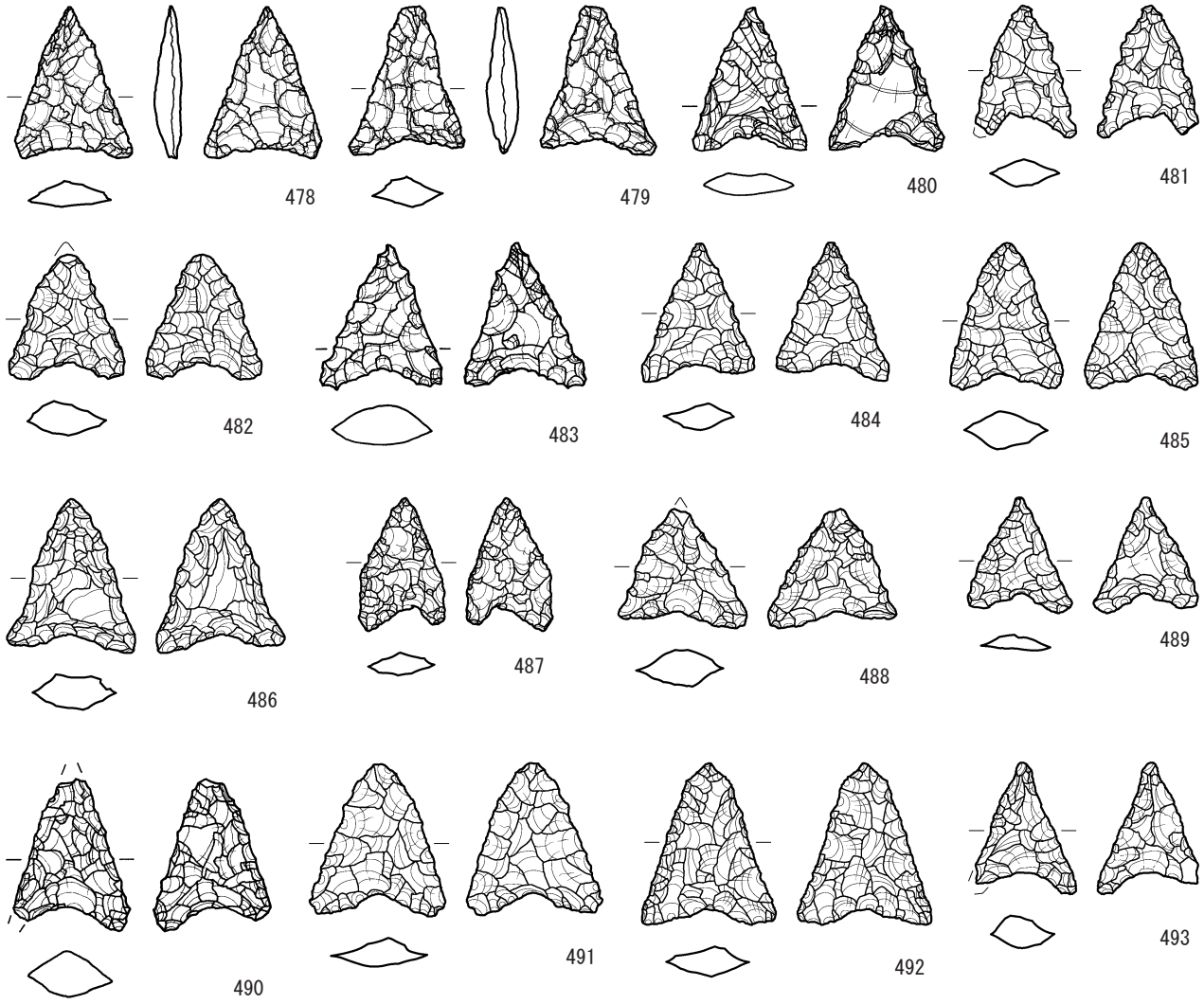
第136図　縄文時代早期　石器出土状況図（２）



第137図　縄文時代早期　石器出土状況図（３）


452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
0
(1 : 1)
3cm

第 138 図　石鏃 I 類



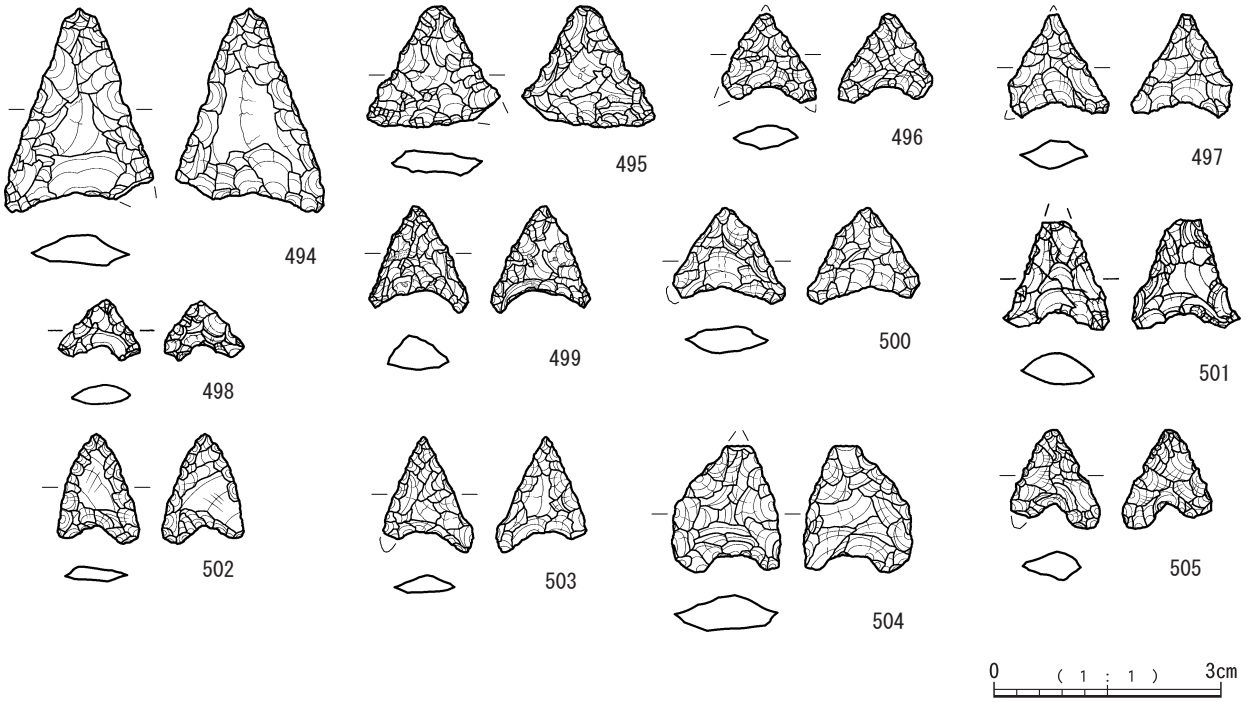
第139図　石鏃Ⅱ類（1）

も姫島産黒曜石のやや丸みを帯びた尖頭部を持つ石鏃である。486は安山岩の完形の二等辺三角形鏃である。487は桑ノ木津留産黒曜石の完形品である。488は姫島産黒曜石のやや扁平な石鏃で，先端を欠く。489は安山岩の完形の二等辺三角形鏃で先端が突出する。490は針尾産黒曜石の身が厚い二等辺三角形鏃で，先端と片脚端を欠く。491は安山岩のやや丸い尖頭部の石鏃である。492は姫島産黒曜石の先端部が圭頭形をなす。493は安山岩の石鏃で，片脚を欠く。494は安山岩の石鏃で，片脚は新しい欠損である。495は桑ノ木津留産黒曜石の腹面に主要剥離面を残す剥片鏃である。496は姫島産黒曜石の小型鏃で，先端と両脚端を欠く。497も姫島産黒曜石の小型鏃で，先端と片脚端を欠く。498は腰岳産黒曜石の小型鏃である。499は正三角形に近い腰岳産黒曜石の石鏃である。500は扁平な安山岩の石鏃で，片脚端を欠く。501は針尾産黒曜石の石鏃で，先端を欠く。502は姫島産黒曜石のやや丸みがある尖頭部で剥片形状が残る。503は安山岩で片脚を欠く。504は安山岩の丸みを帯びた形状の石鏃で，先端部を欠く。

石鏃Ⅲ類（第140・141図　505～520）

「U」字状の深い抉りを持ち，脚端部が方形や円形を呈し幅広のもので，先端部は尖る傾向にある。

505は水晶の脚部が丸い小型鏃で，片脚を欠く。506は三船産黒曜石の石鏃で，脚部が方形をなす。507は安山岩の石鏃で，脚部が方形をなす。508は玉髄の脚部が丸い石鏃である。509は針尾産黒曜石の脚部が方形をなす石鏃である。510はチャートのやや扁平で脚部が長く丸い石鏃である。511は針尾産黒曜石で，脚部が方形をなす石鏃である。先端を欠く。512は針尾産黒曜石の尖頭部が長い石鏃で，脚端部は方形となる。513は安山岩の尖頭部が長い石鏃で，脚端部は方形となる。片脚端を欠く。514は安山岩の尖頭部が長い石鏃で，脚端部は方形となる。片脚端を欠く。515は水晶の尖頭部が長い石



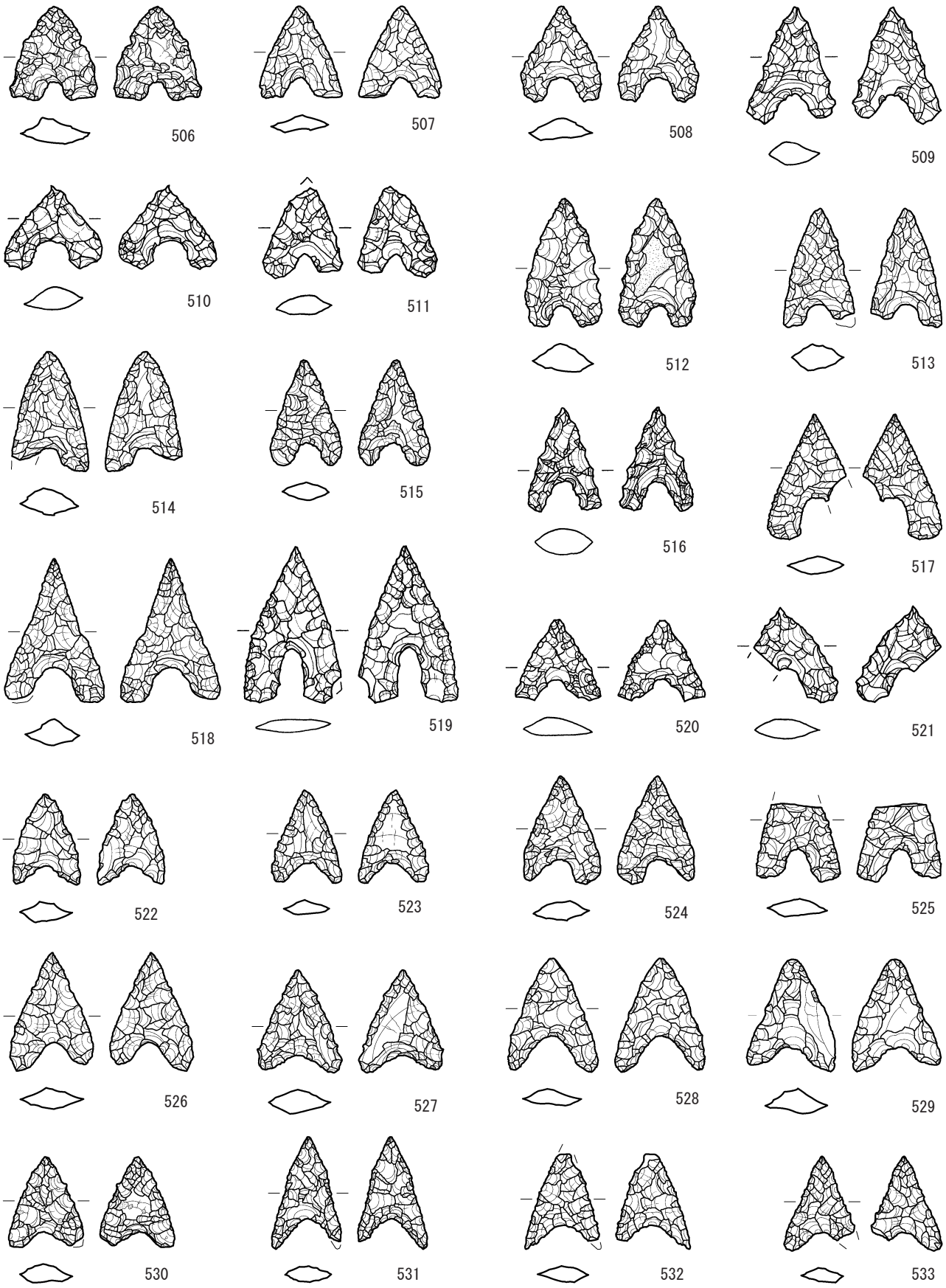
第 140 図　石鏃Ⅱ類（２）・Ⅲ類（１）

鏃で，脚端部は丸い。516 は針尾産黒曜石の脚の長い石鏃で，脚端部はやや細い方形である。517 はチャートの脚の長い石鏃で，脚端部はやや丸い。片脚を欠く。518 は赤色頁岩の鋭角に尖る石鏃で，脚端部は丸い。519 はチャートの薄い大型の石鏃で，脚が長く脚端部は方形である。片脚の一部を欠く。520 は腰岳産黒曜石の脚がややひらいた石鏃で，脚端部は方形である。

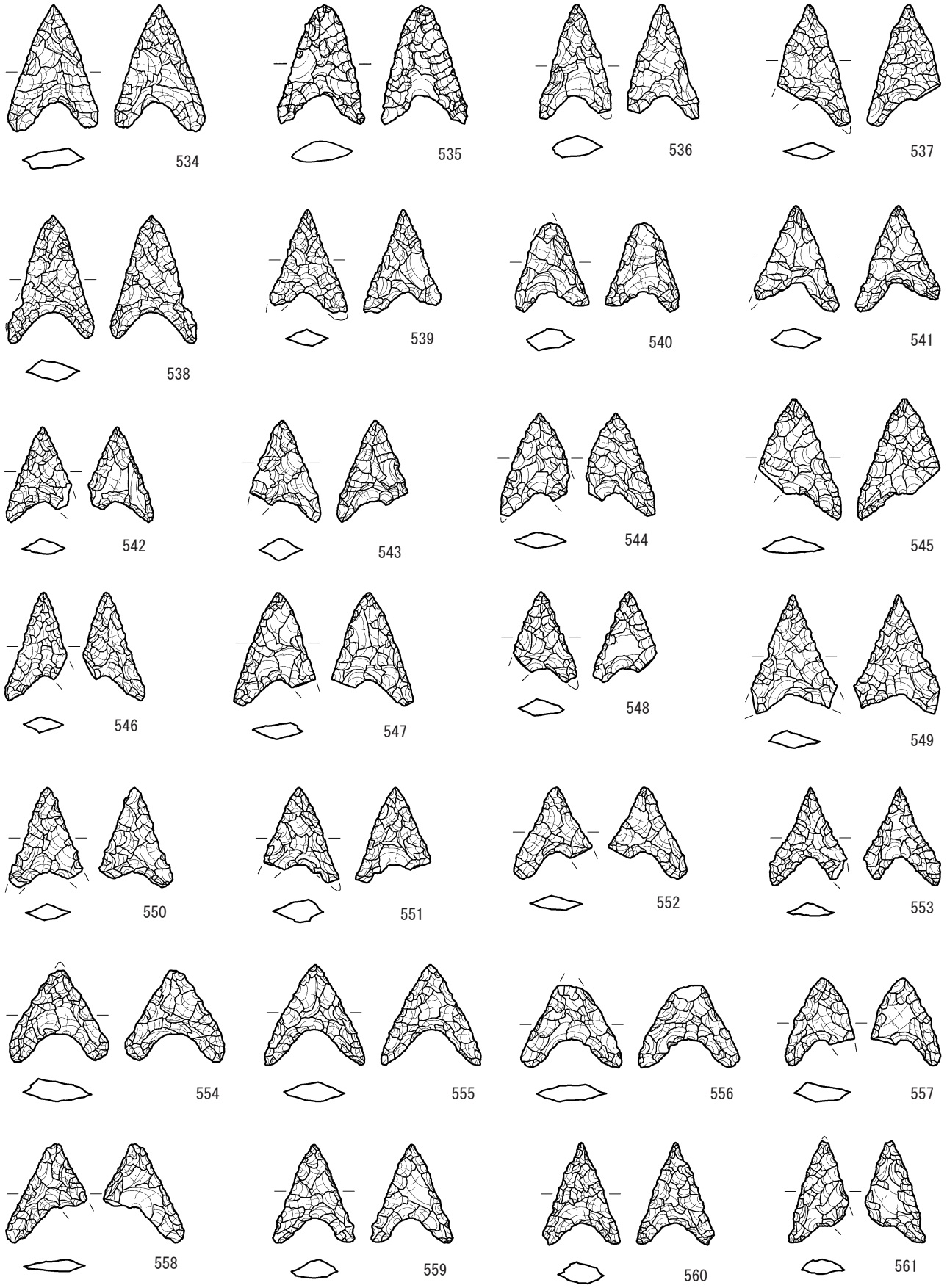
石鏃Ⅳ類（第 141 ～ 143 図　521 ～ 571）

「U」字が緩み，円弧の開いた抉りとなり，Ⅲ類と比べると脚端部が細くなり，尖るようになる。形状は二等辺三角形を呈す。

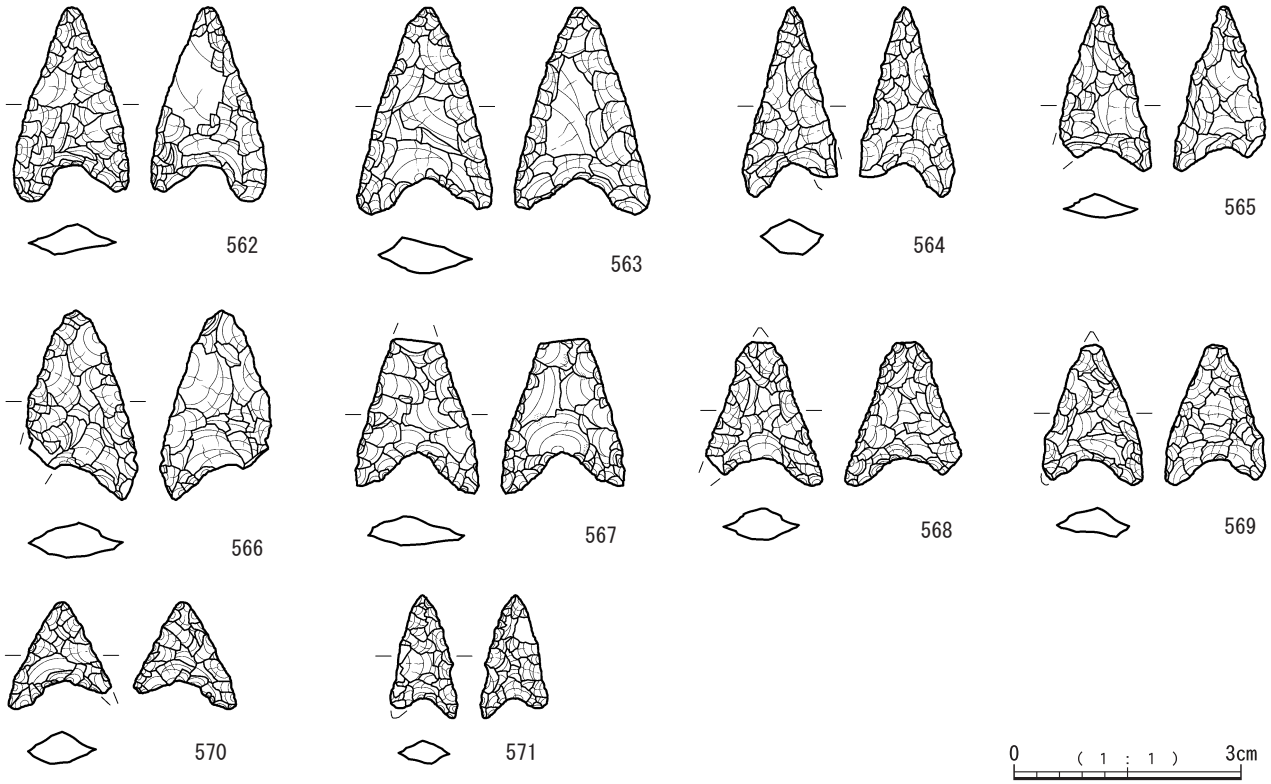
521 は針尾産黒曜石の抉りが深く脚が長い石鏃で，脚端部は丸くなる。522 は珪質頁岩，523 は安山岩を石材とし，両者ともに主要剥離面が残る。524 は安山岩の石鏃で，脚端部は片方が方形で，片方が尖る。525 は玉髄の脚部が方形をなす石鏃で，尖頭部を欠く。526 は姫島産黒曜石の石鏃で，脚端部は丸い。527，528 は安山岩の石鏃で，528 は抉りが深く風化が著しい。脚端部は尖る。529 は珪質頁岩の石鏃で，剥片形状を残す。脚端部は尖る。530 は三船産黒曜石の石鏃で，主要剥離面が残り，片脚端部をわずかに欠く。531 は桑ノ木津留産黒曜石の脚端部の尖る石鏃で，尖頭部が圭頭状となり，片脚の先端をわずかに欠く。脚端部は尖る。532 は安山岩の脚端部の尖る石鏃で，先端と片脚端を欠く。533 は姫島産黒曜石の石鏃で，脚端部はやや丸く，片脚を欠く。534 は安山岩の石鏃で，腹面に主要剥離面が一部残り，先端が尖り脚端部はやや丸い。535 は腰岳産黒曜石の石鏃で，脚端部が尖る。536 ～ 538 は安山岩の石鏃で，いずれも尖頭部が長く，脚端部が尖る。537 は先端が尖る。536 は片脚端部を，537 は片脚部ともう一方の脚端部，538 は脚部の外縁の一部を欠く。539 は姫島産黒曜石の石鏃で，両脚端部を欠く。540 は安山岩の石鏃で，先端部を欠く。541 は珪質頁岩の石鏃で，片脚端部をわずかに欠く。542 は安山岩の石鏃で，主要剥離面が残り，片脚部を欠く。543 は針尾産黒曜石の石鏃で，片脚部を欠く。544 は安山岩の石鏃で，片脚部を欠く。545 は姫島産黒曜石のやや大きな石鏃で，片脚部を欠く。546 は安山岩の石鏃で，片脚部を欠く。547 は安山岩の石鏃で，片脚部を欠く。548 は節理の多いチャートの石鏃で，主要剥離面が残り，片脚部ともう一方の脚端部を欠く。549 は安山岩の先端の鋭い石鏃で，両脚端部を欠く。550 は安山岩の石鏃で，両脚端部を欠く。551 は安山岩の石鏃で，片脚部ともう一方の脚端部を欠く。552 ～ 558 は脚が細く長い石鏃である。552 は刃部が内湾気味の安山岩の石鏃で，片脚部を欠く。553 も刃部が内湾する針尾産黒曜石の石鏃で，片脚を欠く。554 はやや扁平な安山岩の石鏃で，先端をわずかに欠く。555，556 はやや扁平で脚が長い安山岩の石鏃である。556 は先端部を欠く。557 ～ 560 は安山岩の石鏃で，557，558 は片脚を欠く。559 は，主要剥離面が残る。560 は先端が突出する。561 は脚部端が外反する珪質頁岩製石鏃で，片脚を欠く。562 ～ 569 はやや大型の尖頭部が長い石鏃で，567 が姫島産黒曜石の他は安山岩製石鏃である。562，564 はやや黒色の強い安山岩である。564，



第 141 図　石鏃Ⅲ類（２）・Ⅳ類（１）


534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
0
(1 : 1)
3cm

第142図　石鏃Ⅳ類（２）



第143図　石鏃Ⅳ類（３）

565，566はそれぞれ片脚を欠く。568，569は先端と片脚を欠く。570は安山岩の脚がひらいた石鏃で，脚端部は尖るようになる。片脚端をわずかに欠く。571は安山岩の尖頭部が長い石鏃で，片脚部を欠く。

石鏃Ⅴ類（第144図　572～597）

抉りが浅く，直線的で「へ」の字状を呈す。脚端部は鋭角で尖ることが多い。

572は姫島産黒曜石の石鏃で，身が厚い。573は安山岩製の石鏃で，片脚端を欠く。574～576は珪質頁岩の石鏃で，完形品である。576は先端が尖る。576～581は先端が尖出する一群である。577は姫島産黒曜石の石鏃で両脚端を欠く。578は安山岩の石鏃で，片脚端を欠く。579は珪質頁岩の石鏃で，片脚端を欠く。580は安山岩の石鏃で，完形品である。581は姫島産黒曜石の石鏃で，両脚の端部を欠く。582は姫島産黒曜石の石鏃で，完形品である。583はシルト質頁岩の石鏃で，先端を欠く。584はチャートの石鏃で，身が薄い石鏃である。585は尖頭部がやや丸みをもつ姫島産黒曜石の石鏃で，先端を欠く。586珪質頁岩の石鏃で，先端と両脚端を欠く。587は先が尖る安山岩の石鏃で，片脚を欠く。588は安山岩の石鏃で，主要剥離面を残し，片脚を欠く。589は珪質頁岩の石鏃で，先端を欠く。590はやや扁平な珪質頁岩の石鏃で，片脚を欠く。591は身が厚い安山岩の石鏃である。592は針尾産黒曜石の石鏃で，先端と片脚端を欠く。593は姫島産黒曜石の石鏃で，先端を欠く。594は短い脚部の珪質頁岩の石鏃で，片脚端を欠く。Ⅴ類からは少し外れる。595はやや大型の姫島産黒曜石の石鏃で，先端部を欠く。596は姫島産黒曜石のやや大型の石鏃で，片脚を欠く。597はチャートの完形の二等辺三角形鏃である。

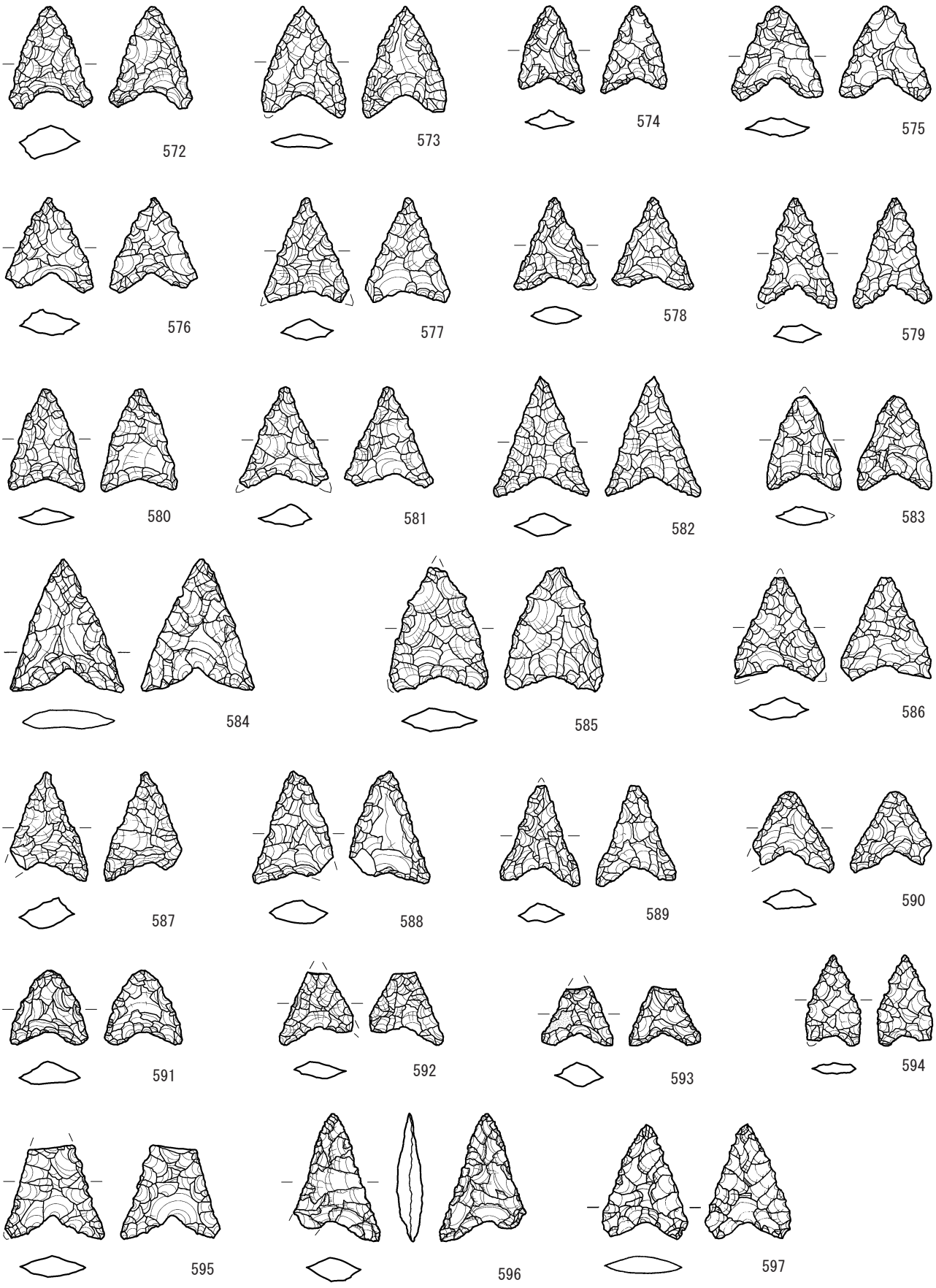
石鏃Ⅵ類（第145図　598～608）

抉りが直線的であるが深いもので，先端部が鋭角に尖り，脚が細く長く尖り，菱の実形状を成すものも見られる。

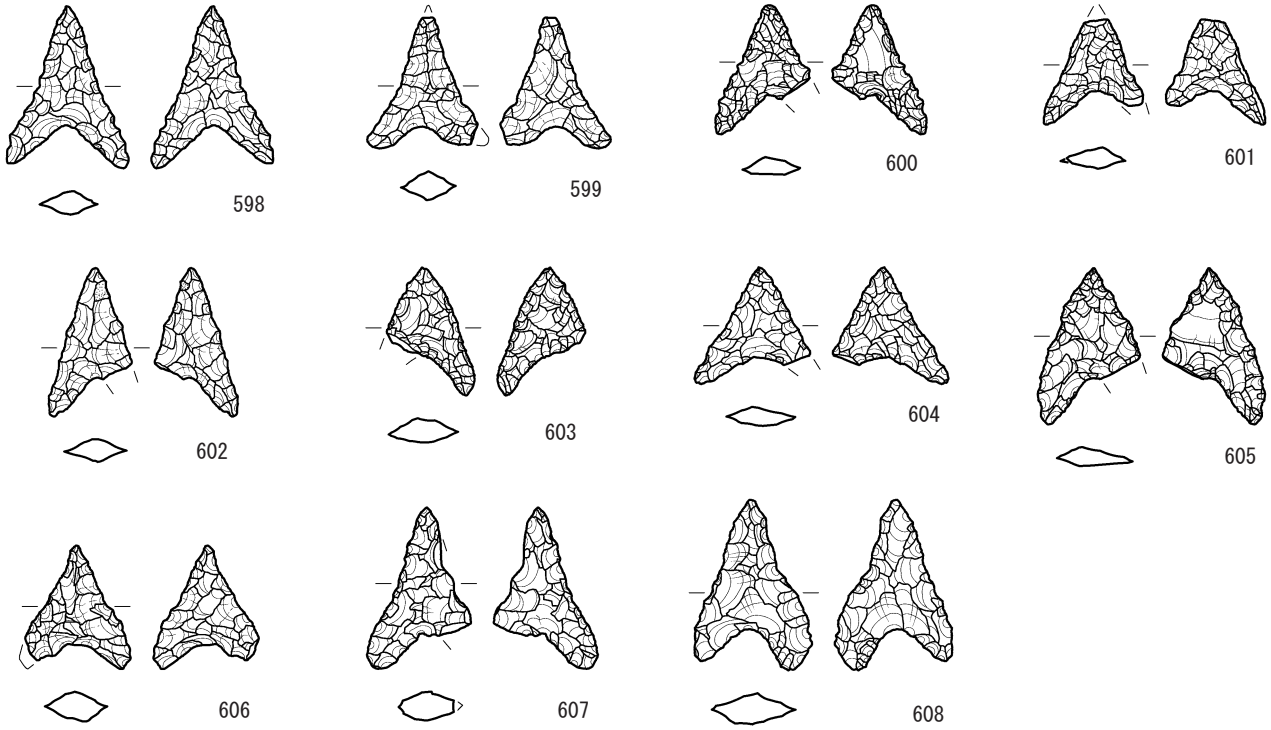
598は安山岩の石鏃で，Ⅵ類の典型とする。599は安山岩の石鏃で，先端と片脚端を欠く。600は腰岳産黒曜石の石鏃で，剥片形状を残し，片脚部を欠く。601は安山岩の石鏃で，先端と片脚端を欠く。602は安山岩の石鏃で，脚部を欠く。603は姫島産黒曜石の石鏃で，片脚部を欠く。604はやや扁平な安山岩の石鏃で，片脚を欠く。605は針尾産黒曜石の石鏃で，片脚を欠く。606は安山岩の石鏃で，片脚端を欠く。607はシルト質頁岩の石鏃で，片脚部と中間部を欠く。608は姫島産黒曜石の石鏃で，片方の脚がやや太い。

石鏃Ⅶ類（第146図　609～626）

尖頭部から基部（脚部）にかかる部分，中間部に大きな


572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
0
(1 : 1)
3cm

第 144 図　石鏃Ⅴ類



第 145 図　石鏃Ⅵ類

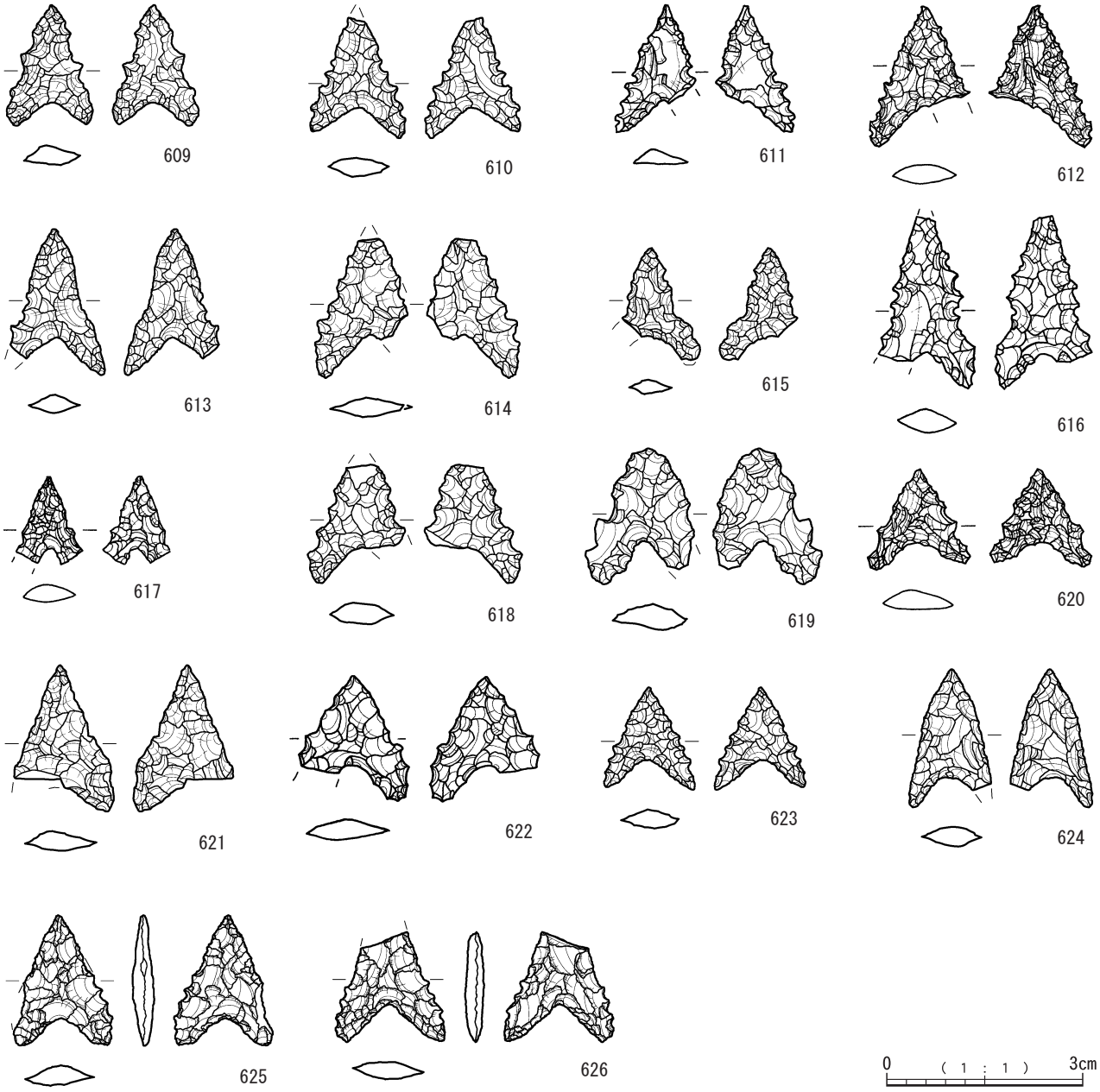
鋸歯状突起をもつもので，それが肩部を形成しているように見える。鋸歯が深い一群である。抉りはやや深いが，Ⅵ類と同様に「へ」の字状に開き，脚が尖る。

609 は安山岩の石鏃で，大きな鋸歯状の突起が 2 対ある。610 は姫島産黒曜石の石鏃で，鋸歯縁が深い。先端を欠く。611 は剥片形状がうかがわれる針尾産黒曜石の石鏃で，鋸歯縁が深く，片脚を欠く。612 は針尾産黒曜石の石鏃で，鋸歯縁が深く，先端も尖る。片脚部を欠く。613 は姫島産黒曜石の石鏃で，尖頭部は鋸歯縁ではないが，脚部に至る肩部が張る。片脚を欠く。614 は肩部が大きく張り出す安山岩の石鏃で，鋸歯縁が深い。先端部と片脚を欠く。615 は肩部が大きく張り出す安山岩の石鏃で，鋸歯縁は強くなく，片脚を欠く。616 はやや大型の針尾産黒曜石の石鏃で，鋸歯縁が深い。先端と片脚を欠く。617 は針尾産黒曜石の石鏃で，両脚を欠く。618 はやや大型の姫島産黒曜石の石鏃で，鋸歯縁が深い。先端と片脚を欠く。619 もやや大型の姫島産黒曜石の石鏃で，鋸歯縁が深い。620 はやや寸詰まりの針尾産黒曜石の石鏃で，肩部に大きな鋸歯状突起がある。621 は安山岩の石鏃で，鋸歯縁は強くないが，肩部が張る。片脚部を欠く。622 は針尾産黒曜石の肩部が張る石鏃で，片脚を欠く。623 は姫島産黒曜石の完形品の石鏃で，鋸歯縁である。624 は安山岩の石鏃で，Ⅶ類でないが，脚の尖ることからここに入れた。片脚を欠く。625 は針尾産黒曜石の石鏃で，左側縁に欠損（ガジリ）がある。626 は安山岩の石鏃で，先端部を欠く。

大型鏃（第 147・148 図　627 ～ 651）

Ⅲ類～Ⅶ類の特徴を有するものが，少量ずつ出土している。

627 は針尾産黒曜石の石鏃で，尖頭部が長い五角形状で抉りが深い。抉りからはⅢ類に近い。628 は安山岩の尖頭部が長い石鏃で，抉りは「U」字状で，脚端部は方形である。Ⅲ類である。629 は尖頭部が三角形に鋭く尖るチャートの石鏃で，両脚を欠くが，抉りの形状からⅢ類の可能性が高い。630 ～ 633，635 は，同じ形の脚端をなす。Ⅶ類の 614，616 の脚端部に類似しており，どちらかと言えばⅦ類に近い可能性がある。630 は姫島産黒曜石の扁平な形の石鏃で，完形品である。631 は姫島産黒曜石の石鏃で，先端部と片脚を欠く。632 はチャートの石鏃で，先端と片脚端を欠く。633 は安山岩の石鏃で，先端と両脚端を欠く。634 はチャートの石鏃で，抉りが深く，脚端部が丸く，Ⅲ類であろう。先端をわずかに欠く。635 は針尾産黒曜石の石鏃で，片脚を欠く。636 は安山岩の石鏃，両脚を欠くが，肩部に出っ張りがありⅦ類の可能性がある。637 は細身の長い先端部の姫島産黒曜石の石鏃で，片脚ともう一方の脚端を欠く。Ⅴ類の可能性がある。638 も身の長い安山岩の石鏃で，片脚を欠く。Ⅴ類の可能性がある。639 は身の長い姫島産黒曜石の石鏃で，完形品である。脚が短く外反し，Ⅴ類であろう。640 は安



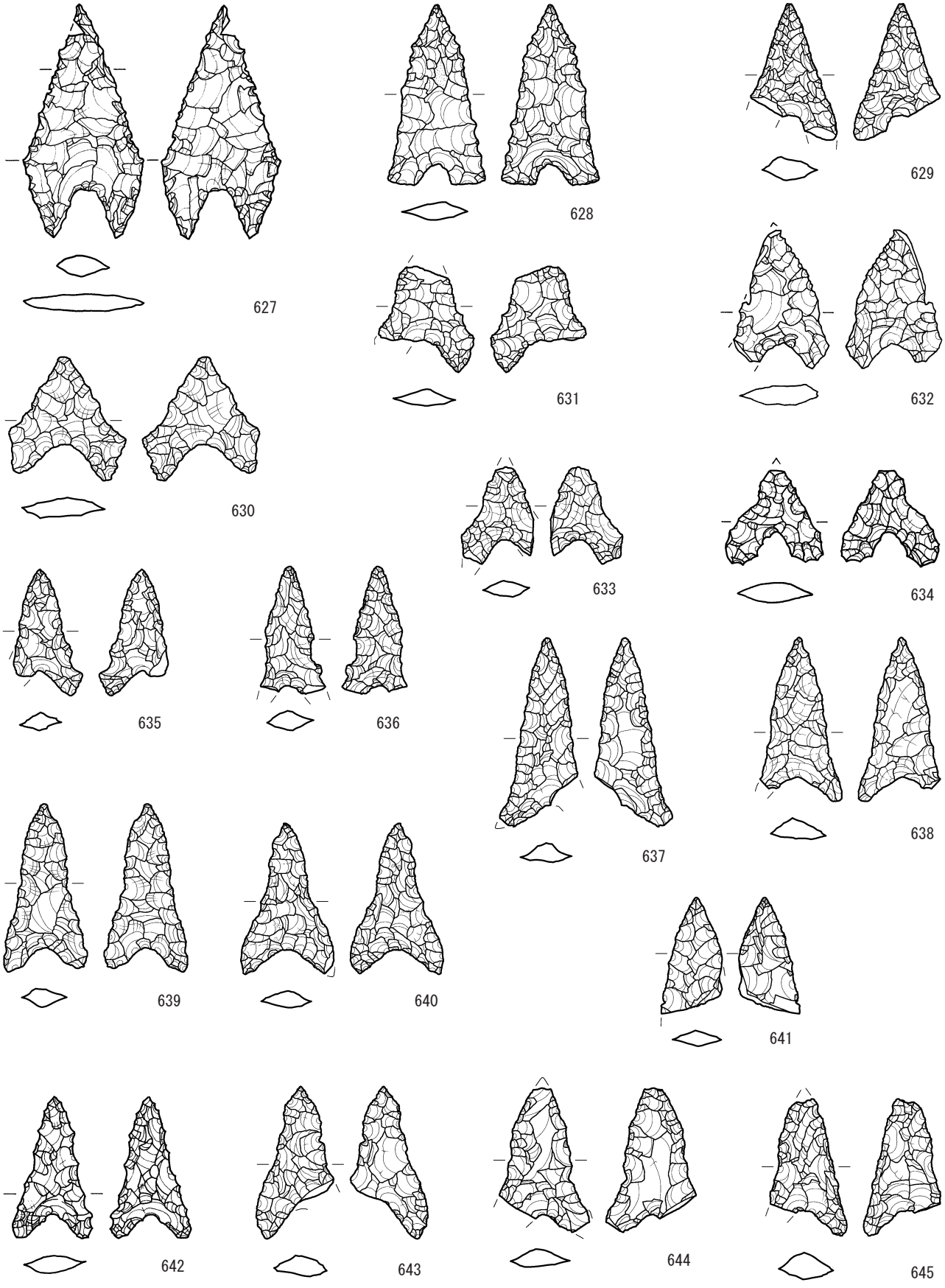
第 146 図　石鏃Ⅶ類

山岩の石鏃で，片脚端を欠く。どちらかというとⅥ類に近似する。641 は玉髄の石鏃で，先頭部だけである。642 は針尾産黒曜石の身の長い石鏃で，完形品である。Ⅳ類に近い。643 は姫島産黒曜石の石鏃で，片脚を欠く。640 と同様に，どちらかというとⅥ類に近似する。644 は姫島産黒曜石の石鏃で，先端と両脚部を欠く。645 は珪質頁岩の石鏃で，先端と片脚部を欠く。Ⅴ類に含まれる可能性がある。646 は安山岩の石鏃で，先端と片脚端を欠く。Ⅳ類であろう。647 は安山岩の石鏃で，片脚端を欠く。646 と同じくⅣ類であろう。648 は針尾産黒曜石の鋸歯縁の石鏃で，片脚を欠く。Ⅶ類である。649 は針尾産黒曜石の石鏃で，やや深い抉りで脚はやや幅広だが尖り，Ⅶ類と考えられる。650 はシルト質頁岩の石鏃で，抉りが浅く，脚が尖る。Ⅴ類の可能性がある。651 は姫島産黒曜石の石鏃で，先端と両脚を欠く。類別はできない。

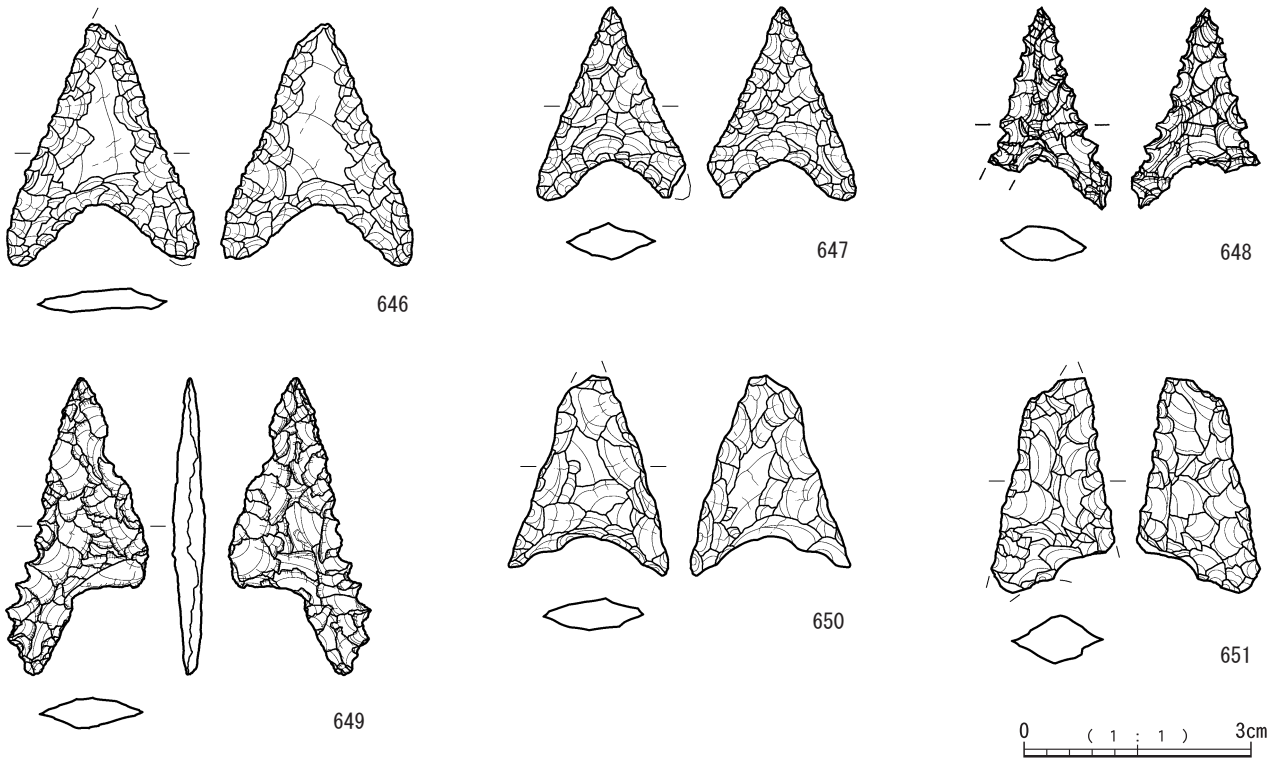
欠損品と未製品

ほぼ剥離で完形に近く形が整いながら，先端や脚部を欠くものを欠損品とした。使用による欠損の場合と，製作の最終工程での欠損が考えられる。

未製品は，背面や腹面に主要剥離面を含む大きな剥離面が残り，周縁調整が行われて整形段階にあるものを未


627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
0
(1 : 1)
3cm

第147図　大型鏃（１）



第148図　大型鏃（２）

製品とした。

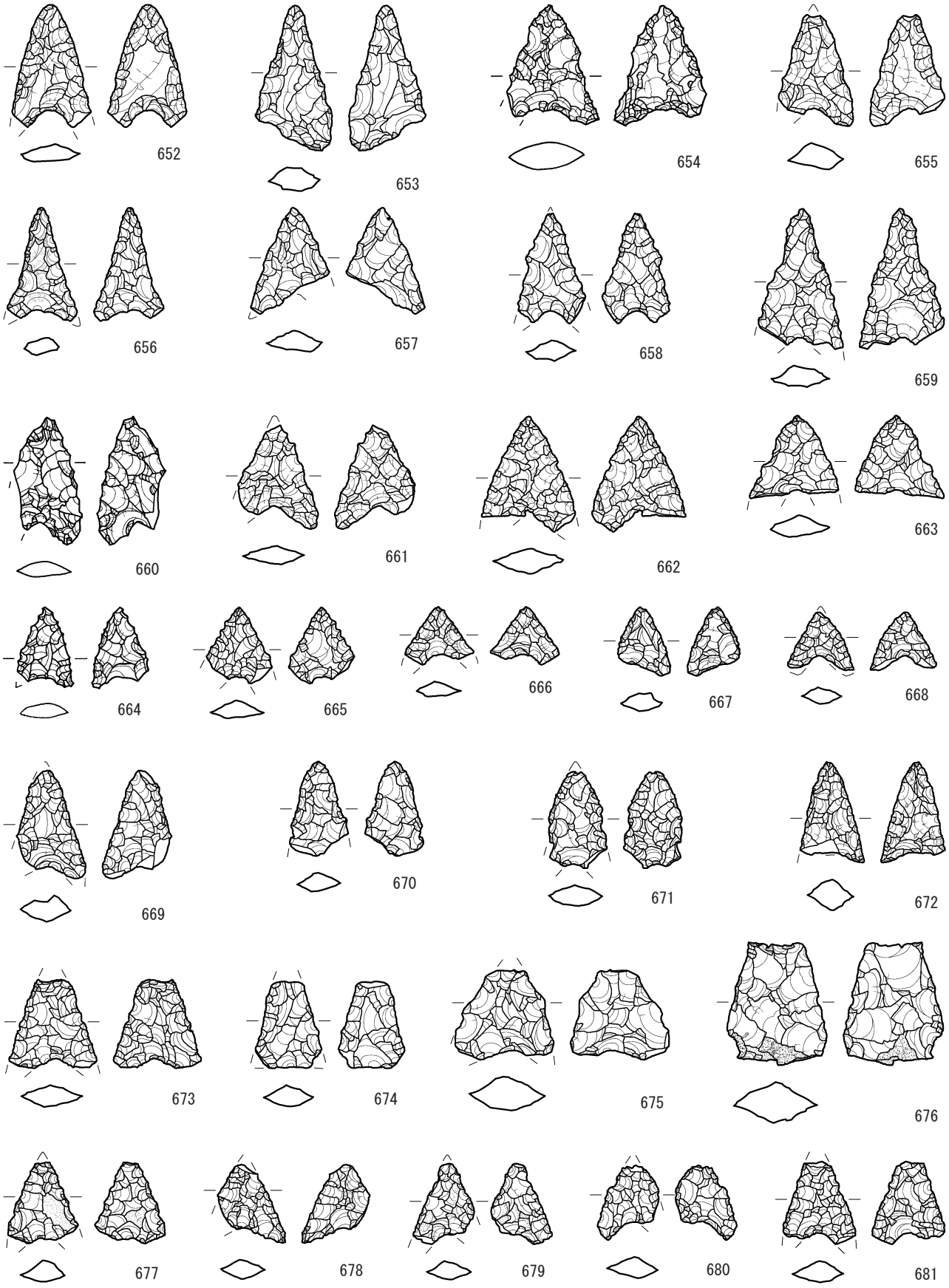
涙滴状の形状の縦長剥片を，周縁から整形剥離し，尖頭部を先に整形して，脚部の作りだし（抉りを入れる）を行っている。概ねの形状が整ったら，丁寧な押圧剥離で仕上げていく。

石鏃欠損品（第 149 図　652 ～ 681）

652 は安山岩の石鏃で，主要剥離面が残るものの完成度が高い。両脚を欠損している。653 は安山岩の周縁が整形剥離され，未製品の可能性もある。片脚を大きく欠損する。654 は腰岳産黒曜石の石鏃で，片脚端部を欠損する。655 は安山岩の石鏃で，先端と片脚部を欠く。656 は姫島産黒曜石の石鏃で，両脚端部を欠く。657 は安山岩の石鏃で，片脚部と残りの脚の脚端部を欠く。658 は姫島産黒曜石の石鏃で，わずかに先端と両脚を欠く。659 は姫島産黒曜石の石鏃で，両脚部を欠く。660 は針尾産黒曜石の石鏃で，大きく片脚部を欠く。661 は安山岩の石鏃で，先端と片脚部を欠く。662 は三船産黒曜石の石鏃で，三角形の精緻な先頭部に，両脚部を欠く。663 は姫島産黒曜石のやや扁平な石鏃と考えられ，両脚部を欠く。664 は針尾産黒曜石の小型の石鏃で，片脚を欠く。665 は白色チャートの小型の石鏃で，両脚を欠く。666 は姫島産黒曜石の小型の石鏃で，両脚端を欠く。667 は安山岩の小型の石鏃で，片脚を欠く。668 は玉髄の小型の石鏃で，先端と両脚端部を欠く。664，666 ～ 668 は，石坂式土器に伴ってみられる小型鏃であろう。669 は姫島産黒曜石の石鏃で，先端と両脚部を欠く。670 は珪質頁岩の石鏃で，両脚部を欠く。671 は姫島産黒曜石の石鏃で，先端と両脚を欠く。672 は三船産黒曜石の抉りの浅い石鏃で，片脚を欠く。673 は姫島産黒曜石の石鏃で，先端部と両脚を欠く。674 は安山岩の石鏃で，先端部と両脚を欠く。675 は珪質頁岩の石鏃で，先端部と両脚端を欠く。676 は玉髄の石鏃で，尖頭部を欠く大久保型石鏃の脚部である。677 は姫島産黒曜石の石鏃で，先端と両脚を欠く。678 は桑ノ木津留産黒曜石の石鏃で，先端と片脚部を欠く。679 は珪質頁岩の石鏃で，先端と両脚を欠く。680 は姫島産黒曜石の石鏃で，先端と片脚部を欠く。681 は姫島産黒曜石の石鏃で，先端と両脚を欠く。

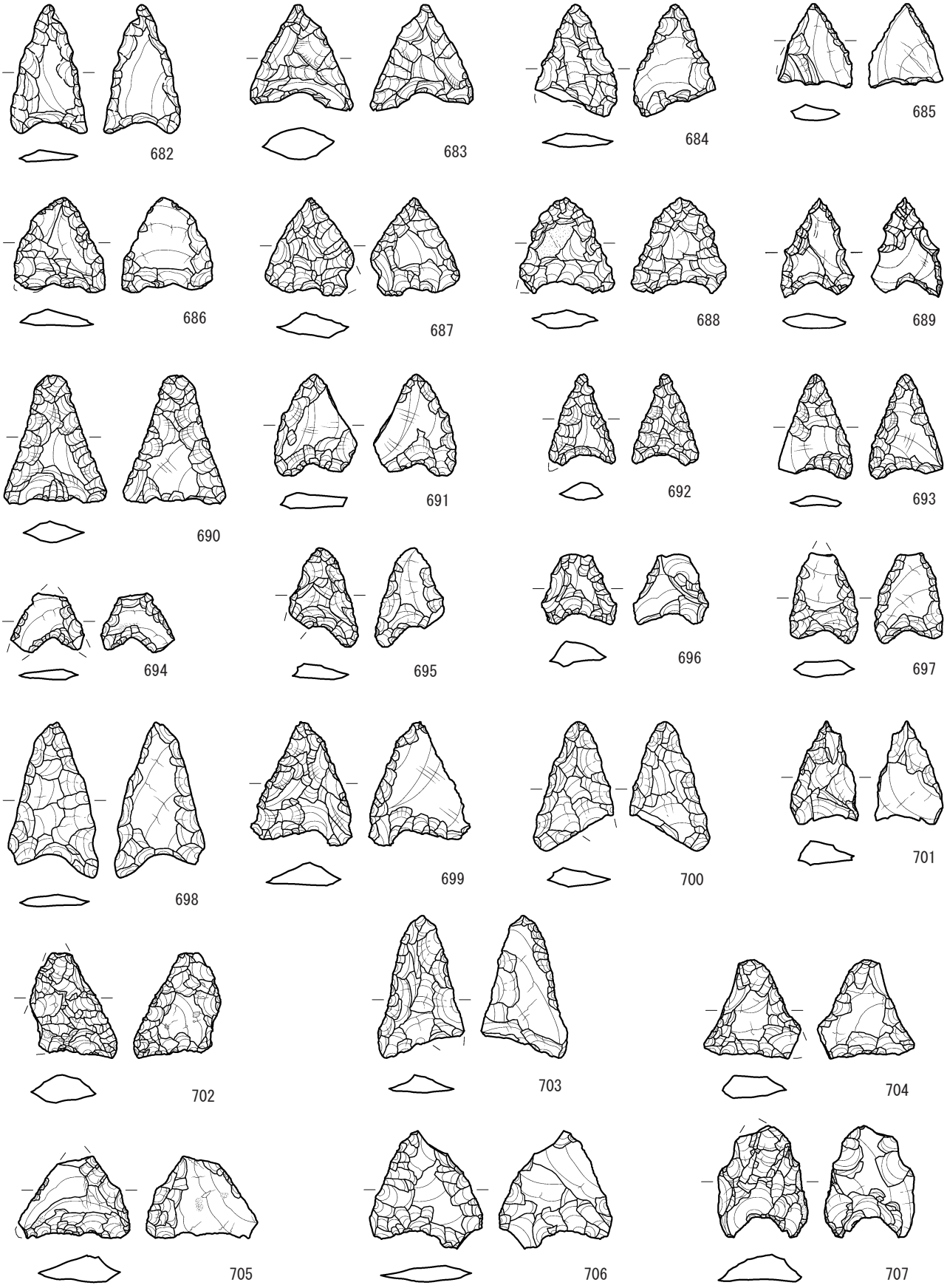
石鏃未製品（第 150・151 図　682 ～ 713）

682 はホルンフェルスの石鏃未製品で，剥片形状が残るが風化が激しく周縁調整は明確でない。683 は姫島産黒曜石の石鏃未製品で，整形剥離が終わった段階のものと考えられる。684 は安山岩の石鏃未製品で，腹面に主要剥離面が残り，厚みがあり平坦剥離が十分になされていない。脚部を欠く。685 は安山岩の石鏃未製品で，目的剥片を折断し，片側側縁を整形したものと考えられる。686 は安山岩の石鏃未製品で剥片が整形剥離される。687 は姫島産黒曜石の石鏃未製品で，厚みがあり腹面に主要剥離面が残る。片脚部がやや欠損した。688 は珪質頁岩の

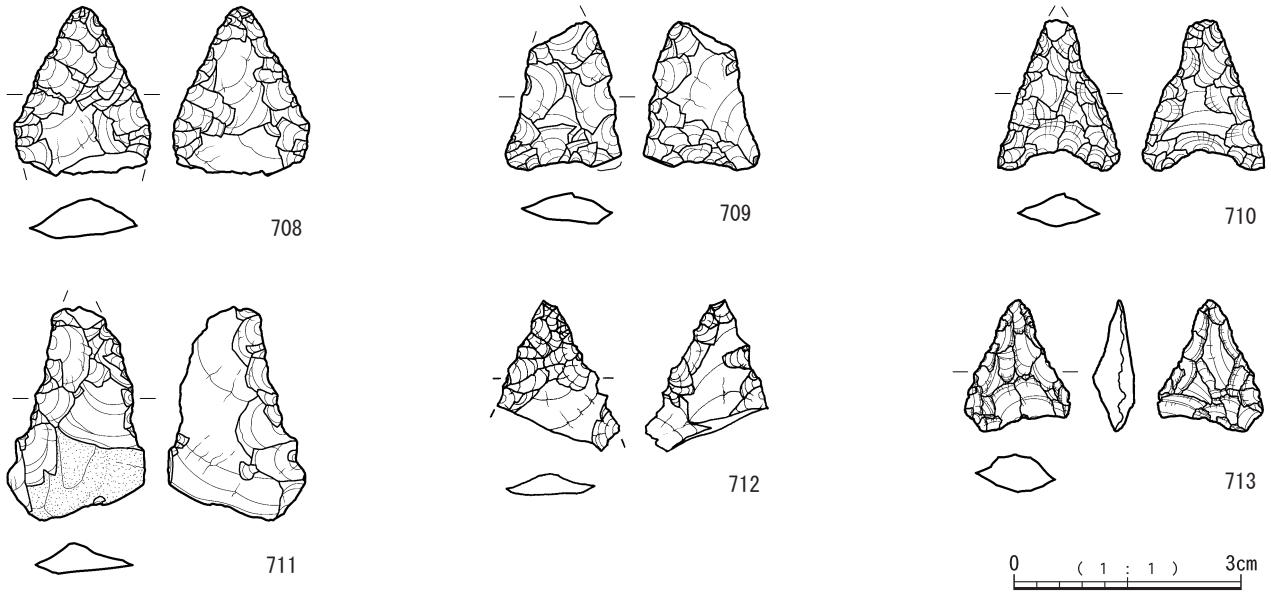


第 149 図　石鏃欠損品

0　(1 : 1)　3cm



第150図　石鏃未製品（１）



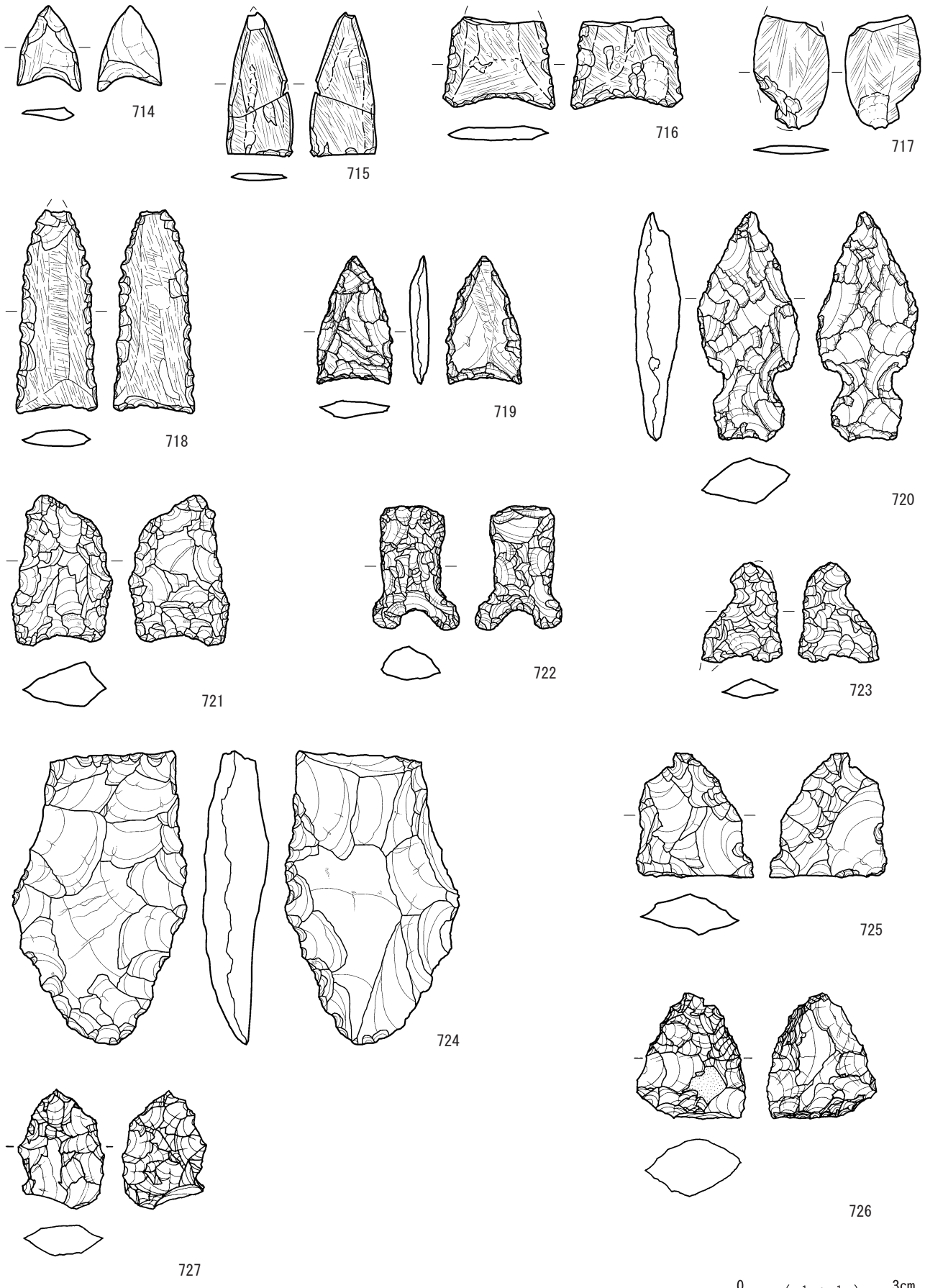
第 151 図　石鏃未製品（２）

石鏃未製品で，背面に礫皮と腹面に主要剥離面が残る。整形剥離から平坦剥離に移った段階であろうか。689 は針尾産黒曜石の石鏃未製品で，剥片形状をよく残す。整形段階のものである。690 は姫島産黒曜石の石鏃未製品で，三角形状に整形されている。691 は姫島産黒曜石の石鏃未製品で，剥片形状をよく残す整形段階のものであろう。692 は姫島産黒曜石の石鏃未製品で，ほぼ完成した状態で，片脚端部を欠く。693 は姫島産黒曜石の石鏃未製品で，三角形状に整形されている。剥片形状をよく残す。694 は姫島産黒曜石の小型の石鏃未製品で，整形剥離の段階で，欠損したものである。先端と両脚を欠く。695 は安山岩の石鏃未製品で，腹面に主要剥離面が残り，片脚部を欠く。696 は姫島産黒曜石の石鏃未製品で，整形段階で先端部を欠いて，廃棄されたものと考えられる。697 は安山岩の石鏃未製品で，整形段階で先端部を欠いた。剥片形状をよく残す。698 はホルンフェルスの石鏃未製品で，682 と同様に表面の風化が激しいが，整形剥離がうかがわれる。699 は姫島産黒曜石の石鏃未製品で，整形された段階のものであろう。700 はシルト質頁岩の石鏃未製品で，表面の風化がはげしい。片脚部を欠く。701 は安山岩の石鏃未製品で，剥片形状が残り整形途中のものである。702 は上牛鼻産黒曜石の石鏃未製品で，身が厚い。先端と片脚部を欠く。703 は安山岩の大型の石鏃未製品と考えられ，腹面に主要剥離面が残る。整形が終わった段階ではなかろうか。704 は安山岩の石鏃未製品で，整形剥離が終了したものである。剥片形状をよく残す。705 は安山岩の石鏃未製品で，整形剥離時に先端部が欠損して廃棄されたもので，剥片形状をよく残す。706 は姫島産黒曜石の石鏃未製品で，整形途中のものと考えられる。剥片形状をよく残す。707 は針尾産黒曜石の石鏃未製品で，708 は安山岩の石鏃未製品で，整形剥離の途中のもので，先端部が欠けたために廃棄されたものとも考えられる。709 はシルト質頁岩の石鏃未製品で，710 は姫島産黒曜石の石鏃未製品で，711 は珪質頁岩の石鏃未製品であり，厚みのある方の側縁から整形剥離しており，石鏃未製品としておく。712 は玉髄の石鏃未製品で，剥片形状をよく残す。713 は安山岩の石鏃未製品で大まかな整形剥離を行って三角形状に整えている。

磨製石鏃・異形石器・尖頭器（第 152 図　714 ～ 727）

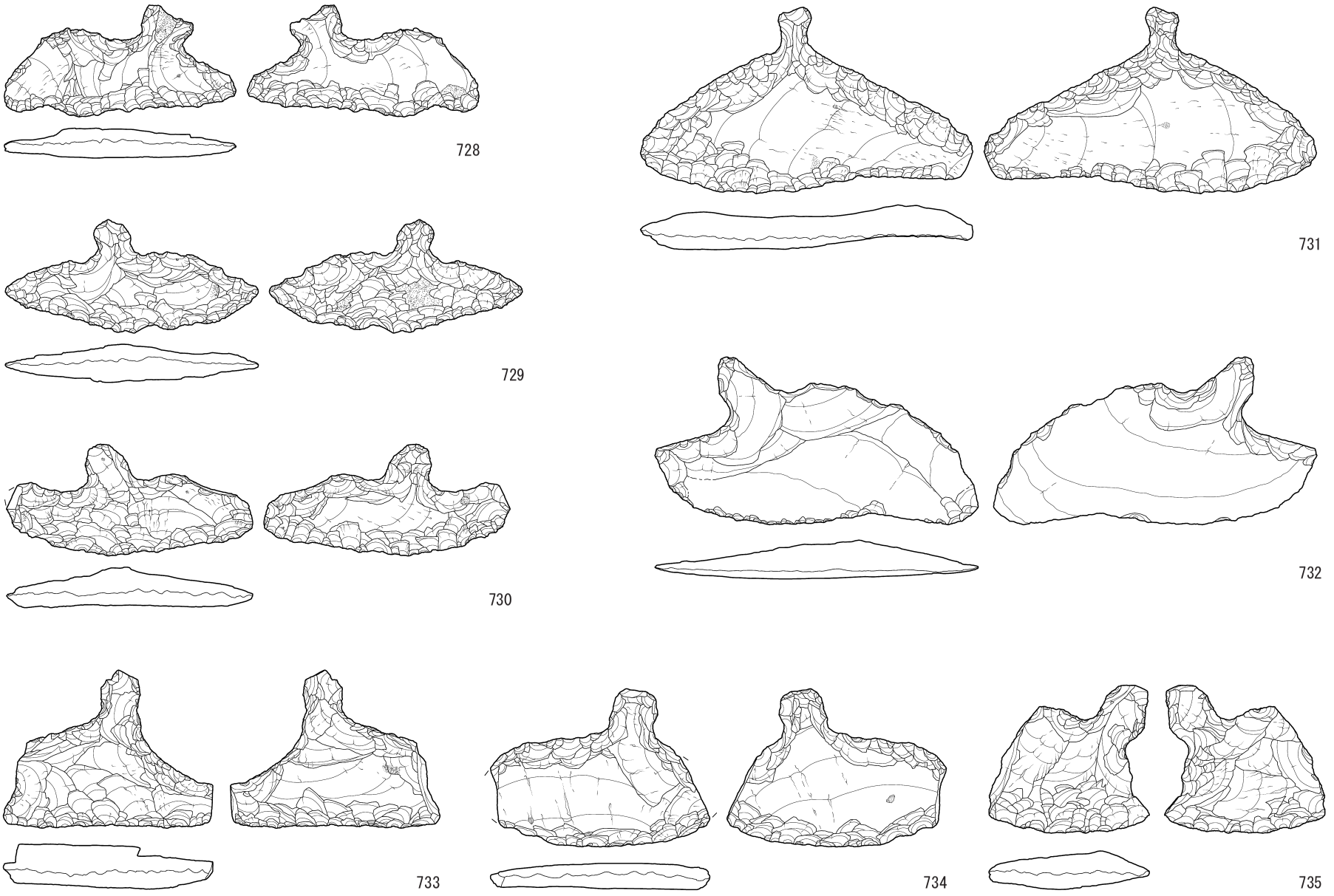
714 ～ 719 は磨製石鏃である。石材は 718 までは頁岩系のホルンフェルスである。714 は，短身広形の磨製石鏃で表面の風化が著しいが，周縁の整形剥離が研磨により一面となっている。尖った脚部も研磨で形成している。715 は長身細形の磨製石鏃で，違う地点から分かれて出土したものが接合されたものである。底面まで研磨される。716 は長身広形の可能性があるが，長身細形の磨製石鏃とする。周縁に鋸歯状の刃部を意識している。717 も長身細形の磨製石鏃であろう。先端部と側縁部を欠く。718 は磨製石鏃で，周縁部の鋸歯部分を残して，両面を研磨している。先端部を欠く。「鬼ケ野型尖頭器」と言われるものである。このグリッドではⅨ類土器のブロックが存在するので，この土器に伴っている可能性が高い。719 は赤色頁岩の長身細形の磨製石鏃で，周縁部の鋸歯を残すように研磨する途中のものと思われる。720 は安山岩の基部に抉りを持つ尖頭器で，左右両側から抉りが入れられる。

721 ～ 723 は異形石器である。721 は安山岩の浅い抉りを持つ石器で，先端は左側に尖頭部が偏っている。使用方法・器種が不明で異形石器とする。722 は，腰岳産

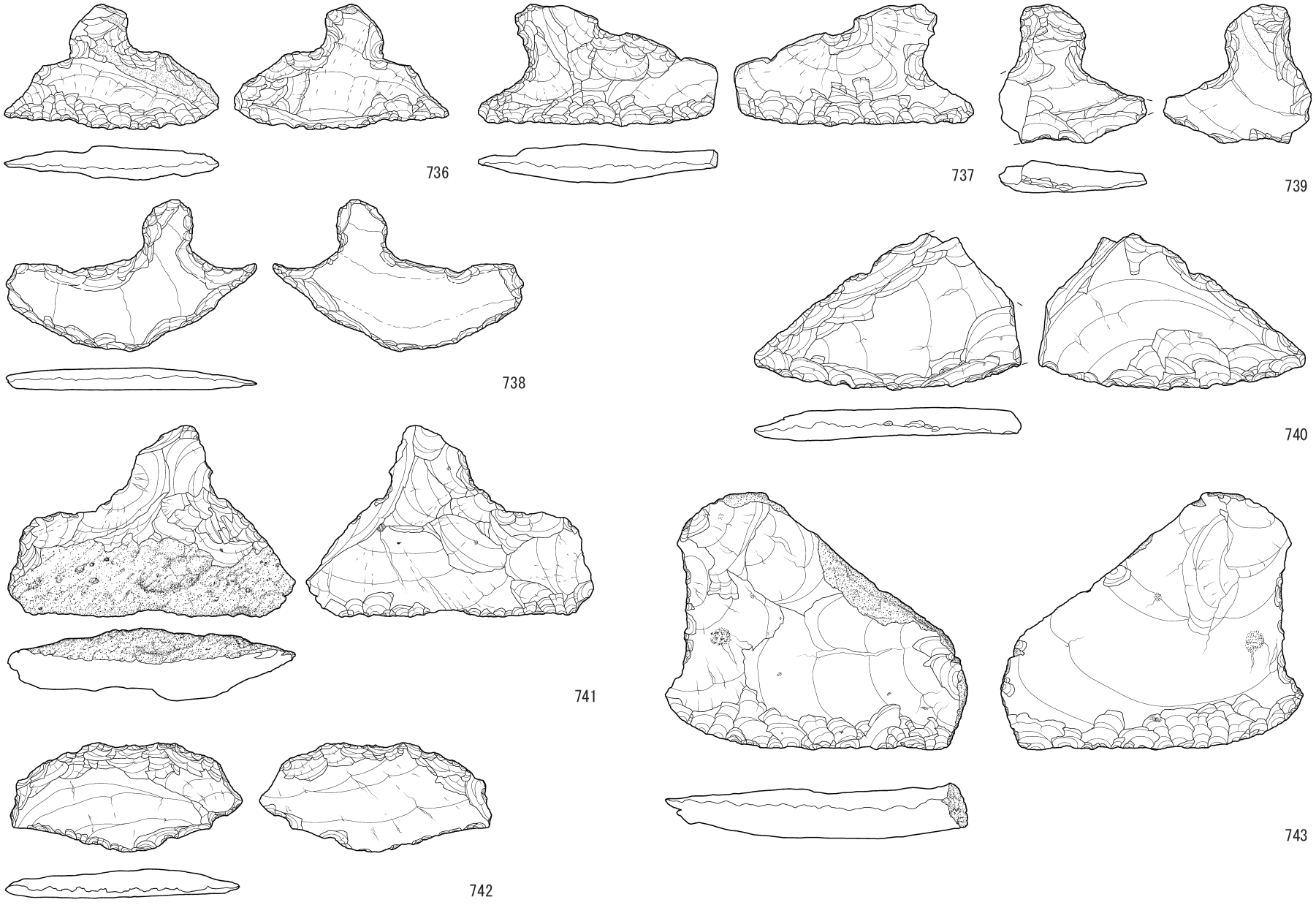


第 152 図　磨製石鏃・異形石器・尖頭器

0　(1 : 1)　3cm

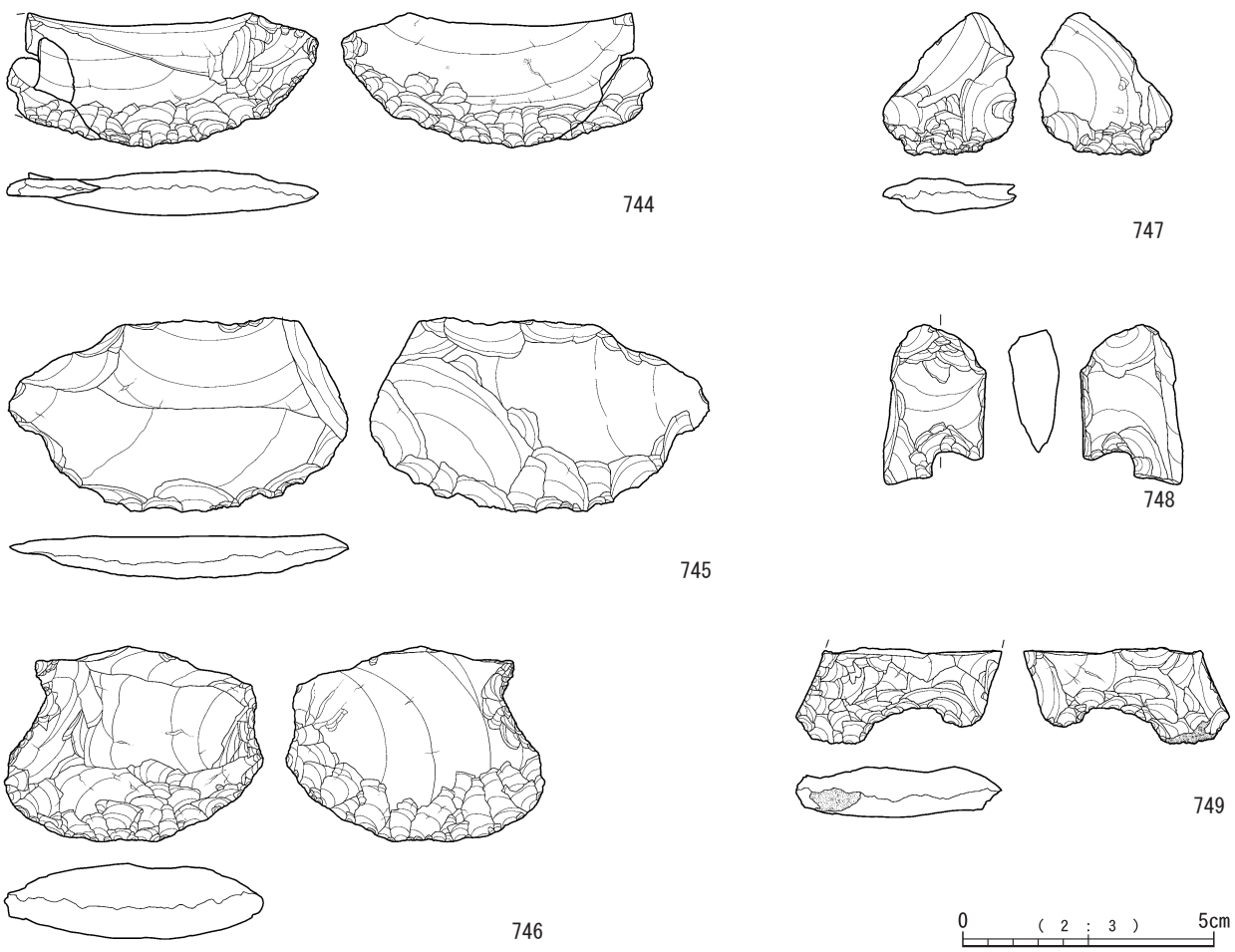


第 153 図　石匙・スクレイパー（１）



第 154 図　石匙・スクレイパー（２）

0　（２：３）　5cm



第 155 図　石匙・スクレイパー（３）・抉入石器

黒曜石の脚部をもつ先端部が平坦な石鏃様の石器で，先端部は繰り返し使用の痕跡がうかがわれる。実用品である。723 はシルト質頁岩で抉りを持つ石鏃様の石器で，先端部と片脚先端を欠く。

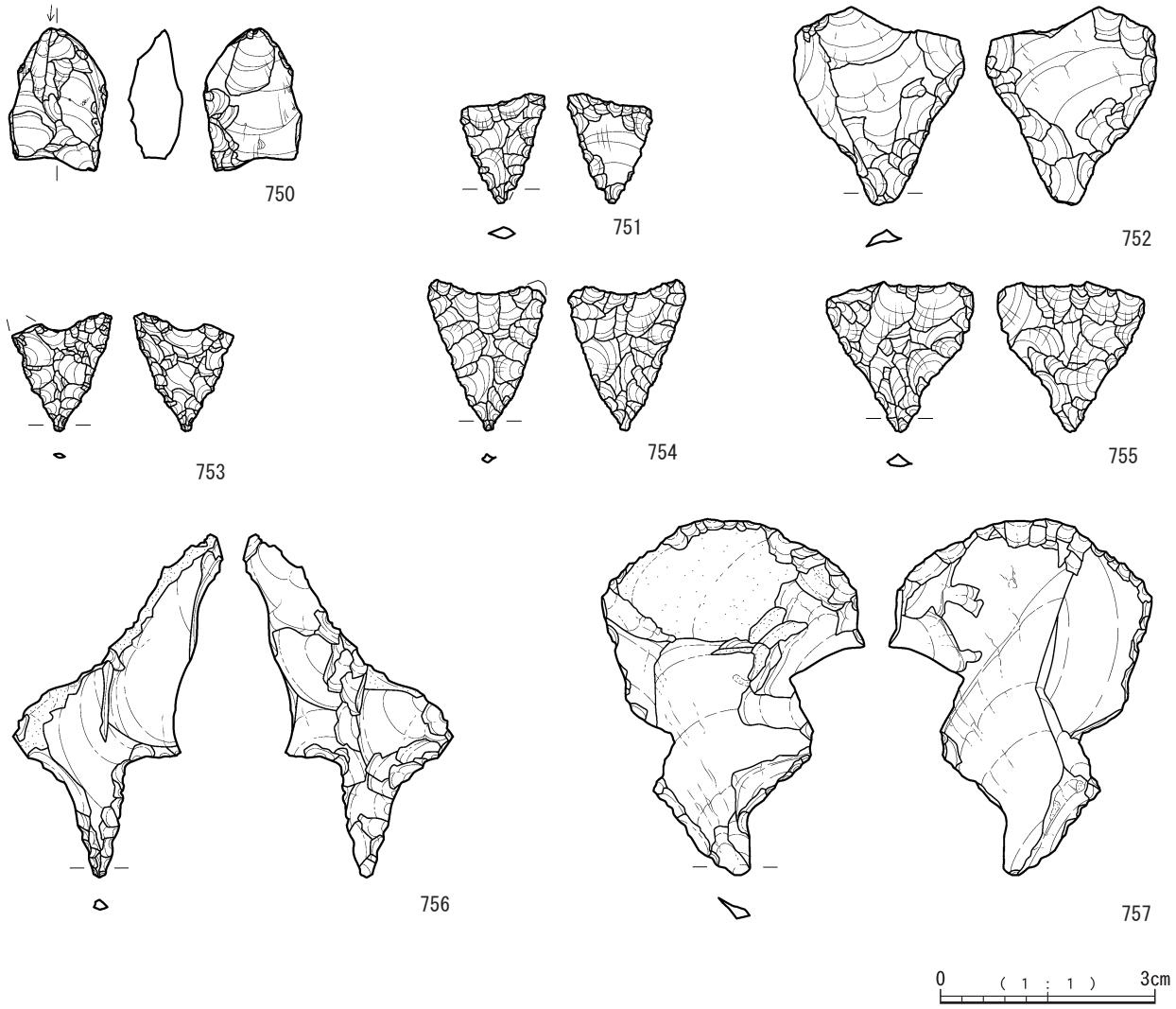
724 ～ 727 は尖頭器で，724 は安山岩の尖頭器の基部と考えられる。腹面に整形の平坦剥離がなされている。725 は玉髄の尖頭器の尖頭部と考えられ，大きな整形剥離の後に，周縁を調整しようとしたものと考えられる。726 は針尾産黒曜石の尖頭器で，基部がわずかに欠損している。727 は上牛鼻産の黒曜石の尖頭器で，基部がわずかに欠損する。

石匙・スクレイパー・抉入石器（第 153 ～ 155 図　728 ～ 749）

石匙はいずれも剥片形状を大きく変えないものである。728 ～ 735 は 732 の黒色頁岩のものを除いて安山岩の石匙で，728，730，731 は縦長剥片を素材とする。728 は左側の上方にもう一つのつまみ部があった可能性もある。730 は左端部をわずかに欠損（ガジリ）する。731 は，剥片形状を残し，やや小さなつまみ部を作る。729，732 は横長剥片を素材とし，732 は黒色頁岩で顕著な刃部形成がなされておらず，剥片形状をそのまま残すが，刃部に微少な剥離があることからそのまま使用された可能性もある。733 ～ 735 は安山岩の石匙の欠損品である。733 と 734 は横剥ぎの剥片で，刃部の両端部を欠損し，734 は横剥ぎの剥片が同一方向から剥出された痕跡を残す。735 は縦長の剥片を素材とし，左端部を半損する。

736 ～ 738 はやや小ぶりな石匙である。736，737 は安山岩の石匙で，横長剥片を素材とする。736 は腹面に，ステップ痕があり，つまみ部が大きいことからも再生品の可能性がある。737 はつまみ部の作りだしがあまりない完形品である。上面を僅かに凹みを作りつまみ部とする。738，739 はホルンフェルスの石匙で，いずれも横剥ぎ剥片を素材としている。739 はつまみ部だけが欠損した後再利用しようとしている。738 は風化が激しく，刃部形成が不十分で未製品の可能性がある。

740 ～ 744 は安山岩のスクレイパー類である。740 は横剥ぎ剥片を素材として刃部を形成していることから，つまみ部を含む部分が欠損した石匙の可能性が強い。741 は横長剥片剥出後に，打瘤等を飛ばしてつまみ部を作出しようとしている。刃部についてはまだ作出が十分でなく，未製品と考えられる。742 は横長剥片を素材としているが，背面がブランティングされ，鋭い側縁を生

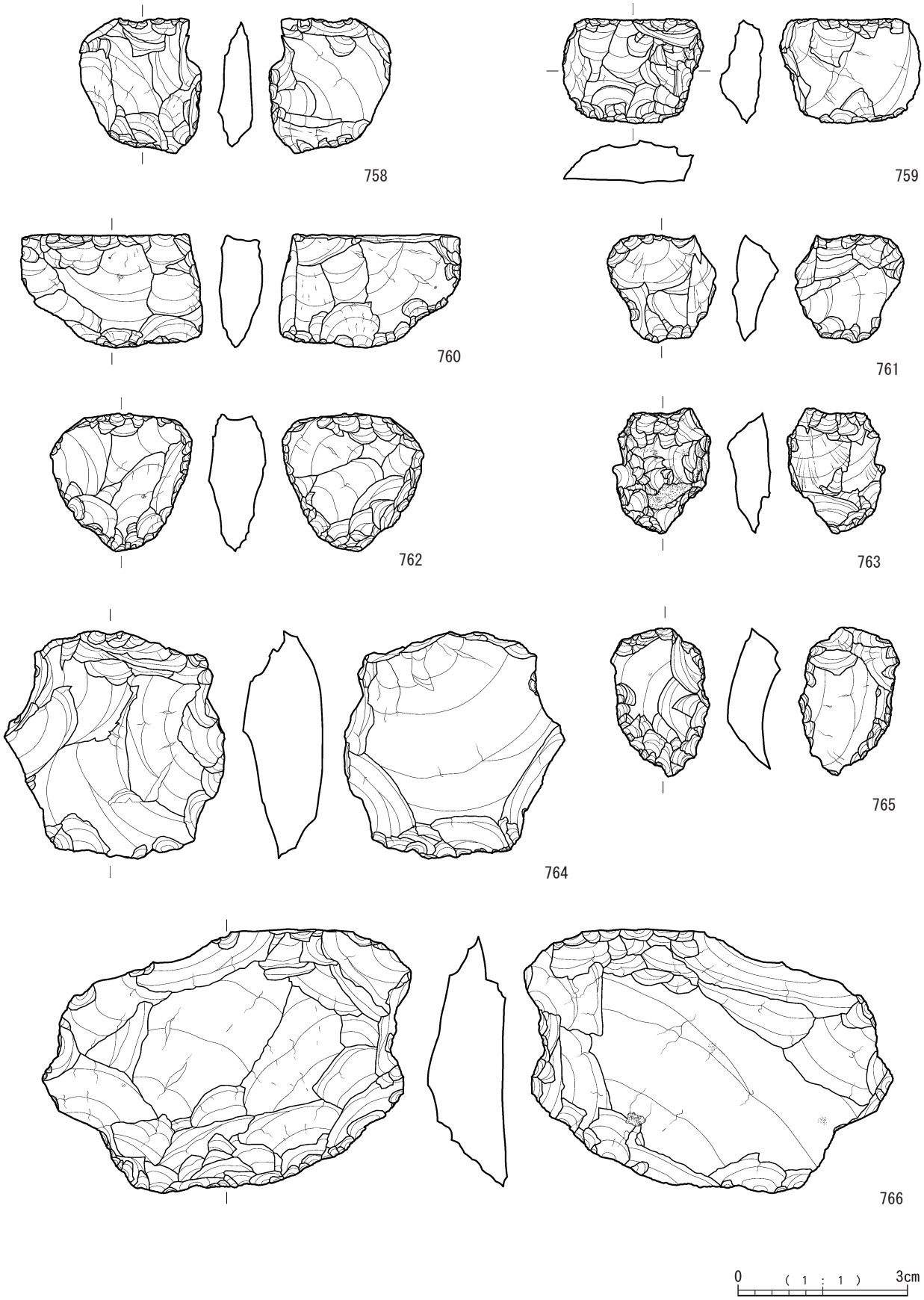


第 156 図　彫器・石錐

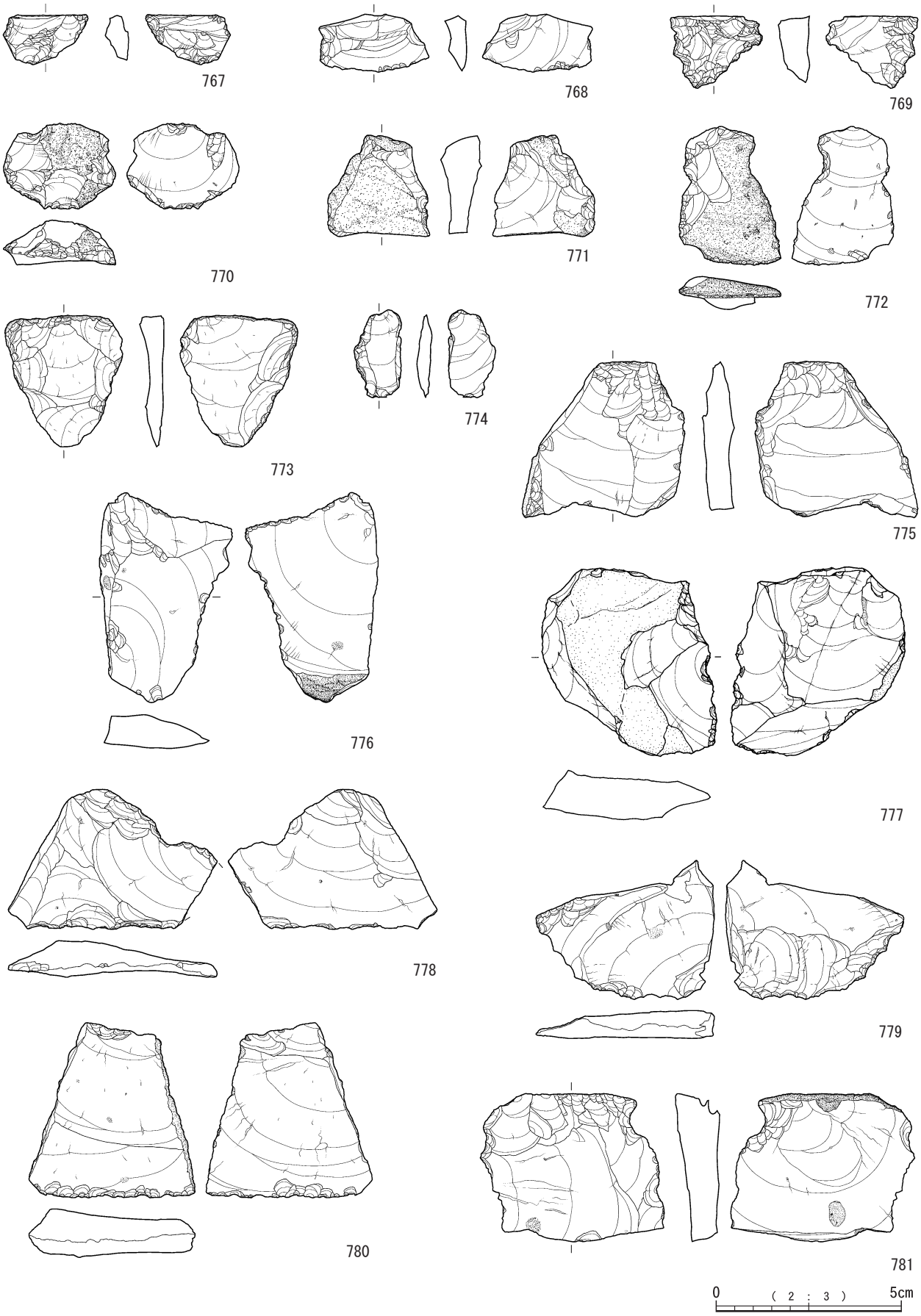
かして刃部としているサイドスクレイパーである。743 は上部から右側面に礫皮が残り，剥片形状をそのまま使い，剥片の縁辺部に刃部を作り出したサイドスクレイパーである。744 は横剥ぎ剥片を素材として，上部を欠いている。石匙の可能性があるサイドスクレイパーである。745 はホルンフェルスのサイドスクレイパーである。746 はチャートのサイドスクレイパーで，縦長剥片の薄い方の側縁を利用して，刃部を形成している。刃部の両側から抉りが入れられている。747 は針尾産黒曜石の剥片を利用したエンドスクレイパーと考えられる。748 は姫島産黒曜石の厚い剥片を使って，比較的薄いところに抉りを入れている抉入石器である。749 は安山岩の抉入石器で，上部を欠く。

彫器・石錐（第 156 図　750 ～ 757）

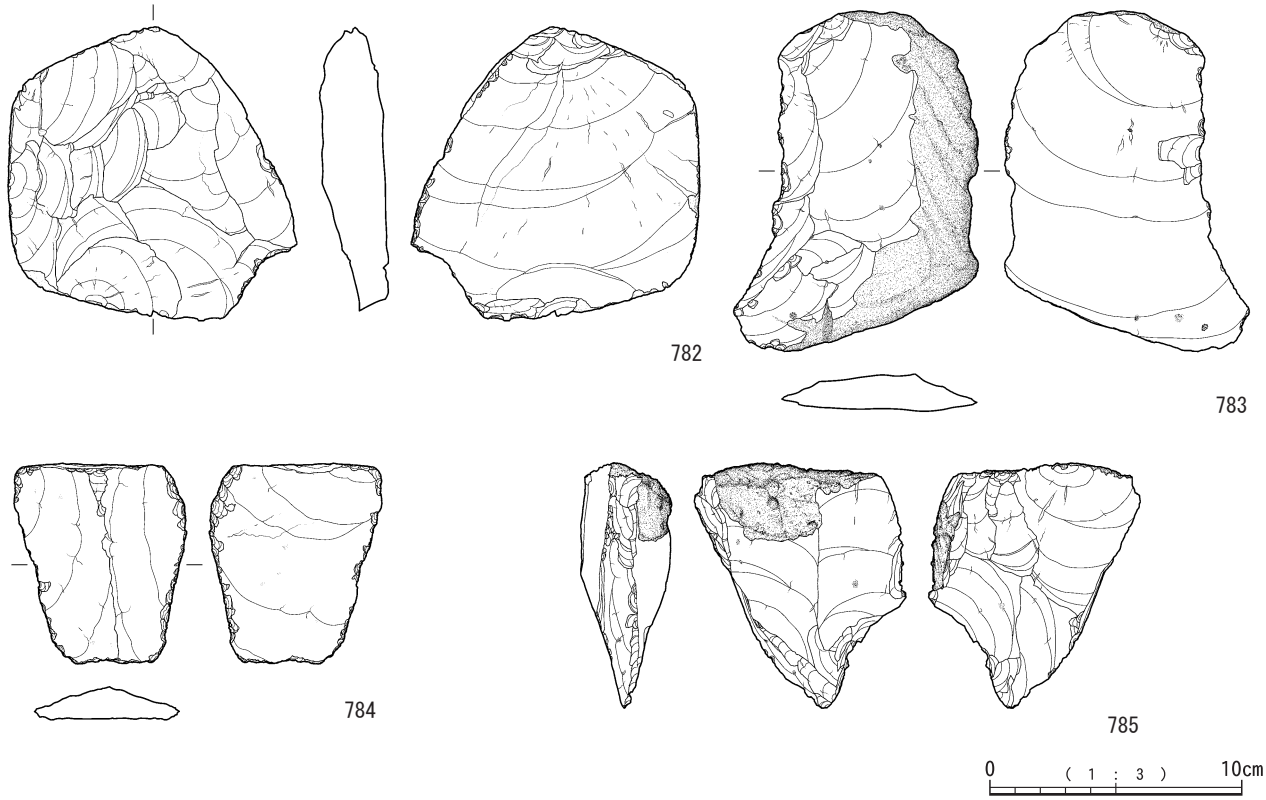
750 は彫器で，桑ノ木津留産黒曜石の剥片の打点側に，複数回の樋状の剥離が入る。751 は姫島産黒曜石の石錐で，三角形状に整形し，先端部に縦方向の使用痕がある。752 は安山岩の石錐で，剥片の端部は折られて，剥片形状を残しながら先端部分を作り出す。753 は針尾産黒曜石の石錐で，もともと薄い剥片に整形剥離を行い，全面に押圧剥離は入らずに，先端部を作り出す。剥片整形からも石錐とした。754 は姫島産黒曜石の石錐で，先端部の作り出しが顕著である。石鏃の作り方ではあるが，先端形状から石錐とした。755 は姫島産黒曜石の石錐で分厚い剥片を整形し，比較的厚みのない突端部に抉りを入れて先端部を作り出している。756 は不定形剥片の突出部を利用して，先端部を作り出したものである。757 も 756 と同様に，剥片の先端部を利用して石錐の先端部としている。また，上部に半円形に整形と共に刃部を形成し，削器としての機能も有する。



第 157 図　楔形石器



第 158 図　二次加工剥片



第 159 図　使用痕剥片・石核（１）

楔形石器（第 157 図　758 ～ 766）

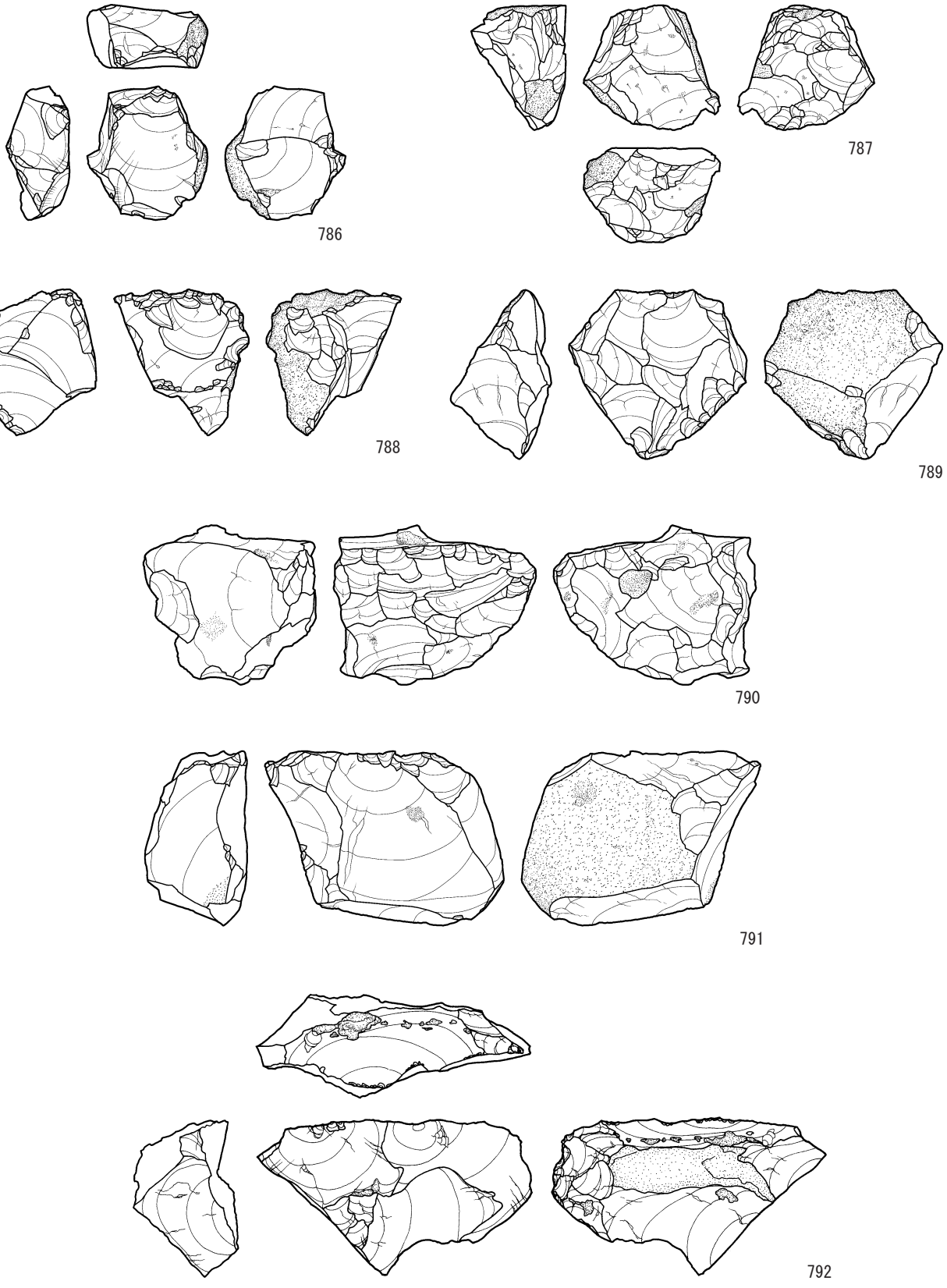
758 は硬質頁岩の楔形石器で，上下に複数回の打突痕が見られる。759 は硬質頁岩の楔形石器で，涙滴状の剥片の長い縁辺部を使用する。760 は安山岩の楔形石器で，上面の折断面を打面として剥出された剥片を使用して上下に使用痕がある。761 は姫島産黒曜石の楔形石器で，台形状の剥片の両側縁を使用する。762 は安山岩の楔形石器で，平坦面を上として楔としてつかっているが，右側の縁辺を下辺としても使用されている。763 は桑ノ木津留産黒曜石の楔形石器で，背面に礫皮が残る剥片である。764 はホルンフェルスの大型の楔形石器で，剥片の打点側を力点としたものであろう。765 は姫島産黒曜石の楔形石器である。766 は安山岩の大型の楔形石器とした。剥片の下辺の平坦面を力点として，楔として使われたものと考えられる。

二次加工剥片・使用痕剥片（第 158・159 図　767 ～ 784）

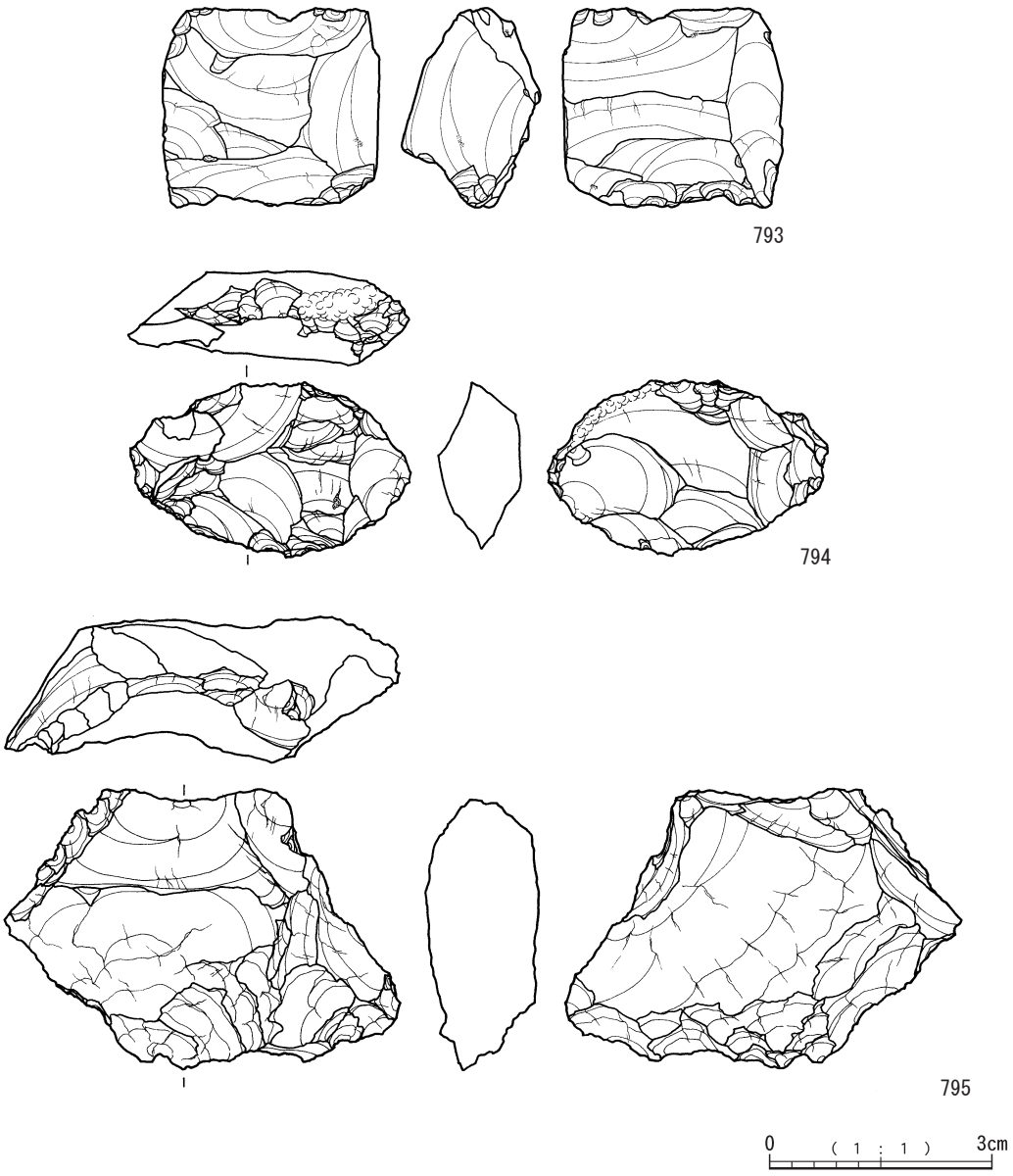
767 は桑ノ木津留産黒曜石の剥片の下縁部であるが，左上部の直線部分を使用している。768 は姫島産黒曜石の縦長剥片の側縁部に使用痕が見られる。769 は水晶の短めの剥片の２側縁を刃部として使用している。エンドスクレイパーとして使用された可能性がある。770 は腰岳産黒曜石の剥片で，背面は礫皮面である。左下側縁に二次加工がみられる。771 は硬質頁岩の礫皮部分の剥片で右下に二次加工がある。772 は針尾産黒曜石の礫皮部分の剥片である。剥片の両側縁と下縁に微細な剥離がみられる。773 は安山岩の三角形状した剥片で，両側縁に使用痕が顕著である。774 は姫島産黒曜石の縦長剥片で，左側縁に使用痕がみられる。775 はチャートの縦長剥片の打点方向に顕著な使用痕が見られる。776 は姫島産黒曜石の縦長剥片の右側縁に使用痕がある。777 は姫島産黒曜石で縦長剥片の片方の鋭い右縁辺を使用した。778 は安山岩の剥片の下縁に二次加工をほどこしたものである。779 は安山岩の縦長剥片の折断剥片の上辺に二次加工を施している。削器として使用されたものと考える。780 は安山岩の剥片の折断したものの下辺の鋭い縁辺に使用痕がある。781 は安山岩の剥片で，打面下の両側に抉りのような二次加工を施している。縦型の石匙の破損品の可能性がある。782 は安山岩の剥片素材の石核の可能性もある。腹面側を作業面として剥片を剥出する。90 度回転して礫皮面の平坦面を打面として剥片を剥出している。下辺部に使用痕がある。783 は安山岩の大型の剥片で，剥片の左側縁辺に使用痕がある。784 は輝石安山岩の剥片で，２側縁に使用痕がある。

石核（第 159 ～ 162 図　785 ～ 797）

785 は安山岩の剥片素材の石核で，礫皮面を打面として縦長の剥片を剥出している。786 は腰岳産黒曜石の剥



第160図　石核（２）

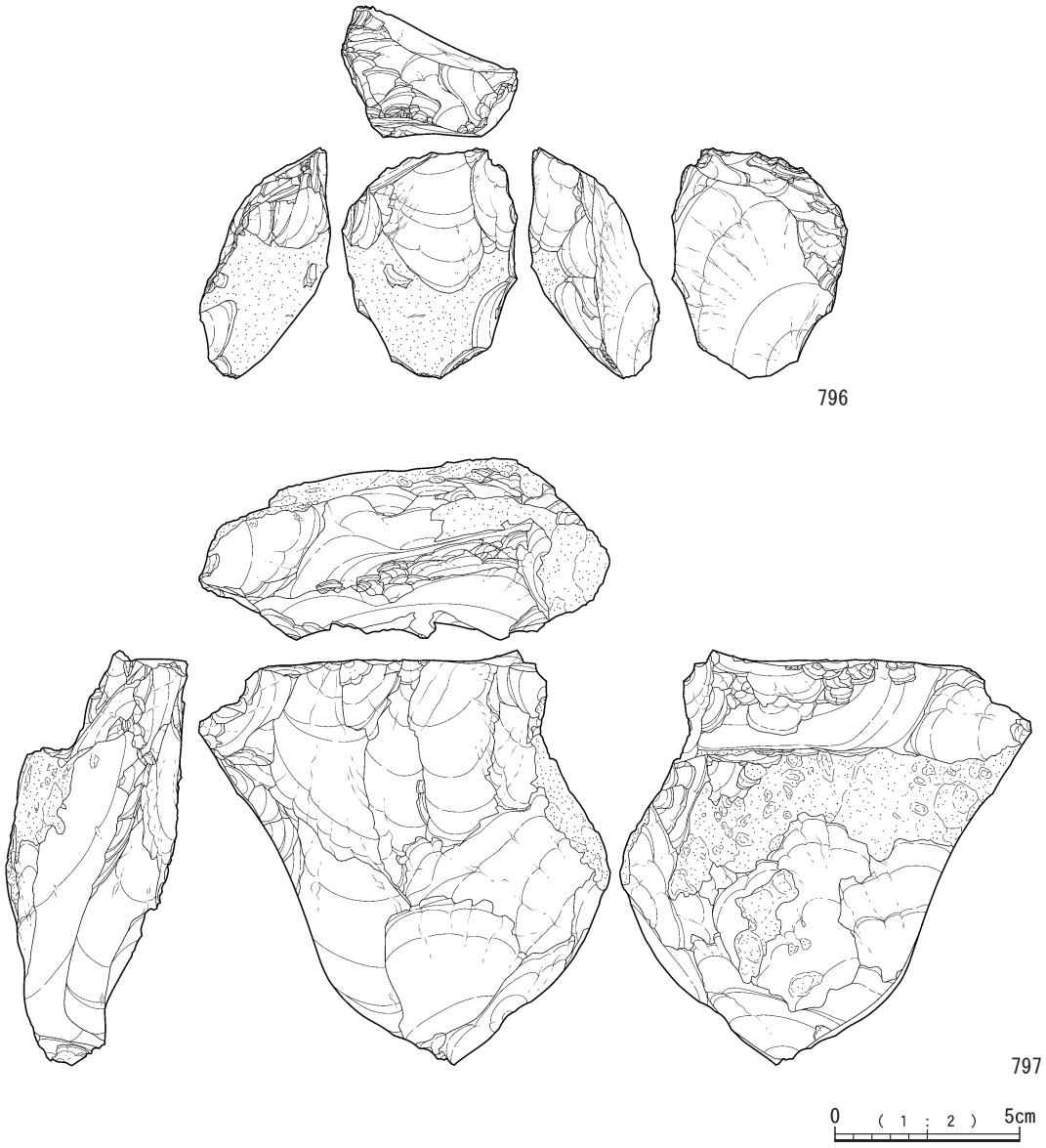


第161図　石核（３）

片素材の石核で，打面調整はなく，２㎝大の剥片を剥出する。787 は上牛鼻産黒曜石の石核で，礫皮面をそのまま打面として，打面転移を繰り返しながら小さな剥片を剥出している。788 は針尾産黒曜石の礫素材の石核で，打面調整を行わず礫皮面を打面とする。789 は珪質頁岩の石核で，平坦な礫皮面を打面として剥出している。打面転移を繰り返している。790 は玉髄の石核で，上面は礫皮があり礫素材で，打面調整は行わずに，礫皮面を打面として剥片を剥出する。ステップしたために廃棄したものであろう。791 は珪質頁岩の石核で，背面に礫皮面を残す円礫素材の石核である。打面調整を行わず，剥出する。792 は，玉髄の石核で，特に打面調整せず平坦面を打面として，剥片を剥出する。793 は安山岩の石核で，打点を 180 度転移しながら，横長の剥片を剥出した。794 は安山岩の石核で，背面に礫皮面と打面右側に敲打痕があり，敲石を石核として小剥片を剥出しようとしたものであろう。795 は剥片素材の姫島産黒曜石の石核で，打面調整は特に行わずに，二枚貝殻状の剥片を剥出する。796 は珪質頁岩の円礫素材の石核で，折断面を打面調整して剥出している。797 は玉髄の大型の石核である。剥片をとれる所から取ろうとした痕跡がうかがわれるが，作業面が凹凸が生じ，打面も狭くなったため廃棄した可能性がある。

石斧・礫器（第 163・164 図　798 ～ 811）

798 はホルンフェルスの磨製石斧の破損品で，基部である。799 はホルンフェルスの小型の磨製石斧で，刃部は欠損している。800 はホルンフェルスの磨製石斧で，



第162図　石核（４）

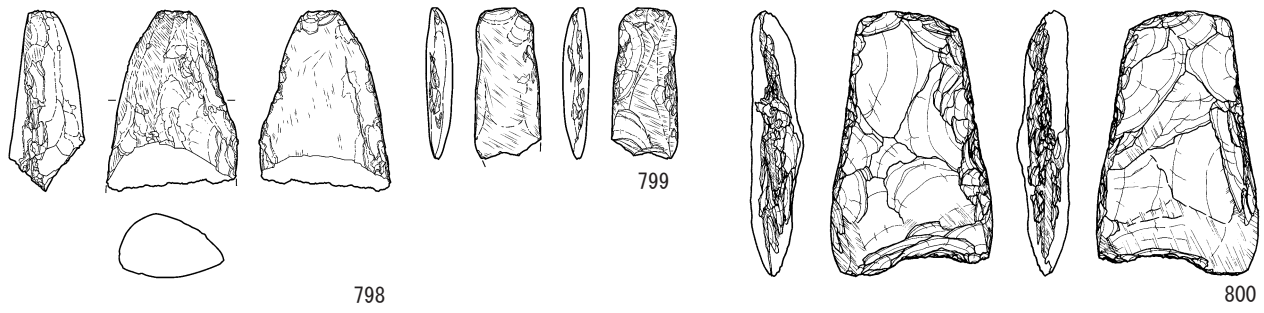
刃部と両側縁に研磨がみられ，刃部中央部を欠いている。801はホルンフェルスの磨製石斧の刃部の破損した破片である。802は頁岩の剥片であるが，稜の頂部分が研磨により潰れており，側縁部に使用痕がある。803はホルンフェルスの石斧で刃部が欠損している。804は輝石安山岩の剥片素材の石器で，周囲を使用の結果か，整形したものか，丸く形作る。805はホルンフェルスの磨製石斧の基部で，基部先端と刃部は破損したものである。806はホルンフェルスの磨製石斧の刃部で，風化が著しい。807はホルンフェルスの石斧の素材と考えられる。周縁を整形している。808は砂岩の礫器で，三角形の礫の長辺に刃部をつくる。礫全体がつるつるとした光沢を帯びている。809は安山岩の小型の台石の一側縁を打ち欠いて刃部を作る。810は安山岩の礫の一側縁を打ち欠いて刃部を作る。811も安山岩の礫器で，一側縁を打ち欠いている。刃部の先端部に潰れが見られる。これら礫器は，一方向からの打撃により刃部を形作ることが普通である。

磨敲石・磨石

磨敲石及び磨石はD～F-10～14区を中心として，縄文時代早期の包含層であるⅥ・Ⅶ層から出土している。石材は砂岩・安山岩・花崗岩である。風化が著しく敲打痕の判別が難しいものが多くみられる。

①磨・敲石（第165～167図　812～830）

正面に磨面を有し，平坦面や側縁に明瞭な敲打痕がみられるものを磨・敲石とし，19点を図化した。上面・下面と側面にも磨面を形成するタイプも一部みられる。



第 163 図　石斧・礫器（１）

812 ～ 820 は正面・背面・側面の敲打痕が比較的はっきりと判別できる。815，819，820 は被熱により赤化する。815 は砂岩製で，819，820 は安山岩製である。

821 ～ 823 は花崗岩製で，磨・敲石としての使用の頻度は高いと推測するが，風化が著しいため一部の敲打痕のみ図化できた。

824 ～ 828 は正面・背面の中央部が明瞭に凹み，凹石としての使用の可能性も考えられる。824，828 は花崗岩製で，ほかは砂岩製である。827 は特に深い凹みを形成する。828 は正面にのみ凹みを形成する。829，830 は断面が三角形状である。ともに風化が著しく，敲打の痕跡は残るものの図化が難しかった。わずかに被熱による赤化が確認できる。829 は花崗岩製である。830 は安山岩製である。

②磨石（第 168 図　831 ～ 835）

正面・背面に磨面を有し，敲打痕が不明瞭なものを磨石とし，５点を図化した。

831 ～ 833 は安山岩製である。正面・裏面は非常に良く磨られており，光沢をもつ。敲打痕がごくわずかに残る。834，835 は砂岩製である。正面・裏面ともによく磨られており，敲打痕は確認できるものの，少なく浅い。834 は被熱により赤化する。

棒状敲石（第 169 図　836）

礫を素材とし，全面的に敲打痕が確認できるものを敲石とした。836 は砂岩製の棒状敲石であり，正面・裏面・両側面・上面・下面に使用痕跡が確認できる。

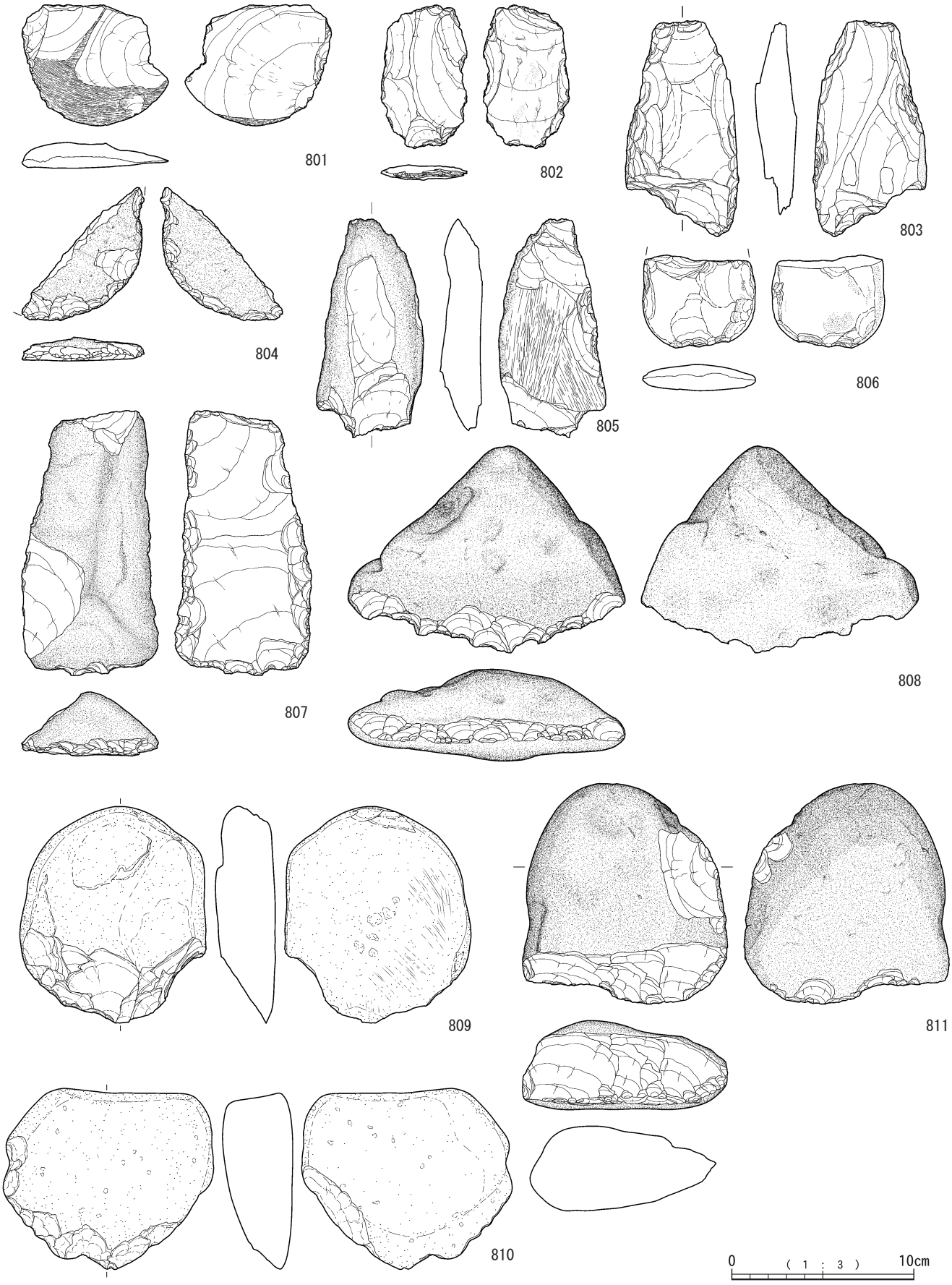
砥石（第 169 図　837）

片面あるいは両平坦面に砥石として使用した痕跡が認められるもので，１点を図化した。837 は，砂岩製の長方形の板状の砥石である。正面・裏面・左側面に平坦な摩耗面が形成される。右側面は自然面である。上面・下面には敲打痕が確認でき，ハンマーとしての使用も推測できる。

石皿（第 170 図　838 ～ 840）

磨面や凹面などの使用面を有するものを石皿とし，３点を図化した。

838 は砂岩製である。上面・下面共に使用面を有し，上面には薄い敲打痕が確認できる。右側面には打ち欠いた痕跡が残る。上部が一部欠損している。839，840 は花崗岩製である。839 は上面の右端部に敲打痕が確認できる。下面に被熱による赤化がわずかにみられる。840 は石皿片である。上面にのみ使用面を有し，上面中央部はよく磨られる。全面的にごく弱い敲打痕がみられるものの，風化が著しく不明瞭であり図化できなかった。上面にごくわずかに被熱の痕跡がみられる。



第 164 図　石斧・礫器（２）

第 19 表　縄文時代早期石器観察表（１）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	器種	分類	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
138	452	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅱ	F-13	Ⅵ	(1.10)	1.18	0.28	0.30	13281	欠損品
	453	石鏃	Ⅰ類	安山岩	F-12	Ⅵ	1.00	1.25	0.30	0.30	18178	
	454	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅲ	F-8	Ⅵ	1.10	1.10	0.20	0.20	38990	
	455	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅱ	K-13	Ⅵ	(1.20)	(0.95)	0.30	0.30	19869	欠損品
	456	石鏃	Ⅰ類	珪質頁岩	F-10	Ⅵ	1.50	1.55	0.40	0.60	37159	
	457	石鏃	Ⅰ類	安山岩	F-11	Ⅵ	(1.30)	1.20	0.35	0.40	34885	欠損品
	458	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅱ	I-16	Ⅵ	(1.35)	(1.25)	0.40	0.50	12160	欠損品
	459	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅴ	F-8	Ⅵ	(0.88)	1.32	0.34	0.40	39299	欠損品
	460	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅴ	G-16	Ⅵ	(0.90)	(1.25)	0.30	0.30	12887	欠損品
	461	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅴ	E-13	Ⅵ	(1.05)	1.40	0.35	0.30	13922	欠損品
	462	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅵ	F-15	Ⅵ	(1.58)	(1.34)	0.27	0.40	13226	欠損品
	463	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅴ	D-4	Ⅵ	(1.60)	(1.40)	0.40	0.60	20151	欠損品
	464	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅴ	E-11	Ⅵ	1.80	1.40	0.40	0.80	25991	
	465	石鏃	Ⅰ類	安山岩	D-12	Ⅵ	(1.70)	1.20	0.50	0.90	40490	欠損品
	466	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅵ	E-13	Ⅵ	1.70	1.57	0.47	1.00	13287	
	467	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅴ	E-9	Ⅵ	1.95	1.55	0.60	0.90	34354	
	468	石鏃	Ⅰ類	珪質頁岩	F-15	Ⅵ	(1.68)	1.36	0.40	0.60	13799	欠損品
	469	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅳ	H-12	Ⅵ	(1.80)	(1.68)	0.40	1.00	41464	欠損品
	470	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅴ	J-13	Ⅵ	(2.00)	(1.60)	0.50	1.00	14911	欠損品
	471	石鏃	Ⅰ類	安山岩	E-15	Ⅵ	(1.60)	(1.55)	0.30	0.60	13437	欠損品
	472	石鏃	Ⅰ類	安山岩	D-7	Ⅵ	2.35	1.70	0.38	1.20	22751	
	473	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅴ	L-14	Ⅵ	2.17	1.67	0.50	1.40	34589	
	474	石鏃	Ⅰ類	黒曜石Ⅰ	H-12	Ⅵ	(2.26)	1.91	0.55	1.90	41348	欠損品
	475	石鏃	Ⅰ類	安山岩	G-14	Ⅵ	(2.70)	(1.80)	0.60	2.00	14654	欠損品
	476	石鏃	Ⅰ類	安山岩	F-13	Ⅵ	2.40	1.70	0.60	2.10	14424	
	477	石鏃	Ⅰ類	安山岩	K-14	Ⅵ	(2.40)	1.85	0.47	1.60	23962	欠損品
139	478	石鏃	Ⅱ類	安山岩	E-21	Ⅵ	2.10	1.65	0.35	0.88	8983	
	479	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅴ	F-19	Ⅵ	2.05	1.60	0.40	0.79	10408	
	480	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅲ	D-10	Ⅵ	2.00	1.55	0.30	0.70	21609	
	481	石鏃	Ⅱ類	珪質頁岩	K-17	Ⅵ	(1.85)	(1.40)	0.40	0.50	11773	欠損品
	482	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅴ	F-9	Ⅵ	(1.75)	1.60	0.50	0.90	34068	欠損品
	483	石鏃	Ⅱ類	チャート	F-12	Ⅵ	2.00	1.70	0.50	1.00	17243	
	484	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅴ	G-12	Ⅵ	1.90	1.55	0.35	0.60	18970	
	485	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅴ	K-13	Ⅵ	2.05	1.55	0.55	1.20	21740	
	486	石鏃	Ⅱ類	安山岩	H-12	Ⅵ	2.16	1.76	0.50	1.40	41416	
	487	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅱ	D-9	Ⅵ	1.85	1.21	0.33	0.60	29011	
	488	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅴ	J-13	Ⅵ	(1.65)	1.80	0.50	1.00	19995	欠損品
	489	石鏃	Ⅱ類	安山岩	F-11	Ⅵ	1.60	1.45	0.20	0.40	34113	
	490	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅲ	I-14	Ⅵ	(2.10)	(1.65)	0.60	1.40	11911	欠損品
	491	石鏃	Ⅱ類	安山岩	E-9	Ⅵ	2.10	1.90	0.40	1.10	34318	
	492	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅴ	J-14	Ⅵ	2.25	1.85	0.40	1.30	19512	
	493	石鏃	Ⅱ類	安山岩	G-12	Ⅵ	(1.80)	(1.40)	0.50	0.70	17506	欠損品
140	494	石鏃	Ⅱ類	安山岩	H-12	Ⅵ	(2.68)	(1.95)	0.43	1.70	42260	欠損品
	495	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅱ	E-11	Ⅵ	(1.60)	(1.75)	0.35	0.90	15596	欠損品
	496	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅴ	E-8	Ⅶ	(1.15)	(1.20)	0.35	0.30	39409	欠損品
	497	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅴ	D-5	Ⅵ	(1.35)	(1.30)	0.40	0.40	20995	欠損品
	498	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅳ	F-8	Ⅶ	0.80	1.10	0.30	0.10	39992	
	499	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅳ	I-8	Ⅵ	1.40	1.31	0.50	0.50	40694	
	500	石鏃	Ⅱ類	安山岩	F-12	Ⅵ	(1.25)	(1.50)	0.38	0.40	18429	欠損品
	501	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅲ	F-12	Ⅵ	(1.40)	1.40	0.40	0.50	17269	欠損品
	502	石鏃	Ⅱ類	黒曜石Ⅴ	F-11	Ⅵ	1.40	1.10	0.25	0.30	37946	
	503	石鏃	Ⅱ類	安山岩	G-12	Ⅵ	(1.50)	(1.20)	0.25	0.30	18620	欠損品
	504	石鏃	Ⅱ類	安山岩	F-11	Ⅵ	(1.70)	1.40	0.50	1.10	38535	欠損品
	505	石鏃	Ⅲ類	水晶	E-11	Ⅵ	(1.30)	(1.20)	0.40	0.40	15959	欠損品
141	506	石鏃	Ⅲ類	黒曜石Ⅰ	D-5	Ⅵ	1.65	1.55	0.50	1.00	21010	
	507	石鏃	Ⅲ類	安山岩	F-12	Ⅵ	1.65	1.45	0.32	0.60	15324	
	508	石鏃	Ⅲ類	玉髄	E-11	Ⅵ	1.70	1.45	0.40	0.70	19183	
	509	石鏃	Ⅲ類	黒曜石Ⅲ	E-12	Ⅵ	2.10	1.60	0.40	0.80	19625	
	510	石鏃	Ⅲ類	チャート	E-11	Ⅵ	1.50	11.70	0.40	0.60	17833	
	511	石鏃	Ⅲ類	黒曜石Ⅲ	F-12	Ⅵ	(1.60)	1.40	0.35	0.60	15734	欠損品
	512	石鏃	Ⅲ類	黒曜石Ⅲ	I-13	Ⅵ	2.29	1.38	0.55	1.50	41057	
	513	石鏃	Ⅲ類	安山岩	F-15	Ⅵ	(2.10)	(1.25)	0.50	0.90	13236	欠損品
	514	石鏃	Ⅲ類	安山岩	G-12	Ⅵ	(2.15)	(1.35)	0.55	1.10	18971	欠損品
	515	石鏃	Ⅲ類	水晶	E-9	Ⅵ	1.90	1.30	0.40	0.70	28935	
	516	石鏃	Ⅲ類	黒曜石Ⅲ	D-15	Ⅵ	1.80	1.30	0.40	0.60	13111	
	517	石鏃	Ⅲ類	チャート	D-7	Ⅵ	(2.23)	(1.40)	0.32	0.70	22188	欠損品
	518	石鏃	Ⅲ類	頁岩	E-11	Ⅵ	(2.55)	(1.80)	0.50	1.20	29829	欠損品　赤色頁岩
	519	石鏃	Ⅲ類	チャート	E-12	Ⅵ	2.80	(1.70)	0.20	1.00	15478	欠損品
	520	石鏃	Ⅲ類	黒曜石Ⅳ	H-16	Ⅵ	1.40	1.50	0.30	0.50	12504	
	521	石鏃	Ⅳ類	黒曜石Ⅲ	D-9	Ⅵ	(1.70)	(1.50)	0.35	0.40	26629	欠損品
	522	石鏃	Ⅳ類	珪質頁岩	F-9	Ⅵ	1.60	1.20	0.40	0.50	33964	
	523	石鏃	Ⅳ類	安山岩	J-13	Ⅵ	1.65	1.25	0.30	0.40	19472	
	524	石鏃	Ⅳ類	安山岩	E-9	Ⅵ	1.95	1.35	0.37	0.80	28911	

第 20 表　縄文時代早期石器観察表（２）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	器種	分類	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
141	525	石鏃	Ⅳ類	玉髄	D-12	Ⅵ	(1.40)	1.50	0.36	0.70	40599	欠損品
	526	石鏃	Ⅳ類	黒曜石Ⅴ	E-11	Ⅵ	2.10	1.50	0.40	0.80	25974	
	527	石鏃	Ⅳ類	安山岩	G-12	Ⅵ	1.80	1.50	0.45	0.80	17858	
	528	石鏃	Ⅳ類	安山岩	I-8	Ⅵ	2.05	1.60	0.30	0.70	40690	
	529	石鏃	Ⅳ類	珪質頁岩	F-12	Ⅵ	2.00	1.58	0.47	0.80	18437	
	530	石鏃	Ⅳ類	黒曜石Ⅰ	F-10	Ⅵ	(1.60)	(1.33)	0.45	0.70	37980	欠損品
	531	石鏃	Ⅳ類	黒曜石Ⅱ	E-12	Ⅵ	(2.00)	1.25	0.30	0.40	16823	欠損品
	532	石鏃	Ⅳ類	安山岩	E-14	Ⅵ	(1.70)	(1.30)	0.30	0.40	14390	欠損品
	533	石鏃	Ⅳ類	黒曜石Ⅴ	G-14	Ⅵ	(1.70)	(1.25)	0.30	0.30	13831	欠損品
142	534	石鏃	Ⅳ類	安山岩	E-13	Ⅵ	2.25	1.60	0.40	1.00	14230	
	535	石鏃	Ⅳ類	黒曜石Ⅳ	E-13	Ⅵ	2.10	1.55	0.40	0.70	13621	
	536	石鏃	Ⅳ類	安山岩	F-9	Ⅵ	(2.05)	(1.30)	0.40	0.60	32910	欠損品
	537	石鏃	Ⅳ類	安山岩	D-10	Ⅵ	(2.20)	(1.30)	0.33	0.60	26080	欠損品
	538	石鏃	Ⅳ類	安山岩	F-12	Ⅵ	2.30	(1.55)	0.46	1.00	18637	欠損品
	539	石鏃	Ⅳ類	黒曜石Ⅴ	D-9	Ⅵ	(1.85)	(1.40)	0.30	0.40	29065	欠損品
	540	石鏃	Ⅳ類	安山岩	D-13	Ⅵ	(1.60)	1.30	0.40	0.50	40261	欠損品
	541	石鏃	Ⅳ類	珪質頁岩	G-13	Ⅵ	(1.90)	(1.53)	0.38	0.40	18951	欠損品
	542	石鏃	Ⅳ類	安山岩	F-14	Ⅵ	(1.70)	(1.15)	0.30	0.40	13766	欠損品
	543	石鏃	Ⅳ類	黒曜石Ⅲ	F-9	Ⅶ	(1.80)	(1.30)	0.42	0.70	36091	欠損品
	544	石鏃	Ⅳ類	安山岩	F-13	Ⅵ	(1.85)	(1.25)	0.30	0.50	16901	欠損品
	545	石鏃	Ⅳ類	黒曜石Ⅴ	E-11	Ⅵ	(2.15)	(1.45)	0.30	0.60	15094	欠損品
	546	石鏃	Ⅳ類	安山岩	F-9	Ⅶ	(1.90)	(1.10)	0.30	0.40	37841	欠損品
	547	石鏃	Ⅳ類	安山岩	I-8	Ⅵ	(2.03)	(1.46)	0.30	0.60	44274	欠損品
	548	石鏃	Ⅳ類	チャート	F-12	Ⅵ	(1.60)	(1.14)	0.30	0.40	17263	欠損品
	549	石鏃	Ⅳ類	安山岩	E-12	Ⅵ	(2.10)	(1.55)	0.38	0.70	16840	欠損品
	550	石鏃	Ⅳ類	安山岩	D-13	Ⅵ	(1.80)	(1.30)	0.30	0.40	39922	欠損品
	551	石鏃	Ⅳ類	安山岩	D-13	Ⅵ	(1.70)	(1.35)	0.45	0.60	40473	欠損品
	552	石鏃	Ⅳ類	安山岩	F-11	Ⅵ	(1.65)	(1.40)	2.70	0.40	38216	欠損品
	553	石鏃	Ⅳ類	黒曜石Ⅲ	D-9	Ⅵ	(1.75)	(1.38)	0.23	0.30	28965	28966 と接合　欠損品
	554	石鏃	Ⅳ類	安山岩	F-11	Ⅵ	(1.65)	1.80	0.43	0.70	34153	欠損品
	555	石鏃	Ⅳ類	安山岩	D-12	Ⅵ	1.80	1.80	0.35	0.60	40247	
	556	石鏃	Ⅳ類	安山岩	I-17	Ⅵ	(1.50)	1.80	0.35	0.60	11436	欠損品
	557	石鏃	Ⅳ類	安山岩	E-10	Ⅵ	(1.55)	(1.25)	0.35	0.40	40180	欠損品
	558	石鏃	Ⅳ類	安山岩	E-10	Ⅵ	(1.80)	(1.45)	0.27	0.30	40157	欠損品
	559	石鏃	Ⅳ類	安山岩	F-10	Ⅵ	1.75	1.45	0.35	0.50	33246	
	560	石鏃	Ⅳ類	安山岩	E-11	Ⅵ	1.85	1.40	0.40	0.40	15996	
	561	石鏃	Ⅳ類	珪質頁岩	F-10	Ⅵ	(1.80)	(1.05)	0.30	0.30	34201	欠損品
143	562	石鏃	Ⅳ類	安山岩	D-9	Ⅵ	2.55	1.52	0.43	1.20	26339	
	563	石鏃	Ⅳ類	安山岩	E-11	Ⅵ	2.70	1.80	0.50	1.60	19979	
	564	石鏃	Ⅳ類	安山岩	E-15	Ⅵ	(2.50)	(1.25)	0.50	1.00	13221	欠損品
	565	石鏃	Ⅳ類	安山岩	E-13	Ⅵ	(2.20)	(1.20)	0.33	0.60	13439	欠損品
	566	石鏃	Ⅳ類	安山岩	E-10	Ⅶ	(2.50)	(1.50)	0.50	1.40	36145	欠損品
	567	石鏃	Ⅳ類	黒曜石Ⅴ	J-13	Ⅵ	(2.05)	1.60	0.40	0.90	19732	欠損品
	568	石鏃	Ⅳ類	安山岩	E-13	Ⅵ	(1.90)	(1.53)	0.45	0.90	14342	欠損品
	569	石鏃	Ⅳ類	安山岩	F-9	Ⅵ	(1.85)	(1.30)	0.40	0.80	34022	欠損品
	570	石鏃	Ⅳ類	安山岩	F-12	Ⅵ	(1.40)	(1.35)	0.45	0.50	16638	欠損品
	571	石鏃	Ⅳ類	安山岩	G-11	Ⅵ	(1.60)	(0.90)	0.30	0.30	17589	欠損品
144	572	石鏃	Ⅴ類	黒曜石Ⅴ	F-12	Ⅵ	1.80	1.50	0.60	1.00	16495	
	573	石鏃	Ⅴ類	安山岩	E-11	Ⅵ	(2.00)	(1.50)	0.28	0.70	19193	欠損品
	574	石鏃	Ⅴ類	珪質頁岩	F-9	Ⅵ	1.55	1.20	0.40	0.40	34722	
	575	石鏃	Ⅴ類	珪質頁岩	F-12	Ⅵ	1.71	1.65	0.40	0.60	16162	
	576	石鏃	Ⅴ類	珪質頁岩	G-11	Ⅵ	1.70	1.60	0.50	0.60	19518	
	577	石鏃	Ⅴ類	黒曜石Ⅴ	E-11	Ⅵ	(1.90)	(1.50)	0.40	0.60	19184	欠損品
	578	石鏃	Ⅴ類	安山岩	F-10	Ⅵ	(1.65)	(1.45)	0.35	0.50	33240	欠損品
	579	石鏃	Ⅴ類	珪質頁岩	G-12	Ⅵ	(1.99)	(1.41)	0.37	0.50	18806	欠損品
	580	石鏃	Ⅴ類	安山岩	K-14	Ⅵ	1.85	1.40	0.30	0.60	19864	
	581	石鏃	Ⅴ類	黒曜石Ⅴ	G-12	Ⅵ	(1.80)	(1.60)	0.40	0.60	18965	欠損品
	582	石鏃	Ⅴ類	黒曜石Ⅴ	F-9	Ⅵ	2.20	1.70	0.40	0.80	34058	
	583	石鏃	Ⅴ類	シルト質頁岩	E-8	Ⅵ	(1.70)	1.35	0.35	0.40	39065	欠損品
	584	石鏃	Ⅴ類	チャート	K-13	Ⅵ	2.35	2.05	0.30	1.10	23953	
	585	石鏃	Ⅴ類	黒曜石Ⅴ	G-12	Ⅵ	(2.25)	(1.80)	0.50	1.30	17974	欠損品
	586	石鏃	Ⅴ類	珪質頁岩	E-11	Ⅵ	(1.85)	(1.62)	0.42	0.80	18575	欠損品
	587	石鏃	Ⅴ類	安山岩	F-9	Ⅵ	(1.95)	(1.40)	0.60	1.00	32984	欠損品
	588	石鏃	Ⅴ類	安山岩	J-7	Ⅵ	(2.02)	(1.46)	0.45	1.00	44295	欠損品
	589	石鏃	Ⅴ類	珪質頁岩	E-10	Ⅶ	(1.80)	1.45	0.40	0.50	35634	欠損品
	590	石鏃	Ⅴ類	珪質頁岩	J-13	Ⅵ	(1.45)	(1.45)	0.40	0.50	19275	欠損品
	591	石鏃	Ⅴ類	安山岩	J-7	Ⅵ	1.34	1.40	0.42	0.60	44296	
	592	石鏃	Ⅴ類	黒曜石Ⅲ	F-9	Ⅶ	(1.30)	(1.30)	0.30	0.40	36585	欠損品
	593	石鏃	Ⅴ類	黒曜石Ⅴ	D-5	Ⅵ	(1.07)	1.28	0.44	0.40	20979	欠損品
	594	石鏃	Ⅴ類	珪質頁岩	F-9	Ⅵ	(1.60)	(1.00)	0.25	0.20	32905	欠損品
	595	石鏃	Ⅴ類	黒曜石Ⅴ	F-9	Ⅵ	(1.69)	(1.80)	0.40	0.80	32949	欠損品
	596	石鏃	Ⅴ類	黒曜石Ⅴ	K-19	Ⅵ	(2.30)	(1.55)	0.43	1.40	9807	欠損品
	597	石鏃	Ⅴ類	チャート	D-10	Ⅵ	2.10	1.50	0.30	0.90	26111	

第 21 表　縄文時代早期石器観察表（３）

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	器種	分類	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
145	598	石鏃	Ⅵ類	安山岩	F-9	Ⅵ	2.10	1.60	0.30	0.70	33414	
	599	石鏃	Ⅵ類	安山岩	E-9	Ⅶ	(1.70)	(1.45)	0.40	0.60	34983	欠損品
	600	石鏃	Ⅵ類	黒曜石Ⅳ	E-10	Ⅵ	(1.70)	(1.23)	0.25	0.30	40158	欠損品
	601	石鏃	Ⅵ類	安山岩	G-12	Ⅵ	(1.40)	(1.30)	0.30	0.30	16465	欠損品
	602	石鏃	Ⅵ類	安山岩	E-10	Ⅵ	(1.95)	(1.10)	0.30	0.40	40193	欠損品
	603	石鏃	Ⅵ類	黒曜石Ⅴ	E-12	Ⅵ	(1.70)	(1.15)	0.33	0.40	19401	欠損品
	604	石鏃	Ⅵ類	安山岩	F-11	Ⅵ	(1.53)	(1.52)	0.27	0.40	36484	欠損品
	605	石鏃	Ⅵ類	黒曜石Ⅲ	H-8	Ⅵ	(2.05)	(1.35)	0.30	0.40	44648	欠損品
	606	石鏃	Ⅵ類	安山岩	E-12	Ⅵ	(1.60)	(1.40)	0.40	0.50	19628	欠損品
	607	石鏃	Ⅵ類	シルト質頁岩	K-14	Ⅵ	(2.10)	(1.35)	0.40	0.50	21712	欠損品
	608	石鏃	Ⅵ類	黒曜石Ⅴ	G-13	Ⅵ	2.20	1.50	0.30	0.90	17478	
146	609	石鏃	Ⅶ類	安山岩	G-12	Ⅵ	1.85	1.30	0.30	0.50	16881	
	610	石鏃	Ⅶ類	黒曜石Ⅴ	D-12	Ⅵ	(1.80)	1.45	0.30	0.50	40480	欠損品
	611	石鏃	Ⅶ類	黒曜石Ⅲ	D-12	Ⅵ	(1.90)	(1.20)	0.20	0.20	40244	欠損品
	612	石鏃	Ⅶ類	黒曜石Ⅲ	J-15	Ⅵ	(2.10)	(1.50)	0.30	0.40	11747	欠損品
	613	石鏃	Ⅶ類	黒曜石Ⅴ	J-15	Ⅵ	(2.20)	(1.45)	0.30	0.50	11924	欠損品
	614	石鏃	Ⅶ類	安山岩	K-17	Ⅵ	(2.13)	(1.40)	0.32	0.60	11437	欠損品
	615	石鏃	Ⅶ類	安山岩	E-10	Ⅶ	(1.70)	(1.20)	0.24	0.30	40373	欠損品
	616	石鏃	Ⅶ類	黒曜石Ⅲ	F-11	Ⅵ	(2.65)	(1.50)	0.35	0.70	36489	欠損品
	617	石鏃	Ⅶ類	黒曜石Ⅲ	D-9	Ⅵ	(1.30)	(1.00)	0.30	0.30	27526	欠損品
	618	石鏃	Ⅶ類	黒曜石Ⅴ	I -16	Ⅵ	(1.80)	(1.50)	0.35	0.50	12462	欠損品
	619	石鏃	Ⅶ類	黒曜石Ⅴ	D-9	Ⅵ	(2.09)	(1.63)	0.40	1.00	26173	欠損品
	620	石鏃	Ⅶ類	黒曜石Ⅲ	G-12	Ⅵ	1.50	1.50	0.30	0.30	17047	
	621	石鏃	Ⅶ類	安山岩	E-12	Ⅵ	(2.25)	(1.52)	0.33	0.70	16509	欠損品
	622	石鏃	Ⅶ類	黒曜石Ⅲ	D-9	Ⅵ	(1.90)	(1.70)	0.30	0.60	26606	欠損品
	623	石鏃	Ⅶ類	黒曜石Ⅴ	F-12	Ⅵ	1.55	1.40	0.30	0.40	16146	
	624	石鏃	Ⅶ類	安山岩	F-14	Ⅵ	(2.10)	(1.25)	0.30	0.60	13721	欠損品
	625	石鏃	Ⅶ類	黒曜石Ⅲ	E-19	Ⅵ	2.00	(1.52)	0.30	0.60	10295	欠損品
	626	石鏃	Ⅶ類	安山岩	E-20	Ⅵ	(1.70)	1.65	0.25	0.53	10217	欠損品
147	627	石鏃	大型	黒曜石Ⅲ	D-12	Ⅵ	4.20	2.10	0.40	2.10	40246	欠損品
	628	石鏃	大型	安山岩	E-11	Ⅵ	3.20	1.75	0.36	1.60	一括	
	629	石鏃	大型	チャート	F-11	Ⅵ	(2.45)	(1.55)	0.50	1.10	15616	欠損品
	630	石鏃	大型	黒曜石Ⅴ	F-9	Ⅵ	2.20	2.10	0.35	1.10	33411	
	631	石鏃	大型	黒曜石Ⅴ	J-15	Ⅵ	(1.90)	(1.70)	0.30	0.60	11926	欠損品
	632	石鏃	大型	チャート	D-6	Ⅵ	(2.45)	(1.70)	0.35	1.40	21860	欠損品
	633	石鏃	大型	安山岩	E-12	Ⅵ	(1.70)	(1.30)	0.30	0.60	17925	欠損品
	634	石鏃	大型	チャート	L-14	Ⅶ	(1.70)	1.80	0.30	0.60	37992	欠損品
	635	石鏃	大型	黒曜石Ⅲ	K-14	Ⅵ	(2.26)	(1.24)	0.40	0.70	22837	欠損品
	636	石鏃	大型	安山岩	J-16	Ⅵ	(2.30)	(1.15)	0.40	0.70	12084	欠損品
	637	石鏃	大型	黒曜石Ⅴ	F-11	Ⅵ	(3.35)	(1.40)	0.40	1.00	18563	欠損品
	638	石鏃	大型	安山岩	F-11	Ⅵ	(2.90)	(1.45)	0.40	1.00	36483	欠損品
	639	石鏃	大型	黒曜石Ⅴ	I-14	Ⅵ	3.00	1.50	0.30	1.00	11588	
	640	石鏃	大型	安山岩	H-14	Ⅵ	(2.70)	(1.65)	0.30	0.80	12058	欠損品
	641	石鏃	大型	玉髄	D-6	Ⅵ	(2.08)	(1.10)	0.30	0.60	21319	欠損品
	642	石鏃	大型	黒曜石Ⅲ	D-14	Ⅵ	2.55	1.45	0.30	0.70	39921	
	643	石鏃	大型	黒曜石Ⅴ	J-13	Ⅵ	(2.70)	(1.40)	0.37	0.70	14946	欠損品
	644	石鏃	大型	黒曜石Ⅴ	K-13	Ⅵ	(2.58)	(1.60)	0.35	1.00	21795	欠損品
	645	石鏃	大型	珪質頁岩	F-11	Ⅵ	(2.45)	(1.37)	0.50	0.90	35659	欠損品
148	646	石鏃	大型	安山岩	F-15	Ⅵ	(3.20)	2.53	0.35	1.80	13234	欠損品
	647	石鏃	大型	安山岩	F-8	Ⅵ	(2.55)	(1.95)	0.50	1.30	38558	欠損品
	648	石鏃	大型	黒曜石Ⅲ	F-14	Ⅵ	(2.60)	(1.60)	0.40	0.90	14646	欠損品
	649	石鏃	大型	黒曜石Ⅲ	D-19	Ⅵ	3.85	1.95	0.45	1.54	10735	
	650	石鏃	大型	シルト質頁岩	G-11	Ⅵ	(2.65)	2.10	0.50	1.90	17455	欠損品
	651	石鏃	大型	黒曜石Ⅴ	E-9	Ⅵ	(2.83)	(1.62)	0.68	2.10	33055	欠損品
149	652	石鏃	欠損品	安山岩	E-11	Ⅵ	(2.20)	(1.40)	0.35	1.00	25374	欠損品
	653	石鏃	欠損品	安山岩	F-13	Ⅵ	2.58	1.37	0.60	1.40	14608	欠損品
	654	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅳ	G-11	Ⅵ	(2.10)	(1.60)	0.50	1.30	15645	欠損品
	655	石鏃	欠損品	安山岩	E-9	Ⅵ	(2.00)	(1.30)	0.50	1.00	34769	欠損品
	656	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅴ	F-10	Ⅵ	(2.00)	(1.25)	0.40	0.60	36512	欠損品
	657	石鏃	欠損品	安山岩	G-12	Ⅵ	(1.90)	(1.40)	0.40	0.60	18973	欠損品
	658	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅴ	E-11	Ⅵ	(1.97)	(1.21)	0.40	0.70	19182	欠損品
	659	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅴ	E-10	Ⅵ	(2.50)	(1.50)	0.44	1.10	26637	欠損品
	660	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅲ	D-10	Ⅵ	(2.30)	(1.20)	0.30	0.80	20882	欠損品
	661	石鏃	欠損品	安山岩	F-8	Ⅵ	(1.85)	(1.40)	0.37	0.60	38992	欠損品
	662	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅰ	E-9	Ⅶ	(2.05)	(1.65)	0.50	1.00	30964	欠損品
	663	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅴ	F-9	Ⅵ	(1.48)	(1.59)	0.40	0.70	32977	欠損品
	664	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅲ	F-8	Ⅶ	(1.40)	(1.10)	0.25	0.30	39356	欠損品
	665	石鏃	欠損品	チャート	D-12	Ⅵ	(1.36)	(1.16)	0.38	0.50	39707	欠損品
	666	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅴ	E-8	Ⅶ	(1.00)	(1.20)	0.30	0.30	39825	欠損品
	667	石鏃	欠損品	安山岩	K-14	Ⅵ	(1.22)	(0.93)	0.33	0.30	19663	欠損品
	668	石鏃	欠損品	玉髄	E-11	Ⅵ	(1.05)	(1.15)	0.30	0.20	18660	欠損品
	669	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅴ	I-14	Ⅵ	(1.90)	(1.25)	0.50	0.70	12357	欠損品
	670	石鏃	欠損品	珪質頁岩	L-14	Ⅵ	(1.70)	(1.04)	0.35	0.50	31549	欠損品

第 22 表　縄文時代早期石器観察表（４）

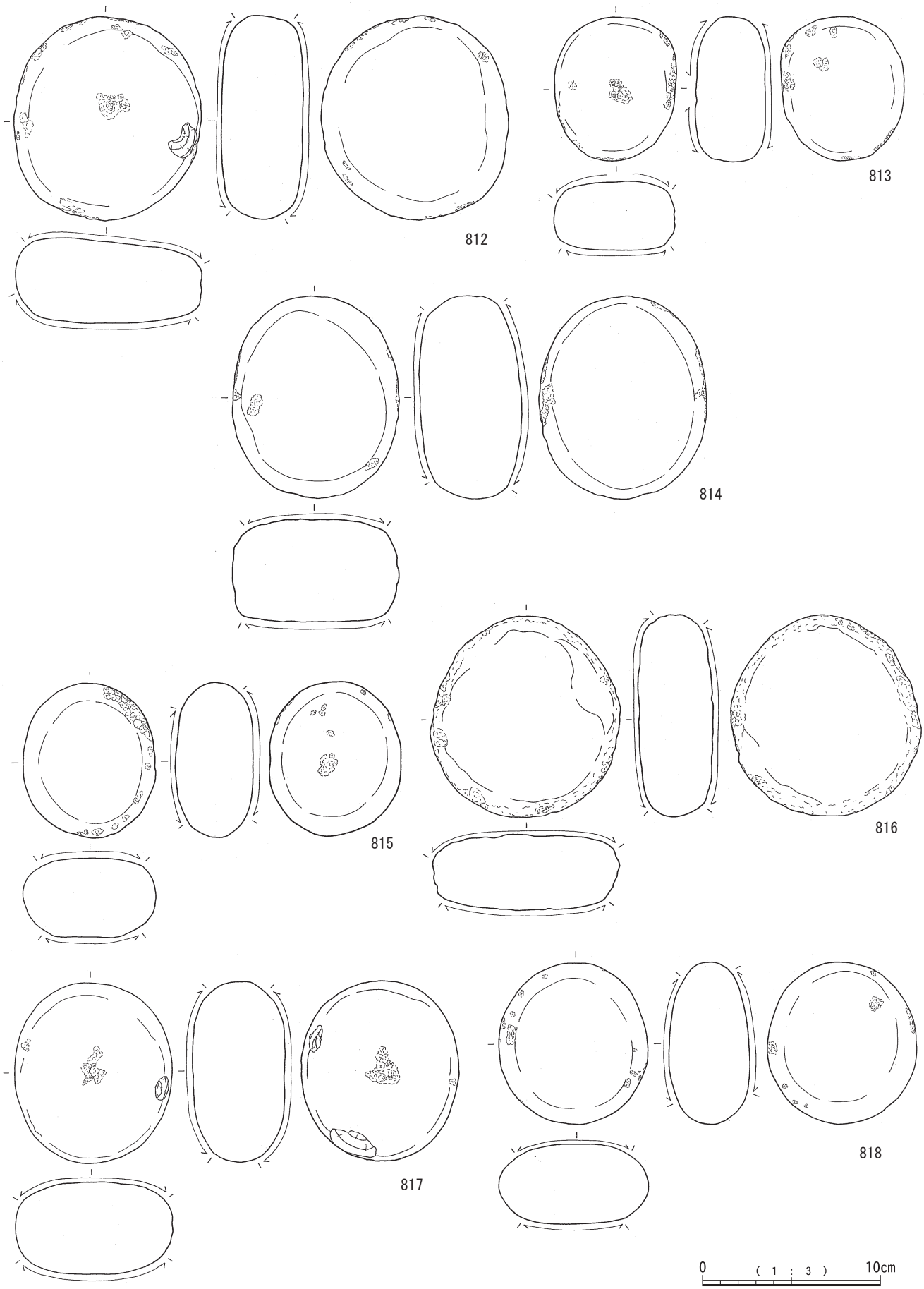
※（　）は推定

挿図番号	掲載番号	器種	分類	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
149	671	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅴ	E-11	Ⅵ	(1.72)	(1.01)	0.40	0.70	25357	欠損品
	672	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅰ	E-10	Ⅵ	(1.80)	(1.15)	0.60	0.80	40179	欠損品
	673	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅴ	G-11	Ⅵ	(1.60)	(1.55)	0.40	0.70	18821	欠損品
	674	石鏃	欠損品	安山岩	E-11	Ⅵ	(1.55)	(1.17)	0.40	0.70	18040	欠損品
	675	石鏃	欠損品	珪質頁岩	G-12	Ⅵ	(1.60)	(1.70)	0.70	1.40	16423	欠損品
	676	石鏃	欠損品	玉髄	C-6	Ⅵ	(2.20)	1.80	0.75	2.70	23356	欠損品
	677	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅴ	G-12	Ⅵ	(1.45)	(1.25)	0.40	0.40	19368	欠損品
	678	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅱ	F-10	Ⅵ	(1.40)	(1.20)	0.35	0.50	33227	欠損品
	679	石鏃	欠損品	珪質頁岩	D-16	Ⅶ	(1.43)	(1.09)	0.37	0.30	34652	欠損品
	680	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅴ	F-13	Ⅵ	(1.35)	(1.10)	0.40	0.40	13844	欠損品
	681	石鏃	欠損品	黒曜石Ⅴ	E-12	Ⅵ	(1.47)	(1.30)	0.40	0.50	19847	欠損品
150	682	石鏃	未製品	ホルンフェルス	G-12	Ⅵ	2.28	1.37	0.22	0.60	16860	未製品
	683	石鏃	未製品	黒曜石Ⅴ	H-12	Ⅵ	1.80	1.80	0.54	1.13	41468	未製品
	684	石鏃	未製品	安山岩	G-11	Ⅵ	(2.00)	(1.45)	0.30	0.60	18827	未製品
	685	石鏃	未製品	安山岩	F-11	Ⅵ	1.50	(1.32)	0.30	0.50	17772	未製品
	686	石鏃	未製品	安山岩	I-13	Ⅵ	(1.68)	(1.65)	0.40	0.90	40828	未製品
	687	石鏃	未製品	黒曜石Ⅴ	D-12	Ⅵ	(1.73)	(1.60)	0.48	1.00	39955	未製品
	688	石鏃	未製品	珪質頁岩	F-10	Ⅵ	(1.70)	(1.70)	0.35	0.70	34812	未製品
	689	石鏃	未製品	黒曜石Ⅲ	G-12	Ⅵ	1.75	1.30	0.25	0.40	17016	未製品
	690	石鏃	未製品	黒曜石Ⅴ	J-14	Ⅵ	2.30	1.80	0.40	1.20	20478	未製品
	691	石鏃	未製品	黒曜石Ⅴ	F-12	Ⅵ	1.80	1.50	0.30	0.70	17543	未製品
	692	石鏃	未製品	黒曜石Ⅴ	E-9	Ⅶ	(1.60)	(1.20)	0.35	0.40	37827	未製品
	693	石鏃	未製品	黒曜石Ⅴ	F-8	Ⅶ	1.85	1.30	0.25	0.40	39576	未製品
	694	石鏃	未製品	黒曜石Ⅴ	E-9	Ⅵ	(1.04)	(1.31)	0.20	0.30	34703	未製品
	695	石鏃	未製品	安山岩	F-12	Ⅵ	(1.80)	(1.20)	0.30	0.40	15268	未製品
	696	石鏃	未製品	黒曜石Ⅴ	E-8	Ⅵ	1.25	1.33	0.50	0.60	39119	未製品
	697	石鏃	未製品	安山岩	L-14	Ⅵ	(1.60)	1.20	0.35	0.60	33138	未製品
	698	石鏃	未製品	ホルンフェルス	E-10	Ⅵ	2.80	1.60	0.25	1.00	40074	未製品
	699	石鏃	未製品	黒曜石Ⅴ	F-12	Ⅵ	2.20	1.80	0.50	1.20	16532	未製品
	700	石鏃	未製品	シルト質頁岩	F-15	Ⅵ	(2.30)	(1.40)	0.35	0.90	12988	未製品
	701	石鏃	未製品	安山岩	G-13	Ⅵ	1.85	1.20	0.48	0.80	16539	未製品
	702	石鏃	未製品	黒曜石Ⅵ	I-8	Ⅵ	(1.88)	(1.55)	0.51	1.40	43559	未製品
	703	石鏃	未製品	安山岩	K-13	Ⅵ	(2.55)	(1.55)	0.35	1.00	19795	未製品
	704	石鏃	未製品	安山岩	G-12	Ⅵ	(1.75)	(1.73)	0.42	1.00	17568	未製品
	705	石鏃	未製品	安山岩	G-11	Ⅵ	(1.46)	(1.98)	0.50	1.40	16851	未製品
	706	石鏃	未製品	黒曜石Ⅴ	F-9	Ⅵ	2.10	2.00	0.30	1.00	34726	未製品
	707	石鏃	未製品	黒曜石Ⅲ	K-13	Ⅵ	(2.00)	1.60	0.50	1.40	21783	未製品
151	708	石鏃	未製品	安山岩	H-8	Ⅵ	(2.21)	(1.80)	0.60	2.00	44661	未製品
	709	石鏃	未製品	シルト質頁岩	E-12	Ⅵ	(1.95)	(1.52)	0.43	0.60	17421	未製品
	710	石鏃	未製品	黒曜石Ⅴ	F-12	Ⅵ	(2.00)	1.60	0.50	0.90	18442	未製品
	711	石鏃	未製品	珪質頁岩	E-10	Ⅵ	(2.81)	1.81	0.45	1.50	24058	未製品
	712	石鏃	未製品	玉髄	G-12	Ⅵ	(1.95)	(1.60)	0.30	0.50	18354	未製品
	713	石鏃	未製品	安山岩	G-18	Ⅵ	1.55	1.60	0.55	0.73	10170	未製品
152	714	磨製石鏃	—	ホルンフェルス	G-12	Ⅵ	1.55	1.20	0.25	0.90	18964	
	715	磨製石鏃	—	ホルンフェルス	F-12	Ⅵ	(2.66)	1.22	0.15	0.73	15833	15834 と接合 欠損品
	716	磨製石鏃	—	ホルンフェルス	E-6	Ⅶ	(1.68)	2.03	0.26	1.25	22941	欠損品
	717	磨製石鏃	—	ホルンフェルス	H-14	Ⅵ	(2.04)	(1.88)	0.16	0.57	12234	欠損品
	718	磨製石鏃	—	ホルンフェルス	F-16	Ⅵ	(3.73)	1.49	0.30	2.10	13256	欠損品
	719	磨製石鏃	—	頁岩	E-17	Ⅵ	2.35	1.40	0.31	1.25	10556	赤色頁岩
	720	尖頭器	—	安山岩	E-20	Ⅶ	4.20	1.85	0.78	0.33	10000	
	721	異形石器	—	安山岩	H-8	Ⅵ	2.75	1.85	0.80	4.10	44636	未製品
	722	異形石器	—	黒曜石Ⅳ	E-10	Ⅶ	2.25	1.60	0.70	2.00	40413	
	723	異形石器	—	シルト質頁岩	G-12	Ⅵ	(1.80)	(1.45)	0.40	0.60	19088	欠損品
	724	尖頭器	—	安山岩	G-12	Ⅵ	5.40	3.20	1.20	16.80	18284	
	725	尖頭器	—	玉髄	D-6	Ⅵ	2.30	1.75	1.10	4.10	20348	未使用
	726	尖頭器	—	黒曜石Ⅲ	E-13	Ⅵ	2.25	2.04	1.05	4.00	13915	未製品
	727	尖頭器	—	黒曜石Ⅵ	G-12	Ⅵ	2.15	1.50	0.55	1.80	17892	未製品
153	728	石匙	—	安山岩	K-14	Ⅵ	3.00	6.20	0.80	11.80	22830	
	729	石匙	—	安山岩	F-16	Ⅵ	3.05	6.80	1.02	12.10	12907	
	730	石匙	—	安山岩	F-12	Ⅵ	3.00	(6.60)	1.08	14.50	15287	欠損品
	731	石匙	—	安山岩	K-13	Ⅵ	5.00	8.90	1.20	32.30	19797	
	732	石匙	—	頁岩	D-14	Ⅶ	4.50	8.65	1.04	28.40	40092	黒色頁岩
	733	石匙	—	安山岩	I-12	Ⅵ	4.20	5.60	1.20	20.60	41474	
	734	石匙	—	安山岩	E-12	Ⅵ	4.20	(5.90)	0.70	18.20	17384	欠損品
	735	石匙	—	安山岩	F-13	Ⅵ	3.95	4.30	1.03	14.80	14447	
154	736	石匙	—	安山岩	E-13	Ⅵ	3.40	5.80	0.92	10.50	13931	
	737	石匙	—	安山岩	I-14	Ⅵ	3.30	6.50	1.05	18.60	11742	
	738	石匙	—	ホルンフェルス	F-13	Ⅵ	4.10	6.80	0.60	12.90	14544	
	739	石匙	—	ホルンフェルス	F-12	Ⅵ	(3.75)	(4.00)	0.87	10.20	15069	欠損品
	740	スクレイパー	—	安山岩	G-12	Ⅵ	4.25	(7.20)	0.90	28.70	17939	欠損品
	741	スクレイパー	—	安山岩	H-7	Ⅵ	5.20	7.80	1.97	46.00	43955	未製品
	742	スクレイパー	—	安山岩	E-11	Ⅵ	2.95	6.30	0.78	13.80	16781	
	743	スクレイパー	—	安山岩	F-13	Ⅵ	6.95	8.20	1.50	80.50	13974	

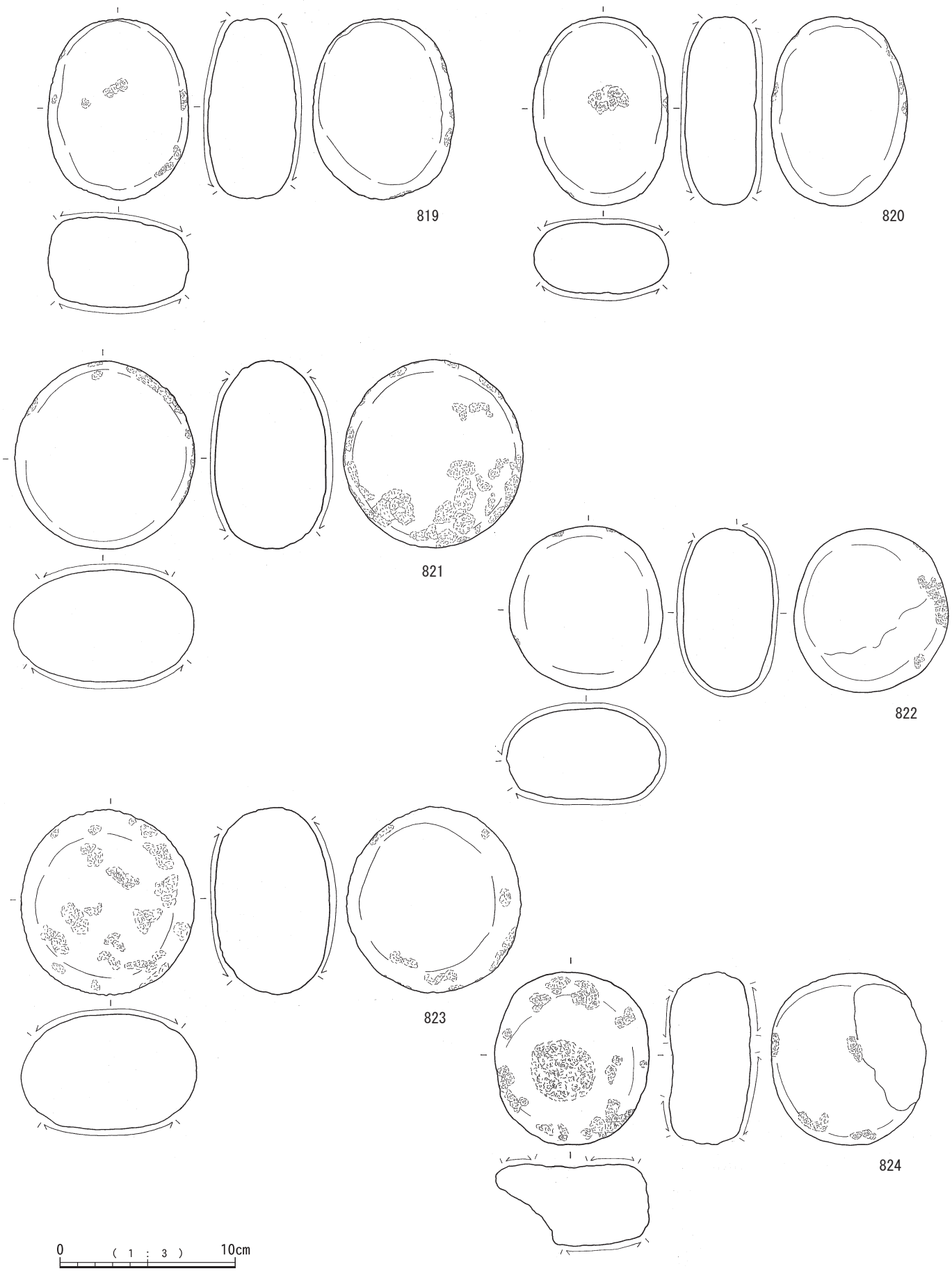
第 23 表　縄文時代早期石器観察表（５）

※（　　）は推定

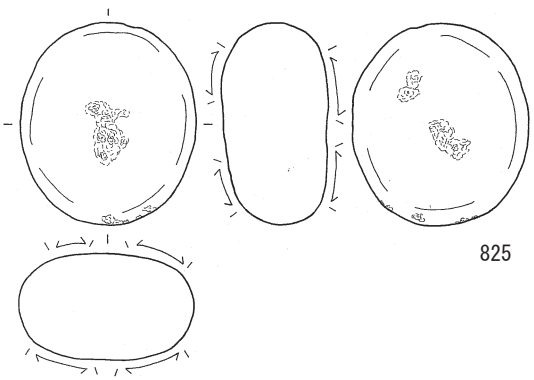
挿図番号	掲載番号	器種	分類	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
155	744	スクレイパー	—	安山岩	K-13	Ⅵ	2.65	(6.20)	0.90	13.00	21796	欠損品
	745	スクレイパー	—	ホルンフェルス	E-13	Ⅵ	3.86	6.70	0.90	22.00	13913	
	746	スクレイパー	—	チャート	F-11	Ⅵ	3.90	5.15	1.50	33.10	35671	
	747	スクレイパー	—	黒曜石Ⅲ	D-19	Ⅵ	2.82	2.63	0.70	3.90	10818	
	748	抉入石器	—	黒曜石Ⅴ	J-7	Ⅵ	3.15	2.05	1.35	7.30	43383	
	749	抉入石器	—	安山岩	F-13	Ⅵ	(1.90)	(4.10)	1.00	7.90	13550	欠損品
156	750	彫器	—	黒曜石Ⅱ	E-8	Ⅵ	1.95	1.35	0.73	1.90	38801	
	751	石錐	—	黒曜石Ⅴ	K-14	Ⅵ	1.50	1.20	0.25	0.40	22835	
	752	石錐	—	安山岩	F-11	Ⅵ	2.75	2.40	0.70	4.50	32409	
	753	石錐	—	黒曜石Ⅲ	D-12	Ⅵ	(1.65)	(1.40)	0.35	0.50	39962	欠損品
	754	石錐	—	黒曜石Ⅴ	E-9	Ⅵ	(2.10)	(1.60)	0.45	0.90	33343	欠損品
	755	石錐	—	黒曜石Ⅴ	D-5	Ⅵ	2.10	2.05	0.85	2.40	20553	
	756	石錐	—	安山岩	G-12	Ⅵ	4.77	2.92	0.76	3.29	16876	
	757	石錐	—	安山岩	G-13	Ⅵ	4.93	3.68	1.10	10.08	14032	
157	758	楔形石器	—	頁岩	E-8	Ⅵ	2.35	2.15	0.60	3.80	38591	硬質頁岩
	759	楔形石器	—	頁岩	G-12	Ⅵ	1.85	2.50	0.88	3.90	15706	硬質頁岩
	760	楔形石器	—	安山岩	H-8	Ⅵ	2.00	3.20	0.95	6.50	44415	
	761	楔形石器	—	黒曜石Ⅴ	F-9	Ⅵ	1.90	1.90	0.92	3.90	34273	
	762	楔形石器	—	安山岩	F-11	Ⅶ	2.43	2.50	1.00	7.10	38028	
	763	楔形石器	—	黒曜石Ⅱ	E-10	Ⅵ	2.20	1.75	0.80	3.10	33288	
	764	楔形石器	—	ホルンフェルス	I-15	Ⅵ	4.00	3.90	1.45	24.40	11947	
	765	楔形石器	—	黒曜石Ⅴ	K-14	Ⅵ	2.45	1.80	0.95	3.00	21714	
	766	楔形石器	—	安山岩	J-13	Ⅵ	4.65	6.50	1.48	48.00	20430	
158	767	二次加工剥片	—	黒曜石Ⅱ	D-12	Ⅵ	1.35	2.30	0.65	1.70	39700	
	768	二次加工剥片	—	黒曜石Ⅴ	J-7	Ⅵ	1.55	2.95	0.80	2.60	44457	
	769	二次加工剥片	—	水晶	F-12	Ⅵ	1.95	2.45	0.85	3.50	15081	
	770	二次加工剥片	—	黒曜石Ⅳ	D-6	Ⅶ	2.30	3.00	1.20	7.10	23467	
	771	二次加工剥片	—	頁岩	C-6	Ⅵ	2.70	2.75	1.30	8.60	23009	硬質頁岩
	772	二次加工剥片	—	黒曜石Ⅲ	F-14	Ⅵ	3.70	2.75	0.90	4.00	14562	
	773	二次加工剥片	—	安山岩	I-8	Ⅵ	3.55	3.15	0.80	7.50	43487	
	774	二次加工剥片	—	黒曜石Ⅴ	F-12	Ⅵ	2.35	1.25	0.45	1.20	15805	
	775	二次加工剥片	—	チャート	K-13	Ⅵ	4.20	4.40	0.85	20.60	21765	
	776	二次加工剥片	—	黒曜石Ⅴ	I-13	Ⅶ	3.55	5.65	1.60	18.60	40802	
	777	二次加工剥片	—	黒曜石Ⅴ	H-12	Ⅵ	5.10	4.75	1.30	27.60	41242	
	778	二次加工剥片	—	安山岩	K-23	Ⅵ	3.75	(5.60)	0.98	15.70	9341	
	779	二次加工剥片	—	安山岩	I-13	Ⅵ	(3.75)	(4.80)	0.75	11.70	42786	
	780	二次加工剥片	—	安山岩	H-13	Ⅶ	4.70	4.45	1.30	24.30	12373	
	781	二次加工剥片	—	安山岩	J-14	Ⅵ	(4.00)	4.95	1.20	24.90	40740	
159	782	使用痕剥片	—	安山岩	F-13	Ⅵ	11.65	11.45	3.08	405.60	13972	
	783	使用痕剥片	—	安山岩	F-13	Ⅵ	13.45	9.70	1.95	234.70	13973	
	784	使用痕剥片	—	安山岩	D-13	Ⅶ	7.90	6.85	1.50	73.90	40090	輝石安山岩
	785	石核	—	安山岩	F-13	Ⅵ	9.65	8.40	3.60	223.90	14211	
160	786	石核	—	黒曜石Ⅳ	F-8	Ⅵ	2.25	2.03	1.07	4.60	38996	
	787	石核	—	黒曜石Ⅵ	F-9	Ⅵ	2.10	2.30	1.60	6.90	32151	
	788	石核	—	黒曜石Ⅲ	H-14	Ⅵ	2.45	2.30	1.95	7.80	12055	
	789	石核	—	珪質頁岩	H-12	Ⅵ	2.85	3.00	1.70	10.50	41566	
	790	石核	—	玉髄	F-10	Ⅵ	2.70	3.45	2.95	18.50	35640	
	791	石核	—	珪質頁岩	E-11	Ⅵ	2.95	4.05	1.75	18.70	17341	
	792	石核	—	玉髄	J-7	Ⅵ	2.65	4.65	1.75	13.57	44455	
161	793	石核	—	安山岩	F-8	Ⅶ	2.65	2.90	1.87	15.60	39407	
	794	石核	—	安山岩	L-14	Ⅵ	2.35	3.75	1.30	10.20	34584	
	795	石核	—	黒曜石Ⅴ	H-17	Ⅵ	3.75	5.30	1.95	29.00	11776	
162	796	石核	—	珪質頁岩	E-11	Ⅵ	6.19	4.71	3.52	80.09	19188	
	797	石核	—	玉髄	E-8	Ⅵ	11.18	11.10	4.90	440.15	38958	
163	798	磨製石斧	—	ホルンフェルス	D-17	Ⅵ	(7.13)	5.20	3.00	113.64	10860	欠損品
	799	磨製石斧	—	ホルンフェルス	I-8	Ⅵ	(5.90)	2.60	1.05	23.40	44594	欠損品
	800	磨製石斧	—	ホルンフェルス	E-12	Ⅵ	10.35	6.35	2.05	156.60	18504	
164	801	磨製石斧	—	ホルンフェルス	I-8	Ⅵ	6.60	8.00	1.40	72.10	43562	
	802	打製石斧	—	頁岩	H-12	Ⅵ	7.85	4.70	0.83	38.50	42267	
	803	打製石斧	—	ホルンフェルス	E-11	Ⅵ	(11.80)	6.20	2.13	156.00	29825	欠損品
	804	打製石斧	—	安山岩	C-5	Ⅵ	(7.25)	(6.70)	1.30	37.20	20161	先端　輝石安山岩
	805	磨製石斧	—	ホルンフェルス	J-7	Ⅵ	12.00	5.90	2.65	205.10	43692	未製品
	806	磨製石斧	—	ホルンフェルス	F-11	Ⅵ	(5.05)	6.15	1.43	60.40	34881	
	807	打製石斧	—	ホルンフェルス	J-14	Ⅵ	14.50	7.50	3.50	370.80	40950	未製品
	808	礫器	—	砂岩	G-15	Ⅶ	11.30	15.15	5.00	639.20	12954	
	809	礫器	—	安山岩	E-9	Ⅶ	11.84	10.20	3.80	538.00	31000	
	810	礫器	—	安山岩	D-13	Ⅶ	9.85	11.52	3.80	604.00	40521	
	811	礫器	—	安山岩	J-13	Ⅵ	12.05	11.25	4.90	816.90	19734	

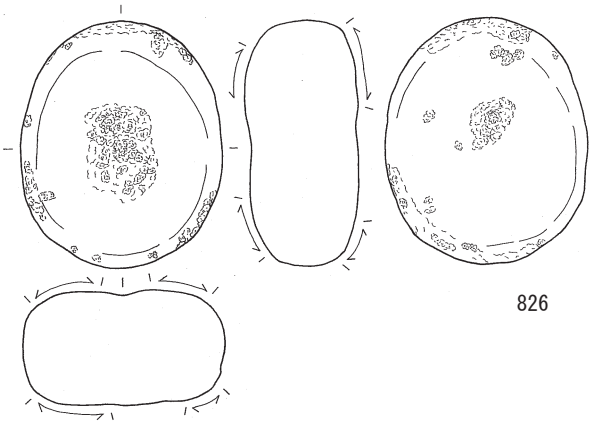


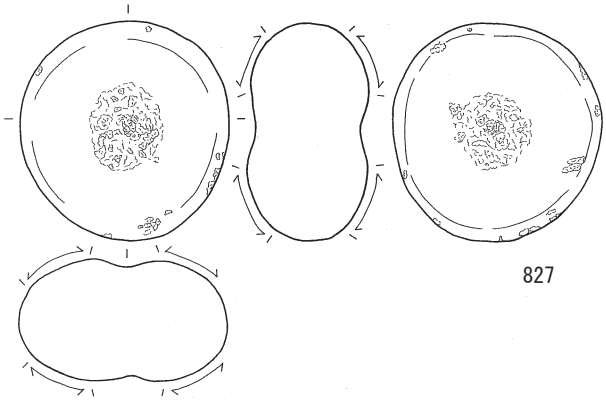
第165図　磨・敲石（１）

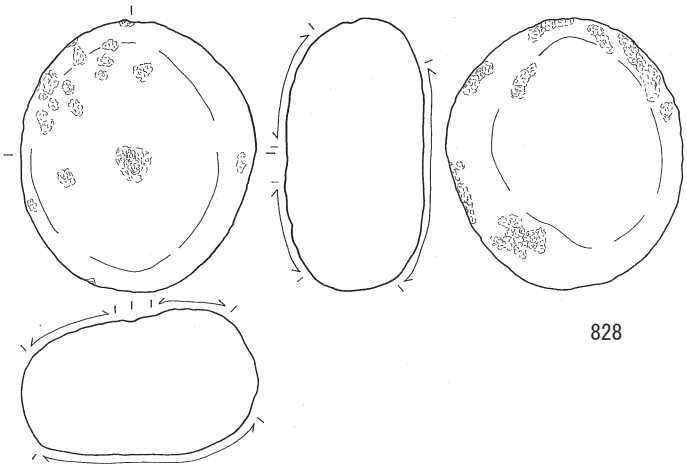


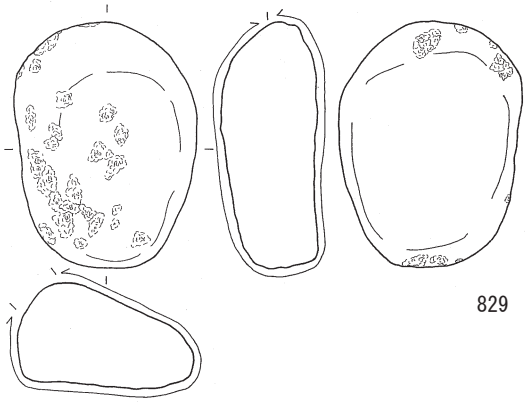
第166図　磨・敲石（２）

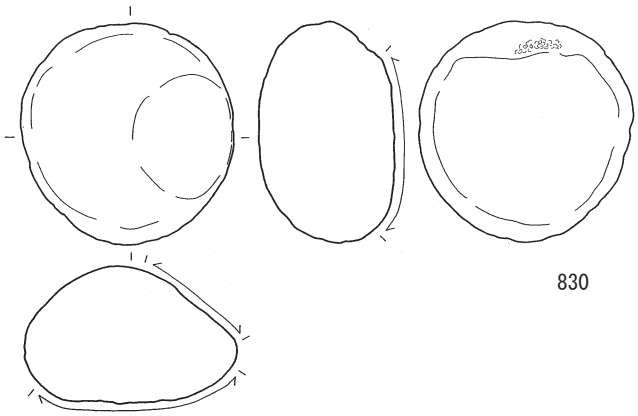


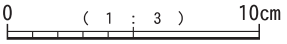




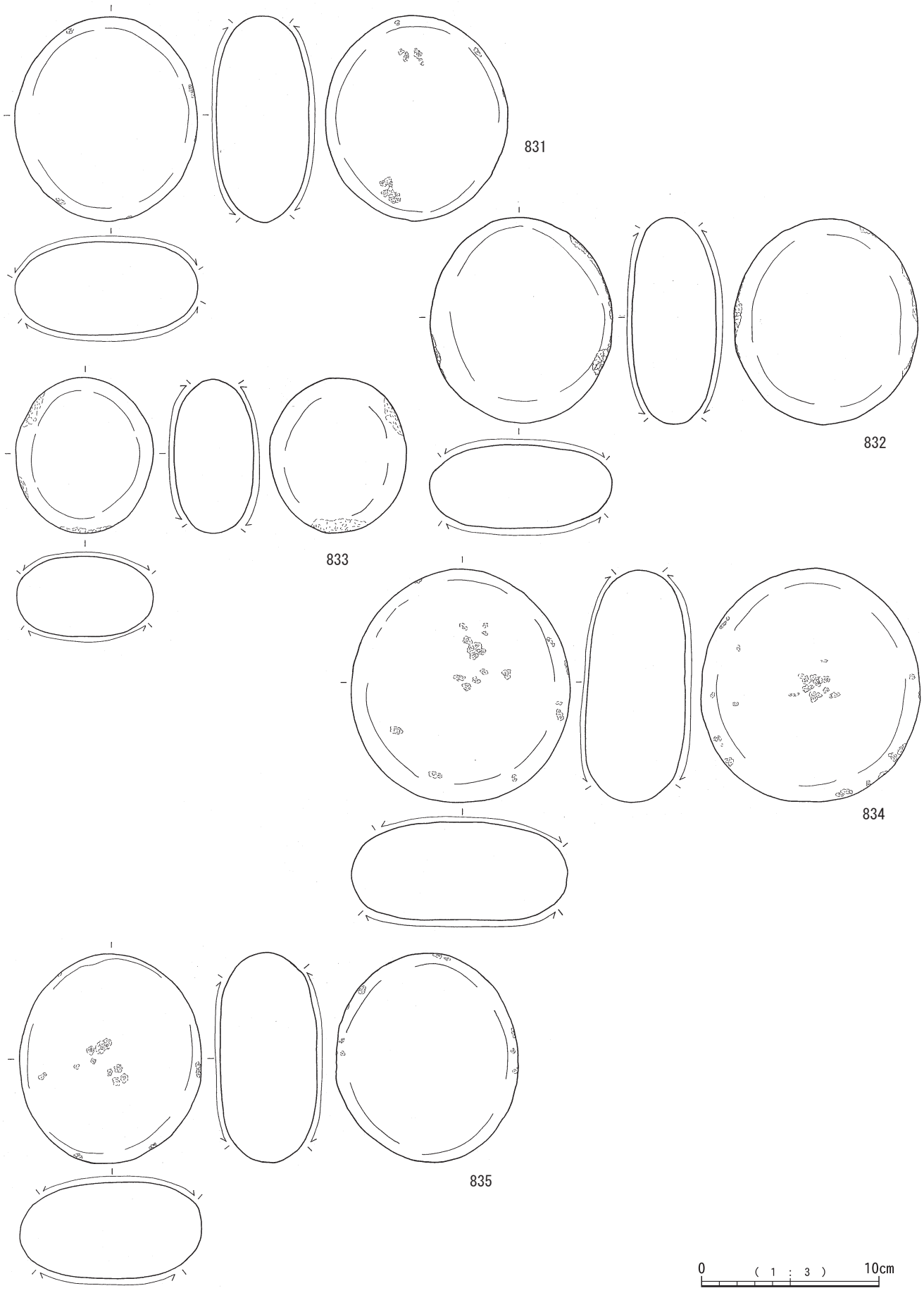




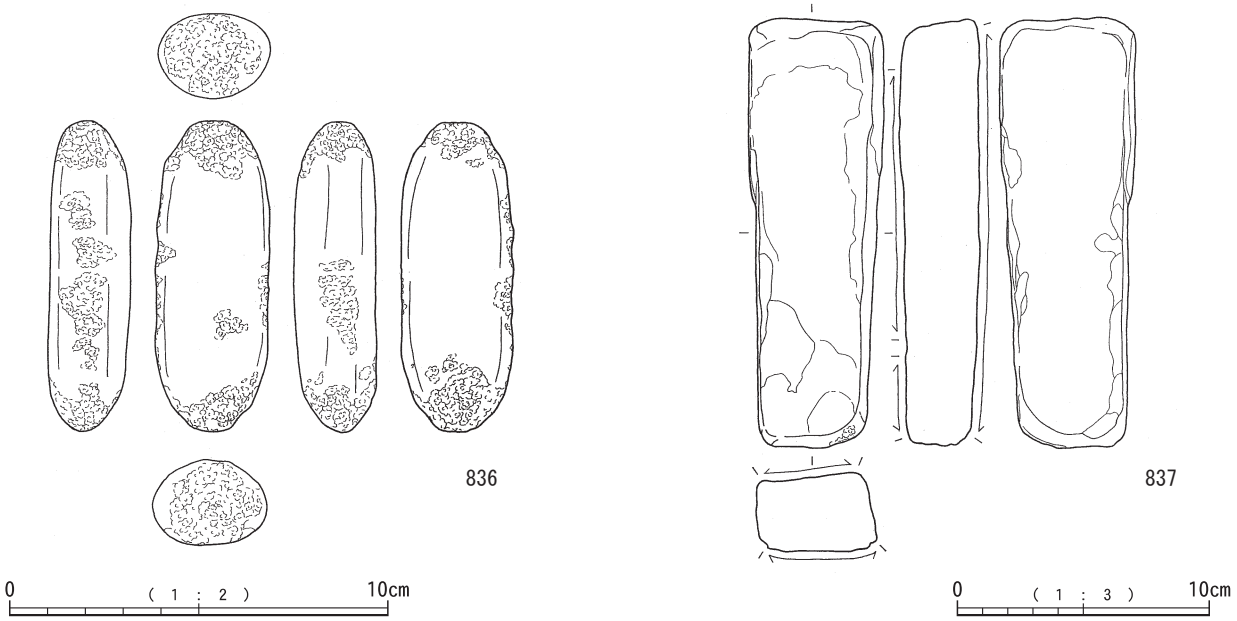




第167図　磨・敲石（３）



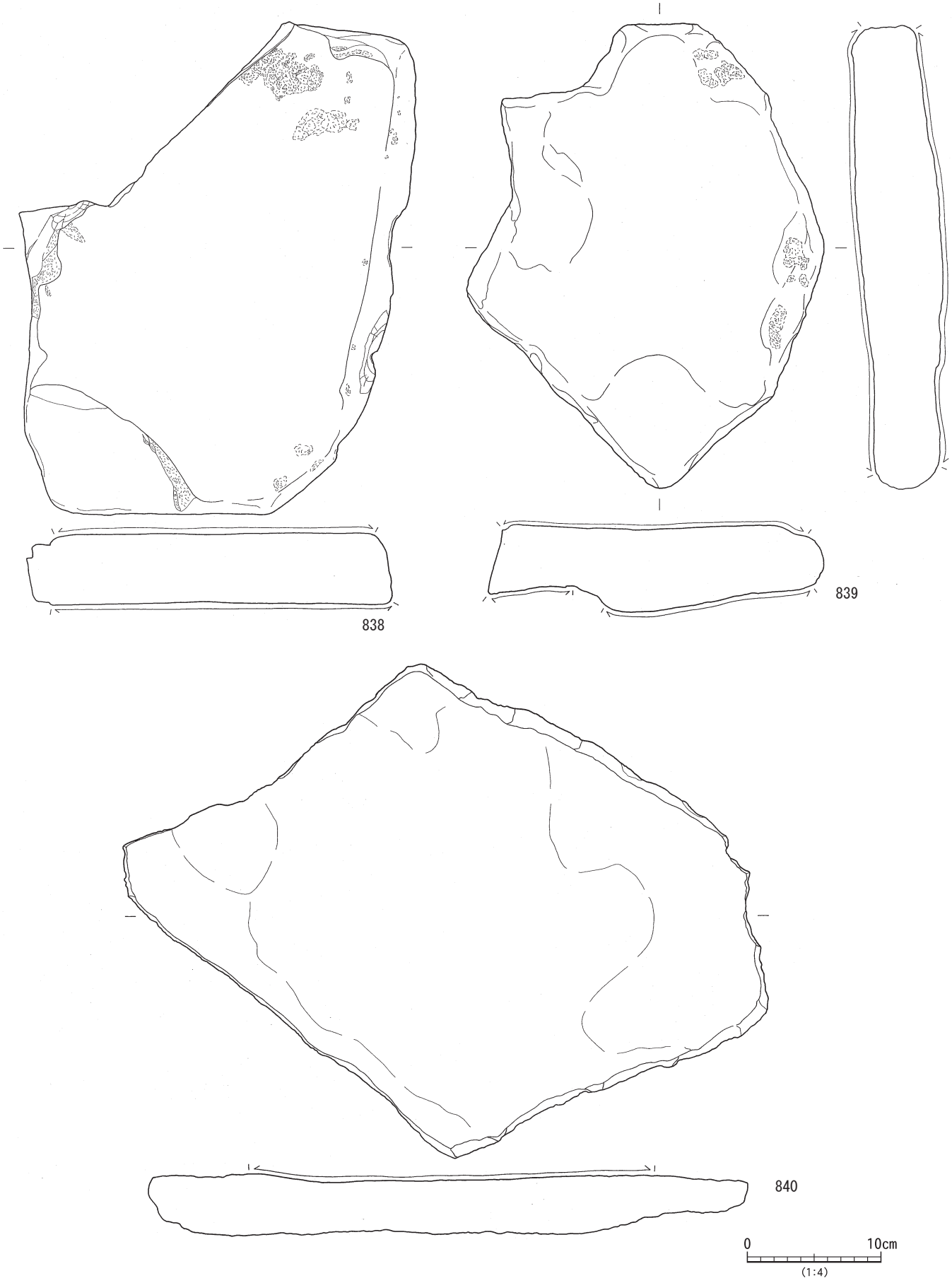
第168図　磨・敲石（４）



第 169 図　棒状敲石・砥石

第 24 表　縄文時代早期磨敲石・石皿等観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
165	812	磨・敲石	砂岩	E-12	Ⅵ	11.4	10.5	4.8	879	19983	
	813	磨・敲石	花崗岩	J-16	Ⅵ	8.1	6.9	3.9	359	12080	
	814	磨・敲石	安山岩	K-19	Ⅶ	11.3	9.3	5.7	960	9942	
	815	磨・敲石	砂岩	F-12	Ⅵ	8.7	7.4	4.4	384	17299	被熱により赤化
	816	磨・敲石	安山岩	I-13	Ⅵ	11.3	10.6	4.2	741	42881	
	817	磨・敲石	砂岩	G-12	Ⅵ	10.0	8.8	5.2	706	19430	
	818	磨・敲石	砂岩	D-11	Ⅶ	9.1	8.3	4.5	482	22314	
166	819	磨・敲石	安山岩	E-13	Ⅵ	10.3	8.0	5.1	589	14337	被熱により赤化
	820	磨・敲石	安山岩	F-11	Ⅵ	10.7	7.7	4.1	527	37162	被熱により赤化
	821	磨・敲石	花崗岩	F-14	Ⅵ	10.7	10.2	6.3	976	14336	
	822	磨・敲石	花崗岩	D-17	Ⅶ	9.4	8.9	5.1	622	10889	
	823	磨・敲石	花崗岩	D-12	Ⅶ	10.5	9.9	6.5	469	40432	
	824	磨・敲石	花崗岩	G-13	Ⅵ	9.8	8.8	4.6	582	16983	凹石　欠損品
167	825	磨・敲石	砂岩	H-8	Ⅵ	8.0	7.0	4.2	323	44642	凹石
	826	磨・敲石	砂岩	E-12	Ⅵ	9.7	8.0	4.5	553	18923	凹石
	827	磨・敲石	砂岩	F-8	Ⅵ	8.6	8.3	4.8	475	39139	凹石
	828	磨・敲石	花崗岩	D-10	Ⅶ	10.7	9.4	5.7	825	23078	凹石
	829	磨・敲石	花崗岩	G-13	Ⅵ	9.7	7.2	4.2	409	19024	被熱により赤化
	830	磨・敲石	安山岩	F-10	Ⅶ	8.7	8.3	5.4	474	36579	被熱により赤化
168	831	磨石	安山岩	E-14	Ⅵ	11.5	10.2	5.2	927	13888	
	832	磨石	安山岩	D-12	Ⅵ	11.5	10.2	4.7	829	40136	
	833	磨石	安山岩	E-11	Ⅵ	8.8	7.7	4.5	446	19187	
	834	磨石	砂岩	F-11	Ⅵ	13.1	12.3	5.6	1280	37144	被熱により赤化
	835	磨石	砂岩	I-13	Ⅵ	11.7	10.2	5.4	963	40984	
169	836	棒状敲石	砂岩	E-12	Ⅵ	8.3	3.0	2.3	82	19626	
	837	砥石	砂岩	F-15	Ⅵ	16.9	5.3	3.2	499	12958	
170	838	石皿	砂岩	G-8	Ⅵ	37.1	29.9	5.4	9900	44667	
	839	石皿	花崗岩	K-20	Ⅵ	35.0	26.8	7.0	7900	9798	被熱により赤化
	840	石皿	花崗岩	D-12	Ⅵ	48.4	37.1	4.8	9640	40135	被熱により赤化



第 170 図　石皿

第３節　縄文時代前期～晩期の調査

１　調査の概要

縄文時代前期以降の遺物包含層であるⅡ層は畑地造成のため，広範囲で削平されており，遺物包含層は部分的に残存するのみであった。出土遺物も相対的に少なく，15 点を図化した。また，関連する遺構は検出されなかった。

２　遺物（土器）（第 171 図　841 ～ 847）

841 は胴部の外反する部分で，棒状の工具による横位の連続刺突文を３条施し，下部には沈線文の施文帯を施すものである。調整は内外面ともに貝殻条痕後にナデである。縄文時代前期相当の轟Ｂ式土器である。

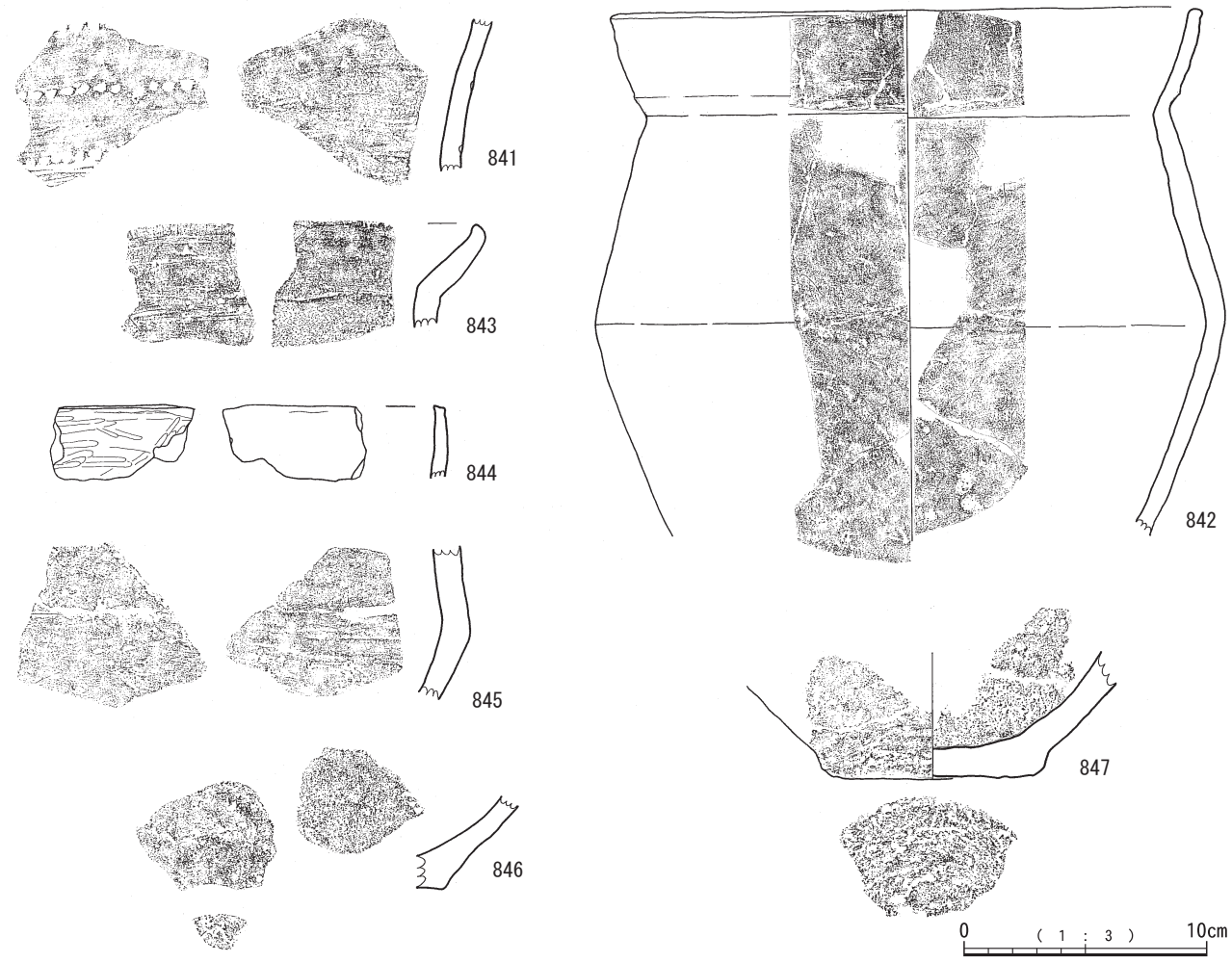
842 は口縁部から胴部である。頸部で屈曲し，内面に稜を形成し外傾する。口縁部は，わずかに肥厚し，やや内湾気味に形成され，外面の頸部との境目付近には緩い稜を形成する。胴部で逆「く」の字状に屈曲しながら張り出し，底部に向かい直線的にすぼまる器形である。内外面にはミガキ調整が施される。胎土は石英・雲母（黒）が多く混入する。色調は褐色である。入佐式土器である。

843 は口縁部である。頸部で屈曲し，内面に稜を形成し外傾する。頸部外面には稜を形成せず滑らかに立ち上がり，外傾する。口縁部はわずかに内湾し，口縁端部は平坦に形成される。内外面には粗いミガキ調整が施される。842 と比較すると胎土・焼成は粗く，石英・雲母（金），２～３㎜大の白礫が多く混入する。色調は褐色であり，外面には薄く煤が付着する。後期末の黒色磨研土器の破片と考えられる。

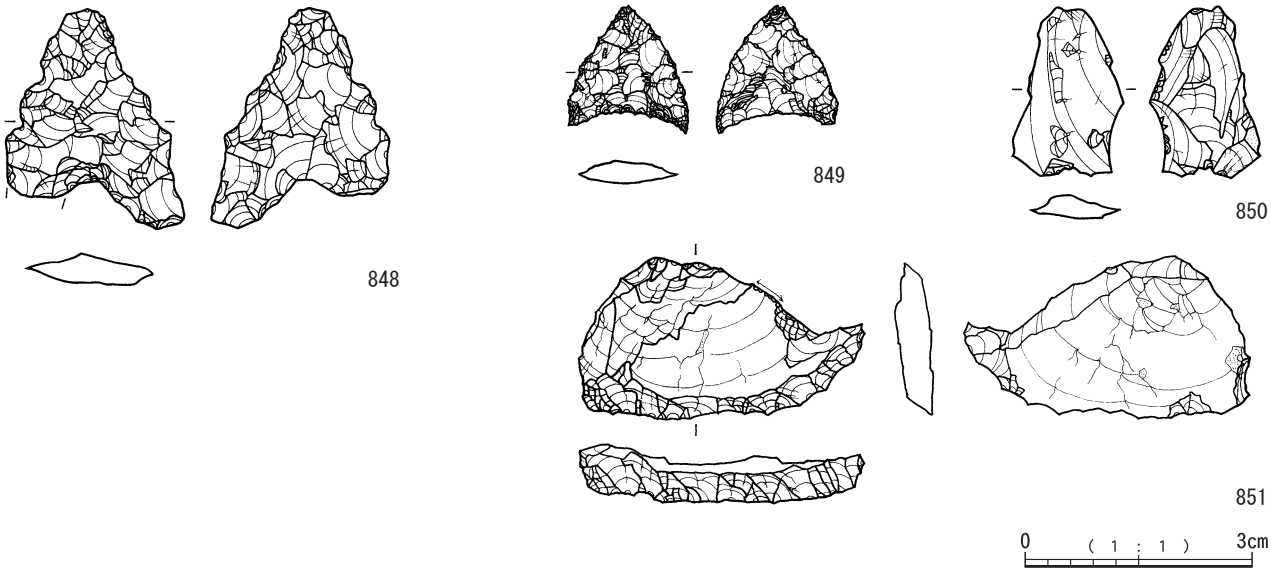
844 は内外面ヘラミガキのマリ形土器の口縁部にあたる。黒色磨研土器の器種にもあるが，土器型式は不明である。

845 は胴部である。胴部で張り出し，逆「く」の字状に屈曲する。屈曲部外面には稜を形成する。外面にはミガキ調整，内外面ともに屈曲部より上位にはミガキ調整が，下位にはケズリ調整が施される。色調は，外面は褐灰色で，内面は褐色を呈する。入佐式土器であろう。

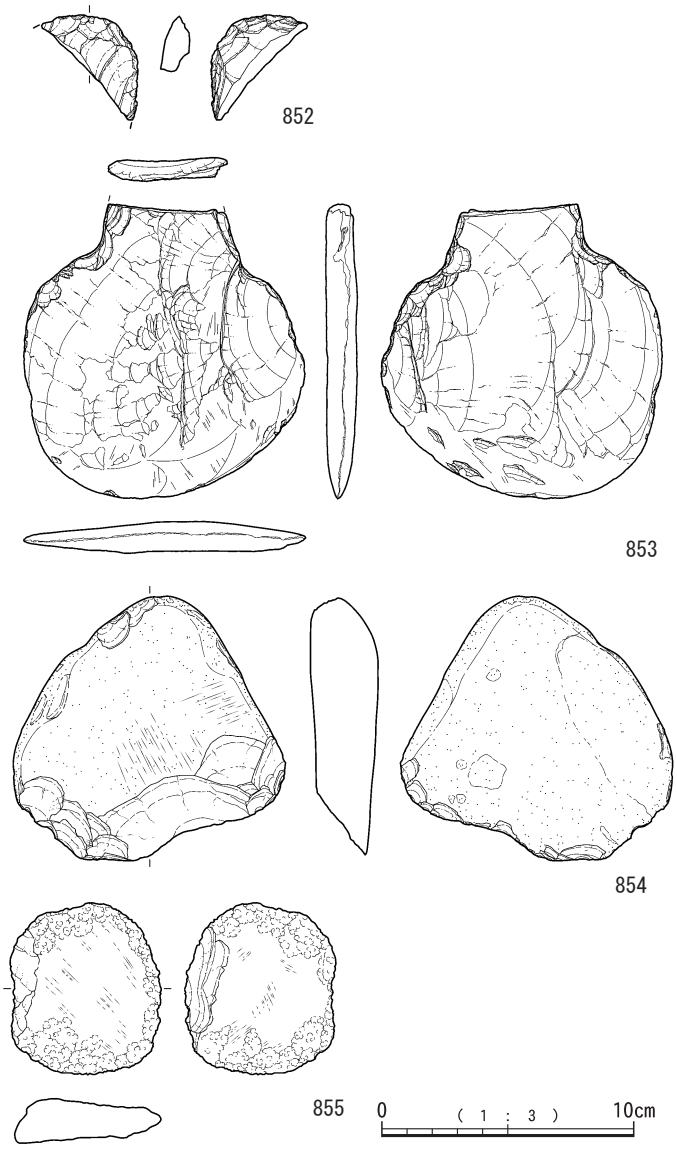
846，847 は平底の底部である。大きく外傾しながら立ち上がり，接地面近くには，軽いくびれを形成する。外面には粗めのケズリ調整が，内面にはナデ調整が施される。846 は５㎜大の灰色や褐色の礫が混入する。内面



第 171 図　縄文時代前期～晩期　土器



第 172 図　縄文時代前期～晩期　石器（１）



第 173 図　縄文時代前期～晩期　石器（２）

には煤が付着する。847 は底径約９cmである。１㎜大の石英，２～３㎜大の白色礫を中心とした混和剤が砂状に混入する。色調は外面がにぶい橙，内面が褐灰色である。底面には一部布目圧痕が確認できる。繊維圧痕であれば，晩期の黒川式土器の時期とも考えられる。

３　遺物（石器）（第 172・173 図　848 ～ 855）

848，849 は打製石鏃である。848 は針尾産の黒曜石で，片方の脚を欠損するが二等辺三角形の形状を呈していたと考えられる。抉りの部分は深く丁寧な剥離で加工されているが，その他の部分の剝離は粗い。849 は桑ノ木津留産と思われる黒曜石を丁寧な剥離により，やや湾曲した側辺と浅い基部の抉りを作出している。850 は灰黒色で不純物の少ない良質の腰岳産と思われる黒曜石の剥片である。その形状と剥離から，石鏃の素材剥片の可能性もある。851 は玉髄のエンドスクレイパーである。横剥ぎの剥片の形状を活かして，下辺に刃部をつくる。

852 は，砂岩製の打製石斧の基部である。周縁には，丁寧な剥離が施されている。背面には擦れた痕跡が残る。

853 はホルンフェルスの打製石斧の刃部で，ラケット状の形で基部が欠損したものである。刃部は使用により摩耗している。

854 はホルンフェルス製の礫器である。正面下部に連続的な剥離を行うことで刃部を作出している。裏面下部には調整剥離痕が，上面には敲打痕が確認できる。

855 は花崗岩製の磨・敲石である。上面・下面には敲打痕が，正面には磨面が確認できる。下面は両面から打ち欠いたような形状でありやや尖っているが，風化が著しく，打点・剥離痕は不明瞭で図化できなかった。

第 25 表　縄文時代前期～晩期土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	型式等	出土区	層位	部位	色調		主文様・調整等		胎土								取上番号	備考
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	白粒	黒粒	赤粒	その他		
171	841	深鉢	轟B	E-20	Ⅱf	胴部	にぶい褐	にぶい橙	連続刺突文・沈線文	貝殻条痕後ナデ	○	○	○						10531	連続刺突
	842	深鉢	入佐	E-7 E-8 G-7	Ⅱc, Ⅱd	口縁～胴部	褐	褐灰	ミガキ	ミガキ	○			○	○	○	○		14694他	無文
	843	深鉢	黒色磨研	K-22	Ⅱc	口縁	褐	にぶい黄褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	○			○	○	○	○		8997	無文・外面煤付着・口唇部(ﾐｶﾞｷ)
	844	マリ形	不明	E-21	Ⅱd	口縁	黒	黒褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	○	○		○					8624他	無文
	845	深鉢	入佐	E-21	Ⅱe	胴部	褐灰	褐	上位ミガキ・下位ケズリ	上位ミガキ・下位ケズリ	○				○				8631	無文
	846	深鉢	不明	E-21	Ⅱd	底部	にぶい橙	褐灰	ケズリ	ナデ	○								8626	無文・内面煤付着
	847	深鉢	不明	F-20 F-21	Ⅱe, Ⅱd	底部	にぶい橙	褐灰	ケズリ	ナデ	○	○			○				8618他	無文・布目圧痕

第 26 表　縄文時代前期～晩期石器観察表

※（　）は推定

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
172	848	石鏃	黒曜石Ⅲ	E-9	Ⅱf	(2.90)	2.35	0.45	1.80	14801	欠損品
	849	石鏃	黒曜石Ⅱ	I-21	Ⅱd	1.60	1.28	0.30	1.10	9070	
	850	剥片	黒曜石Ⅳ	E-9	Ⅱe	2.25	1.45	0.35	0.50	14768	
	851	掻器	玉髄	E-8	Ⅱf	2.15	3.75	0.75	4.48	14773	
173	852	打製石斧	砂岩	G-19	Ⅱd	(4.10)	(3.80)	1.18	14.00	9950	欠損品
	853	打製石斧	ホルンフェルス	E-18	Ⅱd	(11.50)	11.05	1.15	194.00	9999	欠損品
	854	礫器	ホルンフェルス	D-6	Ⅱf	10.45	10.80	4.50	393.00	14699	
	855	磨・敲石	花崗岩	E-8	Ⅱd	6.30	5.95	3.40	112.76	14702	風化著しい

第４節　弥生時代の調査

１　調査の概要

弥生時代の遺構・遺物は，Ⅱａ層からⅡe層で検出・出土している。Ⅱ層は黒色土で１ｍ以上の厚さがあり，色調の違いで６層に細分している。

検出された遺構は，竪穴建物跡５軒，土坑１基である。

遺物は，竪穴建物跡から甕形土器や壺形土器，砥石，軽石製品等が出土している。

２　遺構

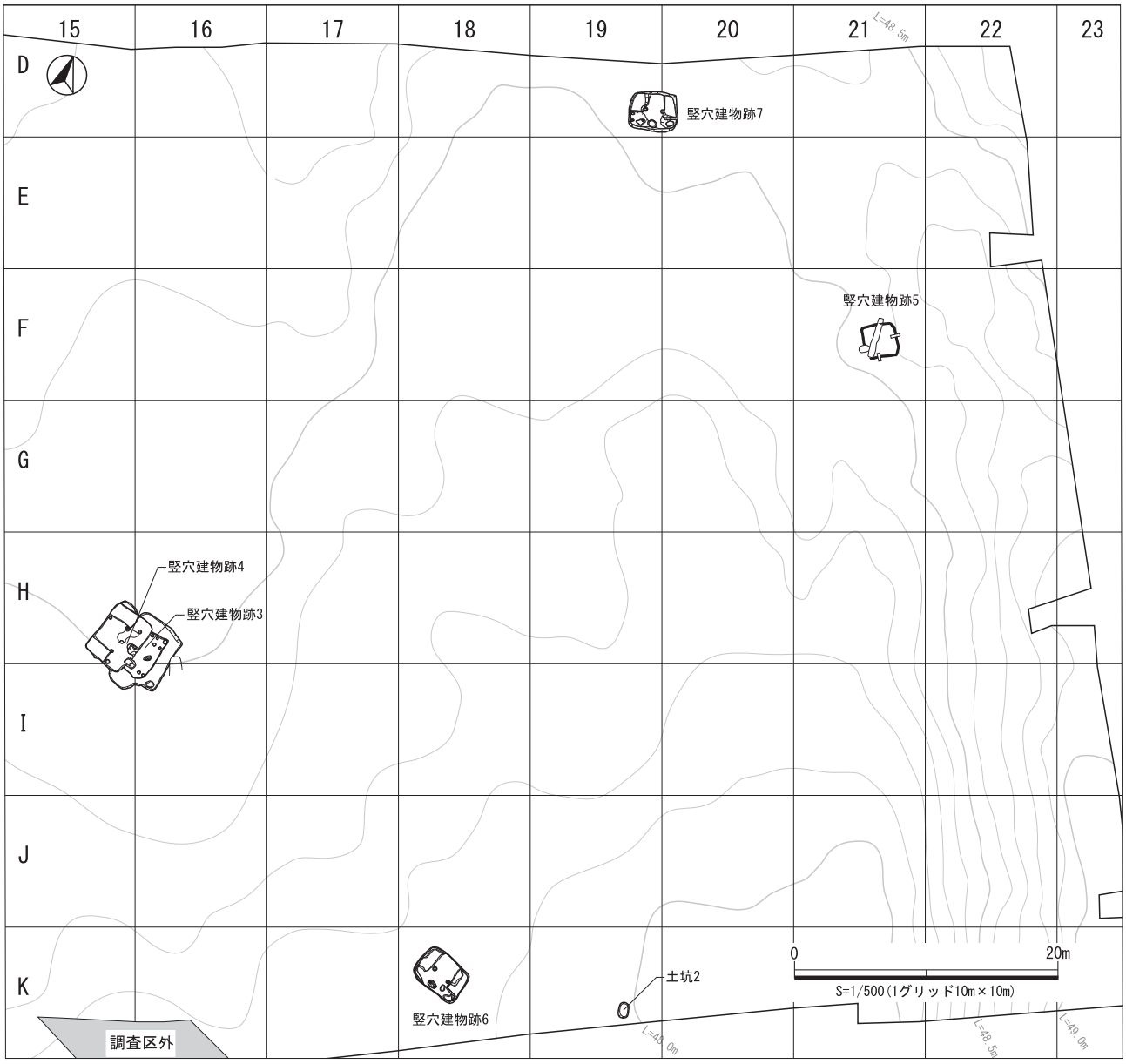
（１）竪穴建物跡３号（第 176 図）

遺跡のほぼ中央Ｈ・Ｉ－15・16 区，Ⅱｅ層で検出された。竪穴建物跡３号は竪穴建物跡４号に切られている。建物跡の平面形は，竪穴建物跡４号により西端部を失ったため，この部分の詳細は不明である。長軸は 581 ㎝である。埋土は，Ⅱｄ層由来のやや粘性のある黒色土で，よくしまる。

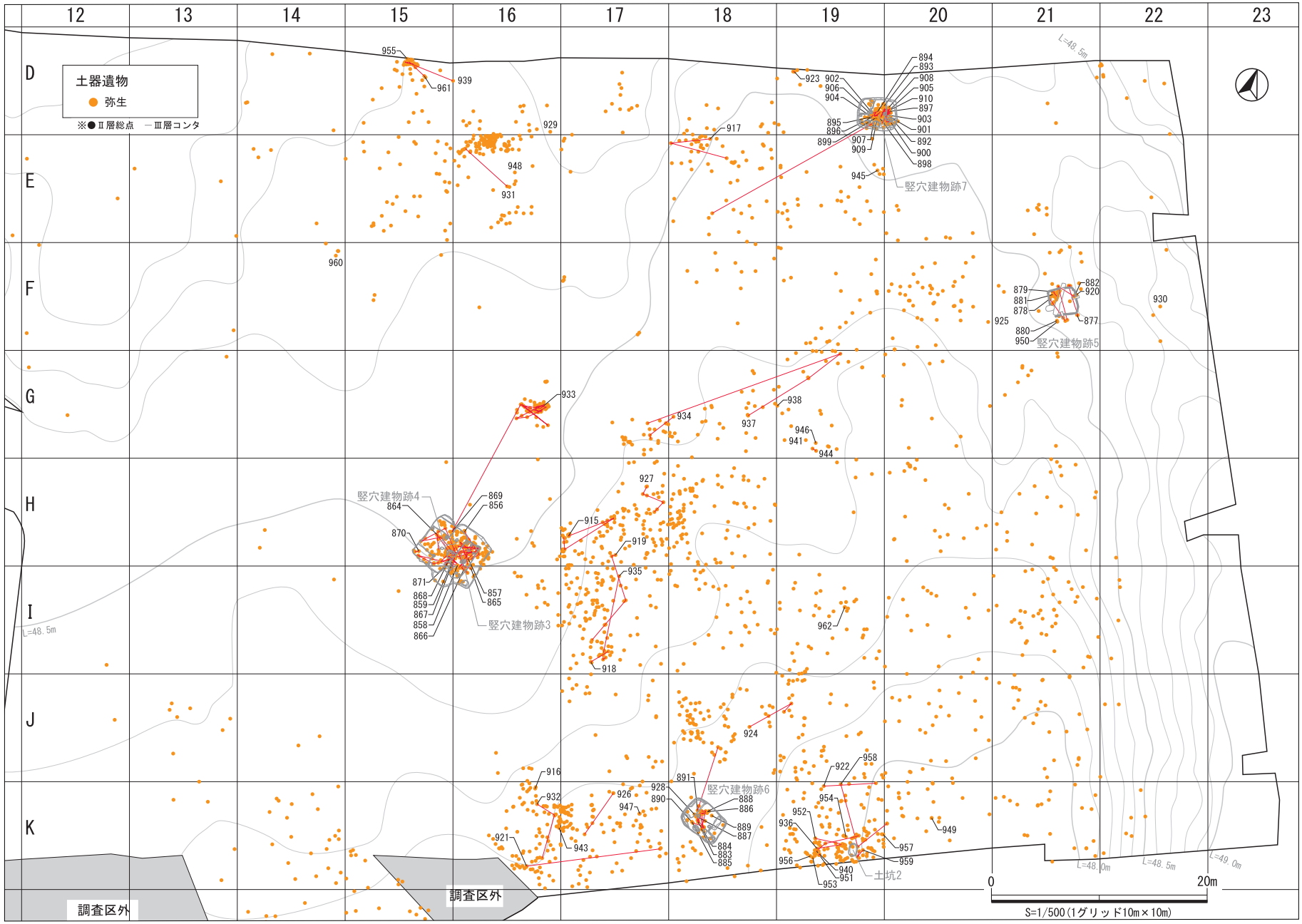
遺構に伴う柱穴のようなピットは確認できなかった。

出土遺物（第 177 図　856 ～ 863）

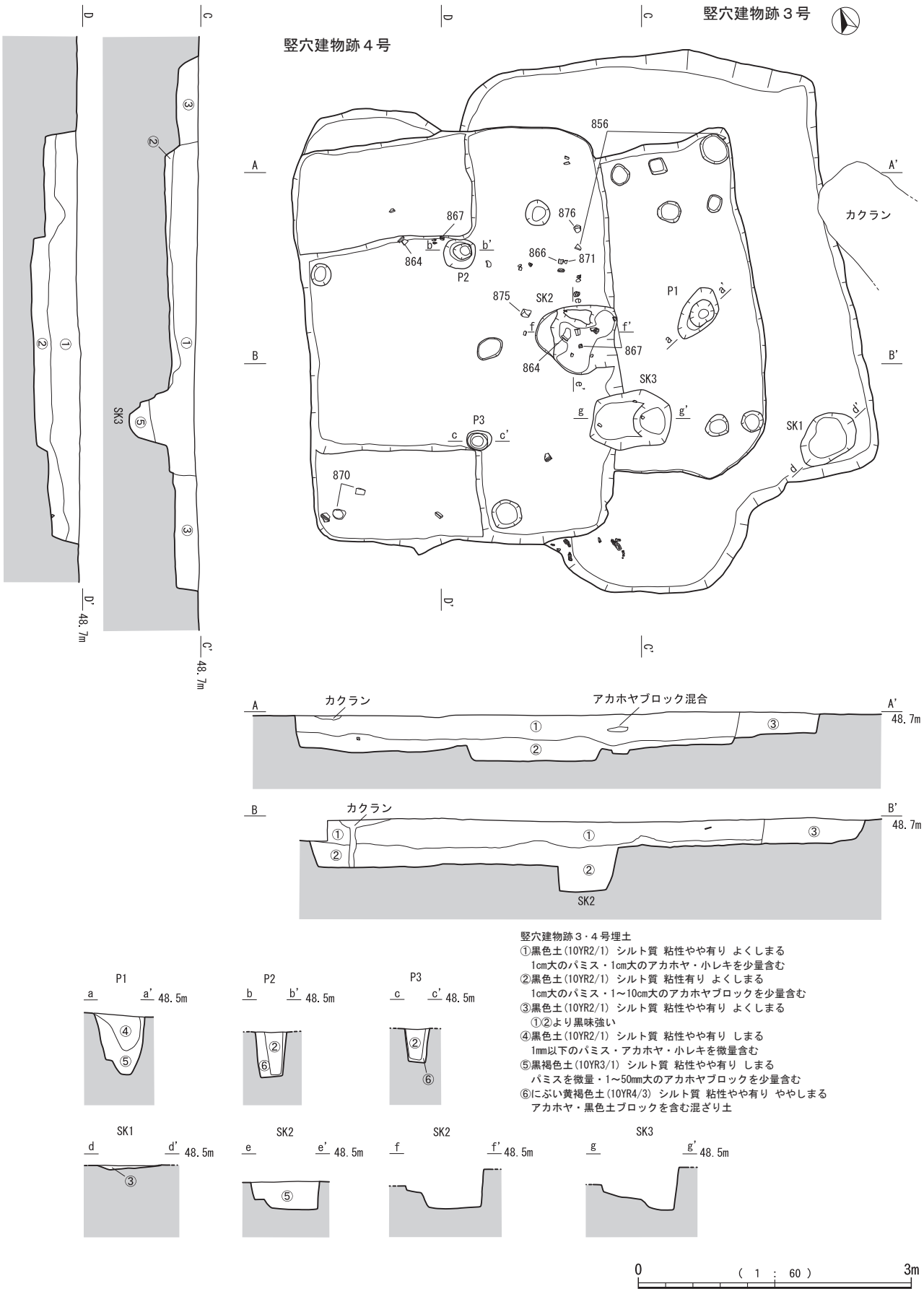
遺物は，甕形土器や軽石製品等が出土した。856 は口径 29.0 ㎝の甕である。口縁部がやや上方へ起き上がり，口唇部は浅くへこむ。胴部には３条の突帯を施している。内外面の調整はナデで，内面に指頭圧痕がある。857 は口縁部である。856 と同様，口径 29.0 ㎝の甕で，口縁部がやや上方へ起き上がり，口唇部は浅くへこむ。胴部には突帯が１条だけ確認でき，外面に煤が付着している。858 は壺形土器の頸部だと見られる。内外面の調整はナデである。859 は壺形土器の胴部である。内面に爪のような連続した調整が見られる。860 は磨製石鏃未製



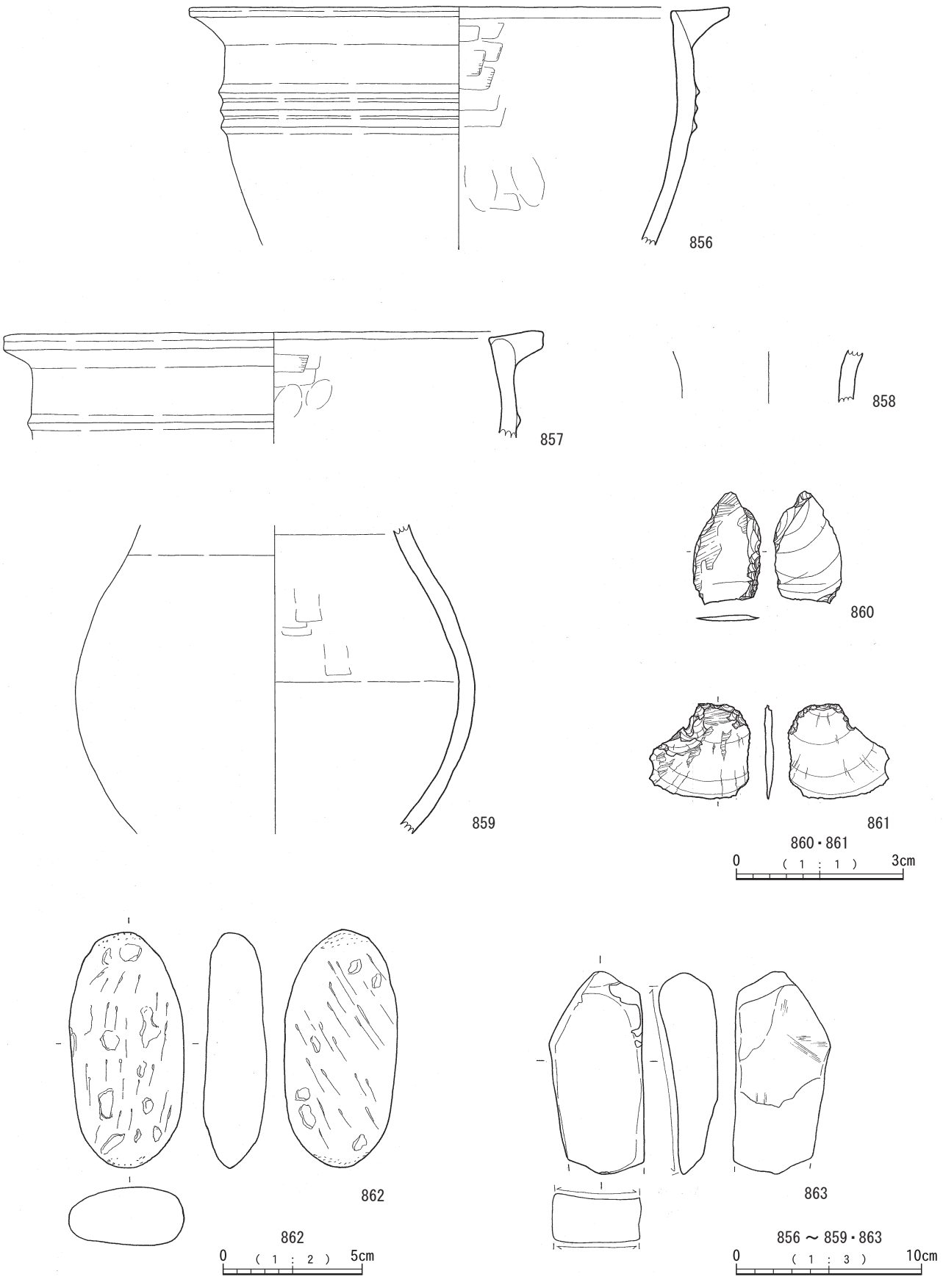
第 174 図　弥生時代　遺構配置図



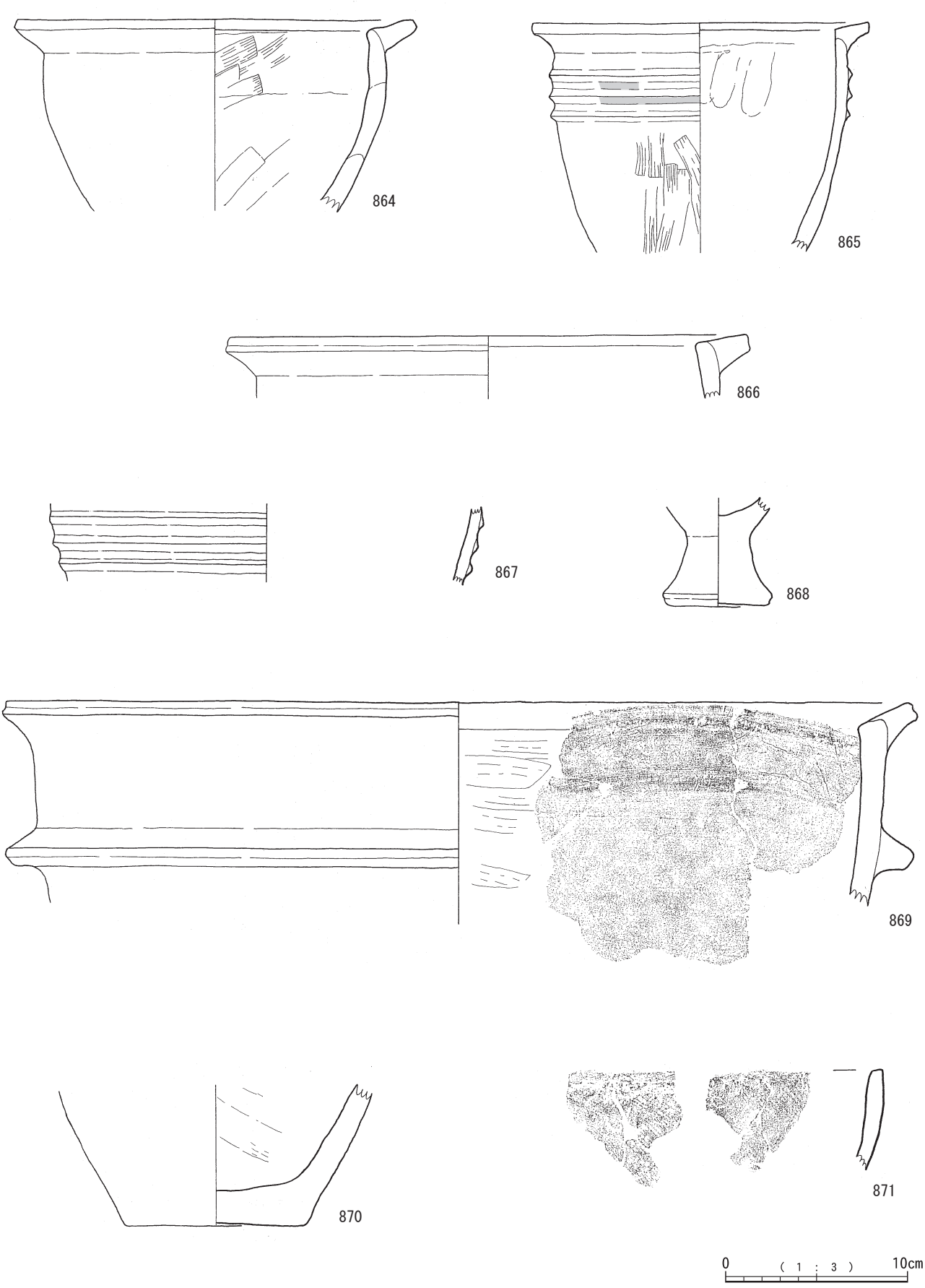
第 175 図　弥生時代　遺物出土状況図



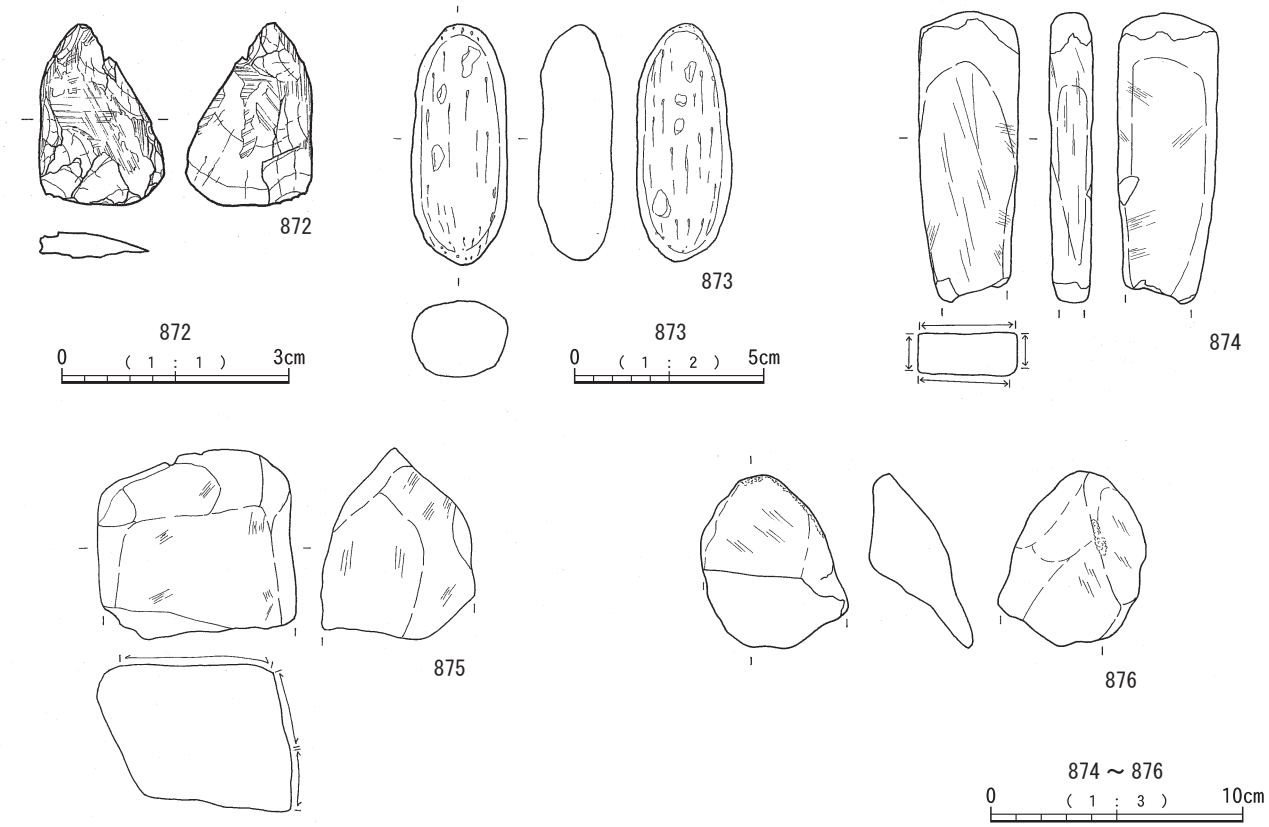
第 176 図　竪穴建物跡３号・４号　出土状況



第 177 図　竪穴建物跡３号　出土遺物



第 178 図　竪穴建物跡４号　出土遺物（１）



第 179 図　竪穴建物跡４号　出土遺物（２）

品である。861 は二次加工剥片である。862 は使用痕のある軽石製品である。長さが 8.4 ㎝ある。863 は砥石で，２面に砥面を形成する。

（２）竪穴建物跡４号（第 176 図）

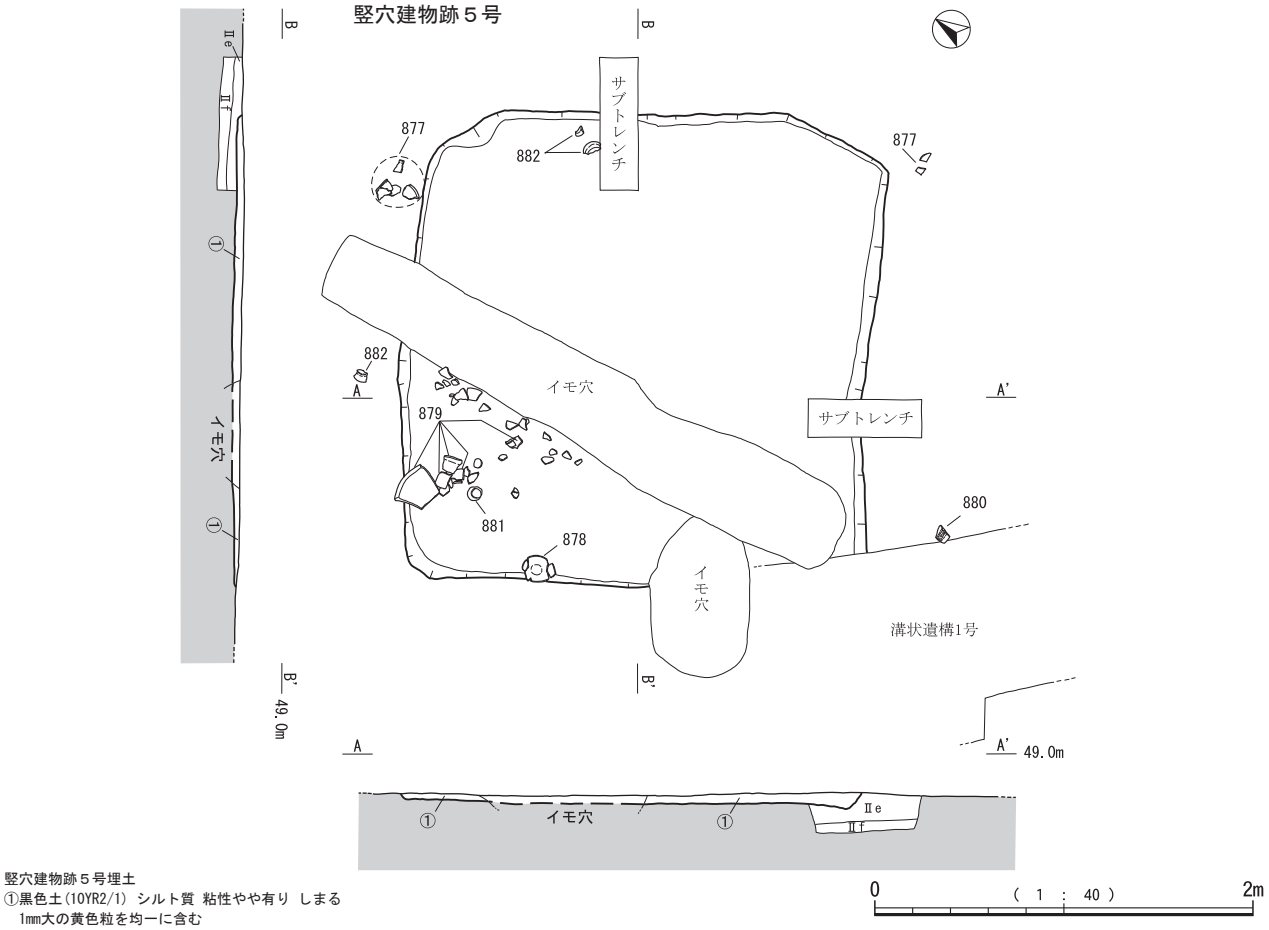
Ｈ・Ｉ－15・16 区，Ⅱｅ層で検出された。竪穴建物跡４号が竪穴建物跡３号を切っている。建物跡の平面形は，長軸 488 ㎝，短軸 463 ㎝で，隅丸方形と東側に張り出し部分がある。埋土は，やや粘性があり，よくしまる黒色土で，１㎝大のパミスや１㎝下のアカホヤ粒子，さらに，小礫を 15％含んだ①と，粘性があり（①より強い），よくしまる黒色土で，１㎝大のパミスや１～ 10 ㎝大のアカホヤブロックを 20％含む②であった。どちらの層もアカホヤがブロック状に混じった土がベースであった。

遺構に伴う柱穴のようなピットは確認できなかった。

出土遺物（第 178・179 図　864 ～ 876）

遺物は，甕形土器や砥石等が出土した。864 は甕形土器である。口縁部が「く」の字状に起き上がる。865 も甕形土器である。口縁部が「く」の字状に起き上がり，口唇部が浅くへこむ。断面三角形で高さ２～３㎜の突帯を３条胴部に施す。866 は口径 28.0 ㎝の甕形土器で，865 と同様，口縁部が「く」の字状に起き上がり，口唇部が浅くへこむ。外面に煤が付着している。867 は胴部で，断面三角形で高さ２～３㎜の突帯を３条胴部に施す。外面に煤が付着している。868 は平底の底部である。底径 5.2 ㎝である。869 は大型の甕形土器の口縁部である。口径が 49.6 ㎝で，口縁部が「く」の字状に起き上がり，口唇部が浅くへこむ。高さ約２㎝の突帯が１条確認でき，その頂上は口唇部同様，浅くへこんでいる。内面は横位にハケメを施した後，ナデ調整を行っている。870 は大型の甕形土器の平底気味の底部である。底部の厚さが約 2.0 ㎝，底径が 10.0 ㎝である。底部から起き上がる内面に斜位のハケメ調整が確認できる。871 は鉢の口縁部である。上部外面に煤が付着している。外面はハケメ，内面はナデ調整で，指頭圧痕が見られる。

872 は磨製石鏃未製品である。石材は頁岩である。873 は軽石製品である。下面と左側面には斜位の浅い溝が，それぞれ３条見られる。874 は手持ち砥石である。全体を研磨によって整形している可能性がある。正面と裏面，左側面は凹面が形成され，砥面として利用されている。875 も手持ち砥石である。裏面・左側面に凹面が形成され，砥面として利用されている。被熱による赤化が見られる。876 はホルンフェルス製の磨・敲石である。正面右側と上部に敲打痕が見られる。下部は破損している。



第 180 図　竪穴建物跡５号　出土状況

（３）竪穴建物跡５号（第 180 図）

Ｆ－ 21 区，Ⅱe層中～下位で検出された。約 220cm×220cmの略方形プランで検出面から床面までの深さは 10cm未満と浅い。Ⅱe層と埋土の区別は難しく，遺物集中がなければ見逃すところであった。床面に関しても判断は難しく，南・東の２か所にサブトレンチを入れて立ち上がりの把握に努めた。炭化物の集中や赤化，柱穴についても確認できなかった。炭化物は１点のみ床面で取り上げた。

遺構に伴う柱穴のようなピットは確認できなかった。

出土遺物（第 181 図　877 ～ 882）

遺物は，鉢形土器と甕形土器が出土した。877 は口径 15.4 cmの鉢である。口縁部が「く」の字状に起き上がる。胴部上部内面に指頭圧痕が確認できる。外面には煤が付着している。878 は口径 15.0 cm，器高 8.1 cmの鉢である。完形に復元できた。調整は内外面ともナデで，内面底部付近に指頭圧痕が確認できる。外面には煤が付着している。879 は口径 27.8 cmの鉢である。口縁部が「く」の字状に起き上がり，口唇部が浅くへこむ。調整は内外面とも工具ナデである。外面には煤が付着しており，放射性炭素年代測定値は，補正年代（暦年較正用）値で 2090 ± 20BP，暦年較正年代値（２σ）は，cal BC170 ～ BC44 という結果であった。880 は甕形土器の胴部で，断面三角形の貼付突帯を２条巡らせる。調整は内外面とも工具ナデである。881 は底径 7.0 cmの甕形土器の底部である。底部の調整はナデである。胴部の外面は縦位の工具ナデ，内面はケズリで器壁の荒れが見られる。882 も甕形土器の底部である。底部の調整は内外面ともナデである。胴部の外面は縦位または斜位の工具ナデ，内面はナデである。

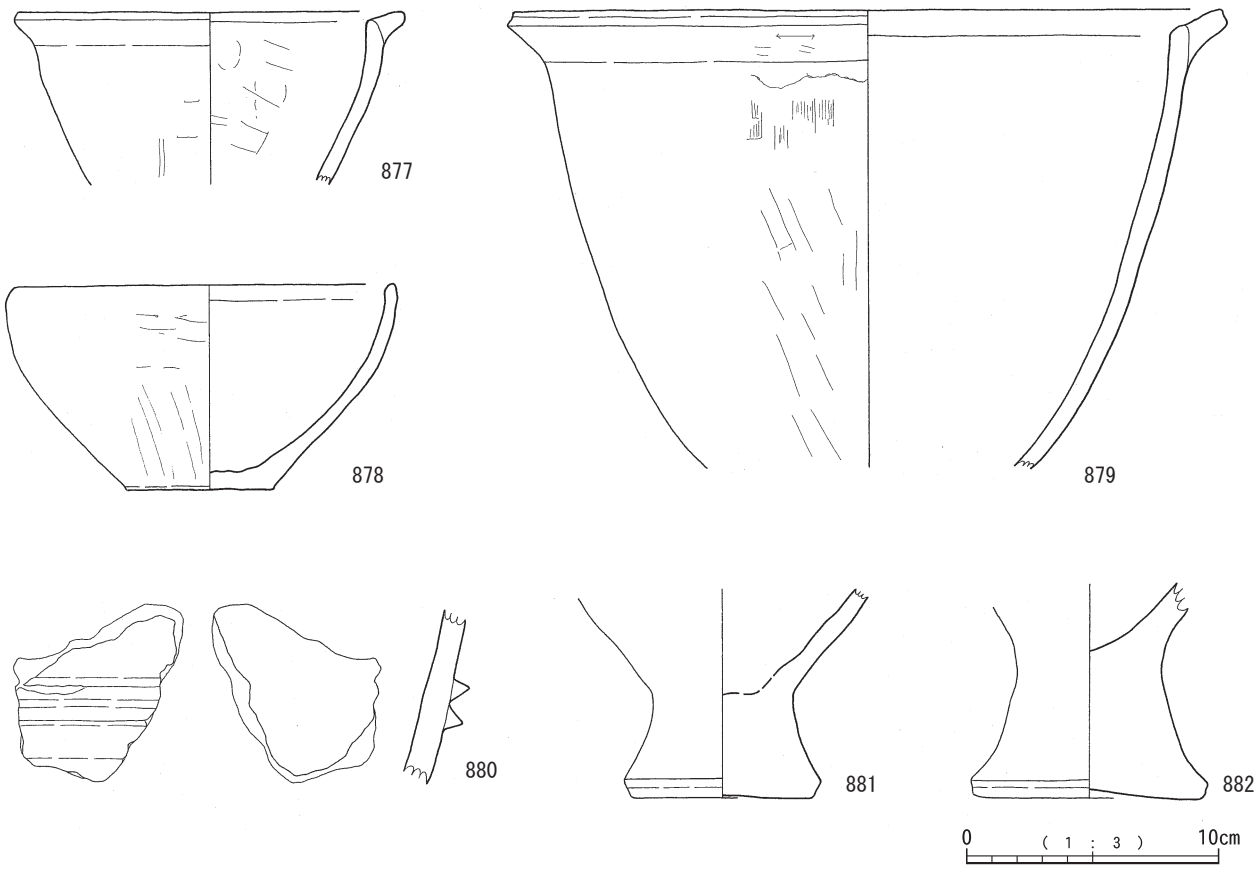
（４）竪穴建物跡６号（第 182・183 図）

Ｋ－ 18 区，Ⅱｅ層で検出された。埋土②は埋土①と比べてやや茶色味が強い。中央の深い部分に見られた。埋土②の下部で硬化面を検出し，埋土だと考えられる。

遺構に伴う柱穴のようなピットは確認できなかった。

出土遺物（第 184・185 図　883 ～ 891）

遺物は，甕形土器や台付き甕形土器が出土した。883 は台付き甕形土器である。口径が 24.6 cm，器高 22.3 cmで，口縁部がやや上方へ起き上がり，口唇部は浅くへこ



第 181 図　竪穴建物跡５号　出土遺物

む。胴部には断面三角形で高さ約３㎜の突帯を３条施している。内外面とも煤が付着している。底部は底径 7.0 ㎝の平底である。外面の調整はハケメ，内面は工具ナデ後ナデで指頭圧痕が確認できる。884 も台付き甕形土器で，口径が 28.0 ㎝，器高 29.0 ㎝である。口縁部は，大部分で剥離が見られる。胴部には断面三角形で高さ２～３㎜の突帯を３条施している。底部は底径 8.6 ㎝の平底である。調整は内外面ともハケメ調整である。外面には煤が付着している。885 は甕形土器の口縁部である。３条の突帯を施している。外面はナデ，内面は指頭圧痕が確認できる。886，887 は甕形土器の口縁部である。口縁部が「く」の字状に起き上がり，口唇部がへこむ。内面には指頭圧痕が見られ，外面には煤が付着している。886 は断面三角形で高さ２～３㎜の突帯を３条胴部に施す。888 は口径 28.2 ㎝の甕形土器の口縁部から胴部にかけてである。口縁部が「く」の字状に起き上がり，口唇部がややへこむ。断面三角形で高さ３～５㎜の突帯を３条胴部に施す。外面はハケメの後で指頭圧痕によりナデ消されている。外面には煤が付着している。放射性炭素年代測定値は，補正年代（暦年較正用）値で 2070 ± 20BP，暦年較正年代値（２σ）は，cal BC165 ～ AD ５という結果であった。889 は台付き甕形土器で平底の底部である。工具で面取りしながら整形した後，ナデ調整を行っている。890 は甕形土器の平底の底部である。外面の調整は工具ナデ，内面はハケメで指頭圧痕がある。平底の外側は剥離が見られる。891 は口径が 35.2 ㎝の壺形土器の口縁部である。口唇部がややへこみ，直径約 2.3 ㎝で高さ２～３㎜の円形の浮文を貼り付けてある。調整はヘラミガキである。

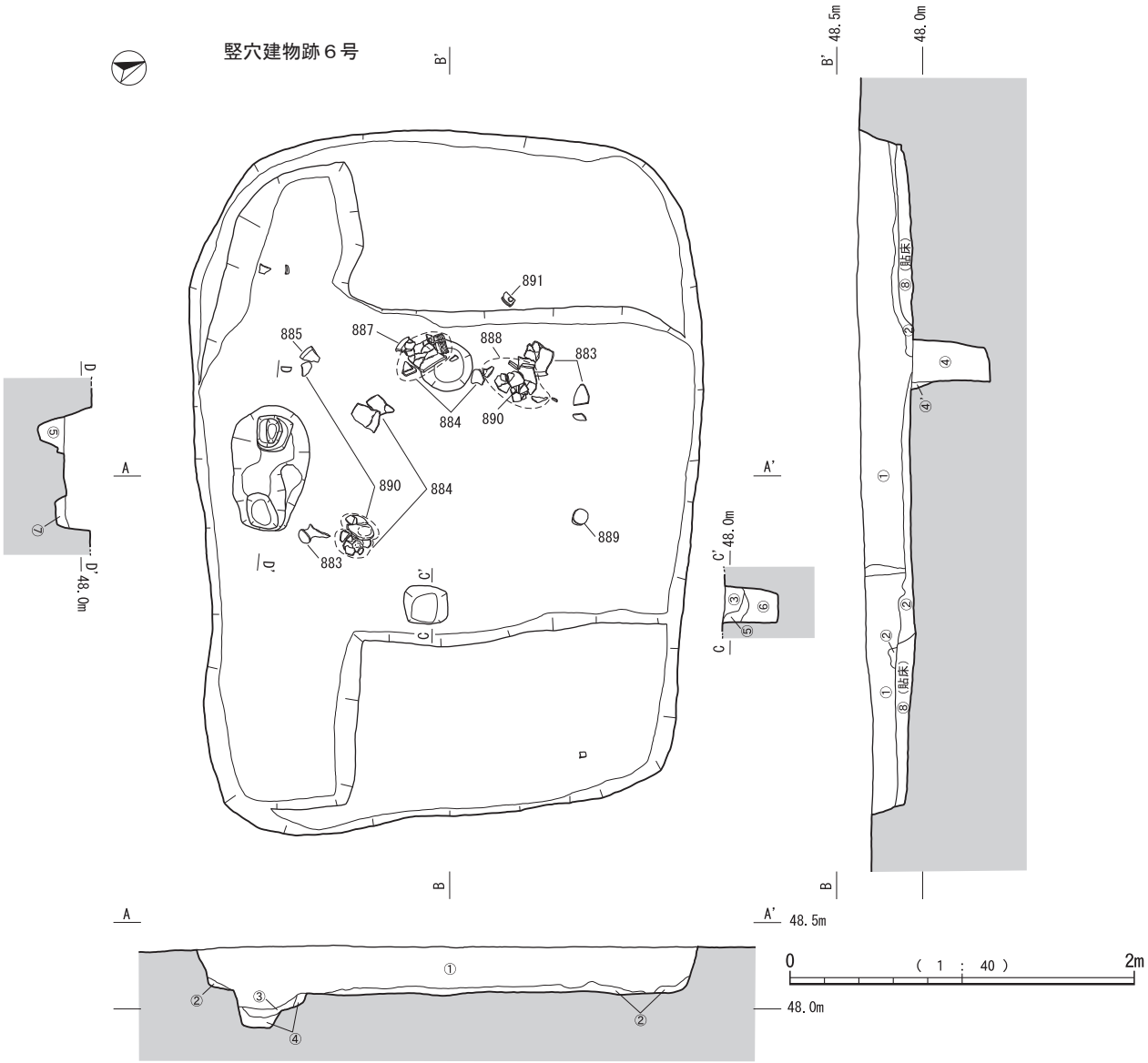
（５）竪穴建物跡７号（第 186・187 図）

Ｄ－ 19・20 区，Ⅱｄ層で検出された。建物跡の平面形は，長軸 380 ㎝，短軸 308 ㎝の隅丸方形で，深さは 44 ㎝ある。埋土は，７つに分層できた。

遺構に伴う柱穴のようなピットは確認できなかった。

出土遺物（第 188 ～ 191 図　892 ～ 914）

遺物は，甕形土器や壺形土器，砥石等が出土した。892 は大型甕形土器の口縁部である。口縁部が「く」の字状に起き上がり，口唇部が浅くへこむ。内外面共にナデ調整である。893 は甕形土器の胴部である。断面三角形で高さ４～７㎜の突帯を３条施す。外面の調整はナデ，内面はハケメの後でナデられている。指頭圧痕が見られる。外面には煤が付着している。894，895，896 は甕形土器の口縁から胴部である。口縁部が「く」の字状に起き上がり，口唇部が浅くへこむ。調整は内外面ともハケメとナデで，外面には煤が付着し，内面には指頭圧痕がある。



竪穴建物跡６号埋土
① 黒褐色土(10YR3/1) シルト質 粘性やや有り よくしまる
5～20mm大のパミスを微量・1mm大の赤色粒・小レキ・鉱物片を含む
② 黒褐色土(10YR3/2) シルト質 粘性やや有り よくしまる
5mm大のパミス・1～5mmのにぶい黄褐色(10YR4/3)粒を微量・
1mm大の小レキ・鉱物片を含む
③ 黒褐色土(10YR3/1) シルト質 粘性やや有り しまる
1mm前後のアカホヤを少量含む
④ 黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性有り しまる
1～3cm大のアカホヤを少量・軽石を微量含む
④' 黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性有り しまる
5cm前後のアカホヤブロックを多量含む
⑤ 黒褐色土(10YR3/1) シルト質 粘性やや有り しまる
1mm前後のアカホヤが多量混じる
⑥ 黒褐色土(10YR3/1) シルト質 粘性強い しまる
アカホヤが多量混じる
⑦ 黒褐色土(10YR3/1) シルト質 粘性やや有り しまる
3～5cm大のアカホヤブロックが少量混ざる
⑧ (貼床)黒色土(10YR1.7/1) シルト質 粘性やや有り しまる
20mm大の硬化面をブロック状に微量含む 池田火山灰・パミ
スを少量・5mm前後のレキ片を多量含む

第 182 図　竪穴建物跡６号　出土状況

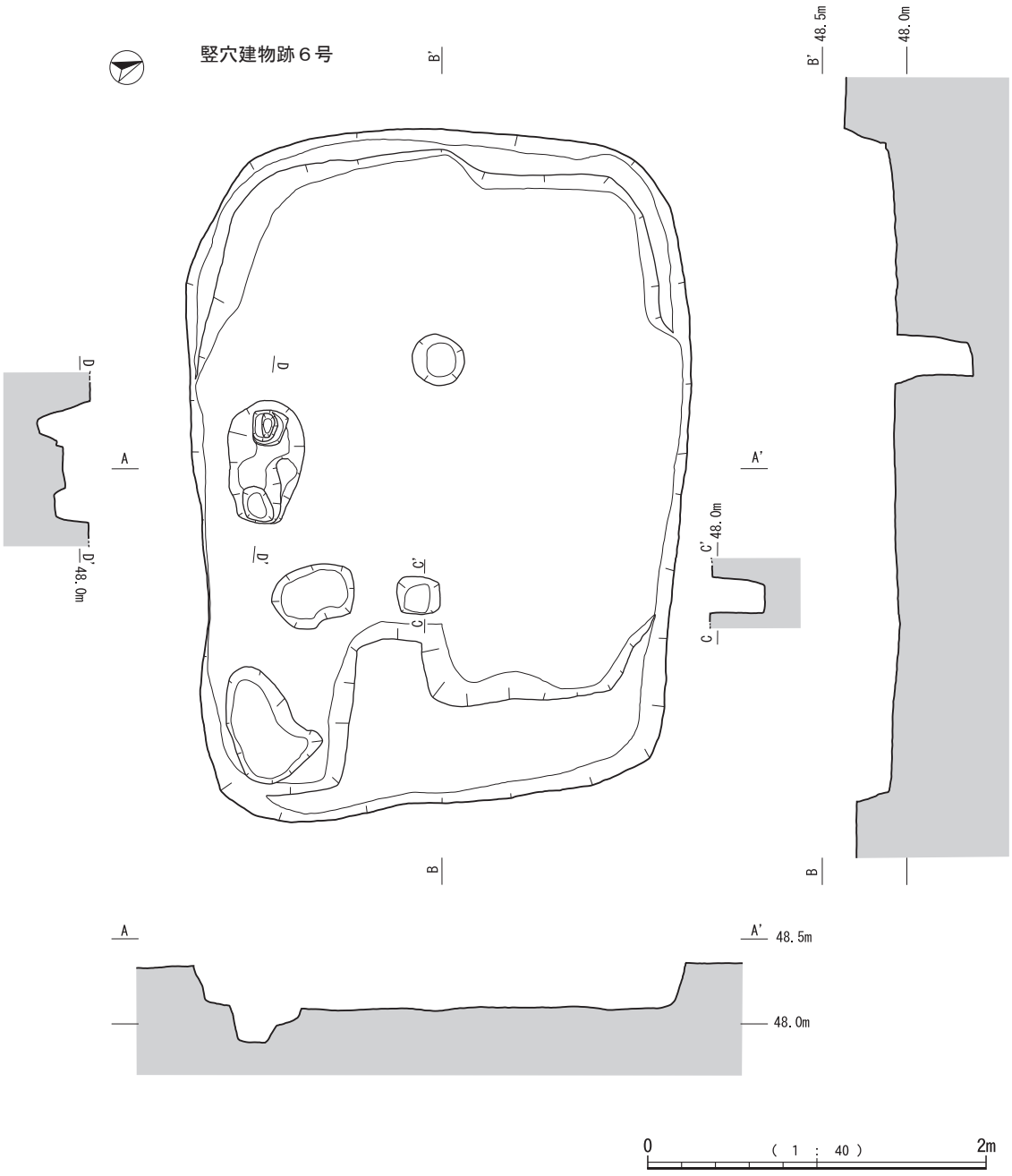
894 の胎土には金雲母がかなり多く見られる。894 の口径は 24.0 ㎝，895 は口径が 30.0 ㎝，896 は口径が 30.4 ㎝である。

897 は台付き甕形土器である。口径 25.2 ㎝，底径 7.4 ㎝，器高 27.2 ㎝で，完形に復元できた。口縁部が「く」の字状に起き上がり，口唇部が浅くへこむ。断面三角形で高さ約３㎜の突帯を３条胴部に施す。底部は平底で，口唇部と同じように周囲がややへこむ。外面の調整は工具ナデ，ハケメで，内面はナデである。内外面に少し煤が付着し，外面には所々に剥落が見られる。

898，899，900，901，902，903 は甕形土器の底部である。898，899，900，901 はハケメ調整が見られる。898 はややあげ底気味の底部である。他は平底である。

904 は壺形土器の口縁部から頸部である。口径が 17.4 ㎝で，口唇部がややへこむ。直径約 1.1 ～ 1.5 ㎝で高さ１～３㎜の円形の浮文を１個または２個一単位で，口縁部に貼り付けてある。頸部でくびれ，胴部が張ってくる。胴部には４条の突帯を施している。外面の調整はミガキとハケメで，内面はナデである。

905 は甕形土器の胴部である。剥離が多い３条の突帯



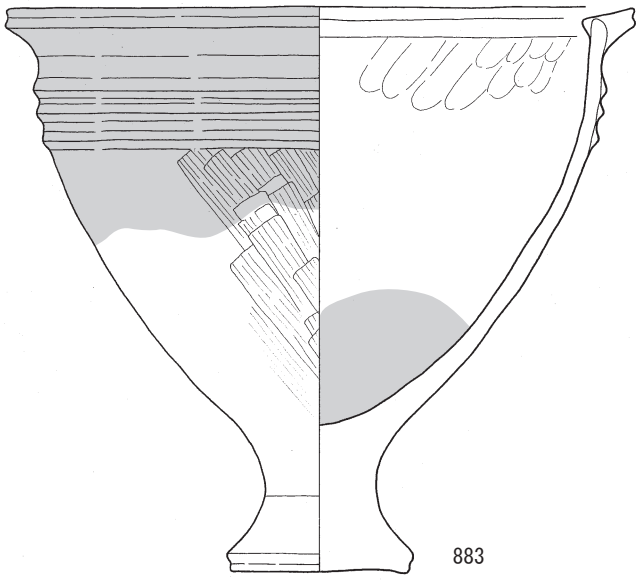
第 183 図　竪穴建物跡６号　掘り方

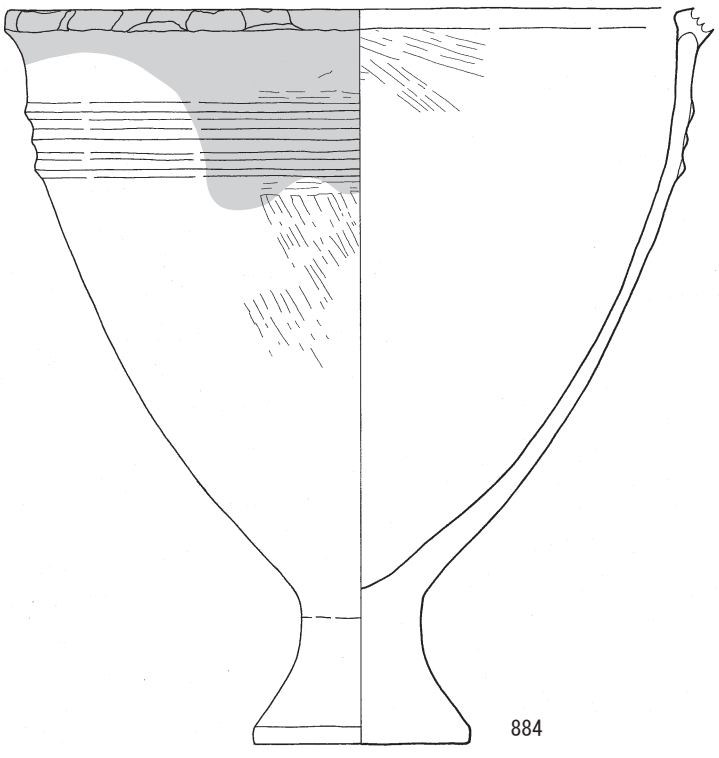
の下に，煤が付着している。外面の調整はハケメ，内面はナデである。906 も甕形土器の胴部である。剥離が多いが，４条の突帯を施している。外面の調整はハケメ，内面はハケメ後ナデ消しである。胎土などから 904 と同一の可能性も考えられる。907，908，909 は甕形土器の平底の底部である。底部から胴部の張りに向けて外側に開いていく。910 は壺形土器で，底径 6.0 ㎝である。胴部から湾曲していく平底の小さな底部である。

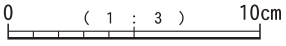
911 は軽石製品である。平らな面が５面確認できる。目的・用途等については不明である。912 は手持ち砥石である。安山岩製で，表裏面ともに平らな砥面が形成されている。913 は砂岩製の磨・敲石である。各面とも中心と側面付近に敲打痕が見られる。914 は砂岩製の石皿である。大部分が欠損しているが，表面は平坦で滑らかである。左側面部に擦痕が見られることから砥石として使われていた可能性も考えられる。

（６）土坑２号（第 192 図）

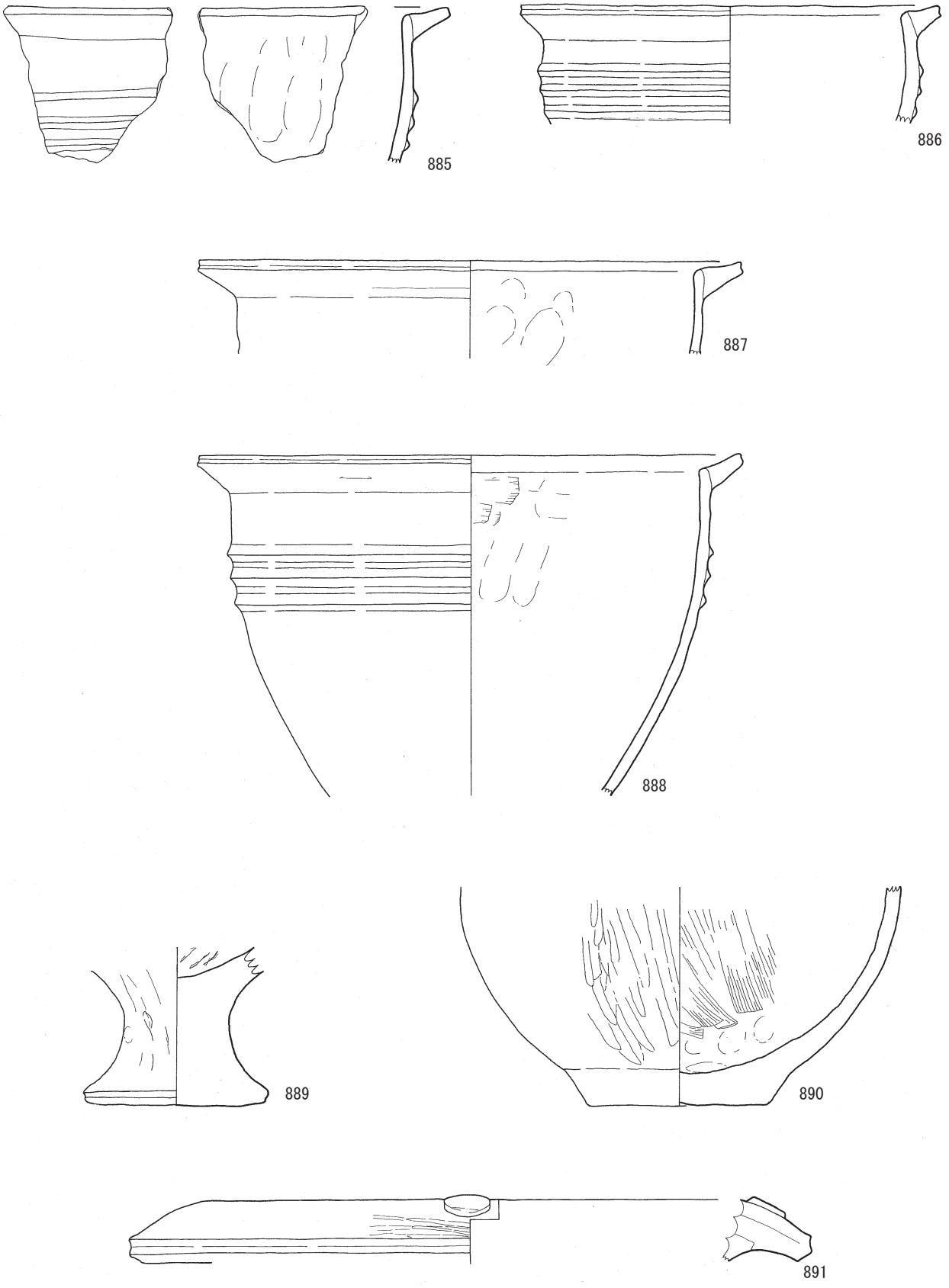
Ｋ－ 19 区，Ⅱｃ層で検出された。平面形は，長径 118 ㎝，短径 76 ㎝の細長い楕円形である。検出面からの深さは，最深部で 19 ㎝を測る。埋土は，やや粘性のある黒色



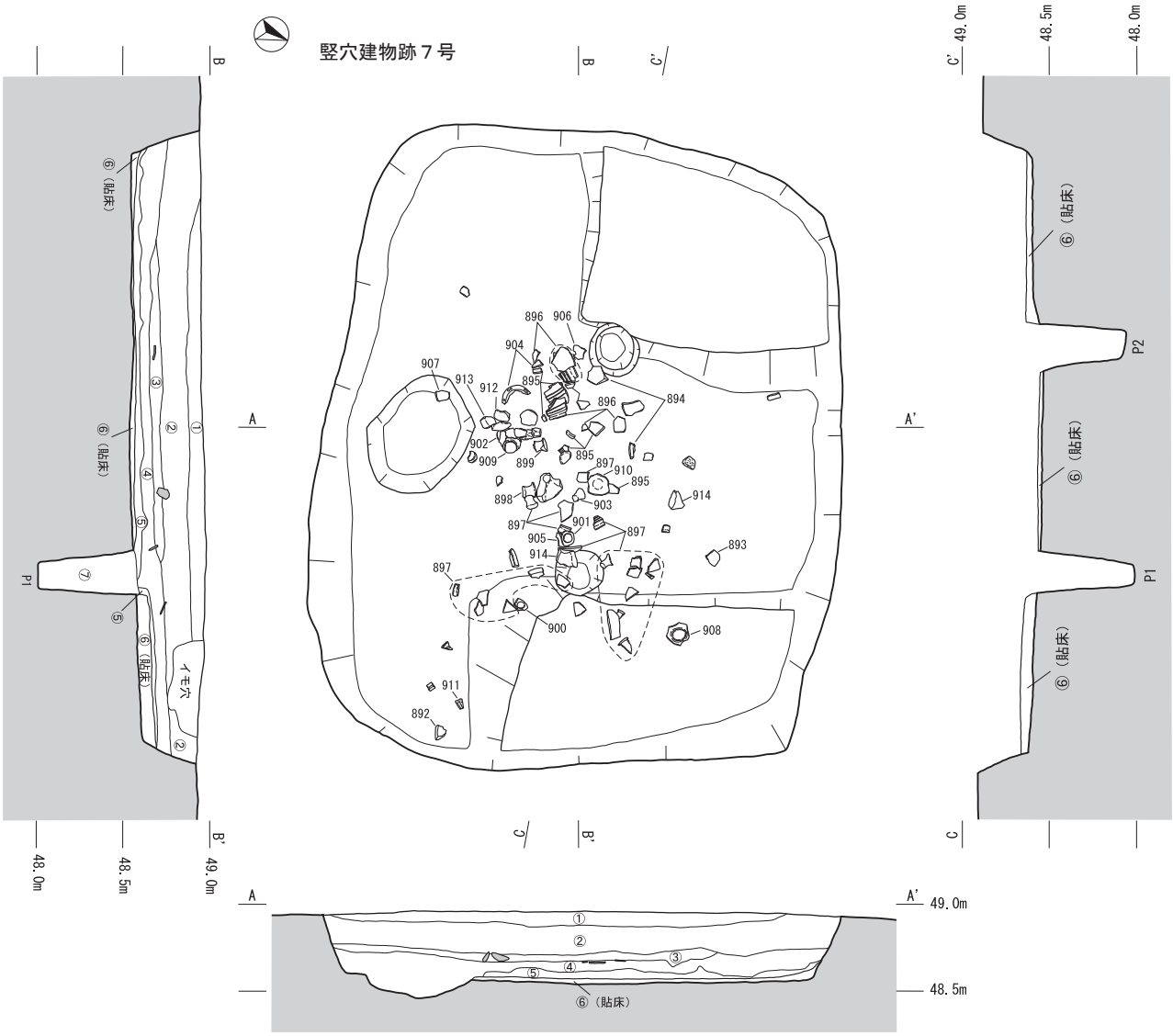




第 184 図　竪穴建物跡６号　出土遺物（１）



第 185 図　竪穴建物跡６号　出土遺物（２）



竪穴建物跡７号埋土
①暗赤褐色土(5YR3/2) シルト質 粘性弱い よくしまる
　0.5㎜大の赤色粒・白色粒・鉱物片を多量含む
②黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性弱い よくしまる
　赤色粒・白色粒を含む
③褐色土(10YR4/4) シルト質 粘性やや有り しまる
④黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性弱い よくしまる
　②より色調が暗い 2cm以下のパミスを微量含む
⑤にぶい黄橙色土(10YR6/4)と黒色土(10YR2/1)が混じる シルト質
　粘性弱い よくしまる 2cm以下のパミスを微量含む
⑥(貼床) 黒色土(10YR2/1)と池田火山灰が混じる シルト質
　粘性弱い よくしまる
⑦黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性弱い よくしまる
　1㎜前後の池田火山灰・アカホヤ・パミスを少量含む

0　（1：40）　2m

第 186 図　竪穴建物跡７号　出土状況

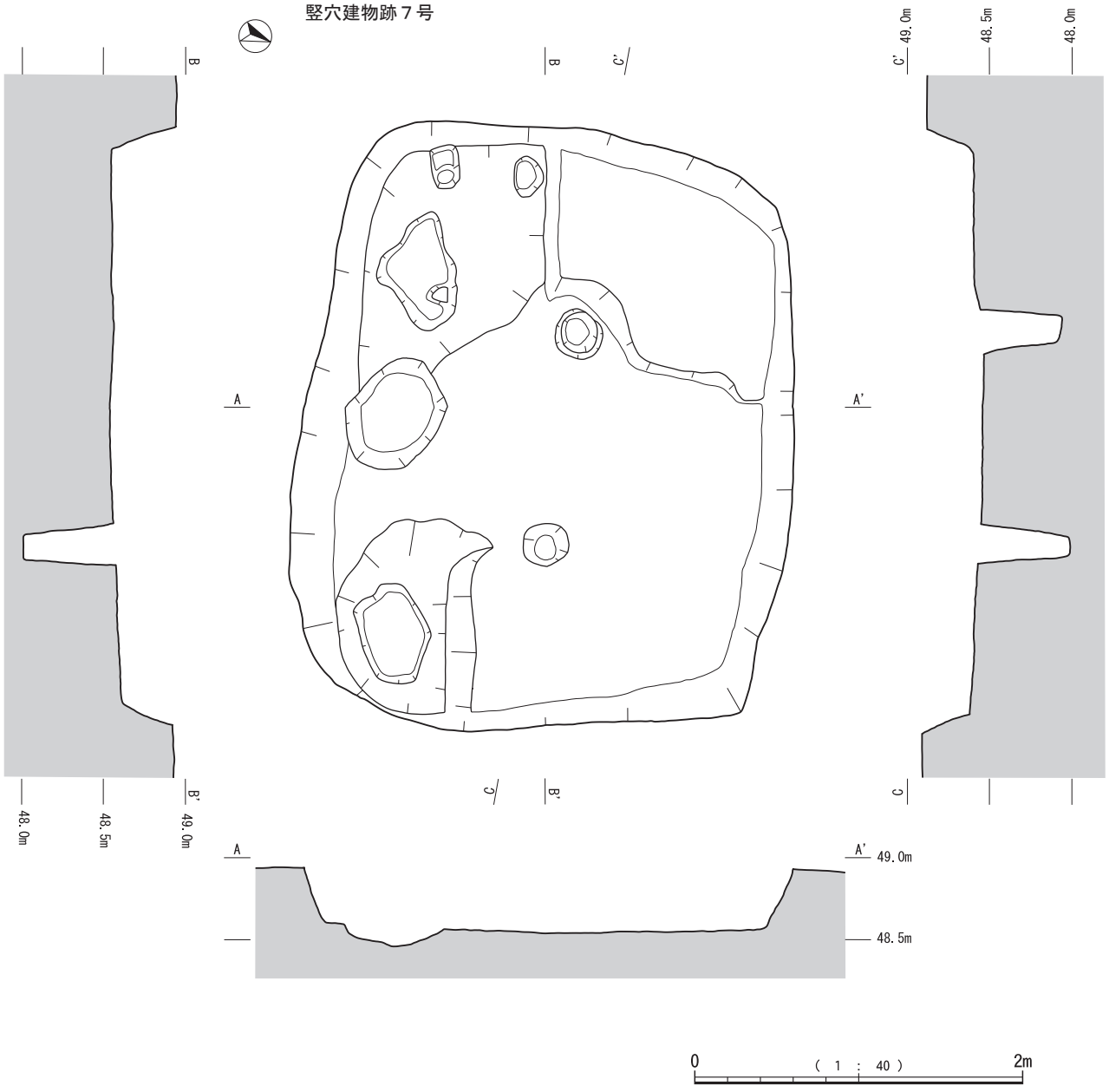
土で，1㎜大の赤色粒子を均一に含み，1～20㎜大のパミスと礫片をやや含んでいた。土坑内からは遺物は検出されなかった。

3　遺物（土器）（第 193～197 図　915～962）

弥生時代の土器は，Ⅱb～Ⅱe層から出土している。甕形土器や壺形土器が出土し，山ノ口式土器が中心である。

915 は甕形土器の口縁部である。口縁はナデで貼り付けられており，はっきり分かる指頭圧痕が連なる。ナデで貼り付けられた口縁は，全体には巡らせていない。破片のみの出土で全体像は定かではないが，取っ手のような形状のものを口縁部に４か所ほど貼り付けてあると思われる。胴部になると，外面はハケメ，内面はナデである。外面には煤が付着している。放射性炭素年代測定値は，補正年代（暦年較正用）値で 2100 ± 20BP，暦年較正年代値（２σ）は，cal BC176～BC46 という結果であった。

916，917，918，919，920 も甕形土器の口縁部である。916 は約 15㎜の口縁部を外向きに後から取り付けられたのが粘土のつなぎ目から分かる。取り付けられた口縁全体と内面に指頭圧痕が見られる。915 と同様の形状で



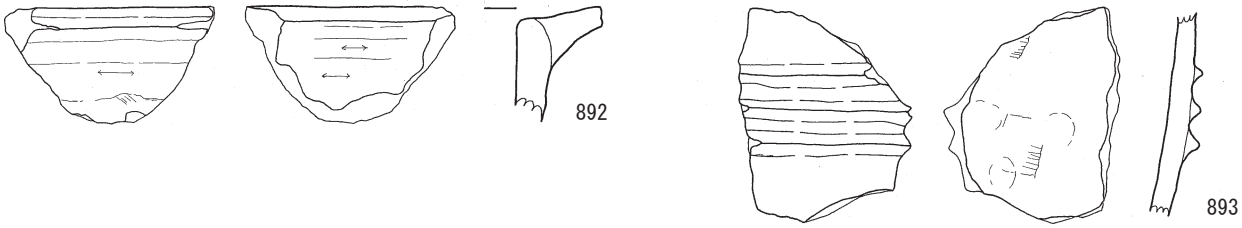
第 187 図　竪穴建物跡７号　掘り方

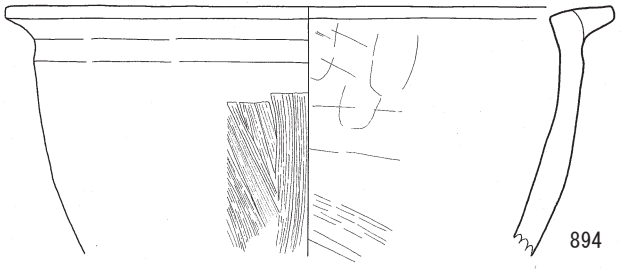
あると考えらえる。胎土には金雲母を含む。917 は口縁がやや上方へ起き上がり，口唇部は浅くへこむ。胴部には３条の突帯が確認できる。内外面の調整は丁寧なナデで，外面には煤が付着している。胎土には多くの金雲母を含んでいる。918 も甕形土器の口縁部である。918 は 917 よりも口縁部が「く」の字状に起き上がる。断面三角形の突帯を３条胴部に施す。内外面の調整は丁寧なナデで，外面には煤が付着している。胎土には多くの金雲母を含んでいる。919，920 は口縁部が「く」の字状に起き上がり，口唇部が浅くへこむ。外面の調整はナデとハケメ，内面はナデで指頭圧痕が見られる。外面には煤が付着している。

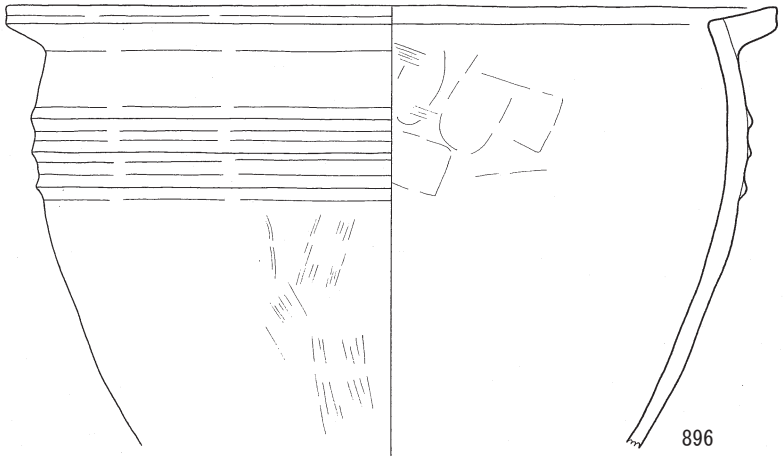
921，922，923 も甕形土器の口縁部の小片であるが，口唇部の浅いへこみは摩耗が激しく確認できない。

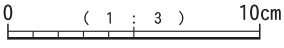
924，925，926，927，928，929 も甕形土器の口縁部の小片である。口縁部が「く」の字状に起き上がり，口唇部が浅くへこむ。特に，924 は胎土に金雲母をかなり多く含む。

930 は口縁部から底部近くまで復元できた。外面の調整はナデとハケメ，内面はナデで指頭圧痕が見られる。くぼみの大きさから太い指で土器表面を押さえただろうと推測される。外面には煤が付着している。放射性炭素

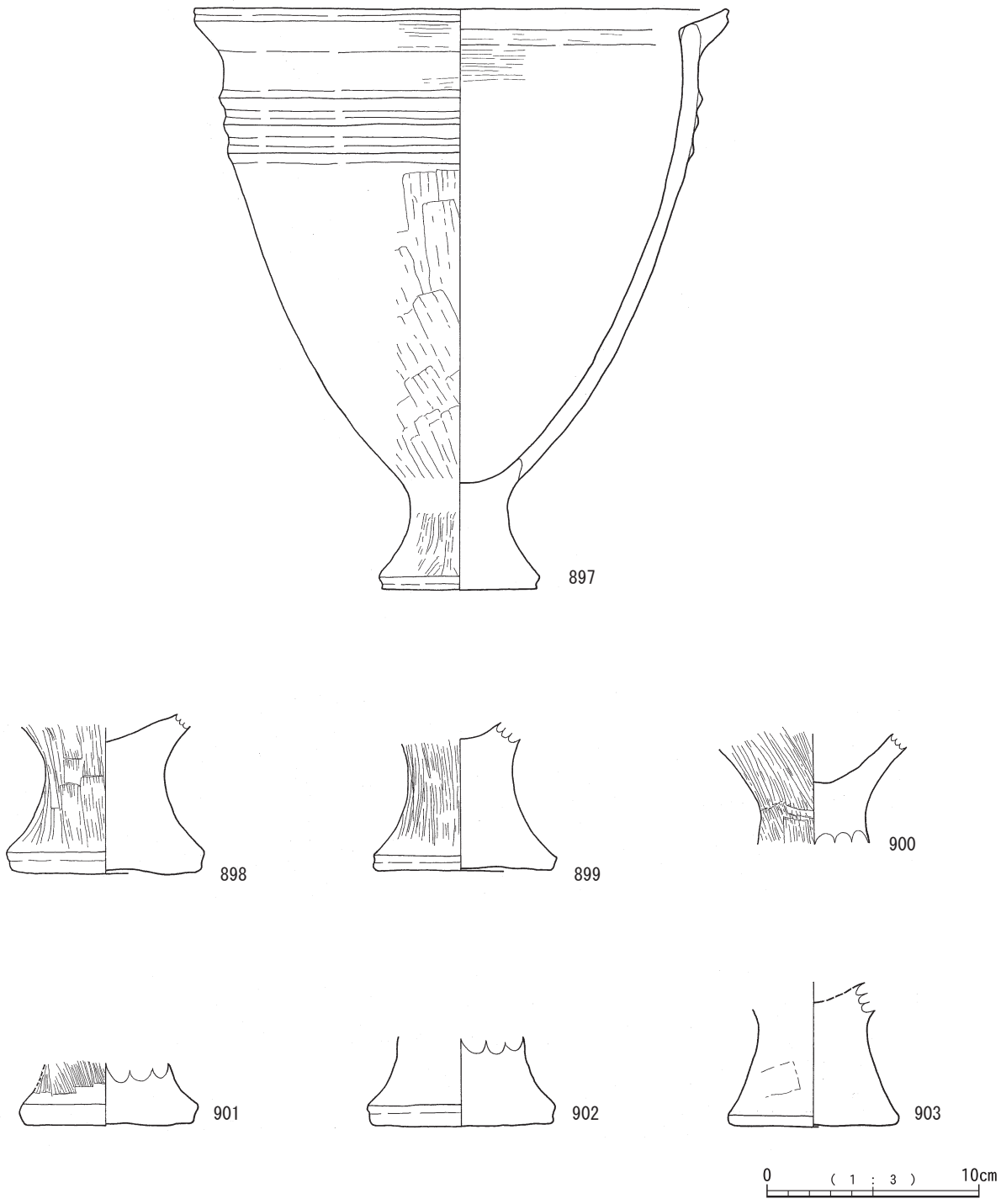








第 188 図　竪穴建物跡 7 号　出土遺物（1）

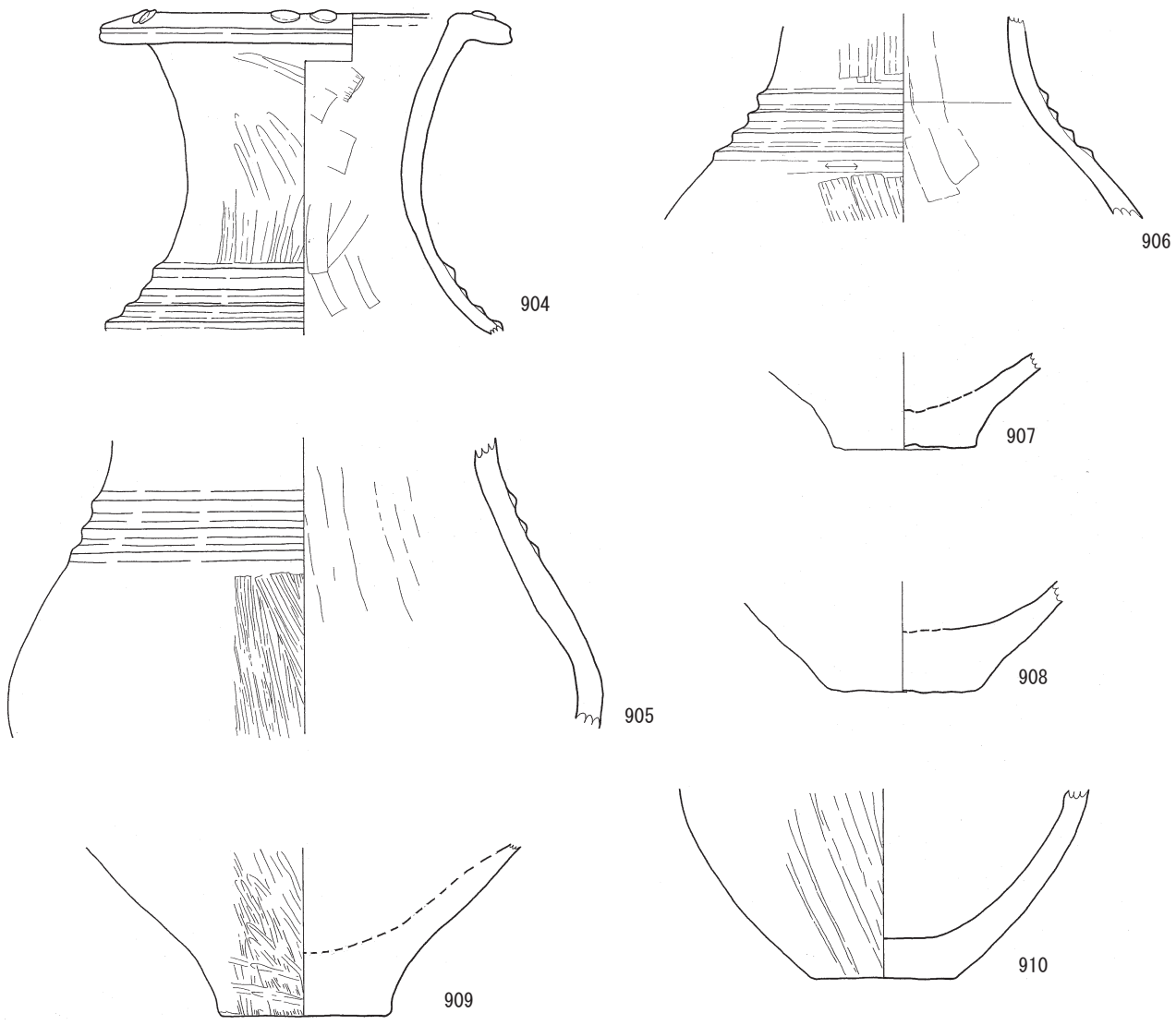


第 189 図　竪穴建物跡７号　出土遺物（２）

年代測定値は，補正年代（暦年較正用）値で 2080 ± 20BP，暦年較正年代値（２σ）は，cal BC165 ～ AD １という結果であった。

931 も甕形土器の口縁部であるが，916，917，918，919，920 と違い，口縁の取り付け部分の厚さは約５㎜，厚いところでも約８㎜とだいぶ薄い。また，口縁は水平方向に取り付けられ，口唇部はへこまずに丸みを帯びている。外面の調整はナデとハケメ，内面はナデと工具ナデである。外面には煤が全体的に付着している。

932 も甕形土器の口縁部である。断面三角形で高さ２～３㎜の突帯を４条施している。外面はナデ，内面は工具ナデで，丁寧に調整され，胎土に金雲母をかなり多く含む。933 は壺形土器で，口縁部が欠損している。胴部上部に３条，胴部の張り出した部分から上に４条の断面三角形の突帯を施している。内外面の調整はナデで，内面には指頭圧痕が見られる。



第 190 図　竪穴建物跡７号　出土遺物（３）

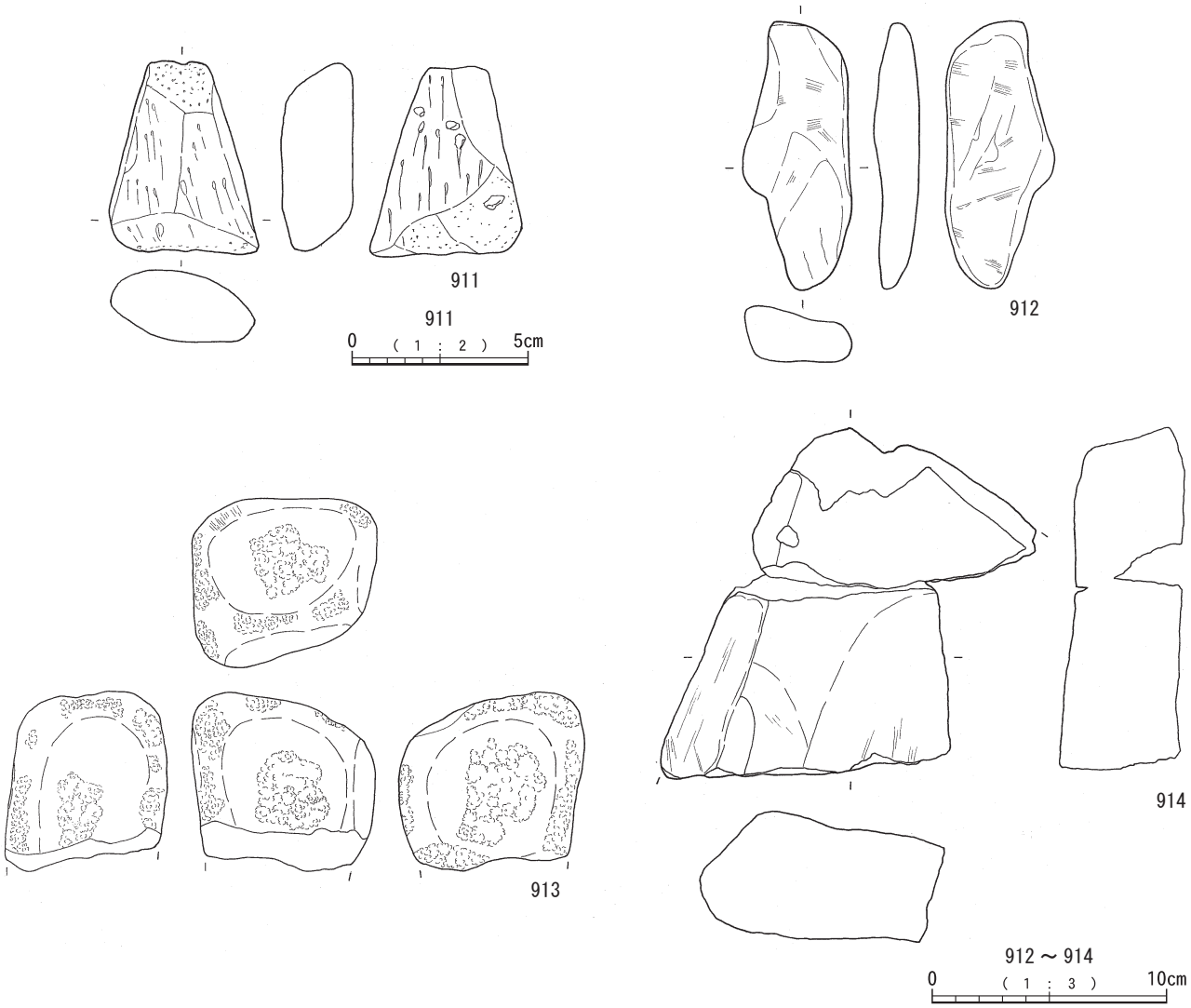
934 は胴部である。断面三角形で高さ約 15 ㎜の突帯を１条施している。内外面ともミガキ調整である。外面には煤が付着している。935 は高さ約５㎜の突帯を３条施している。外面はナデとハケメ，内面はナデ調整で，外面に煤が付着している。胎土に金雲母をかなり多く含んでいる。

936 は頸部である。内外面の調整はハケメで，外面の頸部下のみにミガキ後ナデ調整が見られる。内面には荒れがある。937 は壺形土器の口縁部である。外面はミガキ，内面はナデ調整で，器面が荒れている。938 は壺形土器の脚部であると考えられる。内外面の調整はナデである。

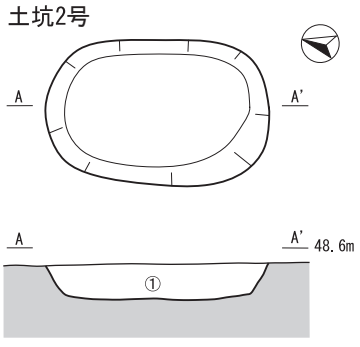
939 は壺形土器の胴部である。外面はナデ調整の後，ミガキ調整を行っている。内面はハケメ調整で，剥離が多く見られる。940 は壺形土器の胴部で，内外面の調整は工具ナデである。外面剥離が見られる。

941，942，943，944，945 は甕形土器の平底の底部である。941 は底径 8.4 ㎝で，ハケメ調整をナデ消している。942 は底径 9.6 ㎝の工具ナデ調整で，底部が大きく剥離している。943 は底径 7.2 ㎝で，ナデ調整で器壁が荒れている。944 は底径 8.8 ㎝のナデ調整である。底部の周囲のへこみが明瞭である。

946，947，948，949，950，951，952，953 は壺形土器の平底の底部である。946 は外面がハケメ後ナデ，内面は工具ナデ調整である。947 は外面がミガキ調整，内面は工具ナデ調整である。948，949 は内外面とも工具ナデ調



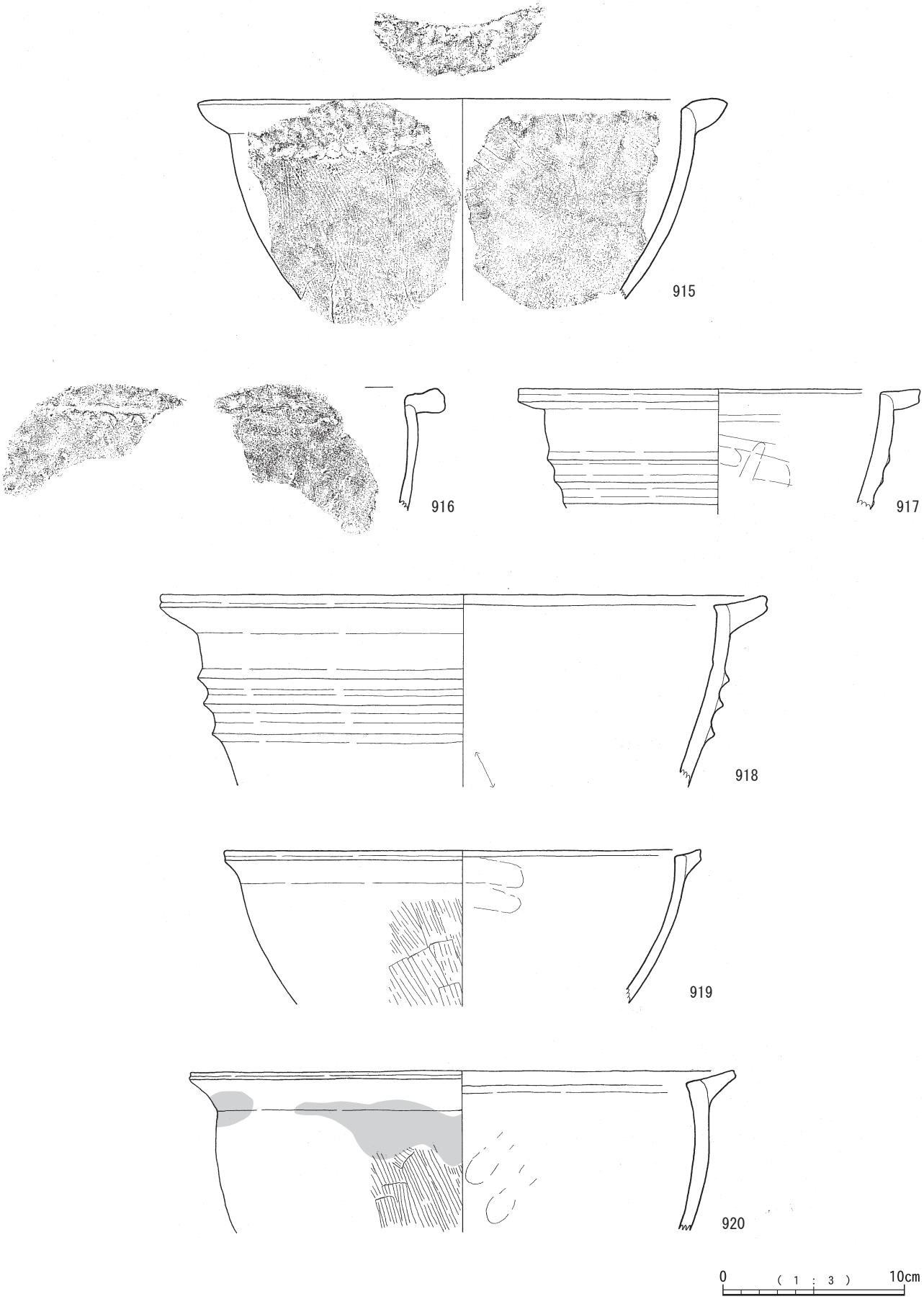
第 191 図　竪穴建物跡７号　出土遺物（４）



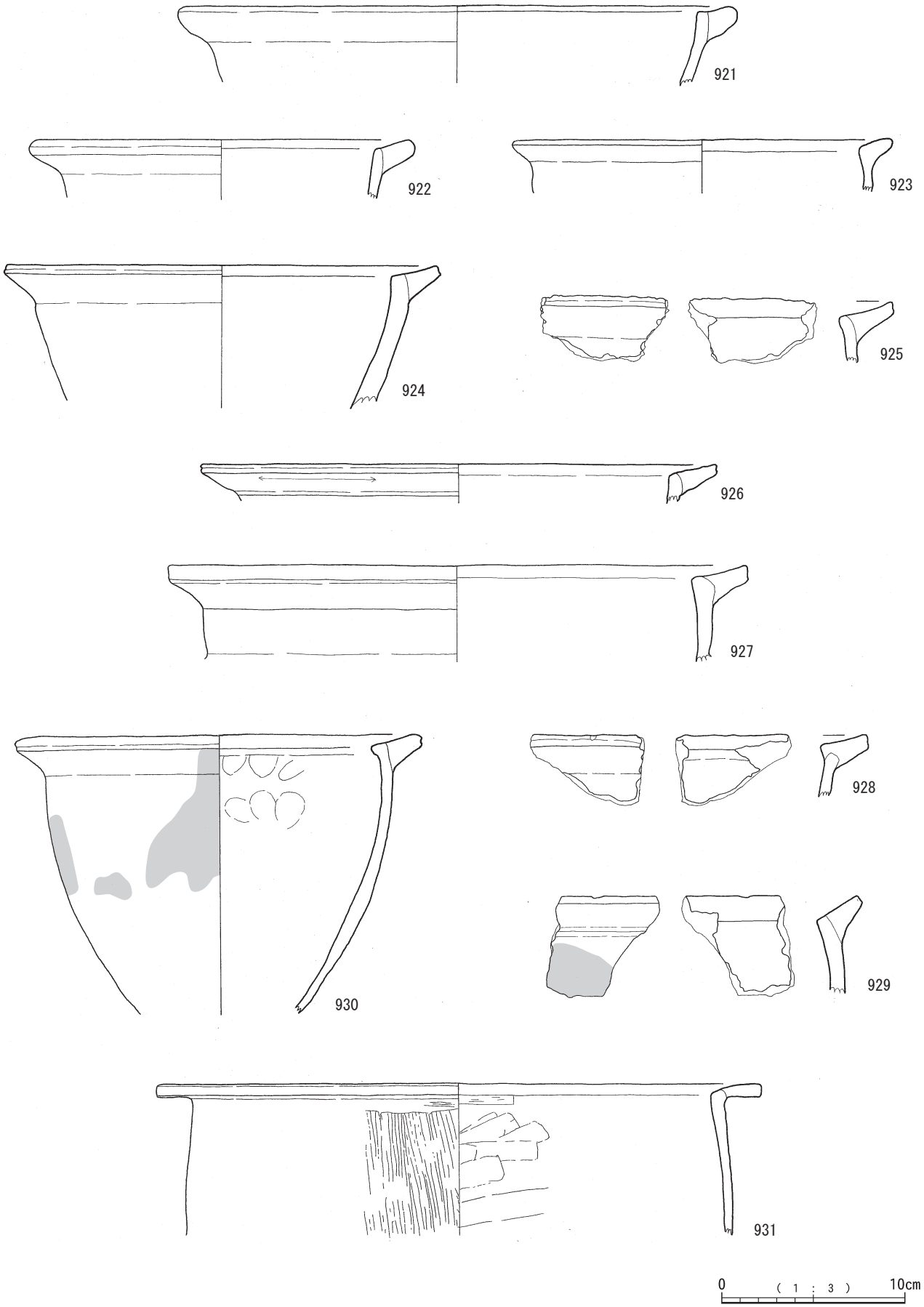
土坑２号埋土
①黒色土(10YR1.7/1)　シルト質　粘性やや有り　ややしまる
1mm大の赤色粒を均一に含む　1～20mm大のパミス・レキ片
を微量含む

0 (1 : 40) 1m

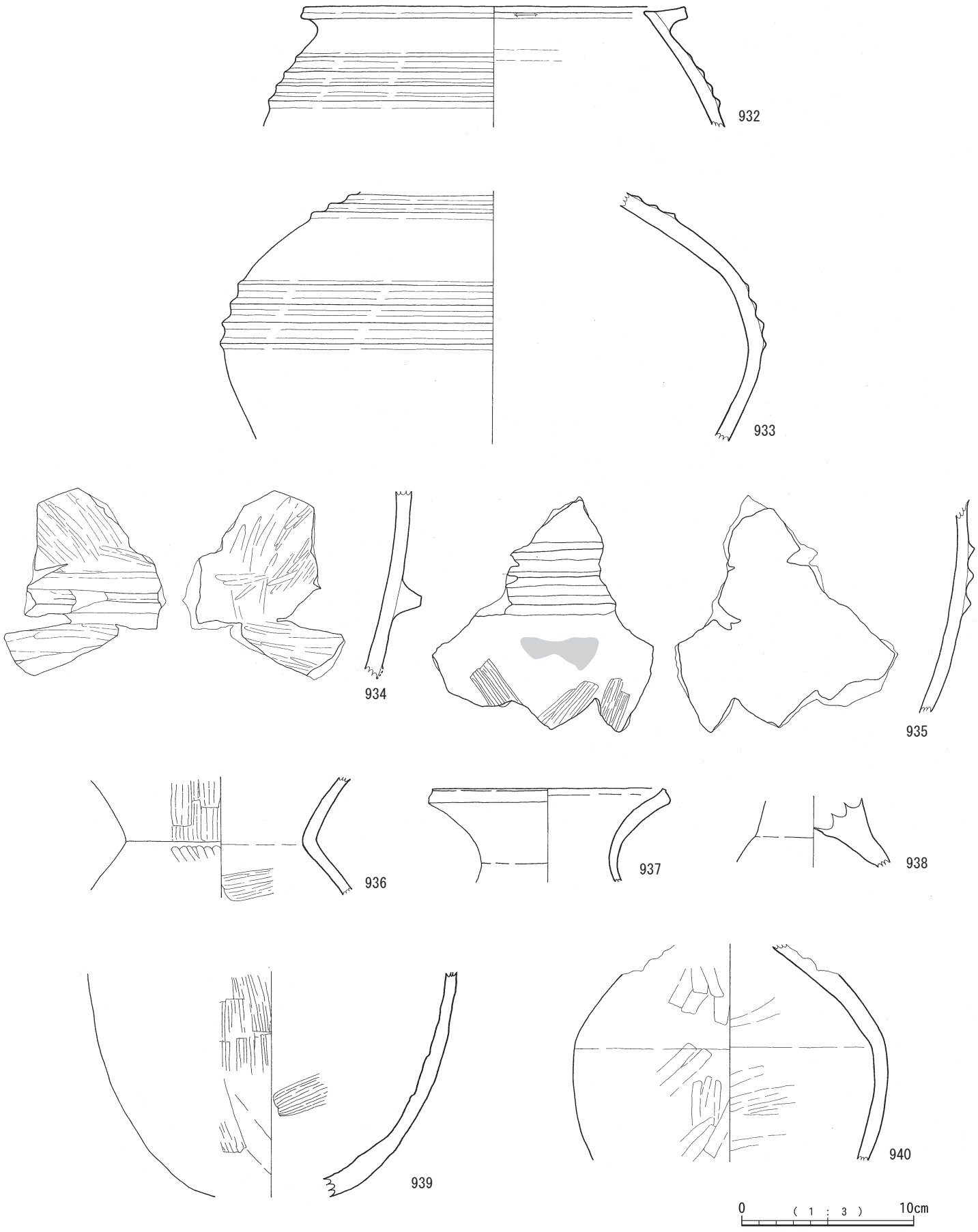
第 192 図　弥生時代　土坑２号



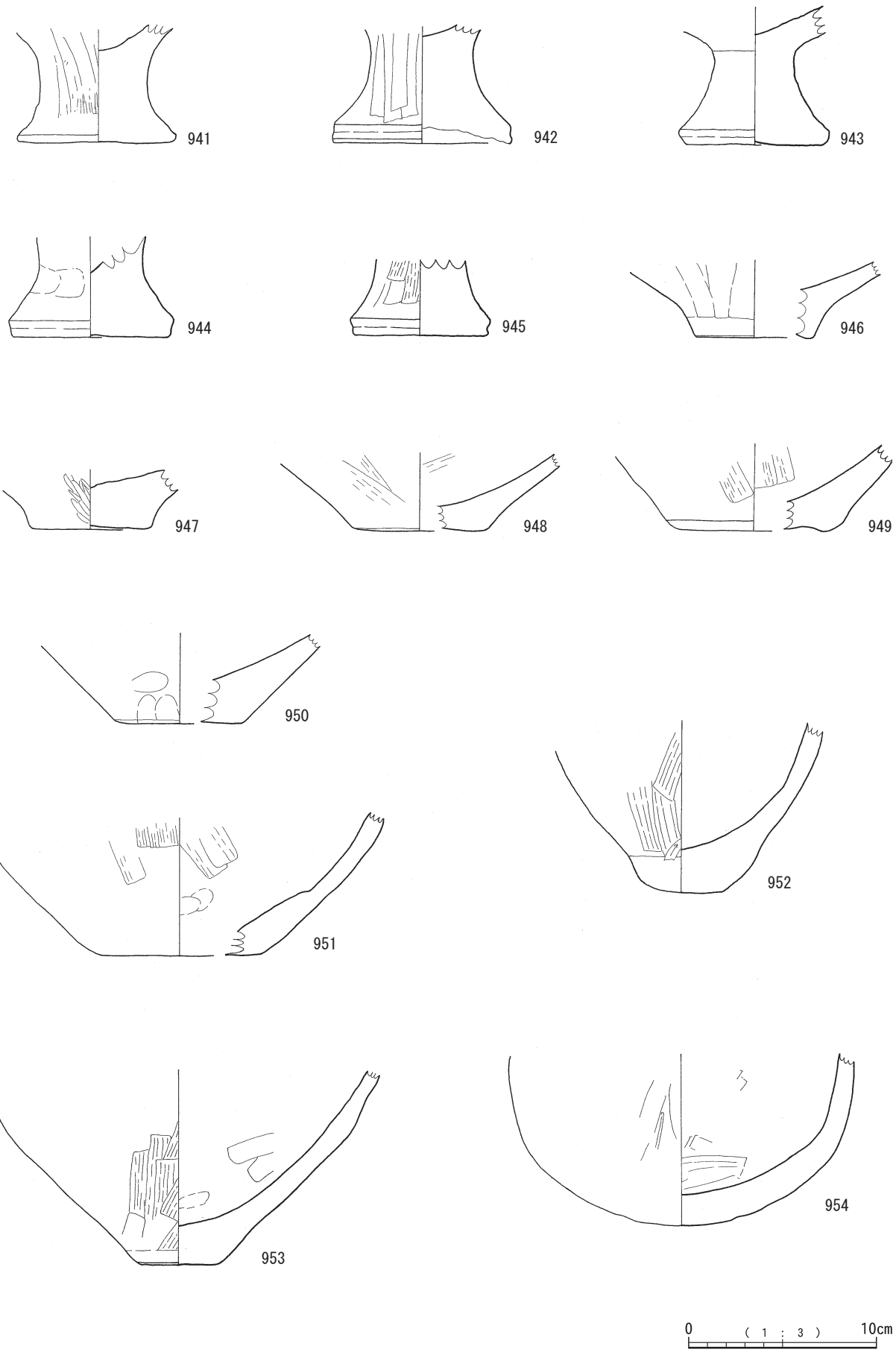
第 193 図　弥生時代　包含層出土土器（１）



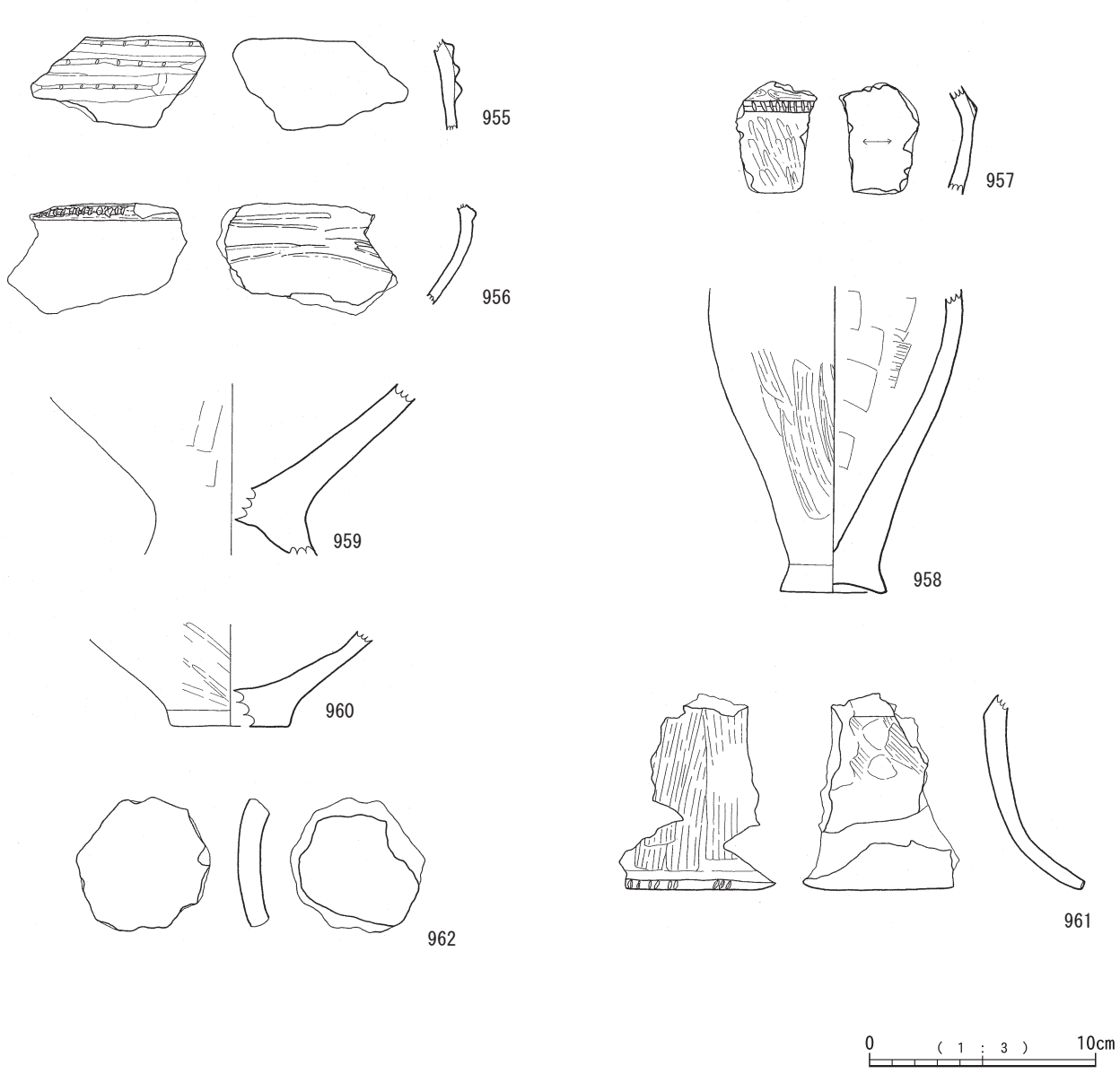
第 194 図　弥生時代　包含層出土土器（２）



第 195 図　弥生時代　包含層出土土器（３）



第 196 図　弥生時代　包含層出土土器（４）



第 197 図　弥生時代　包含層出土土器（５）

整である。どちらも胎土が粗い。950 は内外面ともナデ調整で，外面には指頭圧痕が見られる。951 は外面が工具ナデ，内面が工具ナデとナデ調整である。内面に剥離があるが，明瞭な指頭圧痕が確認できる。952 は外面がハケメ後ナデ調整，内面は工具ナデで，指頭圧痕が見られる。953 は外面がナデ後ハケメ調整，内面は工具ナデで，指頭圧痕が見られる。

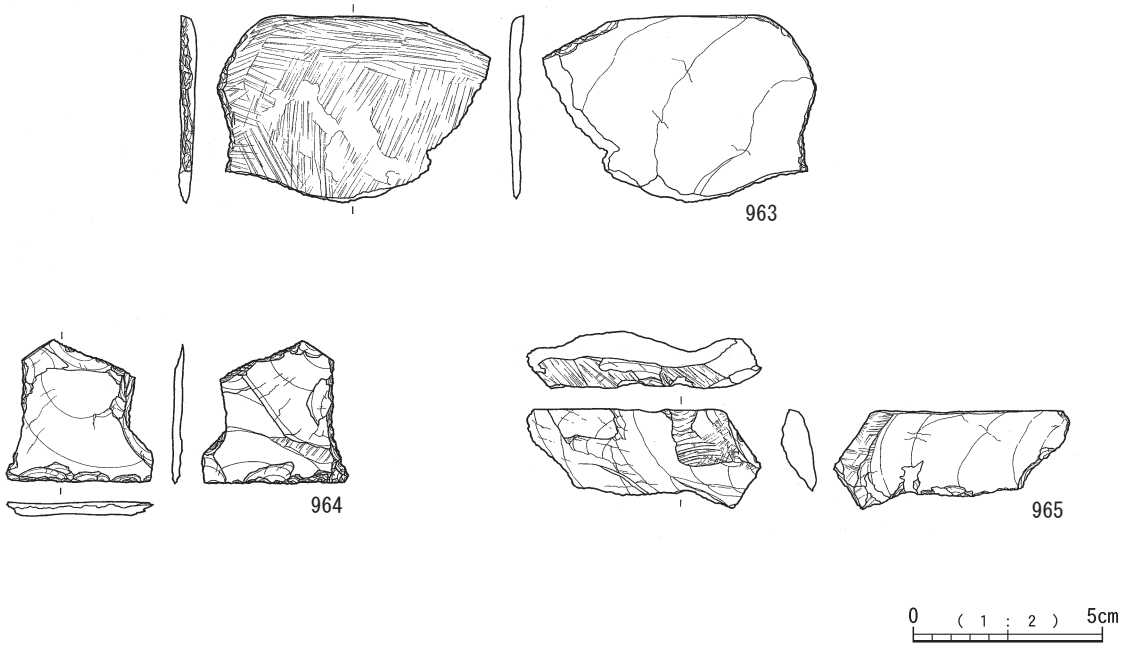
954 は鉢形土器の底部である。内外面とも工具ナデ調整である。外面には煤が付着し，内面には指頭圧痕が見られる。

955，956，957 は甕形土器の胴部であると考えられる。955 は外面がナデ調整で，３条の刻目突帯を施している。断面三角形の突帯の頂上に，約１㎝間隔で三角形の刻目を施している。内面は全面が剥離している。

956，957 は刻目突帯を１条施した甕形土器の胴部である。突帯には縦位の細かい刻目が入る。956 は外面がミガキ，内面が工具ナデとナデ調整，957 は外面がミガキと工具ナデ，内面がナデ調整である。956，957 とも小片のため全体的な器形は定かではないが，古墳時代の小型丸底壺の可能性も考えられる。

958 は甕形土器の胴部から底部にかけてである。底部は中心部分が約４㎜の上げ底である。外面はハケメ，内面はナデ調整である。

959 は底部付近の胴部である。内外面とも工具ナデ調



第 198 図　弥生時代　包含層出土石器（１）

整である。960 は底部であり，内外面ともミガキ調整である。

961 は高坏の脚部で，外面の一番下部分に縦方向の刻目が入る。内外面ともナデとハケメ調整である。

962 は円盤状土製品で，やや湾曲している。胎土には金雲母を多く含む。

４　遺物（石器）（第 198・199 図　963 ～ 972）

弥生時代の石器は，Ⅱｂ～Ⅱｄ層から出土し，砥石や磨・敲石，スクレイパーが中心である。

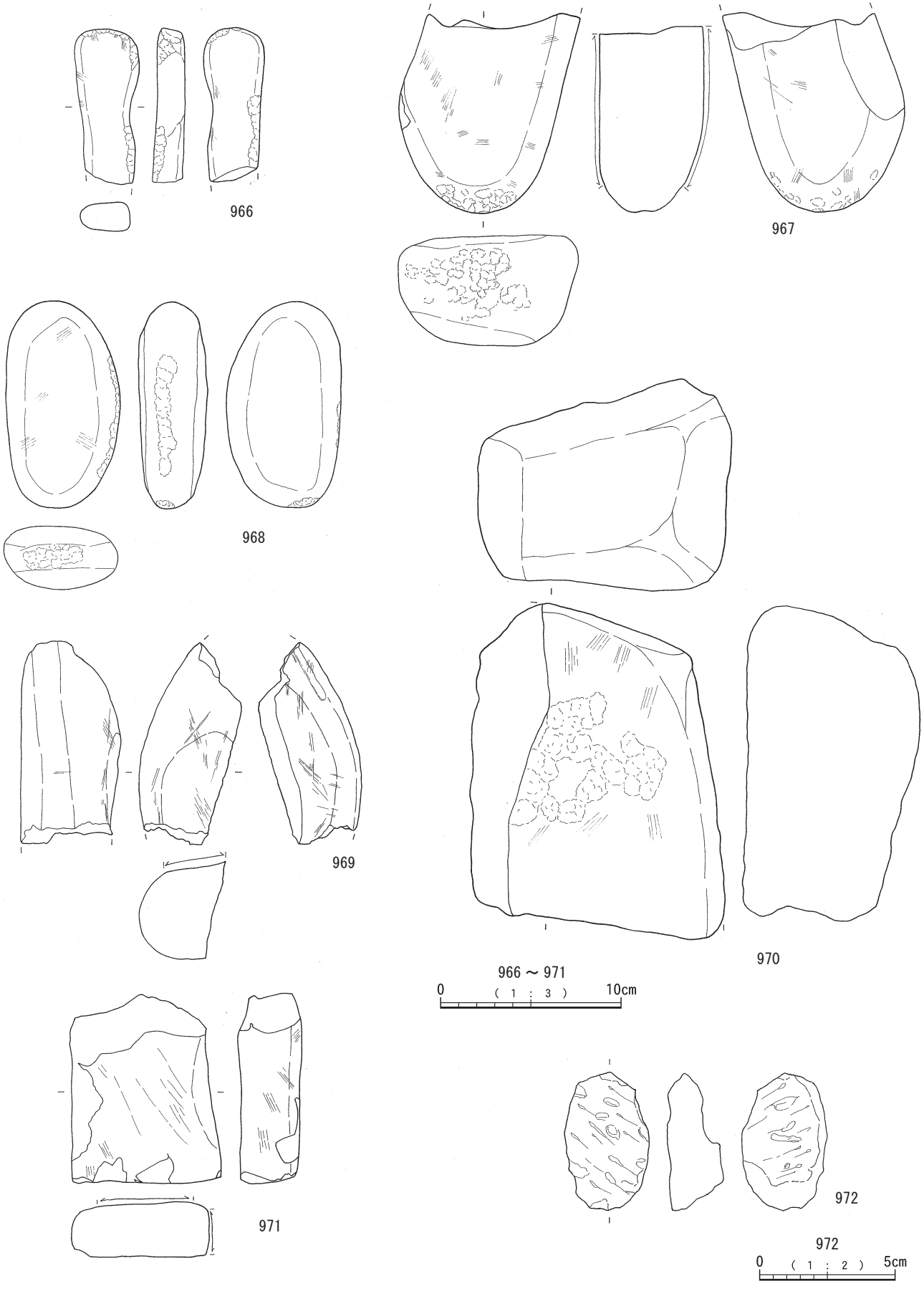
963 は頁岩製の石包丁，964 は頁岩製の石包丁未製品である。963 は横長剥片を素材とし，幅が 7.2 ㎝ある。964 は長さ 3.8 ㎝，幅 3.9 ㎝と小型である。

965 は頁岩製の携帯用の砥石であると考えられる。ひもかけの跡と，先端に一部砥面を確認できる。へこみ部分が右手親指と人差し指に当たり，つかみやすい形状になっている。

966 は砂岩製の砥石である。下部が欠損しているが，大きさから携帯用として用いられていた可能性がある。

967，968 は砂岩製の磨・敲石である。967 は上部が欠損している。表面と裏面に擦痕が，下面に敲打痕が見られる。また，全体が赤化し，被熱痕が見られる。968 は表面に擦痕が，上下と側面に敲打痕が見られる。969 は砂岩製の磨石であるが，欠損している部分が多い。表裏面に擦痕が見られ，表面の左側に煤が付着している。970 は花崗岩製の台石である。完全な形での出土ではない。表面に残る敲打痕から敲石としての用途の可能性もある。

971 は砂岩製の砥石である。欠損している部分が多い。表面と右側面に擦痕が見られる。972 は軽石製品である。表裏面に使用痕が見られる。



第 199 図　弥生時代　包含層出土石器（２）

第５節　古墳時代の調査

１　調査の概要

古墳時代の遺構・遺物は，Ⅱｄ層～Ⅱｅ層から検出・出土する。Ⅲ層（池田降下軽石を含む褐色土）を掘りこんだ遺構も確認されている。遺構は調査区西端のみで検出されている。調査区西端はⅡａ～ｄ層が後世の削平を受けている箇所が多いため，遺構上部の残存状況が悪いものが多い。遺構の帰属時期については，出土遺物を基本として判断を行った。

遺物に関しては遺構からの出土がほとんどであった。包含層出土遺物については小片がほとんどであり，図化に耐えうるものがなかった。

２　遺構

遺構はＣ・Ｄ－４～８区から竪穴建物跡４軒が検出された。遺構の掲載順は，西側のグリッド番号が小さい方から記載している。

（１）竪穴建物跡８号（第 201 図）

Ｃ・Ｄ－４・５区のⅢ層上面で検出された。平面プランは長軸 450 ㎝，短軸 348 ㎝の長方形を呈する。主軸は略南北方向である。検出面から床面までの深さは 16 ㎝であるが，本来の掘り込み面はより上層にあった可能性がある。床面はほぼフラットに成形されており，壁面は直立気味に立ち上がる。埋土はⅡ層を基本とする黒色土の単層で，黄色軽石が少量混じる。

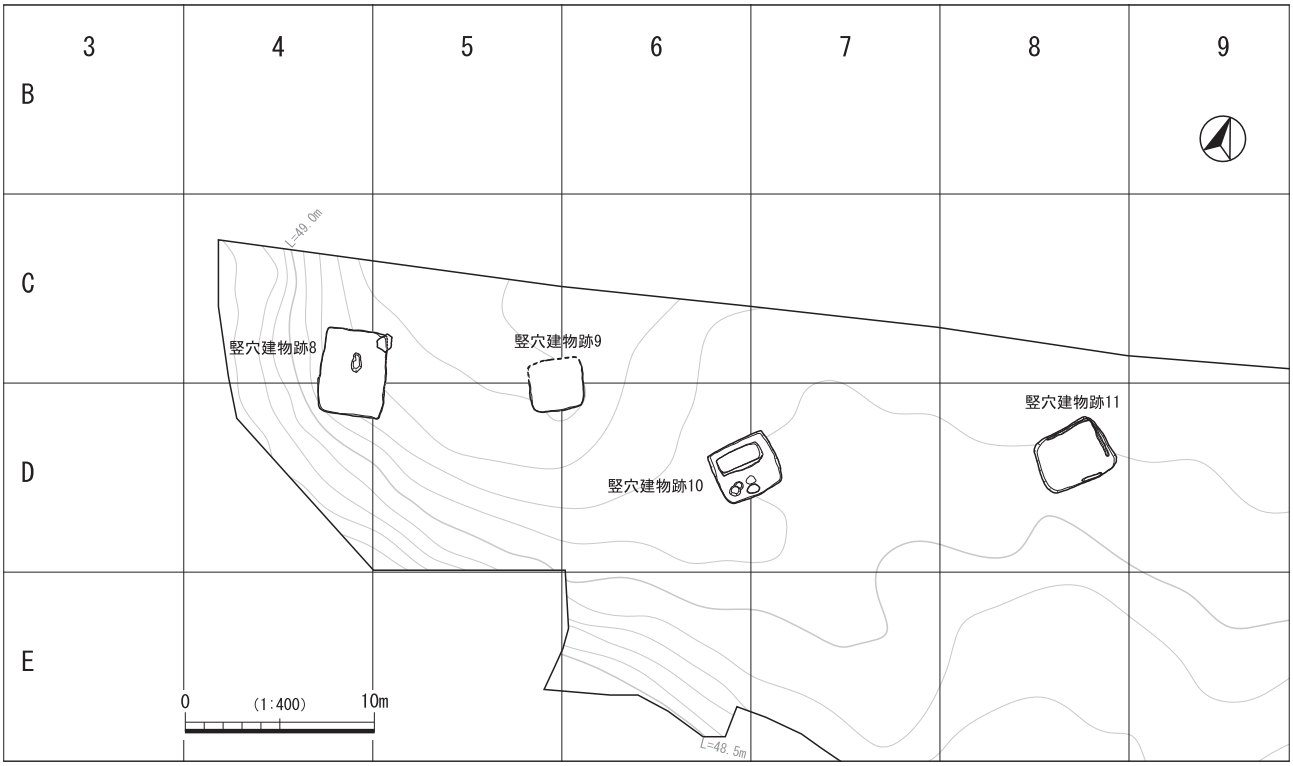
床面中央のやや北寄りに土坑が検出された。平面プランは長軸 102 ㎝，短軸 53 ㎝の楕円形を呈し，床面からの深さは９㎝である。主軸は竪穴と同じ略南北方向である。土坑床面には焼土が確認できた。埋土は暗褐色土であり，焼土のブロックが入り込み，微量炭化物が混じる。炉である可能性が考えられる。

遺構に伴う柱穴のようなピットは確認できなかった。

出土遺物（第 202・203 図　973 ～ 982）

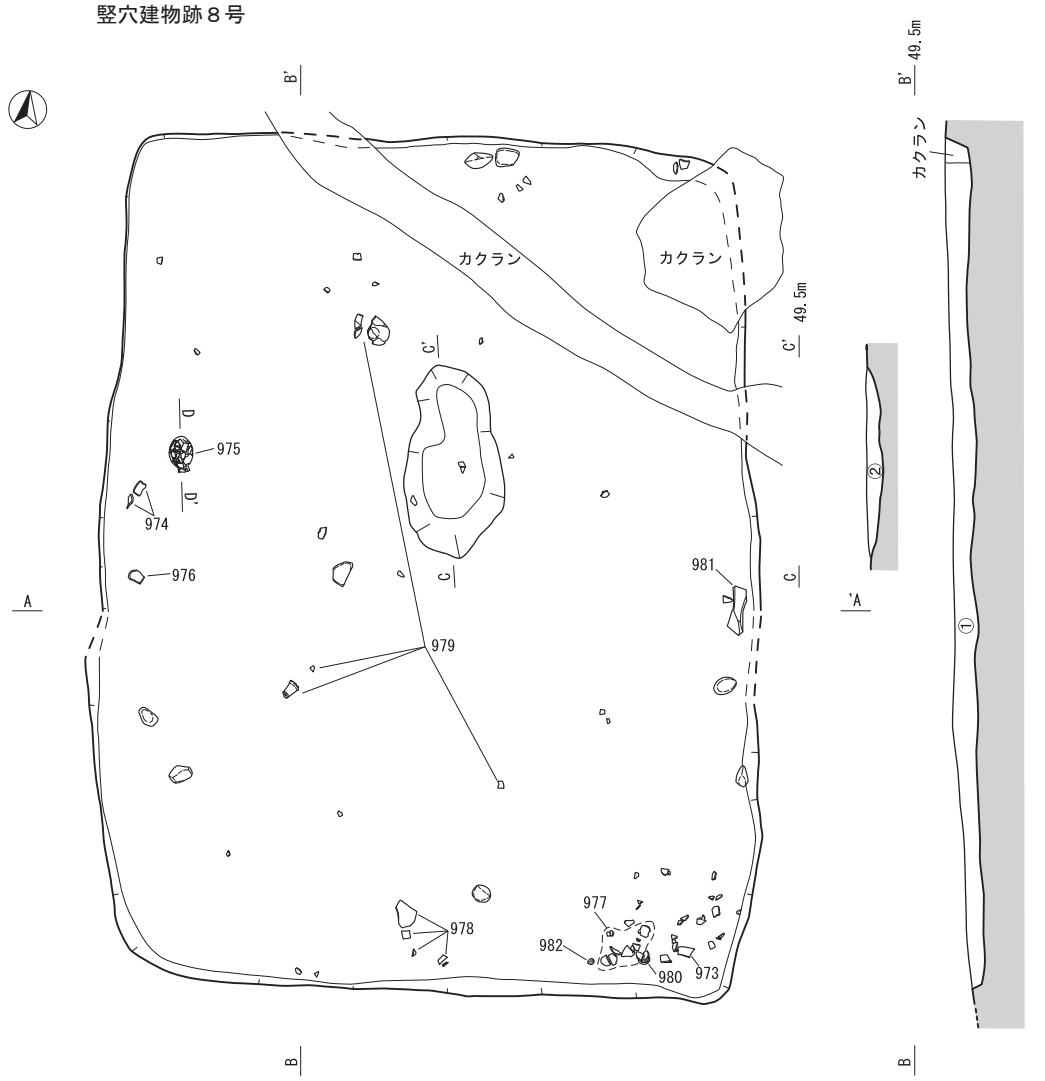
古式土師器，砥石，軽石製品等が出土した。西壁中央付近では，ほぼ完形の古式土師器（975）が，口縁が床面に斜めに埋まるような形で出土した。

973，974 は布留式を模倣したと考えられる甕形土器である。973 は口唇内面に稜をもつ。外面は丁寧なナデ調整を施すが，内面は粗雑である。胎土には多量の小礫が混じる。974 は口唇を丸く仕上げる。内外面ともに丁寧な工具ナデを施す。内面には黒斑が目立つ。975 は口径 10.3 ㎝，器高 18.7 ㎝を計る，完形の小型の甕形土器で，口縁部は直立気味である。器形はタタキによって成形され，長胴形を呈する。器壁は厚さ 0.5 ～ 0.7 ㎝程度に薄く仕上げる。外面胴部は斜め方向のハケメを，口縁部には縦方向のハケメを施す。内面は頸部まではケズリ，口縁部はハケメを施す。色調は橙色を呈する。外面には胴部最大径の部分に２か所楕円形の黒斑があり，少量の煤が残る。胎土や器形から布留式の甕を意識した在地の土器であるとみられる。976 は甕形土器の胴部である。外面は丁寧なハケメ，内面はケズリを施す。977，978 は壺形土器の胴部である。ともに外面はハケメ，内面にはナデを施す。977 は 978 と比較して器壁が薄く，胎土に小



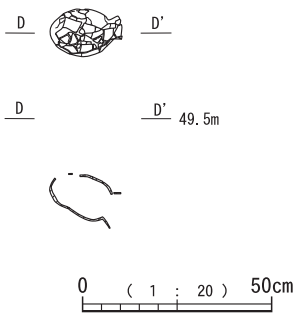
第 200 図　古墳時代　遺構配置図

竪穴建物跡８号

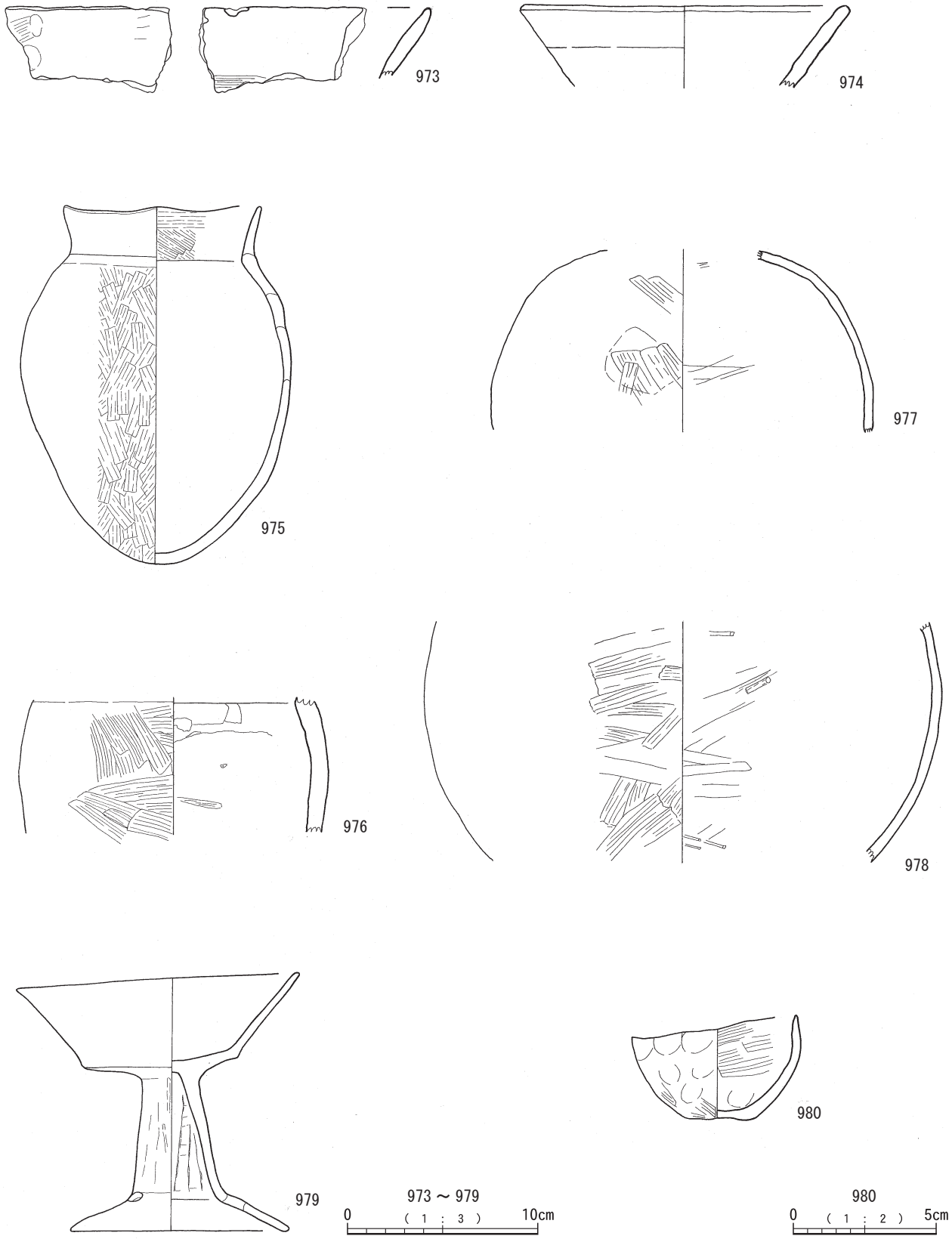


竪穴建物跡８号埋土
①黒色土（10YR2/1）シルト質 粘性ややあり ややしまる 黄色粒・5mm以下のパミスを少量含む
②暗褐色土(10YR3/4)に明赤褐色土(5YR5/8)の焼土がブロック状に入り込む 下層に焼土 炭化物を微量含む シルト質 粘性弱い しまる

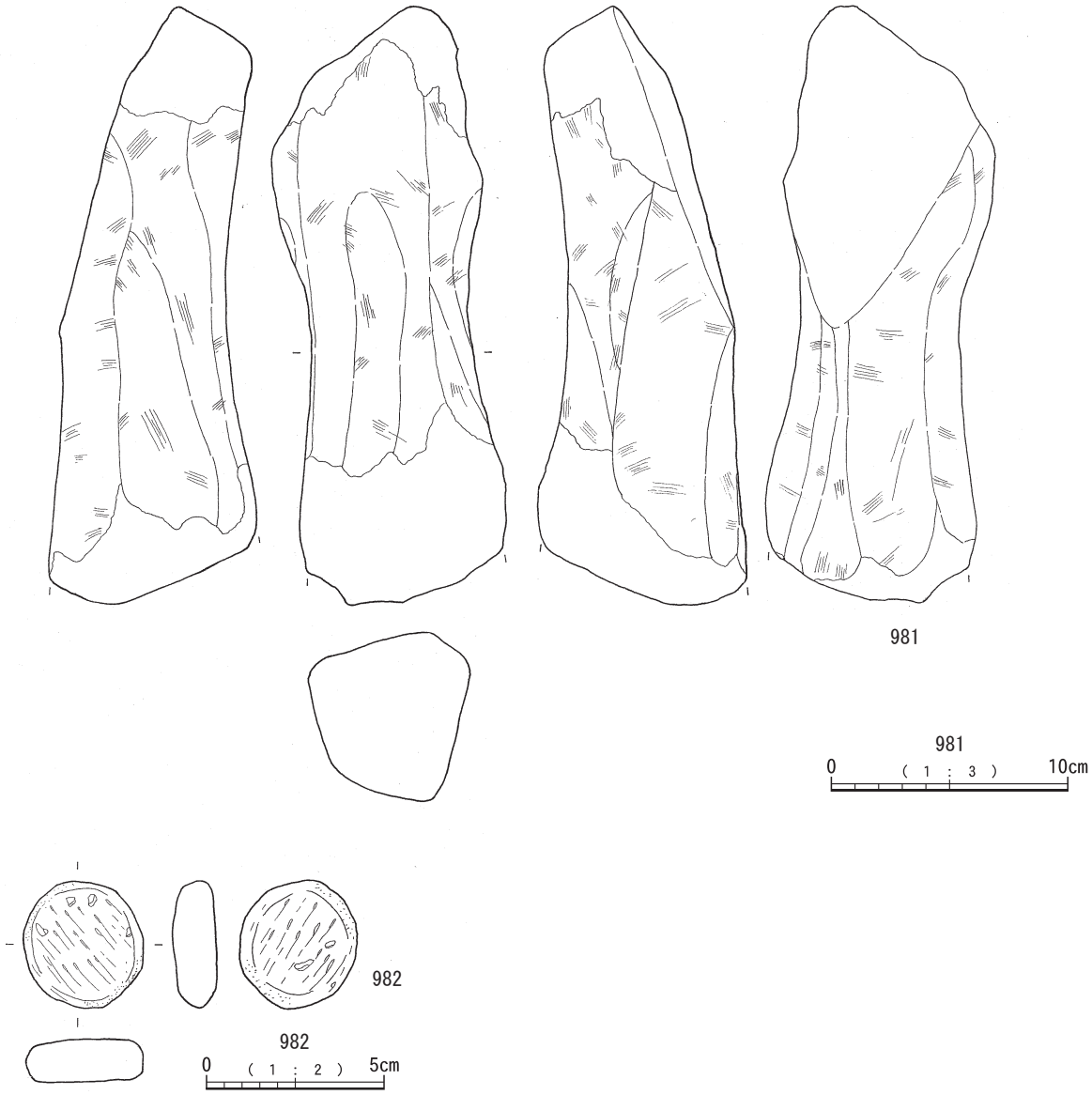
0 （ 1 ： 40 ） 2m



第 201 図　竪穴建物跡８号　出土状況



第 202 図　竪穴建物跡８号　出土遺物（１）



第 203 図　竪穴建物跡８号　出土遺物（２）

礫が多量に混じる。

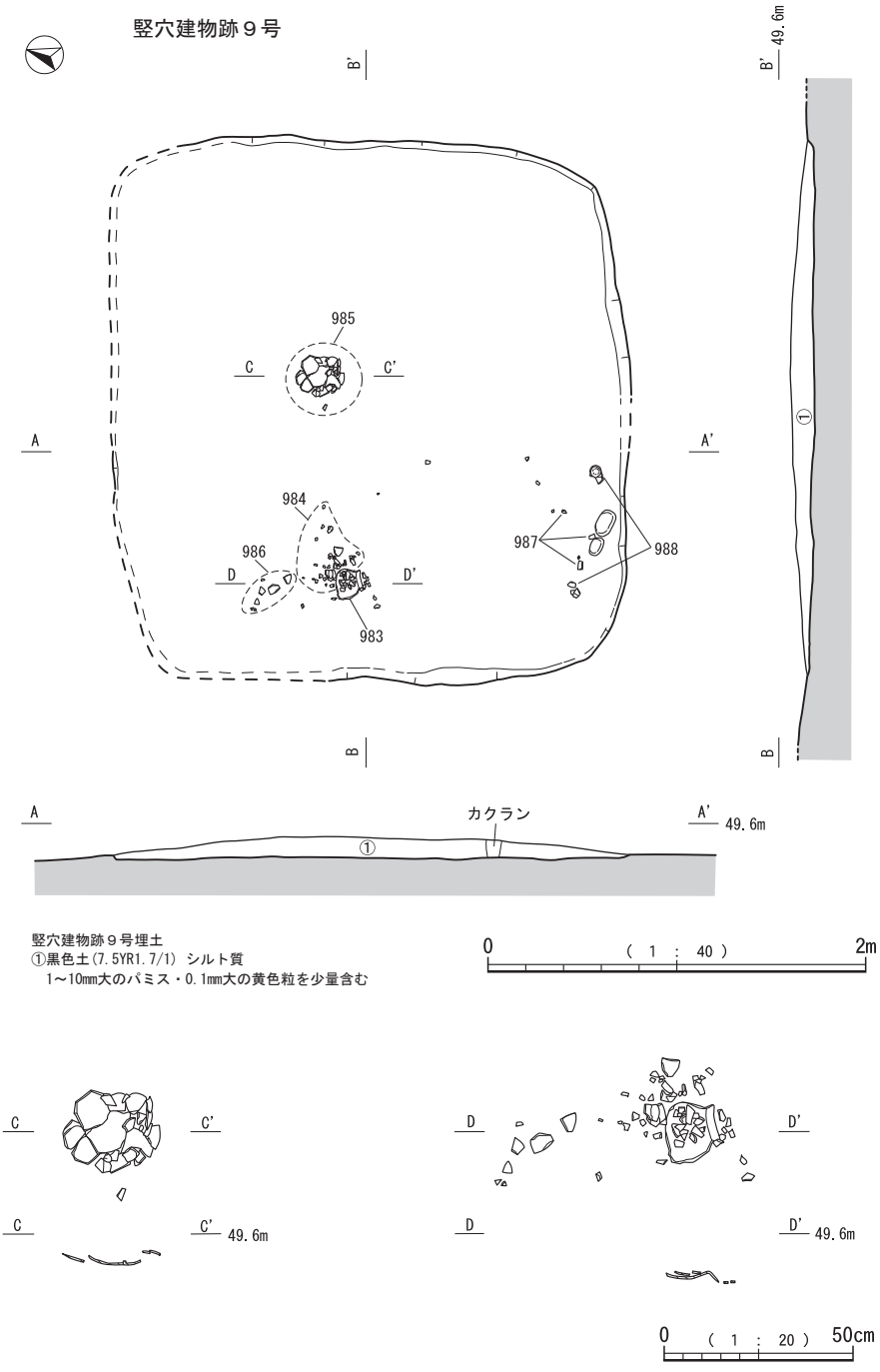
979 は口径 14.9 ㎝，底径 11.4 ㎝，器高 13.5 ㎝を計る，完形の高坏である。坏部底面はほぼ水平に仕上げられ，内外面ともに明瞭な稜をもつ。脚部は中空であり，脚裾部は直線的に広がり，透かし穴を３か所有する。器壁は薄く仕上げる。内外面ともに丁寧なナデ調整によって仕上げられる。胎土は赤色の小礫が多量に混じる。やや湾曲した深い坏部を持っており，南九州の高坏の特徴を示している。脚部の縦方向の面取りやミガキなど，布留系の製作技法を部分的に模倣している。

980 は口径 6.0 ㎝，器高 3.7 ㎝の手づくね土器である。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。一部に指頭圧痕が残る。色調は外面がにぶい橙色，内面が褐灰色を呈する。

981 は砂岩製の砥石である。上下端を欠いているが，中央部がくびれる形状を呈している。断面は略五角形を呈し，５面すべてに磨り面を有する。各面の稜は明瞭である。982 は長さ 3.7 ㎝，幅 3.3 ㎝の楕円形を呈する軽石製品である。表裏面及び側面に丁寧な研磨を施す。用途は不明である。一部に鉄の附着もみられる。

（２）竪穴建物跡９号（第 204 図）

Ｃ・Ｄ－５・６区のⅢ層上面で検出された。平面プランは北半分が削平により消失してしまっているが，残存部から長軸 323 ㎝，短軸 301 ㎝のほぼ正方形を呈すると推測される。主軸は略南北方向である。検出面から床面までの深さは 12 ㎝であるが，竪穴上部はほぼ消失しており，壁面立ち上がりおよびテラス構造については不明な点が多い。床面はほぼフラットに成形されている。埋



第 204 図　竪穴建物跡９号　出土状況

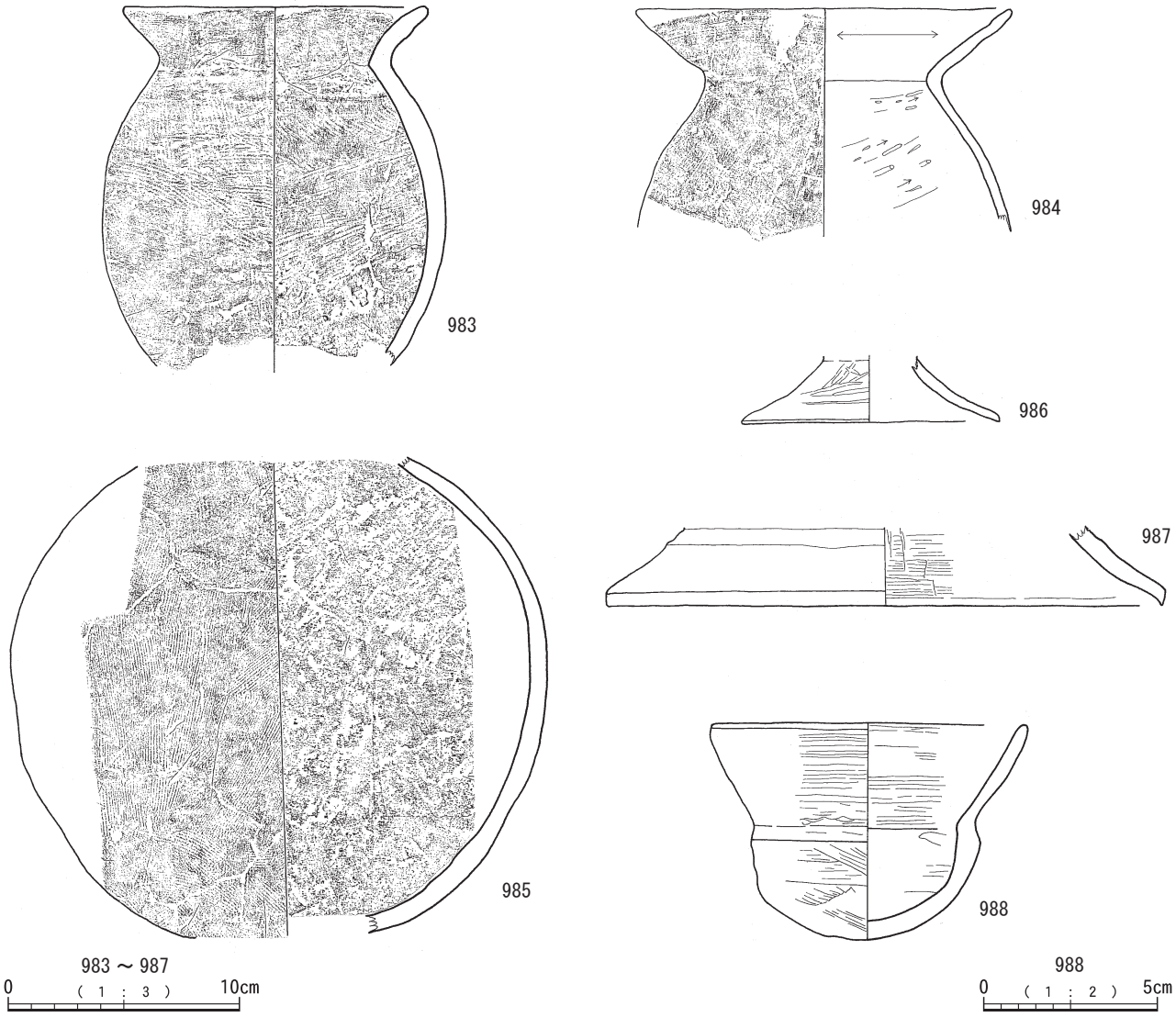
土はⅡｄ層を基本とする黒色土の単層で，黄色軽石が少量混じる。

遺構に伴う柱穴のようなピットは確認できなかった。

出土遺物（第 205 図　983 ～ 988）

983 は口縁部がゆるやかに外反する甕形土器である。口唇端部は丸く仕上げる。器形はタタキによって成形され，器壁はやや厚い。外面胴部は横方向のハケメを，口縁部から頸部にかけては縦方向のハケメを施す。内面は全面にケズリを施した後，胴部上半部から頸部にかけてはハケメを施し，口縁部にはナデ調整を施す。胎土には小礫が多く混じる。胴部外面には大きく煤が付着する。

984 は口縁部が直線的に外反する甕形土器である。口唇端部がやや内湾する。頸部内面の稜は緩やかである。器形はタタキによって成形され，肩が張らない。器壁は薄く仕上げる。胴部外面には斜め方向のハケメを施し，



第 205 図　竪穴建物跡９号　出土遺物

胴部内面にはケズリを施す。口縁部にはナデ調整を施す。胎土には小礫が多く混じる。口縁部外面には一部黒斑が残る。器形や調整方法などから肥後系甕を模倣しているとみられる。985 は甕形土器の胴部から底部である。色調は全体的ににぶい赤褐色を呈する。外面は底部まで丁寧なハケメを施し，内面はケズリを施す。外面の一部に黒斑が残る。胎土には金雲母が多量に混じっており，東九州など他地域からの搬入品の可能性がある。

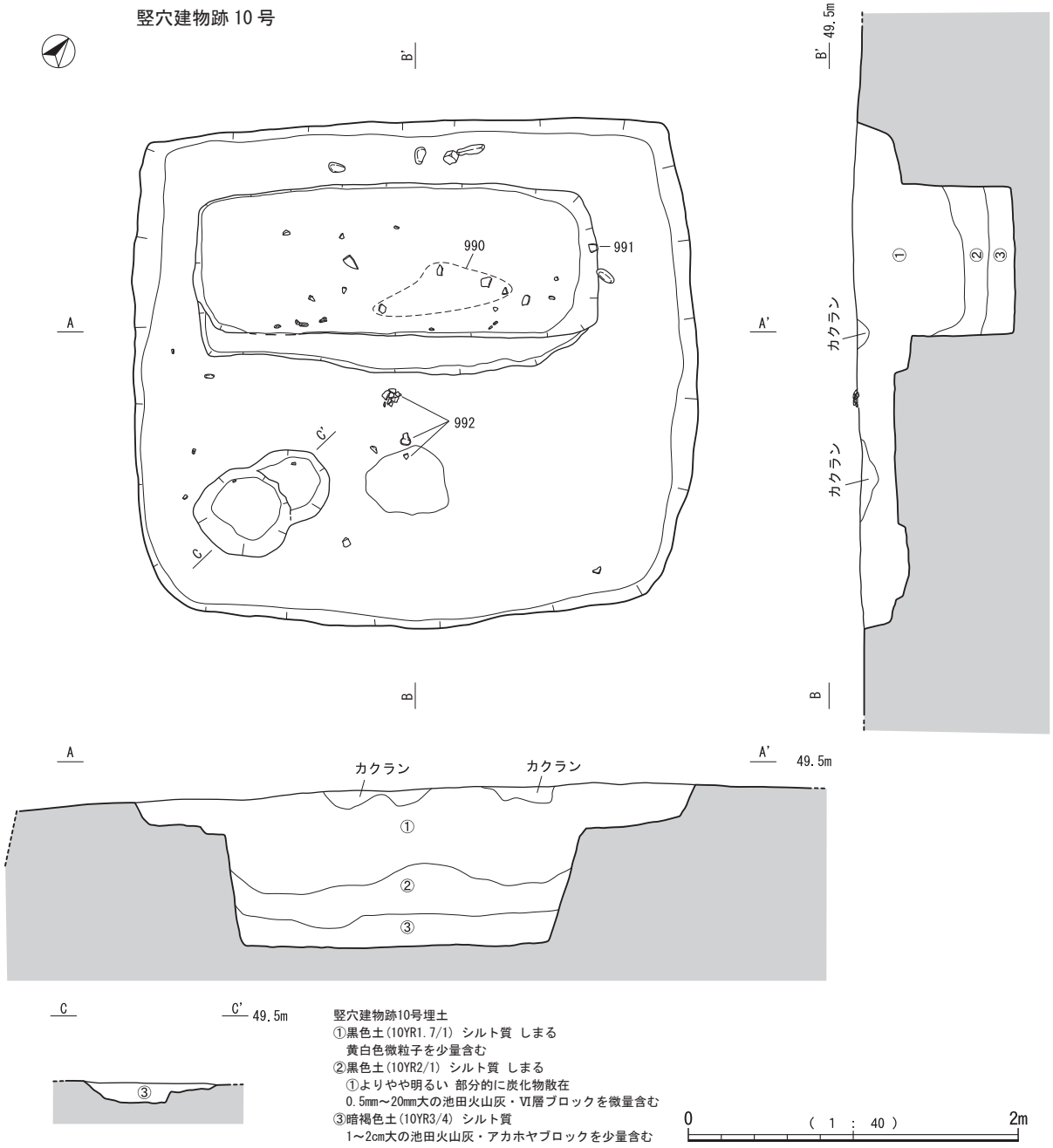
986，987 は高坏の脚部である。986 は脚部端部を丸く仕上げる。内外面ともに丁寧なナデ調整後，一部にミガキを施す。胎土には赤色の円礫が混じり，色調は黄橙色を呈する。宮崎平野からの搬入品である可能性が高い。987 は脚部端部を直立気味に仕上げる。内外面ともにナデ調整を施す。

988 は口径 9.2 ㎝，器高 6.3 ㎝を計る，完形の小型丸底壺である。口縁部は大きく外反し，口唇端部はやや尖らせる。口縁部と胴部の比は約１：１である。内外面ともに横方向のハケメを施す。胎土は小礫が少量混じる。内外面ともに口縁部から底部に欠けて大きく黒斑が残る。肥後系の小型丸底壺の模倣品である。

（３）竪穴建物跡 10 号（第 206 図）

Ｄ－６・７区のⅡｅ層で検出された。平面プランは長軸 342 ㎝，短軸 309 ㎝のほぼ正方形を呈する。主軸は北東－南西方向である。検出面から床面までの深さは 28 ㎝である。床面はほぼフラットに成形されており，壁面は急に立ち上がる。埋土はⅡ層を基本とする黒色土の単層で，黄色軽石が少量混じる。

床面の主軸方向左半分では大型の土坑が検出された。平面プランは長軸 245 ㎝，短軸 115 ㎝の長方形を呈する。主軸は竪穴と同じく北東－南西方向である。竪穴床面からの深さは 95 ㎝である。床面はほぼフラットに成形さ



第 206 図　竪穴建物跡 10 号　出土状況

れ，壁面はほぼ垂直に立ち上がり，東壁には幅 20 ㎝ほどの段差をもつ。埋土はアカホヤのブロックが混じり，部分的に炭化物が確認できた。土坑内埋土からは土師器系土器が出土している。

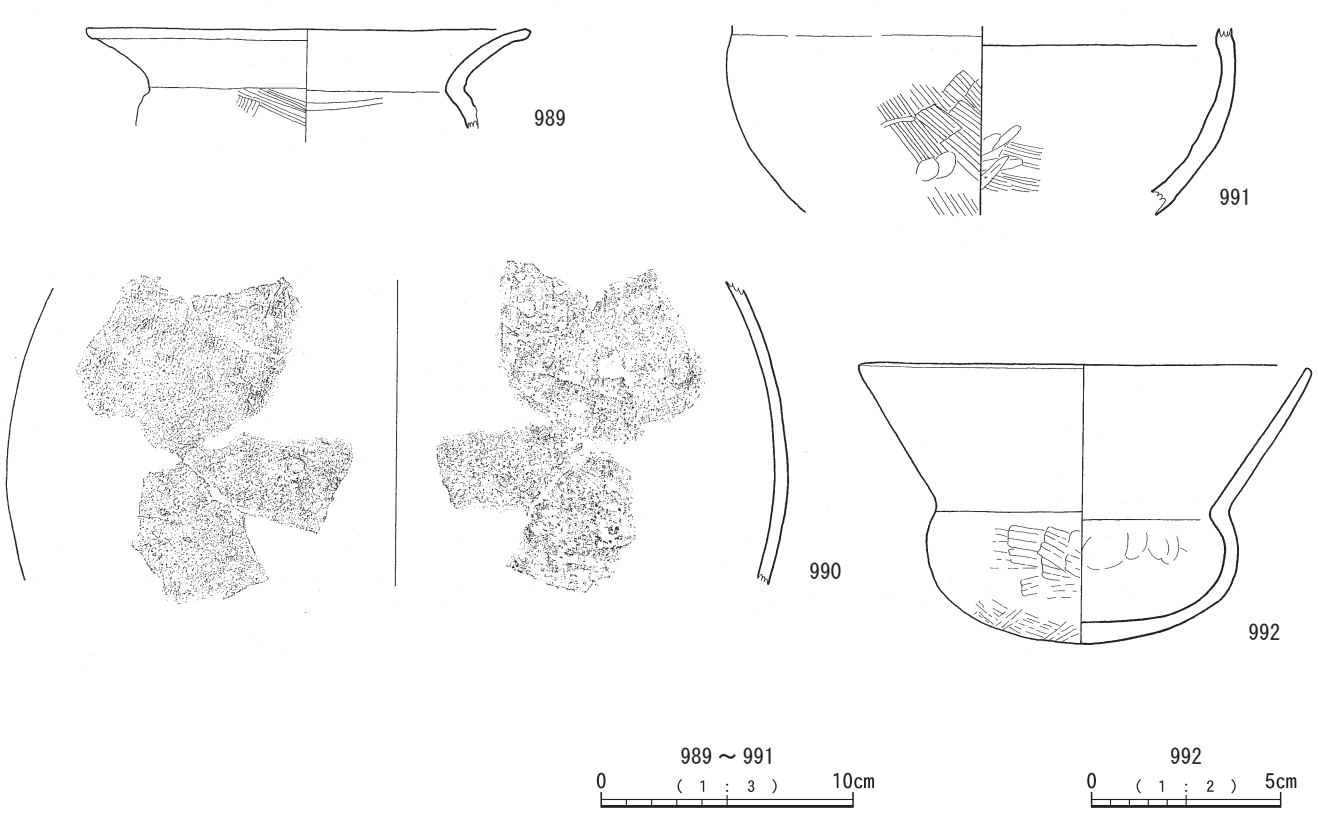
床面南部では，直径 40 ㎝の円形土坑を直径 60 ㎝の円形土坑が切る形で検出された。埋土は両者とも池田火山灰が混じる暗褐色土の単層である。土師器系土器の小片が出土した。

遺構に伴う柱穴のようなピットは確認できなかった。

出土遺物（第 207 図　989 ～ 992）

989 は口縁部が大きく外反する甕形土器である。口唇端部は外面に稜をもつ。胴部外面は斜め方向のハケメ，内面はケズリを施す。口縁部はナデ調整を施す。胎土には小礫が多量に混じる。熊本平野からの搬入品とみられる。

990 は甕形土器の胴部である。外面は斜め方向のハケメ，内面はケズリを施す。外面には黒斑が残る。991 は鉢形土器の胴部である。外面にはハケメ，内面にはナデを施す。990，991 ともに胎土に赤色の円礫が混じってお



第 207 図　竪穴建物跡 10 号　出土遺物

り，宮崎平野からの搬入品とみられる。

992 は口径 12.0 ㎝，器高 7.4 ㎝の小型丸底壺である。胴部よりも口縁部の方が長い。胴部外面には丁寧なハケメを，内面には丁寧なナデ調整を施す。口縁部にはナデ調整を施す。胎土には赤色の円礫が少量混じっており，宮崎平野からの搬入品とみられる。

（4）竪穴建物跡 11 号（第 208 図）

Ｄ－８区のⅡｄ層で検出された。平面プランは長軸 388 ㎝，短軸 302 ㎝の隅丸長方形を呈する。主軸は北東－南西方向である。検出面から床面までの深さは 32 ㎝である。床面はほぼフラットに成形されており，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は池田火山灰が混じる黒褐色土の単層である。

床面北部の壁際と東部の壁際一部には，壁帯溝を検出した。竪穴床面からの深さは 10 ㎝である。埋土は竪穴埋土と同じ池田火山灰混じりの黒褐色土である。

遺構に伴う柱穴のようなピットは確認できなかった。

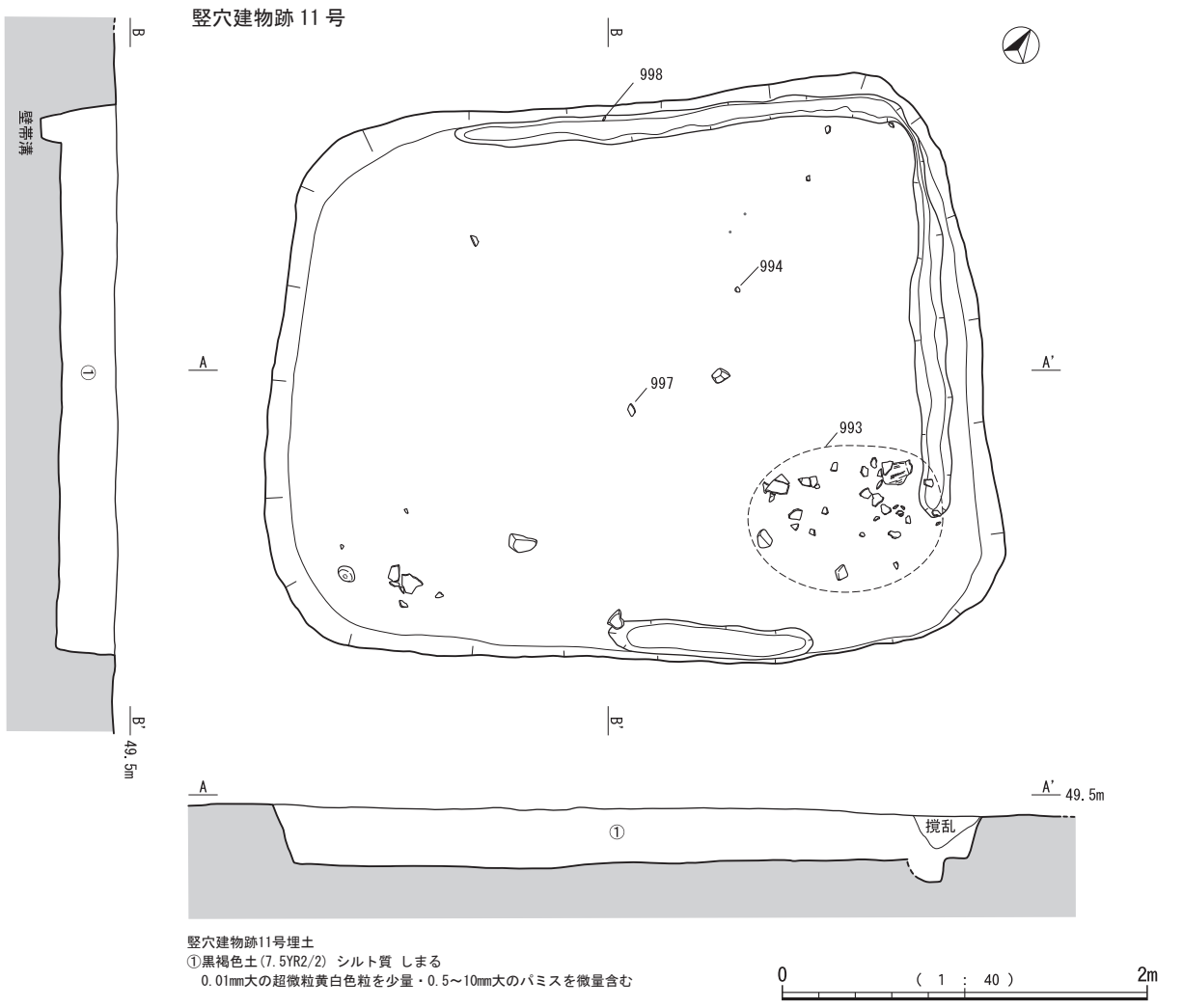
出土遺物（第 208 図　993 ～ 998）

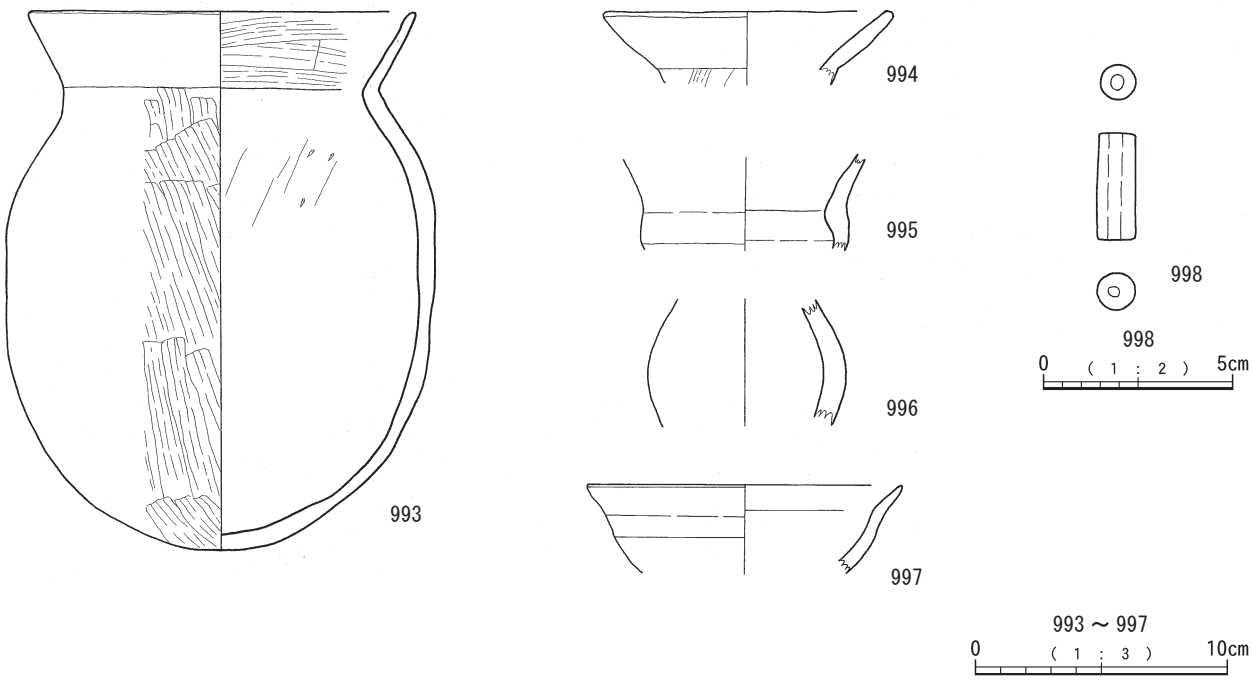
993 は口径 15.4 ㎝，器高 21.2 ㎝を計る，完形の甕形土器である。口縁部はやや外反し，口唇端部はやや内湾する。頸部は強く屈曲し，内側に明瞭な稜をもつ。器壁はタタキによって成形し，薄く仕上げる。胴部外面は縦方向のハケメを施し，口縁部外面はナデ調整を施す。胴部内面はケズリ後ナデ調整を施し，口縁部内面は横方向のハケメを施す。外面の底部から胴部上半部にかけて一面に黒斑が残る。

994，995，996 は小型丸底壺である。994 は直線的に外反する口縁部である。口唇端部は外面に稜をもつ。やや焼成不良である。内外面ともにナデ調整を施す。995 は小型丸底壺の頸部である。内面の稜は緩やかである。内外面ともにナデ調整を施す。外面には一部黒斑が残る。996 は小型丸底壺の胴部である。内外面ともにナデ調整を施す。

997 は緩やかに外反する口縁部をもつ鉢形土器である。口唇端部はやや尖らせる。内外面ともにナデ調整を施す。色調は明赤褐色を呈する。胎土には小礫が多量に混じる。有段口縁鉢の模倣品とみられる。

998 は緑色凝灰岩製の管玉である。外形は直径 1.0 ㎝，穿孔部の直径は 0.4 ㎝である。全面に丁寧な研磨を施す。使用痕などは確認出来なかった。





第 208 図　竪穴建物跡 11 号　出土状況及び出土遺物

第６節　古代以前の調査

１　調査の概要

平成 26・30 年度調査において，Ｃ～Ｇ－９・10 区から溝状遺構が確認されている。検出当初は中世のものかと思われたが，堆積状況を確認すると埋土中程に紫コラ（開聞岳起源：A.D.874 年）の堆積が確認されたため，古代以前の堀跡であると判断した。遺構内から時期を確定できるような遺物が出土しなかったため，今回は古代以前の遺構として報告する。

２　遺構

堀跡１号（第 209 ～ 212 図）

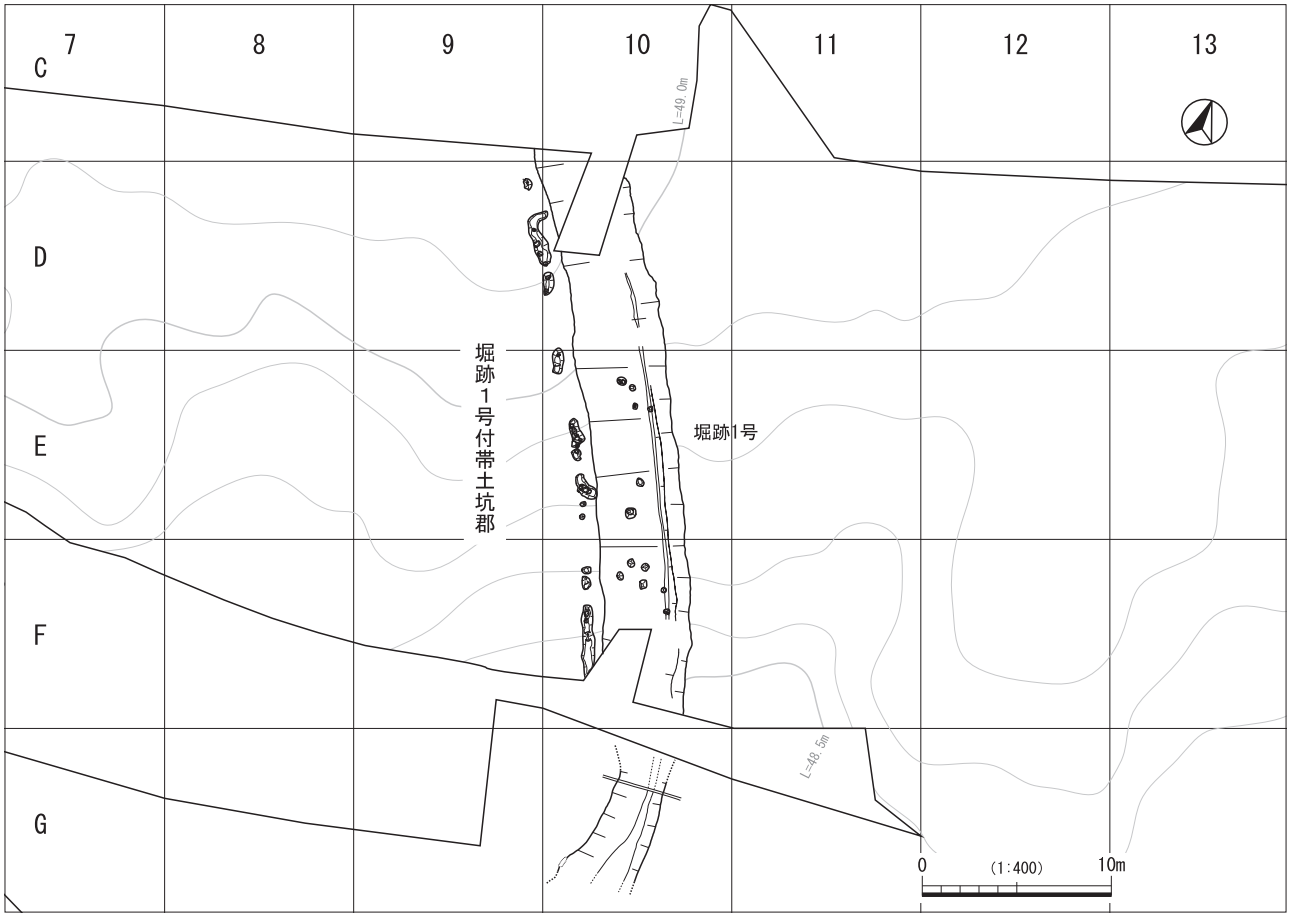
Ｃ～Ｇ－９・10 区のⅢ層中から検出された。幅約５ｍ，深さ約 2.6 ｍで，検出された長さは約 40 ｍである。主軸は南北方向である。東壁はほぼ垂直に立ち上がり，西壁は約 45 度の傾斜で立ち上がる。堀底の形状は片薬研堀である。

南壁土層から埋土は，①a・ｂと②ｃ～ｊ③ｋ～ｗの３種に大別される。③層は堀が機能していた時期に堆積した黒～黒褐色土である。②層は堀が埋没した後に道として利用していたときの堆積土である。ｆ・ｇは紫コラの自然堆積であり，古代の道跡であると考えられる。①層は道廃絶後の堆積土である。

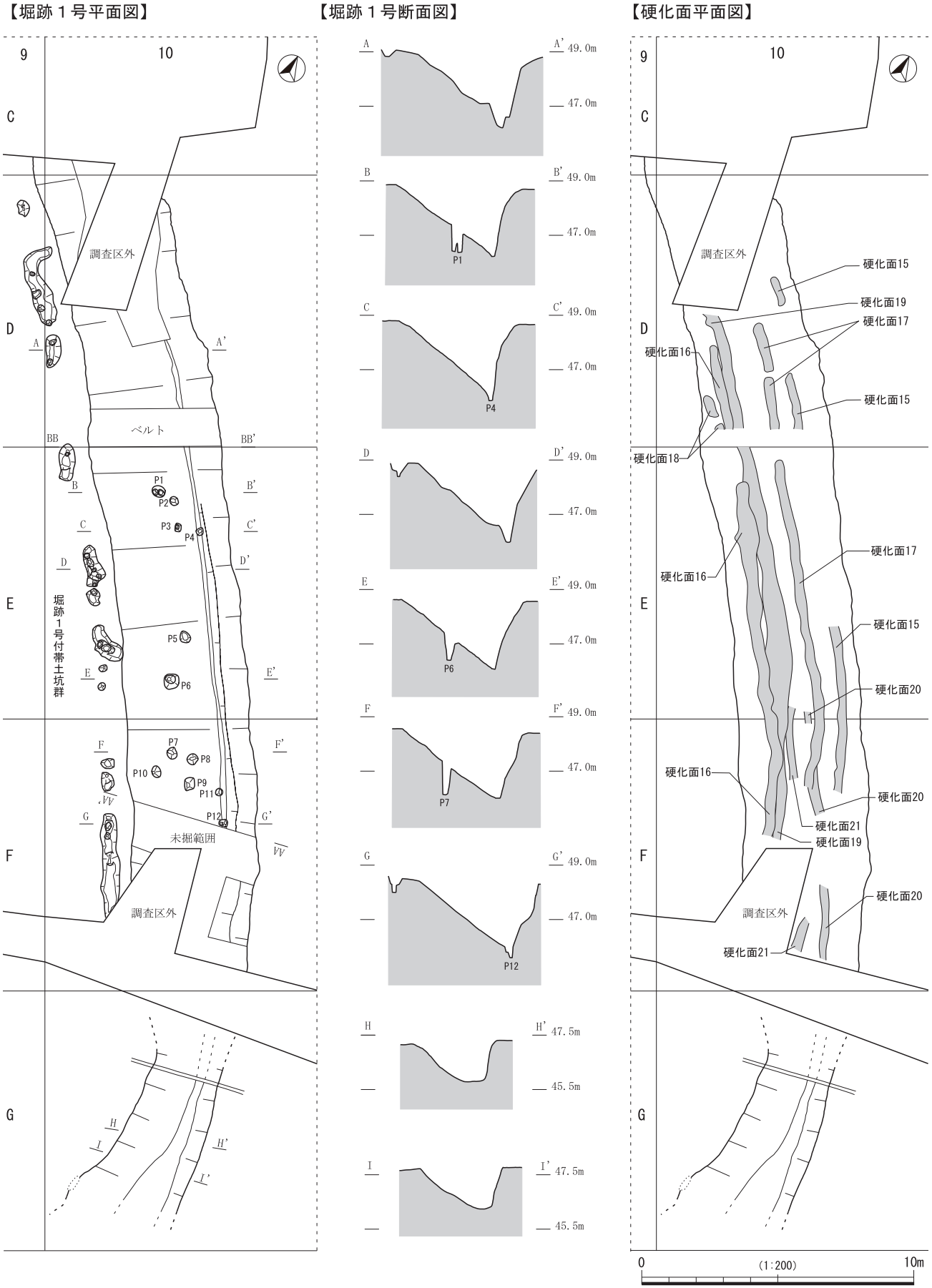
堀の斜面と底面においてピット 12 基が検出された。大きいものは長径 35 ㎝，短径 30 ㎝，深さは 100 ㎝ほどであった。逆茂木痕の可能性があるが，大きさや並びに規則性は確認できなかった。

堀の西側で，堀に平行して土坑群が検出された。大きいもので長径 280 ㎝，短径 80 ㎝，深さ 60 ㎝ほどであった。柵や土塁といった堀に付随する防御施設の一部である可能性が考えられる。

遺物は堀跡①層から縄文時代早期の土器片が出土しているが，これらは後世の流れ込みである。堀跡使用時，廃絶時と思われる②層・③層からの遺物出土はなく，正確な時期を判定するには至らなかった。県内では 874 年以前の片薬研堀建造は類例がない。堀の東側には弥生時代の住居が５軒，堀の西側には古墳時代の住居が６軒（内２軒は『荒園遺跡１』で報告済）検出されている。

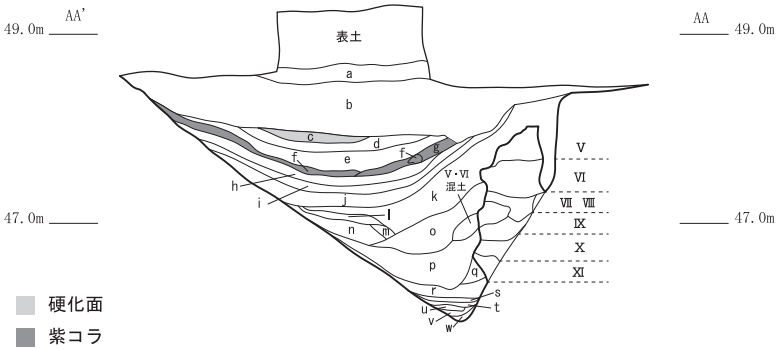


第 209 図　古代以前　遺構配置図

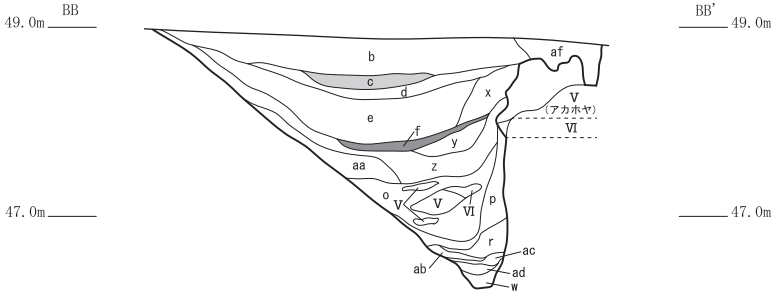


第 210 図　堀跡１号　平面・断面図及び硬化面

【南壁土層】



【北壁土層】



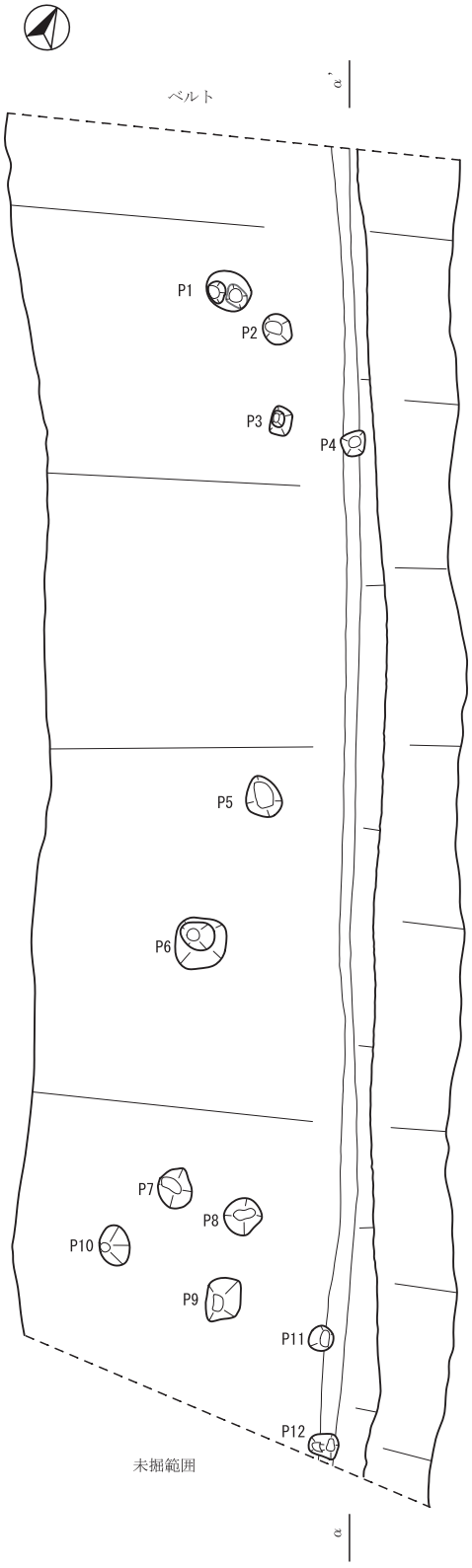
堀跡１号埋土
a:黒褐色土(10YR2/2) シルト質 粘性やや有り よくしまる 0.5～2mmの白色粒・白色パミス・褐色粒を微量含む
b:黒褐色土(10YR2/2) シルト質 粘性やや有り しまる 0.5～1mmの黄色粒・白色粒を微量・小レキを少量含む
c:黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまる 1～5mmの明褐色土(7.5YR5/6)を微量・小レキを少量含む
d:黒色土(7.5YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまる 0.5～1mmの黄色粒・白色粒を微量・小レキを少量含む
e:黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまる 0.5～1mmの黄色粒・白色粒を少量含む
f:黒褐色土(10YR2/2) シルト質 粘性やや有り よくしまる 0.5～1mmの白色粒を少量・灰黄褐色(10YR4/2)砂質土の5cm大の紫コラブロックを含む
g:黒褐色土(10YR2/2) シルト質 粘性やや有り しまる 0.5～1mmの黄色粒を微量・灰黄褐色(10YR4/2)砂質土の5cm大のブロックを含む
h:黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまる 1mm大の褐色粒を微量含む
i:黒褐色土(10YR2/2) シルト質 粘性やや有り しまる 0.5～1mmの褐色粒・黄色粒を少量含む
j:黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまる 5～10mm大の褐色粒・黄色粒を微量含む
k:黒色土(7.5YR2/1) シルト質 粘性有り しまる 1～15mm大の明褐色・黄色粒を微量含む
l:黒褐色土(10YR2/3) シルト質 粘性有り しまる 5cm大のアカホヤブロックを微量含む
m:褐灰色土(7.5YR4/2) シルト質 粘性やや有り しまる 0.5～1mmの黄色粒・白色粒を微量含む
n:黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまる 0.5～1mmの褐色粒を微量含む
o:黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまる 5～10cm大のアカホヤブロックを多量含む
p:黒褐色土(10YR2/3) シルト質 粘性やや有り しまる 2cm大の白色パミス・1cm大の褐色粒を少量含む
q:黒褐色土(7.5YR3/2) シルト質 粘性弱い しまり弱い 0.5～1mmの褐色粒を微量含む
r:暗褐色土(10YR3/3) 砂壌土 粘性弱い しまり弱い 5mm大の白色パミス・褐色粒を微量含む
s:黒褐色土(10YR2/3) 砂壌土 粘性弱い しまり弱い 5mm大の白色パミスを微量含む
t:暗褐色土(10YR3/3) 砂壌土 粘性弱い しまり弱い 5mm大の白色パミスを少量含む
u:黒褐色土(10YR2/3) 砂壌土 粘性弱い しまり弱い 5mm大の白色・黄色パミスを微量含む
v:黒褐色土(10YR2/3) 砂壌土 粘性やや有り しまり弱い 5mm大の白色・黄色・褐色パミスを少量含む
w:黒褐色土(10YR2/3) 砂壌土 粘性やや有り しまり弱い 5mm大の白色・黄色パミスを少量含む
x:黒色土(7.5YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまる 1～15mm大のアカホヤ黄褐色粒を少量含む
y:黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまり弱い 1～5mm大の黄褐色粒を少量含む
z:黒色土(7.5YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまり弱い 1～5mm大の黄色粒・白色粒を微量含む
aa:黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性有り しまり弱い 0.5～1mm大の黄色粒を微量含む
ab:にぶい黄褐色土(10YR4/3) シルト質 粘性やや有り しまり弱い 1cm大の白色パミスを微量含む
ac:黒褐色土(10YR2/3) シルト質 粘性やや有り しまり弱い 5mm大の黄白色パミス・黄色粒を微量含む
ad:黒褐色土(10YR3/2) シルト質 粘性やや有り しまり弱い 1cm大の黄白色パミス・白色粒を微量含む
af:黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまる 0.5～1mmの白色粒を微量含む

土層注記
Ⅴ：アカホヤ火山灰
Ⅵ：黒褐色土 縄文時代早期包含層
　主に手向山・平椿・塞ノ神・苦浜式土器
Ⅶ：黒褐色土 縄文時代早期包含層
　遺物量は少ない
Ⅷ：サツマ火山灰
Ⅸ：暗褐色土(7.5YR3/3) シルト質 粘性強い しまる
Ⅹ：黒褐色土(10YR2/3) シルト質 粘性強い しまる
　Ⅸ層よりやや暗い
Ⅺ：黒褐色土(7.5YR2/2) シルト質 粘性強い しまる
　チョコ層

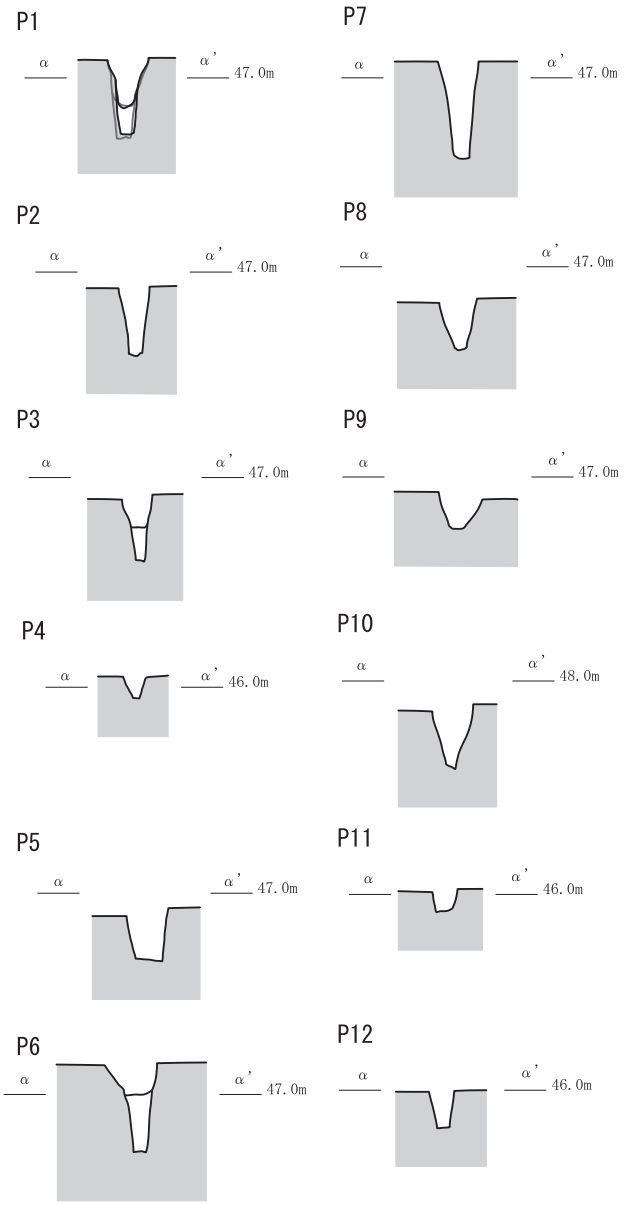
0 (1:80) 5m

第 211 図　堀跡１号　南壁土層・北壁土層

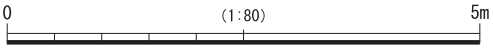
【堀跡1号　ピット平面図】



【ピット断面図】



堀跡１号内ピット埋土
Ｐ１：黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性有り しまり弱い
　　1cm大の黄褐色土(10YR5/6)・0.5～2mmの白色粒を微量含む
Ｐ２：黒褐色土(10YR2/2) シルト質 粘性やや有り しまり弱い
　　0.5～1mmの黄色粒を微量含む
Ｐ３：黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性有り しまり弱い
Ｐ４：暗褐色土(10YR3/3) シルト質 粘性有り しまる
　　1cm大の黄褐色土(10YR5/6)・0.5～1mmの白色粒・黄色粒を微量含む
Ｐ５：黒褐色土(10YR2/2) シルト質 粘性やや有り しまり弱い
　　1cm大の黄褐色土(10YR5/6)を微量含む
Ｐ６：黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性有り しまり弱い
　　5cm大のⅨ層ブロックを含む
Ｐ７：黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性有り しまり弱い
　　5cm大のⅨ層ブロックを含む
Ｐ８：黒褐色土(10YR2/2) シルト質 粘性やや有り しまり弱い
　　2～5cmの黄褐色土(10YR5/6)を微量含む
Ｐ９：黒褐色土(10YR2/2) シルト質 粘性やや有り しまり弱い
　　2～5cmの黄褐色土(10YR5/6)を微量含む
Ｐ10：黒褐色土(10YR2/2) シルト質 粘性有り しまる
Ｐ11：暗褐色土(10YR3/3) シルト質 粘性有り しまる
　　1cm大の黄褐色土(10YR5/6)・0.5～1mmの白色粒・黄色粒を微量含む
Ｐ12：暗褐色土(10YR3/3) シルト質 粘性有り しまる
　　1cm大の黄褐色土(10YR5/6)・0.5～1mmの白色粒・黄色粒を微量含む



第 212 図　堀跡１号　ピット平面・断面図

第７節　中近世の調査

１　調査の概要

中近世の調査は，平成 25・26 年度調査において調査区の全体を対象に行った。

当該時期の遺構は，土坑 18 基，掘立柱建物跡３棟，溝状遺構６条，硬化面複数条がⅡｃ～Ⅱｅ層で検出された。埋土はⅡｂ層由来が多く，遺構内からの遺物の出土も乏しかったため，明確な時期の判定が困難であった。

包含層からの遺物は，青磁，陶器，土師器，須恵器等が出土した。

２　遺構

（１）土坑

土坑３号（第 215 図）

Ｅ－ 16・17 区のⅡｅ層で検出された。長軸 115 ㎝，短軸 66 ㎝の楕円形を呈する。溝状遺構２号を切る形で検出された。検出面からの深さは 32 ㎝である。埋土はⅡｄ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は出土しなかった。

土坑４号（第 215 図）

Ｈ・Ｉ－ 16 区のⅡｅ層で検出された。長軸 241 ㎝，短軸 103 ㎝の隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 14 ㎝である。埋土はⅡｄ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は土師器の小片が出土した。

土坑５号（第 215 図）

Ｊ－ 19 区のⅡｃ層で検出された。長軸 108 ㎝，短軸 76 ㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは 18 ㎝である。埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は出土しなかった。

土坑６号（第 215 図）

Ｊ－ 19 区のⅡｃ層で検出された。長軸 91 ㎝，短軸 58 ㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは 10 ㎝である。埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は出土しなかった。

土坑７号（第 215 図）

Ｈ－ 18 区のⅡｃ層で検出された。長軸 179 ㎝，短軸 84 ㎝の楕円形を呈する。南東側は後世の掘削により削平されている。検出面からの深さは 20 ㎝である。埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は土師器の小片が出土した。

土坑８号（第 215 図）

Ｊ－ 18 区のⅡｅ層で検出された。長軸 107 ㎝，短軸 54 ㎝の隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは８㎝である。埋土はⅡｄ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は出土しなかった。

土坑９号（第 215 図）

Ｋ－ 18 区のⅡｃ層で検出された。長軸 67 ㎝，短軸 63 ㎝の略円形を呈する。検出面からの深さは 10 ㎝である。埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は出土しなかった。

土坑 10 号（第 215 図）

Ｋ－ 18 区のⅡｃ層で検出された。長軸 80 ㎝，短軸 68 ㎝の略円形を呈する。検出面からの深さは 10 ㎝である。埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は土師器の小片が出土した。

土坑 11 号（第 215 図）

Ｋ－ 19 区のⅡｃ層で検出された。長軸 90 ㎝，短軸 88 ㎝の略円形を呈する。検出面からの深さは 10 ㎝である。埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は出土しなかった。

土坑 12 号（第 215 図）

Ｊ－ 20 区のⅡｃ層で検出された。長軸 97 ㎝，短軸 57 ㎝の隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 22 ㎝である。埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土である。遺物は出土しなかった。

土坑 13 号・14 号（第 216 図）

Ｊ－ 20 区のⅡｃ層で検出された。長軸 80 ㎝，短軸 75 ㎝の略円形の土坑が，長軸 50 ㎝，短軸 34 ㎝の略円形の土坑を切るような形で検出された。検出面からの深さは 10 ㎝である。埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土の単層であり，同時期に埋没したと考えられる。遺物は出土しなかった。

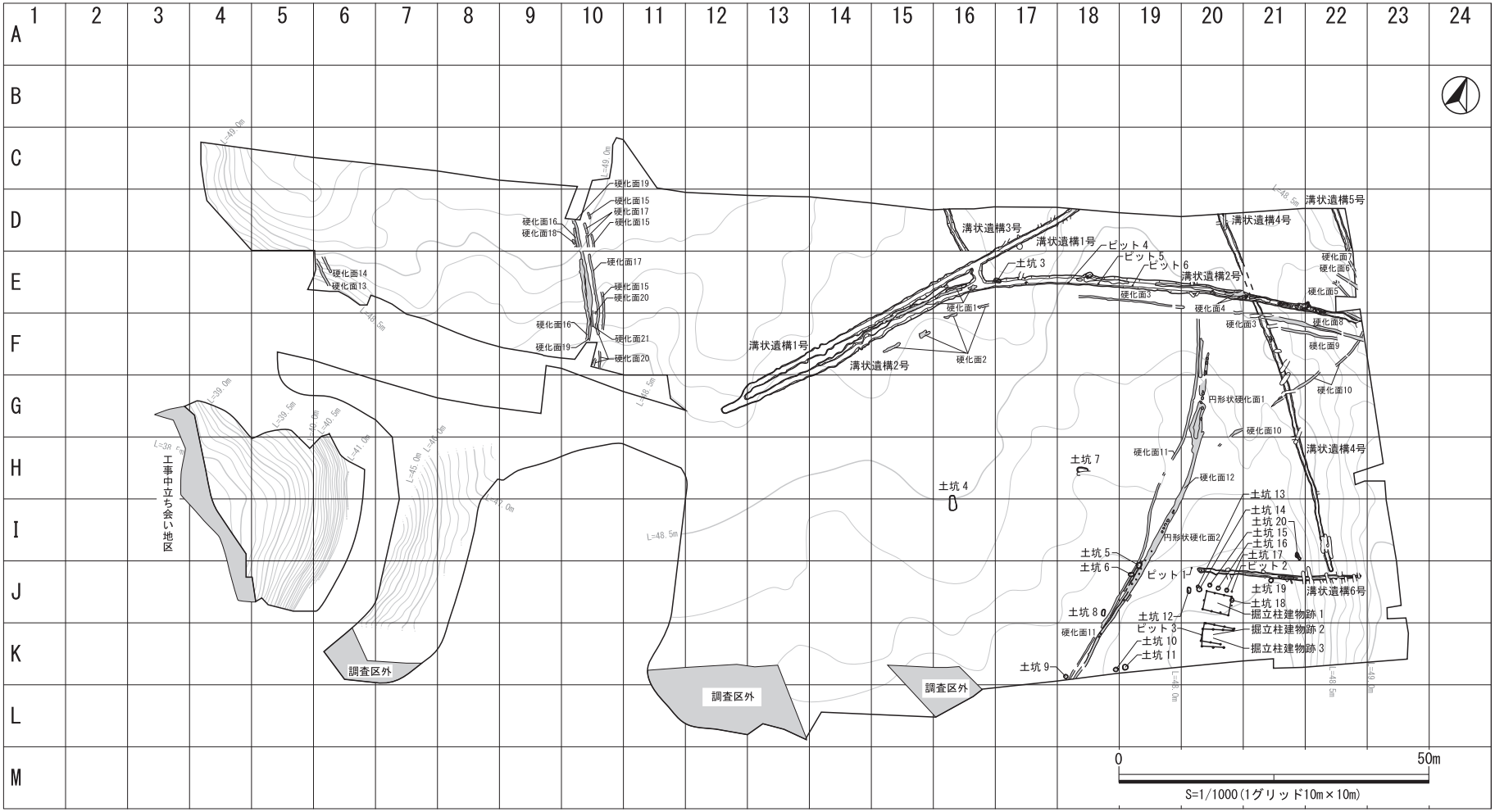
土坑 15 号（第 216 図）

Ｊ－ 20 区のⅡｃ層で検出された。長軸 62 ㎝，短軸 59 ㎝の略円形を呈する。検出面からの深さは８㎝である。埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は出土しなかった。

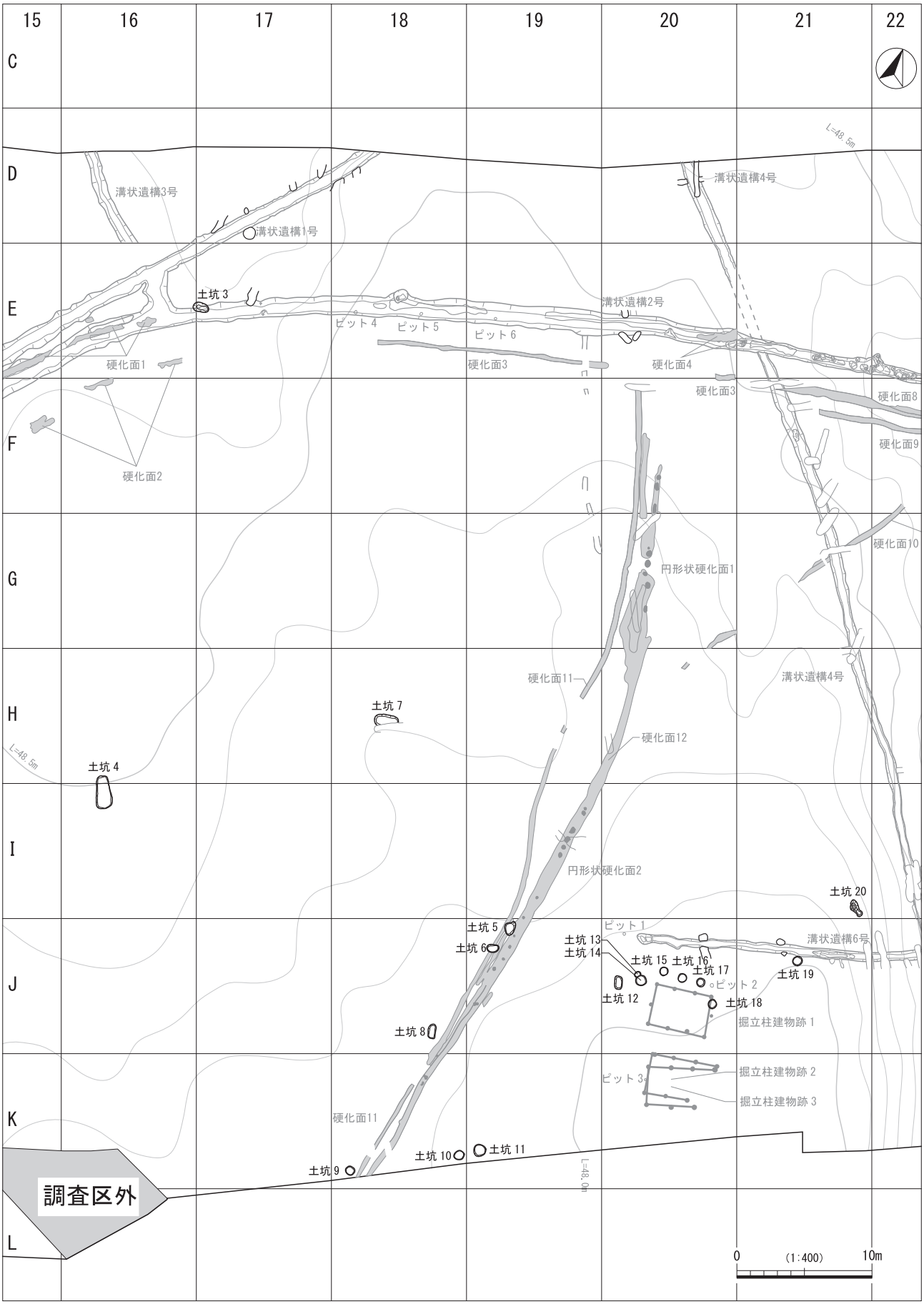
土坑 16 号（第 216 図）

Ｊ－ 20 区のⅡｃ層で検出された。長軸 65 ㎝，短軸 60 ㎝の略円形を呈する。検出面からの深さは８㎝である。埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は出土しなかった。

土坑 17 号（第 216 図）

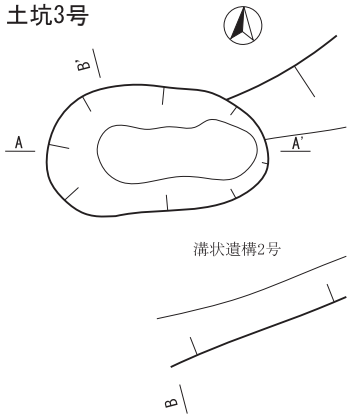


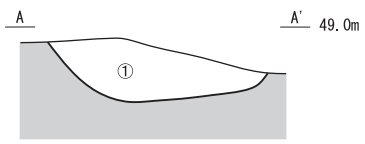
第 213 図　中近世　遺構配置図（１）

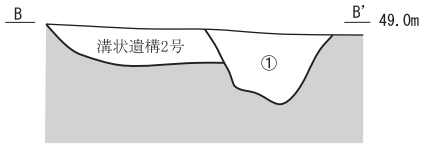


第 214 図　中近世　遺構配置図（２）

土坑3号

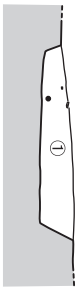


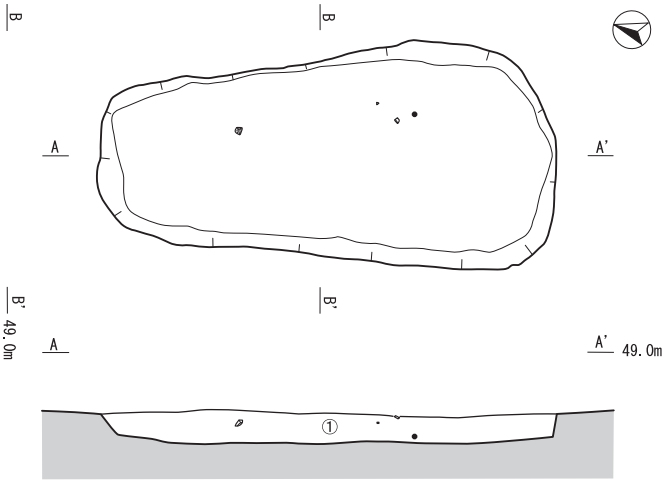




土坑３号埋土
①黒色土(10YR1.7/1) シルト質 粘性弱い しまる
1mm大の赤色粒を含む

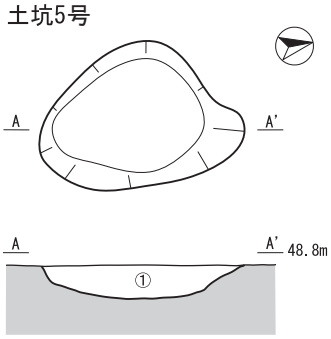
土坑 4号





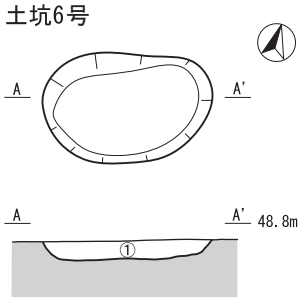
土坑４号埋土
①黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性やや有り ややしまる 赤色粒を含む

土坑5号



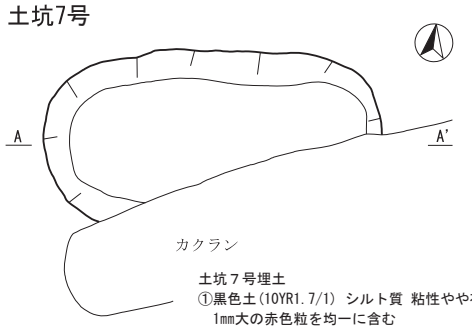
土坑５号埋土
①黒色土(10YR1.7/1) シルト質
粘性やや有り しまる
1mm大の赤色粒を均一に含む

土坑6号

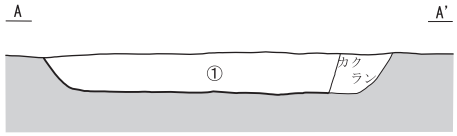


土坑６号埋土
①黒色土(10YR1.7/1) シルト質
粘性やや有り しまる
1mm大の赤色粒を均一に含む

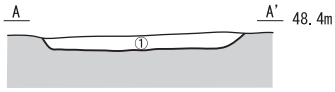
土坑7号



土坑７号埋土
①黒色土(10YR1.7/1) シルト質 粘性やや有り しまる
1mm大の赤色粒を均一に含む

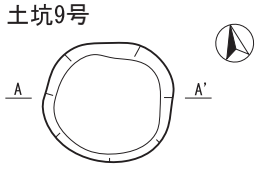


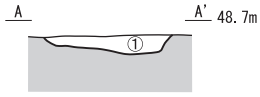
土坑8号



土坑８号埋土
①黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性弱い しまる
1～5mm大の明黄褐(10YR6/8)粒・
1mm以下のレキ・鉱物片を微量含む

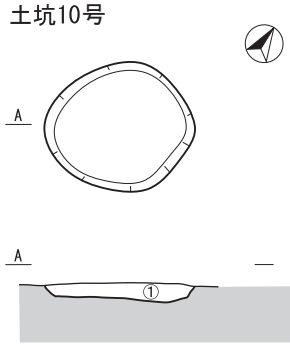
土坑9号





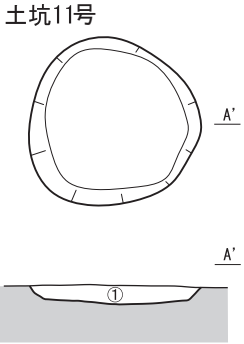
土坑９号埋土
①黒色土(10YR2/1) シルト質
粘性やや有り ややしまる
2mm以下の鉱物・レキ片・
1mm以下の赤色粒を微量含む

土坑10号



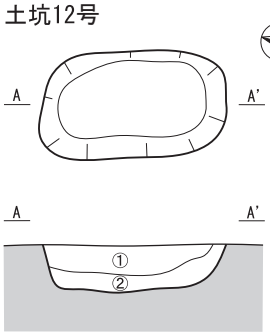
土坑10号埋土
①黒色土(10YR2/1) シルト質
粘性やや有り よくしまる
0.5～1mm大の赤色粒・石英・
鉱物片を含む 1～3mmの炭化物を微量含む

土坑11号

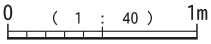


土坑11号埋土
①黒色土(10YR2/1) シルト質
粘性やや有り よくしまる
0.5～1mm大の赤色粒・石英・
鉱物片を含む 1～3mmの炭化物を微量含む

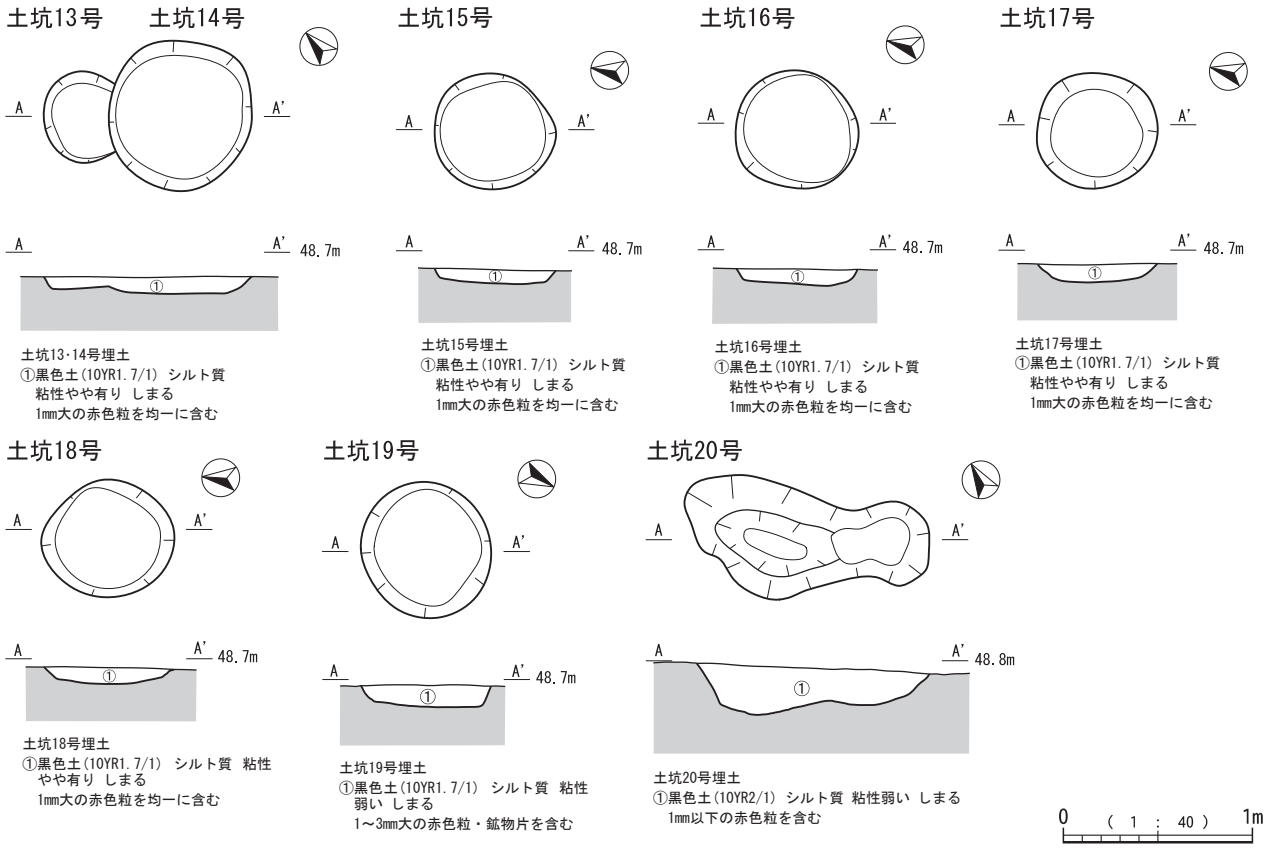
土坑12号



土坑12号埋土
①黒色土(10YR1.7/1) シルト質
粘性やや有り しまる
1mm大の赤色粒を均一に含む
②黒色土(10YR1.7/1) シルト質
粘性有り しまる
①より黒味が増す
1mm大の赤色粒を均一に含む



第 215 図　中近世　土坑（１）



第 216 図　中近世　土坑（２）

Ｊ－ 20 区のⅡｃ層で検出された。長軸 62 ㎝，短軸 60 ㎝の略円形を呈する。検出面からの深さは 10 ㎝である。埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は出土しなかった。

土坑 18 号（第 216 図）

Ｊ－ 20 区のⅡｃ層で検出された。長軸 70 ㎝，短軸 60 ㎝の略円形を呈する。検出面からの深さは８㎝である。埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は出土しなかった。

土坑 19 号（第 216 図）

Ｊ－ 21 区のⅡｃ層で検出された。長軸 74 ㎝，短軸 68 ㎝の略円形を呈する。検出面からの深さは 12 ㎝である。埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土の単層である。遺物は出土しなかった。

土坑 20 号（第 216 図）

Ｉ－ 21 区のⅡｃ層で検出された。長軸 132 ㎝，短軸 59 ㎝で，くびれをもった楕円形を呈する。検出面からの深さは 24 ㎝である。平面は２つの土坑が切り合ったような状況が確認できるが，埋土はⅡｂ層を基本とした黒色土の単層であり，同時期に埋没したと考えられる。遺物は出土しなかった。

（２）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡１号（第 218 図）

Ｊ-20 区のⅡｃ層で検出された。梁行２間×桁行３間の長方形を呈する。梁行約 3.1 ｍ，桁行約 4.2 ｍの規模をもち，床面積は約 13.02 ㎡となる。柱穴は直径 10 ㎝～ 20 ㎝である。

埋土はⅡｂ層由来のしまりの弱い黒色土を基本とする。柱穴痕は確認されず，遺物の出土もなかった。

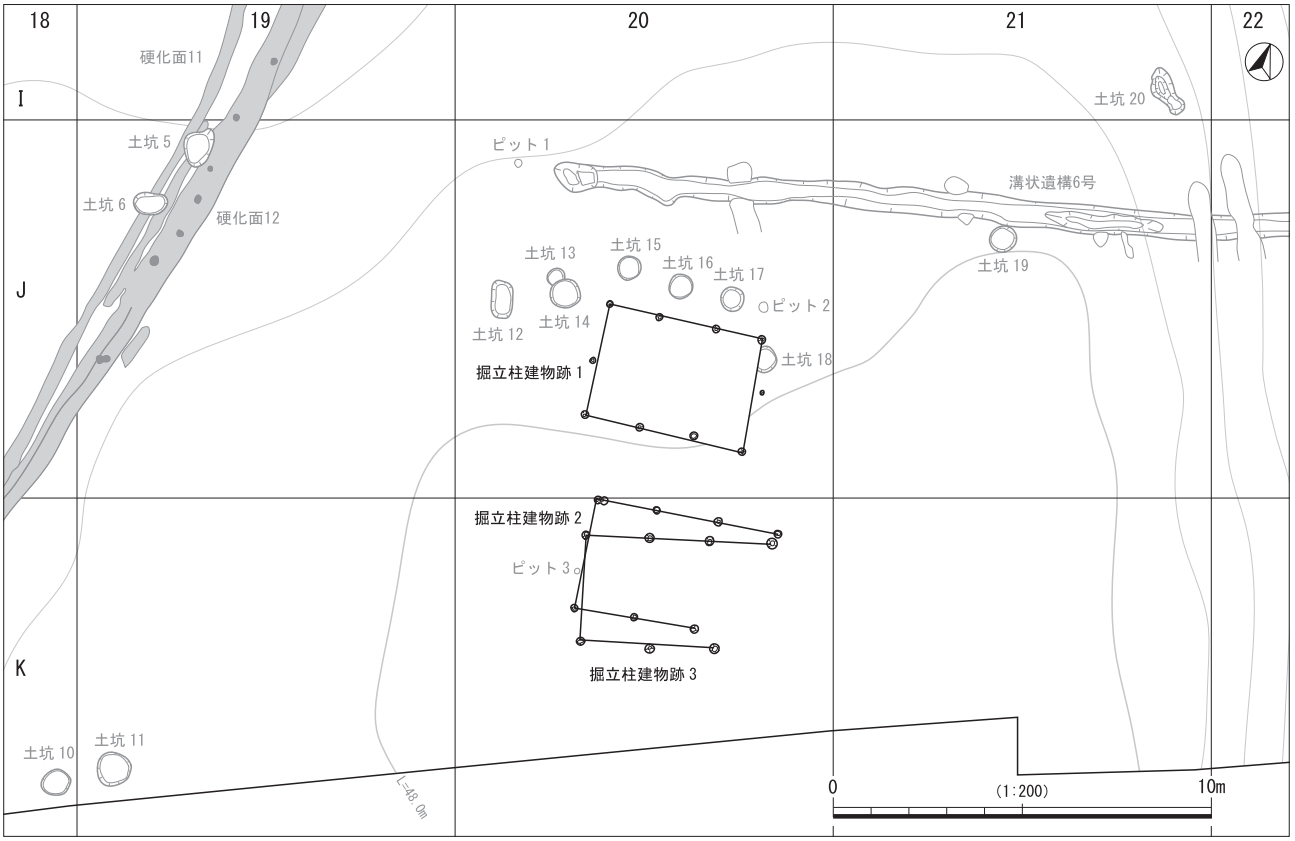
掘立柱建物跡２号（第 219 図）

Ｋ-20 区のⅡｃ層で，掘立柱建物跡３号と重なり合うような形で検出された。梁行１間×桁行３間の長方形を呈する。梁行約 3.0 ｍ，桁行約 5.0 ｍの規模をもち，床面積は約 15.0 ㎡となる。柱穴は直径 10 ㎝～ 20 ㎝である。

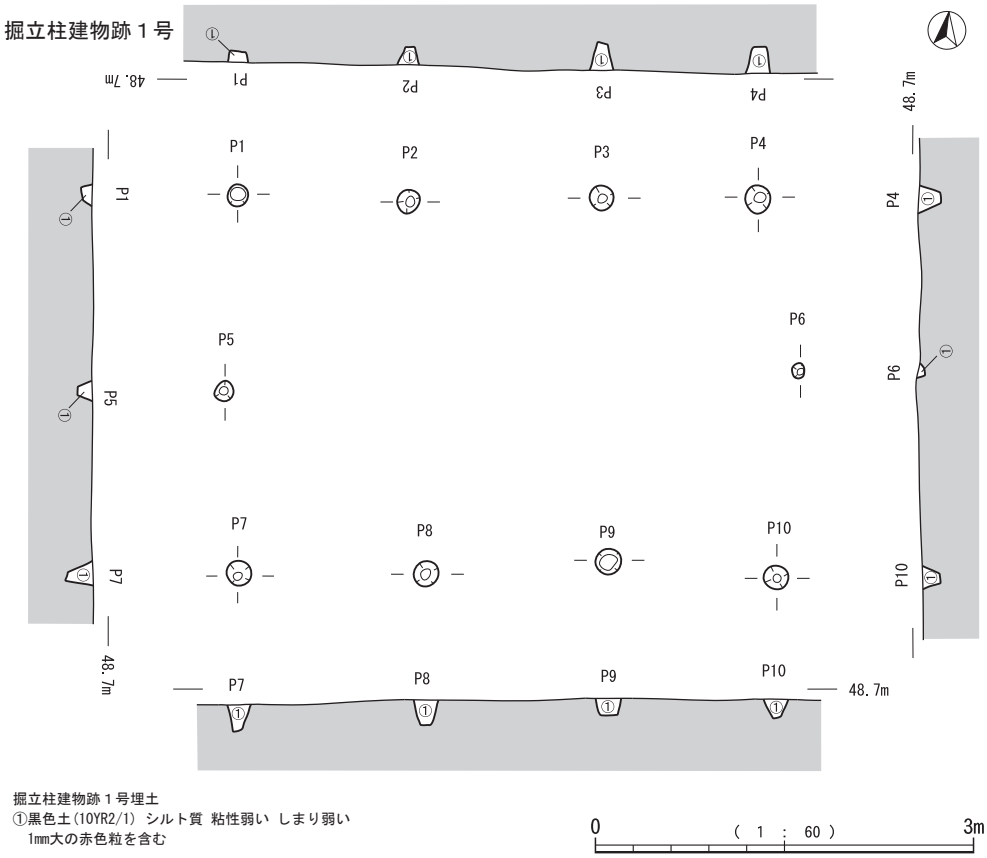
埋土はⅡｂ層由来のしまりの弱い黒色土を基本とする。柱穴痕は確認されず，遺物の出土もなかった。

掘立柱建物跡３号（第 219 図）

Ｋ-20 区のⅡｃ層で，掘立柱建物跡２号と重なり合うような形で検出された。梁行１間×桁行３間の長方形を呈する。梁行約 2.9 ｍ，桁行約 5.0 ｍの規模をもち，床



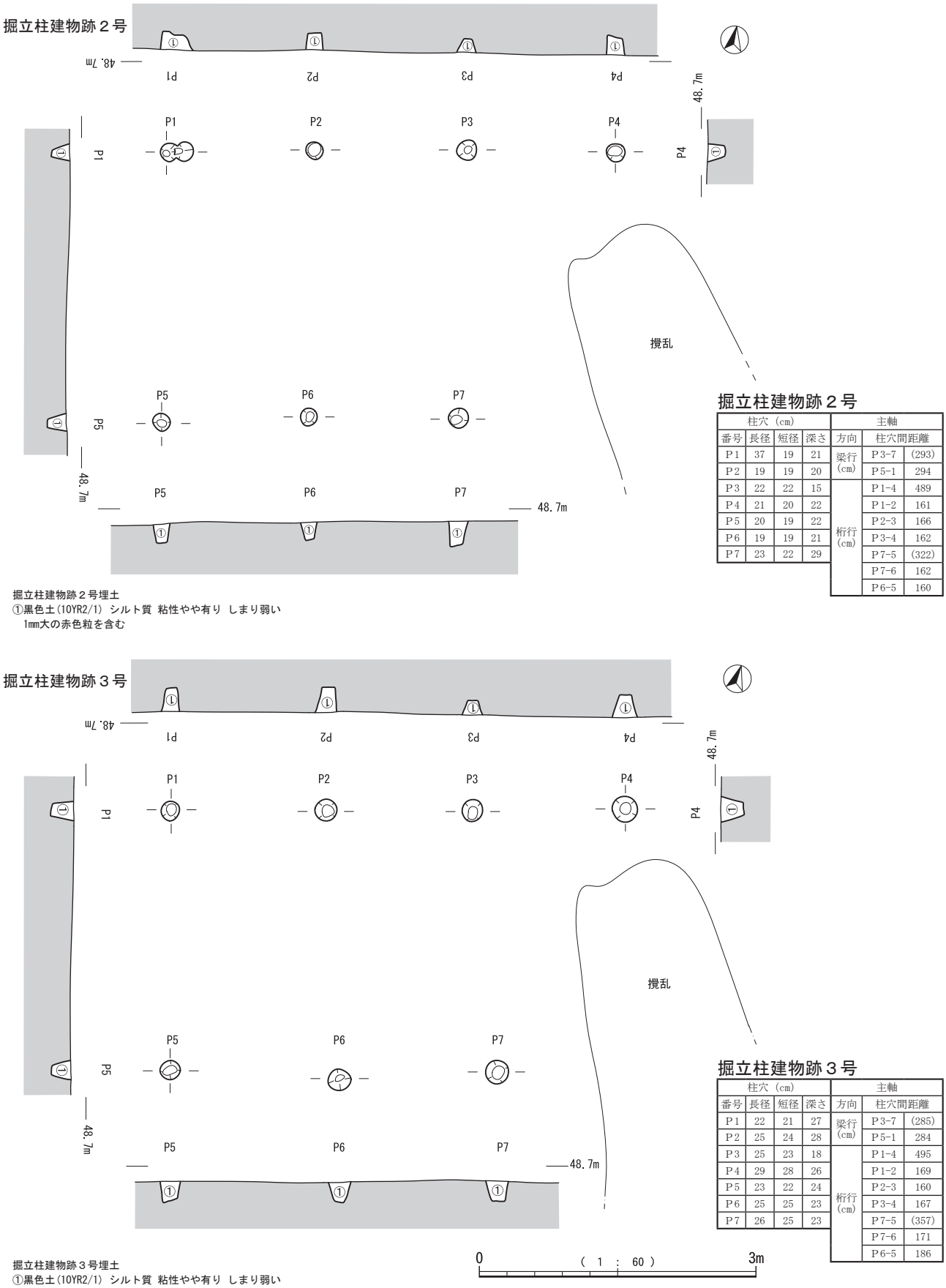
第 217 図　中近世　掘立柱建物跡　遺構配置図



掘立柱建物跡 1 号

柱穴 (cm)				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	18	17	10	梁行 (cm)	P4-10	305
P2	19	19	15		P4- 6	143
P3	21	20	22		P6-10	165
P4	23	21	23		P7- 1	303
P5	18	17	13		P7- 5	147
P6	13	9	7		P5- 1	157
P7	21	20	23	桁行 (cm)	P1- 4	413
P8	21	20	20		P1- 2	135
P9	21	21	14		P2- 3	154
P10	21	19	16		P3- 4	125
					P7-10	429
					P9-10	135
					P9- 8	145
					P8- 7	149

第 218 図　掘立柱建物跡 1 号



掘立柱建物跡２号

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	37	19	21	梁行（cm）	P3-7	(293)
P2	19	19	20		P5-1	294
P3	22	22	15	桁行（cm）	P1-4	489
P4	21	20	22		P1-2	161
P5	20	19	22		P2-3	166
P6	19	19	21		P3-4	162
P7	23	22	29		P7-5	(322)
					P7-6	162
					P6-5	160

掘立柱建物跡２号埋土
①黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまり弱い
1mm大の赤色粒を含む

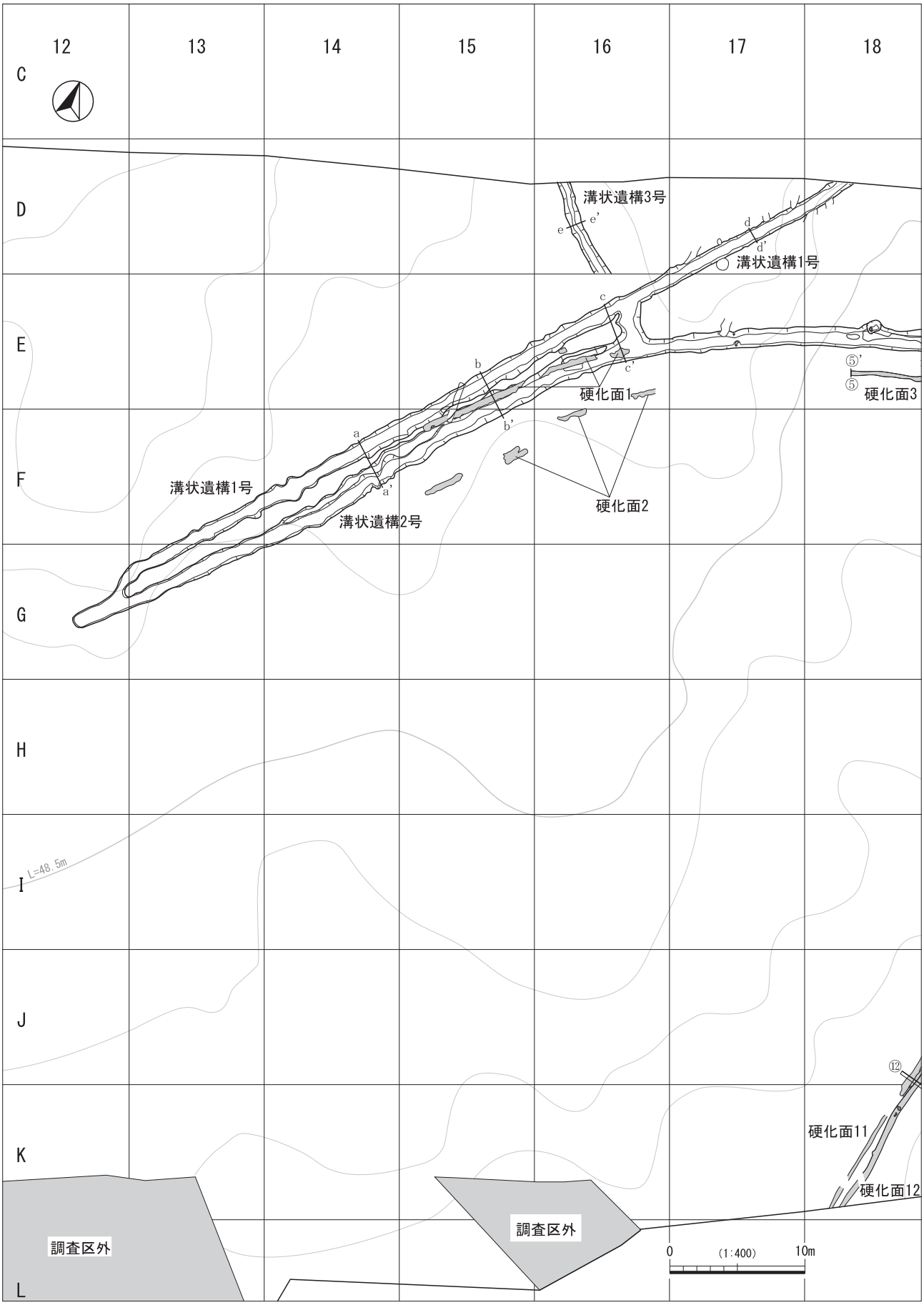
掘立柱建物跡３号

柱穴（cm）				主軸		
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	22	21	27	梁行（cm）	P3-7	(285)
P2	25	24	28		P5-1	284
P3	25	23	18	桁行（cm）	P1-4	495
P4	29	28	26		P1-2	169
P5	23	22	24		P2-3	160
P6	25	25	23		P3-4	167
P7	26	25	23		P7-5	(357)
					P7-6	171
					P6-5	186

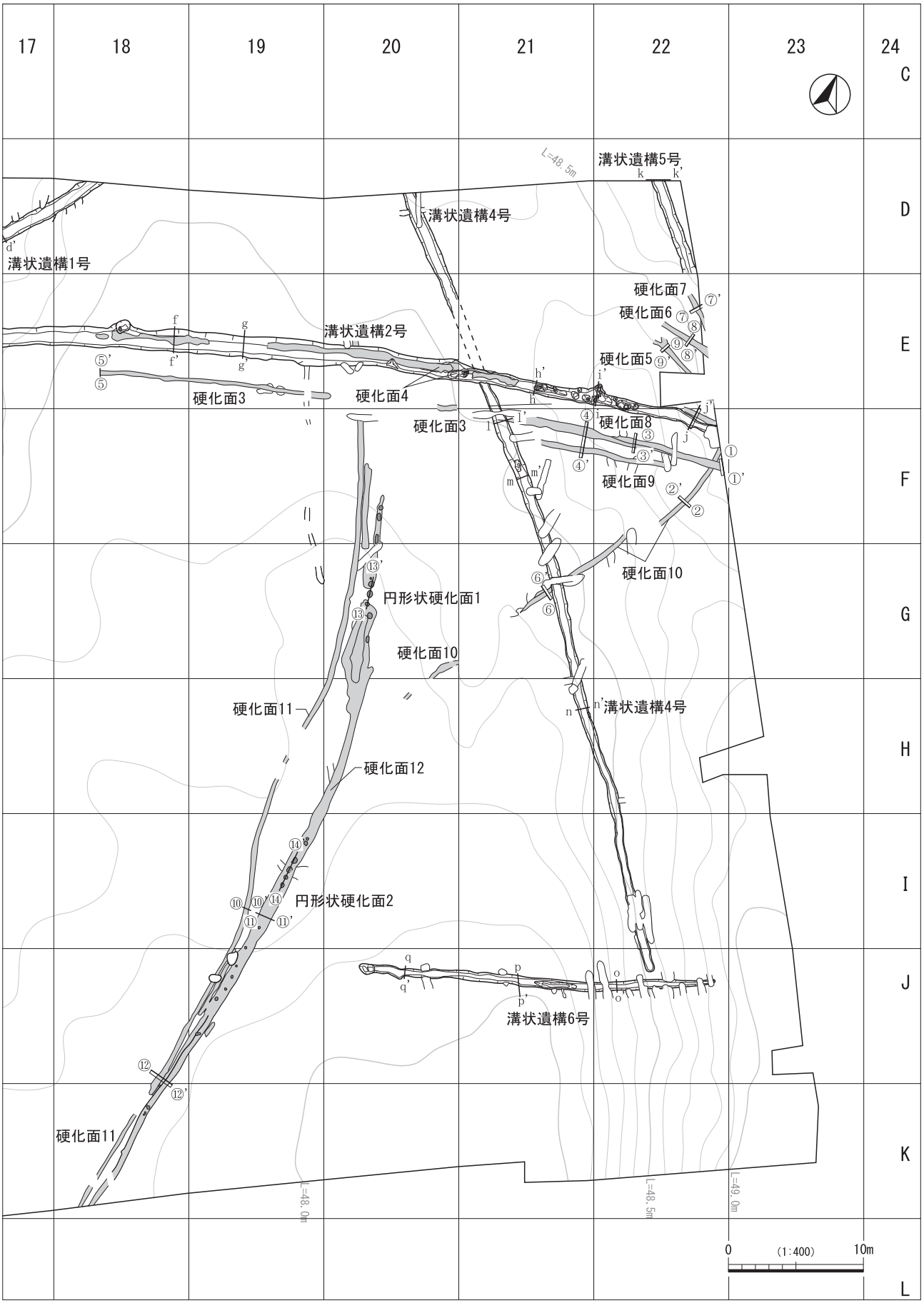
掘立柱建物跡３号埋土
①黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまり弱い
1mm大の赤色粒を含む

0 （1：60） 3m

第219図　掘立柱建物跡２号・３号



第 220 図　中近世　溝状遺構・硬化面　遺構配置図（１）

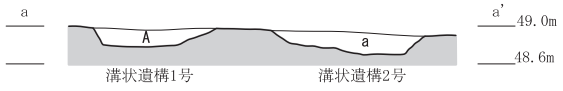


第 221 図　中近世　溝状遺構・硬化面　遺構配置図（２）

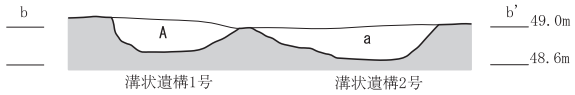
【溝状遺構断面】

溝状遺構1号・2号

a-a' 断面（東壁）

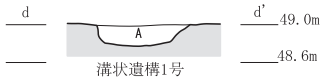


b-b' 断面（東壁）



c-c' 断面（東壁）

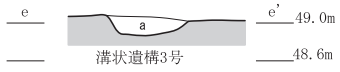
d-d' 断面



溝状遺構１号埋土
A：黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性弱い ややしまる
1mm大の池田火山灰・アカホヤブロックを微量・
1mm以下の赤色粒を均一に含む

溝状遺構3号

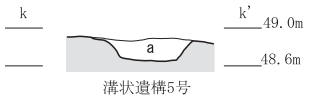
e-e' 断面



溝状遺構３号埋土
a：黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまり弱い
0.5～1mmの赤色粒を微量含む

溝状遺構5号

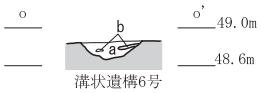
k-k' 断面



溝状遺構５号埋土
a：黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性やや有り しまる
1mm大の赤色粒を均一に含む 1～2mm大のレキ片等を微量含む

溝状遺構6号

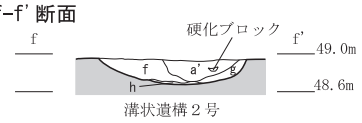
o-o' 断面



溝状遺構６号埋土
a：黒色土(10YR1.7/1) シルト質 粘性やや有り よくしまる
1mm大の赤色粒を均一に含む
b：褐灰色土(10YR4/1) シルト質 粘性弱い しまる
1～5mm大の白色パミスを微量含む

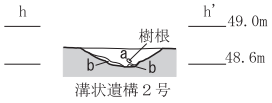
溝状遺構2号

f-f' 断面

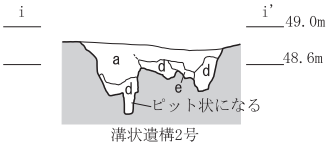


g-g' 断面

h-h' 断面

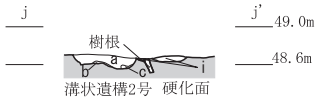


i-i' 断面



溝状遺構２号埋土
a：黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性有り しまる
1～4mm大のにぶい黄褐色(10YR5/4)粒を微量含む
a'：黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性有り しまる
1mm大の赤色粒を含む
b：灰黄褐色土(10YR4/2) シルト質 粘性有り よくしまる
1mm大のレキ片・鉱物片を含む
c：黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性有り よくしまる
1～5cm大のパミスが混ざるブロック

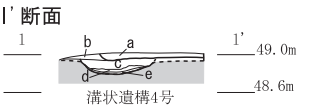
j-j' 断面



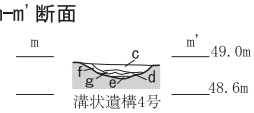
d：黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性有り しまる
0.1～10cm大の明黄褐色(10YR6/8)アカホヤブロックを
少量含む
e：黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性有り しまる
明黄褐色(10YR6/8) アカホヤブロックを多量含む
f：黒褐色土(10YR3/2) シルト質 粘性弱い しまる
1mm大の赤色粒含む
g：黒褐色土(10YR3/1) シルト質 粘性やや有り しまる
1mm大の赤色粒含む
h：黒褐色土(10YR3/2) シルト質 粘性やや有り しまる
i：黒褐色土(10YR3/1) シルト質 粘性なし よくしまる

溝状遺構4号

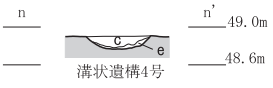
l-l' 断面



m-m' 断面



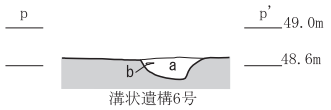
n-n' 断面



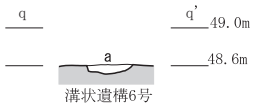
溝状遺構４号埋土
a：黒褐色土(10YR3/1) シルト質 粘性弱い しまる(硬化面３)
白色パミスを含む
b：Ⅰ層
c：黒褐色土(10YR3/1) シルト質 粘性弱い しまる
1mm大の赤色粒を微量含む
d：黒色土(10YR1.7/1) シルト質 粘性弱い しまる
1mm大の赤色粒を均一に含む
e：黒褐色土(10YR2/2)と黒色土(10YR1.7/1)の混ざり土
シルト質 粘性弱い しまる 1mm大の赤色粒を含む
f：黒色土(10YR2/1) シルト質 粘性弱い しまり弱い
g：黒褐色土(10YR3/2) シルト質 粘性弱い しまり弱い
1mm大の赤色粒・黄色粒を微量含む

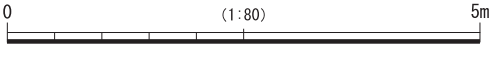
溝状遺構6号

p-p' 断面



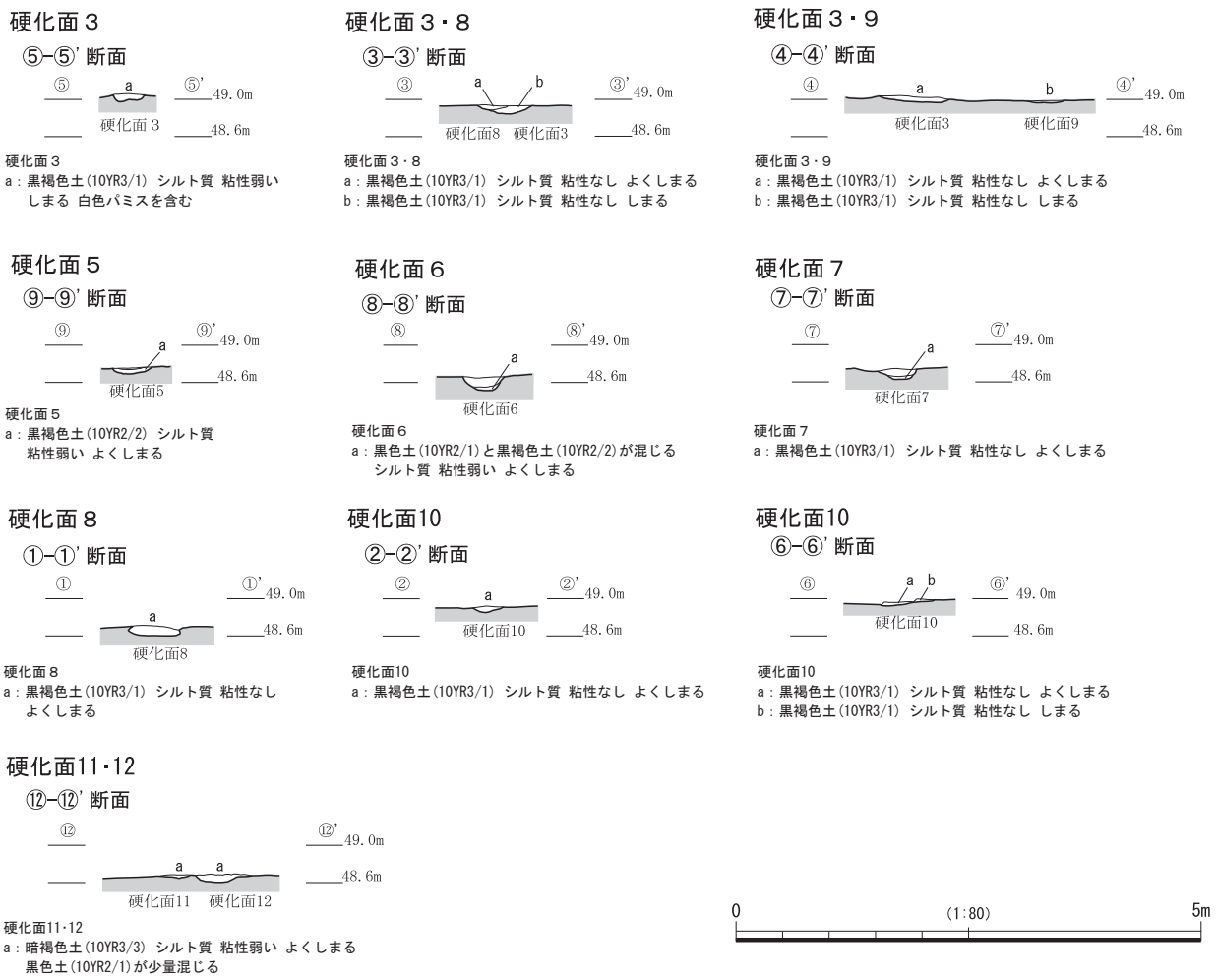
q-q' 断面





第 222 図　中近世　溝状遺構　断面

【硬化面断面】



第 223 図　中近世　硬化面　断面

面積は約14.5㎡となる。柱穴は直径10㎝～20㎝である。

埋土はⅡｂ層由来のしまりの弱い黒色土を基本とする。柱穴痕は確認されず，遺物の出土もなかった。

（３）溝状遺構

溝状遺構１号（第 220 図）

Ｄ～Ｇ－ 12 ～ 18 区のⅡｃ～Ⅱｅ層で検出された。長さ 63.5 ｍ，幅 0.9 ～ 1.4 ｍ，検出面からの深さは 22 ㎝である。軸は北東－南西方向である。Ｇ－ 13 区・Ｅ－ 16 区において溝状遺構２号と接する。北側壁はほぼ垂直に，南側壁はゆるやかに立ち上がる。床面は平坦であるが，硬化面は確認できなかった。埋土はⅡｂ層由来の黒色土を基本としている。遺物は土師器片が出土した。

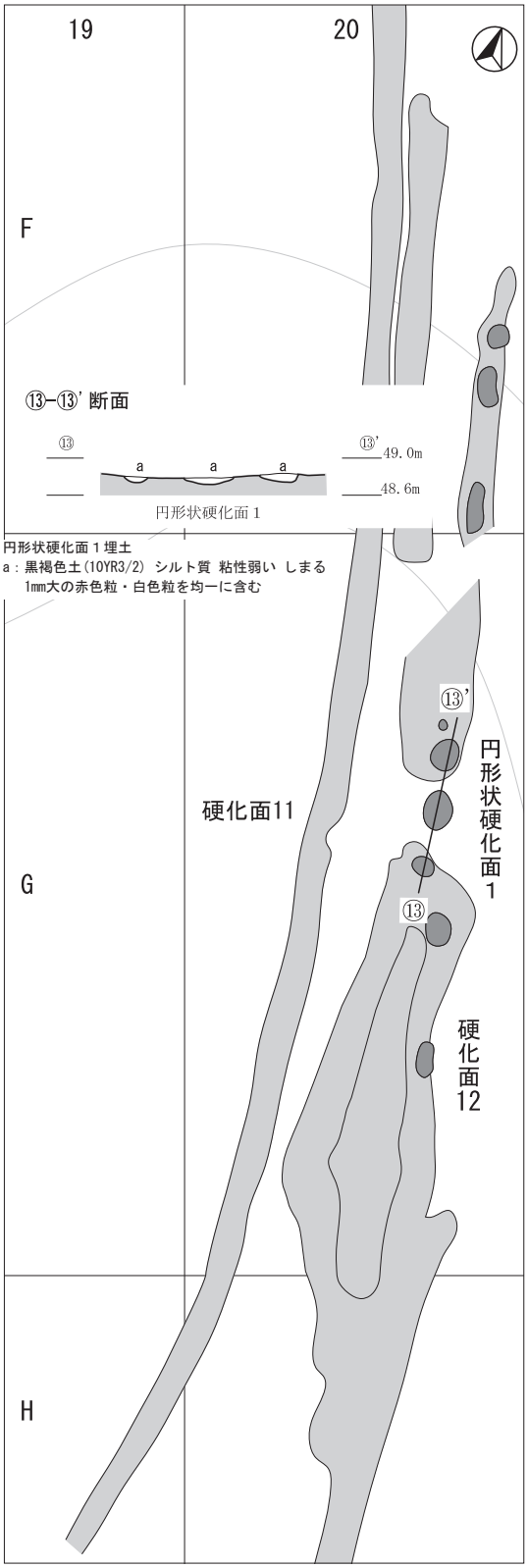
溝状遺構２号（第 220・221 図）

Ｅ～Ｇ－ 12 ～ 22 区のⅡｃ～Ⅱｅ層で検出された。長さ 110.5 ｍ，幅 0.5 ～ 1.5 ｍ，検出面からの深さは最大 18 ㎝である。軸はおおよそ東西方向である。Ｅ－ 17 区を頂点とし，ゆるやかにカーブしながら南下する。溝状遺構１号・溝状遺構４号と交わるが，埋土の切り合い関係から，溝状遺構４号より新しく，溝状遺構５号と同時期のものと考えられる。埋土はしまりのある黒色土を基本とする。溝からの遺物は陶器，須恵器，土師器が出土した。

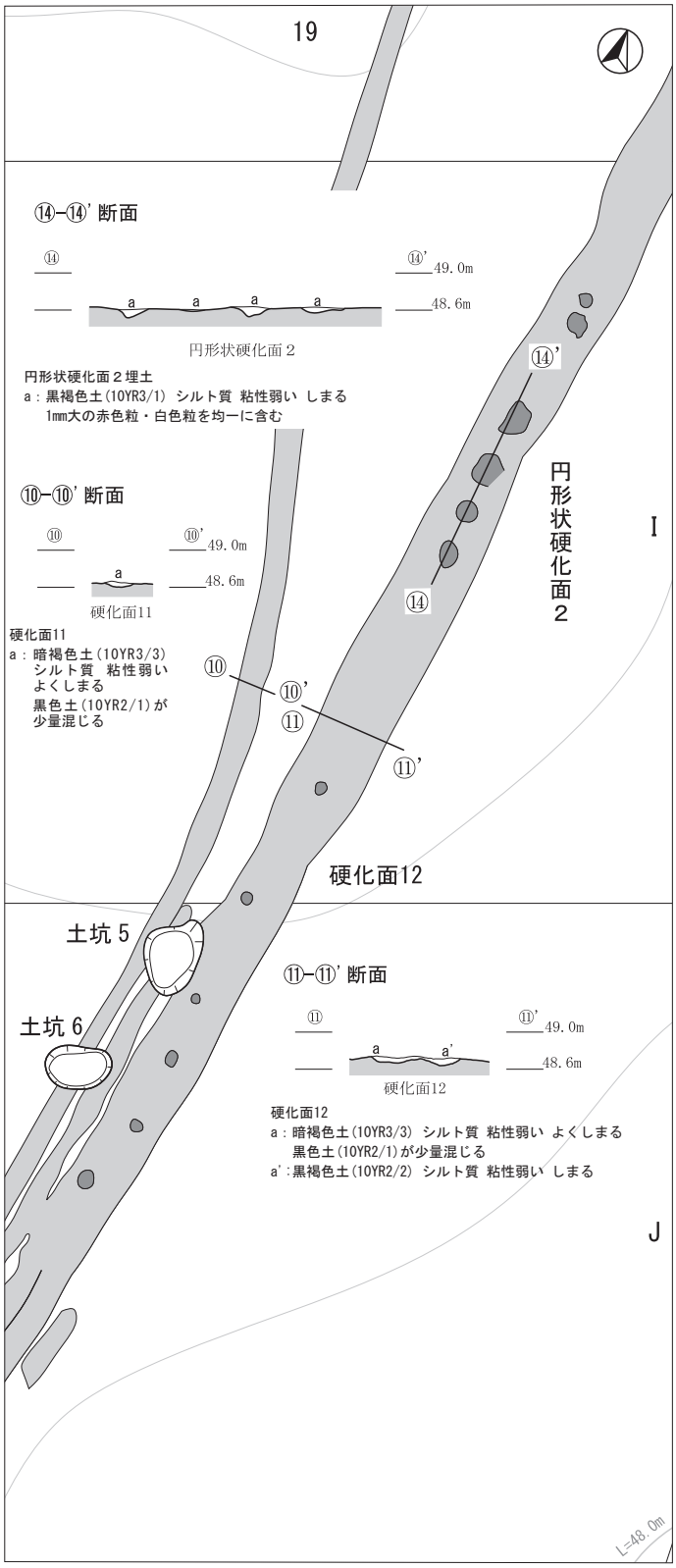
周辺では硬化面が複数条確認された。これらは溝状遺構２号の検出面と同じレベルで検出されており，溝が埋没した後に道として使用された可能性が考えられる。硬化面からは薩摩焼の擂鉢が出土した。

Ｅ－ 21・22 区では，溝を切る形で不定形の土坑やピット状のものが複数確認された。埋土にはアカホヤがブロック状に混じる。溝との関わりは不明である。

円形状硬化面１



円形状硬化面２・硬化面11･12



断面図縮尺 0 (1:80) 2m

平面図縮尺 0 (1:100) 5m

第 224 図　中近世　円形状硬化面１・２　平面・断面図

溝状遺構３号（第 220 図）

D-16 区のⅡｃ層で検出された。長さ 7.2ｍ，幅 1.0ｍ，検出面からの深さは最大 18 ㎝である。軸は北西－南東方向である。西側壁面は急に立ち上がり，東側壁面はゆるやかである。埋土はⅡｂ層由来の黒色土を基本としている。遺物は土師器片が出土した。

溝状遺構４号（第 221 図）

Ｄ～Ｊ－ 20 ～ 22 区のⅡｃ層で検出された。長さ 60.8ｍ，幅 0.5 ～ 1.1ｍ，検出面からの深さは最大 20 ㎝である。軸は北西－南東方向である。溝状遺構２号に切られる。壁面はゆるやかに立ち上がる。埋土はⅡｂ層由来のしまりのある黒褐色土を基本とする。遺物は土師器片が出土した。

周辺では硬化面が確認された。溝状遺構２号に平行する硬化面８・９や南北に延びる硬化面 10 が溝の上面に検出されている。

溝状遺構５号（第 221 図）

Ｄ－ 22 区のⅡｃ層で検出された。長さ 7.61ｍ，幅 0.82ｍ，検出面からの深さは最大 24 ㎝である。軸は北西－南東方向である。調査区際のため一部しか検出できていないが，西側にある溝状遺構４号に平行に延びると思われる東壁は急に立ち上がり，西壁はゆるやかである。Ⅱｂ層由来の黒色土を基本としている。遺物は出土しなかった。

溝状遺構６号（第 221 図）

Ｊ－ 20 ～ 22 区のⅡｃ層で検出された。長さ 26.41ｍ，幅 0.24～0.75ｍ，検出面からの深さは最大 22 ㎝である。軸はおおよそ東西方向である。北壁は急に立ち上がり，南壁はゆるやかである。Ⅱｂ層由来の黒色土を基本としている。遺物は，土師器片が出土した。

（４）硬化面

溝状遺構に付随して硬化面が複数条検出されている。ここでは溝状遺構から独立しているもの及び特色のあるものについて述べる。

硬化面 11・12（第 221 図）

Ｆ～Ｋ－ 18 ～ 20 区のⅡｃ層で検出された。南北にやや弧を描くように曲がりながら延びている。複数条の硬化面が併走するが，レベル差は無くほぼ同時期のものと考えられる。上面に円形状硬化面１・２を有する。

円形状硬化面１（第 224 図）

Ｆ・Ｇ－ 20 区の硬化面 12 上で検出された。直径 30 ㎝～ 50 ㎝の円形の硬化面が等間隔に 10 ｍほど続く。

円形状硬化面２（第 224 図）

Ｉ・Ｊ－ 19 区の硬化面 12 上で検出された。直径 20 ㎝～ 50 ㎝の円形の硬化面が 15 ｍほど続く。南下するほど直径が小さく，間隔が広くなっていく。

３　遺物（第 225 図　999 ～ 1014）

999 は土師器の坏である。底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり，口唇部は丸く仕上げられる。底面は糸切りである。

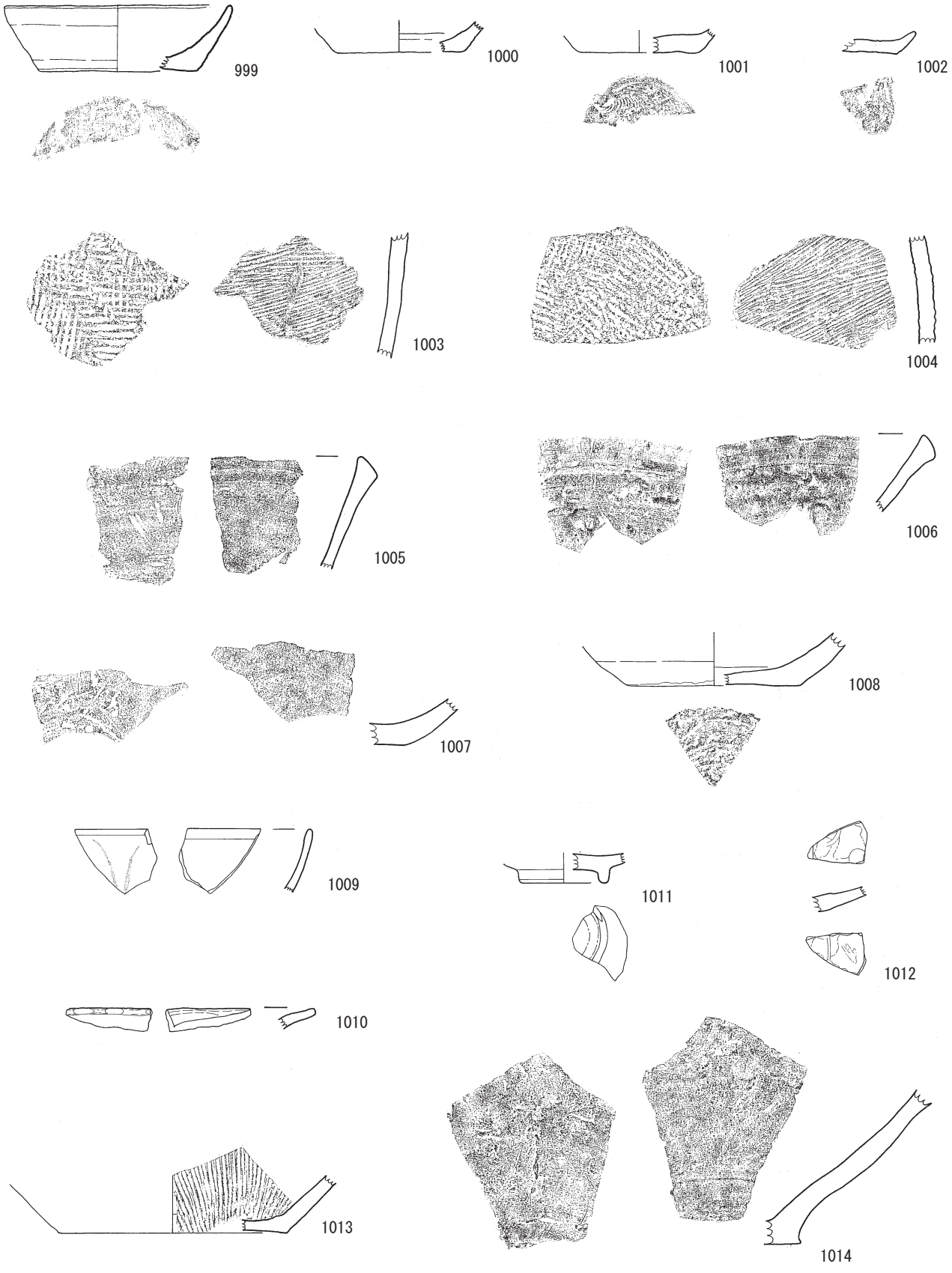
1000，1001 は中世の土師器坏の底部である。底部には糸切り痕が明瞭に残る。1001 は内外面に黒斑が残る。1002 は土師器の皿である。胎土に赤粒が混じる。

1003，1004，1005，1006，1007，1008 は神出窯産の東播系須恵器である。1003，1004 は甕の胴部である。外面にタタキメ，内面に横方向のハケメが明瞭に残る。

1005，1006，1007，1008 は捏鉢である。1005，1006 は口縁部から胴部にかけてである。1007，1008 は底部である。

1009 は青磁碗の口縁である。鎬蓮弁文を有し，上田分類のＢ-Ⅰ類とみられる。1010 は稜花皿の口縁である。内外面ともに貫入が目立つ。1011 は緑釉陶器の底部である。底面は釉剥ぎを行う。1012 は華南三彩の皿の底部である。内外面ともに緑釉が残る。

1013 は薩摩焼の擂鉢の底部である。苗代川系のものとみられる。内外面ともににぶい赤褐色を呈する。1014 は薩摩焼の鉢の底部である。胎土に白色の火山灰を含んでいる。外面はにぶい赤褐色を，内面は灰褐色を呈する。



第 225 図　中近世　出土遺物

第８節　その他

１　調査の概要

この節は，時期不明の遺構について取り扱う。土坑 21 号～ 23 号はⅡ層中からの検出が出来ず，遺物の出土もなかったため，時期特定が困難であった。

２　遺構

土坑 21 号（第 227 図）

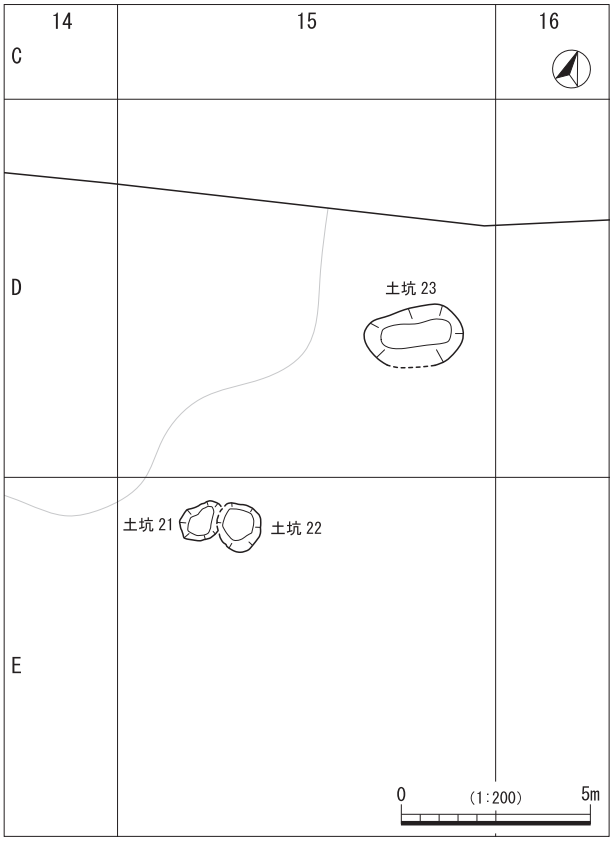
E-15 区のⅢ層から検出された。長軸 98 ㎝，短軸 90 ㎝の略円形を呈する。検出面からの深さは 32 ㎝である。平面プランは土坑 22 号に切られている。埋土はⅡｄ層を基本とする黒色土の単層であり，黄色軽石を多く含む。遺物は出土していない。

土坑 22 号（第 227 図）

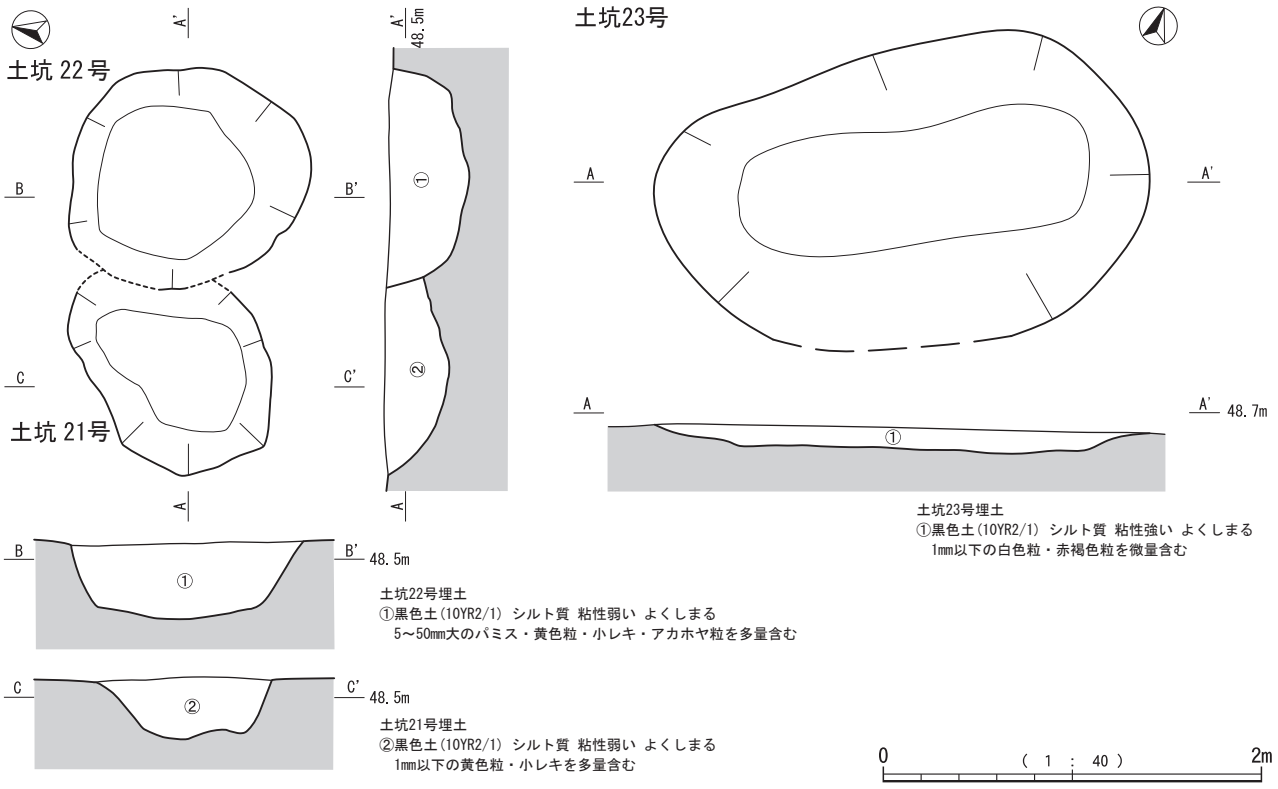
E-15 区のⅢ層から検出された。長軸 125 ㎝，短軸 118 ㎝の略円形を呈する。検出面からの深さは 40 ㎝である。平面プランは土坑 21 号を切っている。埋土はⅡｄ層を基本とする黒色土の単層であり，黄色軽石やアカホヤ火山灰を多く含む。遺物は出土していない。

土坑 23 号（第 227 図）

D-15 区のⅢ層から検出された。長軸 261 ㎝，短軸 138 ㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは 11 ㎝である。埋土はⅡｆ層を基本とする黒色土の単層であり，白色・赤褐色の粒子を少量含む。遺物は出土していない。



第 226 図　時期不明　土坑配置図



第 227 図　時期不明　土坑 21 号～ 23 号

第27表　弥生時代以降土器観察表（１）

挿図番号	掲載番号	器種	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	型式	出土区	層位・遺構	部位	色調 外面	色調 内面	主文様・調整等 外面	主文様・調整等 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 白粒	胎土 黒粒	胎土 赤粒	胎土 その他	取上番号	備考
177	856	甕	29.0	－	－	山ノ口Ⅰ	H-15, 16, I-16	SH３, SH４	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ・指頭圧痕		○		○					11445他	外面煤付着
	857	甕	29.0	－	－	山ノ口Ⅰ	H-16	SH３, Ⅱe	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ・指頭圧痕	○	○		○					11465他	外面煤付着
	858	壺	－	－	－	山ノ口	H-16	SH３	頸部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		○		○				砂粒	11481	
	859	壺	－	－	－	山ノ口	H-15, 16, I-15, 16	SH３, SH４, Ⅱe	胴部	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○		○				砂粒	11498他	外面器壁荒れ
178	864	甕	21.6	－	－	山ノ口Ⅱ	H-15	SH４	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ハケメナデ		○		○					12016他	外面器壁荒れ不明
	865	甕	18.4	－	－	山ノ口Ⅱ	H-15, 16, I-15	SH４, Ⅱe	口縁～胴部	褐灰	にぶい橙	ナデ・ハケメナデ消し	ナデ・指頭圧痕	○	○		○					12149他	外面煤付着
	866	甕	28.0	－	－	山ノ口Ⅱ	H-16, I-16	SH４, Ⅱe	口縁部	灰褐	橙	ナデ	ナデ	○	○		○					12296他	外面煤付着
	867	甕	－	－	－	山ノ口	H-15, 16	SH４	胴部	浅黄橙	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○		○					11677他	外面煤付着
	868	甕	－	5.2	－	山ノ口Ⅱ	H-15	SH４	底部	にぶい橙	褐灰	工具ナデ	工具ナデ	○	○		○					12181	
	869	大甕	49.6	－	－	山ノ口Ⅱ	G-16, H-15	SH４, Ⅱc, Ⅱd	口縁～胴部	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ・ハケメ	○	○		○					12693他	
	870	大甕	－	10.0	－	山ノ口Ⅱ	H-15	SH４	底部	にぶい橙	にぶい橙	工具ナデ	ナデ・ハケメ	○	○		○					12281他	
	871	鉢	－	－	－	山ノ口	I-15, H-16	SH４	口縁部	赤灰	にぶい赤褐	ハケメ	ナデ・指頭圧痕	○	○		○					11978他	外面煤付着
181	877	鉢	15.4	－	－	山ノ口Ⅱ	F-21	SH５	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	工具ナデ	工具ナデ・指頭圧痕	○	○		○					8677他	外面煤付着
	878	鉢	15.0	5.8	8.1	山ノ口Ⅱ	F-21	SH５	完形	橙	にぶい橙	ヘラナデ	ナデ・指頭圧痕	○	○	○						8675他	外面煤付着
	879	鉢	27.8	－	－	山ノ口Ⅱ	F-21	SH５	口縁～胴部	橙	橙	工具ナデ	工具ナデ	○	○		○					8652他	外面煤付着
	880	甕	－	－	－	山ノ口	F-21	SH５	胴部	にぶい褐	にぶい褐	工具ナデ	工具ナデ	○	○		○					8676	貼付突帯，外面煤付着
	881	甕	－	7.0	－	山ノ口Ⅱ	F-21	SH５	底部	にぶい黄橙	橙	ナデ・工具ナデ	ケズリ	○	○		○					8656他	内面器壁荒れ，剥離
	882	甕	－	8.8	－	山ノ口Ⅱ	F-21	SH５	底部	にぶい黄橙	暗赤灰	ナデ・工具ナデ	ナデ	○	○		○					8658他	
184	883	台付き甕	24.6	7.0	22.3	山ノ口Ⅱ	K-18	SH６	口縁～底部	灰褐	にぶい橙	ハケメ	工具ナデ後ナデ・指頭圧痕	○	○		○					9755他	外面，内面煤付着
	884	台付き甕	(28.0)	8.6	29.0	山ノ口Ⅱ	K-18	SH６	口縁～底部	橙	橙	ハケメ	ハケメ		○	○	○					9759他	外面被熱による剥落，口縁部は大部分剥離，外面煤付着
185	885	甕	－	－	－	山ノ口Ⅱ	K-18	SH６	口縁部	橙	橙	ナデ	指頭圧痕	○	○		○	○	○			9752	
	886	甕	21.4	－	－	山ノ口Ⅱ	K-18	SH６	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ・指頭圧痕	○	○		○					9765他	外面煤付着
	887	甕	28.2	－	－	山ノ口Ⅱ	K-18	SH６	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ・指頭圧痕	○	○		○					9841	外面煤付着
	888	甕	28.2	－	－	山ノ口Ⅱ	K-18	SH６	口縁～胴部	浅黄橙	にぶい橙	ハケメ・指頭圧痕後ナデ消し	ハケメ・指頭圧痕	○	○		○	○				9779他	外面煤付着
	889	台付き甕	－	9.0	－	山ノ口Ⅱ	K-18	SH６	底部	にぶい黄橙	褐灰	工具ナデ後ナデ	ナデ	○	○		○					9764	工具跡くぼみ
	890	甕	－	9.4	－	山ノ口	K-18	SH６	底部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	工具ナデ	ハケメ・指頭圧痕	○	○		○					9751他	
	891	壺	35.2	－	－	西瀬戸	J-18, K-18	SH６, Ⅱb	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ヘラミガキ	ナデ	○	○		○					8794他	口縁に円形浮紋，内面疑口縁
188	892	大甕	－	－	－	山ノ口Ⅱ	D-20	SH７	口縁部	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○		○					10382	
	893	甕	－	－	－	山ノ口	D-19	SH７	胴部	橙	にぶい橙	ナデ	ハケメ後ナデ・指頭圧痕	○	○		○					10230	外面煤付着
	894	甕	24.0	－	－	山ノ口Ⅱ	D-19	SH７	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	ハケメ・ナデ	ナデ・指頭圧痕	○	○		○					10494他	外面煤付着
	895	甕	30.0	－	－	山ノ口Ⅱ	D-19	SH７	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	ハケメ・ナデ	ナデ・指頭圧痕	○	○		○					10121他	外面煤付着
	896	甕	30.4	－	－	山ノ口Ⅱ	D-19	SH７	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	ハケメ・ナデ	ナデ・指頭圧痕	○	○		○					10120他	外面煤付着
189	897	台付き甕	25.2	7.4	27.2	山ノ口Ⅱ	D-19, 20	SH７	完形	橙	灰	工具ナデ・ハケメ	ナデ	○	○		○					10054他	外面，内面煤付着
	898	甕	－	9.0	－	山ノ口	D-19	SH７	底部	赤	にぶい橙	ナデ・ハケメ	－	○	○		○					10110	内面剥離
	899	甕	－	8.2	－	山ノ口	D-19	SH７	底部	にぶい橙	にぶい橙	ハケメ	ナデ	○	○		○					10115	底部剥離
	900	甕	－	－	－	山ノ口	D-20	SH７	底部	にぶい黄褐	にぶい橙	ハケメ	－	○	○		○			○	砂粒	10138	内面器壁荒れ
	901	甕	－	8.0	－	山ノ口	D-19, 20	SH７	底部	にぶい褐	橙	ナデ・ハケメ	－	○	○		○					10106他	外面剥離
	902	甕	－	8.6	－	山ノ口	D-19	SH７	底部	明赤褐	にぶい橙	ナデ	－	○	○		○					10149	内面剥離，外面器壁荒れ
	903	甕	－	7.6	－	山ノ口	D-19	SH７	底部	にぶい橙	にぶい橙	工具ナデ	－	○	○		○					10449	内面剥離
190	904	壺	17.4	－	－	西瀬戸	D-19	SH７	口縁～頸部	浅黄橙	橙	ミガキ・ハケメ	ナデ	○	○		○					10117他	口縁に円形浮紋
	905	甕	－	－	－	山ノ口	D-19	SH７	胴部	明赤褐	にぶい橙	ハケメ	ナデ	○			○	○				10451他	外面煤付着
	906	甕	－	－	－	山ノ口	D-19	SH７	胴部	明褐	明褐	ハケメ	ハケメ後ナデ	○	○		○					10493	外面剥離
	907	甕	－	6.0	－	山ノ口	D-19, E-18	SH７, Ⅱb	底部	橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○		○					10453他	内面剥離
	908	甕	－	7.0	－	山ノ口	D-20	SH７	底部	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	○	○		○					10143	外面器壁荒れ不明
	909	甕	－	7.4	－	山ノ口	D-19	SH７	底部	にぶい橙	にぶい橙	ハケメ後ヘラミガキ	ナデ		○		○					10113	内面剥離
	910	壺	－	6.0	－	山ノ口	D-19	SH７	底部	褐	にぶい橙	ミガキ	ナデ	○			○	○				10440他	
193	915	甕	29.2	－	－	入来	H-17	Ⅱc, Ⅱd, Ⅱe	口縁～胴部	赤灰	にぶい橙	指頭圧痕・ハケメ	指頭圧痕・ナデ	○	○		○					10918他	外面煤付着
	916	甕	－	－	－	入来	K-16	Ⅱc	口縁部	灰褐	橙	ハケメ・ナデ・指頭圧痕	ナデ・指頭圧痕		○		○					11068	外面煤付着
	917	甕	22.0	－	－	山ノ口Ⅰ	E-18, H-18	Ⅱb, Ⅱc	口縁部	褐灰	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		○		○					9404他	外面煤付着
	918	甕	33.0	－	－	山ノ口Ⅱ	I-17	Ⅱd	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○		○					11039他	外面煤付着
	919	甕	26.0	－	－	山ノ口Ⅱ	H-17, I-17	Ⅱc, Ⅱd, Ⅱe	口縁部	にぶい橙	にぶい褐	ナデ・ハケメ	ナデ・指頭圧痕		○		○					10996他	外面煤付着
	920	甕	29.8	－	－	山ノ口Ⅱ	F-22	Ⅱe	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐	ナデ・ハケメ	ナデ・指頭圧痕	○	○		○					8601	外面煤付着
194	921	甕	29.4	－	－	入来	K-16, 17	Ⅱc	口縁部	灰褐	にぶい橙	ナデ・工具ナデ	工具ナデ	○	○		○					11375他	外面煤付着
	922	甕	20.0	－	－	入来	K-19	Ⅱc	口縁部	灰褐	にぶい橙	ナデ・工具ナデ	工具ナデ	○	○		○					9497他	
	923	甕	20.4	－	－	入来	D-19	Ⅱd	口縁部	橙	橙	工具ナデ	工具ナデ	○	○		○					9963他	
	924	甕	23.4	－	－	山ノ口Ⅱ	J-18, 19	Ⅱc	口縁部	褐灰	にぶい橙	工具ナデ	工具ナデ	○	○		○					9443他	
	925	甕	－	－	－	山ノ口Ⅱ	F-20	Ⅱc	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	工具ナデ・ナデ	○	○		○					10611	
	926	甕	27.8	－	－	山ノ口Ⅱ	K-17	Ⅱc, Ⅱd	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	工具ナデ	○			○					11235他	
	927	甕	31.4	－	－	山ノ口Ⅱ	H-17	Ⅱd	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	工具ナデ	工具ナデ・ナデ		○		○					11129他	
	928	甕	－	－	－	山ノ口Ⅱ	K-18	Ⅱc	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	○	○		○					9556	
	929	甕	－	－	－	山ノ口Ⅱ	D-16	Ⅱc	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	工具ナデ	工具ナデ	○	○		○					30998	外面煤付着
	930	甕	21.0	－	－	山ノ口Ⅱ	F-22	Ⅱe	口縁～胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ・ハケメ	ナデ・指頭圧痕	○	○		○					8601他	外面煤付着
	931	甕	32.3	－	－	須久	E-16	Ⅱc	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ・ハケメ	ナデ・工具ナデ	○	○							12614他	外面煤付着
195	932	甕	22.2	－	－	山ノ口Ⅰ	K-16	Ⅱc, Ⅱd	口縁部	橙	橙	ナデ	工具ナデ	○	○		○					11081他	

第28表　弥生時代以降土器観察表（２）

挿図番号	掲載番号	器種	法量			型式	出土区	層位・遺構	部位	色調		主文様・調整等		胎土							取上番号	備考
			口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)					外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	白粒	黒粒	赤粒	その他	
195	933	壺	－	－	－	山ノ口	G-16	Ⅱc, Ⅱd	胴部	にぶい赤褐	にぶい橙	ナデ	ナデ・指頭圧痕	○	○		○					12700他	
	934	甕	－	－	－	山ノ口Ⅱ	G-17, 18	Ⅱb	胴部	にぶい橙	にぶい橙	ミガキ	ミガキ		○		○					9892他	外面煤付着
	935	甕	－	－	－	山ノ口	I-17	Ⅱd	胴部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ・ハケメ	ナデ	○	○		○					10962他	外面煤付着
	936	壺	－	－	－	山ノ口	K-19	Ⅱb, Ⅱc	頸部	にぶい橙	にぶい橙	ハケメ・ミガキ後ナデ	ハケメ			○	○					8932他	内面器壁荒れ
	937	壺	13.4	－	－	山ノ口	G-17, 18, 19, H-18	Ⅱb, Ⅱc	口縁部	浅黄橙	浅黄橙	ミガキ	ナデ	○	○				○			9908他	外面・内面器壁荒れ
	938	壺	－	－	－	不明	G-18	Ⅱb	脚部	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	○	○							9910	上部剥落，脚底剥離
	939	壺	－	－	－	山ノ口	D-15, 16	Ⅱb	胴部	橙	にぶい黄橙	ナデ・ミガキ	ハケメ	○	○		○					39465他	内面剥離
	940	壺	－	－	－	山ノ口	K-19	Ⅱb, Ⅱc	胴部	にぶい橙	にぶい橙	工具ナデ	工具ナデ	○	○							8837他	外面剥離
196	941	甕	－	8.4	－	山ノ口	G-19	Ⅱc	底部	にぶい橙	にぶい橙	ハケメナデ消し・ナデ	－	○	○		○				砂粒	9936	
	942	甕	－	9.6	－	山ノ口	J-20	Ⅱc	底部	にぶい橙	にぶい橙	工具ナデ	－	○	○		○				砂粒	一括	底部剥離
	943	甕	－	7.2	－	山ノ口	K-16	Ⅱc	底部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	－	○	○		○					12422	外面器壁荒れ
	944	甕	－	8.8	－	山ノ口	G-19	Ⅱc, Ⅱd	底部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	－	○	○		○					9932他	
	945	甕	－	7.2	－	山ノ口	E-19	Ⅱd	底部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	－	○	○		○					9967	
	946	壺	－	6.2	－	山ノ口	G-19	Ⅱd	底部	にぶい黄橙	褐灰	ハケ目後ナデ	工具ナデ	○	○							9952	
	947	壺	－	6.4	－	不明	K-17	Ⅱc	底部	黒褐	にぶい橙	ミガキ	工具ナデ	○	○		○			○		11251他	
	948	壺	－	7.2	－	山ノ口	E-16	Ⅱc	底部	橙	橙	工具ナデ	工具ナデ	○	○		○					12568	
	949	壺	－	9.6	－	山ノ口	K-20	Ⅱc	底部	にぶい褐	にぶい褐	工具ナデ	工具ナデ	○	○		○	○				9583	
	950	壺	－	7.0	－	山ノ口	F-21	Ⅱe	底部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ・指頭圧痕	ナデ	○	○		○					8638	内面剥離
	951	壺	－	8.6	－	山ノ口	K-19	Ⅱb	胴～底部	にぶい黄橙	にぶい赤褐	工具ナデ	工具ナデ・ナデ・指頭圧痕	○	○							8833他	内面剥離
	952	壺	－	4.6	－	山ノ口	K-19	Ⅱb, Ⅱc	胴～底部	にぶい橙	にぶい橙	ハケメ後ナデ	工具ナデ・指頭圧痕	○	○							8856他	
	953	壺	－	4.0	－	山ノ口	K-19	Ⅱb	胴～底部	にぶい橙	橙	ナデ後ハケメ	工具ナデ・指頭圧痕				○			○		8829	
	954	鉢	－	8.6	－	山ノ口	K-19	Ⅱb	底部	明赤褐	明赤褐	工具ナデ	工具ナデ・指頭圧痕	○	○	○				○		8863	外面煤付着
197	955	甕	－	－	－	山ノ口	D-5	Ⅱb	胴部	にぶい橙	淡黄	ナデ	－	○	○							39477	内面剥離
	956	甕	－	－	－	山ノ口	K-19	Ⅱb	胴部	浅黄橙	にぶい黄橙	刻目突帯・ミガキ	工具ナデ・ナデ	○			○			○		8828	
	957	甕	－	－	－	山ノ口	K-19, 20	Ⅱb	胴部	にぶい橙	にぶい黄橙	ミガキ・工具ナデ	ナデ・工具ナデ	○	○		○					8879他	
	958	甕	－	4.6	－	山ノ口	K-19, 20	Ⅱb, Ⅱc	胴～底部	橙	橙	ハケメ	ナデ	○	○					○		9030他	
	959	甕	－	－	－	山ノ口	K-19	Ⅱb, Ⅱc	胴部	にぶい橙	にぶい橙	工具ナデ	工具ナデ	○	○		○			○	小礫	8942他	
	960	壺	－	5.2	－	山ノ口	F-14	Ⅱc	底部	橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	○	○		○					12451	内面・外面剥離
	961	高坏	－	－	－	山ノ口	D-15	Ⅱb	脚部	橙	橙	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	○	○		○					39488他	外面刻み
202	973	甕	－	－	－	古式土師器	D-5	SH8	口縁部	橙	橙	指ナデ	ナデ	○	○					○	小礫	14740	
	974	甕	17.2	－	－	古式土師器	C-4	SH8	口縁部	褐灰	褐	工具ナデ	工具ナデ	○	○		○					14713	
	975	甕	10.3	－	18.7	古式土師器	C-4	SH8	完形	橙	橙	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	○	○		○					14710	外面煤付着
	976	甕	－	－	－	古式土師器	C-4	SH8	胴部	にぶい褐	灰褐	ハケメ	工具ナデ・ケズリ	○	○							14714	
	977	壺	－	－	－	古式土師器	D-4	SH8	胴部	にぶい黄橙	にぶい橙	ハケメ	ナデ	○			○			○	小礫	14740	外面煤付着，内面器壁荒れ
	978	壺	－	－	－	古式土師器	D-4	SH8	胴部	にぶい褐	にぶい褐	ハケメ	ナデ	○	○		○	○		○		14720	
	979	高坏	14.9	11.4	13.5	古式土師器	C，D-4	SH8	完形	橙	橙	ナデ	ナデ	○	○	○				○	小礫	14730他	外面坏部に丹，脚に透かし（3カ所）
	980	手づくね	6.0	－	3.7	古式土師器	D-4	SH8	完形	にぶい橙	褐灰	ナデ・指頭圧痕	ナデ・指頭圧痕	○	○	○						14740	
205	983	甕	13.0	－	－	古式土師器	D-5	SH9	口縁～胴部	橙	橙	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	○	○						小礫	14747	外面煤付着
	984	甕	16.2	－	－	古式土師器	C-5，6	SH9	口縁部	橙	橙	ハケメ	ケズリ		○					○	小礫	14747	外面煤付着
	985	甕	－	－	－	古式土師器	C-5，6	SH9	胴～底部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ハケメ	ケズリ	○	○		○					14746他	外面煤付着，胴部最大径23.0cm
	986	高坏	－	11.2	－	古式土師器	C-5	SH9	脚部	黄橙	黄橙	ナデ後ミガキ	ナデ	○	○					○		14747	赤色の円礫
	987	高坏	－	23.8	－	古式土師器	D-5	SH9	脚部	淡橙	淡橙	工具ナデ・ヘラミガキ	ナデ			○						14752他	赤色の円礫
	988	小型丸底壺	9.2	－	6.3	古式土師器	D-5	SH9	完形	にぶい橙	にぶい橙	ハケメ・ナデ	ハケメ	○	○					○	小礫	14753他	
207	989	甕	17.2	－	－	古式土師器	D-6	SH10	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ハケメ	ケズリ	○	○						小礫	一括	
	990	甕	－	－	－	古式土師器	D-6，7	SH10	胴部	橙	橙	ハケメ	ケズリ	○	○					○		14868他	外面煤付着
	991	鉢	－	－	－	古式土師器	D-7	SH10	胴部	橙	橙	ナデ・ハケメ・ハケ後ナデ消し	ナデ・ナデ後ミガキ	○			○		○	○		14866他	外面煤付着，赤色の円礫
	992	小型丸底壺	12.0	－	7.4	古式土師器	D-6	SH10	口縁～底部	にぶい橙	橙	ナデ・ハケメ	ナデ	○	○	○				○	小礫	14855他	赤色の円礫
208	993	甕	15.4	－	21.2	古式土師器	D-8	SH11	完形	にぶい橙	橙	ナデ・ハケメ	ハケメ・ケズリ後ナデ	○	○	○				○		14805他	外面煤付着
	994	小型丸底壺	11.4	－	－	古式土師器	D-8	SH11	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ・ハケメ	ナデ	○	○							14807他	
	995	小型丸底壺	－	－	－	古式土師器	D-8	SH11	頸部	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○							14819	外面煤付着，布留式に近い
	996	小型丸底壺	－	－	－	古式土師器	D-8	SH11	胴部	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	○	○		○	○				14813	
	997	鉢	12.4	－	－	古式土師器	D-8	SH11	口縁部	明赤褐	明赤褐	工具ナデ	工具ナデ	○	○		○				小礫	14835他	
225	999	坏	12.0	8.4	3.4	土師器	E-18	Ⅱb	口縁～底部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		○		○					一括	糸切り底
	1000	坏	－	7.0	－	土師器	K-14	Ⅱc	底部	灰白	灰白	ナデ	工具ナデ	○	○							12258	糸切り底
	1001	坏	－	6.2	－	土師器	K-19	Ⅱb	底部	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ									8900	糸切り底
	1002	皿	－	－	1.2	土師器	H-16	Ⅱd	口縁～底部	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	○	○					○		11201	糸切り底
	1003	甕	－	－	－	中世須恵器	K-19	撹乱	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	タタキメ	ハケメ	○	○							－	神出窯
	1004	甕	－	－	－	中世須恵器	J-16	Ⅱc	胴部	にぶい黄	にぶい黄	タタキメ	ハケメ	○	○							12426	神出窯
	1005	捏鉢	－	－	－	中世須恵器	J-21	Ⅱb	口縁～胴部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ		○							8729	神出窯
	1006	捏鉢	－	－	－	中世須恵器	J-21	Ⅱb	口縁～胴部	黄灰	黄灰	ナデ	ナデ	○	○							8740他	神出窯
	1007	捏鉢	－	－	－	中世須恵器	K-20	Ⅱc	底部	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ		○							9454	神出窯
	1008	捏鉢	－	9.0	－	中世須恵器	E-18	Ⅱb	底部	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ		○							9542	神出窯

第 29 表　弥生時代土製品観察表

挿図番号	掲載番号	器種	型式	出土区	層位	法量(cm)			重量(g)	主文様・調整等		胎土							色調		取上番号	備考
						表面径	裏面径	厚さ		外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	白粒	黒粒	その他	外面	内面		
197	962	土製品	円盤状土製品	I-19	Ⅱc	5.5	5.5	1.0	37.4	ナデ	ナデ	○	○		○				にぶい橙	灰赤	9440	

第 30 表　弥生時代以降石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層位・遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
177	860	磨製石鏃未製品	頁岩	I-16	SH3	2.70	1.60	0.15	0.71	11483	
	861	二次加工剥片	頁岩	I-16	SH3	2.30	2.45	0.25	1.28	11646	
	862	軽石製品	軽石	H-15	SH3	8.40	4.10	2.10	27.00	11506	
	863	砥石	砂岩	I-15	SH3	10.90	5.20	3.10	197.00	11648	
179	872	磨製石鏃未製品	頁岩	H-15	SH4	2.45	1.70	0.35	1.45	11806	
	873	軽石製品	軽石	H-15	SH4	6.30	2.50	2.00	11.00	11999	
	874	砥石	砂岩	H-15	SH4	11.00	4.00	2.30	147.00	12185	
	875	砥石	砂岩	H-15	SH4	7.60	7.80	6.00	394.00	12303	被熱による赤化
	876	磨・敲石	ホルンフェルス	H-16	SH4	6.90	5.90	4.10	122.00	12298	
191	911	軽石製品	軽石	D-20	SH7	5.50	4.30	2.00	15.00	10307	
	912	砥石	安山岩	D-19	SH7	11.40	4.60	2.50	145.00	10487	
	913	磨・敲石	砂岩	D-19	SH7	7.50	7.90	7.00	568.00	10486	
	914	石皿	砂岩	D-19	SH7	14.90	12.30	5.20	1309.00	10125 10132	
198	963	石包丁	頁岩	E-20	Ⅱd	5.00	7.20	0.45	18.02	10530	
	964	石包丁未製品	頁岩	J-18	Ⅱb	3.80	3.90	0.40	5.81	8811	
	965	砥石	頁岩	F-16	Ⅱd	2.60	6.20	1.55	15.71	12774	
199	966	砥石	砂岩	J-7	Ⅱc	8.60	3.60	1.60	77.00	11351	
	967	磨・敲石	砂岩	J-21	Ⅱb	11.00	10.00	5.30	798.00	8741	被熱による赤化
	968	磨・敲石	砂岩	G-16	Ⅱc	10.50	6.30	3.50	395.00	12714	
	969	磨石	砂岩	J-21	Ⅱb	11.20	5.00	5.60	377.00	9057	煤付着
	970	台石	花崗岩	H-19	Ⅱc	17.50	13.20	11.60	4300.00	9318	
	971	砥石	砂岩	I-16	Ⅱd	10.50	8.30	3.10	479.00	11186	
	972	軽石製品	軽石	K-20	Ⅱb	5.10	3.10	1.50	8.00	8905	
203	981	砥石	砂岩	C-5	SH8	25.20	8.80	8.80	2150.00	14725	
	982	軽石製品	軽石	D-4	SH8	3.70	3.30	1.40	7.00	14739	鉄付着
208	998	管玉	緑色凝灰岩	D-8	SH11	2.85	1.00	0.30	5.10	14831	外径1.0cm 内径0.4cm

第 31 表　中近世遺物観察表

挿図番号	掲載番号	器種	型式	出土区	層位・遺構	部位	色調	釉薬	施釉	取上番号	備考
225	1009	碗	青磁	E-20	Ⅱb	口縁部	灰白	青磁釉	残存部全面施釉	9843	
	1010	稜花皿	青磁	H-20	Ⅱb	口縁部	灰	透明釉	残存部全面施釉	9519	
	1011	碗	陶器	I-20	不明	底部	灰白	緑釉	高台内面露胎	一括	
	1012	皿	青磁	H-18	撹乱	底部	灰	緑釉	残存部全面施釉	-	華南三彩
	1013	擂鉢	陶器	F-16	硬化面2	底部	にぶい赤褐	鉄釉	残存部全面施釉	12584	
	1014	鉢	陶器	K-16	Ⅱc	底部	にぶい赤褐	—	—	11366	

第Ⅴ章　自然科学分析

第１節　自然科学分析の概要

自然科学分析は平成 30 年度・令和元年度・令和２年度に依頼した。縄文時代早期から弥生時代の遺物を中心に，平成 30 年度に放射性炭素年代測定を，令和元年度・令和２年度に放射性炭素年代測定と，炭素・窒素安定同位体分析を行った。また，平成 30 年度には黒曜石産地推定の自然科学分析を依頼した。

第２節　放射性炭素年代測定（平成 30 年度）

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　はじめに

荒園遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町仮宿に所在し，持留川左岸に隣接する仮宿台地の南側縁辺部（標高約 50m）に位置する。平成 24 ～ 26 年度の調査結果によれば，縄文時代早期の集石，弥生時代中期の竪穴建物跡，古墳時代の竪穴建物跡、中世の溝状遺構などの遺構や，旧石器時代の細石刃核（畦原型）・細石刃・黒曜石と水晶の剥片やチップ，縄文時代早期の土器･石器，弥生時代中期の土器･石器，古墳時代の土器，中世の東播系須恵器･備前焼などの遺物が検出されている。

本業務では，竪穴建物跡より出土した炭化物の放射性炭素年代測定を実施し，年代に関する資料を作成する。

２　放射性炭素年代測定

（１）試料

試料は，竪穴建物跡４号，竪穴建物跡５号，竪穴建物跡６号，竪穴建物跡 10 号，竪穴建物跡 11 号から出土した炭化物５点である。

第 32 表　試料一覧（１）

No.	試料の詳細	区	層	分析内容
1	竪穴建物跡４号炭化物	H･I-15･16	Ⅱe	年代測定
2	竪穴建物跡５号炭化物	F-21	Ⅱe	年代測定
3	竪穴建物跡６号炭化物	K-18	Ⅱe	年代測定
4	竪穴建物跡10号炭化物	D-６・７	Ⅱe	年代測定
5	竪穴建物跡11号炭化物	D-８	Ⅱd	年代測定

（２）分析方法

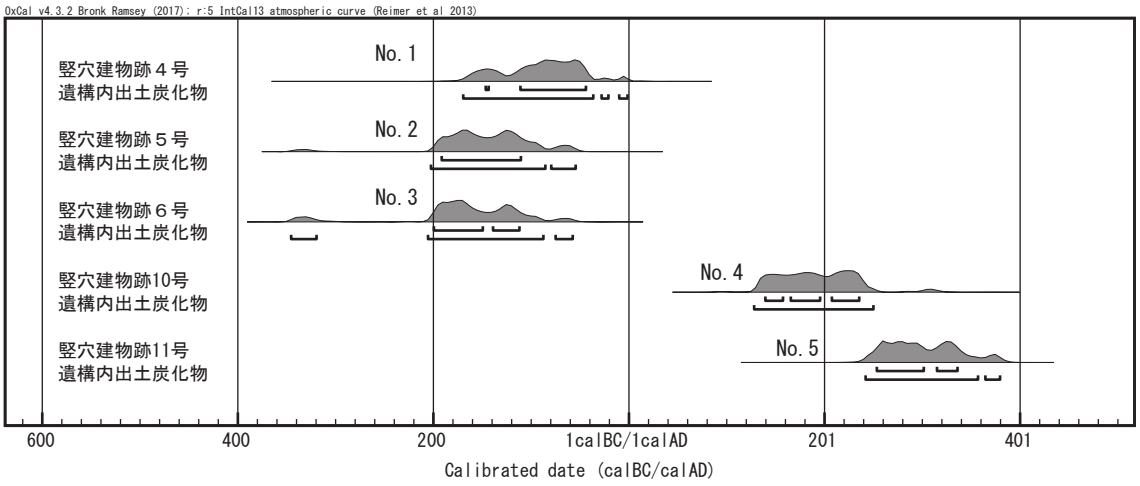
土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合，これらをピンセット，超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC１により炭酸塩等酸可溶成分を除去，NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去，HC１によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ，１gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて，管内を真空にして封

第 33 表　放射性炭素年代測定結果（１）

No.	試料名	性状（種類）	分析方法	測定年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用	暦年較正年代												Code No.	
								年代値										確率		
1	竪穴建物跡４号遺構内出土炭化物	炭化材（ツバキ属）	AAA	2070±25	-27.80±0.57	2068±23	σ	cal	BC	147	－	cal	BC	144	2096	－	2093	calBP	0.020	pal-11583	YU-8735
								cal	BC	112	－	cal	BC	45	2061	－	1994	calBP	0.662		
							2σ	cal	BC	170	－	cal	BC	37	2119	－	1986	calBP	0.927		
								cal	BC	29	－	cal	BC	22	1978	－	1971	calBP	0.011		
								cal	BC	11	－	cal	BC	2	1960	－	1951	calBP	0.017		
2	竪穴建物跡５号遺構内出土炭化物	炭化材（カエデ属）	AAA	2120±20	-26.83±0.66	2120±22	σ	cal	BC	192	－	cal	BC	111	2141	－	2060	calBP	0.682	pal-11584	YU-8736
							2σ	cal	BC	203	－	cal	BC	86	2152	－	2035	calBP	0.889		
								cal	BC	80	－	cal	BC	55	2029	－	2004	calBP	0.065		
3	竪穴建物跡６号遺構内出土炭化物	炭化材（コナラ亜属クヌギ節）	AAA	2130±25	-27.44±0.79	2130±23	σ	cal	BC	200	－	cal	BC	150	2149	－	2099	calBP	0.476	pal-11585	YU-8737
								cal	BC	140	－	cal	BC	113	2089	－	2062	calBP	0.206		
							2σ	cal	BC	346	－	cal	BC	320	2295	－	2269	calBP	0.060		
								cal	BC	206	－	cal	BC	88	2155	－	2037	calBP	0.863		
								cal	BC	76	－	cal	BC	58	2025	－	2007	calBP	0.031		
4	竪穴建物跡10号遺構内出土炭化物	炭化材（ムクロジ）	AAA	1815±25	-26.85±0.81	1817±23	σ	cal	AD	140	－	cal	AD	158	1810	－	1792	calBP	0.150	pal-11586	YU-8738
								cal	AD	166	－	cal	AD	196	1784	－	1754	calBP	0.264		
								cal	AD	208	－	cal	AD	236	1742	－	1714	calBP	0.268		
							2σ	cal	AD	129	－	cal	AD	251	1821	－	1699	calBP	0.954		
5	竪穴建物跡11号遺構内出土炭化物	炭化材（カエデ属）	AAA	1735±20	-27.90±0.69	1737±22	σ	cal	AD	254	－	cal	AD	302	1696	－	1648	calBP	0.478	pal-11587	YU-8739
								cal	AD	316	－	cal	AD	337	1634	－	1613	calBP	0.204		
							2σ	cal	AD	243	－	cal	AD	358	1707	－	1592	calBP	0.903		
								cal	AD	365	－	cal	AD	380	1585	－	1570	calBP	0.051		

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2）yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4）AAAは酸－アルカリ－酸処理を示す。
5）暦年の計算には、Oxcal4.3を使用。
6）暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。
7）1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
8）統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。



第 228 図　暦年較正結果（１）

じきり 500℃ (30 分)850℃ (２時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し，真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し，グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１mmの孔にプレスして，タンデム加速器のイオン源に装着し，測定する。測定機器は，３MV小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS専用装置(NEC　Pelletron　9 SDH- ２)を使用する。AMS測定時に，標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-Ⅱ)とバックグラウンド試料の測定も行う。また，測定中同時に 13C/12Cの測定も行うため，この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期 5568 年を使用する。また，定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり，誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は，国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また，暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは，Oxcal4.3(Bronk,2009)を用いる。較正曲線はIntcal13 (Reimer et al.,2013)を用いる。

３　結果

結果を第 33 表，第 228 図に示す。測定年代はNo.１が 2070 ± 25BP，No.２が 2120 ± 20BP，No.３が 2130 ± 25BP，No.４が 1815 ± 25BP，No.５が 1735 ± 20BPであった。

第 33 表には較正した暦年代も併記する。暦年較正は，大気中の 14C濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C濃度の変動，その後訂正された半減期(14Cの半減期 5730 ± 40 年)を較正することによって，暦年代に近づける手法である。測定誤差２σの暦年代は，竪穴建物跡４号がcalBC170 ～２，竪穴建物跡５号がcalBC203 ～ 55，竪穴建物跡６号がcalBC346 ～ 58，竪穴建物跡 10 号がcalAD129 ～ 251，竪穴建物跡 11 号がcalAD243 ～ 380 である。竪穴建物跡４号，５号，６号の年代値の範囲は重なる。竪穴建物跡 10 号，11 号は，これ以降の年代値を示し，その範囲は重なる。

材同定の結果は竪穴建物跡４号がツバキ属，竪穴建物跡５号がカエデ属，竪穴建物跡６号がコナラ亜属クヌギ節，竪穴建物跡 10 号がムクロジ，竪穴建物跡 11 号がカエデ属であった。

今回の年代測定で得られた結果は，全て弥生時代の範囲内にあり，５基の竪穴建物跡は弥生時代の遺構と想定される。

引用文献

Bronk Ramsey, C., & Lee, S. ,2013, Recent and Planned Developments of the Program OxCal. Radiocarbon, 55, 720-730.

Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Haflidason H, Hajdas I, Hatté C, Heaton TJ, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J. 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon ,55,

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

第３節　放射性炭素年代測定，炭素・窒素安定同位体分析（令和元年度）

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　はじめに

荒園遺跡から検出された縄文時代早期とされる炭化材や土器付着炭化物の年代測定を行い，試料の時代観に関する情報を得る。土器付着炭化物については，当時の食性を調べるために，炭素・窒素安定同位体分析も合わせて実施する。

２　試料

試料は，荒園遺跡から検出された縄文時代早期とされる炭化材８点と土器付着炭化物２点の計 10 点である。

第 34 表　試料一覧（２）

No.	試料の詳細	区	層	分析内容
1	集石18号　炭化材	C-４	Ⅶ	年代測定
2	集石20号　炭化材	C･D-５	Ⅷ	年代測定
3	集石23号　炭化材	D-５	Ⅷ	年代測定
4	集石25号　炭化材	D-４	Ⅶ	年代測定
5	集石27号　炭化材	D-７	Ⅶ	年代測定
6	集石40号　炭化材	H-８	Ⅵ	年代測定
7	土器集中　炭化材１	G-８	Ⅵ	年代測定
8	土器集中　炭化材２	G-８	Ⅵ	年代測定
9	土器付着炭化物　掲載355	I-７	Ⅵ	年代測定・安定同位体
10	土器付着炭化物　掲載337	F-9	Ⅵ	年代測定・安定同位体

第 35 表 放射性炭素年代測定結果（２）

No.	試料名	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	δ ^{13}C (‰)	暦年較正年代			Code No.	
						年代値	確率%		
1	集石18号	AAA (1M)	7000±25 (6999±27)	-31.78 ±0.35	σ	cal BC 5971 - cal BC 5954	7920 - 7903 calBP	13.2	YU-10065	pal-12241
						cal BC 5911 - cal BC 5846	7860 - 7795 calBP	55.0		
					2σ	cal BC 5983 - cal BC 5941	7932 - 7890 calBP	23.3		
						cal BC 5931 - cal BC 5809	7880 - 7758 calBP	72.1		
2	集石20号	AAA (1M)	8350±30 (8351±28)	-27.55 ±0.29	σ	cal BC 7489 - cal BC 7448	9438 - 9397 calBP	32.9	YU-10066	pal-12242
						cal BC 7412 - cal BC 7361	9361 - 9310 calBP	35.3		
					2σ	cal BC 7511 - cal BC 7349	9460 - 9298 calBP	95.4		
3	集石23号	AAA (1M)	9535±30 (9534±30)	-32.06 ±0.37	σ	cal BC 9117 - cal BC 9072	11066 - 11021 calBP	20.8	YU-10067	pal-12243
						cal BC 9058 - cal BC 9012	11007 - 10961 calBP	18.9		
						cal BC 8912 - cal BC 8904	10861 - 10853 calBP	2.4		
						cal BC 8846 - cal BC 8786	10795 - 10735 calBP	26.1		
					2σ	cal BC 9125 - cal BC 8997	11074 - 10946 calBP	47.5		
						cal BC 8924 - cal BC 8760	10873 - 10709 calBP	47.9		
4	集石25号	AAA (1M)	8340±30 (8338±28)	-28.19 ±0.34	σ	cal BC 7479 - cal BC 7447	9428 - 9396 calBP	22.9	YU-10068	pal-12244
						cal BC 7435 - cal BC 7424	9384 - 9373 calBP	6.4		
						cal BC 7414 - cal BC 7359	9363 - 9308 calBP	38.9		
					2σ	cal BC 7499 - cal BC 7336	9448 - 9285 calBP	95.4		
5	集石27号	AaA (0.5M)	8350±25 (8348±27)	-23.66 ±0.38	σ	cal BC 7486 - cal BC 7447	9435 - 9396 calBP	31.1	YU-10069	pal-12245
						cal BC 7412 - cal BC 7361	9361 - 9310 calBP	37.1		
					2σ	cal BC 7508 - cal BC 7347	9457 - 9296 calBP	95.4		
6	集石40号	AAA (1M)	6470±25 (6468±25)	-30.26 ±0.42	σ	cal BC 5479 - cal BC 5464	7428 - 7413 calBP	19.5	YU-10070	pal-12246
						cal BC 5442 - cal BC 5423	7391 - 7372 calBP	18.6		
						cal BC 5408 - cal BC 5383	7357 - 7332 calBP	30.1		
					2σ	cal BC 5481 - cal BC 5374	7430 - 7323 calBP	95.4		
7	土器集中炭化物1	AaA (0.01M)	7530±25 (7532±26)	-29.04 ±0.35	σ	cal BC 6433 - cal BC 6399	8382 - 8348 calBP	68.2	YU-10071	pal-12247
					2σ	cal BC 6452 - cal BC 6377	8401 - 8326 calBP	95.4		
8	土器集中炭化物2	AAA (1M)	7140±25 (7141±26)	-29.07 ±0.28	σ	cal BC 6033 - cal BC 5995	7982 - 7944 calBP	68.2	YU-10072	pal-12248
					2σ	cal BC 6061 - cal BC 5985	8010 - 7934 calBP	95.4		
9	No.42916 (掲載355)	AaA (0.5M)	7260±25 (7261±27)	-18.22 ±0.44	σ	cal BC 6206 - cal BC 6168	8155 - 8117 calBP	26.3	YU-10073	pal-12249
						cal BC 6162 - cal BC 6141	8111 - 8090 calBP	14.4		
						cal BC 6107 - cal BC 6071	8056 - 8020 calBP	27.5		
					2σ	cal BC 6213 - cal BC 6063	8162 - 8012 calBP	95.4		
10	No.34761 (掲載337)	AaA (0.5M)	6920±25 (6918±25)	-24.49 ±0.35	σ	cal BC 5834 - cal BC 5826	7783 - 7775 calBP	7.3	YU-10074	pal-12250
						cal BC 5811 - cal BC 5749	7760 - 7698 calBP	60.9		
					2σ	cal BC 5872 - cal BC 5861	7821 - 7810 calBP	2.0		
						cal BC 5847 - cal BC 5731	7796 - 7680 calBP	93.4		

1)年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は，1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は，測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)AAAは，酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため，アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
5)暦年の計算には，Oxcal v4.3を使用
6)暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
7)較正データーセットは，Intcal13を使用。
8)較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように，1桁目を丸めていない。
9)統計的に真の値が入る確率は，σが68.2%，2σが95.4%である

３　分析方法

（１）放射性炭素年代測定

炭化材試料８点は，不純物が付着した周囲をトリミングし，50mg程度に調整して分析用試料とする。トリミングした残渣で樹種同定を行い，その結果を第35表に示す。土器付着炭化物は，安定同位体分析用試料と年代測定用試料に分割して使用する。試料は，塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去，水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去，塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸，水酸化ナトリウム共に１mol/Lである。脆弱な試料は，アルカリの濃度を薄めて処理する（AaAと記載）。

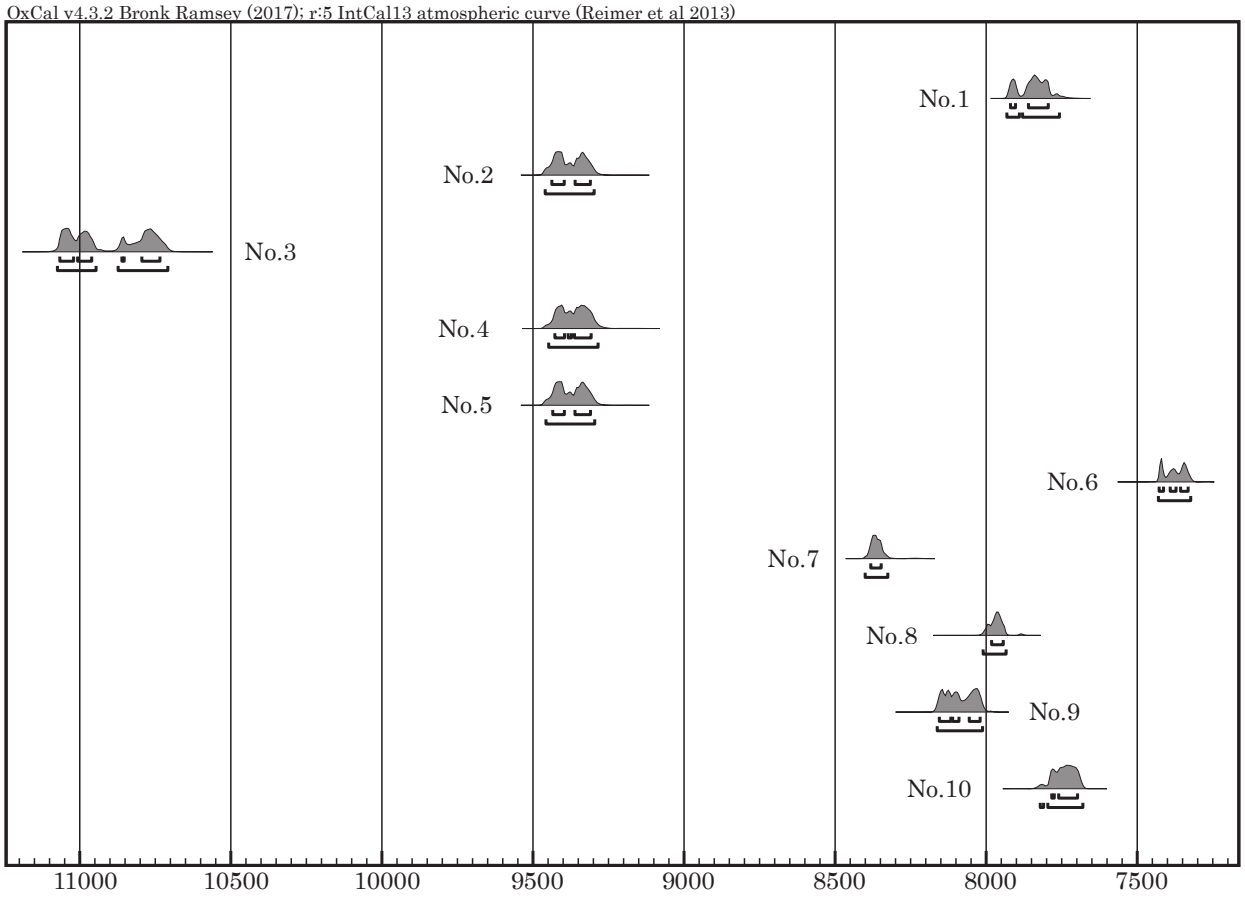
試料の燃焼，二酸化炭素の精製，グラファイト化（鉄を触媒として水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径１mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS測定時に，米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-Ⅱ），国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等），バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。δ^{13}Cは試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は，国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また，暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは，Oxcal4.3（Bronk,2009），較正曲線はIntcal13（Reimer et al.,2013）である。

（２）炭素・窒素安定同位体比分析

分析は，東京大学総合研究博物館タンデム加速器分析室の協力を得た。肉眼や実体顕微鏡で観察し，不純物を極力取り除いて，測定を実施した。

試料をスズカプセルに入れて封入し，機器にセットする。スズカプセル中の試料は，自動的に加熱された燃焼管に投入される。燃焼管内では，酸素ガスを瞬間的に導入することによって，スズの燃焼熱を利用して瞬間的に



第229図　暦年較正結果（２）

第 36 表　安定同位体分析結果（１）

No	試料名	掲載番号	$\delta^{13}C$ (‰)	$\delta^{15}N$ (‰)	全炭素 (%)	全窒素 (%)	C/N (mol)	備考
9	№42916	355	- 23.6	8.3	38.0	1.9	23.2	口縁～胴部
10	№34761	337	- 26.4	5.1	33.6	0.9	45.0	口縁～胴部

高温(一千数百度)となり，一瞬にして試料を燃焼させる。燃焼によって発生した気体を，キャリアガス(He)とともに還元管を通す。これによって，最終的に試料中の炭素は二酸化炭素(CO_2)に，窒素は窒素ガス(N_2)にそれぞれ変化する。これをカラムに通すことで両者は分離し，熱電対検出器にクロマトグラム(分離された信号)として検出される。この信号をもとに，クロマトグラムの面積計算を行い，元素含有率を求める。この段階で，炭素含量，窒素含量，C/Nを測定できる。分離された窒素ガスと二酸化炭素は，順に質量分析計に導入される。質量分析計では，試料をイオン化して加速させ，強い磁力の中を通して進路を曲げることで，わずかに重さの違う同位体を分離する。ここで，窒素安定同位体比($^{15}N/^{14}N$)，炭素安定同位体比($^{13}C/^{12}C$)を測定する。なお，窒素の含有量は炭素に比べて少ないため，窒素の安定同位体比測定はサンプルを増量し，炭素とは別に分析している(2 回測定している)。

4　結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を，第 35 表，第 229 図に示す。化学的に脆弱な一部の試料は，アルカリの濃度を薄くしているが(表参照)，いずれも年代測定に必要な炭素量が回収できている。同位体補正を行った測定値は，No.１が 7000 ± 25BP，No.２が 8350 ± 30BP，No.３が 9535 ± 30BP，No.４が 8340 ± 30BP，No.５が 8350 ± 25BP，No.６が 6470 ± 25BP，No.７が 7530 ± 25BP，No.８が 7140 ± 25BP，No.９が 7260 ± 25BP，No.10 が 6920 ± 25BPである。

暦年較正は，大気中の ^{14}C濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C濃度の変動，その後訂正された半減期 (^{14}Cの半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって，暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは，Intcal13 (Reimer et al.,2013)を用いる。2 σ の値は，No.１が 7932 ～ 7758calBP，No.２が 9460 ～ 9298calBP，No.３が 11074 ～ 10709calBP，No.４が 9448 ～ 9285calBP，No.５が 9457 ～ 9296calBP，No.６が 7430 ～ 7323calBP，No.７が 8401 ～ 8326calBP，No.８が 8010 ～ 7934calBP，No.９が 8162 ～ 8012calBP，No.10 が 7821 ～ 7680calBPである。

(2) 炭素・窒素安定同位体分析

結果を第 36 表に示す。No.９の $\delta^{13}C$は - 23.6‰，$\delta^{15}N$は 8.3‰，全炭素は 38.0%，全窒素は 1.9%，CN比(mol)は 23.2 である。No.10 の $\delta^{13}C$は - 26.4‰，$\delta^{15}N$は 5.1‰，全炭素は 33.6%，全窒素は 0.9%，CN比(mol)は 45.0 である。

5　考察

炭素の安定同位体比を示す $\delta^{13}C$は，食物連鎖の各系列において，最下位の植物から高位の動物まで大きな変化がないのが特徴である。産業革命の陸上の植物は，$\delta^{13}C$が-28 ～ -24‰程度のC3 植物と，-11 ～ -9‰程度のC4 植物に大きく分けられる。大部分の植物質食料はC3 植物で，日本列島のC4 植物は，ヒエ･アワ･キビなど雑穀類が主なメンバーになる。栄養源としてC3 植物を摂取した動物の $\delta^{13}C$は，C3 植物とほぼ同程度の値となる。一方，C3 植物とC4 植物の双方を摂取した動物は，その摂取割合に応じて，$\delta^{13}C$がC3 植物寄りかC4 植物寄りになる。このように，試料の $\delta^{13}C$と，食物連鎖系一次生産者の $\delta^{13}C$を比較することで，試料の由来物がどの食物連鎖の系列に属するものであるのか，また試料の由来物の栄養源がどこにあったのかを推定できる。

産業革命以後，$\delta^{13}C$が小さい化石燃料の大量消費により，現代の大気中の二酸化炭素の $\delta^{13}C$は低下し続けている (C13-Suess効果)。現代の大気中の二酸化炭素の $\delta^{13}C$は-8.0‰程度であるが，産業革命以前は，-6.4‰程度と見積もられている (Friedli et al., 1986)。この差の分だけ，産業革命以前の陸上動植物の $\delta^{13}C$は，現代に比べると大きくなる。

海水中の食物連鎖系一次生産者である，海産植物プランクトンや底生珪藻類の，産業革命以前の $\delta^{13}C$は不明である。現代の温帯海域では-20‰程度で，C3 植物とC4 植物の中間的な値となっている。日本近海を含む北太平洋では，現代の表層海洋の $\delta^{13}C$は，産業革命以前に比べて 0.8 ～ 1.0‰程度小さくなっていると推算されている (Eide et al., 2017)。海洋におけるC^{13}-Suess効果は，陸上に比べるといくぶん小さいようである。

窒素の安定同位体比を示す $\delta^{15}N$は，食物連鎖の系列において，高位になるほど大きくなっていくのが特徴である。よって，$\delta^{15}N$からは、試料の由来物の食物連鎖の栄養段階が推定できる。また，海洋中は陸上よりも食物連鎖の段階数が多いので，海洋生物の食物連鎖上位者は，陸上の食物連鎖上位者よりも $\delta^{15}N$が大きいという特徴もある。窒素はタンパク質に由来するので，総炭素原子数/総窒素原子数 (C/N) も，試料の由来を推定する尺度となる。つまり，タンパク質を豊富に含んだ肉・魚類は窒素を多く含むので，C/Nが比較的小さく，タンパク質が少ない堅果類や果実，海藻類などは，C/Nが大きくなる。C3 植物とC4 植物を摂取した草食動物は，$\delta^{13}C$と $\delta^{15}N$で

はなかなか区別できないところがあるが，C/Nによって堅果類などを分離することができる。第231図には，遺跡出土の動植物遺物と現生の食材を用いて作成した，日本列島における食料資源の炭素・窒素同位体比を示した(Yoshida et al.，2013)。現生食材の$\delta^{13}C$は，C^{13}-Suess効果を踏まえた補正を行っている。これら$\delta^{13}C$，$\delta^{15}N$，C/Nの３つの指標について，試料とC3植物，C3植物を摂取した草食動物，C4植物，海産小型魚，海産大型魚，海棲哺乳類などのグループが持つ範囲を比較することで，炭化物試料の由来について推定することができる。

No. ９は，$\delta^{13}C$が-23.6‰で，C_3植物やC_3植物を摂取した動物と同じ領域にある。$\delta^{15}N$は8.3‰で，海産物の影響を受けている可能性がある（吉田・西田,2009)。しかし，C/N は20 を超えるような大きい値を示し，窒素含有率は２％に満たない程度なので，タンパク質に富む肉類(海産物，C_3植物を摂取した動物ともに)を含んでいたとしても，わずかであると考えられる。したがって，炭化物の由来は，堅果類のようなタンパク質に乏しいC3植物を主体として，海産物をわずかに含む可能性があるものと推定される。No.10は，$\delta^{13}C$が-26.4‰，$\delta^{15}N$は5.1‰で，C_3植物やC_3植物を摂取した動物と同じ領域にある。C/Nは45.0と大きく，窒素含有率は１％に満たない。よって，炭水化物の由来は，堅果類のようなタンパク質に乏しいC_3植物を主体としているものと推定される。動物質の食材が含まれていたとしてもきわめてわずかと考えられる。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

Eide M., Olsen A., Ninnemann U.S., Eldevik T.,2017,A global estimate of the full oceanic 13C Suess effect since the preindustrial: Full Oceanic 13C Suess Effect. Global Biogeochemical Cycles 31, 492-514.

Friedli H., Loetscher H., Oeschger H., Siegenthaler U., Stauffer B.,1986,Ice core record of the 13C/12C ratio of atmospheric CO2 in the past two centuries. Nature,324,237-238.

Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

Yoshida Kunio,Kunikita Dai, Miyazaki Yumiko, Nishida Yasutami, Miyao Toru,Matsuzaki Hiroyuki,2013,Dating and stable isotopeanalysis of charred residues on the Incipient Jomon pottery (Japan). Radiocarbon 55, 1322-1333.

吉田邦夫・西田泰民,2009,考古科学が探る火炎土器.火焔土器の国 新潟,新潟日報事業社,87-99.

第４節　放射性炭素年代測定，炭素・窒素安定同位体分析（令和２年度）

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　はじめに

荒園遺跡（曽於郡大崎町仮宿）出土の土器付着炭化物の放射性炭素年代測定と安定同位体分析を行い，土器の時代観や当時の食性に関する情報を得る。

２　試料

分析試料は，荒園遺跡より出土した土器付着炭化物４点である。試料の詳細に関しては結果と合わせて表に記す。

第37表　試料一覧（３）

No.	試料の詳細	掲載番号	区	層	分析内容
1	土器付着炭化物	879	F―21	Ⅱe	年代測定・安定同位体
2	土器付着炭化物	930	F―22	Ⅱe	年代測定・安定同位体
3	土器付着炭化物	915	H―17	Ⅱc	年代測定・安定同位体
4	土器付着炭化物	888	K―18	Ⅱe	年代測定・安定同位体

３　分析方法

（１）放射性炭素年代測定

試料は，観察後，表面に付着した不純物等を削り取り，50mg程度に調整する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去，水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去，塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸，水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。しかし，試料が脆弱な場合，炭素の損耗が激しく，分析に必要な炭素量が得られない場合がある。このため，アルカリの濃度を薄めて処理を行う(AaAと記載)。

試料の燃焼，二酸化炭素の精製，グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)は光信理化学製作所の自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし，測定試料とする。測定はタンデム加速器をベー

スとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて，^{14}Cの計数，^{13}C濃度(^{13}C/^{12}C)，^{14}C濃度(^{14}C/^{12}C)を測定する。AMS測定時に，米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-Ⅱ)，国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)，バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。δ^{13}Cは試料炭素の^{13}C濃度(^{13}C/^{12}C)を測定し，基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり，誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は，国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また，暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアはOxCal4.4(Bronk,2009)，較正曲線はIntCal20 (Reimer et al.,2020)である。

(２) 炭素・窒素安定同位体比分析

測定は，山形大学高感度加速器質量分析センターの協力を得た。分析は，光信理化学製作所製の年代測定用グラファイト合成装置に連結された，安定同位体比質量分析装置を用いる。

試料をスズカプセルに入れて封入し，機器にセットする。スズカプセル中の試料は，自動的に加熱された燃焼管に投入される。燃焼管内では，酸素ガスを瞬間的に導入することによって，スズの燃焼熱を利用して瞬間的に高温(一千数百度)となり，一瞬にして試料を燃焼させる。燃焼によって発生した気体を，キャリアガス(He)とともに還元管を通す。これによって，最終的に試料中の炭素は二酸化炭素(CO_2)に，窒素は窒素ガス(N_2)にそれぞれ変化する。これをカラムに通すことで両者は分離し，熱電対検出器にクロマトグラム(分離された信号)として検出される。この信号をもとに，クロマトグラムの面積計算を行い，元素含有率を求める。この段階で，炭素含量，窒素含量，C/Nを測定できる。ガスの大部分はグラファイト合成装置に送られて，年代測定用試料となるが，一部は分離され，質量分析計に導入される。質量分析計では，試料をイオン化して加速させ，強い磁力の中を通して進路を曲げることで，わずかに重さの違う同位体を分離する。ここで，窒素安定同位体比(^{15}N/^{14}N)，炭素安定同位体比(^{13}C/^{12}C)を測定する。

４　結果

(１) 放射性炭素年代測定

結果を第38表に示す。No.１は定法での分析処理が可能であったが，No.２，No.３，No.４の３点は試料が脆弱であったので，アルカリの濃度を薄くして処理を行った。いずれも，分析に必要なグラファイトが得られている。同位体補正を行った値は，No. １が2090 ± 20BP，No. ２が2080 ± 20BP，No. ３が2100 ± 20BP，No. ４が2070 ± 20BPであり，いずれも近接する。

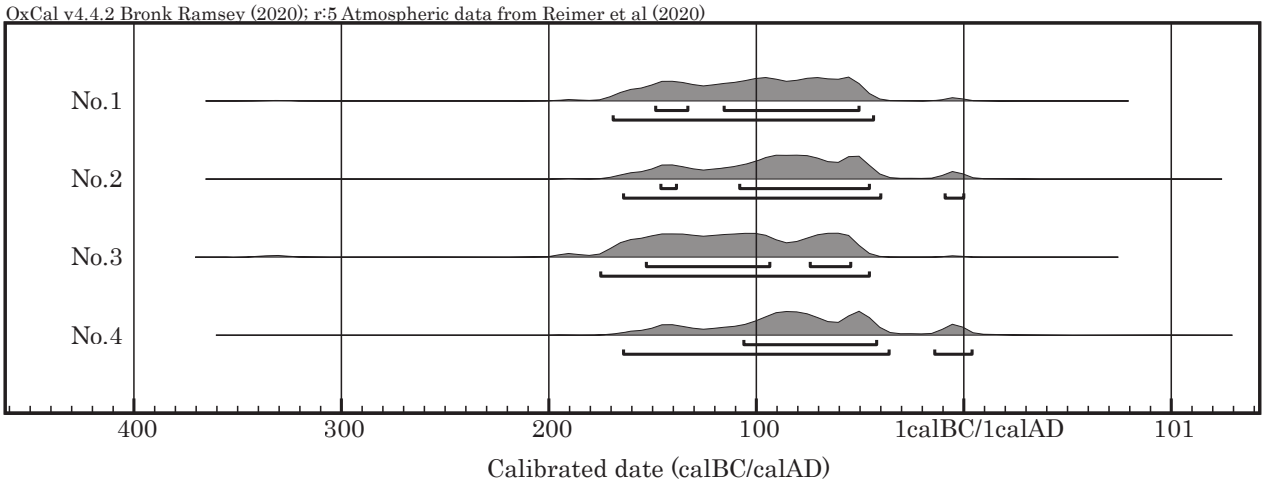
第38表 放射性炭素年代測定結果（３）

No.	掲載番号	遺構・層	方法	補正年代(暦年較正用)BP	δ^{13}C(‰)	暦年較正年代			Code No.	
							年代値	確率%		
1	879	SH５Ⅱe	AAA(1M)	2090±20(2090±22)	-27.12±0.15	σ	cal BC 149 - cal BC 134 2098 - 2083 calBP	11.9	YU-11972	pal-12814
							cal BC 116 - cal BC 51 2065 - 2000 calBP	56.4		
						2σ	cal BC 170 - cal BC 44 2119 - 1993 calBP	95.4		
2	930	F-22Ⅱe	AaA(0.05M)	2080±20(2078±22)	-27.37±0.21	σ	cal BC 147 - cal BC 139 2096 - 2088 calBP	5.2	YU-11973	pal-12815
							cal BC 109 - cal BC 46 2058 - 1995 calBP	63.1		
						2σ	cal BC 165 - cal BC 41 2114 - 1990 calBP	92.8		
							cal BC 10 - cal AD 1 1959 - 1950 calBP	2.7		
3	915	H-17Ⅱc	AaA(0.05M)	2100±20(2101±22)	-26.77±0.18	σ	cal BC 154 - cal BC 94 2103 - 2043 calBP	51.3	YU-11974	pal-12816
							cal BC 75 - cal BC 55 2024 - 2004 calBP	17.0		
						2σ	cal BC 176 - cal BC 46 2125 - 1995 calBP	95.4		
4	888	SH６Ⅱe	AaA(0.05M)	2070±20(2071±22)	-27.28±0.11	σ	cal BC 107 - cal BC 43 2056 - 1992 calBP	68.3	YU-11975	pal-12817
						2σ	cal BC 165 - cal BC 37 2114 - 1986 calBP	88.5		
							cal BC 15 - cal AD 5 1964 - 1946 calBP	6.9		

1)年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は，1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は，測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)AAAは，酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAはアルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
5)暦年の計算には，OxCal v4.4を使用
6)暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
7)較正データーセットは，IntCal20を使用。
8)較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように，1桁目を丸めていない。
9)統計的に真の値が入る確率は，σが68.2%，2σが95.4%である

第 39 表　安定同位体分析結果（２）

No.	掲載番号	区	遺構・層	δ ^{13}C (‰)	δ ^{15}N (‰)	Total-C (%)	Total-N (%)	C/N (mol)
1	879	F-21	SH-５	-26.59	12.89	65.90	3.33	23.1
2	930	F-22	Ⅱe	-26.95	9.57	60.03	2.97	23.6
3	915	H-17	Ⅱc	-26.88	10.96	62.36	2.65	27.5
4	888	K-18	SH-６	-26.85	10.30	58.11	2.72	24.9



第 230 図　暦年較正結果（３）

暦年較正は，大気中の ^{14}C濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C濃度の変動，その後訂正された半減期（^{14}Cの半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって，暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは，IntCal20 (Reimer et al.,2020)を用いる。2 σ の値は，No. １がcalBC170 ～ BC44，No. ２がcalBC165 ～ AD1，No. ３がcalBC176 ～ BC46，No. ４がcalBC165 ～ AD5 である。

⑵　炭素・窒素安定同位体分析

結果を第 39 表に示す。結果は，No. １～ No. ４伴に類似する。δ^{13}Cの値は，-27‰よりやや少ない程度，δ^{15}Nは，10 ～ 13‰程度である。Total-Cは 58 ～ 65%，Total-Nは３%で，C/N(mol)は 25 前後である。

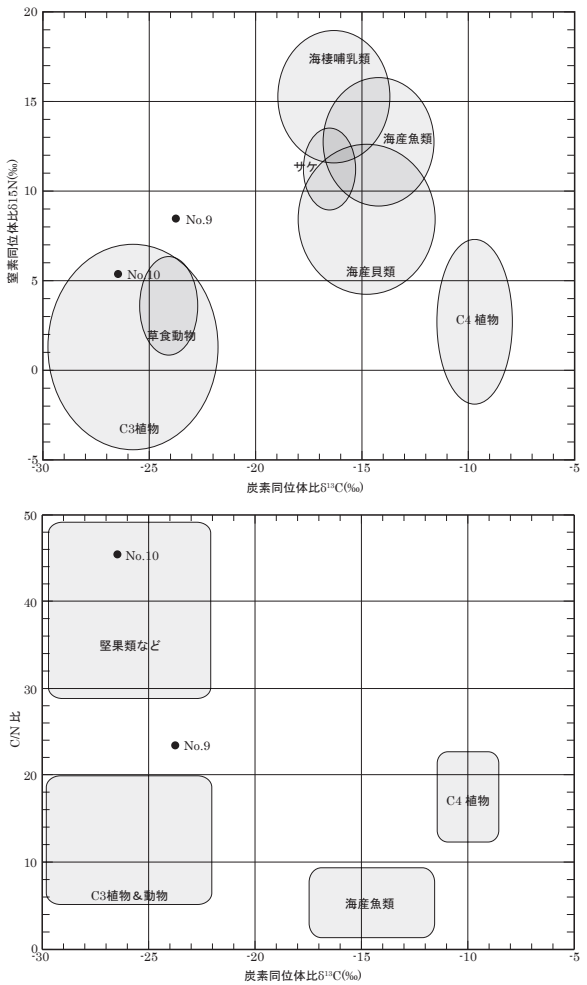
４　考察

暦年代を第230図に示す。年代値は４点ともに類似し，値の中心は 100calBC付近あたりとなる。

安定同位体の結果と当時の食材との比較を第 231 図に示す。食材の結果はYoshida et al.(2013)を参考にしている。炭素の安定同位体比を示すδ^{13}Cは，食物連鎖の各系列において，最下位の植物から高位の動物まで大きな変化がないのが特徴である。陸上の植物は，δ^{13}Cが-28 ～ -24‰程度のC3 植物と，-11 ～ -9‰程度のC4 植物に大きく分けられる。日本列島の大部分の植物質食料はC3 植物で，C4 植物は，ヒエ・アワ・キビなど雑穀類に限られる。栄養源としてC3 植物を摂取した動物のδ^{13}Cは，C3 植物とほぼ同程度の値となる。他方，C3 植物とC4 植物の双方を摂取した動物は，その摂取割合に応じて，δ^{13}CがC3 植物寄りかC4 植物寄りになる。このように，試料のδ^{13}Cと、食物連鎖系一次生産者のδ^{13}Cを比較することで，試料の由来物がどの食物連鎖の系列に属するものであるのか，また試料の由来物の栄養源がどこにあったのかを推定できる。

産業革命以後，δ^{13}Cが小さい化石燃料の大量消費により現代の大気中の二酸化炭素のδ^{13}Cは低下し続けている(C13-Suess効果)。現代の大気中の二酸化炭素のδ^{13}Cは-8.0‰程度であるが，産業革命以前は，-6.4‰程度と見積もられている (Friedli et al.,1986)。この差の分だけ，産業革命以前の陸上動植物のδ^{13}Cは，現代に比べると大きくなる。

海水中の食物連鎖系一次生産者である，海産植物プランクトンや底生珪藻類の，産業革命以前のδ^{13}Cは不明である。現代の温帯海域では-20‰程度で，C3 植物とC4 植物の中間的な値となっている。日本近海を含む北太平洋では，現代の表層海洋のδ^{13}Cは，産業革命以前に比べて 0.8 ～ 1.0‰程度小さくなっていると推算される (Eide et al.,2017)。



第 231 図　測定結果と食材の比較

海洋におけるC13-Suess効果は，陸上に比べるといくぶんか小さいようである。なお，第 231 図に示した食材の $\delta^{13}C$は，C13-Suess効果を踏まえた補正を行なっている。

窒素の安定同位体比を示す $\delta^{15}N$は，食物連鎖の系列において，高位になるほど大きくなっていくのが特徴である。よって，$\delta^{15}N$からは、試料の由来物の食物連鎖の栄養段階が推定できる。また，海洋中は陸上よりも食物連鎖の段階数が多いので，海洋生物の食物連鎖上位者は陸上の食物連鎖上位者よりも $\delta^{15}N$が大きいという特徴もある。窒素はタンパク質に由来するので，総炭素原子数 / 総窒素原子数 (C/N比) も，試料の由来を推定する尺度となる。つまり，タンパク質を豊富に含んだ肉・魚類は窒素を多く含むので，C/N比が比較的小さく，タンパク質が少ない堅果類や果実，海藻類などは，C/N比が大きくなる。

今回の土器付着炭化物は，４点ともに値が近接しており，いずれも同じような食材の痕跡と思われる。$\delta^{13}C$からは，C3 植物もしくはC3 植物を摂取した草食動物に由来する炭化物であると考えられる。さらに，C/Nは 20 を超えるような大きい値を示すことから，動物質は少なく，炭水化物が主体の食材であったと思われる。このことから，炭化物の大部分はC3 植物に由来すると考えられる。しかしながら，$\delta^{15}N$は 10‰を超えることから，C3 植物を主体とした食材と考えるのには大きいため，食材として海産物が混じっている可能性がある。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.

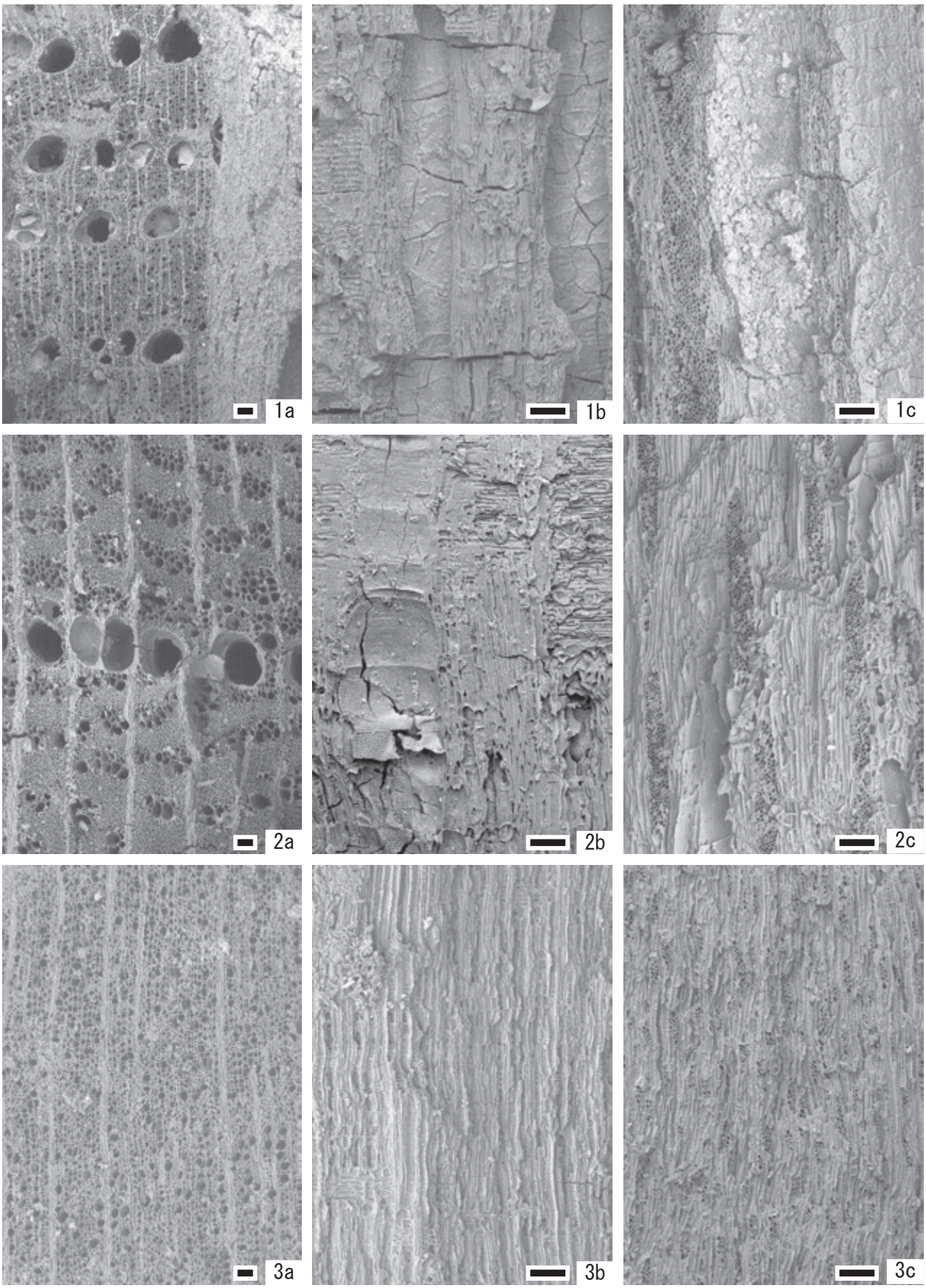
Eide M., Olsen A., Ninnemann U.S., Eldevik T., 2017, A global estimate of the full oceanic 13C Suess effect since the preindustrial: Full Oceanic 13C Suess Effect. Global Biogeochemical Cycles 31, 492-514.

Friedli H., Loetscher H., Oeschger H., Siegenthaler U., Stauffer B., 1986, Ice core record of the 13C/12C ratio of atmospheric CO2 in the past two centuries. Nature, 324, 237-238.

Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62, 1-33..

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

Yoshida Kunio, Kunikita Dai, Miyazaki Yumiko, Nishida Yasutami, Miyao Toru, Matsuzaki Hiroyuki, 2013, Dating and stable isotopeanalysis of charred residues on the Incipient Jomon pottery (Japan). Radiocarbon 55, 1322-1333.



1　コナラ亜属クヌギ節（R元　No. ３）　２　ケヤキ（R元　No. １）　３　ツバキ属（R元　No. ２）
ａ　木口（横断面）　ｂ　柾目（放射断面）　ｃ　板目（接線断面）　（スケールは 100 μｍ）

第 232 図　炭化材（令和元年度）

第Ⅵ章　総　括

第１節　旧石器時代

１　遺構

荒園遺跡第２・３地点においては，旧石器時代に該当する遺構は確認されなかった。Ⅸ層の暗褐色粘質土からチップ類や安山岩等の礫も相当数検出されたが，礫群となるような分布状況は見られなかった。また，使用の痕跡や被熱の痕も見られていない。

２　遺物（石器）

遺物は，小型のナイフ形石器１点，三稜尖頭器１点，細石刃核１点と 41 点の細石刃及び剥片・チップ等が約 200 点検出された。しかし，特徴的な分布は見られない。

掲載していない出土遺物は，剥片及びチップであるが，剥片は素材剥片は見られず，石器製作時に発生した整形剥片やチップであった。なお，ナイフ形石器と三稜尖頭器及び細石刃は混在して出土し，特徴的な水平及び垂直分布は見られなかった。

細石器文化期では，２つのブロックが検出された。三船産黒曜石と桑ノ木津留産の黒曜石と水晶からなるブロックである。水晶は高限山系で河川から採集可能で，いずれも近距離産地の石材を用いている。ホルンフェルスの畦原型石核から剥出された細石刃とチップは確認できず，一時的な土地利用だったと考えられる。石核は出土していないが，三船産黒曜石の細石刃を中心に製作し補充等を行った集団が留まった可能性が高い。石材とブロックの形成からは，細石器文化期には３時期以上の利用が考えられる。これにナイフ形石器と三稜尖頭器はセットの可能性も考えられるが，打点を残し基部加工を行わず一側縁だけをブランティングする小型ナイフが，新しい方のナイフ形石器であるとすれば，少なくとも５時期の土地利用があったと考えられる。

第２節　縄文時代早期

１　遺構

縄文時代早期の遺構は，集石遺構 40 基（集石１号～集石３号は第１地点より検出されており，平成 28 年度に報告済。），磨石の集積３基・安山岩の素材剥片の集積２基・土坑１基及び土器集中か所１か所・チップ等の集中したブロックが３か所確認できた。

集石遺構は，第２地点の西側及び中央部，第３地点中央部と西側斜面部分の４か所を中心に分布している。調理施設であると考えられる 40 基の集石遺構と食材加工のための石匙や狩猟具である多数の石鏃の出土は，当時の人々の食生活の在り方を考える上でも貴重な資料である。

剥片の集積遺構は，G-15 区とF-13 区から検出された。良質のハリ質安山岩の素材剥片を数点ずつ集積したもので，石匙の素材となったものと考えられ，製作工程を知る上で貴重な資料となる。

磨石の集積遺構の３号周辺から出土した２点の小片の土器は，その調整や胎土から塞ノ神Ｂ式土器か苦浜式土器と考えられる。

土坑は，長径約 180 ㎝，短径約 90 ㎝の長楕円形で，検出面からの深さ約 30 ㎝の浅いすり鉢状の１基が検出された。検出面の上下数 10 ㎝で推定胴部最大径は約 25 ㎝程度の無文土器が検出された。

土器集中か所では，Ｇ－８区のⅥ層から口縁がラッパ状に外反する深鉢型土器など数個体の土器が集中して出土した。

チップ集中か所は，Ｃ・Ｄ－６区のⅦ層から検出された。出土した 9380 点の石鏃・残核・フレイク・チップのほとんどの約 8500 点が玉髄で，次がチャート約 700 点であった。３つのブロックに細分されることから，時期差がある可能性があるが，３か所の石器製作跡があったのではないかと考えられる。

２　遺物

（１）土器

荒園遺跡では，縄文時代早期の土器は，Ｖ層のアカホヤ火山灰とⅧ層の薩摩火山灰に挟まれたⅥ・Ⅶ層から出土している。一括取り上げ遺物を含め，出土総数は 11,566 点である。第 40 表には，Ⅰ～Ⅻ類に該当する土器形式と類ごとの出土数を示す。

第 40 表　荒園遺跡出土の土器分類と出土点数

類	土器形式	掲載点数	掲載破片数	出土総数
Ⅰ	前平式（古）土器	13	40	131
Ⅱ	前平式（新）土器	8	9	10
Ⅲ	石坂式土器	4	21	41
Ⅳ	下剥峯式土器	8	9	35
Ⅴ	桑ノ丸式土器	2	6	6
Ⅵ	押型文土器	4	4	16
Ⅶ	手向山式土器	11	84	139
Ⅷ	平栫式土器	42	90	333
Ⅸ	塞ノ神Ａ式土器	75	627	1448
Ⅹ	塞ノ神Ｂ式土器	78	361	3100
ⅩorⅪ	塞ノ神Ｂまたは苦浜			909
Ⅺ	苦浜式土器	90	413	1675
Ⅻ	無文土器	14	45	2613
ⅩⅢ	轟Ａ式土器	5	58	86
	土製品	7	7	7
	型式不明			1017
計		361	1774	11566

第Ⅰ類の前平式(古)土器は，Ｃ～Ｅ－４～６区を中心とした調査区の西側に分布した。

第Ⅱ類は，前平式(新)土器としたが，既存の加栗山式土器や志風頭式土器の複数型式をまとめている。Ｈ～Ｊ－７・８区の調査区の西側に分布した。荒園遺跡では小片の出土が多く，その全容は明らかではない。

第Ⅲ類の石坂式土器は，Ｃ～Ｅ－６～７区を中心とした調査区の西側に分布した。石坂式土器は前迫氏によって，石坂Ⅰ式土器と石坂Ⅱ式土器に細分されている（前迫 2000)。荒園遺跡の 112 ～ 114 は口縁部が直行するバケツ状になっており，石坂Ⅱ式土器に該当する。また，第Ⅲ類土器には補修孔の跡も見られ，当時の人々は土器が割れても修理して大切に使っていたことが窺える。

第Ⅳ類の下剥峯式土器は，Ｄ・Ｅ－７・８区を中心に 35 点が出土している。下剥峯式土器は口縁部に胴部とは違う文様帯をなすものと，単一の文様で器面全体を覆うものがあるが，荒園遺跡では小片のみの出土であり，全体的な文様は定かではない。

第Ⅴ類の桑ノ丸式土器は，６点出土し，全てを掲載した。全容は明らかではない。

第Ⅵ類の押型文土器は，16 点出土し，その内の４点を掲載した。口縁部は山形押型文が変形したと考えられる波状押型文を呈する。

第Ⅶ類の手向山式土器は，調査区の南端のＫ・Ｌ－13・14 区とＪ・Ｋ－ 16 区を中心に出土している。口縁部の破片には山形押型文が施されている。胴部の破片には菱形押型文が施されるものと撚りの原体を交互に回転させて施文するものがあり，どちらも金雲母を多量に含む。

第Ⅷ類の平栫式土器は，調査区の西側のＣ～Ｆ－５～16 区を中心に出土した。333 点出土し，42 点を掲載した。平口縁と波状口縁があり，文様は口縁部・頸部・胴部の３帯構成である。口縁部が口唇から約 1.5㎝まで肥厚し，断面が三角形状の一群，口縁の肥厚部が口唇から約 2.5㎝までやや長くなる一群，縦位または斜位に刻目突帯を施す一群がそれぞれ出土した。また，頸部の無文帯を持つものと持たないものがあり，一定の年代幅を有していると考えられる。

第Ⅸ類の塞ノ神Ａ式土器は，調査区のＤ～Ｆ－８～ 12 区を中心に出土した。Ⅸ類aもⅨ類ｂもほぼ同様の出土状況であった。1448 点出土し，75 点を掲載した。荒園遺跡の中心となる土器型式三つのうちの一つで，出土した破片数は一番多い。塞ノ神Ａ式土器は河口貞徳氏の分類を基に，胴部に網目状撚糸文を施すⅨ類aと，沈線の区画内に撚糸文を施すⅨ類ｂに大別した。Ⅸ類は内外面とも丁寧に調整され，細やかな施文で美しい形状の土器である。また，口縁部だけを見ても，直線的に外反するもの，内湾しながら外側に開くもの，Ⅷ類土器（平栫式土器）の要素を残した波状気味のものなどがあり，長い年月をかけた土器型式の変化の様子を窺うことができる。

特に，Ⅸ類aは，きめ細やかに施文がされており，時間をかけて丁寧に作製されたことが分かる。このことから，この当時の人々はそれだけの手間をかけられるほど食料事情が安定し，衣・食・住において精神的，時間的余裕のある生活をしていたのではないかと考えられる。

第Ⅹ類の塞ノ神Ｂ式土器は，調査区のＤ～Ｇ－８～ 13 区，Ｊ・Ｋ－７区を中心に出土した。第Ⅸ類（塞ノ神Ａ式土器）の出土区とはやや異なる。3,100 点出土し，78 点を掲載した。荒園遺跡の中心となる土器型式の一つである。Ⅹ類土器には，条痕や条線を幾何学的に施した後，両端を沈線で区画するものがあるが，本遺跡では見つかっていない。

第Ⅺ類の苦浜式土器は，第Ⅹ類（塞ノ神Ｂ式土器）と同様，調査区のＤ～Ｇ－８～ 13 区，Ｊ・Ｋ－７区を中心に 1,675 点出土し，90 点を掲載した。荒園遺跡の中心となる土器型式の一つである。また，第Ⅹ類（塞ノ神Ｂ式土器）か第Ⅺ類（苦浜式土器）のどちらか区別がつけられなかった土器が，909 点出土している。それらも同様の出土状況である。

第Ⅻ類の無文土器の出土状況は，第Ⅹ類（塞ノ神Ｂ式土器）や第Ⅺ類（苦浜式土器）とほぼ重なり，Ｄ～Ｇ－８～ 13 区，Ｊ・Ｋ－７区を中心に 2,613 点出土し，14 点を掲載した。無文のものであるが，器形･調整から，また，出土状況からも，Ⅹ類（塞ノ神Ｂｄ式）とⅪ類（苦浜式土器）に含まれるものと考えられる。

第ⅩⅢ類の轟Ａ式土器は，Ｄ～Ｆ－ 12 ～ 13 区を中心に 86 点出土し，５点を掲載した。第ⅩⅢ類の条痕文土器で，鎌石橋式轟Ａ式である。

このように，荒園遺跡では，縄文早期土器の型式数が多い。その中で，塞ノ神Ａ・塞ノ神Ｂ・苦浜式土器は，出土量が多く，同じ型式内でのバリエーションにも富んでいる。特に，早期後葉の苦浜式土器の出土量は県内の他の遺跡に比べると圧倒的に多く，器形や文様構成も多種に及んでいる。このことは，塞ノ神Ｂ式土器から苦浜式土器への変遷過程や早期後葉の編年を考える上でも重要であると言える。

早期前半は土器量も少なく，小ブロックを形成する。前平式土器から石坂式土器の時期は，立地や遺物の分布から細石器文化期と同様に短期間のキャンプ地として機能した。手向山式土器や平栫式土器から土器量が増加し，平栫式土器と塞ノ神Ａ式は土器ブロックを残しているが，塞ノ神Ｂ式から苦浜式土器ではブロックは形成せずに，面的に広がるように見える。これは，本遺跡のなかでは塞ノ神Ｂｄ式→苦浜Ⅰ式→苦浜Ⅱ式の型式変化が追え，この時期には継続して居留していたために，表土が攪乱されたものと捉えることができる。前後の塞ノ神Ａ式と轟Ａ式との関係では，それぞれその間に土器型式

の断絶があり，空白期間が存在し，そのためブロックとしての原位置が保たれたものと考える。

全体の土器型式をみると，前半期の土器型式の土器量は少なく，さらにⅢ類土器は典型的な石坂式土器ではなく，瘤付きとすれば新しい一時期の土器型式の可能性がある。また，天道ケ尾・妙見式土器が見られないことや，前述したように塞ノ神Ｂ式は塞ノ神Ｂｄ式の新しい段階のものであること，苦浜Ⅲ式が少ないことなどから，早期の全期間でみると，土器型式が断絶しながら土地利用されていると言える。

このようなことから，早期前半はキャンプサイトとして，後半には集石を形成し長期間滞在したのではないかと考えられる。

塞ノ神Ｂｄ式土器から轟Ａ式土器までの型式変化（第233図・第234図）

本遺跡の塞ノ神Ａ式土器は，塞ノ神Ａａ式と塞ノ神Ａｂ式が出土しており，塞ノ神Ａ式の中での型式変化はたどれるが，塞ノ神Ｂ式については塞ノ神Ｂｃ式が出土しておらず，塞ノ神Ｂｄ式が出土している。Ｂｃ式の出土自体が少ない状況であるが，258～274などの頸部屈曲が緩く，口縁部文様帯が縦長で，沈線による曲線文や斜格子文を多用するなどの特徴は，Ｂｄ式の中でもいわゆる「東名段階」のもので，最も新しい段階のものである[註1]。

塞ノ神Ｂｄ式の型式設定では，「口縁部はラッパ状に外反，底部はあげ底気味の平底。貝殻によって口唇部に刻目，口縁部には連続列点文を施し，まれに胴部におよぶものもある。文様の枠を失う。貝殻によって器面を調整し，後になで仕上げを行うが，内面は篦を使用して，胎土の粗い粒子のため擦痕を残すものが見られる」(河口1985)。とされる。最大の塞ノ神式の特徴は器形であるが，本遺跡の土器は，大きな外反が弱く，胴部に膨らみが見られるようになる。別型式の設定が望ましいとも考える。

苦浜式土器については堂込氏の細分がある（堂込2020b)。その型式変化の考え方は以下のようである。

「苦浜式土器の器形は，口縁部が外反し，頸部が緩くしまり，胴部がやや膨らみやや大きな平底の底部に至る器形(A)と，外開きの口縁で，頚部で屈曲せず直口形で真っ直ぐに底部に至る器形(B)と，口縁部が内湾気味に立ち上がり胴部は湾曲していって小さな底部に至るもの(C)とある。あげ底気味の底部はAに見られるが，Bでは底部の端部が拡がり平底化する。Cでは底部が小さくなり，全体が砲弾形をなす。

文様帯の考え方は，塞ノ神様式は基本的に口縁部と胴部で文様が大きく異なる二分した文様帯である。さらに胴部では，直線と波線など平行線文様帯や格子目文様帯の２～３の横方向の文様帯がみられる。この平行線と格子目の文様モチーフは，文様帯の減少によりどちらか一方が用いられるようになる。さらに縦方向に文様を区分する縦位文様帯がみられる。横方向の文様帯と縦位文様帯の関係については，どちらかが主流となるか，どちらかが消失していく型式変化が考えられる。

文様の単位については，苦浜式の主文様は平行線や波状の貝殻条線文と設定されたが，塞ノ神Ｂ式の貝殻押引(線)文としたものと施文方法は同じである。前者は条数が少なく明確である傾向があり，苦浜式が多条で，浅く施文される。塞ノ神Ｂ式では，大きく二分する文様帯の境目に貝殻腹縁による線状の連続刺突文を巡らすのが通例である。連続刺突文が線状を呈しなくなり，平行線文様帯に取り込まれる傾向がみられる。波条の条線文は，連続刺突文や相交弧文と近縁関係に有り，連続刺突文→相交弧文あるいは波状文→相交弧文かその逆の変化が考えられる。これらを，塞ノ神Ｂ式と文様単位が近しいものを古く，新出のものを新しく位置づけることとする。

口縁端部の刻目は，貝殻腹縁によるものと，ヘラを用いるものがあり，前記と同じ考え方で，ヘラ刻みを新しい属性とする。

突帯は，短突帯と長い横方向の全周を回るものなどがみられる。短突帯は，塞ノ神Ｂ式にも散見されるが，横方向の突帯は見られない。縦方向の突帯があるものは，塞ノ神Ｂｄ式の縦位文様帯を継承している可能性もある。

内面調整では，塞ノ神Ｂｄ式は内面がナデ消されて平滑であることが圧倒的だが，工具ナデやケズリが残されたものが出てくる。貝殻条痕は，ナデ仕上げが粗いものに見られるようになる。ナデの手順の省略は粗雑化として捉えたい。」

上記の考え方での細分で位置づけると，第233図・第234図のように，塞ノ神Ｂｄ式から苦浜Ⅰ式への変化は漸移的で，二文様帯を残しながら突帯の貼付や器形変化が生じている。型式学的には苦浜Ⅰ式でも塞ノ神Ｂｄ式に近しく，苦浜Ⅱ式との間に若干の型式差を感じる。本遺跡の苦浜式土器は苦浜Ⅰ式でも古い方と，苦浜Ⅱ式が主であり，苦浜Ⅲ式はわずかにしか見られないと言える。

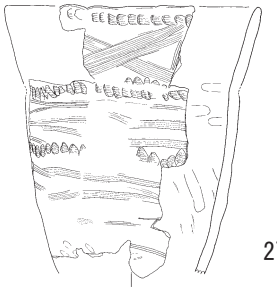
また，早期の土器型式は多いが，中心となる土器型式は，第233図・第234図にあるとおり，塞ノ神式土器から苦浜式土器にかけての時期である。この時期を中心に遺跡が形成されたと考えられる。

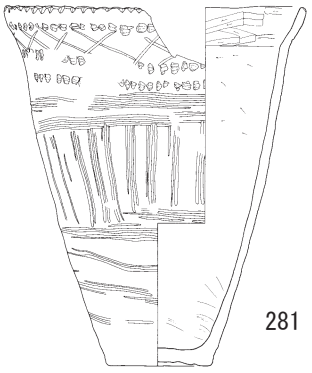
註１　塞ノ神式の細分はなされているが，栗畑氏が塞ノ神Ｂ３タイプ東名段階として，最終段階に置いたもの。（栗畑2016）

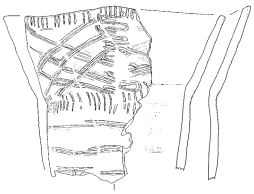
（２）石器

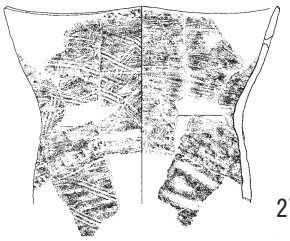
石器は，狩猟で使用する石鏃が多く出土し，石鏃の製作跡である可能性もある。また，磨・敲石が多く出土し，木材の伐採等で使用すると考えられる石斧等は少ない。このようなことから，木材の伐採は盛んではなく，狩猟と堅果類の採取・加工場として何度も利用されたと考え

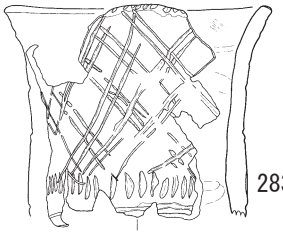
塞ノ神Ｂｄ式（最終末段階）

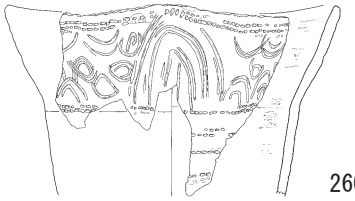

270


281


258

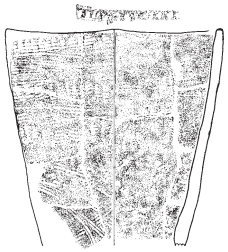

271


283

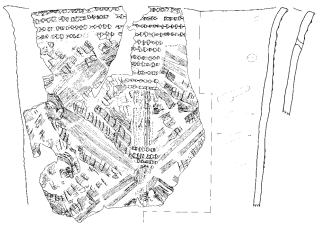

260

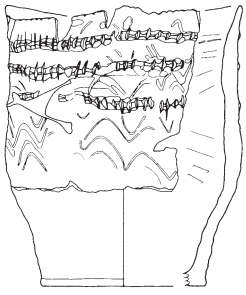
324

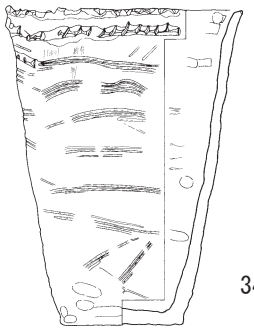
288

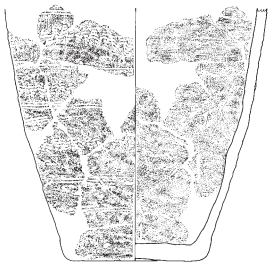

308

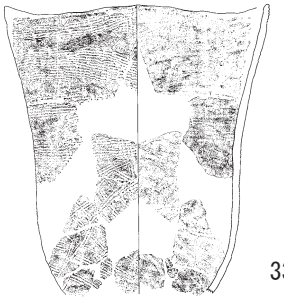
苦浜Ｉ式

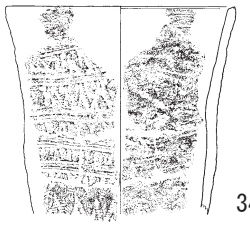

343


346


344

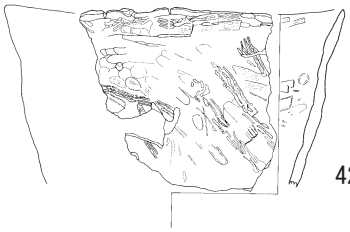

417


337


349

第 233 図　塞ノ神Ｂｄ式土器から轟Ａ式土器までの型式変化（１）

苦浜Ⅱ式


421

355

363

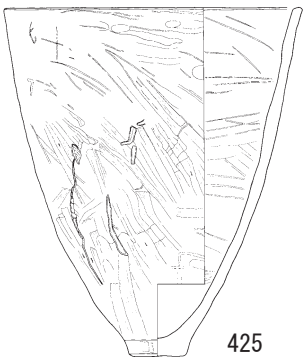
422

364

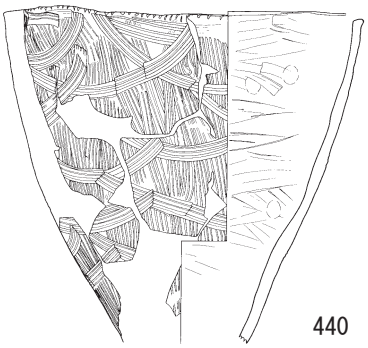
373

苦浜Ⅲ式

375


425

轟Ａ式


440

第 234 図　塞ノ神Ｂｄ式土器から轟Ａ式土器までの型式変化（２）

られる。

縄文時代早期では，ブロック１～３は最大幅が胴部中程の下位にあり，先端は鋭く尖り，基部が平基もしくは浅い抉りで三角形状の尖った脚を持つ大久保型石鏃(相美 2004)を主とする製作跡である。大久保型石鏃については草創期～石坂式土器期までの使用があったとされるが，Ⅰ類～Ⅲ類の土器型式に伴って，複数回の大久保型石鏃の製作が行われたと考えられる。

石鏃についてみると，前平式土器には小型の正三角形小型鏃が伴う。剥片鏃も多い。吉田式土器になるとやや大型化する。石坂式土器には正三角形の抉りの浅い石鏃が伴う。下剥峯式土器には左右が対称でない石鏃が伴ってくるが，抉りの浅い二等辺三角形鏃も伴う可能性がある。押型文土器には抉りが「U」字状で脚の端部が方形の石鏃が伴う。脚の端部が方形から丸形へ変化し，手向山式土器を経て，面積が減じ出すと平栫式土器に伴うようになる。塞ノ神式土器にはやや尖り気味の脚となり，塞ノ神式土器がＡ式からＢ式になると，抉りが「U」の字状から「へ」の字状になる。轟式になると脚の上部に２～３か所の突出がみられる鏃がみられるようになる(堂込 2020a)。これに当遺跡の分類を当てると，石鏃Ⅰ類のうち，正三角形小型平基鏃は前平式土器に，わずかに抉りをもつものが石坂式土器に伴って使われたと考えられ，これらが大久保型石鏃とともなう可能性があるが，大久保型石鏃は玉髄と少量のチャートの石材で集中的に作製されている。石鏃Ⅰ類の大型のものは，早期の全般に見られる傾向がある。石鏃Ⅱ類が下剥峯式土器・桑ノ丸式土器に，石鏃Ⅲ類が押型文土器・手向山式土器に，石鏃Ⅳ類が平栫式土器・塞ノ神Ａ式土器に，石鏃Ⅴ類・Ⅵ類が塞ノ神Ｂ式土器・苦浜式土器に，石鏃Ⅶ類が轟式土器に伴うとした堂込氏の編年に従った。また，欠損品と未製品から，石鏃の補修・製作を行っていたものと考えられる。それぞれ類別ごとの石材を観る（石器観察表）と，石鏃Ⅰ類のうち小型のもの（452 ～ 458）は地元の石材を使い，石鏃Ⅱ類は姫島産黒曜石と安山岩を，石鏃Ⅲ類が針尾産黒曜石とチャートを，石鏃Ⅳ類が安山岩を，石鏃Ⅴ類が珪質頁岩と姫島産黒曜石を，石鏃Ⅵ類が安山岩を，石鏃Ⅶ類が針尾産黒曜石を多用する傾向が伺える。

石匙は，灰色のハリ質安山岩の大型剥片が使用されるものが多い。石匙は剥片形状を残し，つまみ部と刃部の最小限の剥離で使用している。これらは上野原遺跡などで平栫式土器から塞ノ神Ａ式土器の時期に特徴的な石匙であり，この時期が石鏃の型式分類と石材と一致する。

水晶は高隈山系猿ヶ城渓谷で露頭もあり，西丸尾遺跡では水晶の細石核が出土しており，また縄文時代でも，水晶製の石器が大隅半島で散見される。安山岩は西北九州産ハリ質安山岩とおそらく上牛鼻産の黒安山岩と，表面の風化が激しい灰色～青灰色のものがある。出土石器の多くが西北九州産である。姫島産黒曜石は，剥片まで使い切っている印象である。二次加工剥片も多い。

また，磨製石斧には完成品がなく，未製品が少しある。生業の中でこの土地で木の伐採等は行わなかったが，道具立てとしては保有しているということと考えられる。

石器組成では，Ⅶ・Ⅵ層ともに，圧倒的に石鏃の量が多く，次に植物質食糧の加工具とされる磨石・敲石類，石皿が続く。Ⅶ層では石鏃が特に顕著であることから，狩猟中心から採集・加工を伴う生活・土地利用へのシフトが考えられ，これがⅥ層での集石の増加からもうかがわれる。

磨製石鏃は塞ノ神式土器の時代まで使われるが，718は鬼ケ野型尖頭器に類似し，最も古く位置づけられる可能性がある(堂込 2019)。

３　遺跡について

荒園遺跡の中心地は，集石遺構や遺物の出土状況等を勘案すると，発掘調査区の中心部と西側にあったと考えられる。また，住居跡は見つかっていないことから，縄文時代早期に定住していた可能性は低いと言える。

縄文時代早期土器はⅩⅢ類の土器に分類したが，出土数の多いⅨ，Ⅹ，Ⅺ類土器については，器形や文様構成がバリエーションに富んでいる。しかし，復元することができた完形品は持ち運びしやすい小型や中型のものに限られており，大型のものは出土していない。このことから本遺跡は，特に縄文時代早期後葉に，短期間型のキャンプの場として，頻繁に利用されていたのではないかと考えられる。

石器では，狩猟で使用する石鏃が多く出土している。そこで，狩猟の場や狩猟に行くための準備の場，または，石器の製作所として利用された可能性もある。また，木の実を磨りつぶしたり粉にしたりする磨石も多く出土しているが，木材の伐採等で使用すると思われる石斧等は少ない。このことから本遺跡は，堅果類の採取・加工の場としても利用されたのではないかと考えられる。

また，当時この地を利用した人々は，石鏃の石材である黒曜石を確保するために，北部九州の人々とも交易を行っていた可能性も考えられる。

このように本遺跡は，縄文時代早期には，狩猟・採取・加工の場として，短期間型のキャンプの場としての役割を果たしていたのではないかと考えられる。

第３節　縄文時代前期～晩期

荒園遺跡第２・３地点において，縄文時代前期～晩期に該当する遺構は確認されなかった。『荒園遺跡１（第１地点）』発掘調査報告書（12）においても，縄文時代前期から晩期にかけての遺構は発見されていない。また，本遺跡は，縄文時代前期～晩期の遺物包含層のⅡ層は畑地造成のため広範囲で削平されており，遺物包含層は部分

的に残存するのみであった。出土遺物も相対的に少なく，土器７点，石器８点の 15 点を図化した。

第４節　弥生時代

弥生時代以降の遺構・遺物は，Ⅱａ層からⅡe層で検出・出土している。Ⅱ層は黒色土で１ｍ以上の厚さがあり，色調の違いで６層に細分している。検出された遺構は，調査区の東側に位置する竪穴建物跡５軒，土坑１基である。竪穴建物跡は５軒とも方形である。

本遺跡では，竪穴建物跡から甕型土器や壺型土器等，砥石，軽石製品等が出土している。弥生時代の遺物は，縄文時代早期の遺物の数量に比べると，著しく少ない。

本遺跡における弥生時代の主な出土土器は，甕形土器が多い。持留川を挟み荒園遺跡の対岸には，永吉天神段遺跡が位置している。その『永吉天神段遺跡第１地点』2016 年発掘調査報告書（８）では，弥生時代中期における甕形土器の型式変化の方向として以下の①～③の３点が述べられ，荒園遺跡でも同様であると考えられる。

①　口縁部が短いものから長いものへ
②　垂れ下がるものから逆「Ｌ」字状を経て「く」の字状へ
③　口唇部が丸みを帯びるものから凹線を施すものへ

①については，口縁部の短いものが 921 ～ 923，長いものが 924 ～ 927 にあたる。

②については，逆「Ｌ」字状が 916，917，「く」の字状が 918 ～ 920，924 ～ 930 にあたる。

③については，口唇部の丸みが 915，916，921 ～ 923，凹線を施すものが 917 ～ 919，924 ～ 930 にあたる。

915 は，自然科学分析による暦年較正年代では紀元前２世紀前半～１世紀中頃であり，弥生時代中期の暦年代を示した。本遺跡では，器形から入来式土器に分類した。

930 は，暦年較正年代では紀元前２世紀中頃～紀元後１世紀初頭であり，弥生時代中期の暦年代を示した。本遺跡では，器形から山ノ口Ⅱ式土器に分類した。

本遺跡では，弥生時代中期前半とされる入来式土器と，中期後半とされる山ノ口式土器の出土が多い。

数は少ないが，入来式土器に分類したのは，915，916，921 ～ 923 である。また，残りのほとんどを器形から山ノ口式土器に分類した。山ノ口式土器は，弥生時代中期を代表する土器で，大隅半島各地で出土している。山ノ口式土器の標式遺跡は，肝属郡錦江町山ノ口遺跡である。山ノ口Ⅰ式土器は，口縁部がやや上方へ起き上がり口唇部は浅くへこむ。山ノ口Ⅱ式土器は，口縁部が「く」の字状に起き上がり口唇部が浅くへこむものもあり胴部の張りが弱い。前述③の「凹線を施すもの」を本遺跡では口唇部が「浅くへこむ」と表現した。本遺跡では，山ノ口Ⅰ式土器よりも，山ノ口Ⅱ式土器の様相のものが多い。

荒園遺跡では，永吉天神段遺跡の弥生時代中期における甕形土器の型式変化と，同様の方向性を示していると考えられる。

遺跡について　弥生時代の検出された遺構である竪穴建物跡５軒と土坑１基は，調査区の東側に位置している。また，出土遺物のほとんどが東側に偏っていることからも，当時の中心地は，この東側周辺であったと考えられる。さらに，出土土器のほとんどが山ノ口式土器であることから，本遺跡での弥生時代の活動の中心は中期後半であったと考えられる。

第５節　古墳時代

古墳時代の遺構としては，『荒園遺跡１（第１地点）』ですでに報告済みのものを含めて竪穴建物跡が６軒検出された。前回報告（平成 24 年度調査）の２軒（１号・２号）は調査区南西端Ｇ・Ｈ－４区，Ｊ－５区で，今回報告（平成 26 年度調査）の４軒（８～ 11 号）は調査区北西端Ｃ・Ｄ－４～８区で検出された。

竪穴建物跡の主な遺物を第 236 図にまとめた。古墳時代の土器については中村直子氏の編年（中村 1987），久住猛雄氏の編年（久住 1999）に基づき検討する。竪穴建物跡１号・２号については『荒園遺跡１（第１地点）』で報告された内容を参考にする。（竪穴建物跡１号・２号出土土器の掲載番号は『荒園遺跡１（第１地点）』のもの）

竪穴建物跡１号・２号は平成 27 年度に調査され，谷部に面した傾斜地で検出された。

竪穴建物跡１号　笹貫段階の甕形土器 146 が主体となり，一部宮崎系とみられる甕形土器 148 が混じる。坩 151 は笹貫段階，高坏 153 は中津野段階である。笹貫段階の時期では，肝属平野部において外反口縁の高坏とバケツ型の甕形土器がセットで出土する例があり，遺構の時期としては古墳時代中期の可能性が指摘されている。[註2]

竪穴建物跡２号　焼失家屋であるため遺物量が少ない。笹貫段階の壺 164，165，坩 166，辻堂原から笹貫段階の高坏 171 が出土している。竪穴建物跡１号よりも古い時期の可能性が高い。

竪穴建物跡８～ 11 号は平成 26 年度に調査され，台地部縁辺で検出された。

竪穴建物跡８号　975 の甕形土器は志布志湾沿岸でみられる在地系の土器である。器形をタタキによって成形し，調整はハケメによって仕上げるなど，布留系や熊本平野の外来土器を意識した作りをしている。[註3] 979 は久住編年Ｂ系統（近畿第Ⅴ様式系）の作成技術を部分的に用いた高坏である。坏部には横ナデにより調整を行い，脚部は縦方向に面取りを行ったのち横ミガキを施す。脚部は中空の充填技法である。久住編年Ｂ系統ⅢＡ期新相のものである。遺構の時期としては古墳時代前期末が妥当と考えられる。[註4]

竪穴建物跡９号　983，984 の甕形土器はタタキにより成形し，内面はケズったのちハケメを施している。久住

編年Ｂ系統のⅢＡ期新相のものとみられる。985 の甕形土器胴部には，胎土に金雲母が大量に混じっており，在地の胎土とは異なる。988 は口縁部は横方向，胴部は斜め方向のミガキを施している。ⅢＡ期新相の小型丸底壺（坩）を模倣した在地のものとみられる。遺構の時期としては古墳時代前期末が妥当と考えられる。[註4]

竪穴建物跡 10 号　989 は熊本平野から搬入された甕形土器である。在地のものに比べ，器壁が薄い。990 は宮崎平野からの搬入された甕形土器である。胎土に赤色の小礫が多量に混じり，橙色を呈している。992 はⅢＡ期新相の小型丸底壺（坩）である。宮崎平野の尾花Ａ遺跡でも出土している。10 号の出土遺物はすべて搬入品である。遺構の時期としては古墳時代前期末が妥当と考える。[註4]

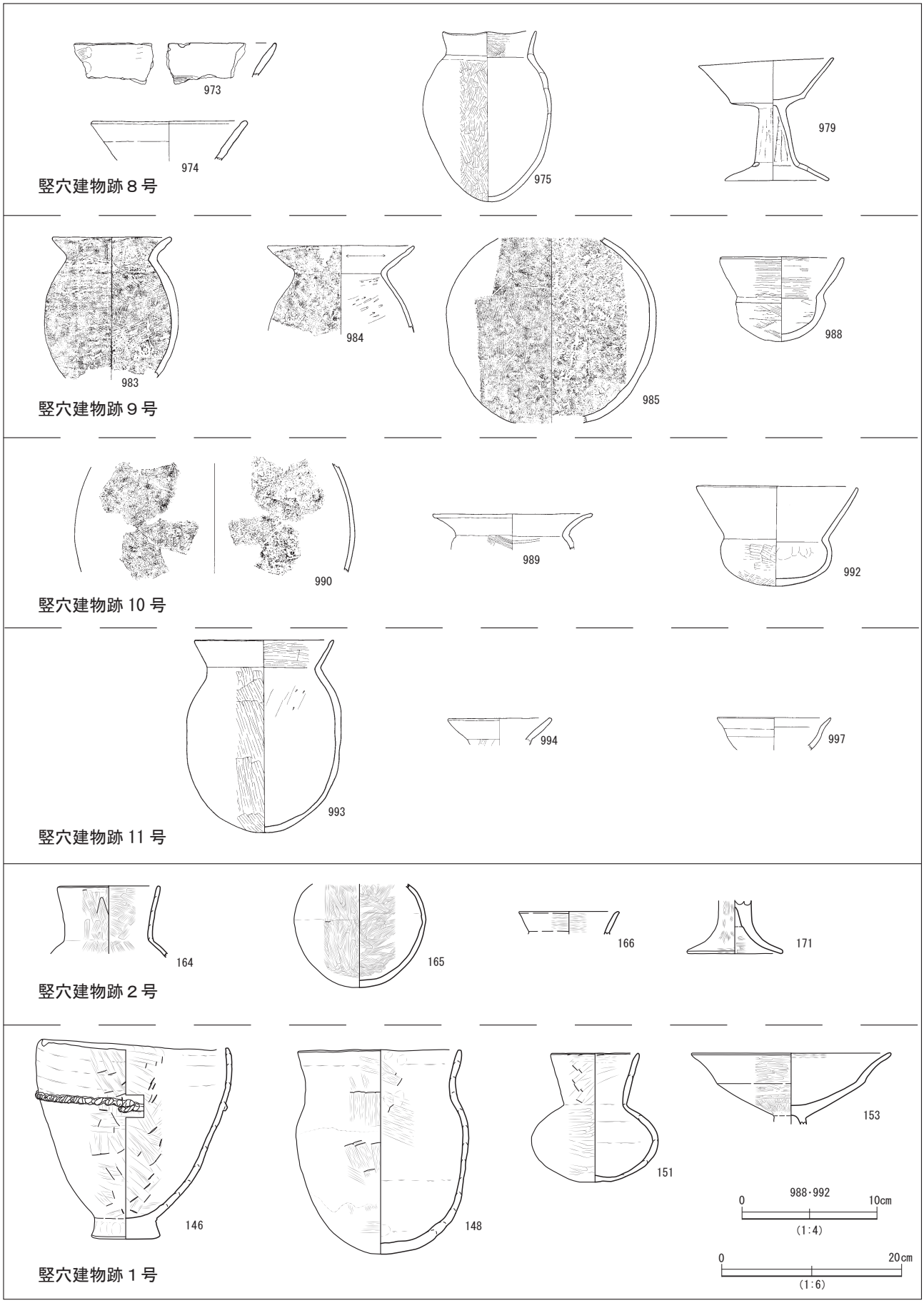
竪穴建物跡 11 号　993 は久住編年Ｂ系統の流れをひく甕形土器である。右上がりのタタキによって成形され，ケズったのちにハケメが施される。994 は小型丸底壺，997 は有段口縁鉢の布留模倣品である。遺構の時期としては古墳時代中期初頭が妥当であると考えられる。[註4]

遺跡について　各竪穴建物跡の出土遺物から遺構の時期を推定した結果，８号・９号・10 号→ 11 号→２号→１号となることが分かった。前述のように竪穴建物跡８号～ 11 号は台地の縁辺上，１号・２号は谷部の傾斜地に立地する。台地上にある４軒（８号～ 11 号）からは，搬入品や模倣品が多数出土しており，在地の土器としては志布志湾岸でみられる甕形土器が少量混じる程度である。その中でも特に久住編年Ｂ系統のⅢＡ新相にあたる土器と，その技術を用いて模倣した土器が目立つ。そしてⅢＡ新相に併行するとされる東原段階の成川式土器は４軒からは全く確認されなかった。一方，谷部の２軒（１号・２号）では少し時期が下った笹貫段階の土器が出土しており，一部に外来の土器が混じる。

このように荒園遺跡の古墳時代では，東原段階では台地縁辺部に外来系の土器の技術を持った人々が生活していたことが推測される。そして笹貫段階では谷部に生活の場を移した，あるいは異なるグループの人々が移動してきた可能性が考えられる。

後述するが，竪穴建物跡６軒の東側には古代以前の堀跡とみられる遺構が検出した。時期の断定が困難であるため不確定な要素が多いが，古墳時代の竪穴建物との関連性が深い可能性があり，今後検討が必要である。

第 235 図　古墳時代　竪穴建物跡と古代以前堀跡　遺構配置図



第 236 図　古墳時代　竪穴建物跡内出土遺物図

第６節　古代以前

古代以前の遺構として，幅約5.0ｍ，深さ約2.6ｍの片薬研堀が検出された。埋土には紫コラ（開聞岳起源：A.D.874年）の堆積が確認できたが，出土遺物に乏しく，時代の確定には至らなかった。

堀の斜面や底面には逆茂木痕のようなピットが，西側平坦面には柵や土塁のような土坑群が確認されている。堀の西側には古墳時代の住居が６軒確認されており，堀に付帯するピットや土坑群が西側に集中することから，この堀は古墳時代の住居を防御していた可能性が高い。堀の幅が約５ｍと広く，防御施設も厳重なことから，堀の内側の区域はとても重要であったことが推測される。

鹿児島県内の古代以前の堀（大溝）跡検出例としては，北麓遺跡（鹿児島市上福元町），入来遺跡（日置市吹上町），松木薗遺跡（南さつま市金峰町），王子遺跡（鹿屋市），中尾遺跡（鹿屋市吾平町），西平遺跡（鹿屋市串良町）で確認されている。松木薗遺跡では堀（大溝）の東側に一部土塁のような遺構を検出している。しかし，全ての遺跡において，堀（大溝）の断面形状はＶ字形であり，堀（大溝）内からは弥生時代の遺物が出土している。本遺跡の堀跡１号の東側には弥生時代の竪穴建物跡が５軒検出され，築造時期についてはさらなる検討が必要である。874年以前の片薬研堀は県内では類例がなく不明瞭な点も多いため，今後の類例増加に期待したい。

第７節　中近世

中近世では調査区東部から中央部にかけて複数条の溝状遺構が検出された。溝状遺構は東西に延びる１号・２号・６号と南北に延びる３号・４号・５号に大まかに分けられる。埋土の切り合い関係から，南北に延びるもの（３号・４号・５号）が東西に延びるもの（１号・２号・６号）に先行する可能性が高い。これらの溝状遺構はほとんどが硬化面を有しており，複数時期にわたって道として利用されていたと考えられる。当該期の出土遺物は少ないが，東播系の甕・捏鉢・青磁・華南三彩などが出土しており，複数の道が交差している状況などから，交通の要所として機能していた可能性も考えられる。

註２：鹿児島大学埋蔵文化財センター中村直子氏の指導による。

註３：中村耕治氏の指導による。

註４：福岡市教育委員会久住猛雄氏の指導による。

引用・参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2001『上野原遺跡（第10地点）』発掘調査報告書(28)

2002『上野原遺跡（第２～７地点）』発掘調査報告書(41)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

2016『永吉天神団遺跡１第１地点』発掘調査報告書（８）

2017『荒園遺跡１第１地点』発掘調査報告書(12)

2017『永吉天神段遺跡２第２地点-１』発掘調査報告書(13)

2018『天神段遺跡３』発掘調査報告書(18)

2019『永吉天神段遺跡４第３地点』発掘調査報告書(22)

2020『牧山遺跡２』発掘調査報告書(30)

大崎町教育委員会2014『麦田下遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）

河野裕次2015　第30回国民文化祭かごしま『「横瀬古墳とヤマト王権のつながり」～日本列島南端の海上交流の歴史～から』第30回国民文化祭大崎町実行委員会

平美典2015「志布志湾周辺域における弥生時代集落」『Archaeology from the South Ⅲ　本田道輝先生退職記念論文集』本田道輝先生退職記念事業会

川口雅之2017「弥生時代における大隅半島の農耕文化について」『鹿児島考古第47号』九州考古学会

立神倫史2018「大隅地方中部における縄文時代早期後葉の土器様相に関する一考察―天神段遺跡出土資料を中心に」『鹿児島考古第48号』九州考古学会

立神倫史2018「平栫式・塞ノ神式土器研究の現状と課題―九州南部の事例を中心に－」『第28回九州縄文研究会佐賀大会発表要旨・資料集』九州縄文研究会

河口貞徳1985「塞ノ神式土器と轟式土器」『鹿児島考古』第19号，鹿児島県考古学会 1-19

栗畑光博2016『超巨大火山が人類に与えた影響―西南日本で起こった鬼界アカホヤ火山灰以前を中心として―』雄山閣

相美伊久雄2004「Ｖ類石鏃について」『大原野遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書69　165～169頁

堂込秀人2020ａ「南九州縄文時代早期の石鏃の編年について」『遺跡学研究の地平－吉留秀敏氏追悼論文集－』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会

堂込秀人2020ｂ「苦浜式土器再考」『九州考古学』第95号，九州考古学会

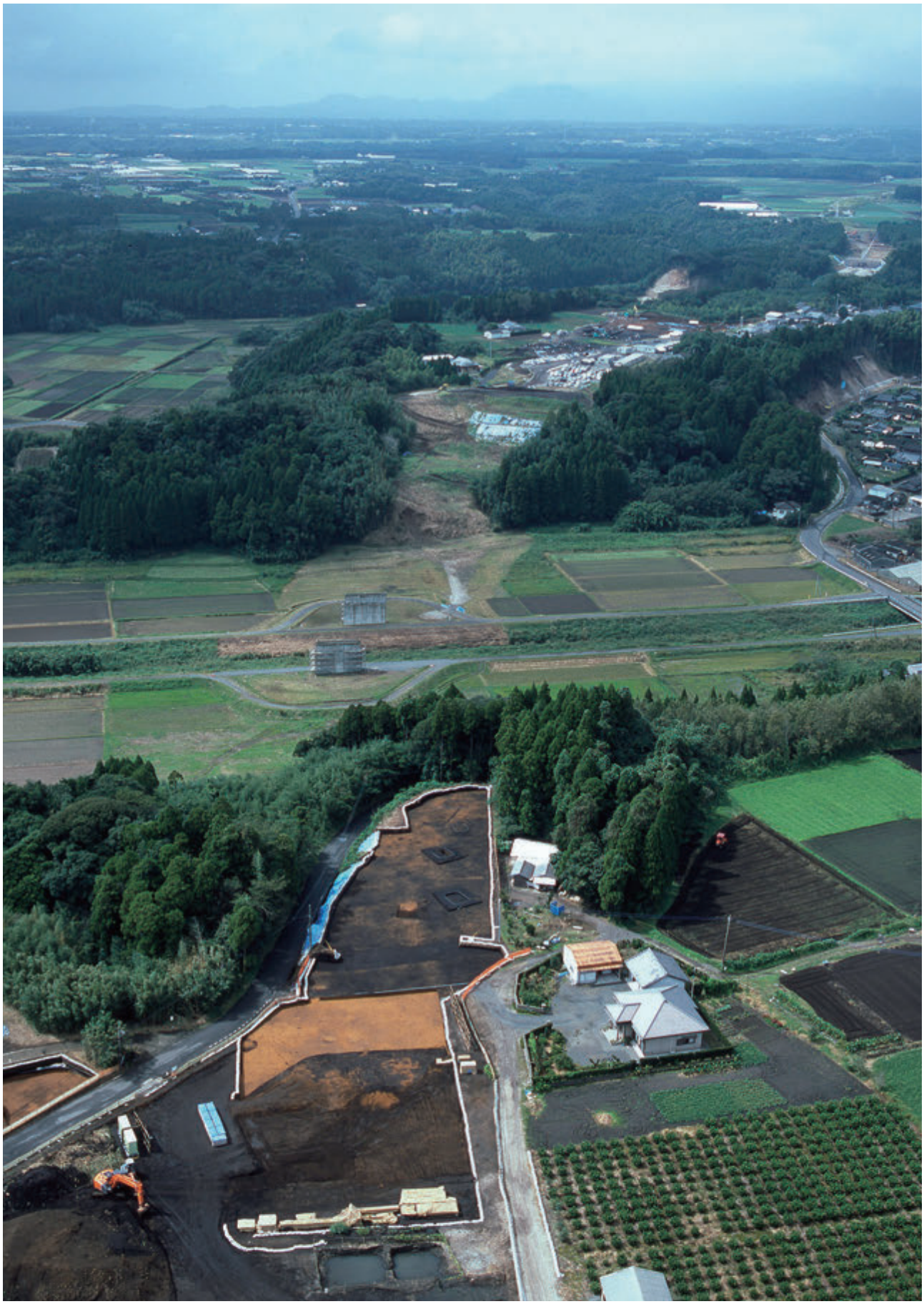
久住猛雄1999「北部九州における庄内式並行期の土器様相」『庄内式土器研究ＸⅨ』庄内式土器研究会

久住猛雄2015「「土師器」の中の「成川式」土器-中津野式から辻堂原式にかけて-」鹿児島大学総合研究博物館第15回特別展『成川式土器ってなんだ？-鹿大キャンパスの遺跡から出土する土器-』

中村直子1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第６号

中村直子2015「成川式土器の時代」鹿児島大学総合研究博物館第15回特別展『成川式土器ってなんだ？-鹿大キャンパスの遺跡から出土する土器-』

宮崎県埋蔵文化財センター2011『尾花Ａ遺跡Ⅱ　弥生時代以降編』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第195集



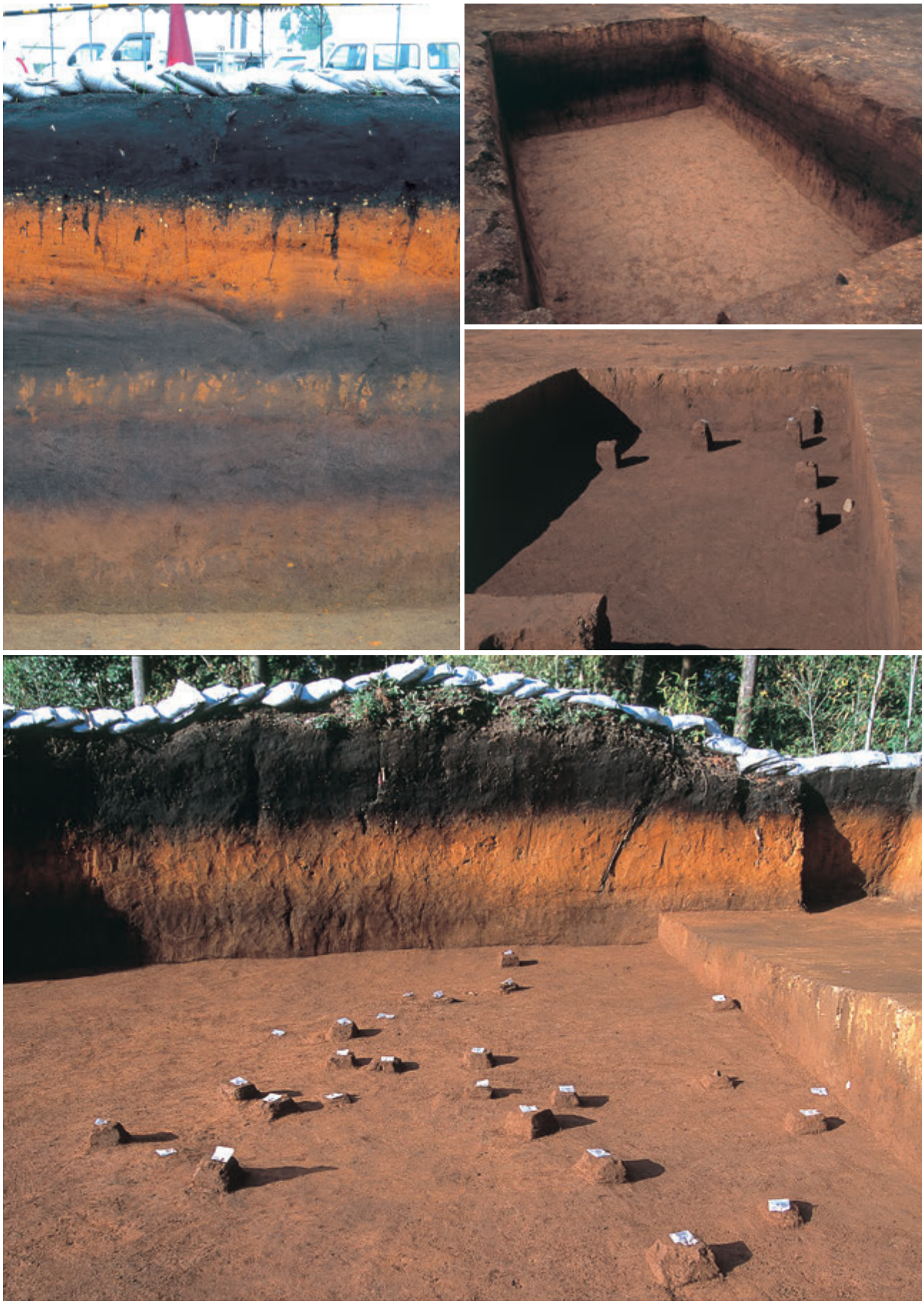
荒園遺跡第２地点（平成26年度）

図版2

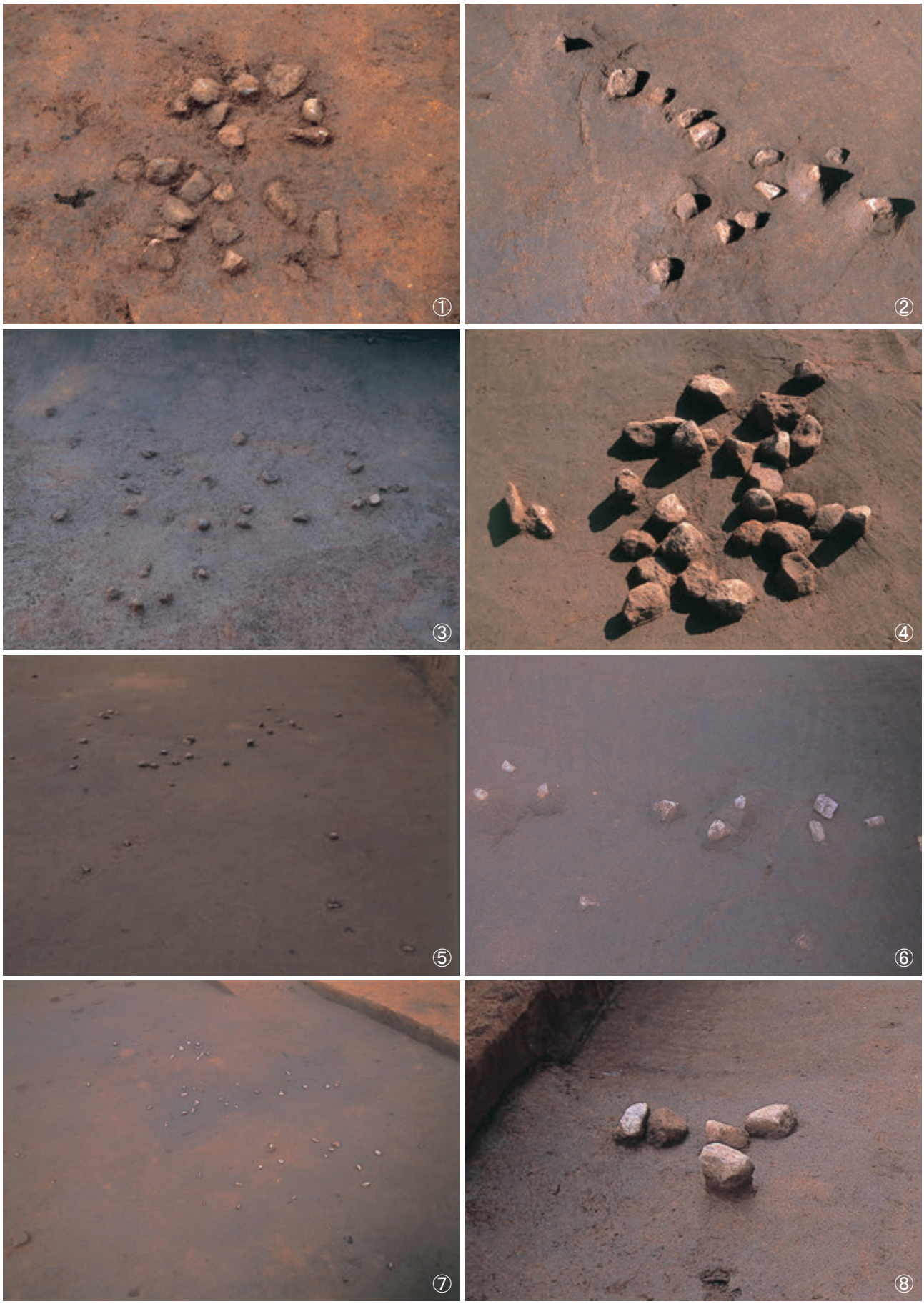
荒園遺跡第３地点（平成30年度）

土層断面・発掘風景

図版4



旧石器時代（土層・トレンチ・出土状況）



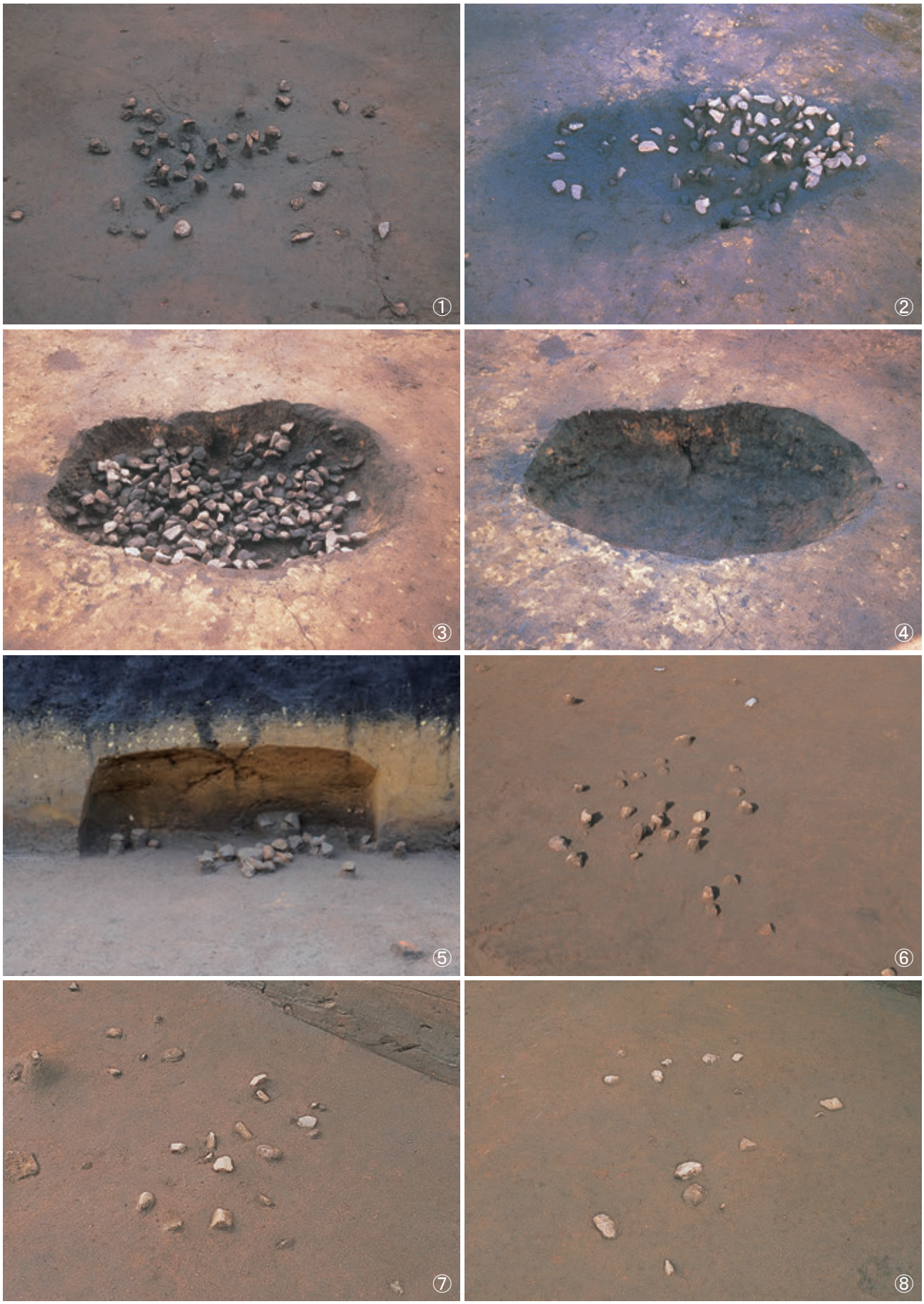
①集石４号　②集石５号　③集石６号　④集石７号　⑤集石８号　⑥集石９号　⑦集石 10 号　⑧集石 11 号

図版6

①集石 12 号　②集石 13 号　③集石 14 号　④集石 15 号　⑤集石 16 号　⑥集石 17 号　⑦集石 18 号
⑧集石 19 号

①集石 20 号　②集石 20 号完掘　③集石 21 号　④集石 22 号　⑤集石 23 号　⑥集石 24 号　⑦集石 25 号
⑧集石 25 号完掘状況

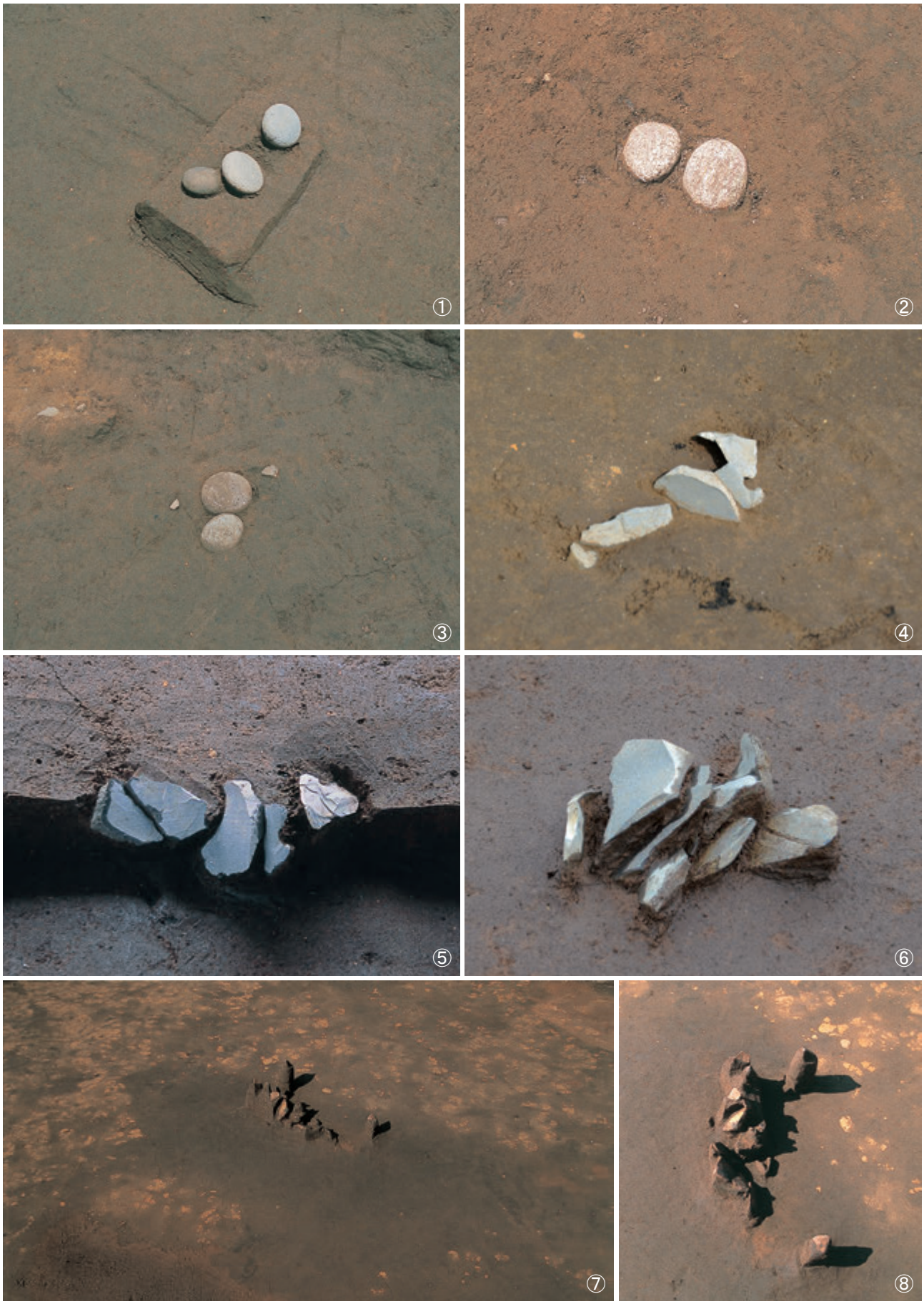
図版8



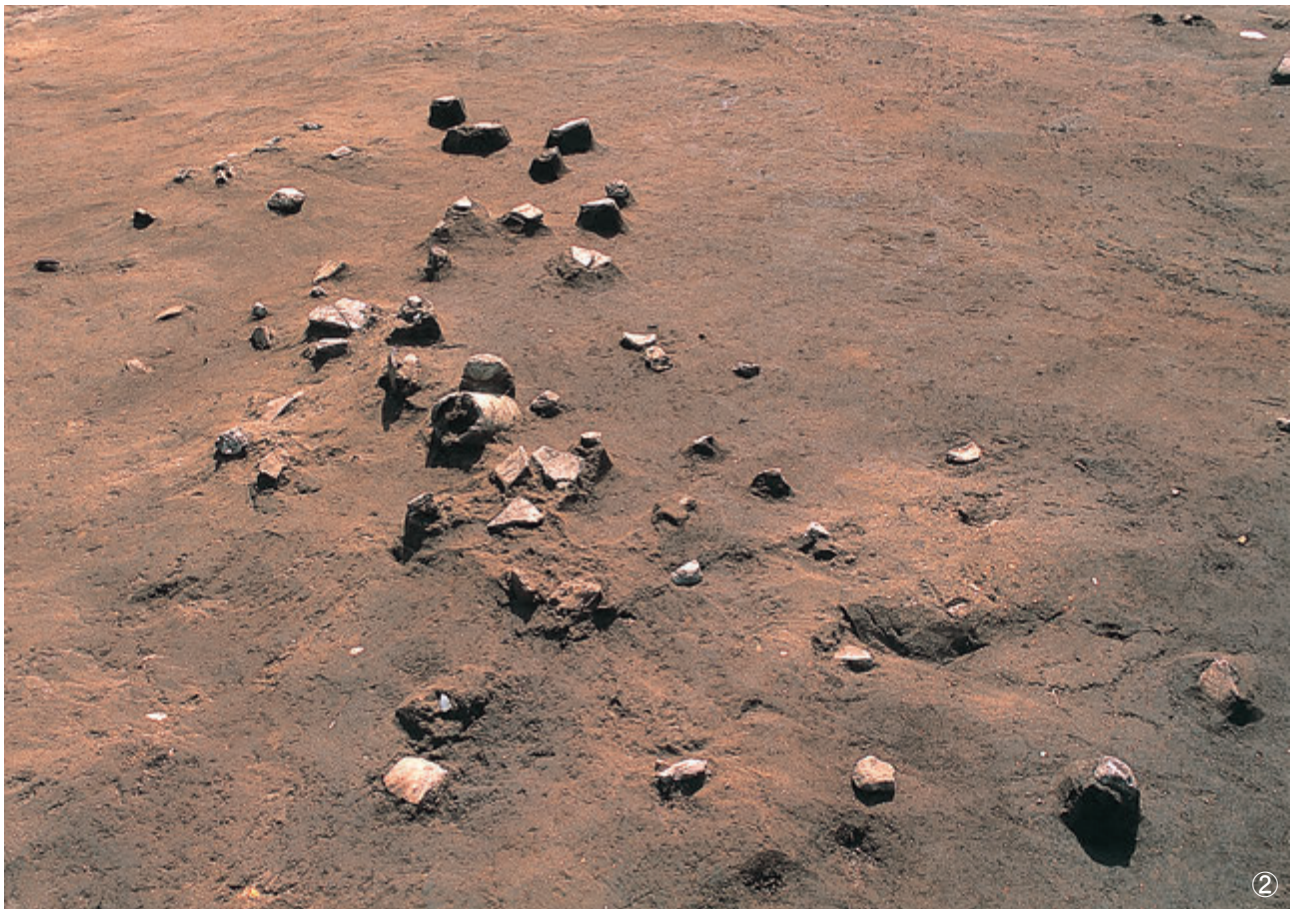
①集石 26 号　②集石 27 号検出状況　③集石 27 号　④集石 27 号完掘　⑤集石 28 号　⑥集石 29 号
⑦集石 30 号　⑧集石 31 号

①集石 32 号　②集石 33 号　③集石 34 号　④集石 36 号　⑤集石 37 号・38 号・39 号

図版10



①磨石集積１号　②磨石集積２号　③磨石集積３号　④剥片集積１号　⑤剥片集積１号断面
⑥剥片集積２号　⑦土坑１号検出状況　⑧土坑１号遺物出土状況



①土坑１号完掘状況　②土器集中か所

図版12

縄文時代早期　遺物出土状況

①竪穴建物跡３号検出状況　②竪穴建物跡４号検出状況　③竪穴建物跡３号・４号埋土堆積状況
④竪穴建物跡３号・４号内土抗・ピット検出状況　⑤竪穴建物跡３号・４号完掘状況
⑥竪穴建物跡５号検出状況　⑦竪穴建物跡５号埋土堆積状況　⑧竪穴建物跡５号完堀状況

図版14

①竪穴建物跡６号床面検出・埋土堆積状況　②竪穴建物跡６号床面検出状況　③竪穴建物跡６号完掘状況
④竪穴建物跡６号貼床　⑤竪穴建物跡７号検出状況　⑥竪穴建物跡７号遺物出土状況
⑦竪穴建物跡７号床面検出状況　⑧竪穴建物跡７号掘り方完掘状況

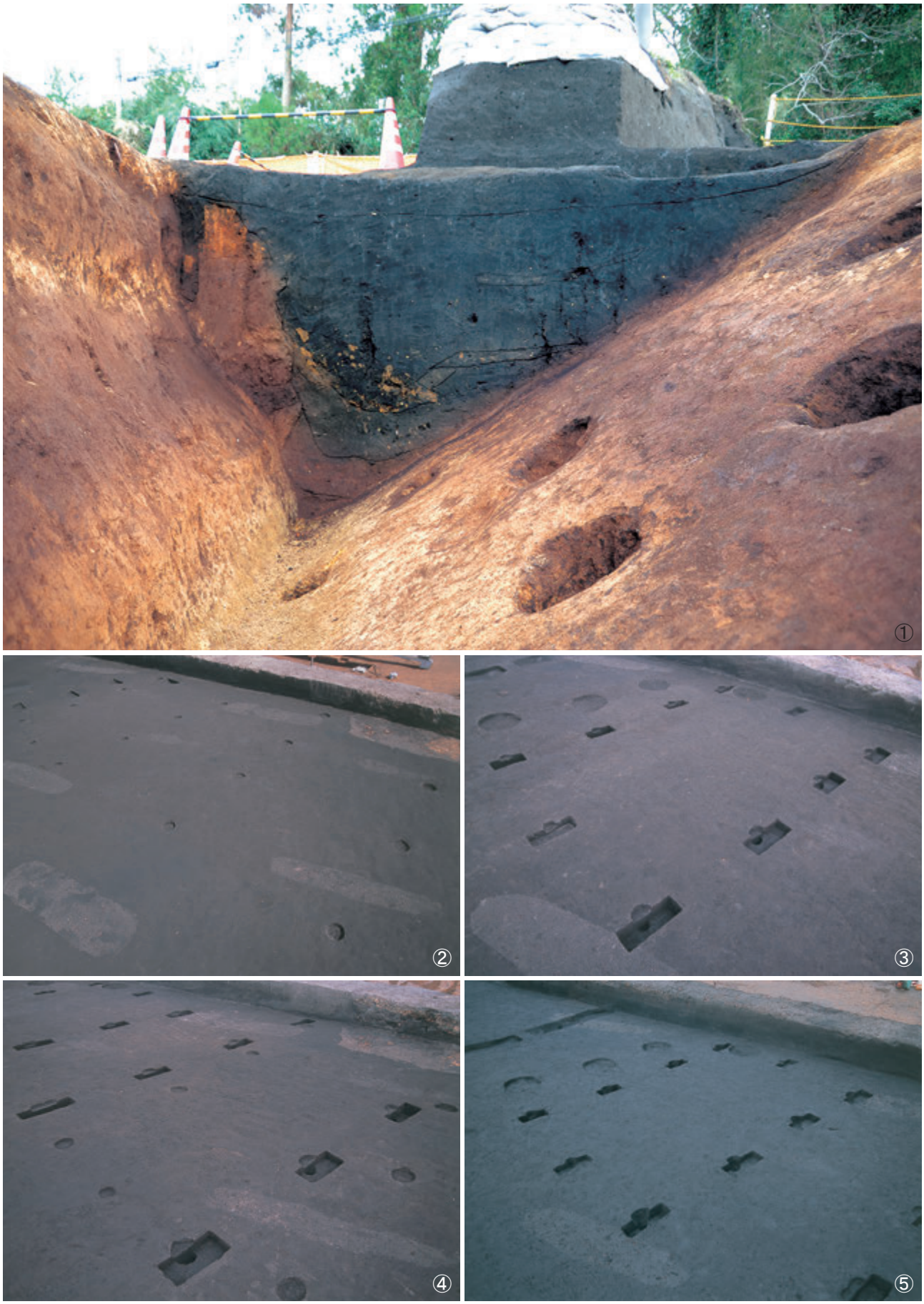
①土坑２号埋土堆積状況　②土坑２号完堀状況　③竪穴建物跡８号埋土堆積状況
④竪穴建物跡８号遺物出土状況　⑤竪穴建物跡８号完堀状況　⑥竪穴建物跡９号埋土堆積状況
⑦竪穴建物跡９号遺物出土状況　⑧竪穴建物跡９号完堀状況

図版16

①竪穴建物跡 10 号掘り込み検出状況　②竪穴建物跡 10 号完掘状況　③竪穴建物跡 10 号内土坑検出状況
④竪穴建物跡 10 号内土坑完堀状況　⑤竪穴建物跡 11 号検出状況　⑥竪穴建物跡 11 号埋土堆積状況
⑦堀跡 1 号硬化面検出状況　⑧堀跡 1 号紫コラ検出状況

①堀跡１号逆茂木痕検出状況　②堀跡１号完掘状況　③堀跡１号完掘状況
④堀跡１号西側付帯土坑埋土堆積状況

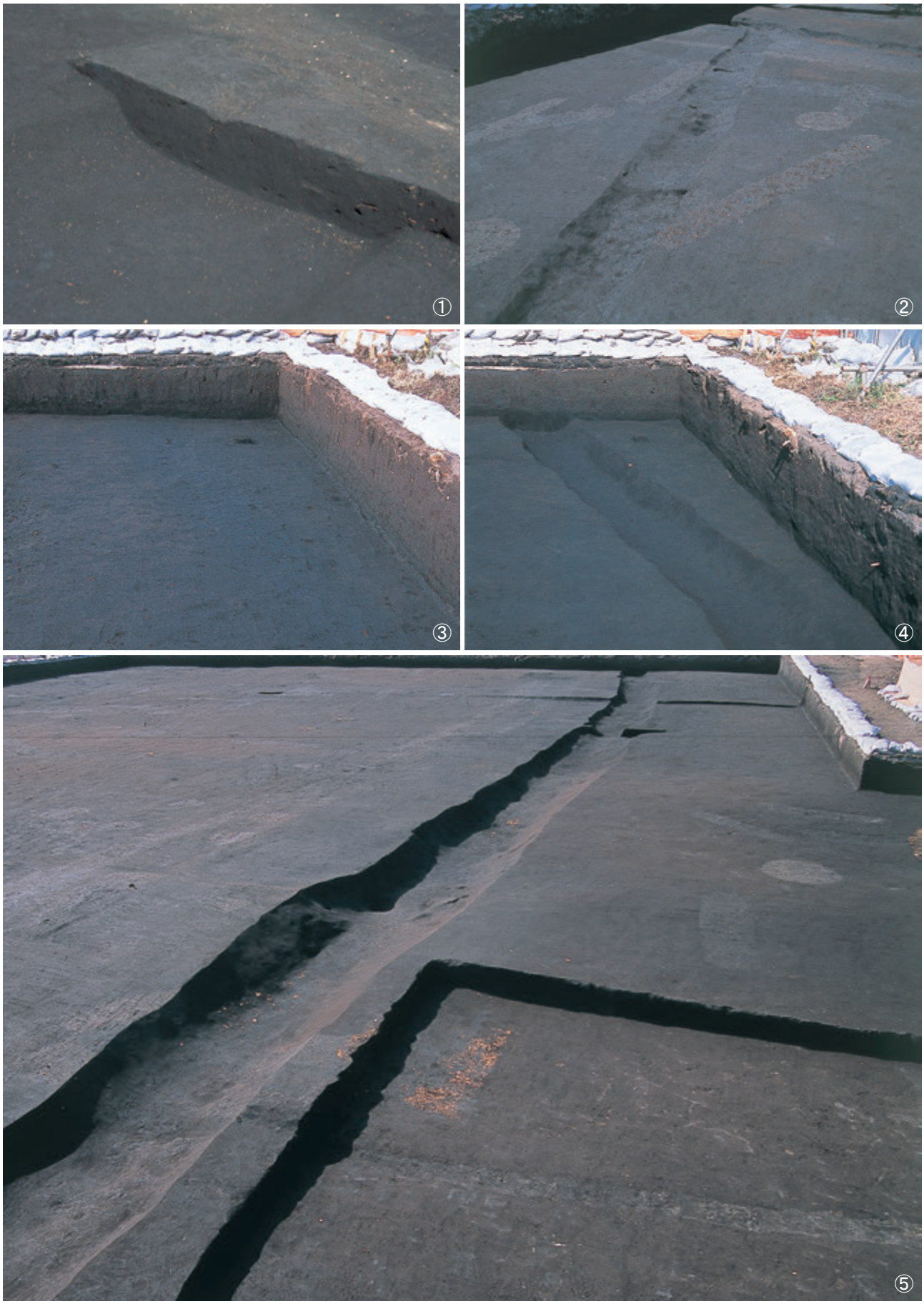
図版18



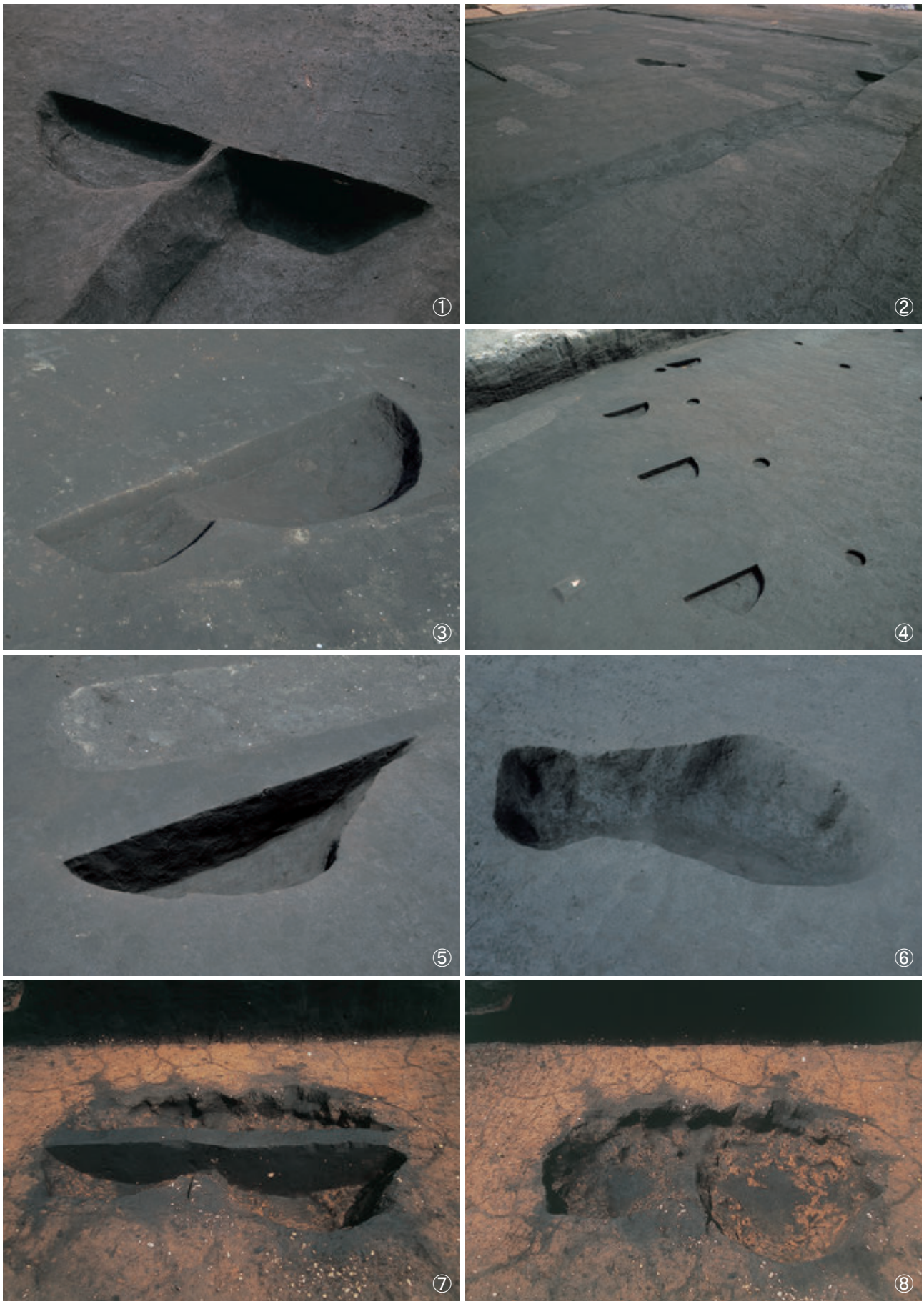
①堀跡１号南側土層埋土堆積状況　②掘立柱建物跡１・２号検出状況　③掘立柱建物跡１号埋土堆積状況
④掘立柱建物跡２号埋土堆積状況　⑤掘立柱建物跡１号完掘状況

①掘立柱建物跡１号～３号埋土堆積状況　②掘立柱建物跡１号～３号完堀状況
③溝状遺構１号・２号検出状況　④溝状遺構１号・２号完堀状況　⑤溝状遺構１号検出状況
⑥溝状遺構１号埋土堆積状況　⑦溝状遺構１号完堀状況　⑧溝状遺構４号検出状況

図版20

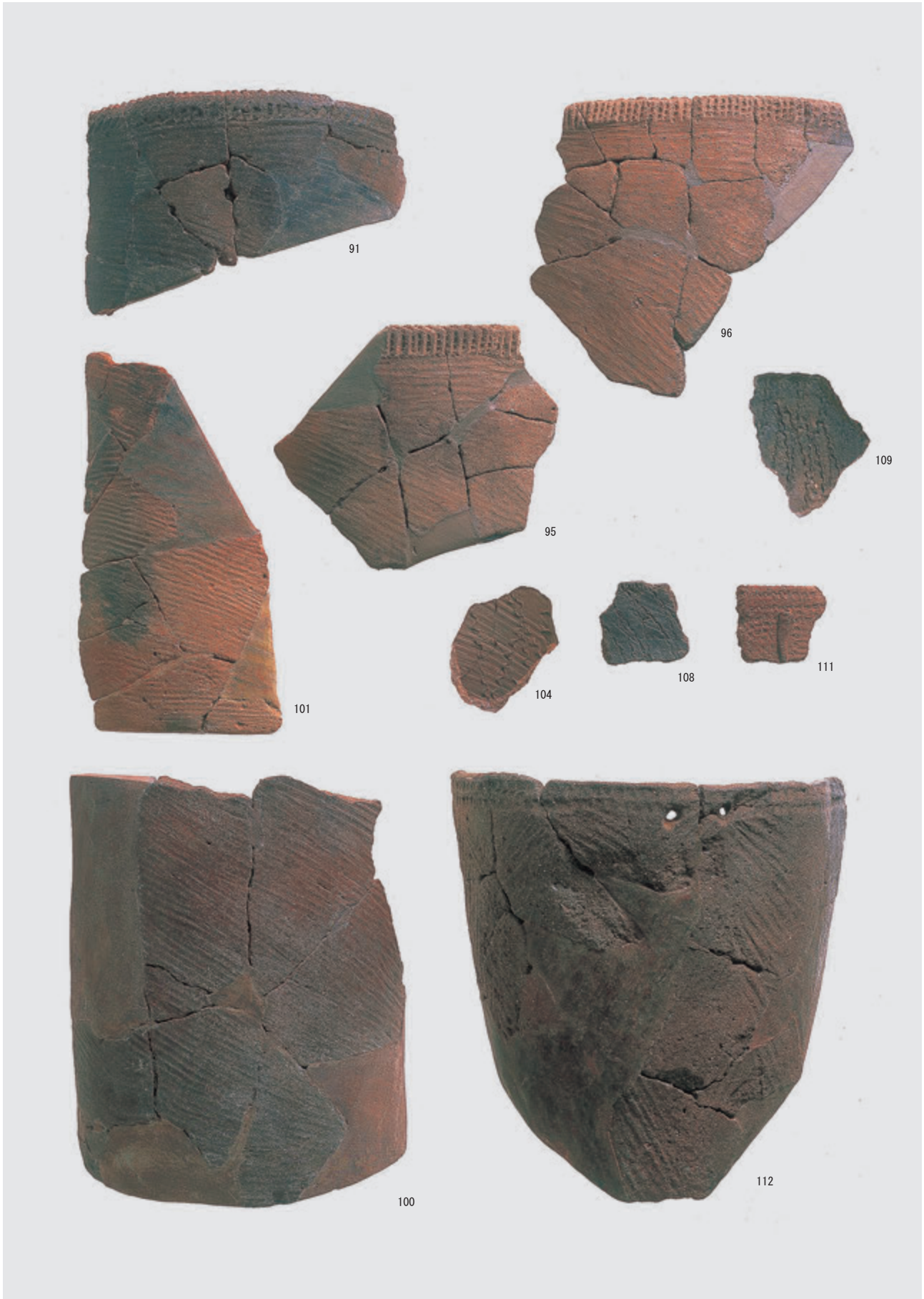


①溝状遺構４号埋土堆積状況　②溝状遺構４号完掘状況　③溝状遺構５号検出状況
④溝状遺構５号完掘状況　⑤溝状遺構５号完掘状況



①溝状遺構６号・土抗 19 号埋土堆積状況　②溝状遺構６号完掘状況　③土抗 13 号・14 号埋土堆積状況
④土抗 15 号～ 18 号埋土堆積状況　⑤土抗 20 号埋土堆積状況　⑥土抗 20 号完掘状況
⑦土抗 21 号・22 号埋土堆積状況　⑧土抗 21 号・22 号完掘状況

図版22



第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類土器

第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類土器

図版24

第Ⅷ類土器

187

191

213

214

第Ⅸ類土器（１）

図版26

215

216

第Ⅸ類土器（２）

第Ⅸ類土器（３）

図版28

第Ⅸ類土器（４）

第Ⅸ類土器（５）

図版30

271

281

321

第Ⅹ類土器（１）

258

260

第Ｘ類土器（２）

図版32

第Ⅹ類土器（３）

第Ｘ類土器（４）

図版34

344

409

425

433

第Ⅺ類土器（１）・Ⅻ類土器

第XI類土器（２）

図版36

第XI類土器（３）

349

347

346

第XI類土器（４）

図版38

第XI類土器（５）

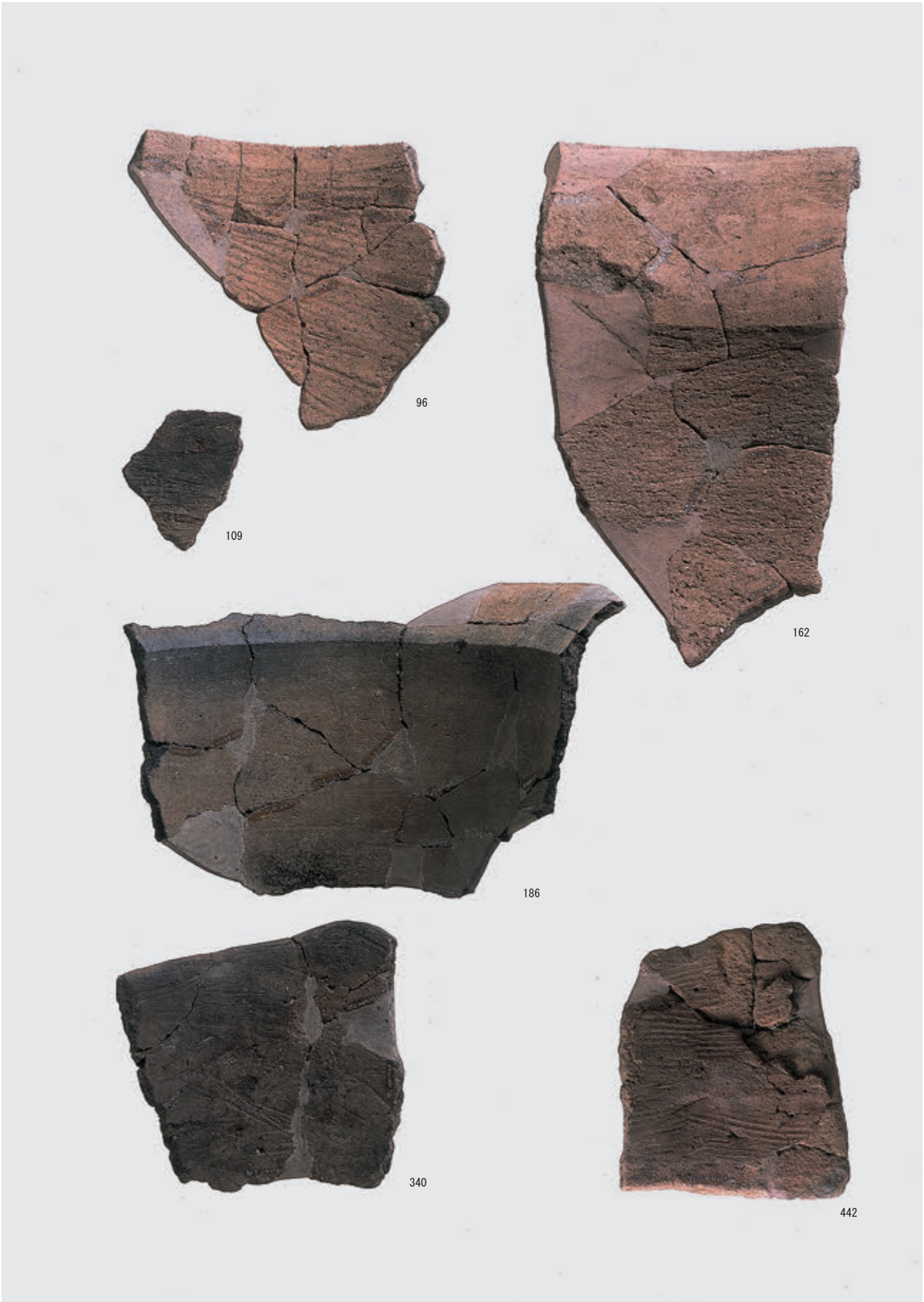
第XI類土器（６）

図版40

第XI類土器（７）

第Ⅻ類土器

図版42



第Ⅰ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅺ・Ⅻ類土器　裏面

土製品（耳栓）表・裏面

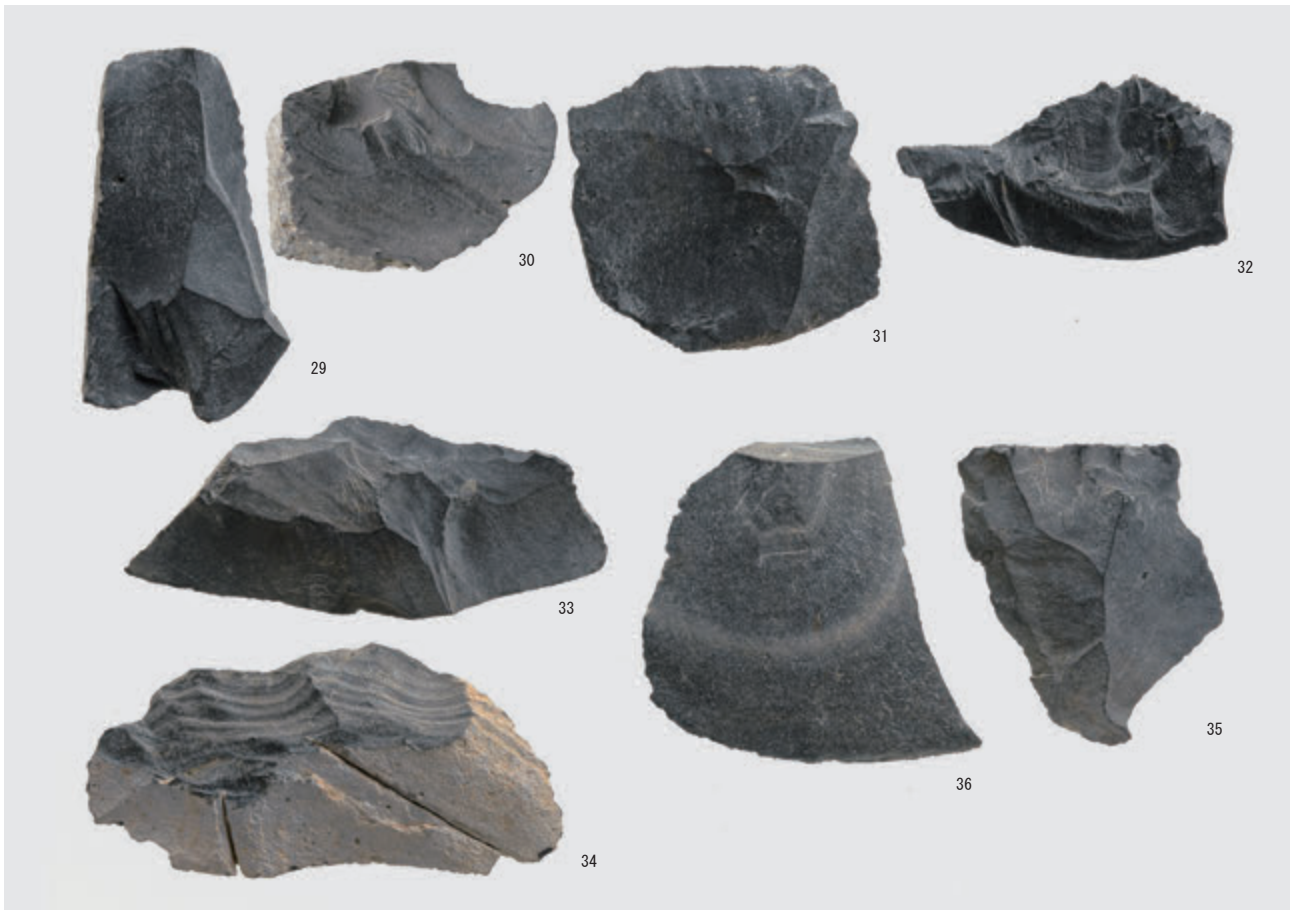
図版44

土製品（耳栓・円盤状・把手）

58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
78
79
80
81
82
83
84
85
77
86
87
88
89
90

剥片ブロック

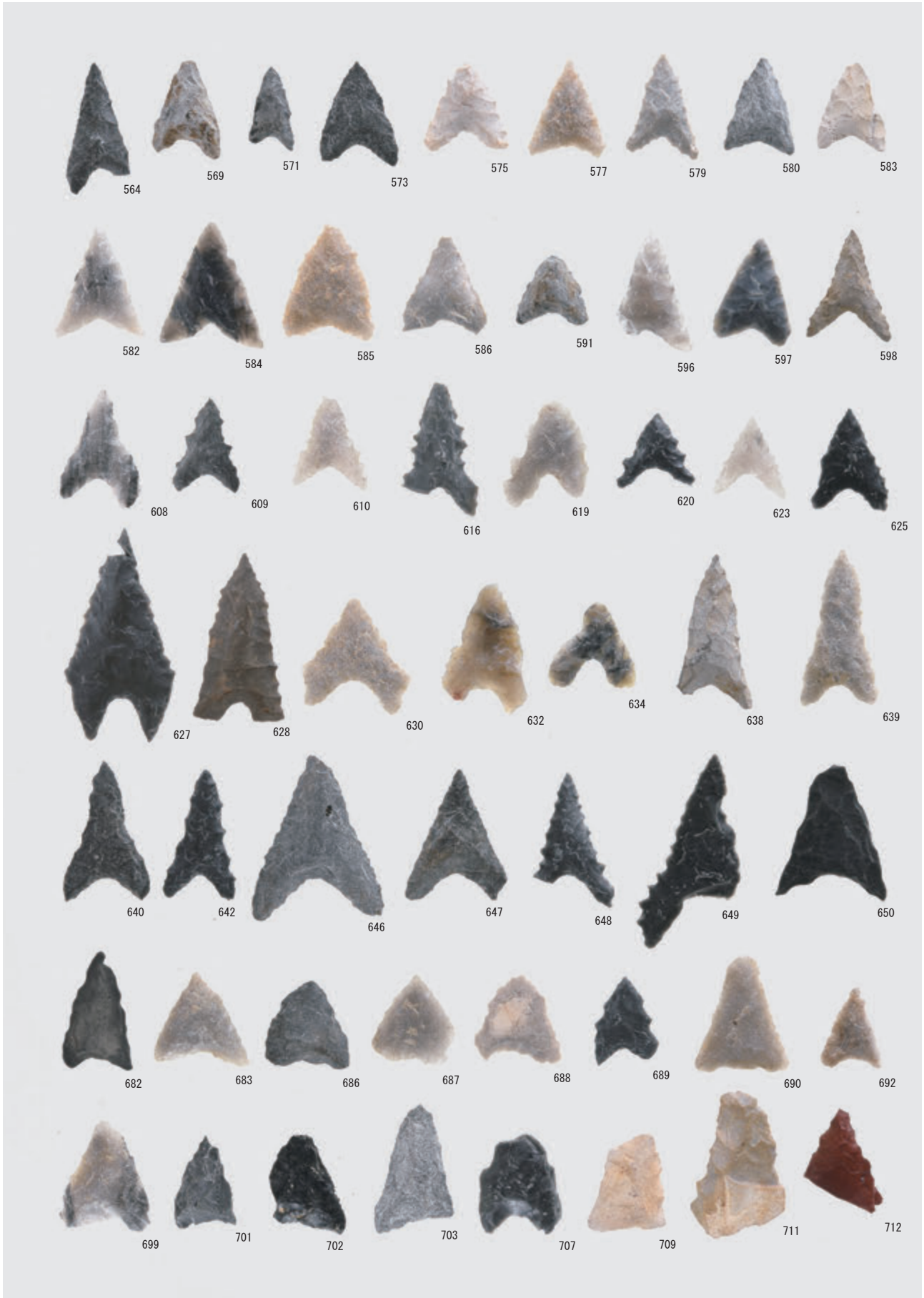
図版46



剥片集積・磨石集積

旧石器・縄文時代早期　石鏃（１）

図版48

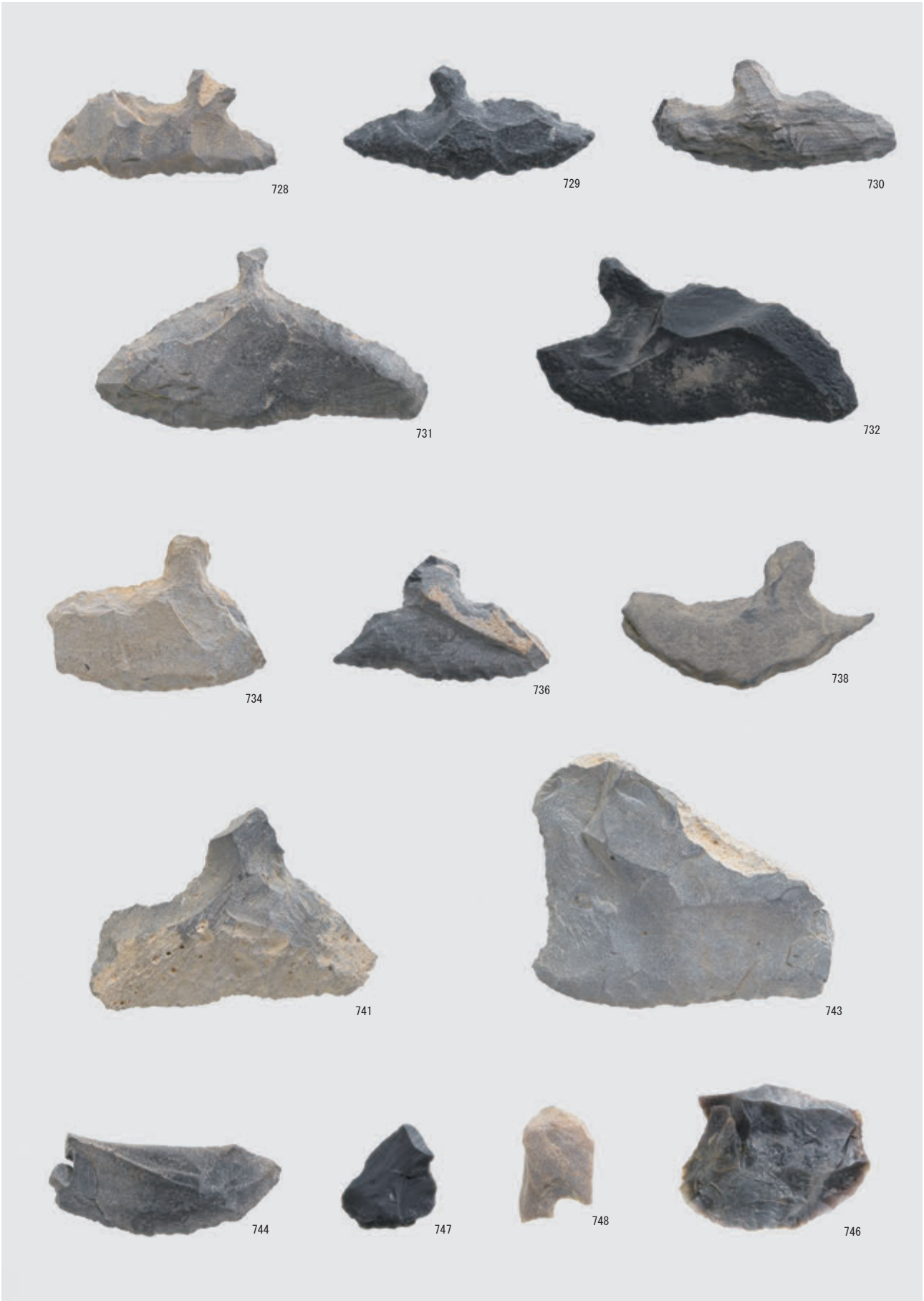


縄文時代早期　石鏃（２）

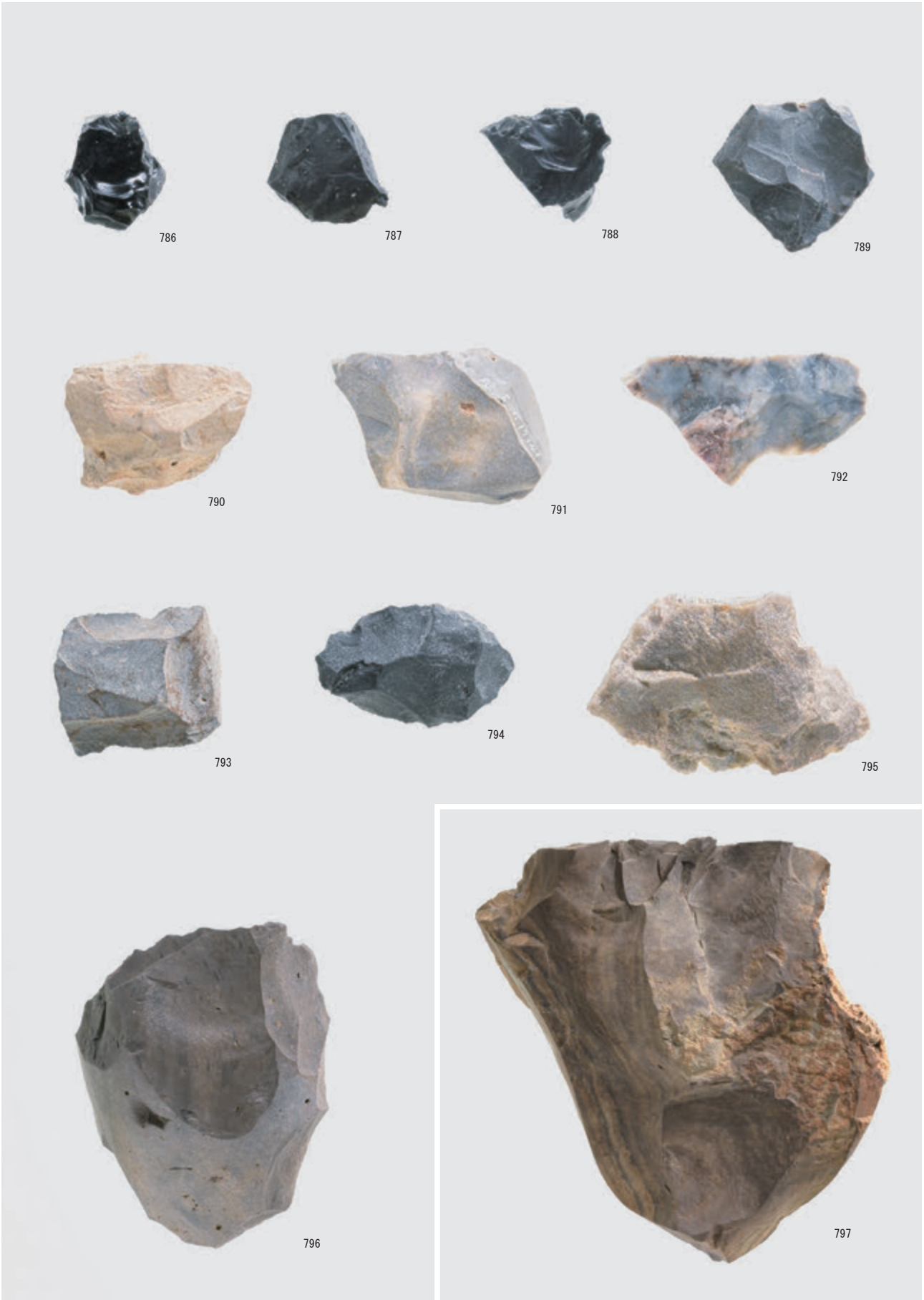
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
750
751
753
754
755
756
757
759
760
762
761
765
768
769
763
770

剥片石器

図版50



石匙



石核類

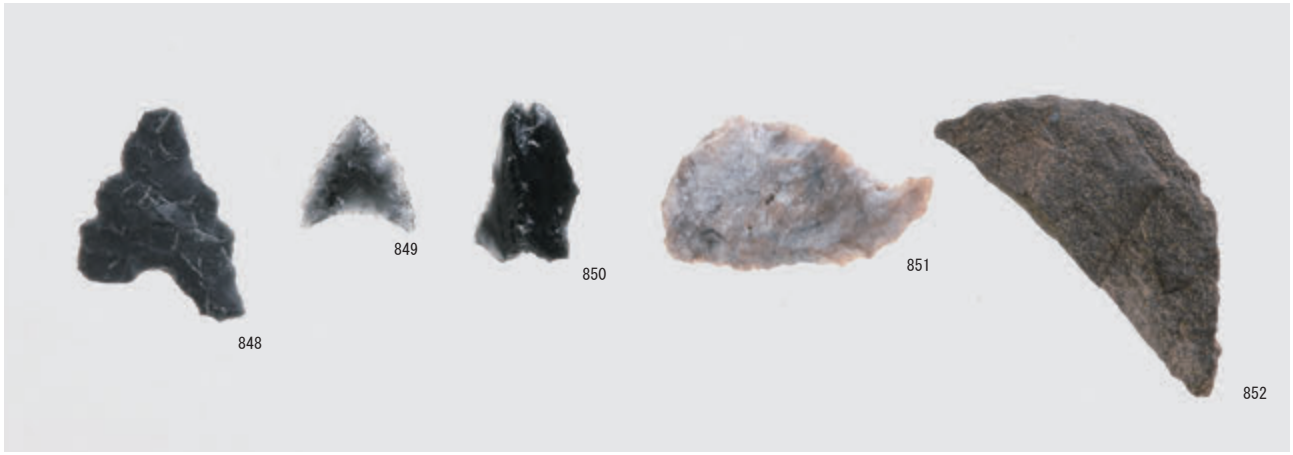
図版52

石斧類

839
838
834
831
821
812
832
823
814
828
819
822
826
820
827
824
833
813

磨敲石・石皿

図版54



縄文時代前期　石器

竪穴建物跡３号・４号内出土遺物

図版56

竪穴建物跡５号・６号内出土遺物

竪穴建物跡７号内出土遺物

図版58

弥生時代　包含層遺物

竪穴建物跡８号・９号内出土遺物

図版60

竪穴建物跡 10 号・11 号内出土遺物　中世・近世の遺物

公益財団法人　鹿児島県文化振興財団　埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（43）
東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

荒園遺跡2

（第２・３地点）

発 行 年 月　2022年3月
編集・発行　鹿児島県教育委員会
公益財団法人　鹿児島県文化振興財団　埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-70-0574　FAX 0995-70-0576
印　刷　所　渕上印刷株式会社
〒891-0122　鹿児島市南栄3丁目1-6
TEL 099-268-1002　FAX 099-266-3423